一般国道 313 号（倉吉関金道路）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県倉吉市

石塚廃寺東遺跡
大鴨遺跡

第１分冊【本文編１】

２０２３

公益財団法人　鳥取県教育文化財団

1　石塚廃寺東遺跡Ｐ４～６区 調査区全景と石塚廃寺跡（北東から）

2　大鴨遺跡２・３区 調査区遠景（南から）

巻頭図版 2

大鴨遺跡２区 51 道路 礫出土状況（北西から）

大鴨遺跡出土木製祭祀具

1　大鴨遺跡２区 76 木製構造物 検出状況（南西から）

2　大鴨遺跡２区 171 木製祭祀具集中部 祭祀具出土状況（東から）

序

地域高規格道路「北条湯原道路」は、一般国道313号のバイパス道路として鳥取県北栄町と岡山県真庭市を結び、山陰自動車道及び米子自動車道と一体となって、広域交通ネットワークを構成する延長約50キロメートルの自動車専用道路です。このうち、倉吉市内を事業区間とする「倉吉関金道路」は、倉吉市小鴨から同市関金町大鳥居を結ぶ延長約７キロメートルの区間にあたります。

公益財団法人鳥取県教育文化財団は、この道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査、出土遺物等の整理作業及び報告書作成を鳥取県から委託を受け、平成28年度から実施しています。

令和２・３年度の調査では、県史跡石塚廃寺塔跡に隣接する石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡において古墳時代から鎌倉時代の集落や奈良時代の道路、祭祀場が見つかりました。特に奈良時代の流路に面した祭祀場と石塚廃寺を結ぶ道路遺構の発見により、寺院による律令的祭祀が行われたことが明らかとなり、全国的にも注目される遺跡となりました。

本書はその発掘調査成果をまとめたものです。地域の歴史を解き明かしていく一助として活用され、埋蔵文化財が郷土の誇りになることを期待します。

本書をまとめるにあたり、鳥取県中部総合事務所県土整備局並びに地元関係者の皆様をはじめ、多くの方々に多大なる御協力と御助言をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

令和５年３月

公益財団法人　鳥取県教育文化財団

理事長　福本　慎一

例　言

1　本書は、一般国道313号（倉吉関金道路）道路改良工事に伴い、令和２年度及び令和３年度に発掘調査を実施した石塚廃寺東遺跡、大鴨遺跡の発掘調査報告書である。

2　石塚廃寺東遺跡は、倉吉市石塚字山ノ下タ・平ノ前に所在する。
調査面積は1,988㎡で、現地調査は令和２年６月１日から同年12月４日まで行った。調査記録と出土遺物の整理作業、報告書の作成は令和２年６月11日から令和５年３月まで実施した。

3　大鴨遺跡は、倉吉市石塚字平ノ前、福山字大鴨に所在する。
調査面積は13,155.7㎡で、現地調査は令和２年６月１日から同年12月４日、令和３年６月１日から同年12月３日の２箇年にわたり行った。調査記録と出土遺物の整理作業、報告書の作成は令和２年６月11日から令和５年３月まで実施した。

4　石塚廃寺東遺跡、大鴨遺跡の調査・記録作業は発掘調査支援業者の協力の下、財団調査室職員が行った。

5　石塚廃寺東遺跡、大鴨遺跡の出土遺物の整理作業や記録作業は、財団調査室職員が行い、出土遺物の写真撮影は西川が行った。

6　本書の作成は財団調査室職員が協議して行い、君嶋、小口、西川、八峠が執筆した。文責は目次に記載し、編集は小口、西川、八峠が行った。

7　両遺跡の現地調査にあたり、眞田廣幸氏（倉吉文化財協会会長）に調査指導を賜った。

8　石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡の出土遺物を整理・評価するにあたり、古瓦について眞田廣幸氏に、木製祭祀具について大平茂氏（兵庫県立考古博物館名誉学芸員）に、鍛冶関連遺物について角田徳幸氏（島根県古代文化センター所長）に調査指導を賜った。

9　石器・石製品の石材鑑定を河合章行氏にお願いした。

10　自然科学分析として、花粉分析、植物珪酸体分析、珪藻分析を株式会社古環境研究所に、漆製品の塗膜構造調査を株式会社吉田生物研究所に、放射性炭素年代測定を株式会社古環境研究所及び株式会社加速器分析研究所に委託した。第５章の執筆は委託先によるものである。

11　木製品の保存処理、樹種同定を株式会社吉田生物研究所及び一般社団法人文化財科学研究センターに委託した。

12　本調査に係る図面・写真等の記録及び出土遺物は、全て台帳に登録し収納しており、今後活用できるように随時検索できる状態で鳥取県埋蔵文化財センターに移管した。

13　現地調査、報告書作成にあたり、以下の方々、機関から御指導、御助言、御支援を賜った。記して感謝申し上げます（敬称略、順不同）。
大鴨土地改良区、小鹿野亮、久保穣二朗、大川泰広、髙橋章司、倉吉市小鴨コミュニティセンター、倉吉市上小鴨コミュニティセンター、鳥取県地域づくり推進部文化財局とっとり弥生の王国推進課、鳥取県埋蔵文化財センター、倉吉市教育委員会事務局文化財課、鳥取県中部総合事務所県土整備局

凡　例

1　本書に記載された測量成果については、世界測地系に基づいている。図中のＸ・Ｙ座標は国土座標Ⅴ系によるものであり、m単位で表記している。また、平面図の方位は座標北を、標高は海抜標高で示した。

2　本報告書で使用した地図は、国土地理院発行地形図（1/50,000）、倉吉市の作成した都市計画図（1/2,500）を縮小、加筆して使用したものである。

3　本遺跡の土層に示した土色は、小山正忠･竹原秀雄編著『新版標準土色帖』に基づき、土の色相、明度及び彩度を判定したものである。また、地層の粒度の記載に関しては、地質学で標準的に用いられる Wentworth の区分を使用した。

4　遺構平面図・断面図の縮尺は統一しておらず、挿図ごとにスケールバーと縮尺を掲載している。

5　遺構図に用いたスクリーントーンはそれぞれ以下のものを表す。粘土塊　炭化物　柱痕跡　柱抜き取り痕跡　土器　石器・礫　木　焼土塊

6　遺物実測図の断面は、須恵器を黒塗り、それ以外のものは白抜きで示した。古代から中世土器の実測図では、◎は回転糸切りによる切り離し痕跡、◎は回転ヘラ切りによる切り離し痕跡、●は手づくね成形された土器を示す。

7　遺物掲載番号の頭に付した記号は Po ＝土器、CP ＝土製品・瓦・鋳造関連遺物、Ｓ＝石器・石製品、Ｆ＝鉄器・鍛冶関連遺物、Br ＝銅製品、Ｗ＝木器を示す。

8　遺物実測図の縮尺については、土器・土製品 1/2、1/4、石器 1/3、2/3、玉類 1/1、金属製品・鍛冶関連遺物 1/1、1/2、1/4、1/5、木器 1/2、1/4、1/8、1/12 で示した。

9　遺物観察表の法量記載における△は残存値、※は復元値を示す。

10　石塚廃寺東遺跡の出土品などの注記には「石ハ 20 Ｐ１～８」の略号を用いた。「Ｐ１～８」は地区名、「20」は 2020 年度に調査を実施したことを示す。

11　大鴨遺跡の出土品などの注記には「大カモ１～３区 20」「大カモ４区 21」の略号を用いた。「１～３区」「４区」は地区名、「20」は 2020 年度、「21」は 2021 年度に調査を実施したことを示す。

12　本書における遺構の評価及び遺構・遺物の時期決定については以下の文献を参考にしている。

上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№２ 日本貿易陶磁研究会

岡田裕之・八峠興 2014「鳥取県における古代から中世前期の土器編年－須恵器と回転台土師器を基に－」『調査研究紀要』5 鳥取県埋蔵文化財センター

川部浩司 2012「波板状凹凸面からみた伯耆地域の道路遺構」『調査研究紀要』4 鳥取県埋蔵文化財センター

笹生　衛 2018「律令期の祭祀・儀礼と官衙・寺院・集落－信仰関連遺物からみた祓の再検討と信仰の地域ネットワーク－」『古代東アジアの仏教交流』勉成社

眞田廣幸 1980「奈良時代の伯耆国に見られる軒瓦の様相」『考古学雑誌』第 66 巻２号 日本考古学会

清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社

独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所 2003『古代の官衙遺跡Ⅰ　遺構編』

独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所 2004『古代の官衙遺跡Ⅱ　遺物・遺跡編』

牧本哲雄 1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第６遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団

森田　勉 1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№２ 日本貿易陶磁研究会

山本信夫ほか 2000「大宰府条坊跡ＸⅤ　陶磁器分類編」『大宰府の文化財』第 29 集　太宰府市教育員会

目　　次

第１分冊【本文編１】

令和２年度調査編

巻頭図版
序、例言、凡例

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯……（小口）１
第２節　調査の経過……（小口）２
　第１項　令和２年度…… ２
　第２項　令和３年度…… ５
　第３項　令和４年度…… ５
第３節　調査体制……（小口）７
第４節　調査の方法……（小口）８
　第１項　調査地の地区割…… ８
　第２項　発掘調査と記録の対象…… 13
　第３項　出土遺物の整理…… 14

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の立地と地理的環境……（西川）15
第２節　歴史的環境……（西川）17

第３章　石塚廃寺東遺跡の調査成果

第１節　概要……（小口）23
第２節　Ｐ１区の調査……（西川）26
　第１項　概要と基本層序…… 26
　第２項　検出した遺構と遺物…… 30
第３節　Ｐ２区の調査……（西川）35
　第１項　概要と基本層序…… 35
　第２項　検出した遺構と遺物…… 39
第４節　Ｐ３区の調査……（西川）48
　第１項　概要と基本層序…… 48
　第２項　検出した遺構と遺物…… 53

第５節　Ｐ４区の調査……（小口）71
第１項　概要と基本層序……71
第２項　検出した遺構と遺物……71
第６節　Ｐ５区の調査……（小口）79
第１項　概要と基本層序……79
第２項　検出した遺構と遺物……79
第７節　Ｐ６区の調査……（小口）87
第１項　概要と基本層序……87
第２項　検出した遺構と遺物……87
第８節　Ｐ７区の調査……（小口）96
第１項　概要と基本層序……96
第２項　検出した遺構と遺物……96
第９節　Ｐ８区の調査……（小口）104
第１項　概要と基本層序……104
第２項　検出した遺構と遺物……104
第10節　鋳造関連遺物……（西川）110
第１項　出土傾向と特徴……110
第２項　出土遺物の概要……112
第11節　遺構計測表・遺物観察表……114

第４章　大鴨遺跡の調査成果

第１節　概要……（小口・八峠）124
第１項　調査区の概要……（小口）124
第２項　調査区と遺構の確認面……（八峠）124
第２節　１区の調査……（八峠）130
第１項　基本層序……130
第２項　第１遺構面の調査（中世の遺構と遺物）……134
（１）掘立柱建物……134
（２）柵列……162
（３）火葬墓……165
（４）溝……166
（５）土坑……168
（６）柱穴・ピット……170
第３項　第２遺構面の調査（古代・古墳時代以前の遺構と遺物）……174
（１）道路……174
（２）流路……184

（３）土坑……188
（４）柱穴・ピット……189
第４項　調査区内出土遺物……190
第３節　２区の調査……（西川・八峠）193
第１項　概要と基本層序……（西川）193
第２項　第１遺構面の調査（古代以降の遺構と遺物）……（西川・八峠）200
（１）掘立柱建物……（西川）200
（２）流路ほか……（西川）206
76 木製構造物 ……（八峠）218
171 木製祭祀具集中部 ……（八峠）224
（３）溝……（西川）240
（４）段状遺構……（西川）247
（５）土坑……（西川）248
（６）柱穴・ピット……（西川）255
（７）田……（西川）263
（８）道路……（西川）263
第３項　第２遺構面の調査（古墳時代以前の遺構と遺物）……（西川）287
（１）落とし穴……287
（２）土坑……288
（３）柱穴・ピット……290
第４項　調査区内出土遺物……（西川）291
第４節　３区の調査……（小口）295
第１項　概要と基本層序……295
第２項　第１遺構面の調査（古代以降の遺構と遺物）……299
（１）竪穴建物……299
（２）掘立柱建物……313
（３）柵列……346
（４）道路……350
（５）土坑……360
（６）溝……363
（７）柱穴・ピット……364
第３項　第２遺構面の調査（古墳時代以前の遺構と遺物）……368
（１）土坑……368
（２）柱穴・ピット……372
（３）土器集中部……374
第４項　調査区内出土遺物……377

第２分冊【本文編２】

令和３年度調査・自然科学分析・総括編

第４章　大鴨遺跡の調査成果

第５節　４区の調査……（小口・八峠）383
第１項　概要と基本層序……（小口）383
第２項　第１遺構面の調査（中世以降の遺構と遺物）……（小口・八峠）391
第３項　第１遺構面の調査（古代の遺構と遺物）……（小口・八峠）443
第４項　第２遺構面の調査（古墳時代以前の遺構と遺物）……（小口・八峠）514
第５項　調査区内出土遺物……（八峠）544
第６節　鍛冶関連遺物……（西川）554
第１項　出土傾向と特徴……554
第２項　出土遺物の概要……556
第７節　遺構計測表・遺物観察表……557

第５章　自然科学分析

第１節　石塚廃寺東遺跡の自然科学分析……（(株)古環境研究所）607
第２節　石塚廃寺東遺跡Ｐ２・３・５・６区出土漆製品の塗膜構造調査（(株)吉田生物研究所）623
第３節　大鴨遺跡１～３区の自然科学分析……（(株)古環境研究所）630
第４節　大鴨遺跡４区出土漆製品の塗膜構造調査……（(株)吉田生物研究所）645
第５節　大鴨遺跡３・４区の自然科学分析……（(株)古環境研究所）648
第６節　石塚廃寺東遺跡Ｐ２～４区の放射性炭素年代測定 ……（(株)加速器分析研究所）667

第６章　総括

第１節　大鴨遺跡出土の土製支脚について……（君嶋）671
第２節　石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡出土瓦について……（西川）679
第３節　木製祭祀具と寺院による水辺の祭祀……（八峠）687
第４節　大鴨遺跡の道路遺構について……（小口）697
第５節　中世集落と墓……（八峠）707
第６節　総括……（小口）717

報告書抄録

挿図目次（第１分冊）

第 1 図　一般国道 313 号線予定地と調査地の位置　1
第 2 図　鳥取県と国土座標系　9
第 3 図　石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡の周辺地形と地区割図　10
第 4 図　石塚廃寺東遺跡の地区割図　11
第 5 図　大鴨遺跡の地区割図　12
第 6 図　鳥取県と遺跡の所在地　15
第 7 図　遺跡周辺の地質環境　16
第 8 図　周辺の遺跡　18
第 9 図　伯耆国内の郡の想定位置図　21
第 10 図　久米郡内の郷の想定位置図　21

〈石塚廃寺東遺跡〉
第 11 図　調査区周辺の地形と既往調査　23
第 12 図　Ｐ１区～Ｐ４区位置図　24
第 13 図　Ｐ５区～Ｐ８区位置図　25

〈石塚廃寺東遺跡Ｐ１区〉
第 14 図　調査区東壁・南壁土層断面図　27
第 15 図　調査区西壁・北壁土層断面図、土層断面位置図　28
第 16 図　Ｐ１区全体図　31
第 17 図　Ｐ１区出土土器　32
第 18 図　Ｐ１区出土遺物　33

〈石塚廃寺東遺跡Ｐ２区〉
第 19 図　調査区東壁・南壁土層断面図　36
第 20 図　調査区西壁土層断面図、土色注記（１）　37
第 21 図　調査区北壁土層断面図、土層断面位置図、土色注記（２）　38
第 22 図　調査区トレンチ土層断面図、土層断面位置図、土色注記（３）　39
第 23 図　Ｐ２区全体図　40
第 24 図　Ｐ２区出土遺物　42
第 25 図　Ｐ２区出土瓦（１）　43
第 26 図　Ｐ２区出土瓦（２）　44
第 27 図　Ｐ２区１・２流路出土木器　45
第 28 図　Ｐ２区２流路・調査区内出土木器　46

〈石塚廃寺東遺跡Ｐ３区〉
第 29 図　調査区東壁土層断面図、土層断面位置図、土色注記（１）　49
第 30 図　調査区南壁・西壁土層断面図　50
第 31 図　調査区北壁土層断面図、土色注記（２）　51
第 32 図　トレンチ１・２土層断面図、土層断面位置図、土色注記（３）　52
第 33 図　第１遺構面全体図　53
第 34 図　第２遺構面全体図　55
第 35 図　Ｐ３区出土土器　56
第 36 図　Ｐ３区１溝出土軒丸瓦（１）　57
第 37 図　Ｐ３区１溝出土軒丸瓦（２）　58
第 38 図　Ｐ３区１溝出土軒平瓦（１）　59
第 39 図　Ｐ３区１溝出土軒平瓦（２）　60
第 40 図　Ｐ３区１溝出土軒平瓦（３）　61
第 41 図　Ｐ３区１溝出土瓦（１）　62
第 42 図　Ｐ３区１溝出土瓦（２）　63
第 43 図　Ｐ３区２流路出土軒丸瓦　63
第 44 図　Ｐ３区２流路出土軒平瓦　64
第 45 図　Ｐ３区２流路出土瓦　67
第 46 図　Ｐ３区４流路出土瓦　68
第 47 図　Ｐ３区調査区内出土瓦　68
第 48 図　Ｐ３区出土遺物　69
第 49 図　Ｐ３区出土木器　69
第 50 図　Ｐ２・３区調査区内出土瓦（排土中）　70

〈石塚廃寺東遺跡Ｐ４区〉
第 51 図　調査区東壁・南壁土層断面図、土層断面位置図　72
第 52 図　調査区西壁・北壁土層断面図　73
第 53 図　Ｐ４区全体図　76
第 54 図　Ｐ４区流路変遷模式図　77
第 55 図　Ｐ４区出土木器　77
第 56 図　Ｐ４区出土遺物　78

〈石塚廃寺東遺跡Ｐ５区〉
第 57 図　調査区東壁・南壁土層断面図　80
第 58 図　調査区西壁・北壁土層断面図　81
第 59 図　調査区壁面土層断面位置図、土色注記　82
第 60 図　第１遺構面全体図　83
第 61 図　３溝　84
第 62 図　第２遺構面全体図　85
第 63 図　Ｐ５区出土遺物　85
第 64 図　Ｐ５区溝・流路変遷模式図　86

〈石塚廃寺東遺跡Ｐ６区〉
第 65 図　調査区南壁・西壁土層断面図 、土層断面位置図、土色注記（１）　88
第 66 図　調査区北壁・東壁土層断面図、土色注記（２）　89
第 67 図　調査区中央ベルト土層断面図、土色注記（３）　90
第 68 図　Ｐ６区全体図　91
第 69 図　６土坑　92
第 70 図　Ｐ６区溝・流路変遷模式図　93
第 71 図　Ｐ６区出土遺物　94
第 72 図　Ｐ６区出土木器　95

〈石塚廃寺東遺跡Ｐ７区〉
第 73 図　調査区東壁・南壁土層断面図、土層断面位置図、土色注記　97
第 74 図　Ｐ７区全体図　98
第 75 図　掘立柱建物１　99
第 76 図　掘立柱建物１　２・３柱穴　100
第 77 図　掘立柱建物２　４～６柱穴　101
第 78 図　７・10・14 土坑　102
第 79 図　８・12 柱穴　103
第 80 図　Ｐ７区出土遺物　103

〈石塚廃寺東遺跡Ｐ８区〉
第 81 図　調査区東壁・南壁・西壁土層断面図　105
第 82 図　調査区北壁土層断面図、土層断面位置図、土色注記　106
第 83 図　Ｐ８区全体図　107

第 84 図　１擬似畦畔、２溝、３ピット　108
第 85 図　Ｐ８区出土遺物　109

〈石塚廃寺東遺跡鋳造関連〉
第 86 図　溶解炉復元想定図　110
第 87 図　鋳造関連遺物（１）　111
第 88 図　鋳造関連遺物（２）　112

〈大鴨遺跡〉
第 89 図　調査区周辺の地形　125
第 90 図　調査区の層序　126
第 91 図　１～４区 第１遺構面（中世以降）全体図　127
第 92 図　１～４区 第１遺構面（古代）全体図　128
第 93 図　１～４区 第２遺構面（古墳時代以前）全体図　129

〈大鴨遺跡１区〉
第 94 図　調査区東壁・南壁（１）土層断面図、土層断面位置図　131
第 95 図　調査区南壁（２）土層断面図　132
第 96 図　調査区西壁土層断面図、土色注記　133
第 97 図　第１遺構面全体図　135
第 98 図　掘立柱建物１　136
第 99 図　掘立柱建物１　63 ～ 68 柱穴　138
第 100 図　掘立柱建物１　69 ～ 74 柱穴、73 柱穴出土土器　139
第 101 図　掘立柱建物２　141
第 102 図　掘立柱建物２　166 ～ 168 柱穴、166 柱穴出土土器　142
第 103 図　掘立柱建物２　129・130・159 柱穴、159 柱穴出土土器　144
第 104 図　掘立柱建物２　160 ～ 162 柱穴　146
第 105 図　掘立柱建物２　163 ～ 165・170 柱穴　147
第 106 図　掘立柱建物２　158・169 柱穴　148
第 107 図　掘立柱建物３　149
第 108 図　掘立柱建物３　78・82・84・91・136 柱穴、84 柱穴出土土器　150
第 109 図　掘立柱建物３　122･125･126･135･176 柱穴　152
第 110 図　掘立柱建物３　113・114・181・182 柱穴、114 柱穴出土土器　153
第 111 図　掘立柱建物４　155
第 112 図　掘立柱建物４　88・94・118・142・209 柱穴　156
第 113 図　掘立柱建物４　128・131・132・143 柱穴　158
第 114 図　掘立柱建物４　115・116 柱穴　159
第 115 図　掘立柱建物５　160
第 116 図　掘立柱建物５　121・174・175・178・184・185 柱穴、174 柱穴出土土器　161
第 117 図　柵列１　95・141・171 柱穴、171 柱穴出土土器　163
第 118 図　柵列２　123・127・183 柱穴　164
第 119 図　８・15 火葬墓、８火葬墓出土土器　165
第 120 図　１溝、１溝出土遺物　167
第 121 図　157・188 溝　168
第 122 図　200 溝　169
第 123 図　16 土坑　170
第 124 図　31・197・198・206・215 土坑、197・198 土坑出土土器　171
第 125 図　86・90・92・119 柱穴、86・90・92 柱穴出土土器　173
第 126 図　156・193 柱穴、193 柱穴出土土器　174
第 127 図　第２遺構面全体図　176
第 128 図　302 道路出土遺物　177
第 129 図　302・303 道路（１）　178
第 130 図　302・303 道路（２）　179
第 131 図　302・303 道路（３）　180
第 132 図　302・303 道路（４）　181
第 133 図　302・303 道路（５）　182
第 134 図　302・303 道路変遷図　183
第 135 図　301・441・442 流路　185
第 136 図　301 流路土層断面図　186
第 137 図　301 流路出土石器・参考図　186
第 138 図　441・442 流路土層断面図、出土遺物　187
第 139 図　307・327・328・377・403・405 土坑　189
第 140 図　440 ピット、440 ピット出土土器　190
第 141 図　調査区内出土土器　191
第 142 図　調査区内出土遺物　192

〈大鴨遺跡２区〉
第 143 図　調査区北壁（１）土層断面図、土色注記（１）　194
第 144 図　調査区北壁（２）・東壁（１）土層断面図、土色注記（２）　195
第 145 図　調査区東壁（２）土層断面図、土層断面位置図　196
第 146 図　調査区南壁土層断面図、土色注記（３）　197
第 147 図　調査区西壁土層断面図、土色注記（４）　198
第 148 図　第１遺構面（上面）全体図　201
第 149 図　第１遺構面全体図　202
第 150 図　掘立柱建物６　203
第 151 図　掘立柱建物６　153 ～ 159・168 柱穴　204
第 152 図　掘立柱建物７　205
第 153 図　掘立柱建物７　160 ～ 162・164・206・267・271 柱穴　206
第 154 図　１溝出土土器　208
第 155 図　２流路（１）　209
第 156 図　２流路（２）　210
第 157 図　２流路出土土器（１）　211
第 158 図　２流路出土土器（２）　212
第 159 図　２流路出土遺物　213
第 160 図　２流路出土木器（１）　214
第 161 図　２流路出土木器（２）　215
第 162 図　２流路出土木器（３）　216
第 163 図　２流路・76 木製構造物・171 木製祭祀具集中部　219
第 164 図　76 木製構造物拡大図　220
第 165 図　76 木製構造物遺物出土状況図（上部）　221
第 166 図　76 木製構造物遺物出土状況図（下部）　222
第 167 図　76 木製構造物遺物出土状況図・見通し、171 木製祭祀具集中部断面図　223
第 168 図　76 木製構造物出土土器　224
第 169 図　76 木製構造物出土木器（１）　225
第 170 図　76 木製構造物出土木器（２）　226
第 171 図　171 木製祭祀具集中部拡大図　227
第 172 図　171 木製祭祀具集中部遺物出土状況図（上部）　229
第 173 図　171 木製祭祀具集中部遺物出土状況図（下部）　230
第 174 図　171 木製祭祀具集中部（北側）遺物出土状況図（上部）・（下部）　231
第 175 図　171 木製祭祀具集中部出土土器（１）　232
第 176 図　171 木製祭祀具集中部出土土器（２）・瓦　233

第 177 図　171 木製祭祀具集中部出土木器（1）　235
第 178 図　171 木製祭祀具集中部出土木器（2）　236
第 179 図　171 木製祭祀具集中部出土木器（3）　237
第 180 図　171 木製祭祀具集中部出土木器（4）　238
第 181 図　171 木製祭祀具集中部出土木器（5）　239
第 182 図　3 ～ 5 溝　240
第 183 図　3 ・ 4 溝出土遺物　241
第 184 図　32 溝　242
第 185 図　44 ～ 49・58 溝　243
第 186 図　50 溝　245
第 187 図　65 ～ 69 溝　246
第 188 図　13 ～ 15・26 土坑、59 段状遺構　248
第 189 図　59 段状遺構出土土器　249
第 190 図　13 土坑出土土器　249
第 191 図　63 土坑　249
第 192 図　63 土坑遺物出土状況図　250
第 193 図　64 土坑　251
第 194 図　64 土坑遺物出土状況図　252
第 195 図　64 土坑出土石器　253
第 196 図　77 ～ 79・163・165 土坑　253
第 197 図　8 ・ 9 ・11・12・23・36・37 柱穴、11 柱穴出土土器　256
第 198 図　38・55・60・149・151・152・166・169・170 柱穴　258
第 199 図　6 ・ 7 ・10・16 ～ 18 ピット　260
第 200 図　70 田　261
第 201 図　51 道路　263
第 202 図　51 道路土層断面図　264
第 203 図　51 道路上位遺物出土状況図　265
第 204 図　51 道路下位遺物出土状況図　266
第 205 図　51 道路拡大図（1）　267
第 206 図　51 道路拡大図（2）　268
第 207 図　51 道路拡大図（3）　269
第 208 図　51 道路拡大図（4）　270
第 209 図　51 道路拡大図（5）　271
第 210 図　51 道路拡大図（6）　272
第 211 図　51 道路拡大図（7）　273
第 212 図　51 道路拡大図（8）　274
第 213 図　51 道路拡大図（9）　275
第 214 図　51 道路土坑断面図（1）　277
第 215 図　51 道路土坑断面図（2）　279
第 216 図　51 道路出土遺物　280
第 217 図　51 道路出土瓦（1）　281
第 218 図　51 道路出土瓦（2）　282
第 219 図　53 道路　284
第 220 図　53 道路土層断面図　285
第 221 図　53 道路遺物出土状況図、出土遺物　286
第 222 図　第 2 遺構面全体図　287
第 223 図　80 落とし穴　288
第 224 図　100・101・107・126・130・145 土坑、100 土坑出土土器　289
第 225 図　98・115・119・125・133 柱穴　290
第 226 図　Ⅱb・Ⅱc 層出土遺物　292
第 227 図　Ⅲ層上面出土遺物　293
第 228 図　調査区内出土遺物　293
第 229 図　調査区内出土瓦　294

〈大鴨遺跡 3 区〉
第 230 図　調査区東壁土層断面図、土層断面位置図、土色注記（1）　296
第 231 図　調査区南壁土層断面図、土色注記（2）　297
第 232 図　調査区西壁土層断面図、土色注記（3）　298
第 233 図　第 1 遺構面全体図　300
第 234 図　第 1 遺構面拡大図（1）　301
第 235 図　第 1 遺構面拡大図（2）　302
第 236 図　竪穴建物 1 （1）　303
第 237 図　竪穴建物 1 （2）　304
第 238 図　竪穴建物 1 周辺の遺構配置図　305
第 239 図　竪穴建物 1 出土土器・土製品　306
第 240 図　竪穴建物 1 出土鉄器　306
第 241 図　竪穴建物 2　307
第 242 図　竪穴建物 2 床面検出状況　308
第 243 図　竪穴建物 2 掘方完掘状況　309
第 244 図　竪穴建物 2 遺物出土状況　310
第 245 図　竪穴建物 2　417・418 柱穴、306・315・350・403・420・423 ピット　311
第 246 図　竪穴建物 2 出土土器・鉄器　312
第 247 図　竪穴建物 2 出土石器　312
第 248 図　掘立柱建物 8　314
第 249 図　掘立柱建物 8　2 ～ 7 柱穴　315
第 250 図　掘立柱建物 8　8 ～ 11 柱穴　316
第 251 図　掘立柱建物 8 出土土器　316
第 252 図　掘立柱建物 9　318
第 253 図　掘立柱建物 9　158 ～ 162 柱穴　319
第 254 図　掘立柱建物 9　164・165 柱穴　321
第 255 図　掘立柱建物 10　322
第 256 図　掘立柱建物 10　12 ～ 16 柱穴　323
第 257 図　掘立柱建物 10　18 ～ 21・80 柱穴　325
第 258 図　掘立柱建物 10 出土土器　326
第 259 図　17・40・41・44・78・120 柱穴、43・57・66・83 ～ 85 ピット　329
第 260 図　23・62・82 柱穴、46・63・81・89・118・152 ピット　331
第 261 図　17・23 柱穴、81・83 ピット出土土器　332
第 262 図　掘立柱建物 11　333
第 263 図　掘立柱建物 11　71・111・112・114・115 柱穴、111・112・114 柱穴出土土器　334
第 264 図　掘立柱建物 11　131・145・155 柱穴　335
第 265 図　139・156・157 柱穴　336
第 266 図　掘立柱建物 12　338
第 267 図　掘立柱建物 12　25 ～ 30 柱穴　339
第 268 図　掘立柱建物 12　101・105 柱穴　340
第 269 図　掘立柱建物 12 出土土器　340
第 270 図　31・32・113 柱穴、33 ピット　342
第 271 図　32 柱穴出土土器　342
第 272 図　掘立柱建物 13　129・147・154 柱穴　343
第 273 図　掘立柱建物 13 出土土器　344
第 274 図　掘立柱建物 14　148・203・204 柱穴　345
第 275 図　掘立柱建物 14 出土遺物　346
第 276 図　柵列 3　86・91・95・116 柱穴、117 ピット、86 柱穴出土土製品　347
第 277 図　柵列 4　195 ～ 197 柱穴　349
第 278 図　道路遺構配置図　350

第 279 図　52 道路　351
第 280 図　52 道路遺物出土状況図　352
第 281 図　52 道路出土遺物　353
第 282 図　183・184・290・291・407・460 道路　355
第 283 図　292 ～ 299 道路　357
第 284 図　301・307・377・408・409 道路　358
第 285 図　50 土坑　359
第 286 図　50 土坑遺物出土状況図　360
第 287 図　50 土坑出土遺物　361
第 288 図　50 土坑出土石器　362
第 289 図　174・182 土坑、174 土坑出土土器　363
第 290 図　103 溝　363
第 291 図　42・110 柱穴、22・60・93・138・146・150 ピット　365
第 292 図　178・192・194 ピット　367
第 293 図　第１遺構面柱穴・ピット出土土器　367
第 294 図　第２遺構面全体図　369
第 295 図　256・257 土坑、257 土坑出土石器　370
第 296 図　258・269・270・305 土坑、305 土坑出土石器　371
第 297 図　319 柱穴　372
第 298 図　142・172・216・217・238 ピット　373
第 299 図　255 ピット　375
第 300 図　第２遺構面柱穴・ピット出土遺物　375
第 301 図　244 土器集中部　376
第 302 図　244 土器集中部出土土器　376
第 303 図　458 土器集中部、458 土器集中部出土土器　377
第 304 図　第１遺構面包含層遺物出土分布図　378
第 305 図　第２遺構面包含層遺物出土分布図　379
第 306 図　Ⅰ層出土遺物　380
第 307 図　Ⅱｂ層出土遺物（１）　381
第 308 図　Ⅱｂ層出土遺物（２）　382
第 309 図　Ⅱｃ層出土遺物　382
第 310 図　調査区内出土遺物　382

挿表目次（第１分冊）

第 １ 表　石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡及び周辺遺跡の調査成果一覧　6
第 ２ 表　一般国道 313 号（倉吉道路・倉吉関金道路）関連埋蔵文化財既刊発掘調査報告書一覧　6

〈石塚廃寺東遺跡〉
第 ３ 表　鋳造関連遺物観察表　113
第 ４ 表　Ｐ１区 遺構計測表　114
第 ５ 表　Ｐ２区 遺構計測表　114
第 ６ 表　Ｐ３区 遺構計測表　114
第 ７ 表　Ｐ４区 遺構計測表　114
第 ８ 表　Ｐ５区 遺構計測表　114
第 ９ 表　Ｐ６区 遺構計測表　115
第 10 表　Ｐ７区 遺構計測表　115
第 11 表　Ｐ７区 掘立柱建物遺構計測表　115
第 12 表　Ｐ８区 遺構計測表　115
第 13 表　土器観察表（１）　116
第 14 表　土器観察表（２）　117
第 15 表　土器観察表（３）　118
第 16 表　土器観察表（４）　119
第 17 表　土製品観察表（１）　119
第 18 表　土製品観察表（２）　120
第 19 表　土製品観察表（３）　121
第 20 表　土製品観察表（４）　122
第 21 表　土製品観察表（５）　123
第 22 表　石器・石製品観察表　123
第 23 表　木器観察表　123

〈大鴨遺跡〉
第 24 表　76 木製構造物・171 木製祭祀具集中部出土木器、種実点数　234

巻頭図版目次

巻頭図版１　１　石塚廃寺東遺跡Ｐ４～６区調査区全景と石塚廃寺跡（北東から）
２　大鴨遺跡２・３区調査区遠景（南から）
巻頭図版２　大鴨遺跡２区 51道路 礫出土状況（北西から）
巻頭図版３　大鴨遺跡出土木製祭祀具
巻頭図版４　１　大鴨遺跡２区 76木製構造物 検出状況（南西から）
２　大鴨遺跡２区 171木製祭祀具集中部祭祀具出土状況（東から）

文中写真目次

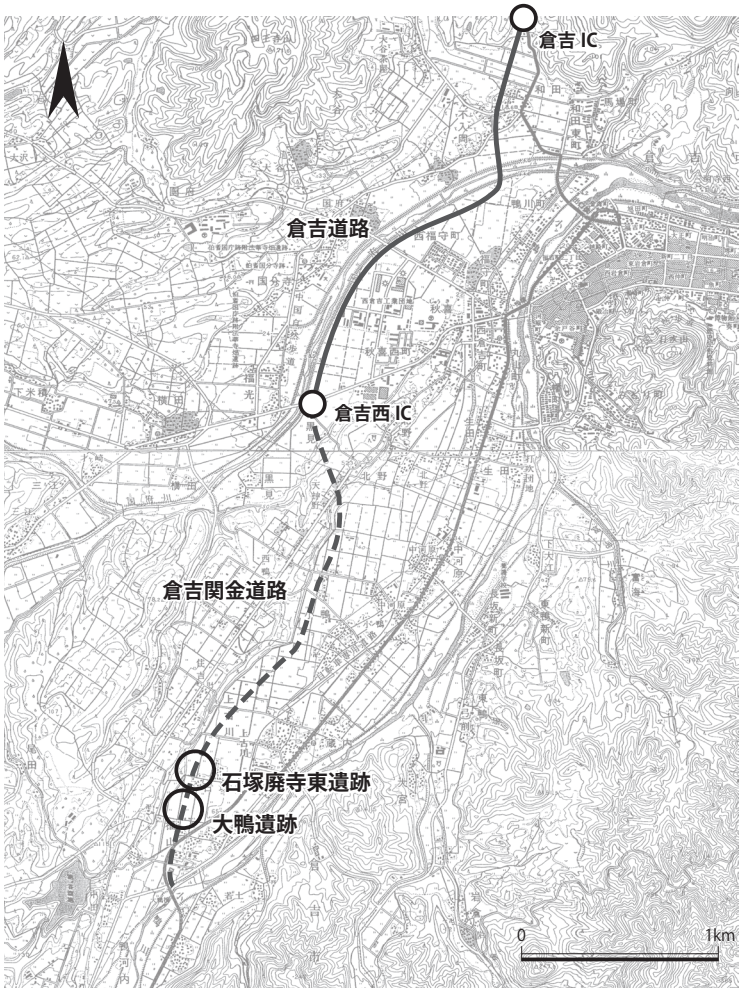
写真１　令和２年度 現地説明会風景　6
写真２　令和３年度 現地説明会風景　6
写真３　Ｐ１区 表土掘削後段階確認（南東から）　34
写真４　Ｐ１区 作業風景（北西から）　34
写真５　Ｐ２区 作業風景（南西から）　47
写真６　Ｐ２区 作業風景（南東から）　47
写真７　Ｐ３区 表土掘削後段階確認（南西から）　70
写真８　Ｐ３区 作業風景（東から）　70
写真９　Ｐ４区 表土掘削後段階確認（南東から）　78
写真 10　石塚廃寺跡 近景（北東から）　78

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

中国地方では、都市と農村地域との連携強化による地域集積圏の拡大、物資の流通、人の交流の活性化を促し地域集積圏間の交流などを図ることを目的として、国土交通省により地域高規格道路の整備が計画されている。このうち鳥取県中部地方を縦貫する「北条湯原道路」は、一般国道313号のバイパス道路として、鳥取県中部地方生活圏と岡山県真庭地方生活圏を相互に連絡し、広域的な道路ネットワークの形成を図る延長約50kmの路線であり、鳥取県によって整備が進められている。その一部となる「倉吉関金道路」は、倉吉市小鴨と倉吉市関金町を結ぶ全長７kmの区間で、現在整備中である「倉吉道路」、供用中の「北条倉吉道路」と繋がり北条インターチェンジで国道９号と接続する。

「倉吉関金道路」の事業計画地内及び周辺には、石塚廃寺跡や市場城跡など周知の埋蔵文化財包蔵地が存在している。そのため道路建設工事に先立って鳥取県県土整備局（以下、鳥取県）、鳥取県教育委員会（以下、県教委）、倉吉市教育委員会（以下、市教委）により埋蔵文化財の取扱いについて協議が持たれ、まず計画地内に存在する埋蔵文化財包蔵地の状況を把握する必要性が確認された。これを受け、平成27年度から市教委が文化庁の国庫補助と県費補助を受けて計画地内の試掘・確認調査を逐次進めた[1)]。その結果、山ノ下遺跡をはじめ複数の遺跡の存在が明らかとなり、鳥取県は再度県教委と協議・調整を行い、平成28年度から路線内に存在する遺跡の発掘調査並びに報告書作成を公益財団法人鳥取県教育文化財団（以下、財団）に委託することとなった。



第１図　一般国道313号線予定地と調査地の位置

倉吉市石塚に所在する石塚廃寺東遺跡は、道路橋脚部分（Ｐ１～８区）となる計1,988.0㎡を対象に記録保存のための発掘調査が行われることになり、文化財保護法第94条・92条の手続きを経た後、令和２年６月１日から12月４日まで発掘調査を実施した。

倉吉市石塚及び福山に所在する大鴨遺跡は、道路盛土部分・市道部分（１区～４区）となる計13,155.7㎡を対象に記録保存のための発掘調査が行わ

れることになり、文化財保護法第94条・92条の手続きを経た後、令和２年度は６月１日から12月４日まで、令和３年度は６月１日から12月３日まで発掘調査を実施した。調査面積は令和２年度が当初調査予定の１・２区3,807.7㎡に加え、３区1,100㎡も追加調査の対象となり計4,907.7㎡、令和３年度は４区8,248.0㎡、１～４区の総調査面積は13,155.7㎡である。

なお、令和２・３年度ともアコード・アイテック埋蔵文化財発掘調査支援業務委託共同企業体の調査支援を受けて調査を実施した。

【註】

1）倉吉市教育委員会2021『倉吉市内遺跡分布調査報告書21』倉吉市文化財報告書第156集

第２節　調査の経過

第１項　令和２年度

調査地が２遺跡に跨がり、11箇所に分かれるため、石塚廃寺東遺跡Ｐ４～８区（以下、石塚Ｐ○区と呼称）と大鴨遺跡３区（以下、大鴨○区と呼称）を１班、石塚Ｐ１～３区と大鴨２区を２班、大鴨１区を３班に分担し、３班体制で調査を進めた。１班は北端にあたる石塚Ｐ８区から南のＰ４区へ調査を順次進め､追加調査地である大鴨３区へ移動した。２班は石塚Ｐ３区からＰ１区へ調査を進め、最後に大鴨２区へ移動した。３班は大鴨１区の調査終了後に大鴨３区へ合流した。

【石塚廃寺東遺跡】

調査区は県史跡石塚廃寺塔跡の北東から東に位置する。いずれも道路橋脚部分の調査であることから一辺13～18mの長方形もしくは台形を呈している。調査区名は橋脚（ピア）番号の名称を便宜上使用し、南西から北東に向かってＰ１～８区と命名した。

調査は国道313号と石塚廃寺跡を結ぶ市道を境として、北側はＰ８区→Ｐ７区→Ｐ６区→Ｐ５区→Ｐ４区、南側はＰ３区→Ｐ２区→Ｐ１区の順に調査を実施した。表土掘削に先立つ段階確認を６月１日に開始し、北端に位置するＰ８区から南へ順次重機による表土掘削を行い、その後各地区において人力による遺構掘削と記録を進めた。なお、Ｐ１～６区で検出された古代の流路については、遺物が希薄なことから重機を併用して調査を進めた。９月４日にＰ１～３区、10月15日にＰ７・８区、10月21日にＰ４～６区の全景完掘写真をドローンを用いて撮影し調査を終了した。終了した調査区は順次県土整備局への管理引き渡しを行った。以下、各地区の調査経過の概要を記す。

Ｐ１区：７月27日に重機による表土掘削を開始し、８月７日に終了した。掘削後の段階確認及び方眼杭打設を行い、発掘作業員による中世の遺物包含層（以下、包含層と呼称）掘削に着手した。第１遺構面では古代の流路を検出し、26日に足場からの完掘写真撮影を行った。下層は調査区全体が古代の流路の堆積土であることがわかり、重機による掘削を開始し８月31日に足場からの第２遺構面の完掘写真撮影を実施した。その後、測量と土壌サンプル採取を行い９月８日に調査を終了した。

Ｐ２区：６月10日に重機による表土掘削を開始し、16日に終了した。掘削後の段階確認及び方眼杭打設を行い、発掘作業員による中世の包含層の掘削に着手した。第１遺構面では古代の１・２流路を検出し、28日に足場からの完掘写真撮影を行った。下層は調査区全体が古代の流路の堆積土で

あることがわかり、重機による掘削を開始し、８月４日に足場からの第２遺構面の完掘写真撮影を実施した。その後、測量と土壌サンプル採取を行い21日に調査を終了した。

Ｐ３区：６月５日に重機による表土掘削を開始し、20日に終了した。掘削後の段階確認及び方眼杭打設を行い、多量の古瓦を包含する近現代の１溝と中世の包含層の人力掘削に着手した。第１遺構面では３耕地段差を検出し、７月３日に足場からの完掘写真撮影を行った。下層は調査区全体が古代の流路の堆積土であることがわかったため、人力・重機による掘削を７月16日に着手し、８月５日に足場からの第２遺構面の完掘写真撮影を実施した。その後、測量と土壌サンプル採取を行い19日に調査を終了した。

Ｐ４区：９月10日に重機による表土掘削を開始し、17日に終了した。掘削後の段階確認及び方眼杭打設を行い、発掘作業員による中世の包含層と流路の掘削に着手した。第１遺構面では古代の流路を検出し、10月２日に足場からの完掘写真撮影を行った。下層は調査区全体が古代の流路の堆積土であることがわかり、人力・重機による掘削を開始し、10月13日に足場からの第２遺構面の完掘写真撮影を実施した。その後、測量と土壌サンプル採取を行い16日に調査を終了した。

Ｐ５区：７月27日に重機による表土掘削を開始し、31日に終了した。掘削後の段階確認及び方眼杭打設を行い、発掘作業員による包含層と流路の掘削に着手した。第１遺構面では近現代の１溝、中世の溝などを検出し、８月27日に足場からの完掘写真撮影を行った。下層は調査区全体が古代の流路の堆積土であることがわかり、人力・重機による掘削を開始し、９月16日に足場からの第２遺構面の完掘写真撮影を実施した。その後、測量と土壌サンプル採取を行い23日に調査を終了した。

Ｐ６区：７月20日に重機による表土掘削を開始し、27日に終了した。掘削後の段階確認及び方眼杭打設を行い、発掘作業員による人力による包含層掘削に着手した。第１遺構面では近現代の１溝や中世のピットなどを確認し、９月10日に足場からの完掘写真撮影を実施した。下層は調査区内全体が古代の流路の堆積土であることがわかり、人力・重機による掘削を開始し最下層から木製品の部材が出土した。10月６日に足場からの第２遺構面の完掘写真撮影を実施、その後、測量と土壌サンプル採取を行い７日に調査を終了した。

Ｐ７区：６月４日に重機による表土掘削を開始し、翌５日に終了した。掘削後の段階確認及び方眼杭打設を進め、発掘作業員による中世の包含層掘削に着手した。第１遺構面では近現代の１溝などを確認し、６月29日に足場からの完掘写真撮影を実施した。引き続き包含層の人力掘削を進め、第２遺構面で古代から中世の掘立柱建物２棟や７土坑などを検出し、７月20日に足場からの第２遺構面の完掘写真撮影を実施した。その後、測量と土壌サンプル採取を行い８月４日に調査を終了した。

Ｐ８区：６月４日に重機による表土掘削を開始し、同日に終了した。その後、掘削後の段階確認と方眼杭打設を行い、発掘作業員による中世の包含層の掘削に着手した。第１遺構面で古代から中世の１擬似畦畔や２溝を検出し、７月14日に足場からの完掘写真撮影を行った。引き続き包含層の掘削を進め、第２遺構面でピットなどを検出し、８月３日に足場からの第２遺構面の完掘写真撮影を実施した。その後、測量と土壌サンプル採取を行い５日に調査を終了した。

【大鴨遺跡】

１区：表土掘削に先立つ段階確認を６月１日に開始。16日から重機による表土掘削に着手し、30

日に終了した。掘削後の段階確認及び方眼杭打設を行い、発掘作業員による遺構掘削と記録に移行した。第１遺構面上層である４層をⅠａ・Ⅰｂ層と区分し、Ⅰａ層を中世後期の包含層、Ⅰｂ層を中世前期の包含層と認識し、前者については厚い堆積ながら極めて遺物が希薄であることから重機による掘削を行った。Ⅲ層上面を第１遺構面とし、中世前期の掘立柱建物や多数のピットなどを検出した。９月４日ドローンを用いて第１遺構面の全景完掘写真を撮影した。９月８日から無遺物層であるⅢ層の重機による機械掘削を開始し、29日に終了した。機械掘削と並行して第２遺構面の遺構検出作業を進め、弥生時代以降の多数のピットや古代の道路遺構などを検出した。また調査区西半部では古代の流路が確認された。10月15日ドローンを用いて第２遺構面の全景完掘写真を撮影した。その後、測量と土壌サンプル採取を行い21日に調査を終了した。

２区：表土掘削に先立つ段階確認を６月８日に行い、８月17日より重機による表土掘削に着手して９月４日に終了した。掘削後の段階確認及び方眼杭打設を行い、発掘作業員による遺構掘削と記録に移行した。Ⅲ層上面を第１遺構面として古代の掘立柱建物や道路遺構などを検出した。10月５日に足場からの第１遺構面の全景写真撮影を行い、調査区東端に位置する流路の重機掘削に着手した。７日より調査区西半の無遺物層であるⅢ層の重機掘削を開始し、８日に終了して第２遺構面の遺構検出作業及び遺構掘削、記録に移行した。第２遺構面では弥生時代のピットや縄文時代の落とし穴が確認された。同日、重機による流路掘削中に木製品がまとまって出土、周辺の精査を行いながら９日に流路埋土の掘削が終了した。木製品の集中部は２箇所確認され、古代の木製構造物と祭祀遺物の廃棄場であることが明らかとなった。11月26日から土壌サンプル採取や測量などの記録作業を順次進め、12月２日にドローンを用いて第２遺構面の全景完掘写真を撮影し、調査を終了した。

３区：10月１日表土掘削に先立つ段階確認を行い、２日から重機による表土掘削に着手し14日に終了した。掘削後の段階確認及び方眼杭打設を行い、発掘作業員による人力掘削に移行した。２区の遺物包含層をⅡａ・Ⅱｂ・Ⅱｃ層に区分し、Ⅱａ・Ⅱｂ層を古代から中世前期の包含層、Ⅱｃ層を弥生時代の包含層と認識し、Ⅱｃ層上面を第１遺構面とし古代から中世の竪穴建物や掘立柱建物、道路などの遺構を検出した。11月18日にドローンを用いて第１遺構面の全景完掘写真を撮影した。11月25日から無遺物層であるⅢ層の重機掘削を開始し、26日に終了した。第２遺構面の遺構検出作業、遺構掘削と記録を行い、弥生時代の多数のピットなどを検出した。12月２日にドローンを用いて第２遺構面の全景完掘写真を撮影した。その後、土壌サンプル採取や測量などの記録作業を進め調査を終了した。12月５日に鳥取県への管理引き渡しを行った。

なお、両遺跡とも11月12日記者公開、一般市民を対象とした現地説明会を11月15日に開催し、130名の見学者があった。

流路から出土した多量の木器は、財団調査室に持ち帰ったのち速やかに選別作業を行い、報告書掲載遺物については、応急的な保存処理と樹種同定を株式会社吉田生物研究所に委託した。土壌サンプルや炭化物などについては、株式会社古環境研究所に委託し、古環境復元のための花粉分析、植物珪酸体分析、珪藻分析、放射性炭素年代測定を行った。その成果については、第５章に掲載している。

令和２年度の石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡出土品の整理作業は、財団調査室において令和２年６月11日から着手した。遺物の洗浄、注記、接合、実測図作成などの報告書作成作業などを行い、令和３年３月26日まで実施した。

第２項　令和３年度

４区：調査区を北・南・南東区と３地区に細分し、重機による機械掘削と発掘作業員による人力掘削を並行しながら、北区から南東区、南区の順に調査を進めた。そのため表土掘削前の段階確認と掘削後の段階確認、方眼杭打設を数回に分けて実施した。６月１日より重機による表土掘削を北区から着手して、南東区、南区へ移行し８月３日に終了した。その後、流路埋土や第１遺構面と第２遺構面に介在する無遺物層である黒色土についても重機掘削を継続した。表土掘削が終了した範囲については、順次遺構検出作業、遺構掘削と記録へ移行した。

北区は９月 22 日に遺構掘削と記録が終了し、翌 23 日にドローンを用いて第１遺構面の全景完掘写真を撮影した。北区の第１遺構面では、古代の掘立柱建物や道路遺構、多数のピット、中世の耕作に伴う足跡などを検出した。

９月 23 日に南区、南東区の第１遺構面の遺構掘削と記録を開始し、10 月 21 日に終了した。翌 22 日にドローンを用いて第１遺構面の全景完掘写真撮影を実施した。南区、南東区では古代の道路や多数のピット、中世の掘立柱建物、水田跡や耕作痕などを検出した。

９月 25 日より北区の第２遺構面の遺構掘削と記録に移行し、11 月 25 日に終了した。北区の第２遺構面では古代の流路、古墳時代の竪穴建物や掘立柱建物、縄文時代の落とし穴などを検出した。10 月 26 日より南区、南東区の第２遺構面の遺構掘削と記録に着手し、11 月 25 日に終了した。南区、南東区の第２遺構面では、古代の流路や道路遺構、古墳時代以前の多数のピットなどを検出した。

11 月 26 日にドローンを用いて全地区の第２遺構面の全景完掘写真を撮影し、その後補足調査と測量を行い 12 月３日に全ての調査を終了した。同日、鳥取県への管理引き渡しを行った。

なお、上小鴨地区住民を対象とした現地説明会を 11 月 21 日に開催し、38 名の見学者があった。

流路から出土した木器は、財団調査室に持ち帰ったのち速やかに選別作業を行い、報告書掲載遺物については、応急的な保存処理と樹種同定を株式会社吉田生物研究所に委託した。土壌サンプルや炭化物などについては株式会社古環境研究所に委託し、古環境復元のための花粉分析、植物珪酸体分析、珪藻分析、放射性炭素年代測定を行った。その成果については、第５章に掲載している。

令和３年度の石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡出土品の整理作業は、財団調査室において令和３年４月 12 日から着手した。遺物の洗浄、注記、接合、実測図作成などの報告書作成作業などを行い、令和４年３月 25 日まで実施した。

第３項　令和４年度

石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡出土品の整理作業は、財団調査室において令和４年４月１日から着手した。報告書掲載遺物については、応急的な保存処理と樹種同定を（一財）文化財科学研究センターに委託した。遺物の洗浄、注記、接合、実測図作成などの報告書作成作業及び報告書刊行、鳥取県埋蔵文化財センターへの出土品の移管作業を令和５年３月 24 日まで行った。

第１表　石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡及び周辺遺跡の調査成果一覧

遺跡	所在地	調査主体	調査期間	面積	調査原因	成果内容	文献
ドウ々平遺跡	倉吉市北野	倉吉市	2014/01 ～ 2014/03	320㎡	県道仙隠岡田線	・飛鳥～平安：竪穴建物６、掘立柱建物 15、柵列１など ・縄文土器、弥生土器、土師器、黒色土器、須恵器、土製支脚、土馬、石器	1
ドウ々平遺跡	倉吉市北野	倉吉市	2014/05 ～ 2014/09	720㎡	県道仙隠岡田線		1
ドウ々平遺跡	倉吉市北野	倉吉市	2015/07 ～ 2015/12	720㎡	県道仙隠岡田線	横穴式石室(墳丘規模不明、玄室長1.75m、幅1.15m、羨道長0.4m、幅1.1m、須恵器７世紀後半)、土坑２	1
小鴨道祖神遺跡	倉吉市北野・小鴨	倉吉市	2016/07 ～ 2016/09	530㎡	一般国道 313 号倉吉道路	・中世後期：溝２、中世後期～近世初頭：木棺墓１ ・土師器、須恵器、丹塗り土師器、銅銭、鉄釘、木製小玉、人骨	2
小鴨道祖神遺跡（１区）		財団	2017/06 ～ 2017/11	2,500㎡	一般国道 313 号倉吉道路・倉吉関金道路	・縄文：落とし穴９ ・飛鳥～平安：竪穴建物５、掘立柱建物 42、段状遺構２、土坑など ・土師器（暗文土器）、須恵器、製塩土器、移動式竈、土製支脚、土馬、鍛冶関連遺物など	3
小鴨道祖神遺跡（２・３区）			2019/06 ～ 2019/11	3,623㎡			
山ノ下遺跡	倉吉市小鴨・上古川	財団	2016/06 ～ 2016/11	7,000㎡	一般国道 313 号倉吉関金道路	・縄文：落とし穴 19 ・弥生中期：溝２、土坑２など ・古墳前期：土坑２ ・平安末～鎌倉：掘立柱建物 21（うち大型掘立柱建物２）、区画溝、土坑 26 など ・弥生土器、須恵器、中世土師器（多量）、瓦質土器、貿易陶磁器、国産陶器	4
			2018/05 ～ 2018/12	5,000㎡			5
平ノ前遺跡（A １区・P ４区）	倉吉市上古川	財団	2017/05 ～ 2017/07	306.4㎡	一般国道 313 号倉吉関金道路	・縄文～平安：流路 ・古墳前期：溝 ・鎌倉：掘立柱建物２ ・ 突帯文土器、石鏃、弥生土器、分銅形土製品、円面硯、赤彩土師器、須恵器、瓦など	4
平ノ前遺跡（A １区盛土部･P ３区）			2019/05 ～ 2019/08	1,000㎡			5
石塚廃寺東遺跡（P １～P ８区）	倉吉市石塚	財団	2020/06 ～ 2020/12	1,988㎡	一般国道 313 号倉吉関金道路	・縄文～平安：流路 ・飛鳥～奈良：掘立柱建物１ ・室町：掘立柱建物１ ・弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、貿易陶磁器、瓦、木製祭祀具、漆器椀	本書
大鴨遺跡（１～３区）	倉吉市石塚・福山	財団	2020/06 ～ 2020/12	4,907.7㎡	一般国道 313 号倉吉関金道路	・縄文時代：落とし穴３ ・縄文～平安：流路 ・弥生中期：土坑、ピット ・古墳前期：竪穴建物２、掘立柱建物２ ・飛鳥～奈良：掘立柱建物 13、道路８、水辺祭祀場、木製構造物 ・鎌倉：掘立柱建物 10、水田跡、足跡、耕作痕 ・室町：火葬墓２ ・弥生土器、土師器（墨書土器）、須恵器（篦書土器）、瓦質土器、貿易陶磁器、国産陶器、移動式竈、土製支脚、瓦、土馬、木製祭祀具、建築部材	本書
大鴨遺跡（４区）	倉吉市福山		2021/06 ～ 2021/12	8,248㎡			本書

※　調査主体の凡例　倉吉市：倉吉市教育委員会　財団：公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室

1．倉吉市教育委員会 2016『ドウ々平遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財報告書第 146 集
2．倉吉市教育委員会 2017『小鴨道祖神遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財報告書第 151 集
3．公益財団法人鳥取県教育文化財団 2020『小鴨道祖神遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書 121
4．公益財団法人鳥取県教育文化財団 2018『山ノ下遺跡・平ノ前遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書 120
5．公益財団法人鳥取県教育文化財団 2021『山ノ下遺跡Ⅱ・平ノ前遺跡Ⅱ』鳥取県教育文化財団調査報告書 122

第２表　一般国道 313 号（倉吉道路・倉吉関金道路）関連埋蔵文化財既刊発掘調査報告書一覧

区間	所在地	報告書名	№.	刊行年月
倉吉道路　倉吉西 IC －小鴨ハーフ IC	倉吉市北野	『小鴨道祖神遺跡』	121	2020 年 12 月
倉吉関金道路　小鴨ハーフ IC －福山 IC	倉吉市北野・小鴨	『小鴨道祖神遺跡』	121	2020 年 12 月
	倉吉市小鴨・上古川	『山ノ下遺跡・平ノ前遺跡』	120	2018 年３月
	倉吉市小鴨・上古川	『山ノ下遺跡Ⅱ・平ノ前遺跡Ⅱ』	122	2021 年２月
	倉吉市石塚・福山	『石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡』	123	2023 年３月

写真１　令和２年度 現地説明会風景

写真２　令和３年度 現地説明会風景

第３節　調査体制

発掘調査および報告書作成は、以下の体制で実施した。

令和２年度　石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡

○公益財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長	福本　慎一
事務局	
事務局長	畑中　弘子
副 主 幹	岡田　美津子
事務職員	水根　幸子
調査室	
室　　長	君嶋　俊行　※
総務係	
係　　長	河村　淳　　※
事務職員	片岡　絵里子
非常勤職員	石川　恵
非常勤職員	大下　栄子（７月１日から）
企画設計係	
係　　長	小口　英一郎　※
	（本務：調査班係長）
調査班	
係　　長	小口　英一郎　※
副 主 幹	西川　徹　　※
文化財主事	八峠　興　　※
整理作業員	小川　昭子
	田島　佳恵里
	田中　裕子
	西村　達男
	山邉　和則
	世浪　由美子

○発掘調査支援業者

埋蔵文化財発掘調査支援業務委託（石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡）アコード・アイテック埋蔵文化財発掘調査支援業務委託共同企業体

現場代理人	大倉　崇
副現場代理人	戸田　志功
支援調査員	西村　匡広
	中村　毅
	坂口　尚人
	吾妻　俊典
調査補助員	星　英司
	鈴木　貴久美
	林　貴光
	田村　和久（７月途中まで）
	福井　露子（７月途中から）
測量士等	門田　哲侍（７月途中まで）
	田村　和久（７月途中から）

令和３年度　石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡

○公益財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長	福本　慎一
事務局	
事務局長	畑中　弘子（６月30日まで）
	上山　憲二（７月１日から）
主　　幹	岡田　美津子
事務職員	水根　幸子
調査室	
室　　長	君嶋　俊行　※
総務係	
係　　長	米田　寛美　※
事務職員	片岡　絵里子
非常勤職員	石川　恵
非常勤職員	和田　美保（７月１日から）
企画設計係	
係　　長	小口　英一郎　※
	（本務：調査班係長）
調査班	
係　　長	小口　英一郎　※
副 主 幹	西川　徹　　※
文化財主事	八峠　興　　※

整理作業員　小川　昭子
田島　佳恵里
田中　裕子
西村　達男
山邉　和則（７月 15 日まで）
世浪　由美子

○発掘調査支援業者
埋蔵文化財発掘調査支援業務委託（大鴨遺跡）
アコード・アイテック埋蔵文化財発掘調査支援業務委託共同企業体
現場代理人　坂口　尚人（支援調査員兼任）
副現場代理人　戸田　志功
支援調査員　西村　匡広
坂口　尚人
吾妻　俊典
調査補助員　星　英司
福井　露子
井手口　舞
林　貴光
測量士等　結多　隆

調査室
室　長　君嶋　俊行　※
総務係
係　長　米田　寛美　※
事務職員　片岡　絵里子
非常勤職員　石川　恵
企画設計係
係　長　西川　徹　※
調査班
係　長　西川　徹　※（本務：企画設計係長）
文化財主事　坂本　嘉和　※（８月 31 日まで）
文化財主事　八峠　興　※（８月 31 日まで）
整理作業員　小川　昭子
田島　佳恵里
田中　裕子
西村　達男
野坂　明日美
世浪　由美子

※　鳥取県地域づくり推進部から派遣

令和４年度　石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡

○公益財団法人鳥取県教育文化財団
理 事 長　福本　慎一
事務局
事務局長　上山　憲二
主　幹　岡田　美津子
事務職員　水根　幸子

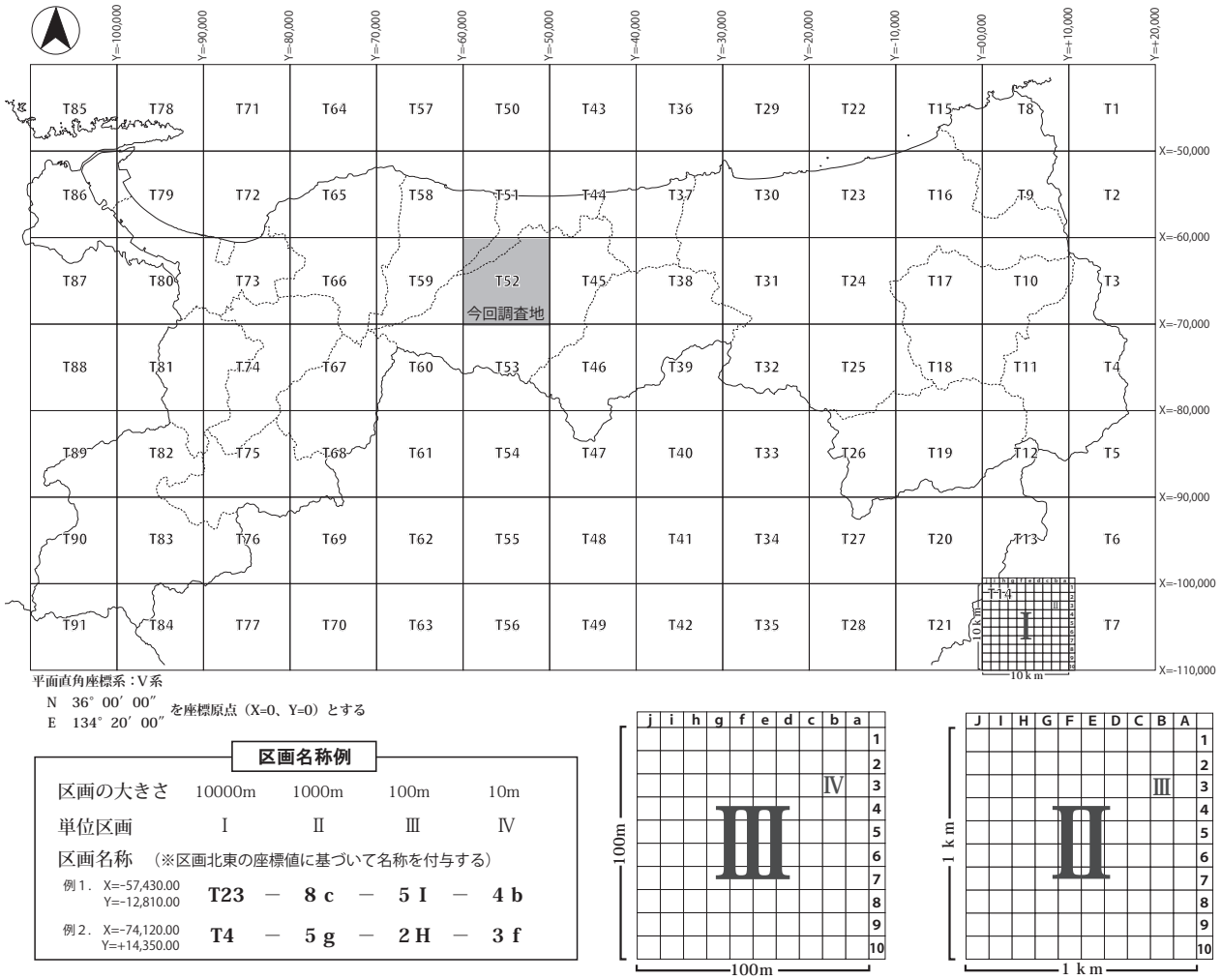
○調査協力
鳥取県中部総合事務所県土整備局、鳥取県地域づくり推進部文化財局とっとり弥生の王国推進課、鳥取県埋蔵文化財センター、倉吉市教育委員会事務局文化財課、倉吉博物館、大鴨土地改良区、倉吉市小鴨コミュニティセンター、倉吉市上小鴨コミュニティセンター

第４節　調査の方法

第１項　調査地の地区割

１　地区割の方法と名称

公益財団法人鳥取県教育文化財団（以下、財団）が受託した一般国道 313 号 (倉吉関金道路) の発掘調査では、調査成果の標準化を目的として、遺跡や遺構の位置表示や遺物の取上げ等に利用する地区割に、平面直角座標系の第Ⅴ系（世界測地系）を使用している。地区割については、10ｍ ×



第２図　鳥取県と国土座標系

10m（100㎡）の区画を基本的な最小単位とし、その名称（記号）については、以下のように設定した（第２図）。

第Ⅰ区画　鳥取県の全域に設定した大区画である。10,000m × 10,000mで、１～91の区画を設け、北東隅からＴ１～Ｔ91の記号を付した。

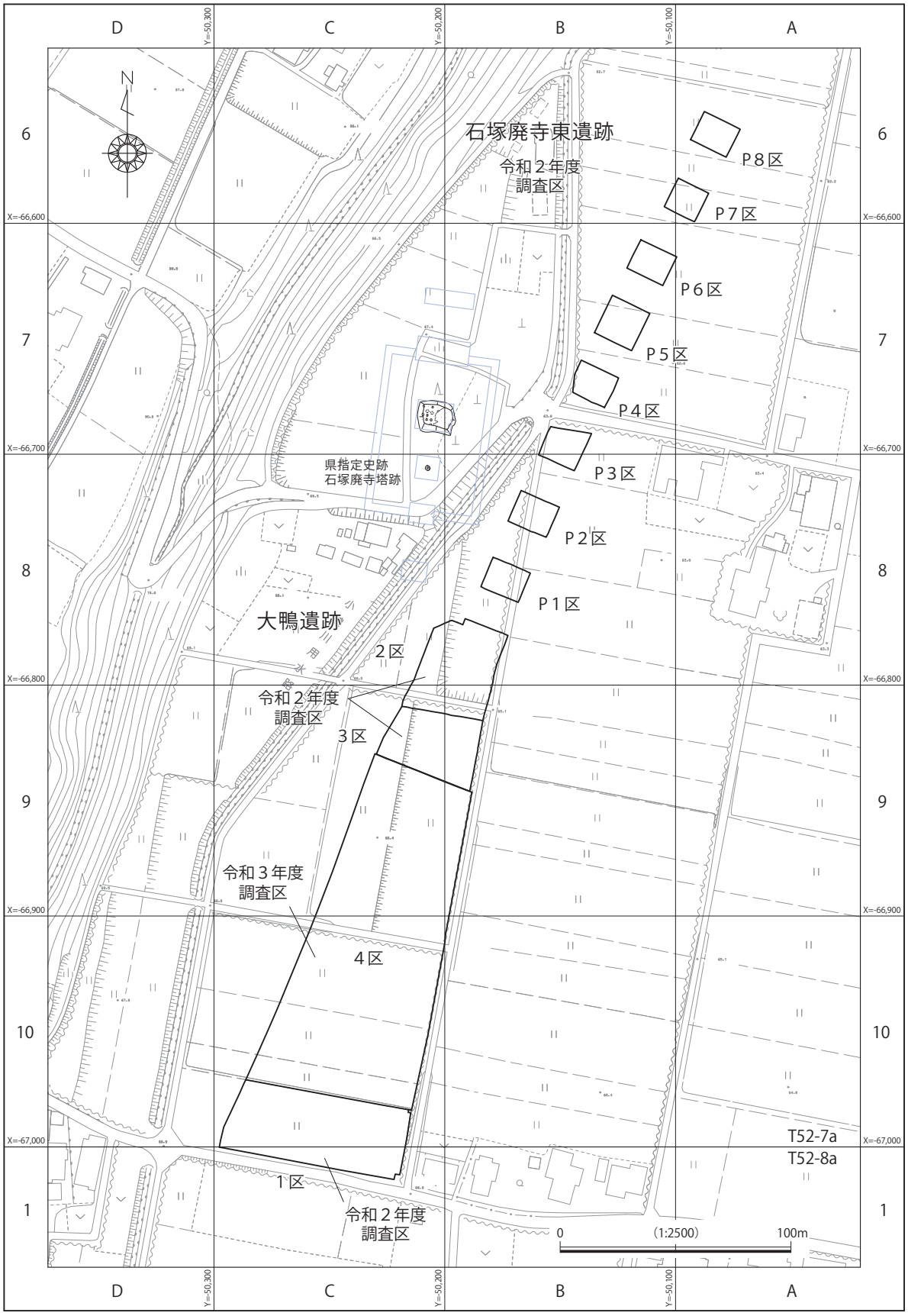
第Ⅱ区画　第Ⅰ区画の１区画内を、1,000m × 1,000mに100分割した区画である。第Ⅱ区画については、１区画の南北軸に１～10、東西軸にａ～ｊを付し、１ａ～10ｊの記号を付した。

第Ⅲ区画　第Ⅱ区画の１区画内を、100m × 100mに100分割した区画である。第Ⅲ区画については、１区画の南北軸に１～10、東西軸にＡ～Ｊを付し、１Ａ～10Ｊの記号を付した。

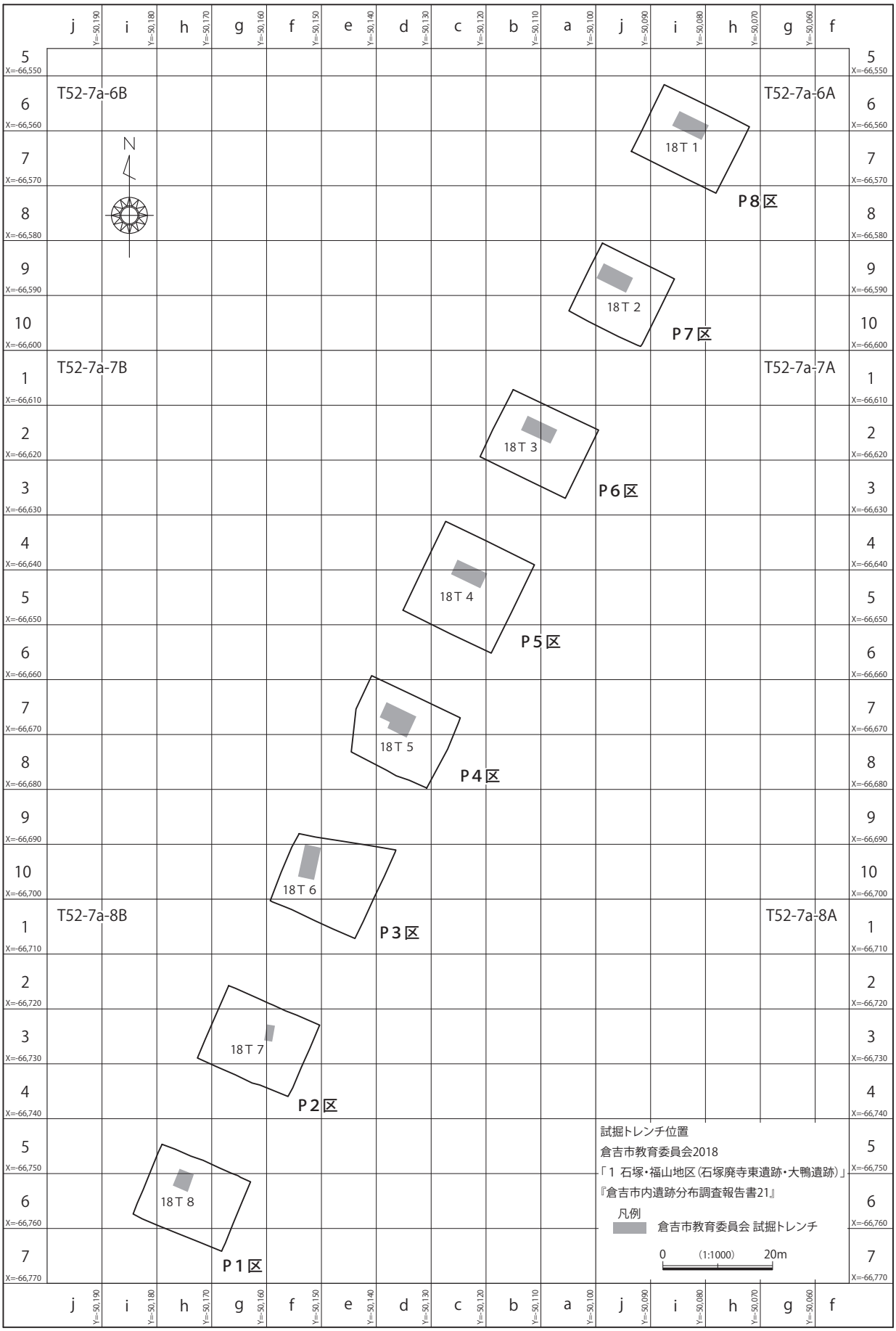
第Ⅳ区画　第Ⅲ区画の１区画内を､10m × 10mに100分割した区画である。第Ⅳ区画については、１区画の南北軸に１～10、東西軸にａ～ｊを付し、１ａ～10ｊの記号を付した。

２　石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡における地区割

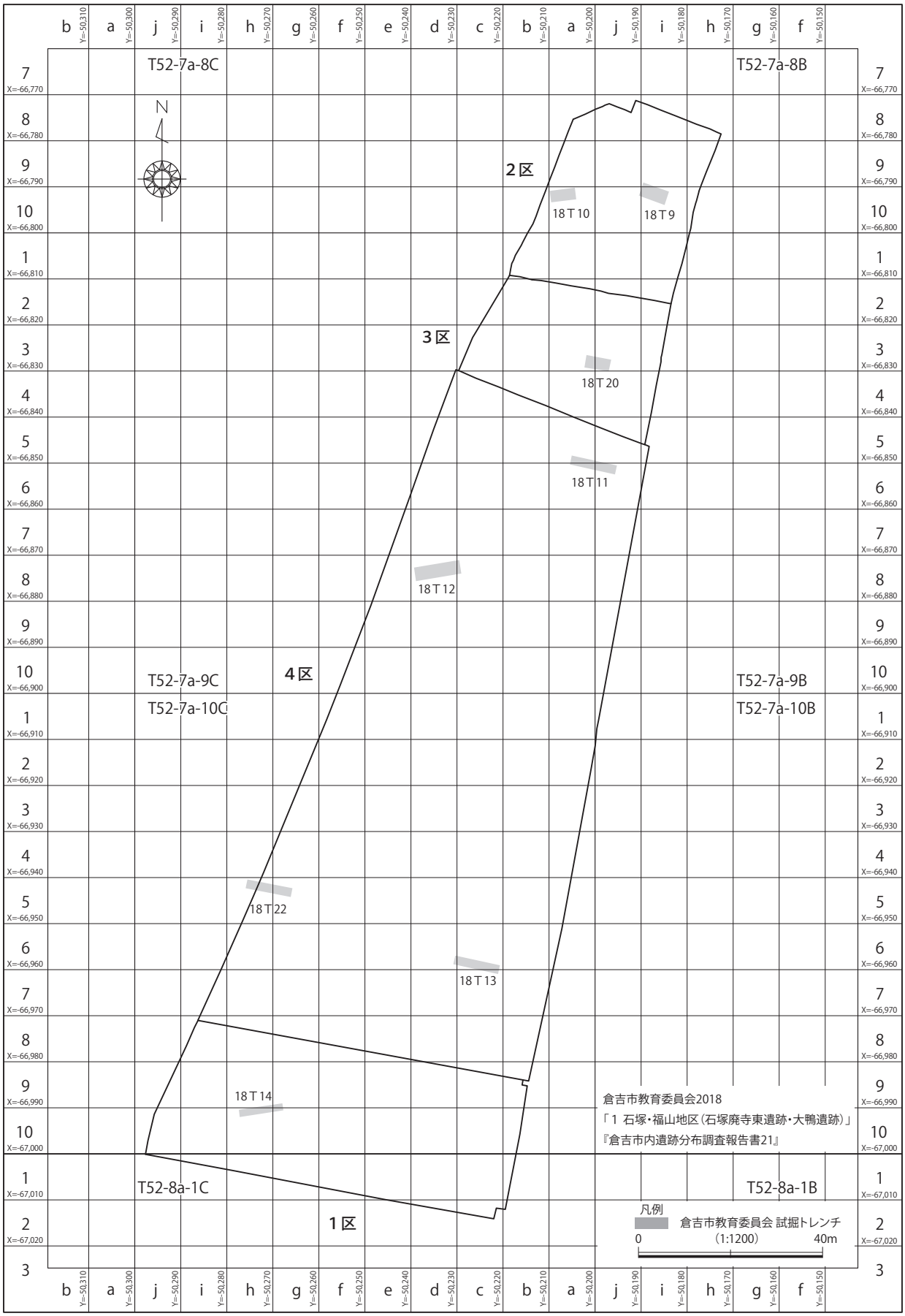
調査区に前項で述べた地区割を設定したものが第３～５図である。本書で報告する令和２年度、令和３年度調査範囲は、T52（第Ⅰ区画）内に位置しており、文中で遺構・遺物位置について地区割を用いながら記載する際には、第Ⅱ・第Ⅲ・第Ⅳ区画の記号を用いて7a-9C-3bのように記す。



第３図　石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡の周辺地形と地区割図



第４図　石塚廃寺東遺跡の地区割図



第５図　大鴨遺跡の地区割図

第２項　発掘調査と記録の対象

１　発掘調査と記録の対象

調査では、表土掘削を重機、遺物包含層及び遺構の検出と掘削は人力で行い、調査の記録作業は表土除去後からを対象として行った。

２　遺構名称の設定

遺構名称は地区ごとで検出した順に付与することを基本方針とし、遺構種類の呼称は、冒頭に「Ｓ」を付け、例えばＰ１～８区に分かれる石塚廃寺東遺跡であれば「Ｐ２区 Ｓ１溝」「Ｐ７区 Ｓ４柱穴」、１～４区に分かれる大鴨遺跡であれば「１区Ｓ１土坑」「２区 S53 道路」のように記載している。

ただし、例えば掘立柱建物であれば、個別の柱穴は「１区 S23 柱穴」のように記載するが、集合名称は「掘立柱建物１」としている。掘立柱建物と竪穴建物、柵列については区を跨いで遺跡ごとの通し番号とした。

一度付与された遺構番号については不変であり、本書においても調査時に付与した遺構番号を用いて報告を行っている。ただし、現地調査時に遺構番号を付したものについても、調査の結果、撹乱や自然地形であることが明らかとなった場合は欠番とした。なお、本報告書では冒頭の「Ｓ」を省略して記載している。

３　図面記録および写真撮影

図面記録に関しては、平断面図はトータルステーションを用いた測量と一部写真計測を、対象遺構や壁面の状況によって使い分けた。作成した図面は､現地での一次記録である〈原図〉として管理し、最終的には情報をデジタルトレースして〈編集図〉を作成した。

写真の撮影は、発掘調査支援業者の支援発掘調査員が財団職員の指示のもと行った。撮影用機材としてデジタル一眼レフカメラ（センサーサイズ APS-C 以上、有効画素数 1220 万画素以上）のみ使用した。

デジタル一眼レフカメラによる撮影は RAW 及び JPEG 形式の同時保存により行った。また、デジタル一眼レフカメラによる撮影は、写真撮影を行う全ての対象に対して行うとともに、撮影対象や日付などの撮影内容を記載した写真ラベルも合わせて撮影している。これにより、撮影した画像データを整理、検索用資料として使用できるようになり、写真記録管理用の〈写真台帳〉の作成時に有用なだけでなく、効率的な写真の管理と活用が可能となっている。

４　出土遺物の取り上げ

遺物の取り上げは、取上番号を通し番号とし、遺物取上カードに記載された項目に基づいて遺物取上台帳を作成し、出土した遺物を取り上げ、管理した。遺物取上カードの記載項目と内容は以下のとおりである。

遺　跡　名　「石塚廃寺東遺跡 20 Ｐ１～８」と記載。「Ｐ１～８」は地区名、「20」は 2020 年度に調査を実施したことを示す。大鴨遺跡は「大鴨遺跡 20　１～３区」「大鴨遺跡 21（４区)」と記載。「１～３区」は地区名、「20」「21」は 2020 ・ 20

21年度に調査を実施したことを示す。

地区名　遺物の取り上げは、10ｍ×10ｍのグリッドを基本とし、第Ⅰ～Ⅳ区画で構成される地区割を記載した（第１章第４節第１項参照）。

層位名　遺物が帰属する包含層や遺構内に堆積した層位の番号ないし名称を記載した。

遺構名　遺物が帰属する遺構の名称を記載した。

取上No.　取り上げ順に通し番号を記載した。

出土年月日　検出日ではなく、取り上げ日を記載した。

図面　遺物の出土状況が記録された図面の有無と図面のスケールを記載した。

備考　特記事項を記載した。

時代・時期　取り上げた遺物の帰属時期を記載するが、この度の調査では記載を省略した。

種別　土器や石器など素材によって大別される遺物の種別を記載した。

その他　上記の記載項目とは別に、取り上げ時に座標値が記録されたものについては、遺物取上カードのメモ欄に座標値を記載した。

第３項　出土遺物の整理

土器・土製品　調査終了後に洗浄、接合、注記、復元及び実測を行い、必要に応じて拓本をとった。器種及び形状が判明ないし復元できる個体を主な実測の対象とした。

瓦　調査終了後に洗浄、注記、接合、拓本、実測を行った。眞田廣幸氏の調査指導を受け、分類と集計作業を実施し、軒丸瓦・軒平瓦を主な実測対象とした。

石器　調査終了後に洗浄、接合、注記、実測を行った。本調査の出土品は、器種や用途が判明できるもののほか、使用痕が明瞭な個体を実測の対象とした。

木製品　調査終了後に洗浄、実測を行った。出土した木製品は建築材や杭、祭祀具、漆器椀などであり､一部について保存処理と自然科学分析（放射性炭素年代測定、樹種同定、塗膜分析）を実施した。なお、木製祭祀具については大平茂氏の調査指導を受け、 分類と集計を実施した。

金属器　錆等の付着物を除去し、実測を行った。

鍛冶・鋳造関連　鉄滓や羽口片などの鍛冶・鋳造関連遺物がコンテナ14箱分出土している。鍛冶・鋳造関連遺物の整理方法については、角田徳幸氏の調査指導を受け、分類と集計を実施した。

写真撮影　デジタル一眼レフカメラ（センサーサイズフルサイズ）で撮影を行った。また、金属器についてはＸ線撮影を行った。

保管　図面及び写真の記録類、出土遺物はすべて台帳に登録して収納作業を行った。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の立地と地理的環境

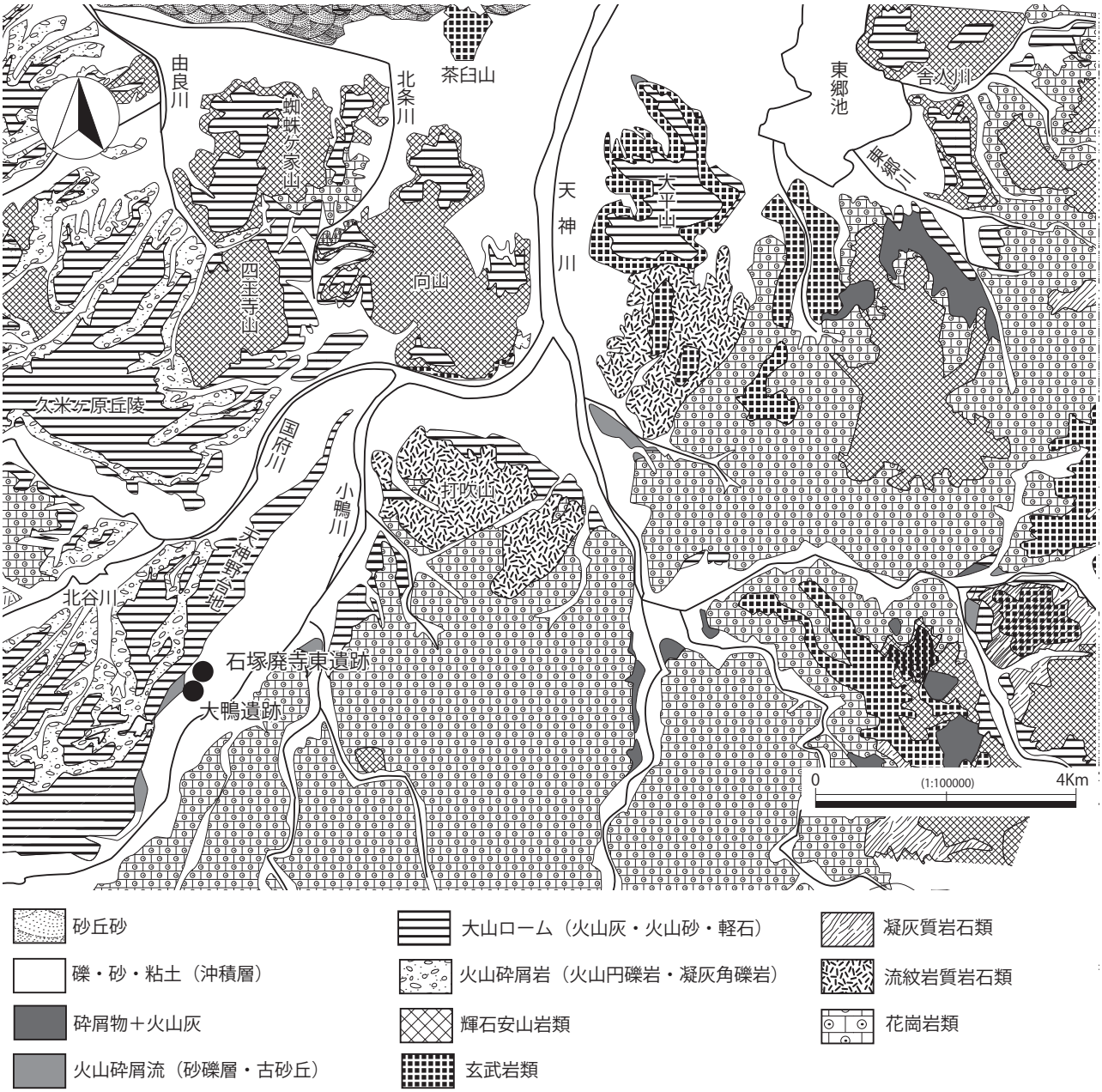
鳥取県は中国地方の北東部に位置し、北側には日本海、東側は兵庫県、西側は島根県、南側は岡山県、南西部は広島県に接している。県域は東西約 125km、南北約 62km と東西に長い形状であり、面積は約 3,507km^2 を測り、奈良県に次ぐ全国 41 位である。県域は鳥取市を中心とする東部域、倉吉市を中心とする中部域、米子市を中心とする西部域の３つの地域に大きく分けられる。

現在の倉吉市は、平成 17 年に倉吉市と南に位置した関金町が合併して（新）倉吉市として新たに誕生した市で、面積は約 272km^2、人口約４万５千人（令和４年 11 月末現在）を有する県中部の中心市である。周囲はほぼ東伯郡に囲まれているが、南西部がわずかに日野郡に接している。ただし、南側は県境を挟んで岡山県真庭市と接している。

倉吉市東部には、東伯郡三朝町の津黒山(標高 1,118m)に源を発する一級河川である天神川が流れており、三徳川や倉吉市西部を流れる小鴨川などの支流と合流しながら北流し、日本海に注いでいる。小鴨川は烏ヶ山(標高 1,448m）に源を発し、北東側に流れながら国府川と合流し、その後東流して天神川と合流する。これら河川の流域には平野が形成され、市街地や耕作地が広がっている。

石塚廃寺東遺跡は倉吉市石塚字山ノ下タ・

第６図　鳥取県と遺跡の所在地



第７図　遺跡周辺の地質環境

平ノ前に、大鴨遺跡は同市石塚字平ノ前および福山字大鴨に所在する。鳥取県の旧国名は、東部が因幡国、中西部が伯耆国にほぼ該当し、両遺跡は伯耆国久米郡の郡域に含まれると考えられている。そして、どちらの遺跡も、天神川の支流である小鴨川中流域左岸の河岸段丘上にあり、天神野台地と通称される丘陵の東側裾部に立地している。

天神野台地は、有史以前の大山噴出物によって大山の東側に形成されたなだらかな丘陵台地で、表層には黒ボクが発達している。水を得ることが難しかったこの台地上は、明治の終わり頃まで草木が繁茂する山林原野であったが、大正から昭和初期にかけて灌漑用水や溜池の設置などを通して開墾が進み、水田や果樹園の広がる農地へと変貌を遂げている。一方、天神野台地東側裾部の小鴨川中流域の河岸段丘上では古くから水田耕作が行われており、昭和 39 ～ 45 年にかけて圃場整備が実施されている。

第２節　歴史的環境

【旧石器時代】

倉吉市域に限らず、鳥取県内において旧石器時代の様相がわかる遺跡は数少なく、大山町の豊成叶林遺跡などごくわずかであるが、旧石器と考えられる石器類が倉吉市域内のいくつかの遺跡から出土している。

中尾遺跡（35）では黒曜石製の国府型ナイフ形石器とガラス質安山岩製のナイフ形石器と削器がいずれも各１点出土。長谷遺跡（87）ではガラス質安山岩製のナイフ形石器が１点出土。横谷遺跡と隣接する藤井谷地区でガラス質安山岩製のナイフ形石器が各１点出土。野津三第１遺跡からは黒曜石製のナイフ形石器と錐が各１点、ガラス質安山岩製のナイフ形石器２点と彫器と掻器各１点を含む石器群が出土。上神51号墳の下層からは黒曜石製の細石刃石核が原位置から遊離した状態ではあるが出土。山ノ下遺跡（130）からも旧石器の可能性がある玉髄製の剥片２点が遊離した状態ではあるが出土している。

【縄文時代】

倉吉市域に限らず、鳥取県内において縄文時代草創期の土器は見つかっていないが、草創期に属する可能性がある尖頭器あるいは有舌尖頭器が大山北麓を中心に約50点見つかっており、倉吉市域でも長谷遺跡と笹ヶ平遺跡で安山岩製の尖頭器、ドウ々平遺跡で黒曜石製の有舌尖頭器が各１点ずつ発見されている。

早期では取木遺跡（14）で竪穴建物１基と平地建物の可能性がある柱穴、被熱痕のある礫を含む礫群２基などと共に押型文土器が、野口遺跡からは被熱して赤変した礫を多く含む礫群２基と押型文土器が見つかっている。また、中田遺跡や猫山遺跡からも小片ばかりではあるが押型文土器が見つかっている。

前期では、中尾遺跡で中葉に位置づけられる土器片が見つかっている。

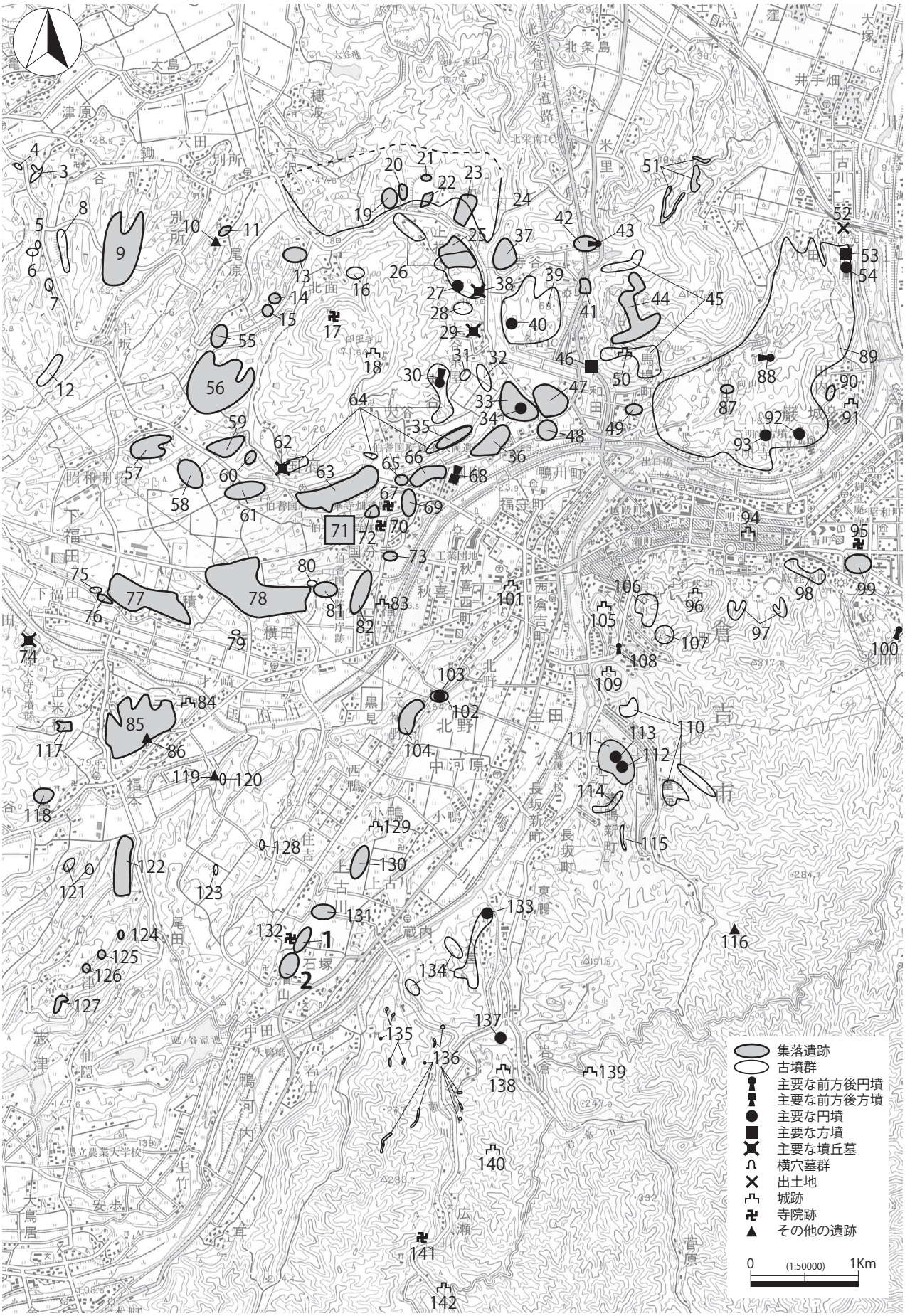
中期では、後口山遺跡で前葉に位置づけられる土器片が見つかっている。

後期では、津田峰遺跡（122）から縁帯文土器を伴っており床面中央部に方形の石囲炉を持つ竪穴建物が、横峯遺跡では福田ＫⅡ式の土器を伴っており地床炉を持つ竪穴建物１基が見つかっている。坂根平遺跡でも後期後半土器が散見される。

晩期には松ヶ坪遺跡（99）から大量の土器とともに配石遺構１基と甕棺１基、大仙峯遺跡からは深鉢や浅鉢片を伴う土坑１基、坂根平遺跡では包含層から多数の突帯文土器が見つかっている。

遺構では、時期の特定は困難ではあるが、落とし穴が中尾遺跡で127基、長谷遺跡で61基、横谷遺跡群で47基、夏谷遺跡（44）で28基、下西野遺跡（111）で27基、鋤大山遺跡（９）、頭根後谷遺跡（８）、イキス遺跡、向野遺跡（63）などからも各10基以下であるが検出されている。なお、大鴨遺跡（２）から１基、近接する山ノ下遺跡から19基、小鴨道祖神遺跡（104）からも９基が確認されている。

また、遺物では時期不明ながら倉吉市円谷から独鈷石１点、宮ノ峰遺跡から抉入耳飾１点が出土している。


集落遺跡
古墳群
主要な前方後円墳
主要な前方後方墳
主要な円墳
主要な方墳
主要な墳丘墓
横穴墓群
出土地
城跡
寺院跡
その他の遺跡
0
(1:50000)
1Km

第８図　周辺の遺跡

１石塚廃寺東遺跡　２大鴨遺跡　３下焼ス遺跡　４西焼ス遺跡　５駄道東古墳群　６二タ子塚古墳群
７郊家平古墳群　８頭根後谷遺跡・古墳群　９鋤大山遺跡　10 伯尾山窯跡　11 尾原宮ノ峰遺跡　12 勝負谷古墳群
13 イキス遺跡　14 取木遺跡・古墳群　15 一反半田遺跡・古墳群　16 北面古墳群　17 四王寺跡　18 大谷城跡
19 クズマ遺跡　20 西山遺跡・古墳群　21 谷畑遺跡　22 桜木遺跡　23 上神宮ノ前遺跡　24 上神古墳群
25 猫山遺跡　26 原谷古墳群　27 上神大将塚古墳　28 大谷茶屋古墳群　29 三度舞大将塚墳丘墓　30 大谷大将塚古墳
31 小林古墳群　32 イザ原古墳群　33 沢ベリ遺跡・古墳群　34 沢ベリ 5・7 号墳　35 中尾遺跡　36 不入岡遺跡
37 西前遺跡・古墳群　38 柴栗墳丘墓　39 寺谷古墳群　40 屋喜山９号墳　41 大平ラ遺跡　42 若林遺跡
43 若林３号墳　44 夏谷遺跡　45 定光寺古墳群　46 中峰１号墳　47 茅林遺跡　48 東前遺跡　49 平ル林遺跡
50 和田城跡　51 下張坪遺跡・古墳群　52 小田銅鐸出土地　53 宮ノ峰 19 号墳　54 宮ノ峰 21 号墳
55 コザンコウ遺跡　56 両長谷遺跡　57 国府大沢遺跡　58 国府大沢前遺跡　59 遠藤谷峯遺跡　60 白市遺跡
61 中峯遺跡　62 大谷後口谷墳丘墓　63 向野遺跡　64 大谷古墳群　65 打塚遺跡　66 擲塚遺跡　67 法華寺畑遺跡
68 国分寺古墳　69 宮ノ下遺跡　70 伯耆国分寺跡　71 伯耆国庁跡　72 国分寺北遺跡　73 河原毛田遺跡
74 阿弥大寺遺跡・墳丘墓群　75 下福田古墳群　76 下米積船沖遺跡　77 下米積乳母ヶ谷遺跡
78 国府跡西側遺跡群（福田寺遺跡・横田矢戸遺跡）　79 下米積 1･2 号墳　80 国分寺古墳群　81 嶋ノ掛遺跡
82 今倉遺跡　83 今倉城跡　84 三江城跡　85 三江遺跡　86 上野遺跡　87 長谷遺跡　88 向山６号墳　89 向山古墳群
90 養水古墳群　91 田内城跡　92 三明寺古墳　93 向山 142 号墳　94 山名氏関連遺跡　95 大御堂廃寺跡　96 打吹城跡
97 湊町古墳群　98 駄経寺古墳群　99 松ヶ坪遺跡　100 海又１号墳　101 北の城跡　102 ドウ々平遺跡
103 ドウ々平１号墳　104 小鴨道祖神遺跡　105 四十二丸城跡　106 倉吉古墳群　107 高畔古墳群　108 芸才寺１号墳
109 赤磐城跡　110 富海古墳群　111 下西野遺跡　112 山際１号墳　113 山際２号墳　114 下大江古墳群
115 東鴨古墳群　116 富海たたら跡　117 後中尾遺跡　118 沢谷兜山遺跡　119 菅ケ谷口たたら跡
120 三江小坂ノ上古墳群　121 福富古墳群　122 津田峰遺跡　123 三江向野古墳群　124 尾田小鋳物師遺跡
125 大平遺跡Ｂ地区　126 大平遺跡Ａ地区　127 宮ノ前遺跡　128 後口野古墳群　129 市場城跡　130 山ノ下遺跡
131 平ノ前遺跡　132 石塚廃寺跡　133 大宮古墳　134 大宮古墳群　135 鴨河内古墳群　136 広瀬古墳群
137 家ノ後口１号墳　138 家ノ後口城跡　139 岩倉城跡　140 広瀬城跡　141 広瀬廃寺跡　142 広瀬イヤ谷城跡

【弥生時代】

倉吉市域では、前期には、中尾遺跡で屋内貯蔵穴を４基伴った平地式建物や竪穴建物が、イキス遺跡（13）で土壙墓群や多数の甕と考えられる突帯文土器が、尾原宮ノ峰遺跡（11）で土壙墓・木棺墓群が見つかった。

中期になると遺跡数も増加し後中尾遺跡（117）、東前遺跡（48）、国府跡西側遺跡群（福田寺遺跡・横田矢戸遺跡 78）、遠藤谷峯遺跡（59）、高原遺跡、大山池遺跡、西前遺跡などで集落が確認されている。大山池遺跡は中期後葉の集落の可能性が高く、庇付掘立柱建物や独立棟持柱を持つ掘立柱建物が見つかっている。後中尾遺跡では環濠も検出されている。東前遺跡では、中期中葉の竪穴建物３棟内から碧玉製管玉の未成品や安山岩製の石針、石鋸・砥石などの工具類が多数出土しており、玉作工房と考えられる。また、小田地内において中期に製作されたと考えられる袈裟襷文銅鐸２口が発見されている。

後期になると、集落遺跡が丘陵上に増加し、服部遺跡、夏谷遺跡、観音堂遺跡、国府大沢前遺跡（58）、中峯遺跡（61）、白市遺跡（60）、中尾遺跡、沢ベリ遺跡（33）、コザンコウ遺跡（55）、鋤大山遺跡などが知られている。中でも、中峯遺跡からは全国的にも珍しい鳥形文や鋸歯文・同心円文・Ｓ字状渦文のスタンプ文を施した土器や分銅形土製品が出土しており、山陽地方との交流が窺われる。また、後期以降には、阿弥大寺四隅突出型墳丘墓群（74）、柴栗墳丘墓（38）、三度舞大将塚墳丘墓（29）、

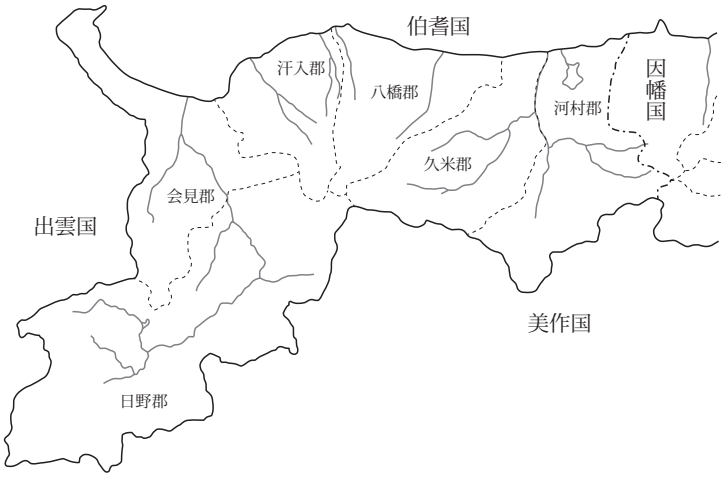
大谷後口谷墳丘墓（62）、藤和四隅突出型墳丘墓などの墳丘墓が造られており、古墳時代への胎動が窺われる。高原遺跡や中峰遺跡・二タ子塚遺跡などで土壙墓群、泰久寺中峯遺跡で土壙墓・木棺墓群が形成されている。

【古墳時代】

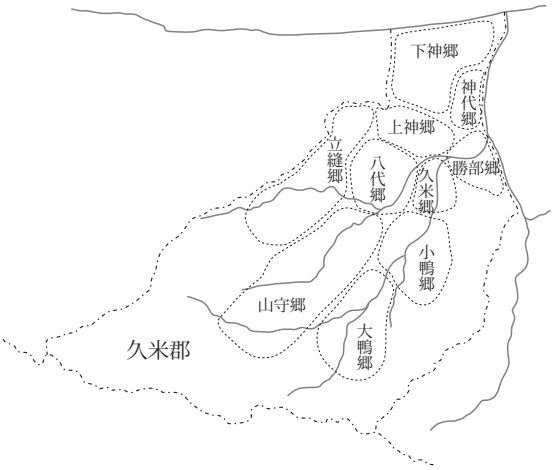
倉吉市域の前期～中期前半代の古墳には、全長約 60ｍと推定される前方後方墳で八鳳鏡や三角縁神獣鏡を含む３面の船載鏡や鉄製農耕具などが出土した東伯耆最古級の首長墳である国分寺古墳（68）、径約 25ｍと推定されている円墳で仿製三角縁神獣鏡や鍬形石、琴柱型石製品などが出土した上神大将塚古墳（27）、全長 50ｍと推定されている前方後円墳の大谷大将塚古墳（30）、１辺 27ｍの方墳である宮ノ峰 19 号墳（53）、径約 30ｍの円墳である宮ノ峰 21 号墳（54）、12.5 × 9ｍの方墳で竪穴式石槨と箱式石棺との折衷的な特異な構築法による石棺を主体部とする中峰１号墳（46）などがある。この時期の集落には、夏谷遺跡、西山遺跡（20）、桜木遺跡（22）、猫山遺跡（25）、西前遺跡（37）、宮ノ下遺跡、擲塚遺跡（66）などがある。

中期後半代には中小規模の古墳が古墳群を形成するようになり、下張坪古墳群（51）、夏谷古墳群、沢ベリ古墳群（33）、イザ原古墳群（32）、西山古墳群（20）、頭根後谷古墳群（８）などが知られている。また、中期から後期初頭にかけて、形象埴輪や器財形埴輪が出土しており、不入岡３号墳から家形埴輪、沢ベリ古墳群からは多数の円筒埴輪・壺形埴輪・形象埴輪の他、７号墳（34）から男女各１体の人物埴輪が、向山 142 号墳（93）から鶏形埴輪や鹿形埴輪、西山２・８号墳から人物埴輪・馬形埴輪が出土している。この時期の集落には、夏谷遺跡、不入岡遺跡（36）、頭根後谷遺跡などがあり、このうち、不入岡遺跡では作り付け竈を持つ竪穴建物跡や渡来系軟質土器が出土し、夏谷遺跡では大壁建物が見つかるなど、国府川下流左岸域での渡来系文物の出土が注目される。

後期には横穴式石室が盛んに造られるようになる。小鴨川中流域右岸に位置する径約 30ｍの円墳の大宮古墳（133）は、倉吉市域で最も早く横穴式石室を導入した古墳で、北部九州の影響が窺われる。その後この流域では、家ノ後口１号墳（137）、山際１号墳（112）、堀２号墳など形骸化した同様の石室を持つ古墳が造られる。首長墳にも横穴式石室が採用され、床面に仕切石によってコ字形の屍床が設けられている全長約 40ｍの前方後円墳である向山６号墳（88）、切石を用いた大型の横穴式石室に石屋形を設けている三明寺古墳（92）、径約 35ｍの円墳と推測され奥壁・両側壁・天井とも精美な切石を組み合わせた横穴式石室を持つ福庭古墳がある。横穴式石室を内包する古墳群には、郊家平古墳群（７）、向山古墳群（89）、養水古墳群（90）、上神古墳群（24）などがある。このうち、上神 48 号墳は全長約 34ｍの前方後円墳であるが、横穴式石室玄室奥壁に木・鳥・家屋等の線刻画が描かれている。また、全長約 29ｍの前方後円墳である野口１号墳からは、装飾子持壺付装飾器台や七連坏付装飾器台を含む多量の須恵器、上野遺跡（86）では 25 個体の子持壺形須恵器・脚付子持壺形須恵器、谷畑遺跡（21）からは人形・動物形・鏡形土製品などの多様な祭祀遺物が大量に出土しており、いずれの出土遺物も国指定重要文化財となっている。クズマ遺跡からもミニチュア土器や馬形・短甲形・盾形などの動物形・器材形土製祭祀遺物、装飾須恵器が出土している。隣接するイガミ松遺跡からも 200 点近い土製祭祀遺物が出土している。この時期の集落には、西山遺跡、桜木遺跡などがあるが調査例は少ない。なお、鳥越山窯跡群から４基の須恵器窯が見つかっている。



第９図　伯耆国内の郡の想定位置図



第 10 図　久米郡内の郷の想定位置図

【飛鳥・奈良時代】

古代の倉吉市域は、『延喜式』によれば６郡で構成される伯耆国に属し、そのうち河村郡・久米郡の一部がその領域となる。奈良時代になると久米郡に伯耆国庁（71）や伯耆国分寺（70）、伯耆国分尼寺（法華寺畑遺跡）（67）が相次いで造られ、伯耆国の中心地であったことがわかる。伯耆国庁はこれまでの発掘調査によって四時期の変遷が確認されている。伯耆国分尼寺（法華寺畑遺跡）は、当初は官衙であったが、後に国分尼寺に転用された可能性も指摘されており議論となっている。また、近接して位置する不入岡遺跡からは大規模な掘立柱建物群が発見されており、官衙から倉庫群へと建替えられて、伯耆国直轄の税の集積施設になったと考えられている。

倉吉市域には、伯耆国分寺や国分尼寺以外にも古代寺院が建立されている。白鳳時代に創建された大御堂廃寺跡（95）は、観世音寺式の伽藍配置をもつ山陰最大級の寺院跡で、瓦類や土器類をはじめ金属製品・木製祭祀具など豊富な遺物が出土している。出土した墨書土器により「久米寺」と呼称されていたと推定される。大原廃寺跡は変則的な法起寺式の伽藍配置で、白鳳期の寺院跡では山陰最大級の塔心礎が出土している。奈良時代の寺院跡では、塔心礎と金堂跡と思われる基壇が残り四天王寺式の伽藍配置と推定される石塚廃寺跡（132）、伽藍配置は不明ながら塔心礎等が見つかっている藤井谷廃寺跡が存在する。この時期の集落には国分寺北遺跡（72）、嶋ノ掛遺跡（81）、向野遺跡、国府跡西側遺跡群（横田矢戸遺跡）、擲塚遺跡、平ル林遺跡（49）、西前遺跡、小鴨道祖神遺跡、観音堂遺跡などがあり、竪穴建物と掘立柱建物から構成されている。このうち、国分寺北遺跡・島ノ掛遺跡では、規則的な建物配置が認められることから、国庁に関連する施設の可能性が指摘されている。また、観音堂遺跡では短期間に計32棟の掘立柱建物が４期に渡って変遷していることが明らかになっている。なお、河原毛田遺跡（73）では約15ｍの間隔で平行する溝が見つかっており、古代山陰道の可能性が指摘されている他、向野遺跡でも道路遺構が検出されている。また、大鴨遺跡からも波板状凹凸面を持つ道路遺構が検出されている。

この他、長谷遺跡では板石で囲んだ石槨内に土師器製蔵骨器２基に男女の火葬骨を納めた火葬墓が見つかっており、律令官人との関連が想定されている。また、下古川上通リ遺跡からは、一括廃棄されたと推定される多数の土師器供膳具、墨書土器や緑釉陶器などが見つかっている。

古代の生産遺跡として特筆されるものに勝負谷製鉄遺跡があり、長さ 2.8m、幅 0.5mの製鉄炉（長方形箱形炉）１基が検出されている。

【平安時代】

四王寺山山頂には貞観 9(867) 年に海賊調伏のため四天王像を安置したと伝わる四王寺跡（17）が存在する。浄土信仰の一因に末法思想が知られるが、それに伴い経塚が全国各地で造営される。大日寺経塚では、延久３（1071）年と刻まれた瓦経が出土している。また、大日寺遺跡群では礎石建物や階段跡及び道路跡及び整地層などが検出され、多くの寺坊を有した大規模な寺院であったことが指摘されている。

集落遺跡には、向野遺跡、宮ノ下遺跡（69）、擲塚遺跡、ドウ々平遺跡（102）などがあり、９世紀代の竪穴建物、土坑とともに 11 ～ 13 世紀の遺物が、山ノ下遺跡（130）では 11 ～ 12 世紀の大型掘立柱建物が出土している。打塚遺跡（65）からは 12 世紀代の墳丘を持つ墳墓が出土している。

【鎌倉・室町時代】

鎌倉時代には、伯耆国庁の在庁官人と考えられる小鴨氏が、岩倉城を居城として一帯に勢力を拡げ、後に尼子氏や毛利氏の侵攻を受けて城の争奪戦を繰り広げた。発掘調査は未実施であるが、郭、土塁、堀切等が確認されている。岩倉城の出城で小鴨氏の家臣である岡田某氏が拠ったとされるのが市場城（129）で、空堀や土塁がよく残っている。

市場城に近接する山ノ下遺跡では 13 世紀の集落が見つかっているほか、山ノ下遺跡の南西約 430mに位置する平ノ前遺跡（131）においても同時期の掘立柱建物２棟が検出されている。今倉遺跡（82）からは、15・16 世紀ごろと考えられる掘立柱建物が 27 棟確認されている。

室町時代初期には、伯耆守護職にあった石橋氏から代わった山名氏が、田内城（91）と打吹城（96）を居城としながら守護大名へ発展していった。その後尼子氏と南条氏が台頭するまで山名氏が隆盛を誇り、倉吉市域には、山名寺や大岳院など山名氏に関わる旧跡が現在も残っている。山名氏関連遺跡（94）として、大岳院開山当時に比定される上層遺構群、伯耆守護所に関連する下層遺構群が、良好な遺物を伴って検出されている。平安時代後期以降には、浄土教信仰が普及し浄土の様子を現世に再現しようとした寺院の造営が行われるようになり、倉吉市域でも小鴨川の支流である広瀬川上流域に広瀬廃寺跡が建立される。池の周囲に礎石建物を配置した「臨池伽藍」で、極楽浄土を表現したと考えられている。また、小鴨道祖神遺跡では火葬骨を埋納した中世墓や溝で区画した墓、不入岡遺跡では中世の墳墓群、大日寺古墓群には文永 2(1265) 銘の刻まれたものを含む五輪塔群や一石五輪塔などが存在する。福本家ノ上古墓からは埋葬施設に石槨を有した木棺の土葬墓が検出されている。

石造物としては、不入岡遺跡には永和元 (1375) 年の年号が刻まれた石仏が、会下谷には永禄八 (1565) 年の年号が刻まれた宝篋印塔が残されている。曽谷埋納銭出土地からは備前焼に納められた 3,300 枚以上の銭貨が見つかっている。

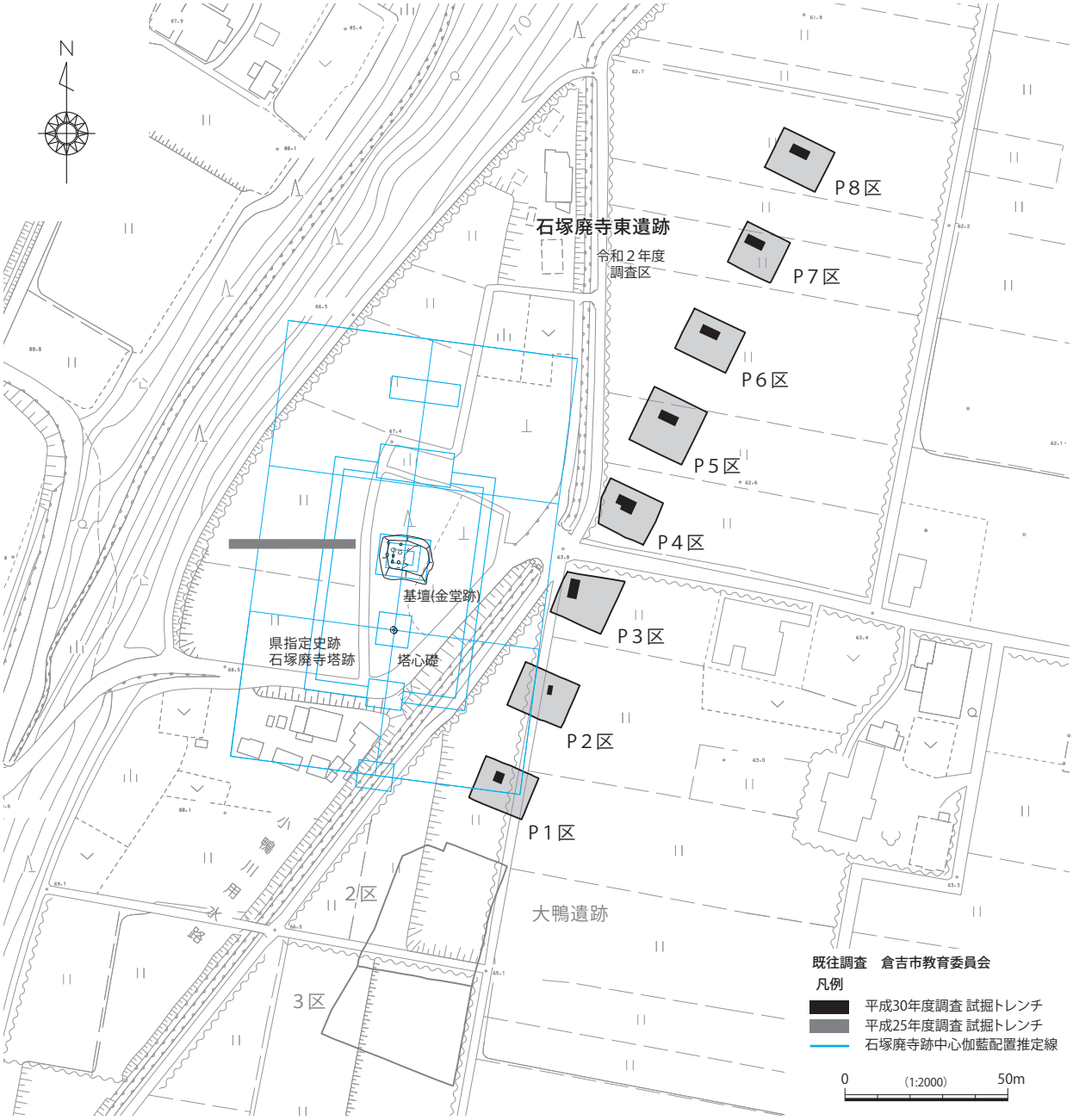
【安土桃山時代】

安土桃山時代においても、戦乱に関わる遺跡が知られている。今倉城（83）は、天正７年（1579）吉川元春によって築城された小鴨城に対する向城といわれ、土塁・堀跡がよく残っている。

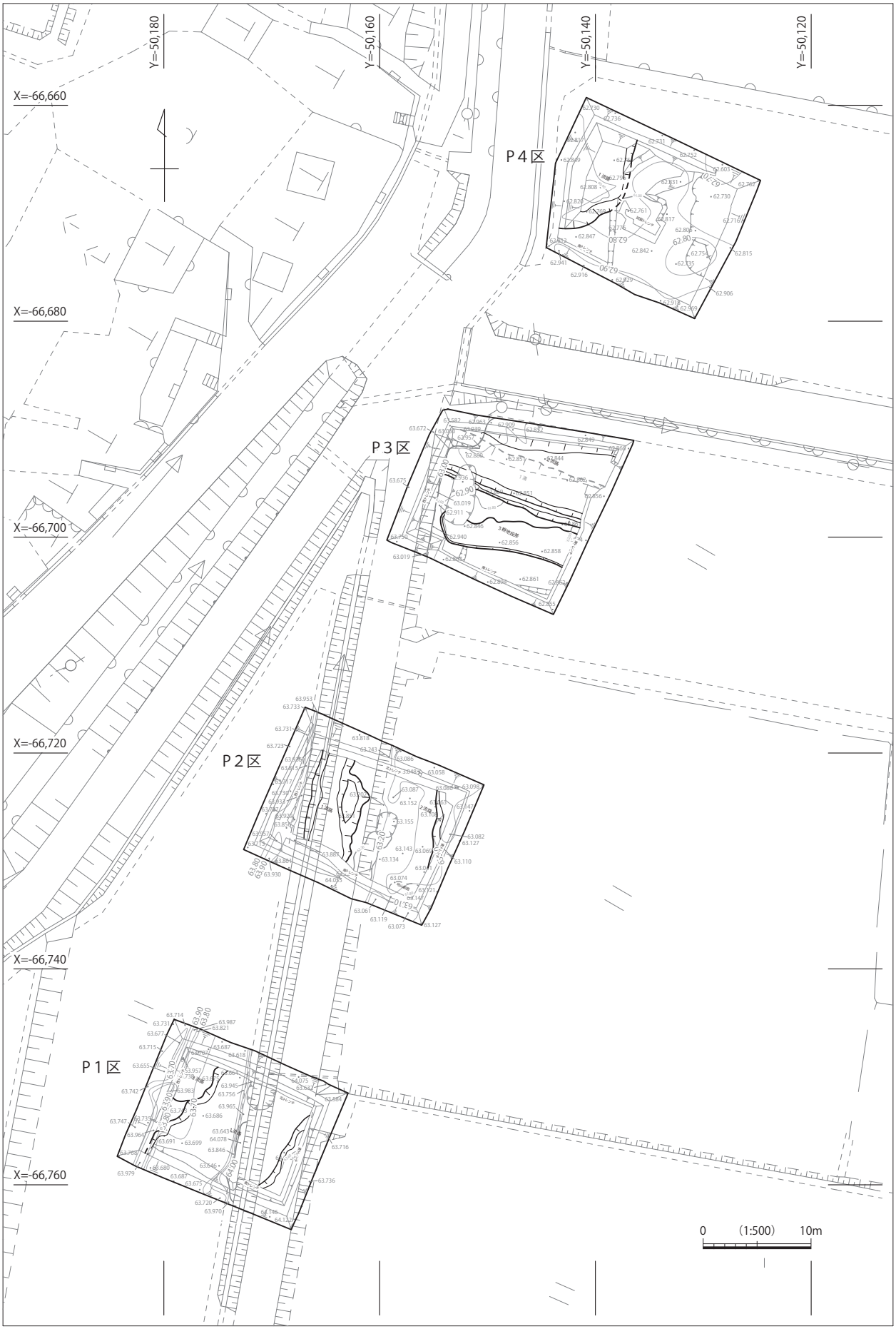
第３章　石塚廃寺東遺跡の調査成果

第１節　概要

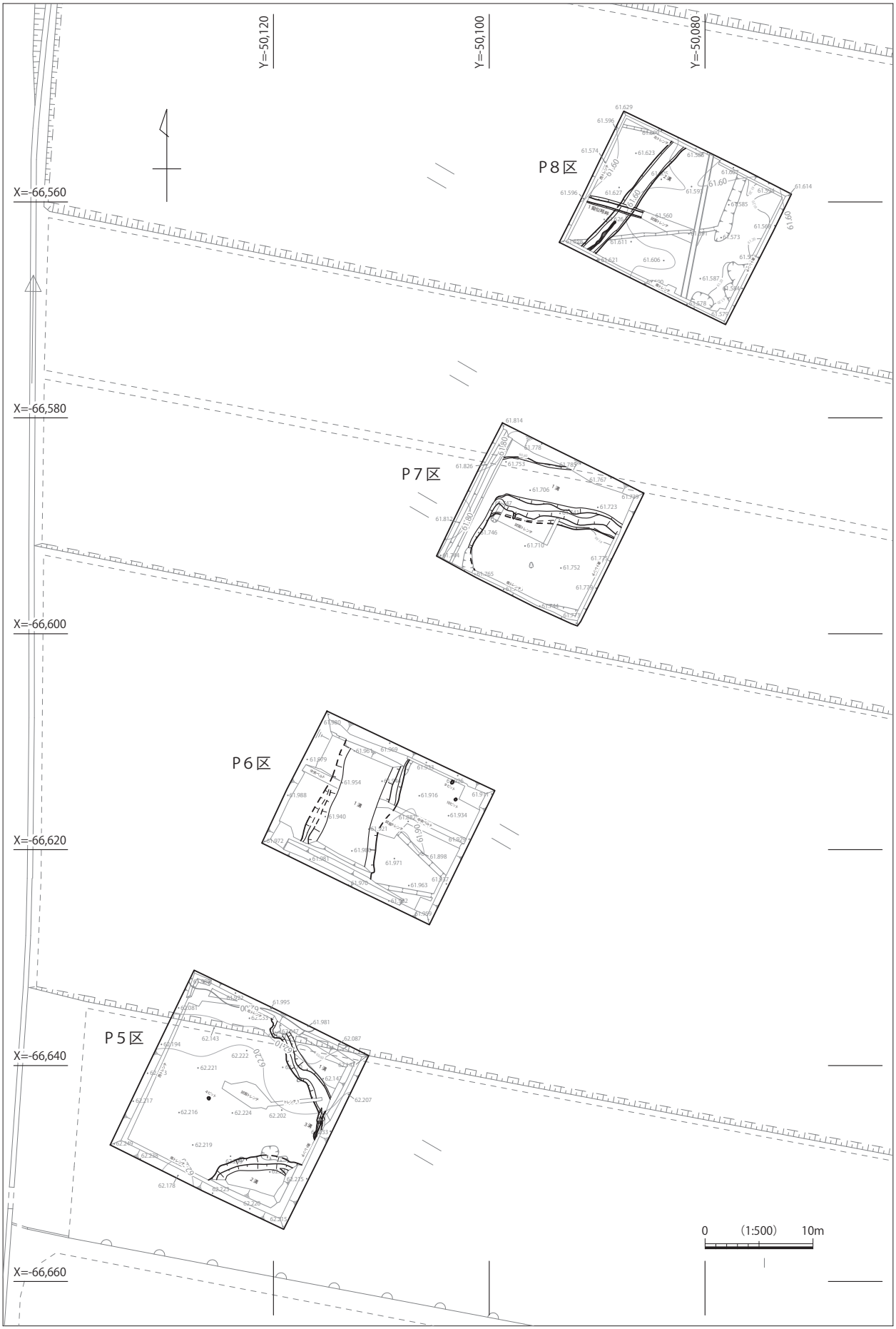
石塚廃寺東遺跡は、天神野台地から東に延びる手指状の小丘陵による微地形とその裾を流れていた自然流路による土砂の供給によって、遺跡内の堆積は一様でない。遺跡は県史跡石塚廃寺塔跡の東に隣接し、令和２年度に南端にあたるＰ１区と、ここから約200m北に位置するＰ８区までの８地点の調査を行った。調査は、橋脚が建設されるＰ１～８区の８箇所の調査区が設定されており、このうち、Ｐ１～３区とＰ４～８区の２工区に分けて、並行して調査を進めた。調査区の調査順については、道



第 11 図　調査区周辺の地形と既往調査



第 12 図　Ｐ１区～Ｐ４区位置図



第 13 図　Ｐ５区～Ｐ８区位置図

路工事の関係上北側から調査を実施してほしいとの要望があったため、Ｐ１～３区についても、北側に位置するＰ３区から調査に着手し、Ｐ２区そしてＰ１区へと順次調査を実施していった。

Ｐ１～６区では流路の調査が行われ、少なくとも縄文時代から中世に至るまで蛇行しながら天神野台地の崖下に沿って流れていることが明らかとなった。この流路は、本遺跡から北東方向約２kmに位置する平ノ前遺跡で確認された流路に繋がるものと推定される[1) 2)]。流路は出土土器や放射性炭素年代測定から、少なくとも縄文時代にはすでに機能しており、鎌倉時代には埋没したものと考えられる。なお、Ｐ７・８区では流路は検出されず、Ｐ６区より北で恐らく西側に屈曲して流下しているものと推定する。なお、Ｐ７区では奈良時代の掘立柱建物１棟、鎌倉時代の掘立柱建物１棟、Ｐ８区では奈良時代以降の溝１条が検出されている。

【註】

１）公益財団法人鳥取県教育文化財団 2018『山ノ下遺跡・平ノ前遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書 120

２）公益財団法人鳥取県教育文化財団 2021『山ノ下遺跡Ⅱ・平ノ前遺跡Ⅱ』鳥取県教育文化財団調査報告書 122

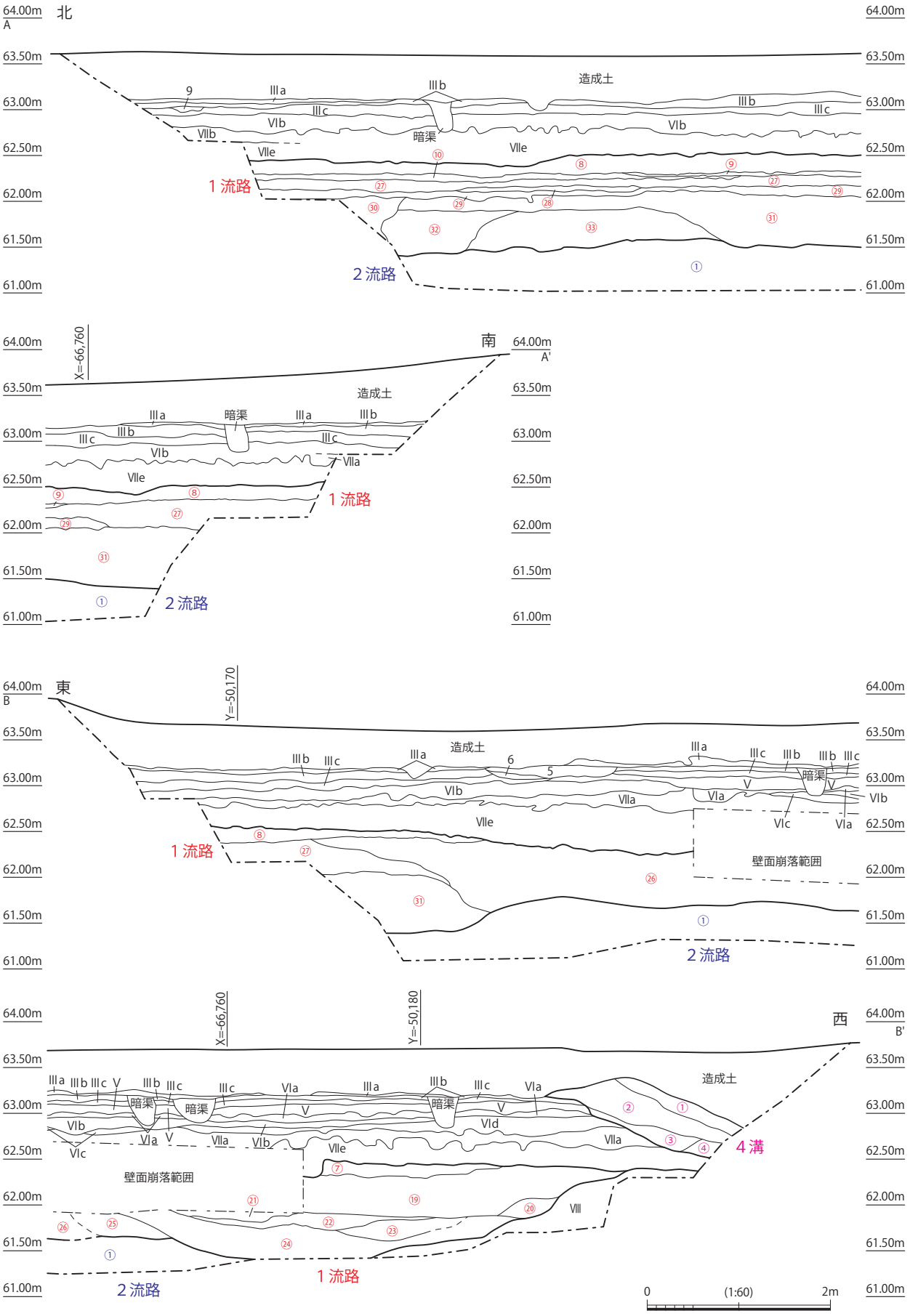
第２節　Ｐ１区の調査

第１項　概要と基本層序

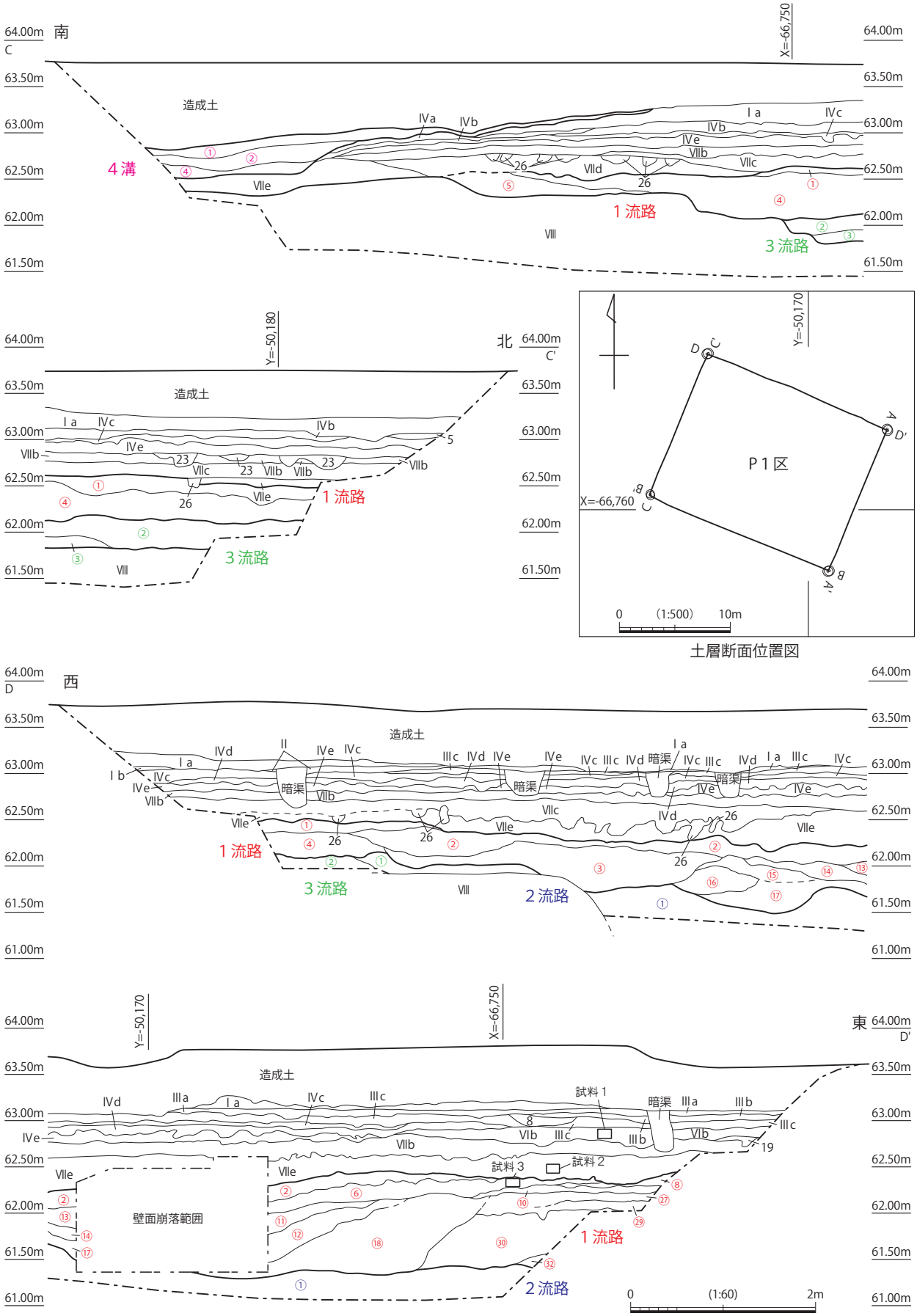
Ｐ１区は、石塚廃寺跡の塔心礎から南東へ約50ｍに位置し、現況は水田および農道である。水田面との比高差は約３ｍである。東および北に向けて緩やかに下降することが想定される旧地形は、圃場整備による削平を受けているが、造成土の堆積は厚くない。ただし、どの程度の削平を受けているのかは明確ではない。

Ｐ１区の調査は重機を用いて耕作土および造成土の掘削・除去を実施した後、Ｐ２区で確認した１流路の検出面を第１遺構面とした。重機による掘削にあたっては、調査区中心近くに位置した倉吉市教育委員会による試掘トレンチの再掘削を行い、その断面を確認しながら掘削を実施した。重機による掘削の終了後には、調査区の四周壁面脇に人力で排水溝トレンチを掘削し、その断面の観察を行いながら第１遺構面までの掘り下げ・検出を行った。排水溝トレンチの掘削の結果、調査区南西隅には基盤層となるソフトロームが存在していることが判明したが、それ以外の部分については下層が流路であり、Ｐ２区で確認した１流路に繋がることが想定された。Ｐ２区の１流路は、調査の結果、遺物の包含は希薄であったので、第１遺構面の検出・測量が完了した後、改めて重機により流路埋土の掘削を行った。流路埋土は、上層には粘質土の堆積層も存在したが、下層はほぼ砂礫層であり、人力による掘り下げは極めて困難な状態であった。また､流路による礫の堆積層はより下層に続いているが、礫径が比較的大きなものになるという堆積層の変化があったことから、無遺物の河川堆積層を希薄ながら遺物を包含する堆積層が切っていると判断し、遺物を包含する堆積層を掘削対象として、それ以下の遺物を含まないと判断した堆積については掘削を行わないことにした。なお、北・南壁の中央付近については、調査途中に崩落したために十分な断面観察が行えていない。

なお、北壁のⅥｂ層・Ⅶｅ層及び１流路⑥層で採取した土壌サンプル（試料１～３）の自然科学分析（第５章第１節）の結果、Ⅵｂ層・Ⅶｅ層では植物珪酸体が高い密度で検出されたことから稲



第 14 図　調査区東壁・南壁土層断面図



第 15 図　調査区西壁・北壁土層断面図、土層断面位置図

作が行われていた可能性が高く、水田として継続的に利用されてきたことが想定される。また、１流路⑥層からも比較的高い密度で植物珪酸体が検出されており、１流路がほぼ埋没して水の動きが少ない湿地的な環境にある段階に、近辺で稲作が営まれていたことが想定される。

基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ　層　造成土下の調査区西・南壁で確認された灰黄褐色の砂～細粒砂混じりシルト層で、圃場整備前の耕作土に由来する堆積。Ⅰａ層、Ⅰｂ層の２層に分けられる。

Ⅱ　層　調査区北壁で確認された褐灰色シルト混じり細砂～砂の堆積。

Ⅲ　層　調査区北・東・南壁で確認された黄灰色～暗灰黄色のシルト混じり細砂ないし細砂混じりシルトで構成される堆積。Ⅲａ層、Ⅲｂ層、Ⅲｃ層の３層に分けられる。

Ⅳ　層　調査区北・西壁で確認された灰色～暗灰黄色のシルト混じり細砂ないし細砂混じりシルトで構成される堆積。Ⅳａ層、Ⅳｂ層、Ⅳｃ層、Ⅳｄ層、Ⅳｅ層の５層に分けられる。

基本層序
Ⅰa 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト (φ0.2～0.5cm粗砂混) (旧耕作土)
Ⅰb 10YR4/2 灰黄褐色 砂～細砂混じりシルト (φ0.2～0.5cm粗砂多混　炭化物小片少混)
Ⅱ　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂～砂
Ⅲa 10YR5/2 灰黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト (旧耕作土)
5　10YR5/2 灰黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト (炭小片多混)
6　10YR5/2 灰黄褐色 細砂～砂混じりシルト (5Y5/1 灰色 細砂混じりシルト小ブロック少混　炭小片極少混)
Ⅲb 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト混じり細砂～粗砂
8　10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト (5Y6/2 灰オリーブ色 シルト混じり細砂小ブロック少混)
9　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂
Ⅲc 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混じり細砂 (5Y7/2 灰白色 細砂小ブロック極少混)
Ⅳa 5Y4/1 灰色 細砂混じりシルト
Ⅳb 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト混じり細砂
Ⅳc 2.5Y5/1 黄灰色 シルト混じり細砂 (10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルトブロック少混　5Y7/2 灰白色 シルト混じり細砂小ブロック混)
Ⅳd 5Y4/1 灰色 細砂混じりシルト (10YR6/1 褐灰色 シルト混じり細砂ブロック混　10YR 7/2 にぶい黄橙色 細砂マーブル状少混)
Ⅳe 5Y4/1 灰色 砂混じりシルト (踏み込みによる2.5Y5/1 黄灰色 シルト混じり細砂マーブル状混　5Y5/2 灰オリーブ色 砂～細砂小ブロック少混　雲母小片混)
Ⅴ　10YR5/1 褐灰色 細砂混じりシルト (10YR7/2 にぶい黄橙色 細砂マーブル状混)(踏み込み痕)
Ⅵa 5Y4/1 灰色 シルト混じり細砂～粗砂 (10YR5/3 にぶい黄褐色 砂～粗砂小ブロック少混)
Ⅵb 5Y4/1 灰色 シルト混じり細砂～粗砂 (10YR5/3 にぶい黄褐色 粗砂～砂小ブロック多混)
19　10YR8/1 灰白色 粗砂～砂
Ⅵc 5Y4/1 灰色 シルト混じり細砂～粗砂 (10YR8/1 灰白色 砂～細砂層状混)
Ⅵd 5Y4/1 灰色 シルト混じり細砂～粗砂 (10YR5/1 褐灰色 粗砂～砂層状及びブロック状多混)
Ⅶa 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト混じり細砂～粗砂 (10YR3/1 黒褐色 シルトブロック混　10YR7/1 灰白色 砂～粗砂小ブロック少混　植物小片少混)
23　10YR 3/1 黒褐色 砂～細砂混じりシルト
Ⅶb 5Y3/1 オリーブ黒色 砂～細砂混じりシルト (雲母小片混)
Ⅶc 10YR 3/1 黒褐色 砂混じりシルト (10YR6/2 灰黄褐色 砂小ブロック少混)
26　10YR 6/1 褐灰色 シルト混じり粗砂 (上部からの踏み込み)
Ⅶd 10YR 3/1 黒褐色 シルト (10YR5/2 灰黄褐色 粗砂ブロック混(踏み込みか?)　10YR 7/1 灰白色 細砂マーブル状混)
Ⅶe 10YR 3/1 黒褐色 シルト (炭化物小片少混)
Ⅷ　10YR 6/4 にぶい黄橙色 細砂混じりシルト（ソフトローム）

１流路
①　10YR3/1 黒褐色 シルト (φ0.2～0.4cm粗砂混)
②　10YR3/1 黒褐色 極少細砂混じりシルト (10YR6/1 褐灰色 砂層状極少混　炭化物小片少混　植物片少混)
③　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 と 10YR5/1 褐灰色 砂との互層 (φ0.2～0.6cm粗砂ブロック混)
④　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR5/1 褐灰色 砂層状混　植物片混)
⑤　10YR3/1 黒褐色 極少細砂混じりシルト (10YR6/3 にぶい黄橙色 シルト小ブロック少混　炭化物小片少混)
⑥　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR3/2 黒褐色 細砂小ブロック少混)
⑦　10YR2/1 黒色 粗砂～砂混じりシルト (10YR5/1 褐灰色 砂～粗砂小ブロック混)
⑧　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂
⑨　10YR5/1 褐灰色 細砂～砂
⑩　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂 (10YR6/1 褐灰色 細砂がマーブル状極少混)
⑪　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂 (10YR5/2 灰黄褐色 細砂～砂小ブロック少混)
⑫　10YR3/1 黒褐色 シルト～細砂 (10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂マーブル状混　炭化物小片少混)
⑬　10YR3/1 黒褐色 極少細砂混じりシルト (植物小片少混)
⑭　10YR4/1 褐灰色 細砂混じりシルト (10YR6/2 灰黄褐色 細砂小ブロック極少混)
⑮　10YR3/1 黒褐色 極少シルト混じり粗砂
⑯　10YR2/1 黒色 砂混じりシルト (炭化物小片少混)
⑰　10YR4/1 褐灰色 細砂 と 10YR5/1褐灰色 砂との互層
⑱　10YR5/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂 (10YR7/2 にぶい黄橙色 細砂小ブロック少混)
⑲　10YR2/1 黒色 シルト (10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂小ブロック少混)
⑳　10YR5/1 褐灰色 砂 (10YR4/1 褐灰色 細砂混じりシルトマーブル状混)
㉑　10YR4/1 褐灰色 細砂～砂混じりシルト
㉒　10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト (10YR6/1 褐灰色 細砂ブロック極少混　植物片混)
㉓　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり砂～細砂 (10YR3/1 黒褐色 シルトブロック混)
㉔　10YR4/1 褐灰色 極少シルト混じり細砂 (10YR7/1 灰白色 砂～粗砂ブロック混)
㉕　5Y6/1 灰色 砂～粗砂 (φ1～2cm礫少混)
㉖　10YR5/1 褐灰色 細砂 (10YR7/1 灰白色 細砂マーブル状少混　10YR6/1 褐灰色 砂～粗砂大ブロック混)
㉗　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂～砂 (10YR6/1 褐灰色 細砂マーブル状混)
㉘　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂
㉙　10YR4/1 褐灰色 細砂 (10YR6/1 褐灰色 細砂小ブロック混)
㉚　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR5/1 褐灰色 砂～粗砂層状少混　炭化物小片少混　植物片少混)
㉛　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり砂～細砂 (10YR2/1 黒色 細砂混じりシルトマーブル状混　10YR6/1 褐色 細砂マーブル状極少混)
㉜　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト と 10YR5/1 褐灰色 細砂との混合土(マーブル状)
㉝　10YR2/1 黒色 極少細砂混じりシルト と 10YR5/1 褐灰色 砂との互層 (植物片多混)

２流路
①　10YR5/1 褐灰色 粗砂～砂 (φ1～20cm礫極多混)

３流路
①　10YR5/2 灰黄褐色 砂～粗砂 (10YR3/1 黒褐色 シルト混じり砂層状混)
②　10YR5/1 褐灰色 砂～粗砂 (φ1～6cm礫混)
③　10YR1.7/1 黒色 シルト しまり弱

４溝
①　10YR3/2 黒褐色 シルト (植物片少混) (現代溝流入土)
②　10YR3/2 黒褐色 極少細砂混じりシルト (植物片多混) (溝肩部の表土か)
③　5Y4/1 灰色 砂混じりシルト (5G6/1 緑灰色 シルト混じり細砂ブロック少混) (Ⅲa層の崩落による流れ込み)
④　10YR4/1 褐灰色 砂混じりシルト (φ2～10cm礫多混)

調査区壁面土層土色注記

Ⅴ　層　　調査区南壁で確認された褐灰色細砂混じりシルトの堆積。

Ⅵ　層　　調査区北・東・南壁で確認された灰色シルト混じり細砂の堆積。Ⅵａ層、Ⅵｂ層、Ⅵｃ層、Ⅵｄ層の４層に分けられる。

Ⅶ　層　　調査区北・東・西・南の各壁で確認された黒褐色～オリーブ黒色のシルト混じり細砂またはシルトの堆積。Ⅶａ層、Ⅶｂ層、Ⅶｃ層、Ⅶｄ層、Ⅶｅ層の５層に分けられる。

Ⅷ　層　　調査区北・西・南壁で確認された黄橙色シルトのソフトロームで、遺跡の基盤層。

第２項　検出した遺構と遺物

１流路（第 16 ～ 18 図、第４・13・17・23 表、図版 23）

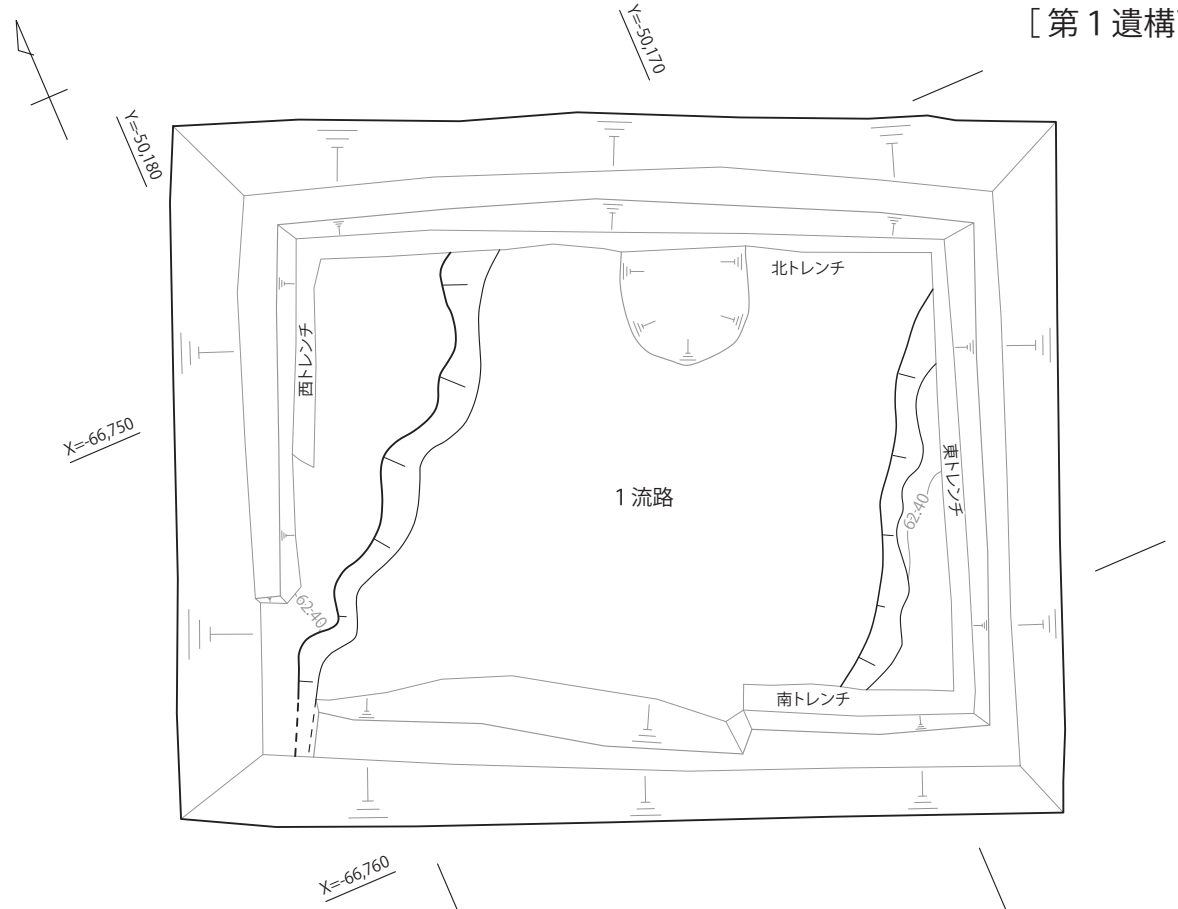
Ⅶ層下面で検出した自然流路である。調査区西側には遺跡の基盤層となるⅧ層のソフトロームによる流路西側端部（流路肩部）が存在し、北・南壁には立ち上がりが確認できる。ただし、流路は開削・浸食と埋没を繰り返していたと考えられ、シルトおよび細砂が堆積層の主となる部分を１流路とした。下層には礫を主体とする２流路が存在する。なお、後述する３流路の上部を削平している。全体形は明確ではないが、地形から考えて、南から北方向へ流れていたと推定される。南・東壁面から検出した調査地内における規模は、長さ（南北方向）約 9.7m、幅（東西方向）約 13.4m、深さは最大で約 1.1m を測る。

埋土は①～㉝層を確認した。埋土は砂とシルトが混じるものが主体であり、下層には礫が多く混じるようになる。流路の堆積であるため、堆積と浸食が繰り返されており、基本的には流れが強かったようであるが、徐々に流れが弱くなって滞水するようになり、シルトの堆積が進んでいったことがわかる。

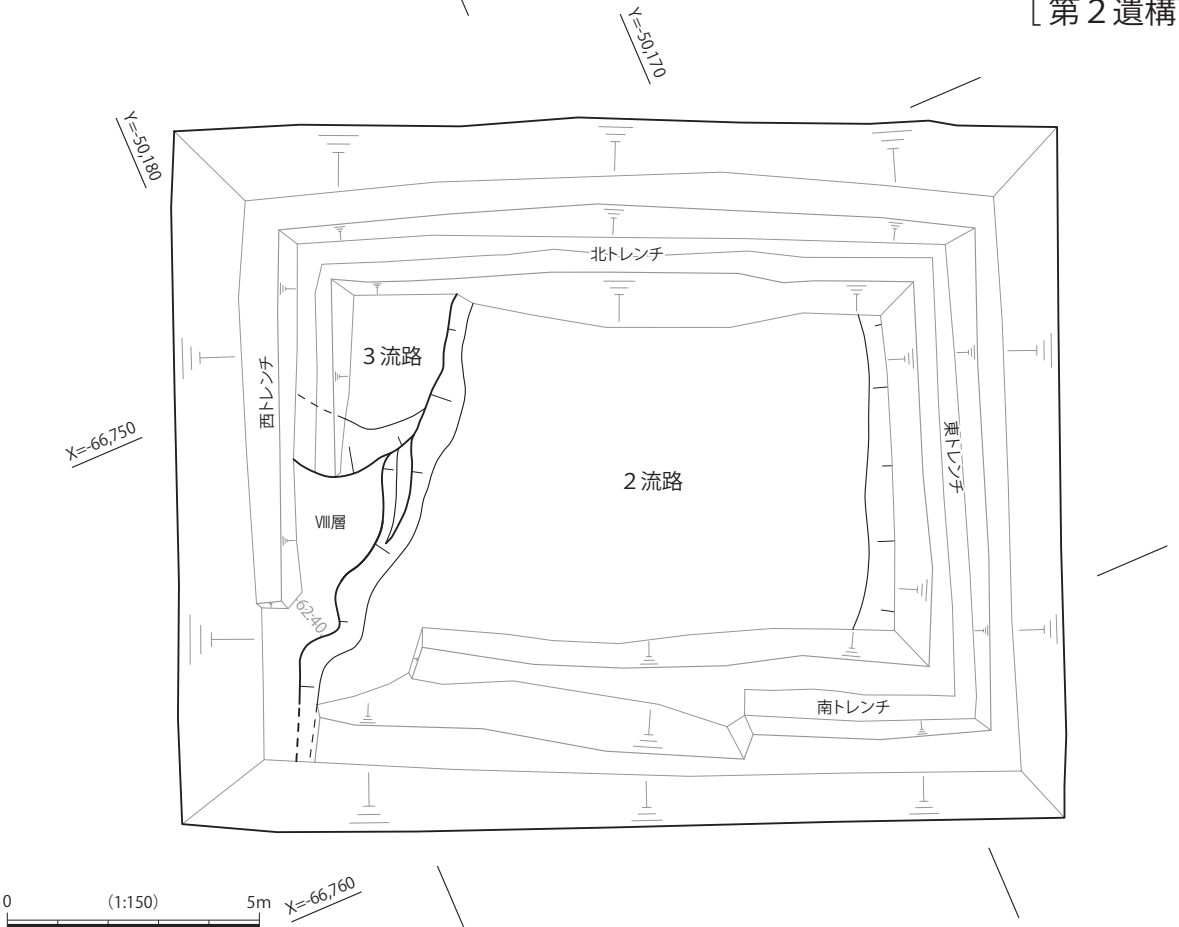
遺物の出土はわずかであるが、土師器や須恵器等が出土している。

Po１は複合口縁を持つ土師器であり、頸部以下が残っていないため明確ではないが甕であろう。口縁端部が短くほぼ直立する。Po３は口径が大きい土師器の坏である。底部はほぼ平坦で、体部から口縁部にかけてやや外反しながら外傾して立ち上がる。内外面が赤色塗彩されている。Po７は高台の付く土師器の皿または坏の底部である。高台内面に墨書が残されており、残存部分では「大」と読める。しかし、文字の下半は欠損しているため「奈」等の文字の一部の可能性も考えられる。体部内面は赤色塗彩されている。Po10 は須恵器の坏蓋である。口縁端部の内側には段が残るが、外面の口縁部と天井部の境には稜は無い。Po12 は須恵器の壺体部上半部分であろう。口頸部は欠失している。外面は平行タタキ後にカキ目が施され、内面には円形状の当て具痕が残る。瓦は３点を図化した。CP２は丸瓦である。径の小さい狭端側で、狭端面および左側端の一部が残ることから無段式の丸瓦と分かる。凸面はナデ調整、凹面には布目痕が残る。２次調整として左側面の凹面をわずかにヘラケズリしている。CP３は平瓦である。狭端側で、狭端面および右側端の一部が残る。凸面には丁寧なナデ調整が施され叩き目などは観察できない。凹面には布目痕が残るが、一部がナデ消される。２次調整として狭端面および右側面の凹面をヘラケズリしている。CP４は平瓦である。凸面には正方形の格子文叩き目が、凹面には模骨痕および布目痕が残る。広端面に２次調整は認められない。木器はＷ１の１点である。Ｗ１は曲物底板と考えられるもので、右半を欠損するが左辺の両隅を切断しており、本来は方形ないし長方形の四隅を切断した八角形であったと想定される。左辺には２箇所で紐

［第１遺構面］



［第２遺構面］



第 16 図　Ｐ １区全体図

綴じが行われており、ともに植物の樹皮による紐が残されている。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

２流路（第 16・17 図、第４・13 表、図版 24）

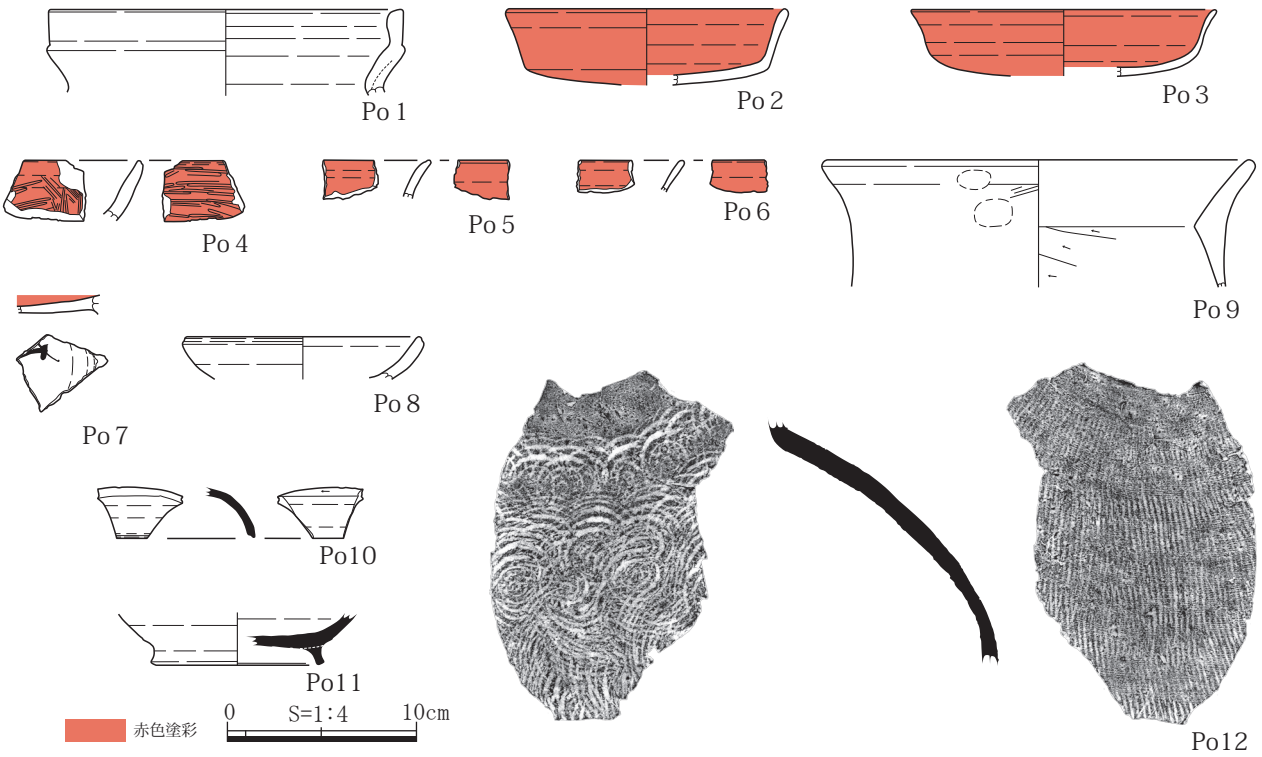
１流路の下面で検出した自然流路である。１流路と同じく、調査区西側には遺跡の基盤層となるⅧ層のソフトロームによる流路西側端部（流路肩部）が存在し、北壁に立ち上がりが確認できる。２流路と１流路は一つの流路の時期差と捉えるべきとも考えたが、２流路は礫を主体とする流路堆積であることから流れの激しい流路であったことが想定されるのに対し、１流路はシルトおよび細砂が堆積の主体であることから流れが緩やかか滞水していたことが想定されることから別遺構とした。なお、下層にはさらに流路堆積が存在しているが、トレンチ掘削によって無遺物層と判断し、これ以上の掘削は行っていない。

全体形は明確ではないが、地形から考えて、南から北方向へ流れていたと推定される。北・東壁面から検出した調査地内における規模は、長さ（南北方向）約 6.3m、幅（東西方向）約 8.3m、深さは約 0.6mを測る。ただし、２流路と下層の流路堆積の境界を明確に分けることができなかったため、壁面の土層断面図に２流路の下端線を明示できていない。

遺物の出土はわずかであるが、土師器や須恵器等が出土している。

Po２は口径が大きい土師器の坏である。底部はほぼ平坦で、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾して立ち上がる。内外面が赤色塗彩されている。Po11 は須恵器で、高台を持つ底部。欠損部が多く明確ではないが坏であろう。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。



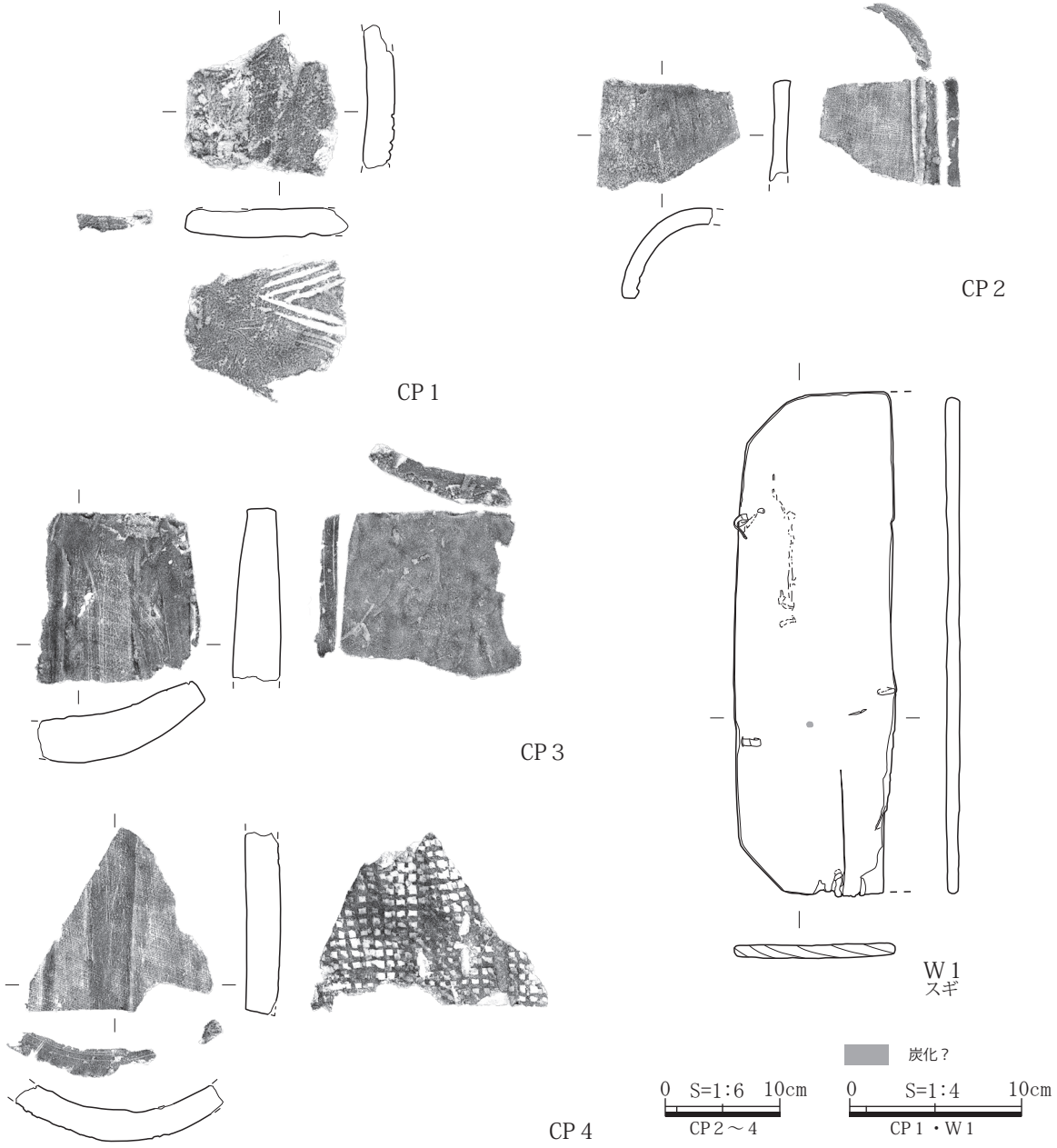
第 17 図　Ｐ１区出土土器

３流路（第 16 図、第４表、図版３）

調査区北西隅で検出した自然流路である。調査区西側に存在する基盤層となるⅧ層のソフトロームを開削して形成されている。西壁に流路西側端部（流路肩部）が存在し、西壁に立ち上がりが確認できる。なお、上部を１流路に浸食されている。全体形は明確ではないが、東西方向に主軸をとっており、地形から考えて西から東方向へ流れていたことが想定される。壁面から検出した調査地内における規模は、長さ（東西方向）約 3.1m、幅（南北方向）約 3.7m、深さは最大で約 0.35m を測る。

埋土は①～③層を確認した。このうち、①・②層は砂～粗砂の層、③層はしまりの弱い黒色シルト層である。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、１流路の下に位置することから古代以前と考えられる。



第 18 図　Ｐ１区出土遺物

４溝（第 14・15 図、第４表）

調査区南西隅の壁面でのみ検出した溝であり、西壁南端から南壁西端にかけて存在する。当初はその性格の判断に躊躇したが、検討の結果Ｐ３区の１溝に繋がる遺構の東側肩部と判断した。調査区内には溝のごく一部が掛かっているだけのうえ、重機による表土剥ぎ時に調査地内の西側肩部を除去していたために規模等は明確ではないが､調査地内における復元した長さ（南北方向）約 7.6m ､幅（東西方向）約 1.5m、深さは最大で約 0.9m となる。埋土は①～④層に分層できる。いずれもシルトを主とする堆積であるが、下層の④層には多くの礫が含まれていた。南壁断面には東側から土が溝内に流れ込んでいる状況が明瞭に残されている。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から近現代と考えられる。

調査区内出土遺物（第 17・18 図、第 13・17 表、図版 24）

出土した遺物の内に、遺構を明確にすることができないが特徴のある遺物が存在するため、ここで記述する。

Po４～６は土師器の坏の口縁部と考えられるもので、いずれも内外面を赤色塗彩している。このうち、Po４は器壁が厚くてやや内湾して立ち上がる。Po５・６は器壁が薄く、Po６はほぼ直線的に立ち上がり、Po５は外反する。Po８は土師器の皿で、器壁がやや厚く内湾して立ち上がり、口縁端面には凹線状の低い段が作られている。内外面に赤色塗彩は認められない。Po９は土師器の甕で、口頸部が「く」の字状に屈曲する。

CP１は軒平瓦と考えられるもの。瓦当面は無文であるが、凸面に４条で構成されるＶ字状の沈線文が施される。凹面はナデ調整で、布目痕は認められない。２次調整として瓦当面の凸面をわずかにヘラケズリしている。軒平瓦Ⅲ類と考える。

【参考文献】

倉吉市教育委員会 2015『倉吉市内遺跡分布調査報告書 18』

写真３　Ｐ１区 表土掘削後段階確認（南東から）

写真４　Ｐ１区 作業風景（北西から）

第３節　Ｐ２区の調査

第１項　概要と基本層序

Ｐ２区は、石塚廃寺跡の塔心礎からほぼ東南東へ約40ｍに位置し、現況は水田および農道である。水田面との比高差は約３ｍである。東および北に向けて緩やかに下降することが想定される旧地形は、圃場整備による削平を受けているが、圃場整備によってどの程度の削平を受けているのかは明確ではない。

Ｐ２区の調査は重機を用いて耕作土および造成土の掘削・除去を実施した後、Ｐ３区で確認した２流路の検出面を第１遺構面とした。重機による掘削にあたっては、調査区中心近くに位置した倉吉市教育委員会による試掘トレンチの再掘削を行い、その断面を確認しながら掘削を実施した。重機による掘削の終了後には、調査区の四周壁面脇に人力で排水溝トレンチを掘削し、その断面の観察を行いながら第１遺構面までの掘り下げ・検出を行った。排水溝トレンチの掘削により調査区南西隅および南東隅には基盤層となるソフトロームを確認したが、それ以外の部分については下層が流路であり、Ｐ３区で確認した２流路に繋がることが想定された。Ｐ２区の１流路は、調査の結果、遺物の包含は希薄であったので、第１遺構面の検出・測量が完了した後、改めて重機により流路埋土の掘削を行った。流路埋土は、上層には粘質土の堆積層も存在したが、下層はほぼ礫層であり、人力による掘り下げは極めて困難な状態であった。また、流路による礫の堆積層はより下層に続いているが、礫径が比較的大きいものに変化するという堆積層の変化があったことから、無遺物の流路堆積層を希薄ながら遺物を包含する堆積層が切っていると判断し、遺物を包含する堆積層を掘削対象として、それ以下の遺物を含まないと判断した堆積については掘削を行わないことにした。

なお、南壁のⅢ層・Ⅳｂ層及び１流路㊲層で採取した土壌サンプル（試料４～６）の自然科学分析（第５章第１節）の結果、Ｐ１区同様に、Ⅲ層・Ⅳｂ層では植物珪酸体が高い密度で検出されたことから稲作が行われていた可能性が高く、水田として継続的に利用されてきたことが想定される。また、１流路㊲層からも比較的高い密度で植物珪酸体が検出されており、１流路がほぼ埋没して水の動きが少ない湿地的な環境にある段階に、近辺で稲作が営まれていたことが想定される。

基本層序は以下のとおりである。

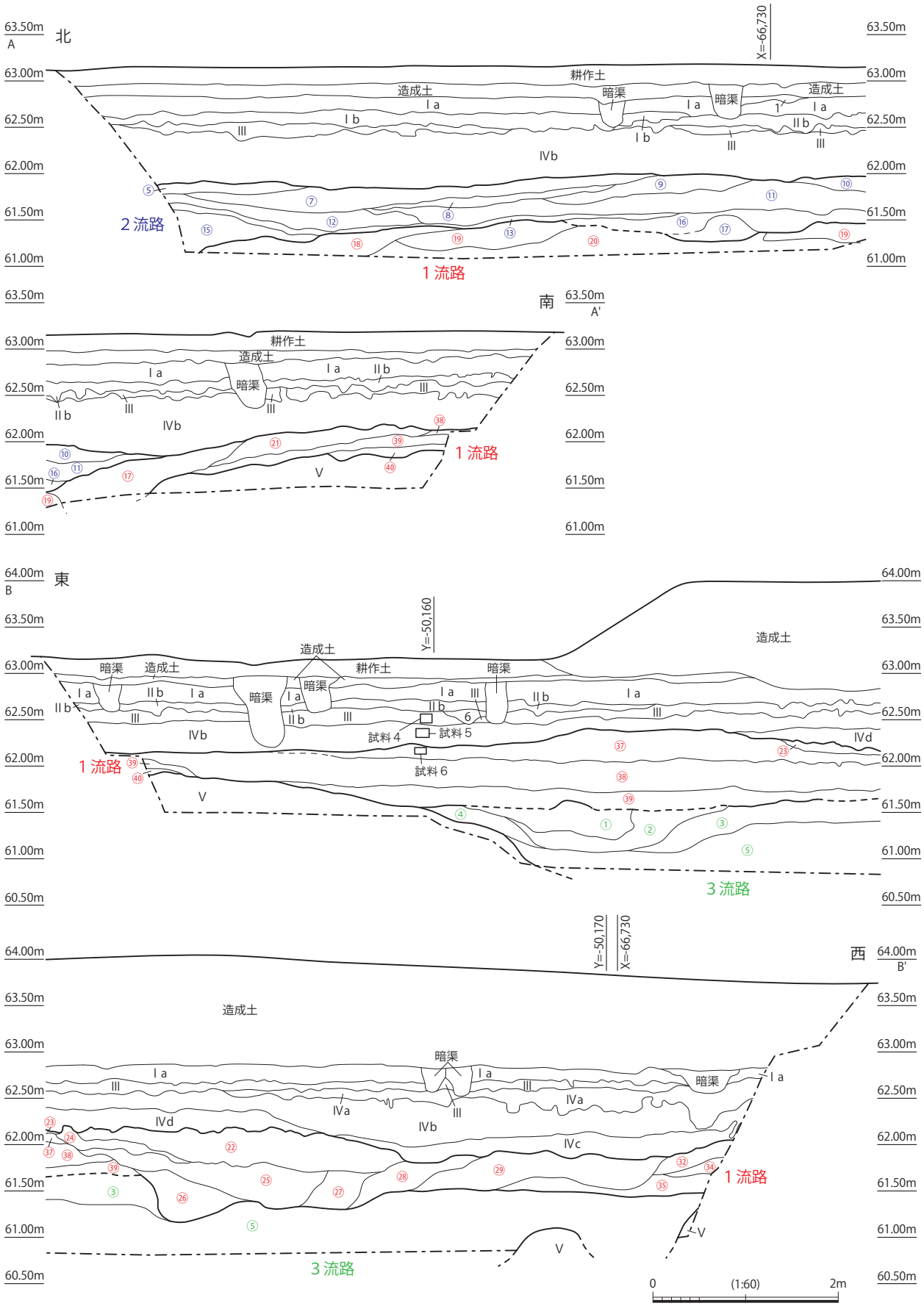
Ⅰ　層　調査区北・東・西・南壁の造成土直下で確認された暗灰黄色の砂混じりシルトの堆積。Ⅰａ層、Ⅰｂ層の２層に分けられる。

Ⅱ　層　調査区東・南壁で確認された黒褐色細砂混じりシルトの堆積。Ⅱａ層、Ⅱｂ層の２層に分けられる。

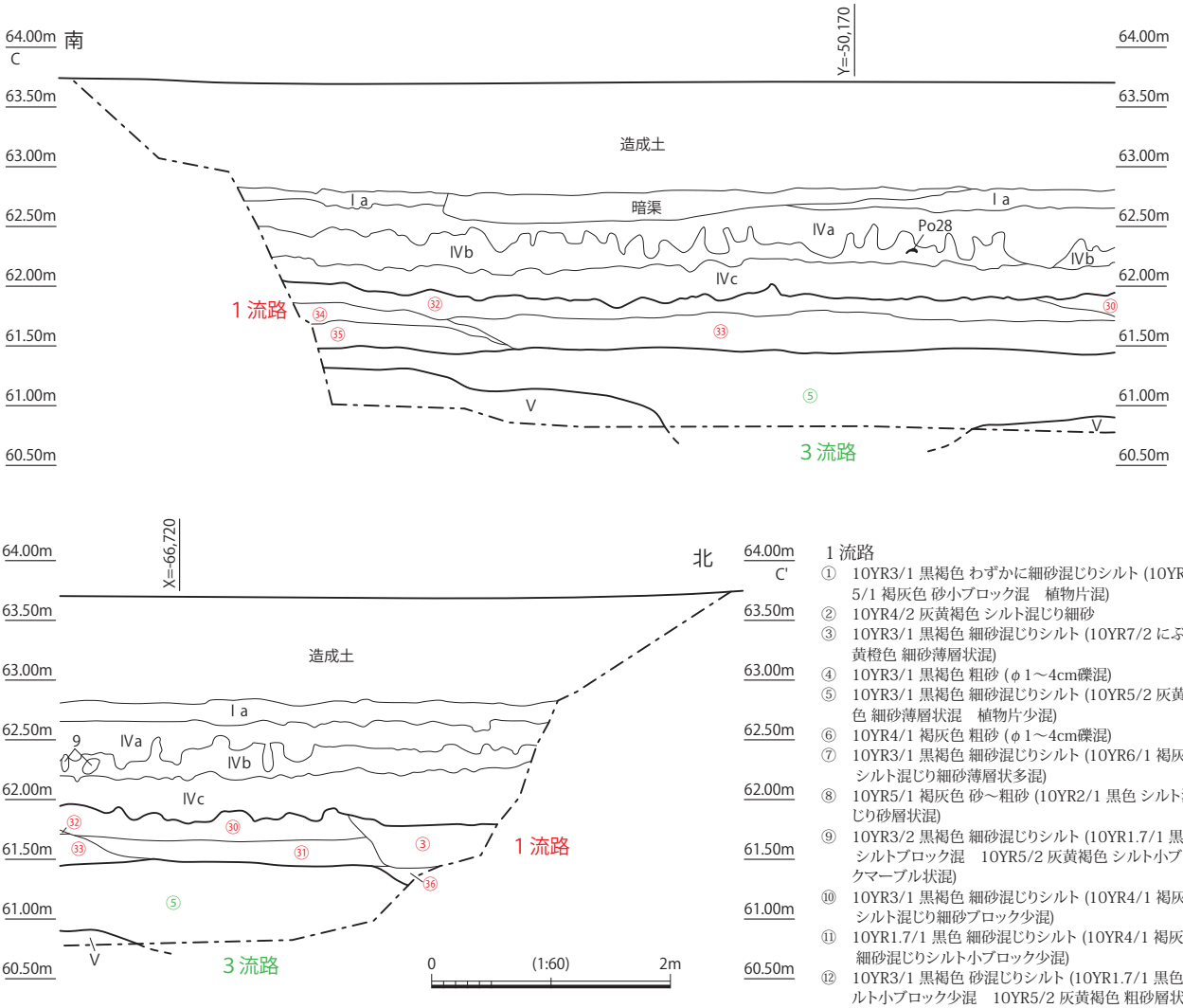
Ⅲ　層　調査区東・南壁で確認された褐灰色細砂混じりシルトの堆積。

Ⅳ　層　調査区北・東・西・南壁の全てに存在する黒褐色～黒色細砂混じりシルトの堆積。植物片を少量含む層もある。Ⅳａ層、Ⅳｂ層、Ⅳｃ層、Ⅳｄ層の４層に分けられる。

Ⅴ　層　調査区東・西・南壁で確認された黄橙色シルトのソフトロームで、遺跡の基盤層。



第 19 図　調査区東壁・南壁土層断面図



1 流路

① 10YR3/1 黒褐色 わずかに細砂混じりシルト (10YR 5/1 褐灰色 砂小ブロック混　植物片混)
② 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂
③ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR7/2 にぶい黄橙色 細砂薄層状混)
④ 10YR3/1 黒褐色 粗砂 (φ1～4cm礫混)
⑤ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR5/2 灰黄褐色 細砂薄層状混　植物片少混)
⑥ 10YR4/1 褐灰色 粗砂 (φ1～4cm礫混)
⑦ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR6/1 褐灰色 シルト混じり細砂薄層状多混)
⑧ 10YR5/1 褐灰色 砂～粗砂 (10YR2/1 黒色 シルト混じり砂層状混)
⑨ 10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 シルトブロック混　10YR5/2 灰黄褐色 シルト小ブロックマーブル状混)
⑩ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂ブロック少混)
⑪ 10YR1.7/1 黒色 細砂混じりシルト (10YR4/1 褐灰色 細砂混じりシルト小ブロック少混)
⑫ 10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 シルト小ブロック少混　10YR5/2 灰黄褐色 粗砂層状混)
⑬ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト と 10YR6/2 灰黄褐色 砂との薄い互層
⑭ 10YR2/1 黒色 砂混じりシルト (10YR4/1 褐灰色 シルト混じり砂小ブロック少混)
⑮ 10YR1.7/1 黒色 シルト
⑯ 10YR5/1 褐灰色 粗砂～砂
⑰ 10YR2/1 黒色 シルト (10YR4/2 灰黄褐色 粗砂ブロック少混)
⑱ 10YR4/1 褐灰色 粗砂 (10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト小ブロック少混)
⑲ 10YR1.7/1 黒色 砂混じりシルト
⑳ 10YR4/1 褐灰色 粗砂 (10YR2/1 黒色 シルト小ブロック混　φ15～20cm礫混)
㉑ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 シルトブロック混)
㉒ 10YR3/1 黒褐色 わずかに細砂混じりシルト (10YR5/2 灰黄褐色 シルト小ブロック少混)
㉓ 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト (10YR2/1 黒色 シルト小ブロック混)
㉔ 10YR3/2 黒褐色 シルト (10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト小ブロック少混)
㉕ 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト (10YR6/2 灰黄褐色 砂層状混)
㉖ 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂 (10YR2/1 黒色 シルト植物片多混層状混)
㉗ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 (10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂ブロック少混)
㉘ 10YR2/1 黒色 わずかに細砂混じりシルト (10YR4/2 灰黄褐色 砂～粗砂層状混)
㉙ 10YR6/2 灰黄褐色 砂 (10YR4/1 褐灰色 シルト混じり砂薄層状混)
㉚ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (植物片や枝等混)
㉛ 10YR7/2 にぶい黄橙色 細砂 と 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルトとの互層
㉜ 10YR3/1 黒褐色 わずかに細砂混じりシルト
㉝ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR8/2 灰白色 細砂小ブロック少混　植物片混)
㉞ 10YR3/1 黒褐色 わずかに細砂混じりシルト (10YR5/1 褐灰色 粗砂層状混)
㉟ 10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト (10YR4/1 褐灰色 砂～粗砂層状混)
㊱ 10YR5/1 褐灰色 砂～粗砂 (10YR2/1 黒色 シルト混じり砂層状混)
㊲ 10YR5/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂
㊳ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト
㊴ 10YR2/1 黒色 シルト (10YR4/1 褐灰色 砂～細砂薄層マーブル状混)
㊵ 10YR3/2 黒褐色 シルト (10YR5/3 にぶい黄橙色 細砂混じりシルト小ブロック少混)

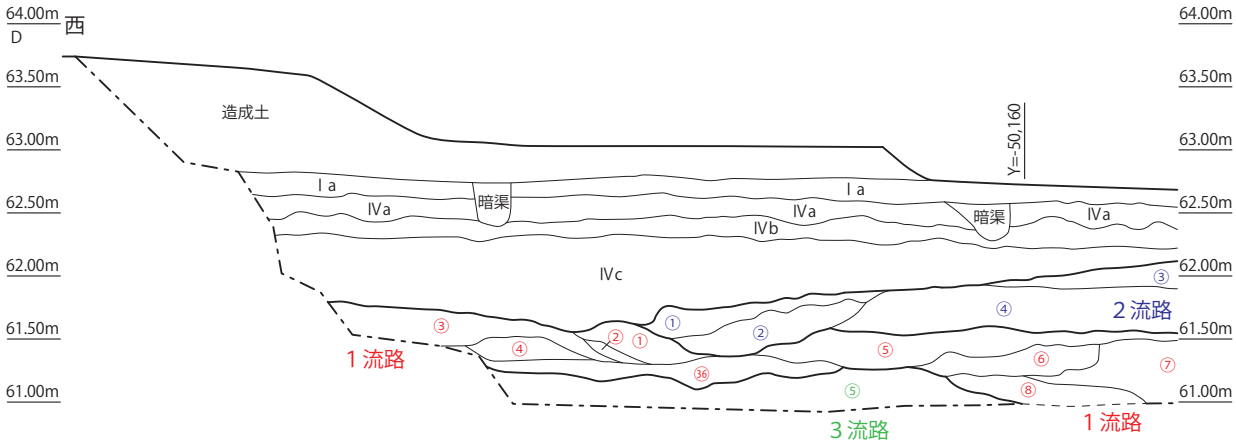
2 流路

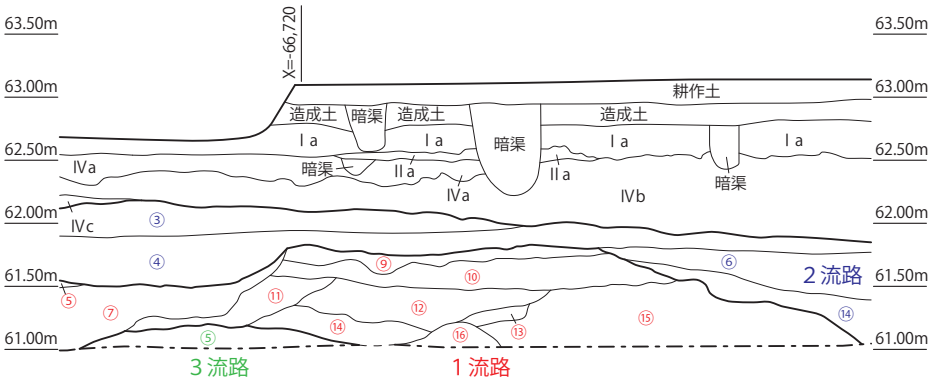
① 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂ブロック混 10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト小ブロック少混)
② 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂 (10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルトマーブル状混)
③ 7.5Y4/1 褐灰色 細砂
④ 10YR3/2 黒褐色 わずかにシルト混じり細砂 (7.5Y4/1 褐灰色 細砂小ブロック少混)
⑤ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 (10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト小ブロックマーブル状混)
⑥ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト と 10YR5/1 褐灰色 粗砂との互層 (部分的にマーブル状　植物片少混)
⑦ 10YR5/1 褐灰色 砂 (10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂薄層混))
⑧ 10YR5/1 褐灰色 粗砂 (10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂薄層マーブル状混)
⑨ 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂 (10YR3/2 黒褐色 細砂薄層少混)
⑩ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 (10YR4/2 灰黄褐色 砂小ブロックマーブル状混)
⑪ 10YR5/1 褐灰色 砂 と 10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルトとの互層
⑫ 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト (10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト小ブロック少混)
⑬ 10YR3/1 黒褐色 粗砂 (φ0.5～1cm礫多混　φ10cm礫少混)
⑭ 10YR4/1 褐灰色 粗砂 (10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト小ブロック少混　植物片多混)
⑮ 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト (10YR3/1 黒褐色 粗砂層状極小混)
⑯ 10YR4/1 褐灰色 粗砂
⑰ 10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト (木を覆う　被覆土か)

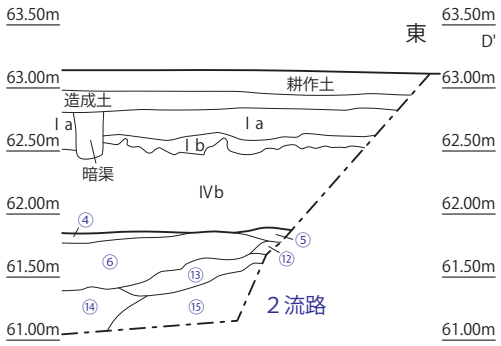
3 流路

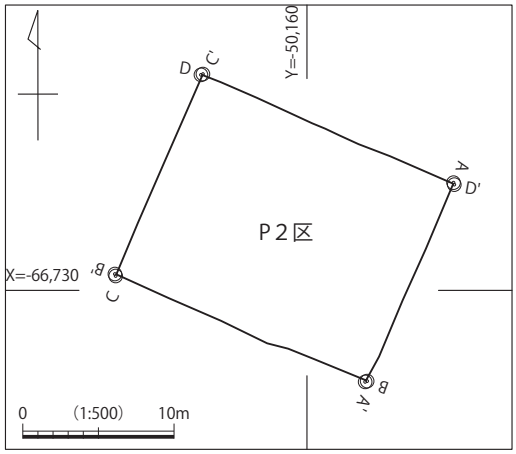
① 10YR4/1 褐灰色 細砂混じりシルトと10YR1.7/1 黒色 シルトブロックとの混合土 (10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂混じりシルト小ブロック少混) (人為的なものか)
② 10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細砂 (10YR6/1 褐灰色 細砂小ブロック混)
③ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり粗砂～細砂 (10YR6/2 灰黄褐色 細砂層状混)
④ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり粗砂～細砂
⑤ 10YR4/1 褐灰色 粗砂～砂 (φ1～15cm礫極多混)　(分層できる可能性高い)

第 20 図　調査区西壁土層断面図、土色注記（1）







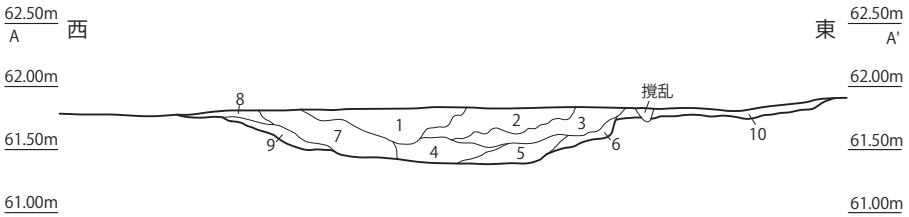


土層断面位置図

基本層序
1　10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂 (10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂粒少混)
Ⅰa　2.5Y5/2 暗灰黄色 砂混じりシルト
Ⅰb　2.5Y5/2 暗灰黄色 砂混じりシルト (10YR2/2 黒褐色 細砂混じりシルトブロック混)
Ⅱa　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (2.5Y5/2 暗灰黄色 砂混じりシルトマーブル状混)
Ⅱb　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR5/3 にぶい黄褐色 砂小ブロック少混)
6　10YR2/1 黒色 わずかに細砂混じりシルト
Ⅲ　10YR4/1 褐灰色 細砂混じりシルト (φ0.2～0.5cm砂粒多混)
Ⅳa　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (φ0.2～0.4cm砂粒多混)
9　10YR4/2 灰黄褐色 粗砂 (10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルトマーブル状混)
Ⅳb　10YR2/1 黒色 わずかに細砂混じりシルト (10YR3/1 黒褐色 シルト小ブロック少混) (層上部に多く撹拌を受けている)
Ⅳc　10YR1.7/1 黒色 細砂混じりシルト (植物片少混)
Ⅳd　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (植物片少混)
Ⅴ　10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂混じりシルト (ソフトローム)

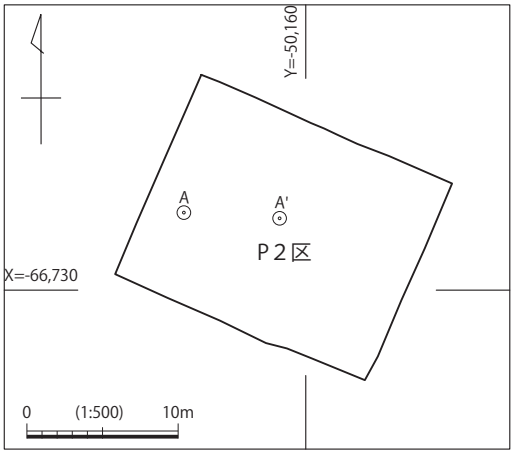
0　(1:60)　2m

第 21 図　調査区北壁土層断面図、土層断面位置図、土色注記（２）



調査区トレンチ
1　10YR3/2 黒褐色 わずかに細砂混じりシルト (炭化物少混)
2　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂
(10YR5/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂小ブロック混　10YR3/1 黒褐色 シルト小ブロック少混)
3　10YR5/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂 (10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト小ブロック少混)
4　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR4/1 褐灰色 砂小ブロック少混　植物片混)
5　10YR5/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂 (10YR4/1 褐灰色 シルトマーブル状混)
6　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR5/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂小ブロック混)
7　10YR2/1 黒色 シルト (10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト混)　上部粘性強
8　7.5YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 (10YR5/2 灰黄褐色 砂極小ブロック混)
9　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 (10YR6/2 灰黄褐色 砂薄く層状混)
10　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR5/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂小ブロック少混)

0　(1:60)　2m



土層断面位置図

第 22 図　調査区トレンチ土層断面図、土層断面位置図、土色注記（３）

第２項　検出した遺構と遺物

１流路（第 23 ～ 27 図、第５・13・17・23 表、図版４・25）

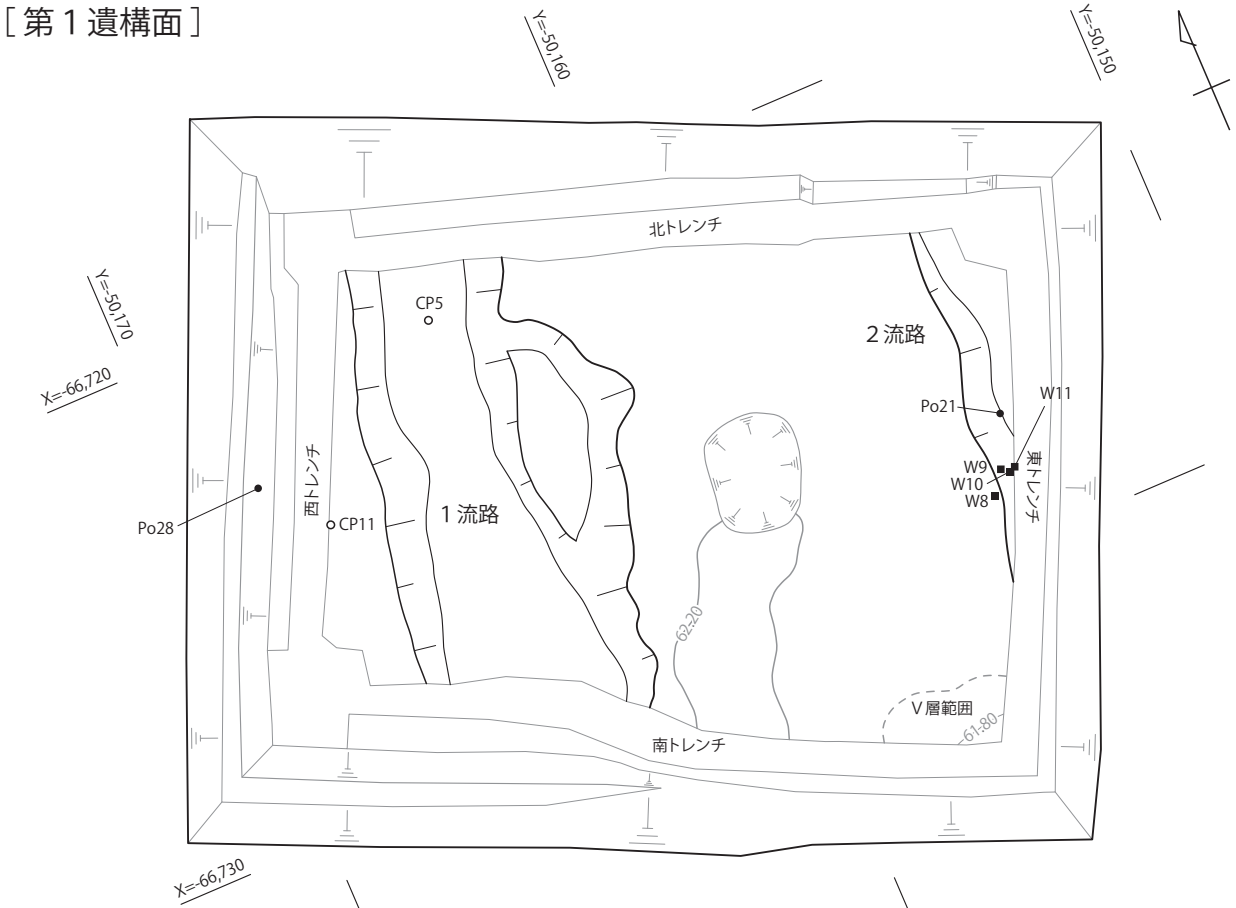
Ⅳ層下面で検出した調査区全面に渡って存在する自然流路である。調査区の南西隅と南東隅に遺跡の基盤層となるⅤ層のソフトロームが存在しており、東西それぞれで流路が立ち上がりつつあることが分かるが、ソフトローム層上部には１流路堆積土が存在しており、１流路の東側及び西側端部（流路肩部）が確認できたわけではない。全体形は明確ではないが、地形から考えて、南から北方向へ流れていたと推定され、Ｐ１区の１流路に繋がると想定される。調査地内における規模は、長さ（南北方向）約 11.5m、幅（東西方向）約 14.5m、深さは最大で約 1.1m を測る。

１流路埋土は褐灰色～黒褐色の細砂混じりシルトを主体としているが、南壁で１流路最上層の灰黄褐色シルト混じり細砂である㊲層は厚さもある安定した堆積層であり、注目すべき堆積といえる。また、北壁の①～④層と南壁の㉒・㉔層をつなぐように黒褐色細砂混じりシルトを主体とする堆積が存在する。これは１流路の堆積が浸食と埋没を繰り返す過程の一部と想定したものであるが、この底から軒丸瓦 CP５が出土している。

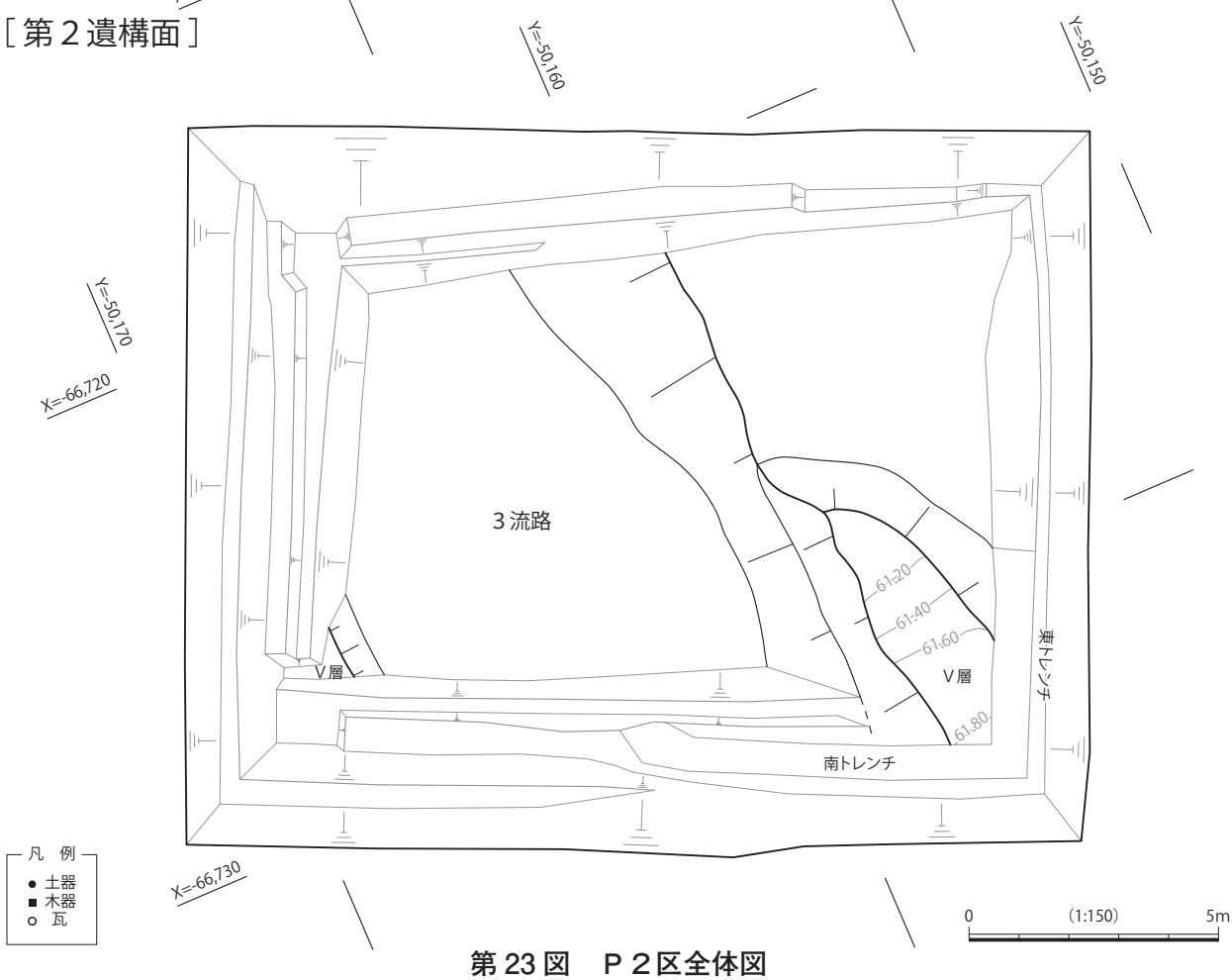
土器の出土はわずかで、図化できたのは２点のみである。Po18 は土師器で、高台を持つ坏と考えられるものである。高台は断面三角形状を呈する。Po23 は土師器の甕で、口頸部が「く」の字状に外反しながら大きく屈曲する。

一方、瓦の出土は多く、10 点を図化した。CP５・６・８は軒丸瓦である。いずれも軒丸瓦Ⅱ類である。このうち、全体形が分かるのが CP５で、復元瓦当径は 18.0cm を測る。単弁 12 弁の蓮華文を持ち、蓮弁間には間弁が存在する。径 6.5cm の中房はやや半球状に盛り上がり、径９～ 10mm の凹線で表現された蓮子を１＋６＋12 に配置する。内区径は 12.5cm。外区には蓮弁と間弁に対応した 24 個の珠文が存在する。丸瓦との接合方法は、丸瓦の凹面側を斜めにカットし、対応する調整を施

［第１遺構面］



［第２遺構面］



第 23 図　Ｐ２区全体図

した瓦当部と接着させている。CP６・８は外区の破片で、CP６には３つの珠文と２つの蓮弁、１つの間弁が残されている。丸瓦との接合方法は、丸瓦の先端を加工することなく瓦当部に接着させている。CP８は珠文が残る外区片である。

CP10・12・13は軒平瓦と考えられるもので、CP10はⅣ類の均整唐草文軒平瓦の中心飾り部分である。CP12は、Ⅲ類の無文の軒平瓦の可能性が考えられるが、凸面残存部に波状文はない。凹凸両面がナデ調整である。２次調整として瓦当面の凸面にヘラケズリが施されている。CP13は瓦当面は無文であるが、軒平瓦Ⅲ類と考えられるものである。小破片のため明確ではないが、残存部の凸面にＶ字状に復元できる各２本の沈線が存在する。凹面は粗いナデ調整である。

CP16・17は平瓦である。ともに凸面に縄目叩き痕が残り、凹面には布目痕が認められる。２次調整として､CP17は狭端面の凹面と右側面の凸面に､CP16は狭端面の凹面にヘラケズリを施している。CP14は丸瓦の小破片で、凸面に縦および横方向のハケメ調整が施される。狭端面に２次調整は認められない。CP18は熨斗瓦と考えられるもので、凸面はナデ調整、凹面には布目痕が残る。２次調整として右側面の凹面にヘラケズリが施されている。

木製品では、Ｗ２の角棒材が出土した。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

２流路（第 23・27・28 図、第５・23 表、図版４・26）

調査区北東部で検出した自然流路である。調査時には、２流路は１流路の堆積が浸食と埋没を繰り返す過程の一部と考えて、１流路の堆積として扱うべきと判断していたが、重機で１流路の堆積を掘削する過程で護岸施設として設置された可能性が想定される板状等の木製品が出土したことと堆積土の様相が異なることから別遺構としたものである。そのため、木製品等の正確な原位置は確認できていないが、長い板状の木製品Ｗ10が流路の西側の落ち込み際に沿うように設置されていたようである。全体形は明確ではないが、地形から考えて、南から北方向へ流れていたと推定される。調査地内における規模は、長さ（南北方向）約7.3m、幅（東西方向）約14.0m、深さは最大で約1.2mを測る。確認できる埋土は①～⑰層であり、褐灰色や黒褐色の粗砂が目立つ。

２流路からは木製品が多く出土した。出土状況が明確ではないが、流路の護岸施設に使用された可能性が高いものである。Ｗ９は建築部材を転用したと考えられるもので、長側辺の一方が「〔」形に切断されている。また、長さ２～３cmの方形状に穿孔された穴４つが２×２段に存在し、その内の２穴には差し込まれた別材の破片が残されていた。W10・11は板材である。Ｗ７は短側辺の一方が欠失しているが､もう一方の短側辺は斜めに切断されている。現状で長さ約1.6mの角棒状であるが､両長側面にヒレ状の突出があり、断面形が凸状を呈する。建築部材からの転用と考えられる。Ｗ８は断面方形状の角棒材で、短側辺の一方は欠失、他方は焼けて炭化している。Ｗ３～６はいずれも角棒状を呈する部材である。

本遺構の帰属時期は、１流路との切り合い関係から古代以降と考えられる。

３流路（第 23・24 図、第５・13 表、図版 27）

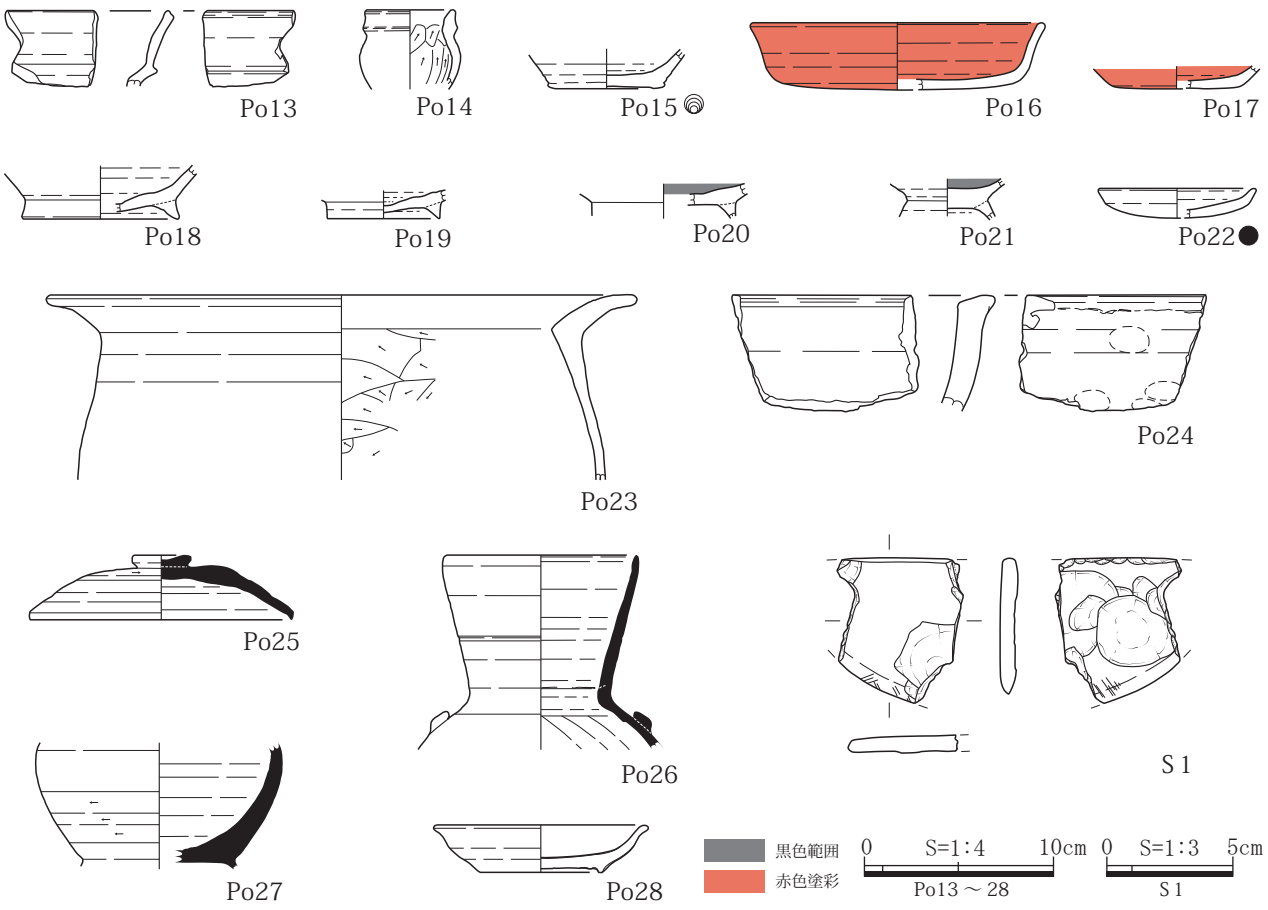
１流路の下面で検出し、ほぼ調査区全面に渡って存在する自然流路である。調査区の南東隅に存在する遺跡の基盤層となるＶ層のソフトロームによって東側の流路立ち上がりが確認できるが、南西隅

ではソフトロームの上部に３流路堆積土がわずかに存在しており、３流路の西側端部（流路肩部）は確認できていない。しかし、南壁の西端では基盤層となるⅤ層のソフトロームが急激に立ち上がっていることから、流路の西側肩部は近い位置にあると想定できる。調査地内における規模は、長さ（南北方向）約 9.6m、幅（東西方向）約 12.0m、深さは最大で約 0.8m を測る。ただし、３流路の下層には、遺物を含まない古い時期の砂礫で構成される流路堆積が存在する。そのため、３流路の底部と古い時期の流路堆積の区別は困難であり、遺物出土の有無と堆積している礫径等の変化を勘案しながら３流路の底部を判断した。

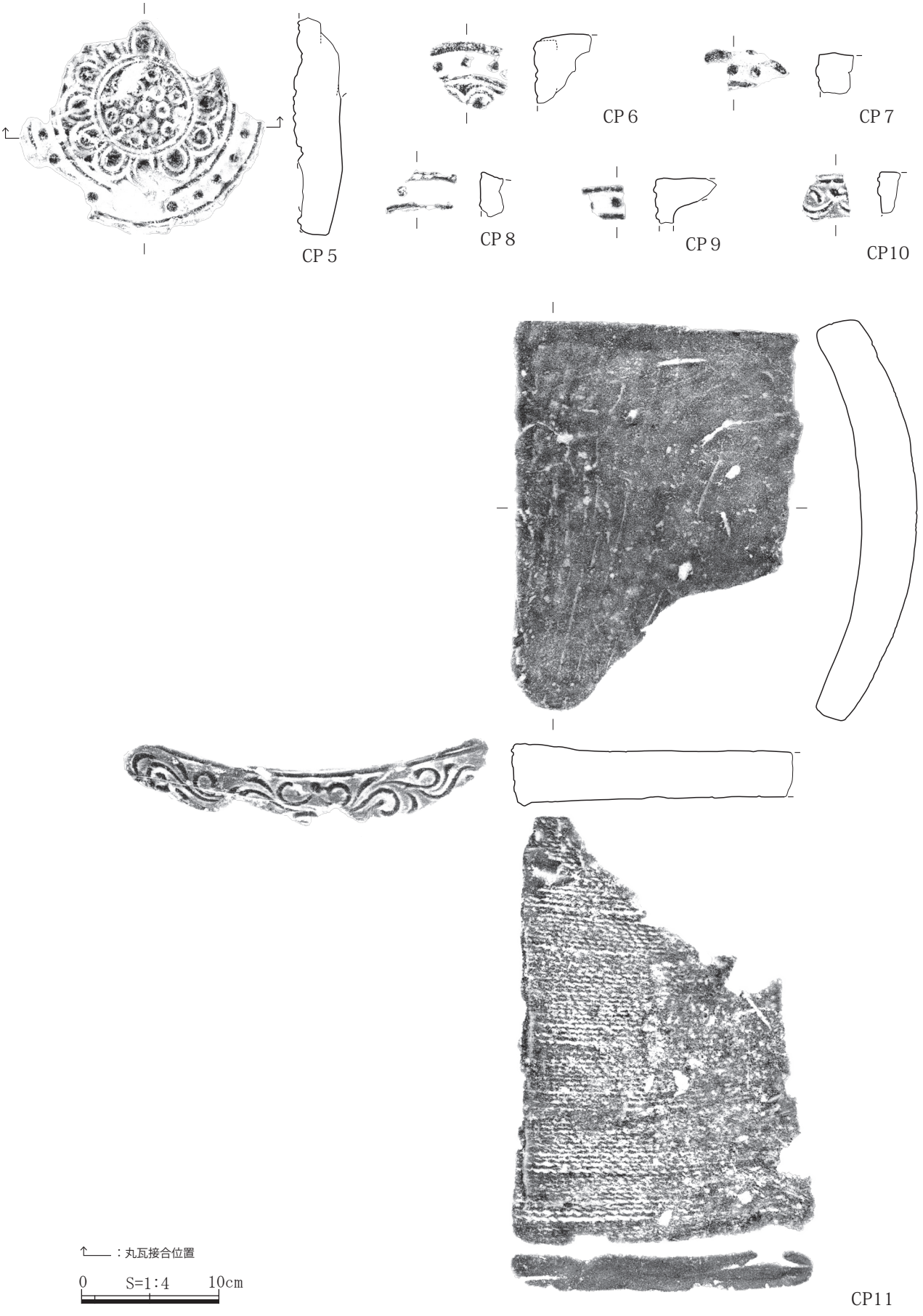
遺物の出土は多くはないが、土器類のなかで特徴的なものについて図化を行った。

Po13 は土師器の複合口縁をもつ甕である。器壁は薄い。Po25 はつまみを持つ須恵器の蓋である。口縁端部が内側に折り返され、断面三角形状になっている。Po26 は須恵器の口頸部である。残存部が少ないため判断が難しいが、提瓶ないし平瓶であろう。肩部には把手が痕跡化したと考えられる径１cm 程度のボタン状の粘土が貼り付けられている。Po14 は甕形のミニチュア土器である。外面はナデ、内面は口縁部がナデ、体部はケズリ調整されている。丁寧な作りで甕の特徴がよく表現されている。

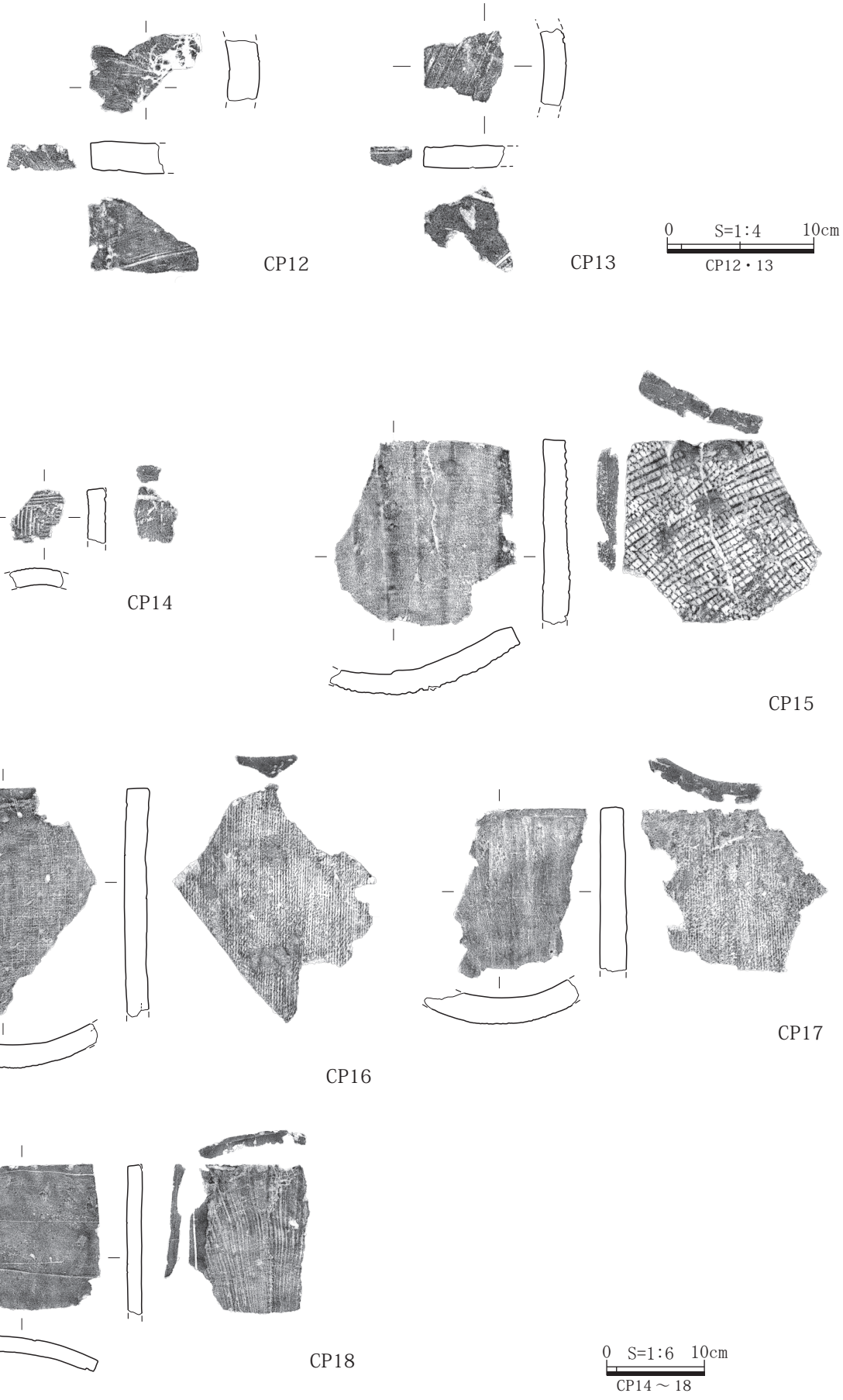
本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。



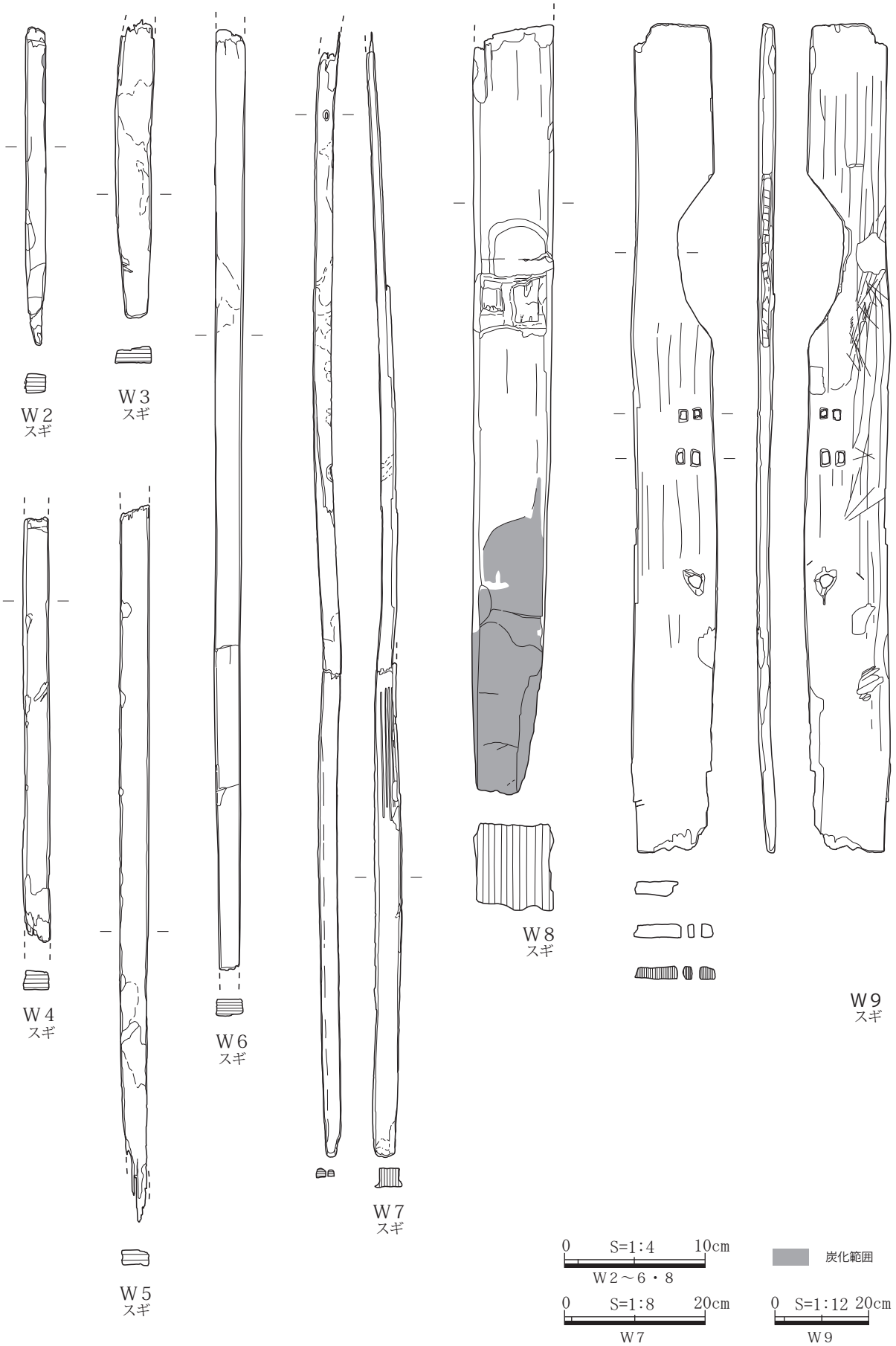
第 24 図　Ｐ２区出土遺物



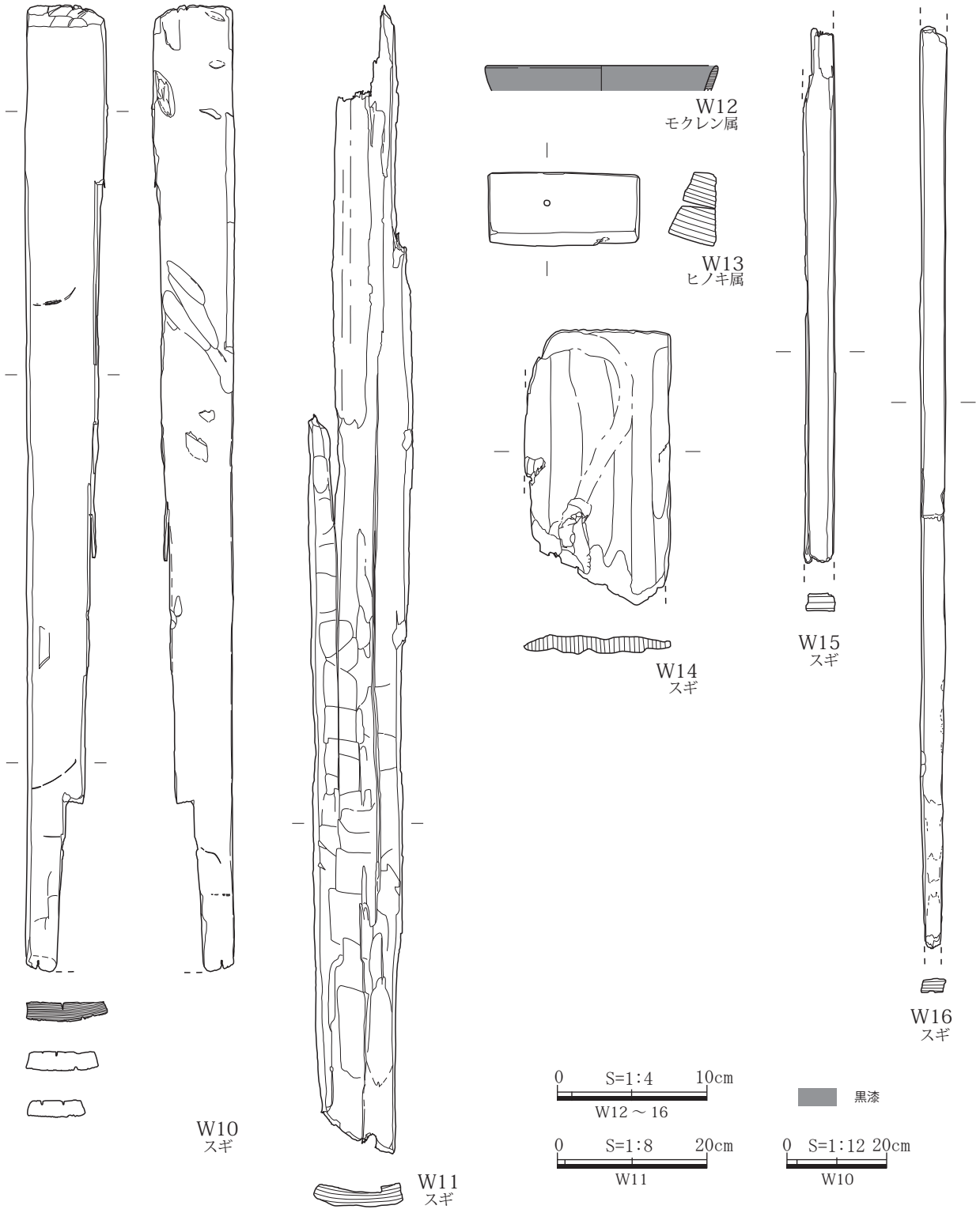
第 25 図　Ｐ２区出土瓦（１）



第 26 図　Ｐ２区出土瓦（２）



第 27 図　Ｐ２区１・２流路出土木器



第 28 図　Ｐ２区２流路、調査区内出土木器

調査区内出土遺物（第 24 ～ 26・28･86 図、第３・13・17・22・23 表、図版 27・28・49）

出土した遺物の内には、遺構を明確にすることができないが特徴のある遺物があるため、ここで記載する。

Po16 は口径が大きい土師器の坏である。底部はほぼ平坦で、体部から口縁部にかけてやや外反しながら外傾して立ち上がる。内外面が赤色塗彩されている。Po17 も内外面が赤色塗彩された土師器である。平底で底径がやや狭い坏であろう。Po19 ～ 21 は土師器で高台を持つ坏と考えられるものである。Po19 は高台が断面三角形状を呈する。Po20 ・ 21 は黒色土器で坏部内面が黒く炭素吸着処理されている。Po15 は底部が回転糸切りされた土師器の坏である。Po22 は手づくね成形された土師器の皿である。やや丸底で口縁部がやや外反しており器高が低い。Po27 は須恵器の壺と考えられる体部下半から底部である。低い高台が付き、外面の体部下方に回転ヘラケズリが施される。Po24 は器壁の厚い瓦質土器の火鉢、Po28 は低い高台を持ち薄緑色の釉がかかった美濃焼の皿である。調査区西壁のⅣａ層から出土した。

Ｓ１は磨製石庖丁である。欠損部分が多く全体形は明確ではないが、残存部から判断すると背部は直線状で刃部は外湾すると考えられる。

瓦は CP７・９・11・15 の４点を図化した。CP７・９はいずれも珠文が残る軒丸瓦Ⅱ類の外区片である。CP11 はⅣ類の均整唐草文軒平瓦である。瓦当面の状態は良好とはいえないが、瓦当文様がほぼ遺存しており、全体形を把握できる。顎は直線顎で、凸面には縄目叩き痕が残り、凹面には不明瞭ながら布目らしき痕跡が認められる。中心飾りは珠文状であり､中心から３回転する唐草文を飾る。２次調整として左右両側面の凹面にヘラケズリが施されている。CP15 は平瓦で、凸面には正方形格子目叩き痕が残り、凹面には布目痕が認められる。また、模骨痕が認められることから、桶巻き作りであることが分かる。２次調整として右側面の凹面にヘラケズリが施されている。

木製品は５点を図化した。W12 は漆器の口縁部である。小破片であるが椀か。内外面に黒漆が塗られている。W13 は、用途不明だが何かの部材と考えられるもので、平面長方形状のほぼ中央部に貫通する１つの小穴が存在する。この小穴は上方側が大きく、下方に向けて細くなっており、釘を打ち込まれた痕跡と考えられる。W14 は板状の材である。W15 ・ 16 はともに角棒状を呈する部材である。

鍛冶関連遺物として、炉壁片 CP108 が出土した。炉壁の上端部の破片である。

写真５　Ｐ２区 作業風景（南西から）

写真６　Ｐ２区 作業風景（南東から）

第４節　Ｐ３区の調査

第１項　概要と基本層序

Ｐ３区は、石塚廃寺跡の塔心礎から東北東へ約45ｍに位置し、現況は水田および農道である。塔心礎と水田面との比高差は約４ｍである。東および北に向けて緩やかに下降することが想定される旧地形は、圃場整備による削平を受けているが、圃場整備によってどの程度の削平を受けているのかは明確ではない。

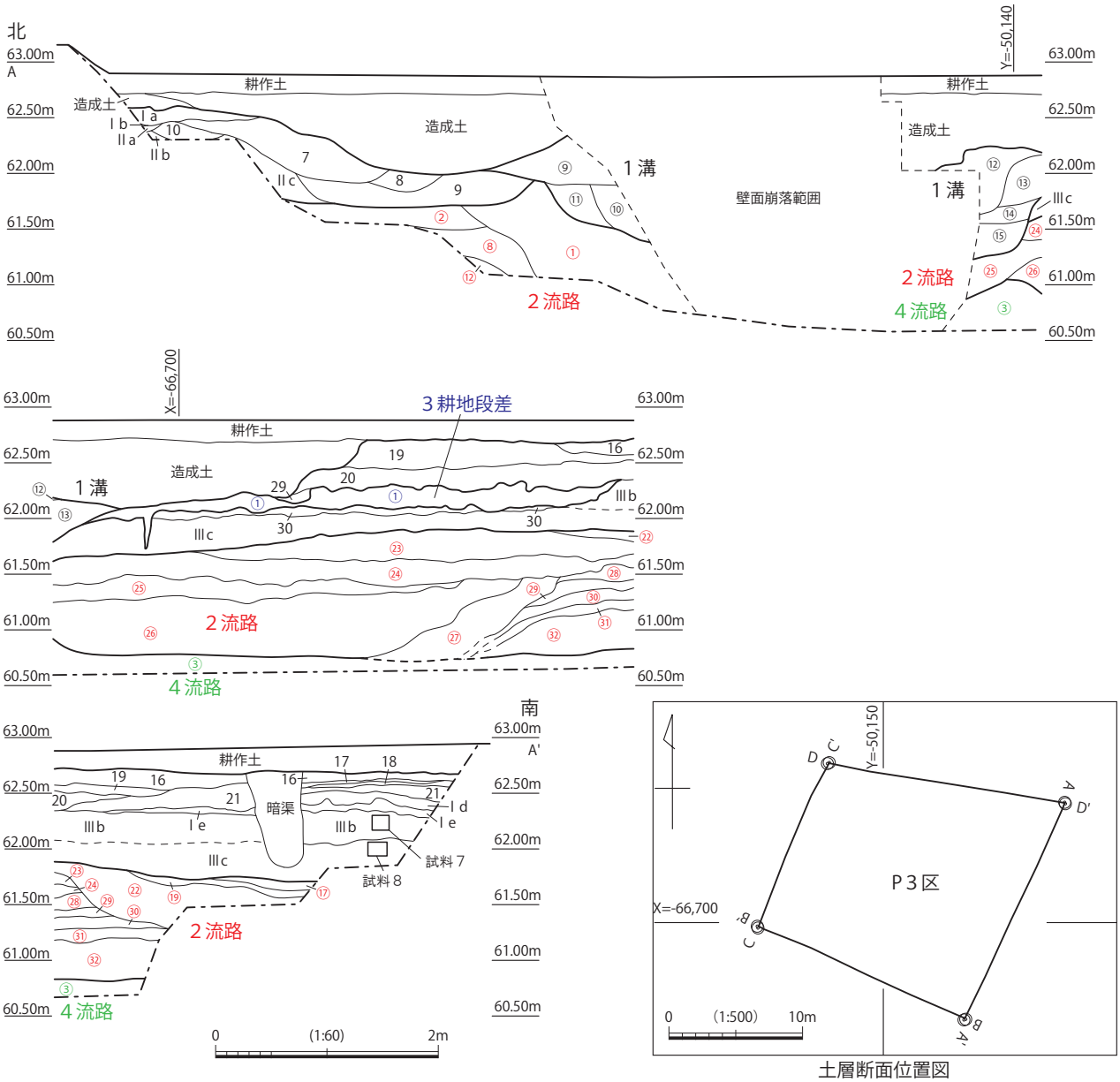
Ｐ３区の調査は、倉吉市教育委員会が実施した試掘調査成果に基づき、試掘トレンチ中位に存在する「黒色土」の上面を遺構検出面に想定し重機を用いて掘削を行うことにした。まず、耕作土および造成土の掘削・除去に着手したが、調査区北側では造成土の下から圃場整備時に埋められた現代溝が現れた。この溝は、第２次大戦後に米軍が撮影した調査地周辺の航空写真に写っていた水路と位置関係が一致するものであった。そのため、この溝は調査対象外と判断し、埋土は重機で除去することにしたが、埋土中から石塚廃寺のものと想定される布目を持つ瓦が多数出土するようになり、そのなかには軒丸瓦も含まれていた。そのため、重機による現代溝埋土の掘削は中止し、溝底まで人力で掘り下げて瓦等の遺物を取り上げることにした。溝底の堆積は、後述する古代流路の堆積とほぼ変わらなかったが、堆積土には現代の陶磁器や瓦、ガラス瓶等が含まれており、それらの有無で現代溝と古代流路の区別判断を行った。第１遺構面は、２流路の検出面および１溝の底面としたが、第１遺構面に向けての包含層掘削過程で検出した３耕地段差についても調査を行っている。

３耕地段差の調査終了後に再度重機による掘削を行い、倉吉市教育員会が実施した試掘調査成果によって想定されていた流路（２流路）の底部を明確にしようとしたところ、下層の砂礫層を中心に少量ではあるが土師器や須恵器が出土したことから、この流路（４流路）についても遺構として取り扱うこととした。流路埋土は、上層には粘質土の堆積層も存在したが、下層はほぼ礫層であり、人力による掘り下げは極めて困難な状態であった。また､河川による礫の堆積層はより下層に続いていたが､礫径が10cm 程度のものから徐々に 30cm 程度のものが増えていくという堆積層の変化があったことから、無遺物の河川堆積層を希薄ながら遺物を包含する堆積層が切っていると判断し、遺物を包含する堆積層（４流路）を掘削対象として、その下面を第２遺構面とし、それ以下の遺物を含まないと判断した堆積については掘削を行わないことにした。

なお、東壁のⅢｂ層・Ⅲｃ層の土壌サンプル（試料７・８）の自然科学分析（第５章第１節）の結果、両層とも植物珪酸体が高い密度で検出されたことから稲作が行われていた可能性が高く、水田として継続的に利用されてきたことが想定される。周辺環境は、Ⅲｂ層の時期は比較的乾いた環境で、周辺にはススキや竹・笹類が生育しており、Ⅲｃ層の時期は湿った環境で、周辺の乾いたところにはススキや竹・笹類が生育していたと推定されている。

基本層序は以下のとおりであるが、東西方向に主軸をとる１溝によって北壁と他の３方の壁で堆積が分断されており、直接のつながりを確認することはできない。

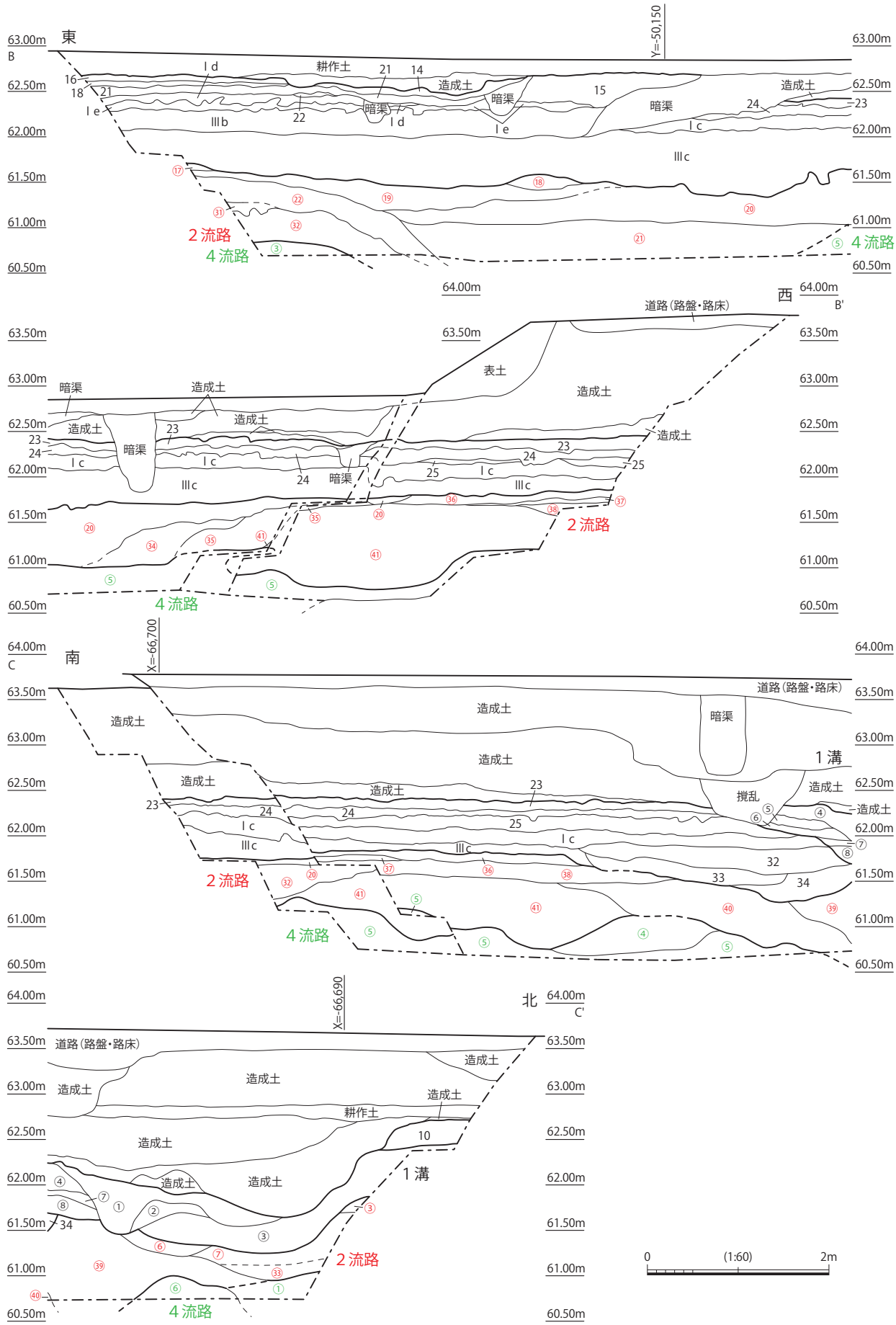
Ⅰ　層　　調査区の北･東壁で確認した黒色～黒褐色細砂混じりシルトの堆積。Ⅰａ層、Ⅰｂ層、Ⅰｃ層、Ⅰｄ層、Ⅰｅ層の５層に分けられる。



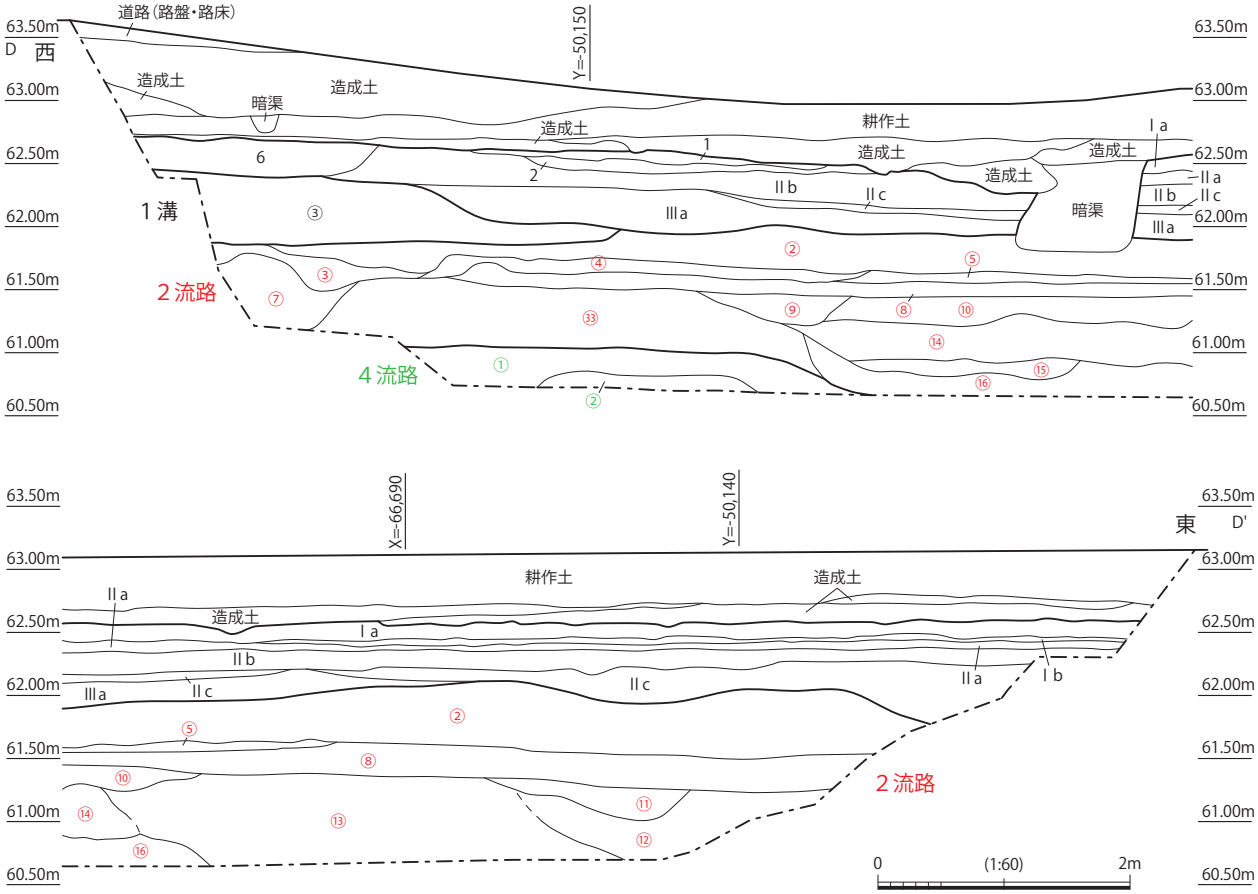
土層断面位置図

２流路
① 10YR4/1 褐色 シルト混じり砂 (10YR7/2 にぶい黄橙色 粗砂ブロック混　10YR7/3 にぶい黄橙色 細砂小ブロック混)
② 10YR2/1 黒色 シルト (10YR6/2 灰黄褐色 砂マーブル状極少混　φ20～40cm礫少混　木片混)
③ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 (10YR5/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂層状極少混)
④ 10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト と 10YR6/1 褐灰色 砂とのマーブル状混合土
⑤ 10YR6/1 褐灰色 粗砂 (10YR3/1 黒褐色 シルト混じり砂薄層状混)
⑥ 10YR1.7/1 黒色 シルト
⑦ 10YR4/1 褐灰色 粗砂 (φ2～8cm礫混)
⑧ 10YR3/1 黒褐色 粗砂 (10YR2/1 黒色 砂混じりシルト小ブロック混　φ0.5～3cm礫混)
⑨ 10YR4/1 褐灰色 粗砂 (φ0.5～2cm礫混)　しまり非常に強
⑩ 10YR3/2 黒褐色 シルト混じり粗砂 (φ1～10cm礫混)
⑪ 10YR4/2 灰黄褐色 砂 (10YR2/1 黒色 シルト混じり細砂小ブロック混)
⑫ 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂 (φ1～10cm礫多混)(鉄分多い)
⑬ 10YR4/2 灰黄褐色 粗砂 (φ1～20cm礫多混)(鉄分多い)
⑭ 10YR2/1 黒色 シルト混じり砂 (10YR5/2 灰黄褐色 砂ブロック多混)
⑮ 10YR2/1 黒褐色 細砂少混じりシルト (10YR4/1 褐灰色 砂～粗砂層状混)
⑯ 10YR4/1 褐灰色 砂～粗砂 (φ1～10cm礫混)
⑰ 10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト (10YR2/1 細砂混じりシルト小ブロック混　10YR4/1 褐灰色 砂小ブロック多混)
⑱ 10YR6/1 褐灰色 砂
⑲ 10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR6/1 褐灰色 砂ブロック混)
⑳ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR5/2 灰黄褐色 細砂小ブロック少混)
㉑ N5/ 灰色 砂 (φ2～10cm礫混)
㉒ 7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト (10YR6/1 褐灰色 細砂小ブロックマーブル状少混)
㉓ 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂
㉔ 10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR5/2 灰黄褐色 砂小ブロック少混)
㉕ 10YR3/2 黒褐色 シルト混じり細砂 と 10YR5/2 灰黄褐色 砂とのマーブル状混合土
㉖ 2.5Y3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR4/1 褐灰色 砂マーブル状混　植物片混)
㉗ 10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂 (10YR7/1 灰白砂小ブロックマーブル状混)
㉘ 10YR2/1 黒色 シルト (10YR4/1 褐灰色 シルトブロック混　10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト小ブロック混)
㉙ 10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト
㉚ 10YR2/1 黒色 砂混じりシルト (10YR3/1 黒褐色 シルト混じり砂ブロック混)
㉛ 10YR1.7/1 黒色 シルト (10YR2/1 黒色 砂混じりシルト小ブロック少混)
㉜ 10YR2/1 黒色 シルト
㉝ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり砂 (φ2～5cm礫混)
㉞ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR6/1 褐灰色 粗砂マーブル状混)
㉟ 10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト
㊱ 5Y2/1 黒色 シルト
㊲ 10YR3/1 黒褐色 シルト (炭化物小片極少混)
㊳ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 (10YR7/1 灰白色 細砂小ブロック多混)
㊴ 10YR5/1 褐灰色 砂 (10YR6/1 褐灰色 細砂小ブロック　10YR2/1 黒色 シルト小ブロック混　下層にφ2～5cm礫多混)
㊵ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR4/1 褐灰色 砂層状多混　植物片混)
㊶ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト と 10YR4/1 褐灰色 砂との薄い互層 (10YR2/1 黒色 シルト大ブロック少混　植物片少混)

第 29 図　調査区東壁土層断面図、土層断面位置図、土色注記（１）



第 30 図　調査区南壁・西壁土層断面図



基本層序

1　10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト (10YR6/4 にぶい黄橙色 シルト小ブロック少混) (耕作土由来)
2　10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト (10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト小ブロック少混)
Ⅰa 10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト (炭化物小片少混)
Ⅰb 10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト
Ⅱa 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト
6　10YR3/1 黒褐色 粗砂 (φ1～5cm礫多混　10YR3/2 黒褐色 砂混じりシルト小ブロック少混)
7　10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト
8　10YR3/2 黒褐色 粗砂 (φ1～3cm礫混)
9　10YR2/1 黒褐色 砂混じりシルト (φ2cm礫混)
10　10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト と 10YR5/2 灰黄褐色 細砂混じりシルトとの混合土
Ⅱb 10YR4/2 灰黄褐色 砂混じりシルト (φ1～5cm礫少混)
Ⅱc 10YR4/2 灰黄褐色 砂混じりシルト (φ1～20cm礫多混)
Ⅲa 10YR3/2 黒褐色 砂混じりシルト (φ1～20cm礫混)
14　10YR4/1 褐灰色 砂混じりシルト
15　2.5Y5/1 黄灰色 シルト混じり細砂 (10YR5/3 にぶい黄橙色 細砂混じりシルト小ブロック少混)
16　10YR4/1 褐灰色 砂混じりシルト
17　2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり細砂
18　2.5Y5/1 黄灰色 シルト混じり砂
19　10YR5/2 灰黄褐色 砂混じりシルト
20　10YR5/1 褐灰色 砂 (鉄分を多く含む砂粒が層状に入る)
21　2.5Y4/1 黄灰色 細砂混じりシルト
22　10YR4/2 灰黄褐色 砂 (鉄分含む)
23　5Y4/1 灰色 砂混じりシルト
24　5Y4/1灰色 細砂混じりシルト (φ0.1～0.4cm砂粒多混)
25　10YR2/1 黒色 シルト
Ⅰc 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト
Ⅰd 5Y3/1 オリーブ黒色 細砂混じりシルト (鉄分による変色部分あり)
Ⅰe 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (5Y3/1 オリーブ黒色 細砂混じりブロック混)
29　10YR5/1 褐灰色 砂 (2.5Y6/4 にぶい黄色 シルト混じり細砂小ブロック混 10YR5/1 褐灰色 シルト小ブロック混)
30　10YR2/1 黒色 砂混じりシルト
Ⅲb 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト
32　10YR2/1 黒色 シルト (φ0.1～0.3cm砂粒少混)
33　10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト (10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂薄層状多混)
34　10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト (10YR7/2 にぶい黄橙色 粗砂マーブル状少混)
Ⅲc 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (φ0.1～0.3cm砂粒混　植物片少混)

１溝

①　10YR3/1 黒褐色 シルト (植物片混)
②　10YR2/2 黒褐色 砂混じりシルト (植物片多混)
③　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり砂 (φ2～10cm礫多混)
④　5Y4/1 灰色 砂混じりシルト
⑤　5Y4/1 灰色 細砂混じりシルト (φ0.1～0.2cm砂粒多混)
⑥　7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト
⑦　10YR3/1 黒褐色 細砂
⑧　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり砂 (φ2～10cm礫混)
⑨　10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト
⑩　7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト (10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり砂ブロック混 植物片多混)
⑪　10YR1.7/1 黒色 砂混じりシルト (10YR4/2 灰黄褐色 砂小ブロック混)
⑫　10YR3/2 黒褐色 細砂～砂混じりシルト
⑬　7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト (10YR6/1 褐灰色 細砂小ブロックマーブル状少混)
⑭　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (φ0.1～0.3cm砂粒混)
⑮　7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト混じり粗砂 (φ2～5cm礫混　植物片多混)

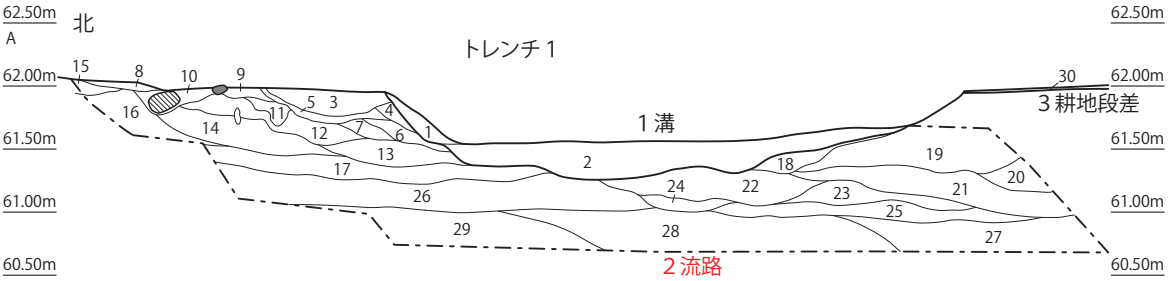
３耕地段差

①　7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト (10YR6/1 褐灰色 細砂小ブロックマーブル状少混)

４流路

①　10YR4/2 灰黄褐色 小礫～粗砂 (φ1～4cm礫多混)
②　10YR4/1 褐灰色 砂混じりシルト
③　10YR4/1 褐灰色 砂 (φ1～20cm礫多混)
④　10YR5/1 褐灰色 砂 (10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂層状極少混)
⑤　10YR5/1 褐灰色 粗砂 (10YR2/1 黒色 砂混じりシルトブロック少混　φ1～10cm礫多混)
⑥　10YR3/1 黒褐色 シルト

第 31 図　調査区北壁土層断面図、土色注記（２）



トレンチ１

１溝

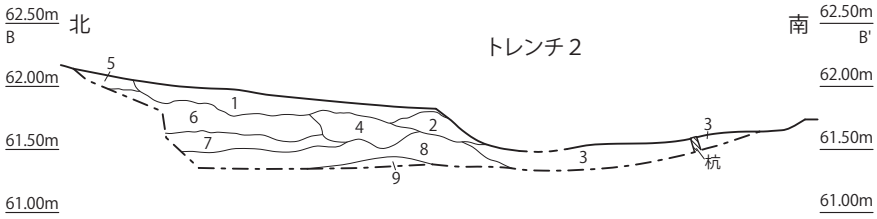
1　10YR3/2 黒褐色 シルト (φ0.5～3cm礫混　植物片多混)
2　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり砂 (φ1～10cm礫多混　現代遺物混　瓦片多混)

２流路

3　10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR3/2 黒褐色 シルト混じり細砂層状混　植物片混)
4　10YR6/2 灰黄褐 色細砂 (10YR4/1 褐灰色 細砂混じりシルト　2.5GY7/1 明オリーブ灰色 細砂マーブル状混)
5　10YR5/2 灰黄褐色 砂 (φ10cm礫少混)
6　10YR6/2 灰黄褐色 砂 (φ1～4cm礫少混)
7　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂 (2.5Y5/2 暗灰黄色 砂層状混)
8　10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト (下部にφ2cm礫混)
9　10YR7/2 にぶい黄橙色 細砂 (φ2～10cm礫混)
10　10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト (φ0.3～2cm礫混　木片混)
11　10YR4/2 灰黄褐色 細砂 (10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト層状混　φ3～5cm礫少混)
12　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 (2.5GY7/1 明オリーブ灰色 細砂マーブル状混)
13　10YR6/2 灰黄褐色 シルト混じり砂 (φ1～3cm礫混)
14　10YR3/2 黒褐色 シルト (10YR4/2 灰黄褐色 細砂層状)
15　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (φ0.1cm砂粒少混)
16　10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト (植物片少混)
17　10YR6/2 灰黄褐色 シルト混じり砂 (φ1～3cm礫少混)
18　10YR3/2 黒褐色 シルト混じり細砂 (10YR2/1 黒色 シルトブロック混)
19　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり砂 (10YR6/1 褐灰色 砂層状混　植物片混)
20　10YR4/1 褐灰色 細砂 (10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細砂層状混)
21　10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細砂 (10YR6/1 褐灰色 砂ブロック混)
22　10YR4/2 灰黄褐色 砂 (鉄分含む)
23　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂～砂 (φ1～3cm礫混)
24　10YR5/6 黄褐色 砂礫 (鉄分沈着)
25　10YR4/3 にぶい黄褐色 砂 (鉄分沈着　φ1～10cm礫多混)
26　10YR5/1 褐灰色 砂 (鉄分により赤変した砂)
27　5YR3/6 暗赤褐色 砂 (鉄分沈着　φ1～5cm礫多混)
28　10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂～砂 (鉄分沈着)
29　10YR5/1 褐灰色 砂 (鉄分沈着　φ3～20cm礫多混)

３耕地段差

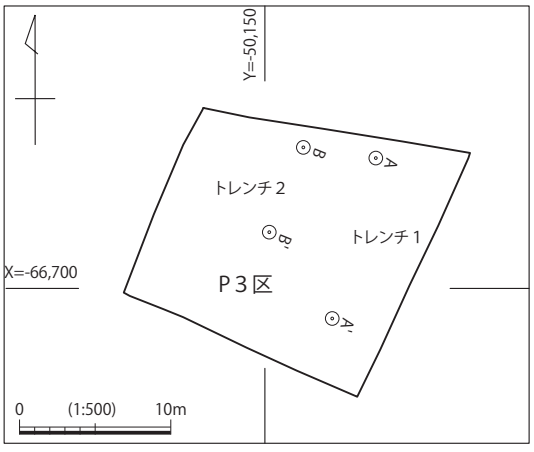
30　5Y4/1 灰色 細砂 (10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト小ブロック少混　φ0.1cm砂粒混)　下層からの巻き上げ



トレンチ２

1　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり粗砂～砂 (φ1～5cm礫多混)
2　10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト
3　10YR4/1 褐灰色 粗砂～砂 (φ2～10cm礫混　瓦片混)
4　10YR7/1 灰白色 砂 (10YR3/1 黒褐色 シルト層状混)
5　10YR3/2 黒褐色 砂混じりシルト
6　10YR2/1 黒色 シルト (10YR6/2 灰黄褐色 砂マーブル状極少混)
7　10YR6/1 褐灰色 粗砂 (10YR3/1 黒褐色 シルト混じり砂薄く層状混)
8　10YR4/1 褐灰色 粗砂 (φ0.5～2cm礫混)
9　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり砂

0　(1:60)　2m



土層断面位置図

第 32 図　トレンチ１・２土層断面図、土層断面位置図、土色注記（３）

Ⅱ　層　調査区の北・東壁で確認した灰黄褐色砂混じりシルトの堆積。Ⅱａ層、Ⅱｂ層、Ⅱｃ層の３層に分けられる。

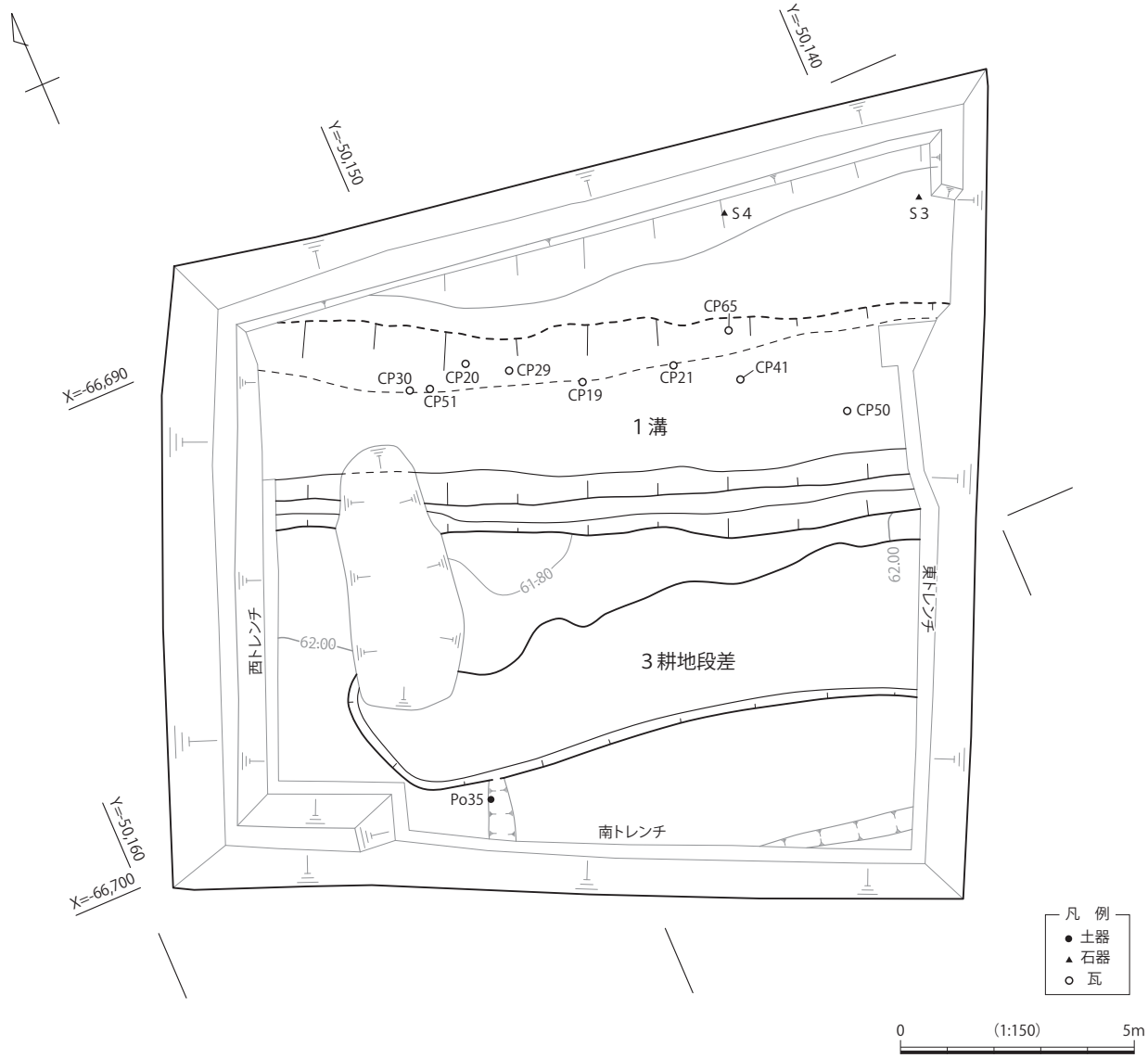
Ⅲ　層　調査区の北・東・西・南壁で確認した黒褐色砂混じりシルトの堆積。Ⅲａ層、Ⅲｂ層、Ⅲｃ層の３層に分けられる。

第２項　検出した遺構と遺物

１溝（第 33・35 ～ 42・48・86 図、第３・６・13・14・17・22 表、図版６・29 ～ 34・49）

Ⅰ層下面で検出した圃場整備以前の近現代の溝である。東西方向に主軸をとり、西壁北半と東壁北半に立ち上がりが認められるが、北側の立ち上がりは北壁調査地外に続く。検出した規模は、長さ約15.0m、幅約 5.6m、深さは約 1.1mである。東壁については埋設された暗渠から流入する多量の水によって壁面崩落の危険が生じ、急遽土嚢を積んで壁面保護を行ったために土層堆積の観察や図化を行うことがほとんどできなかった。観察可能な範囲では、埋土の上層には植物片などを多く含む泥状の堆積が存在したが、下層には泥状の堆積はあまりなく、粒子の粗い砂粒や小礫が主であった。これらの砂粒や小礫は、溝の上流から流されてきたもののほかに、下部に存在する２流路の堆積土が削られ再堆積したものが含まれると考えられる。

遺物は、溝底を中心に多く出土した。１溝は昭和の圃場整備によって埋められるまで使用されていた水路である。そのため、現代のビンや缶などと、溝を埋め戻した土に混入していたと考えられる石塚廃寺に帰属する数多くの瓦などが混在して出土した。



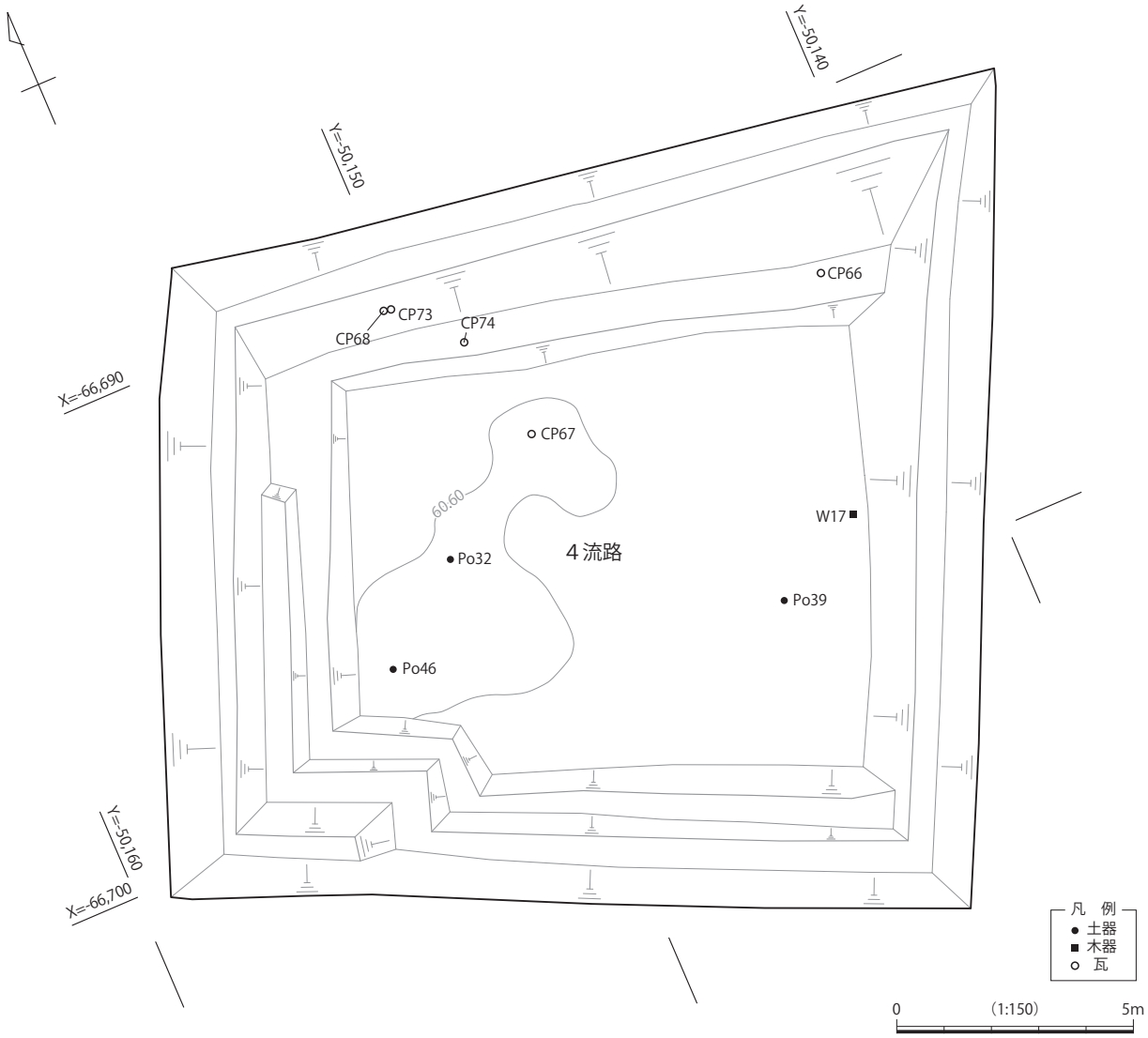
第 33 図　第１遺構面全体図

土器で図化したのはPo30・31・34・37・44・50・51・53の８点である。Po30・31は土師器坏の口縁部で、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾して立ち上がる。Po34は土師器の坏または皿の回転糸切り痕が残る平底の底部である。Po37は手づくね成形の土師器皿で、器高が低くやや丸底を呈し、底面は指オサエが顕著に残るものの未調整に近く、口縁部にはナデを施している。Po44は須恵器の高坏で、脚部に２箇所の透かしが認められる。Po50は白磁碗で、わずかに高台の痕跡が認められる。外面は露胎、内面には１条の圏線があり釉が施される。中世前期の遺物である。Po51は高台を持つ白磁壺で、高台と体部の際に１条の染付線を入れている。Po53は玉縁を持つ備前焼の甕である。

１溝からは多くの瓦が出土したので、特徴のあるものを図化した。CP19～29の11点は瓦当面が残る軒丸瓦で、このうち、CP19～24の６点はⅠ類である。CP19は最も残り部位の多いもので全体の約1/4が残る。丸瓦の剥離痕がわずかに残っており、瓦当笵に粘土を詰め込む途中に丸瓦を差し込んでおり､丸瓦の先端には加工が施されていないようである。瓦当裏面はナデ調整されている。CP20も丸瓦の剥離痕がわずかに残っており、瓦当笵に粘土を詰め込む途中に丸瓦を差し込んでいるが、丸瓦先端の加工の有無は不明である。瓦当裏面はナデ調整されている。CP21～24の４点は外区から内区蓮弁にかけての破片である。CP25～29の５点は外区に珠文が巡るⅡ類である。このうち、CP25には中房が残るが、他は外区から内区蓮弁にかけての破片で、中房は残っていない。いずれも焼成はあまり良くない。CP30～34の５点は、瓦当面が失われた軒丸瓦と考えられるものである。CP30は無文の外区と接着された丸瓦であり、Ⅰ類の軒丸瓦と想定される。丸瓦の凹面側が斜めにカットされており、他には布目痕が残る。CP31は凸面側に瓦当との接続補強の粘土が最大で厚さ2.5cm残る丸瓦である。２次調整として右側面の凹面にヘラケズリが施されている。CP32は凸面側に瓦当との接続補強の粘土が最大で厚さ1.2cm残る丸瓦である。丸瓦の凸面側が斜めにカットされており、凹面には布目痕が残る。CP33は瓦当部が剥落した丸瓦で、瓦当との接着を補強するために使用したと考えられる幅２～３mmで断面方形状の棒状の痕跡が凹凸面両側に各６箇所残されている。CP34は瓦当面が欠損、丸瓦が剥離したものである。丸瓦との接着では、凹面側には粘土による補強が行われており、丸瓦の布目痕・模骨痕が陽刻となって残る。

CP35～53の19点は軒平瓦である。このうち、CP35～49の15点がⅠ類の均整忍冬唐草文軒平瓦で、CP41～45の５点には中心飾りが残る。中心飾りはやや大きな球体の下にやや小ぶりの球体を３つ上下に重ね、大きめの球体とやや小ぶりの球体の間に、トンボの羽のように左右に２枚ずつ開く花弁状の文様が存在するものである。一方、CP35～40の６点が中心飾りの左側部分、CP46～49の４点は中心飾りの右側部分である。忍冬唐草文の全形は、茎・結節部・枝葉で構成され、左右に１単位ずつ対称に配置されている。顎は直線顎である。これら15点のうち、CP40・49を除く13点は焼成が甘く遺存状態が良くないもので、CP41の凹面に布目痕とケズリ痕、CP46の凹面に布目痕が残る以外は明確な調整痕が残っていない。なお、焼成が比較的良好なCP40・49は小破片であるが、凸面はナデ調整のようである。２次調整が認められるのは、CP35が右側面の凹面、CP45が瓦当面の凹面、CP48が左側面の凹面にヘラケズリが施されている。

CP50･51は瓦当面に弧文を施す軒平瓦である。このうち、CP50は瓦当に二重の弧文が施される。弧文上端の幅は約３mm、深さ３～５mmで断面Ｖ字状を呈する。弧文は平行していることから、型挽きによって描かれたと考えられ、上端での弧文間距離は1.3cmである。凹面には布目痕が残り、

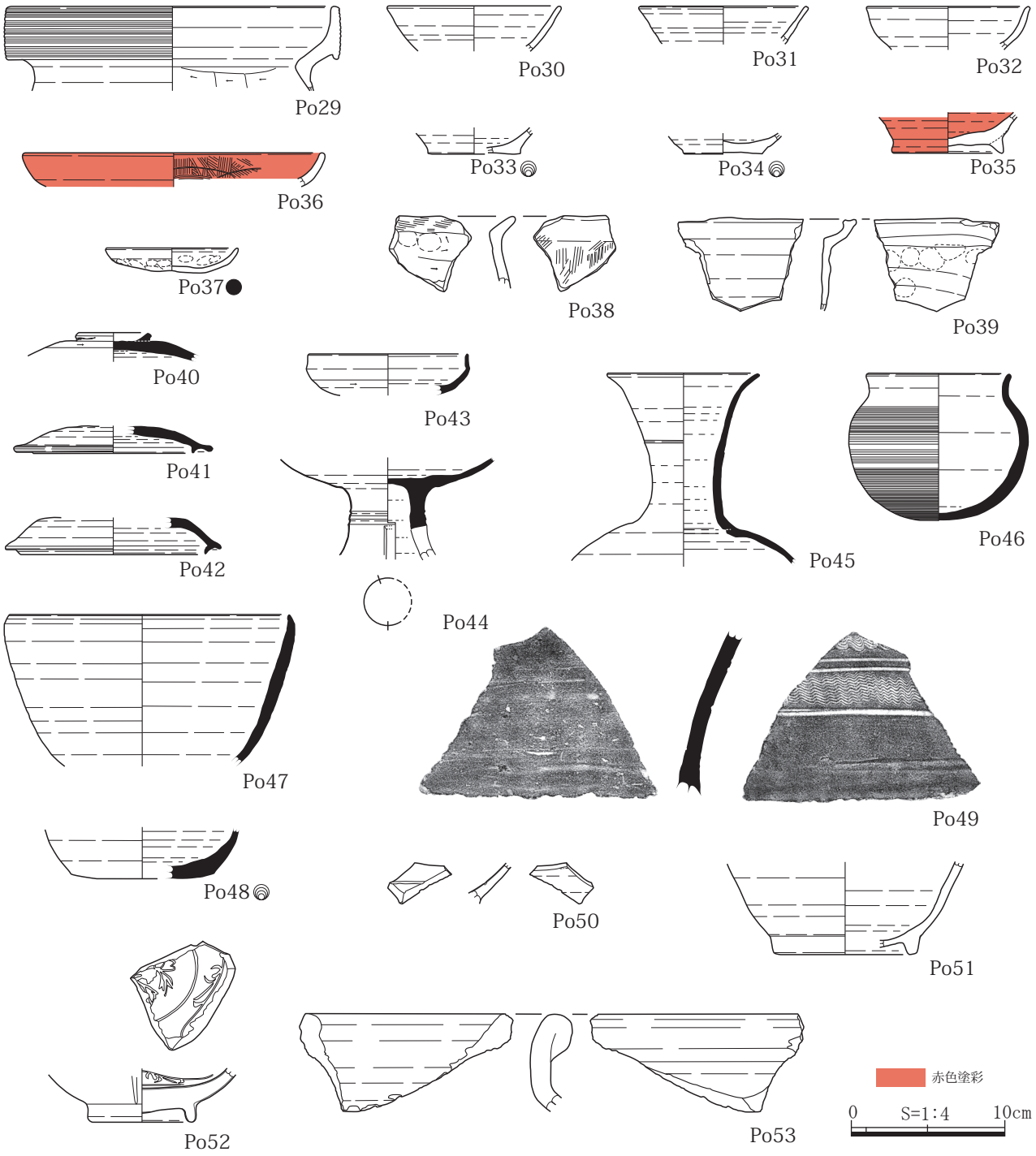


第 34 図　第２遺構面全体図

凸面はナデ調整後に５条単位のＶ字状文の始点と終点を重ねることで、連続する波状文状に沈線を描いており、上下２段存在する。顎は直線顎である。狭端側は玉縁になっている。２次調整として瓦当面の凹面にヘラケズリが施されている。これまで知られていない文様であり、軒平瓦Ⅱｂ類とする。CP51 は現状で１条の弧文を施すものである。凹凸両面とも遺存状況は悪く模糊としているが、凹面には模骨痕があり、布目痕の可能性がある痕跡もかすかに認められるが、凸面の調整等は分からない。しかし、凸面の瓦当面近くは凹凸が目立ち、これが剥離による可能性が高い。そうであれば、弧文が二重であった可能性も否定できない（軒平瓦Ⅱａ類か）。CP52 は平瓦で、凹面には粘土糸切り痕と布目痕が、凸面には縄目叩き痕が残る。瓦当面は無文であるが、ナデにより平滑に仕上げられていることから軒平瓦と判断した。２次調整として右側面および瓦当面の凹面にヘラケズリが施されている。CP53 は軒平瓦と考えられる小破片である。凸面には縄目叩きの痕跡が残るが、凹面は剥離のため遺存していない。瓦当面には、弧線を組み合わせた文様があるが全体形の推定はできず詳細は不明である。既知の軒平瓦に同文様のものはなく、軒平瓦Ｖ類とすべきものの可能性がある。今後の資料の増加に期待したい。CP54・55 は丸瓦である。CP54 は凹面に布目痕、凸面にカキ目痕が残る。２次調

整として左側面の凹面にヘラケズリが施されている。CP55 は凹面に布目痕、凸面に工具によるナデが残る。CP56～62の７点は平瓦である。凹面はいずれも布目痕が残るものであるが、凸面は CP56～58 が正格子叩き、CP59・60 は縄目叩き、CP61 はカキ目が施されている。CP62 は幅広の工具によるナデ調整であるが、側面端部脇にわずかに布目痕が存在する。２次調整が認められるのは、CP59 は右側面の凹凸両面、CP61 は右側面の凸面、CP56・58・60 は右側面の凹面、CP62 は左側面の凹面、CP57 は狭端面および右側面の凹面にヘラケズリが施されている。

CP63 は平瓦と考えられる小破片である。凸面はナデ調整､凹面もナデ調整のようだが磨り面となっており、硯に転用されていると考えられる。CP64 は熨斗瓦と考えられるもので、遺存状態は悪いも



第 35 図　Ｐ３区出土土器

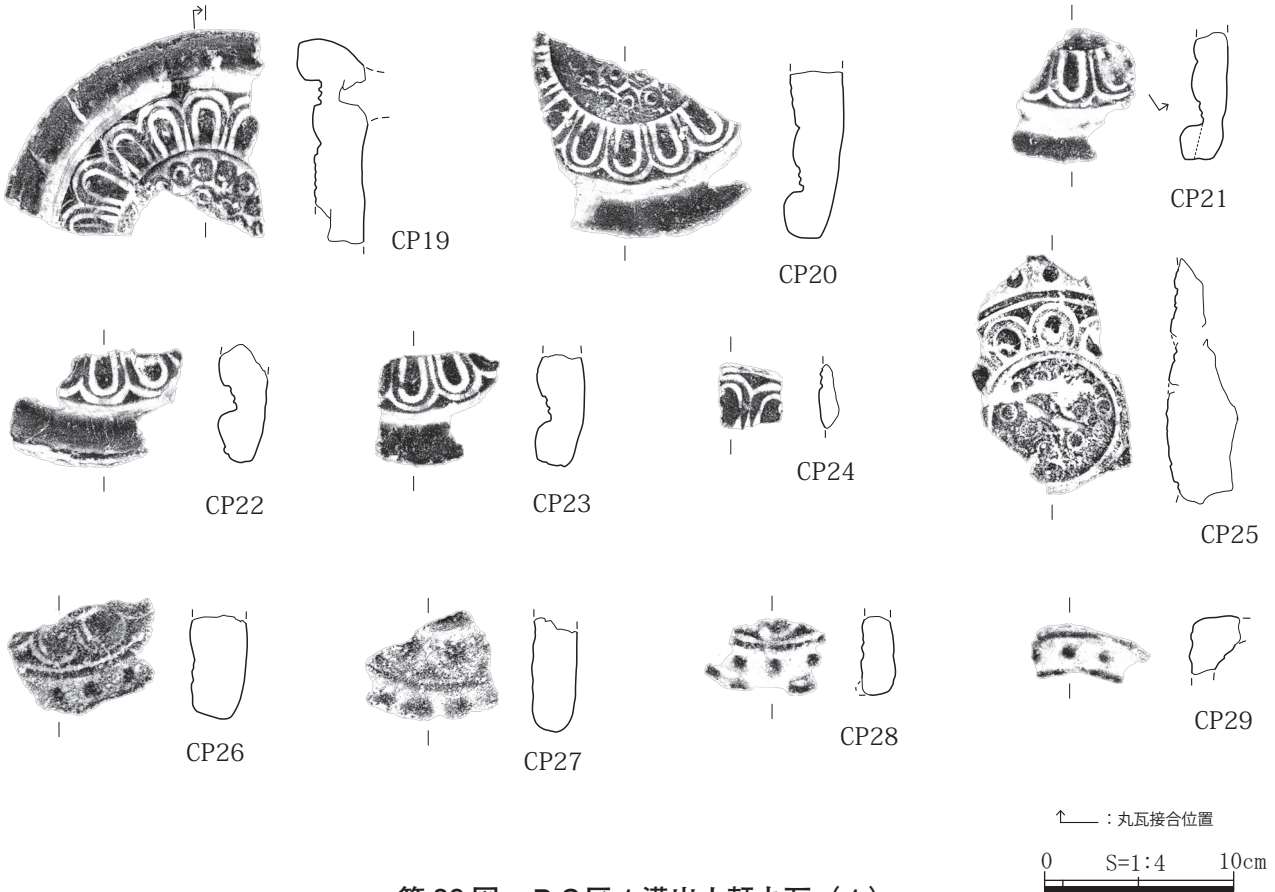
のの、凸面には縄目叩き、凹面には布目痕がかすかに残り、模骨痕も認められる。２次調整として右側面の凹凸両面にヘラケズリを施して丸みを持った形状にしている。左側面にもわずかに欠損を免れた箇所があり、幅約 13.6cmとなる。

石器は３点を図化した。Ｓ２はデイサイトの砥石で、欠損した面を除く３面がいずれも砥面となっている。他の２点は五輪塔の一部である。Ｓ３は空風輪で、風輪部分の３方向に１文字ずつ墨で梵字が書かれているが、風化のため不明瞭で、文字の読み取りは難しい。Ｓ４は地輪で、石材は共に花崗岩である。

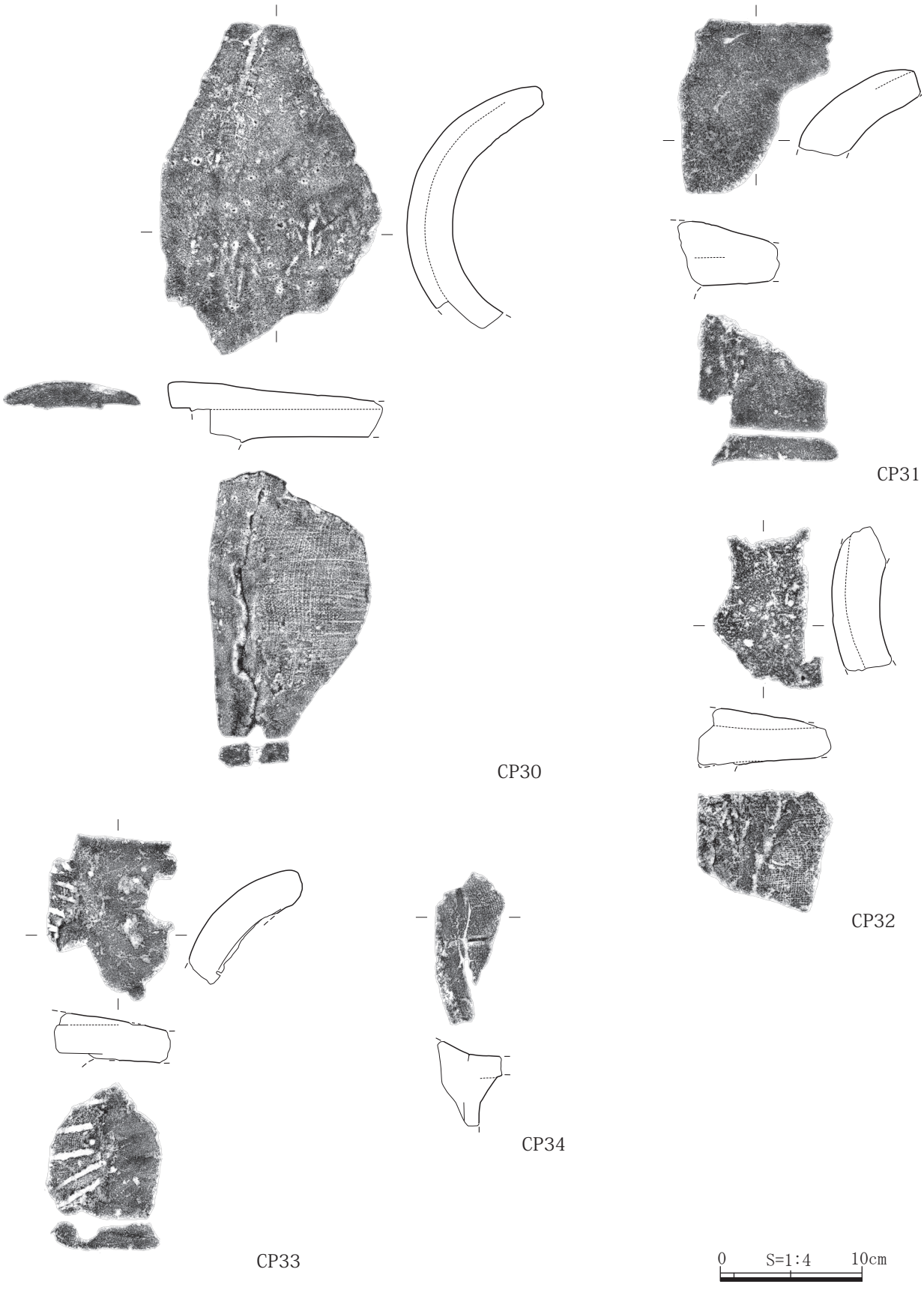
鋳造関連遺物として、埋土中から出土したCP111・114・119・120・128・130・132・135の８点を図化した。CP111・114は炉壁、CP119・120は炉壁に接続する大口径羽口、CP128・130・132・135は炉壁のクライと考えられるものである。

２流路（第 29 ～ 32・35・43 ～ 45・49・86 図、第３・６・13・14・19・20・23 表、図版６・34 ～ 37・49）

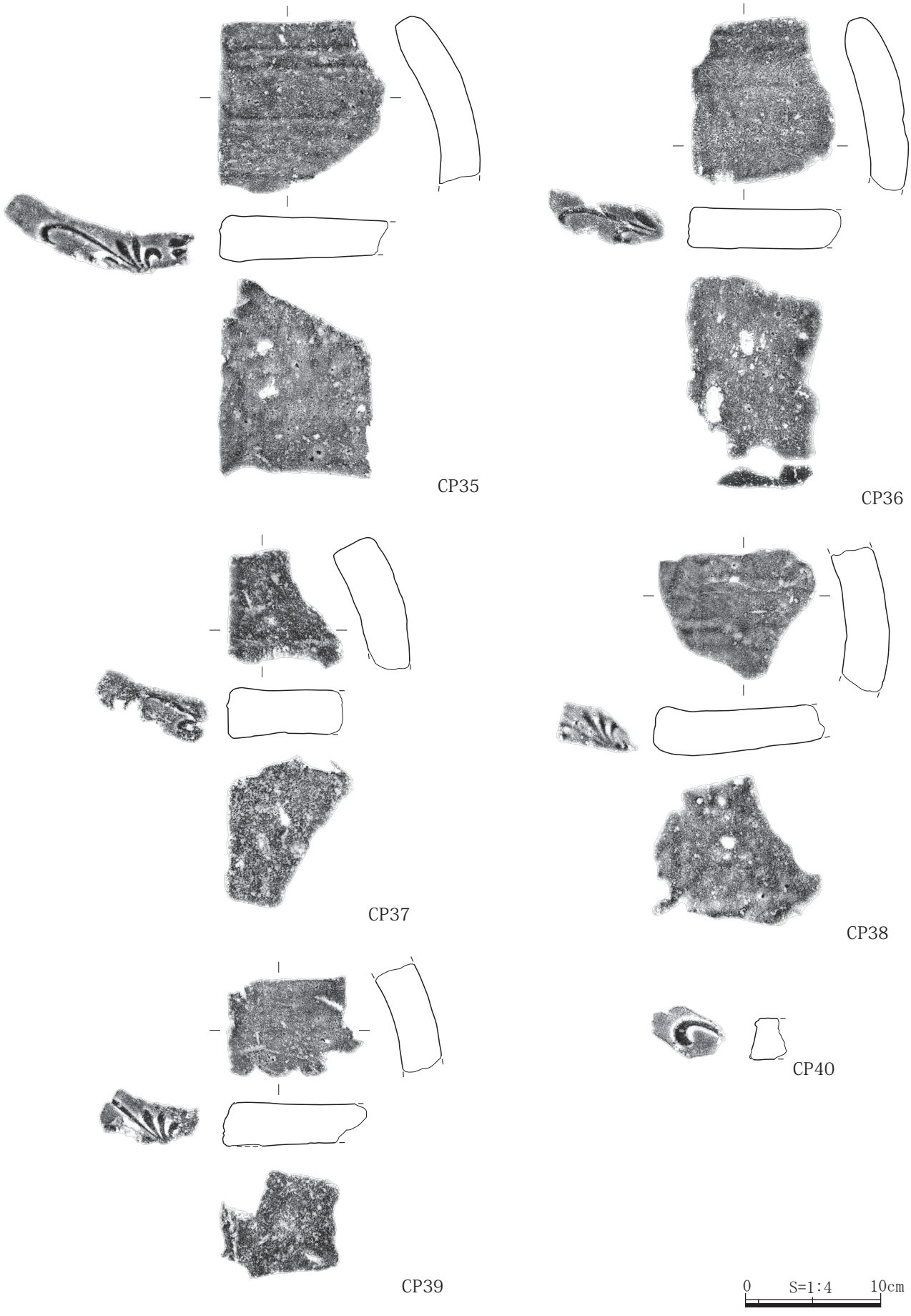
調査区全面に広がる流路である。１溝、３耕地段差の下層にある。調査区内には立ち上がりはなく、流路幅を推定することはできないが、調査区内の規模は、長さ約 14.4m、幅約 14.6m、深さ 1.2mである。地形から考えて、南から北方向へ流れていたと推定される。２流路埋土は粗砂が主体の堆積であるが、下層には礫が多く混じるようになる。流路の堆積であるため、堆積と浸食が繰り返されており、基本的には流れが強かったようであるが、一時的に流れが弱いか滞留した時期には㉜層や㊱層のようにシルトの堆積が進んだことがわかる。



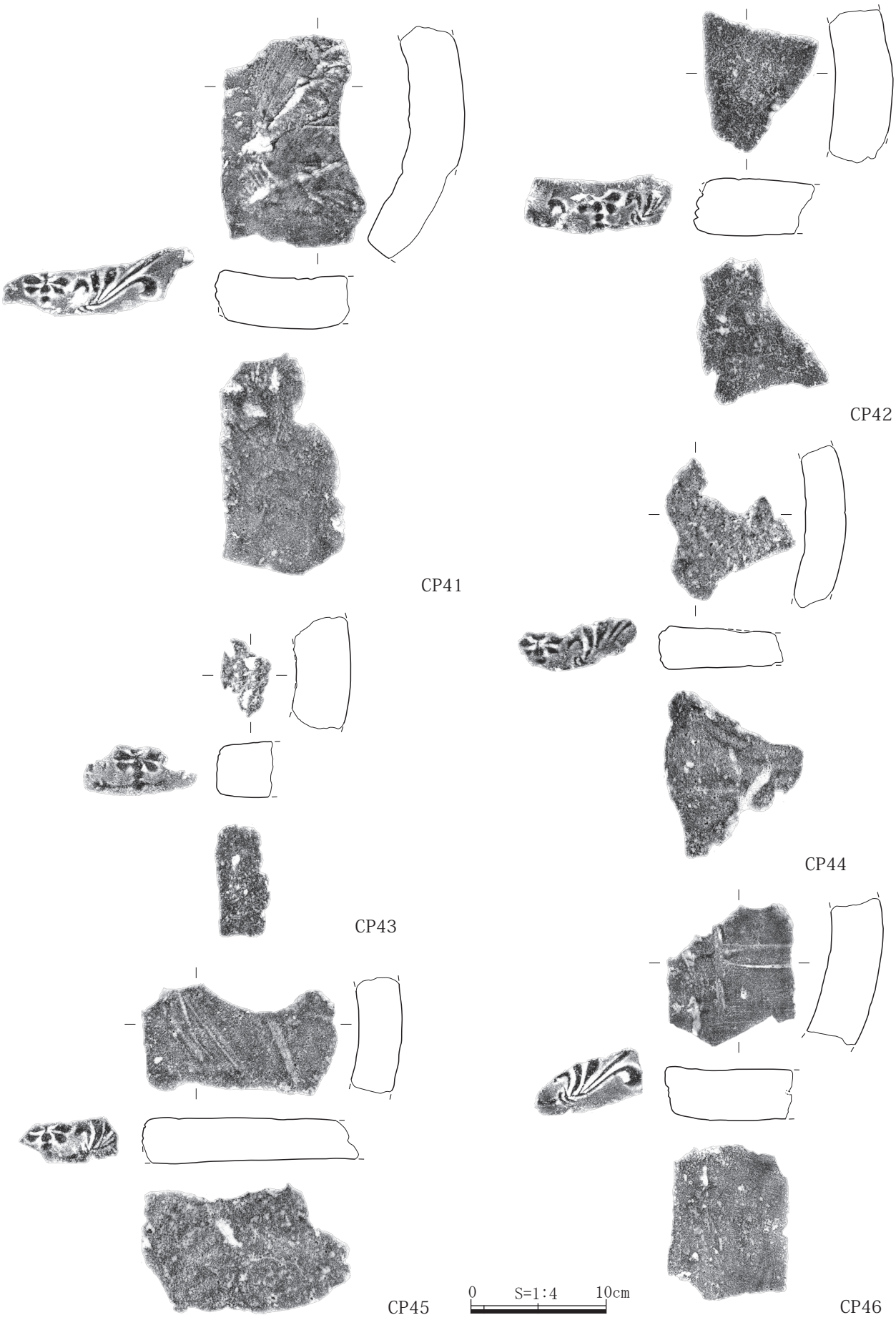
第 36 図　Ｐ３区１溝出土軒丸瓦（１）



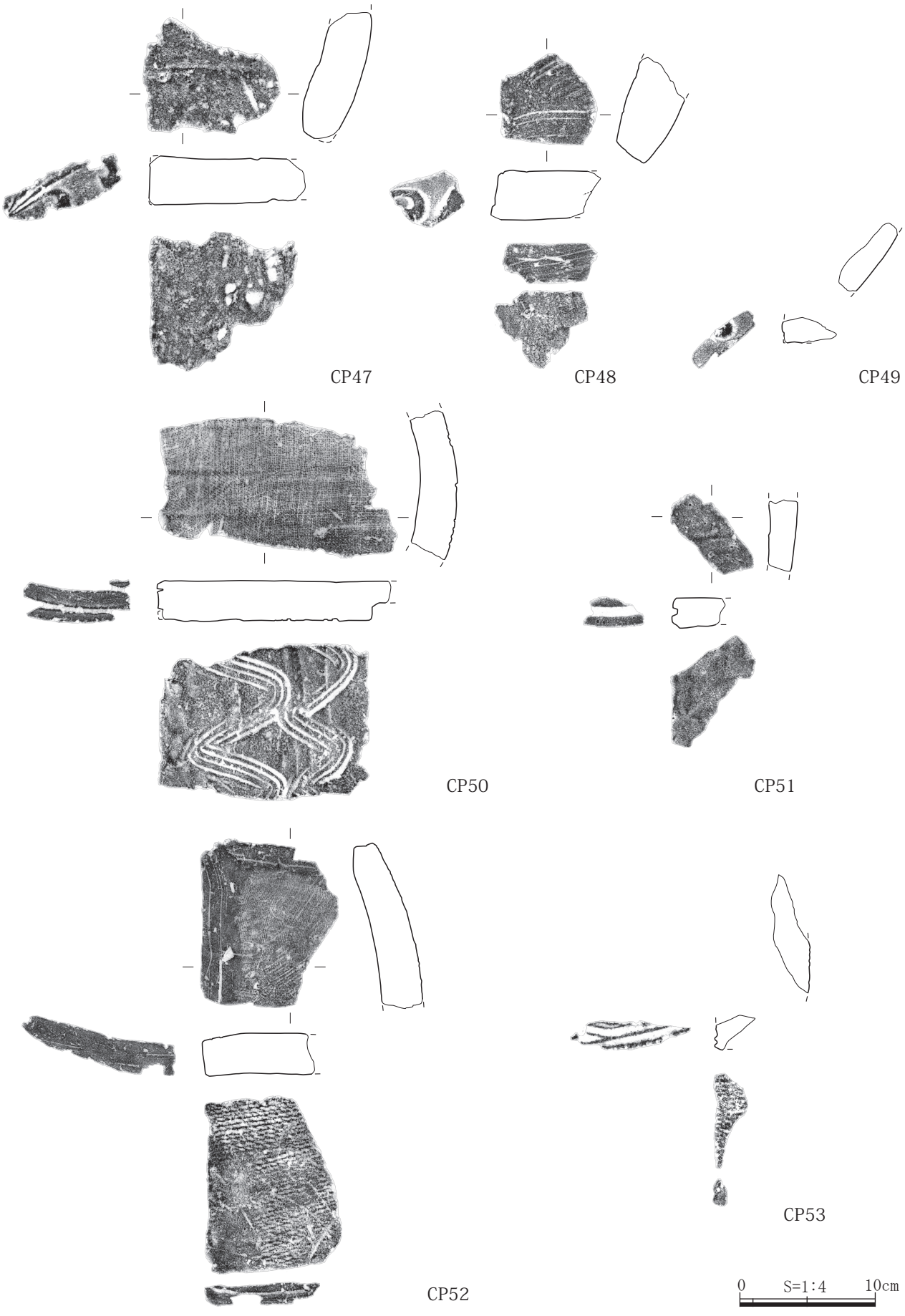
第 37 図　Ｐ３区１溝出土軒丸瓦（２）



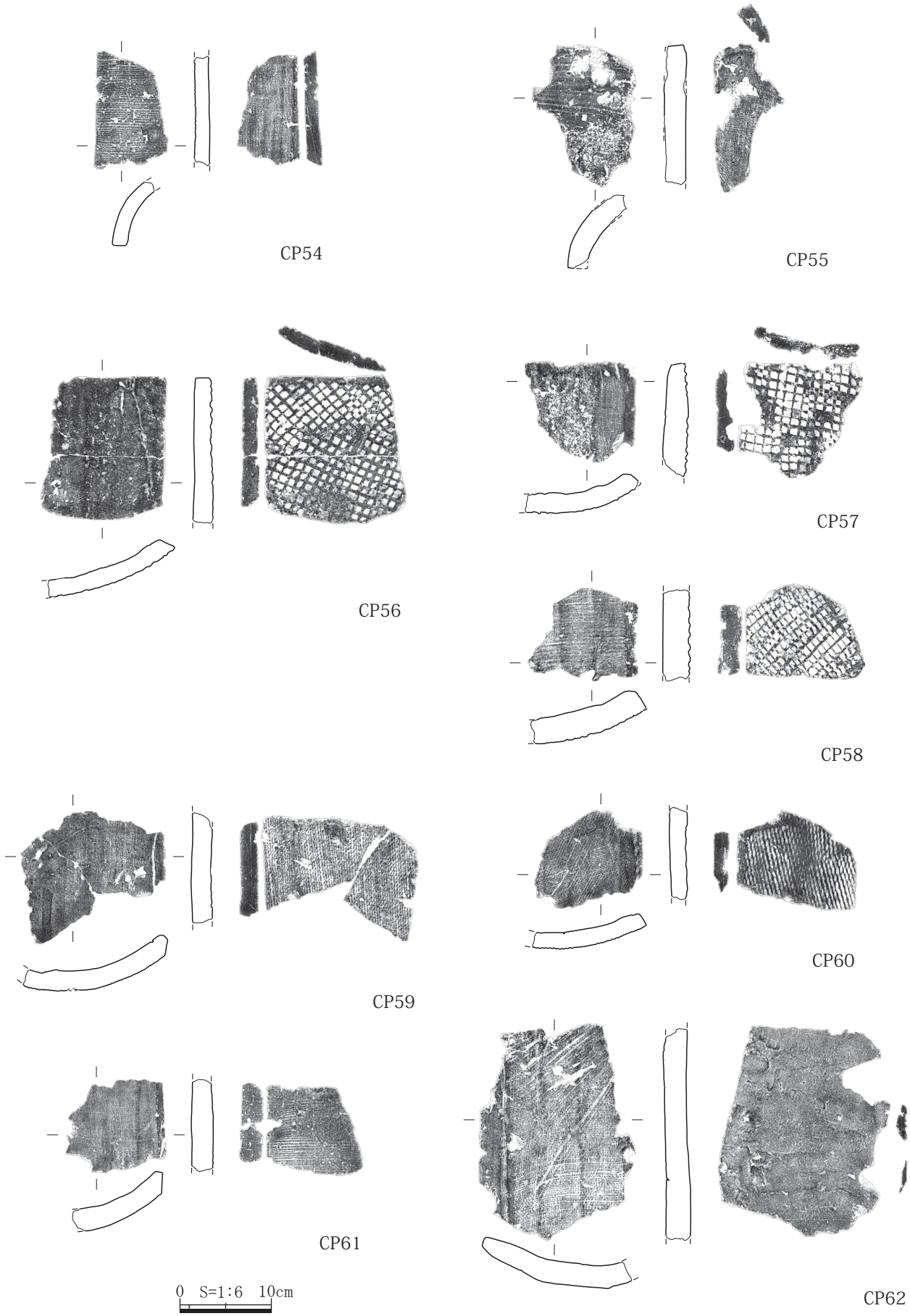
第 38 図　Ｐ３区１溝出土軒平瓦（１）



第 39 図　Ｐ３区１溝出土軒平瓦（２）

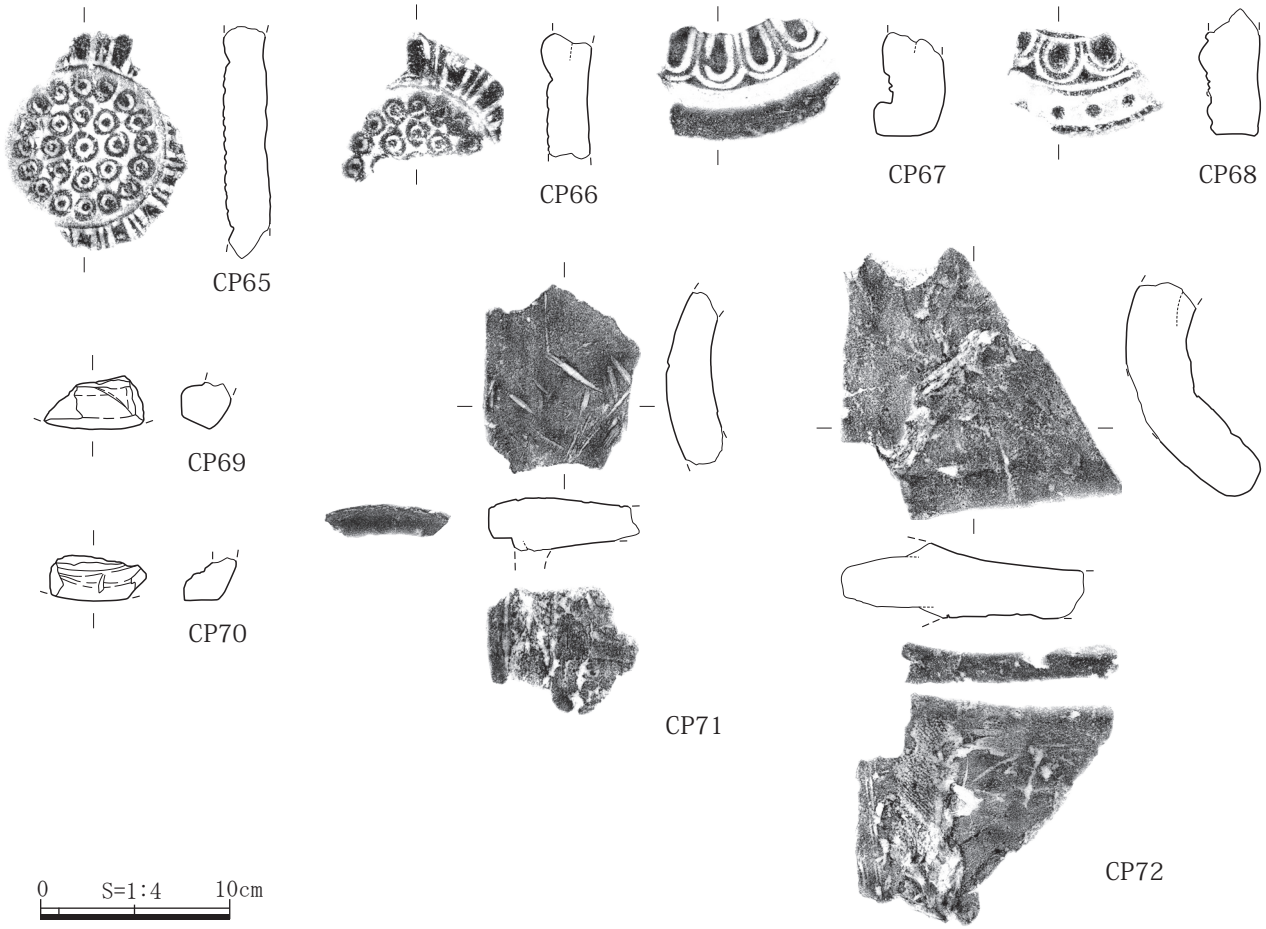


第 40 図　Ｐ３区１溝出土軒平瓦（３）



第 41 図　Ｐ３区１溝出土瓦（１）

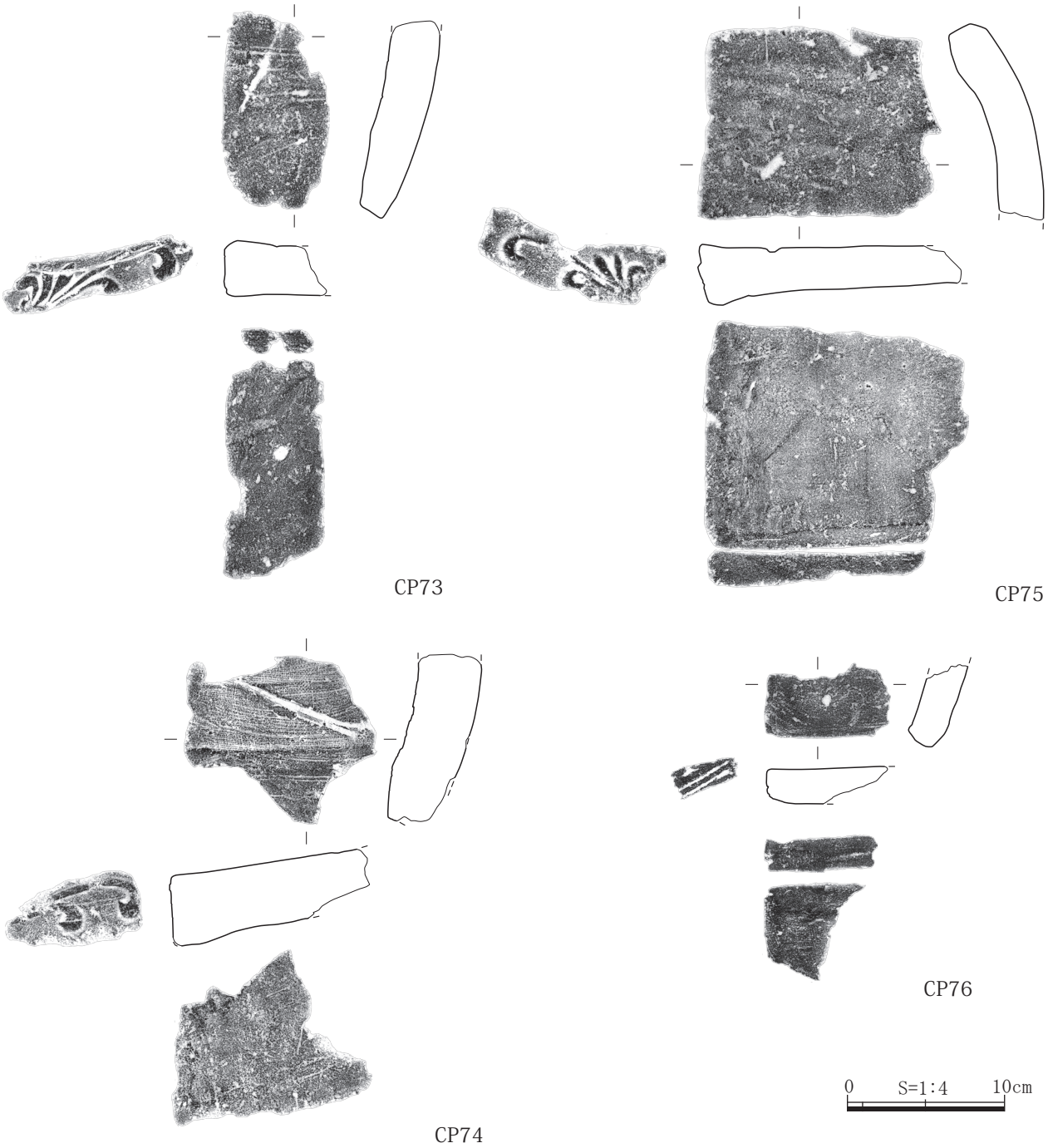
第 42 図　Ｐ３区１溝出土瓦（２）



第 43 図　Ｐ３区２流路出土軒丸瓦

土器は３点を図化した。Po32 は土師器坏の口縁部で、体部から口縁部にかけて内湾しながら外傾して立ち上がる。Po39 は瓦質土器の鍋で、受け部が比較的広く、口縁端部を外側に張り出すことで二股状になっている。内外面ともナデ調整であるが、外面のナデは粗い。Po48 は須恵器の底部で、壺等の一部と考えられる。平底で回転糸切り痕が残る。

瓦は 25 点を図化した。CP65 ～ 72 の８点は軒丸瓦と考えられるものである。このうち、CP65 ～ 67、及び CP69 ～ 71 の６点はⅠ類で、CP65･66 は中房から蓮弁にかけての部分で、外区は欠損する。ともに丸瓦の剥離痕が残っており、丸瓦の凹面にカットは認められない。CP67 は蓮弁から外区にかけての部分で、丸瓦の接着痕がわずかに残る。CP69 ～ 71 は無文の外区からわずかに内区にかかる破片であり、軒丸瓦Ⅰ類の破片と判断した。CP71 には丸瓦を接着するための補強粘土が残されている。凸面はナデ調整で、葦のような植物の葉の圧痕が残る。凹面には丸瓦の剥離痕が残る。CP72 は



第 44 図　Ｐ３区２流路出土軒平瓦

瓦当が剥離した軒丸瓦の丸瓦部である。瓦当と接着するため丸瓦の凹凸両面をカットしている。凹面の粘土剥離部に布目痕が認められる。丸瓦部の２次調整として左側面の凹凸両面にヘラケズリが施されている。CP68 は軒丸瓦Ⅱ類で、外区から内区蓮弁にかけての破片である。瓦当裏面はナデ調整されており、籾圧痕が１つ認められる。焼成は比較的良好。

CP73 ～ 76 の４点は軒平瓦である。CP73 は軒平瓦Ⅰ類の右側で、中心飾りは欠損する。直線顎。凸面はナデ、凹面は布目痕をケズリ取っている。２次調整として瓦当面の凹面にヘラケズリが施されている。CP74 も軒平瓦Ⅰ類の右側で、中心飾りは欠損する。直線顎。凸面はケズリ、凹面には布目痕が残る。２次調整として瓦当面の凸面および左側面の凹面にヘラケズリが施されている。CP75 は

軒平瓦Ⅰ類の左側で、中心飾りは欠損する。曲線顎。凹凸両面ともナデ調整。２次調整として右側面の凹凸両面にヘラケズリが施されている。CP76 は瓦当に三重の弧文が施されるが、上（凹面側）の弧文は接触スレにより潰れ気味である。弧文間の幅は上段が約６mm、下段が約４mm、弧文の深さは約１mmで断面Ｖ字状を呈する。弧文は平行していることから、型挽きによって描かれたと考えられる。凹面はナデ、凸面は布目痕をナデ消している。２次調整として左側面の凹凸両面および瓦当面の凸面にヘラケズリが施されている。顎は直線顎である。

CP77 ～ 84 の８点は平瓦である。凹面はいずれも布目痕であるが、凸面の調整は４種類が認められる。CP77 は縄目叩きをナデ消したと考えられるもの、CP78 ・ 79 はハケ目を施すもの、CP80 ・ 81 は格子状叩きを施すもの、CP82 ～ 84 はナデ調整である。なお、CP84 の凸面には動物が爪で引っ掻いたと考えられる平行する３本の沈線が存在する。

CP85 ～ 87 の３点は道具瓦と考えられるものである。CP85 は面戸瓦と考えられるもので、比較的薄く仕上げられている。凹面には布目痕が残り、凸面は丁寧なナデ調整が施されている。平瓦を焼成後にはつって成形した割り面戸であろう。CP86 ・ 87 は隅切瓦である。CP86 は右辺を端面に対して約 35 度の角度で焼成前に切り落としている。凹面には布目痕、凸面には縄目叩きが施される。CP87 は左辺を端面に対して約 30 度の角度で焼成前に切り落としている。凹面には布目痕、凸面には縄目叩きが施される。

木器として W17 を図化した。漆器椀の口縁部で薄手の木地がわずかに内湾する。内面は赤漆が塗られ、外面には黒漆のうえに赤漆で文様が描かれているが、モチーフは判然としない。

鋳造関連遺物として、埋土中から出土した CP109・110・112・113・115 ～ 118・122・124・126・127・129・131・133・134・136 の 17 点を図化した。CP109・110・112・113・115・116・122・124 は炉壁、CP117･118 は炉壁に接続する大口径羽口、CP126・127・129・131・133・134・136 は炉壁のクライと考えられるものである。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

３耕地段差（第 33 図、第６表、図版６）

調査区南寄りで検出した耕地段差である。第１遺構面の２流路に向けて掘削する過程で検出した。基盤である 30･Ⅲｂ層の黒褐色～黒色砂混じりシルトを掘削しており、褐灰色砂の 20 層に被覆されている。作土は①層のオリーブ黒色シルトであり、最大で約 0.25ｍの深さが認められるが、畦畔等の痕跡は認められないことから、上部は削平を受けていると判断した。規模は、東西方向に約 13.0ｍ、南北方向最大 3.3ｍを測る。遺物は土器と瓦片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

時期を判断することは困難であるが、２流路の上層にある耕地段差であることから、中世以降に形成されたものであろう。

４流路（第 34・35・46 図、第６・13・20 表、図版 38・39）

２流路の下層に位置する流路である。調査区内には立ち上がりはなく、流路幅を推定することはできないが、調査区内の規模は、長さ約 9.3ｍ、幅約 12.0ｍ、深さ 0.5ｍである。地形から考えて、南から北方向へ流れていたと推定される。埋土は礫と粗砂が主体の堆積であり、２流路に比べて大きな

礫が目立つ。

わずかながら、遺物の出土が認められた。土器は８点を図化した。Po36 は土師器皿の口縁部で、体部から口縁部にかけて内湾しながら外傾して立ち上がる。内外面ともに赤色塗彩が施される。Po38 は土師器の甕で、口頸部が「く」の字状に外反する。外面には縦方向のハケメが施される。Po42 は須恵器の蓋でかえりが付く。天井部外面にはヘラケズリ痕が残る。Po43 は須恵器の高坏の可能性が考えられるものである。口縁端部は内傾し、外反しながら立ち上がる。Po45 は須恵器の長頸壺で、口縁部から肩部にかけての破片である。口頸部はゆるく外反しながら外傾して開く。Po46 は須恵器の短頸壺である。肩の張らない球形に近い胴部に、短い口縁がわずかに外反しやや外傾してつく。胴部には全面にカキ目が施される。Po47 は須恵器の鉢である。わずかに内湾しながら外傾して立ち上がり、口縁端部を内側に屈曲させる。Po49 は須恵器の甕と考えられるもので、胴部との接着部が剥離した口縁部破片である。２段の複線波状文が施される。

図化した瓦は２点である。CP88 は丸瓦で凹面には布目痕、凸面はナデが施される。左側面は切断後に２次調整として凸面側をヘラケズリによって調整している。CP89 は平瓦で凹面には模骨痕と布目痕が、凸面には格子状叩きが明瞭に残る。右側面は切断後に２次調整として凹面側をヘラケズリによって調整している。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

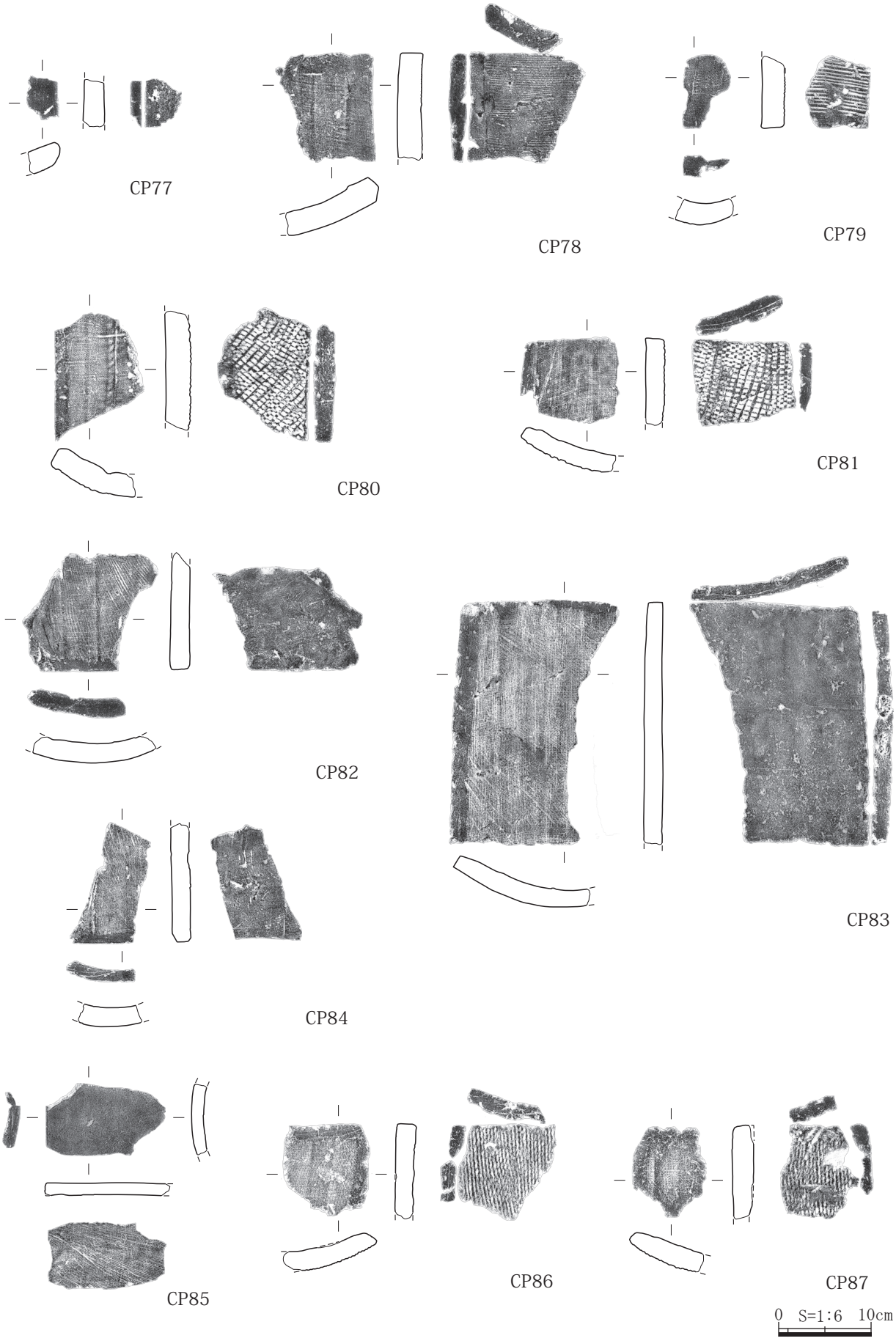
調査区内出土遺物（第 35・47・49 図、第 13・14・20・23 表、図版 39 ～ 41）

出土した遺物の内には、遺構を明確にすることができないが特徴のある遺物があるため、ここで記載する。

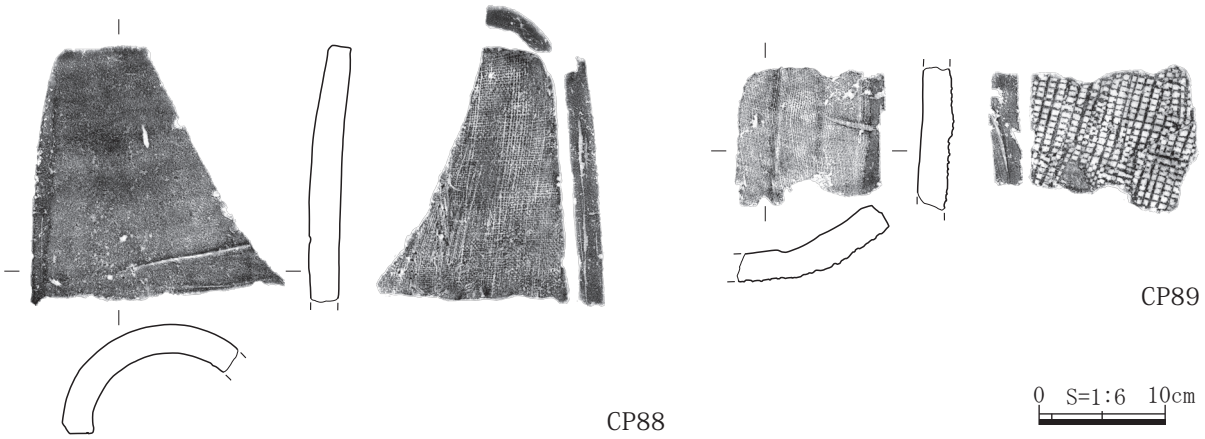
Po29 は弥生土器の甕である。口縁部はほぼ直立し、外面に 12 条の擬凹線が施される。Po33 は土師器の坏と考えられる回転糸切り痕が残る平底の底部である。Po35 は断面三角形状の高台を持つ土師器の坏である。内外面に赤色塗彩が施される。Po40 は輪状つまみを持つ須恵器の蓋である。Po41 はかえりを持つ須恵器の蓋である。かえりは短い。Po52 は中国製の青磁碗である。龍泉窯製で、内外面に厚く青磁釉が掛けられているが、高台内は青磁釉に先駆けて輪状に透明釉を掛けている。碗の内面には草花文がスタンプされており、外面には蓮弁が描かれている。

５点の瓦を図化した。このうち４点が軒丸瓦で、CP90 ・ 91 がⅠ類、CP92 ・ 93 がⅡ類である。CP90 は内区がほぼ完存している。しかし、遺存状況が悪く、瓦当面の文様は模糊としている。瓦当裏面には丸瓦の剥離痕がわずかに残っており、瓦当笵に粘土を詰め込む途中に丸瓦を差し込んだことが分かる。瓦当裏面はナデ調整である。CP91 は軒丸瓦の外区と接着された丸瓦である。内区はほぼ欠損し、わずかに間弁が１つ残るのみである。丸瓦は凹面に布目痕が残り、凸面には粗いナデ調整が施される。焼成は良好で須恵質である。CP92・93 はともに焼成が甘く、遺存状態は良くない。特に CP92 は瓦当面の文様が模糊としている。なお、CP92 には丸瓦の剥離痕が残っており、瓦当笵に粘土を詰め込む途中に丸瓦を差し込んだことが分かる。瓦当裏面は共に粗いナデ調整である。CP94 は丸瓦であるが、凸面に平行叩きを施す。凹面には模骨痕、布目痕が残る。右側面は切断後に２次調整として凹面側をヘラケズリによって調整している。

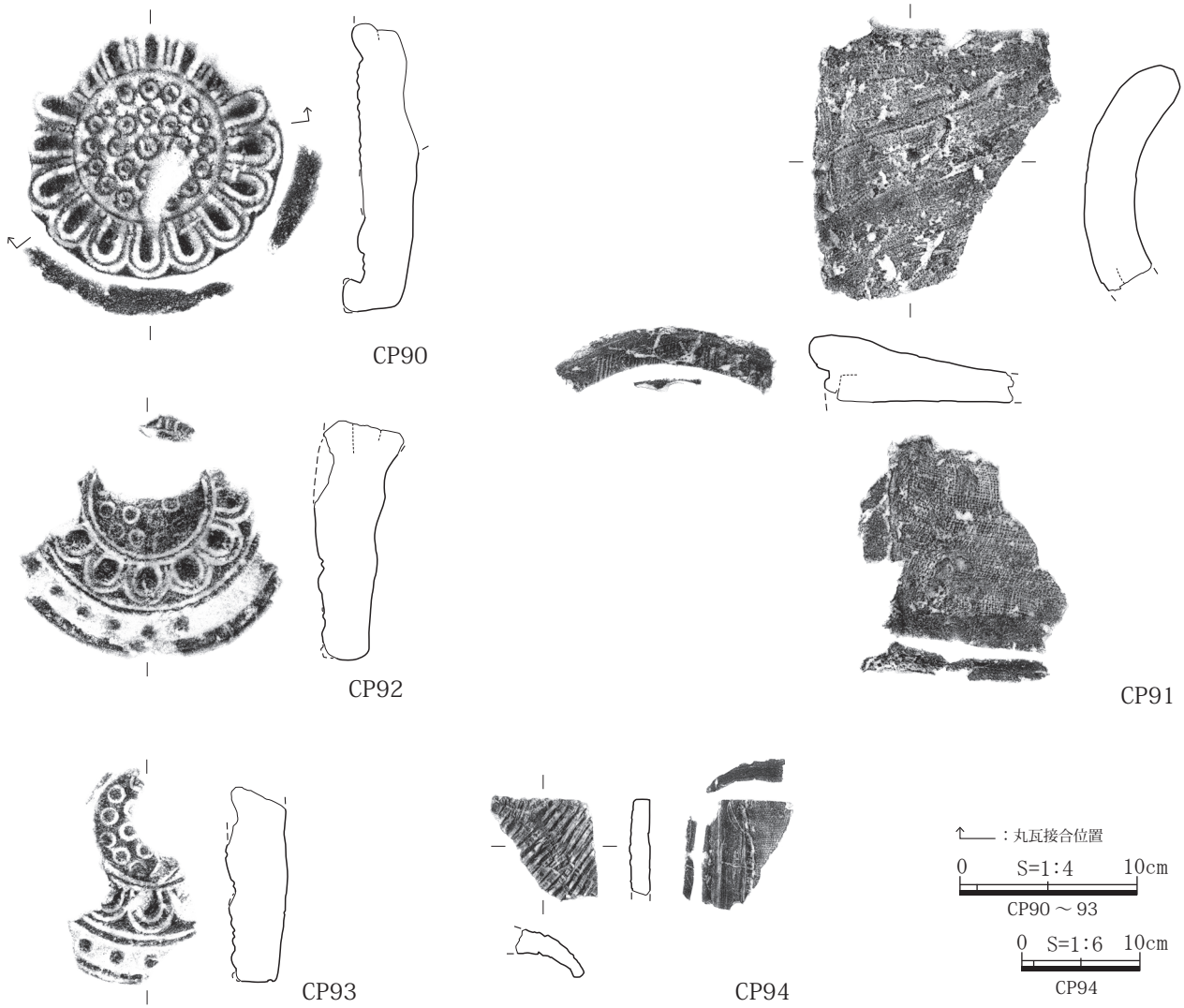
木器として W18 を図化した。高台を持つ漆器椀で、内外面ともに黒漆が塗布されている。高台内には「舎」と赤漆で書かれている。



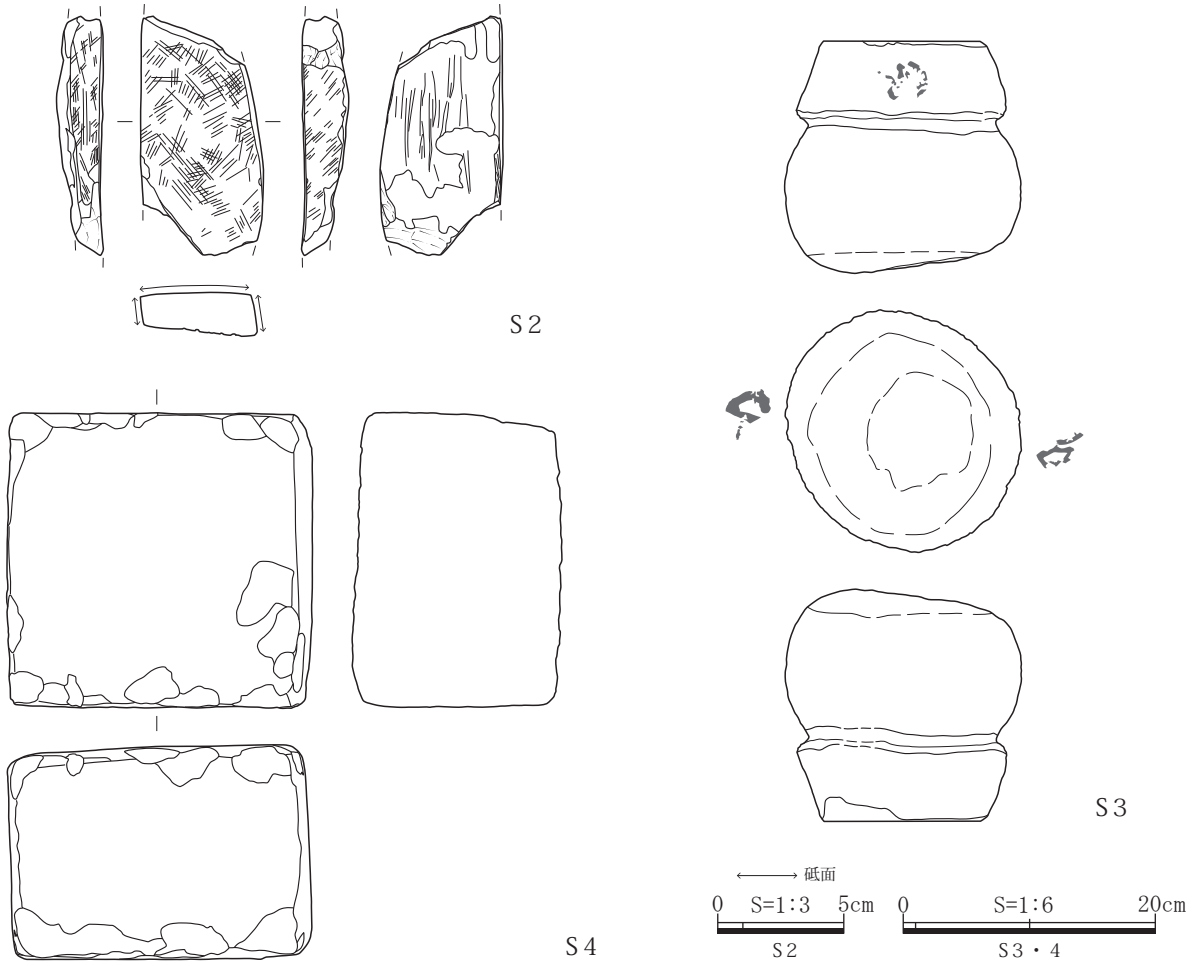
第 45 図　Ｐ３区２流路出土瓦



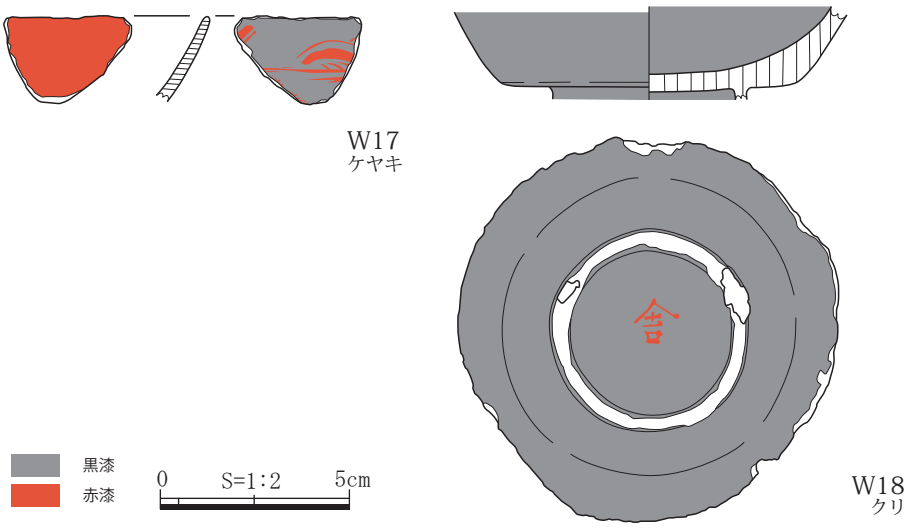
第 46 図　Ｐ３区４流路出土瓦



第 47 図　Ｐ３区調査区内出土瓦



第 48 図　Ｐ３区出土遺物



第 49 図　Ｐ３区出土木器

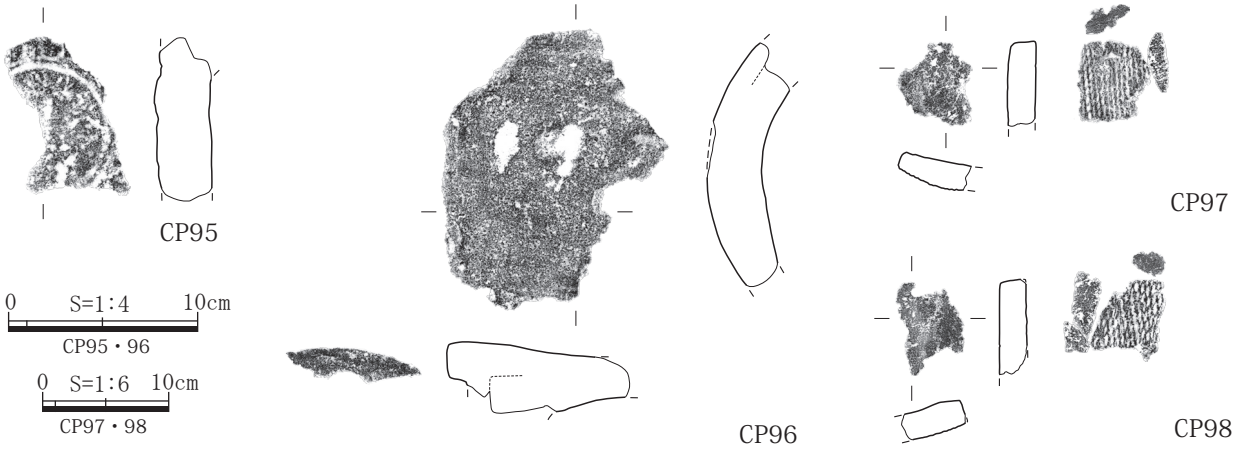
Ｐ２・３区調査区内出土遺物（第 50・86 図、第３・20・21 表、図版 42・49）

Ｐ２区およびＰ３区の排土を集めた中に、調査時に把握できなかった遺物が含まれていた。出土地区を明確に出来ないが特徴のある遺物のため報告を行う。

CP95 は軒丸瓦Ⅱ類の中房付近であり、わずかに蓮弁も残る。焼成が甘く遺存状態が良くないため、瓦当面の文様は不明瞭である。瓦当裏面には丸瓦の剥離痕が残っており、瓦当笵に粘土を詰め込む途中に丸瓦を差し込んだことが分かる。CP96 は無文の外区と接着された丸瓦であり、瓦当面が剥離した軒丸瓦Ⅰ類である。丸瓦は瓦当笵に粘土を詰め込む途中に差し込まれているが、丸瓦の先端に加工は施されていない。不明瞭ではあるが凹凸両面ともナデ調整と考えられる。

CP97・98 は共に道具瓦である。隅切瓦であると考えられるもので、CP97 は左辺を端面に対して約 30 度の角度で焼成前に切り落としている。凹面には布目痕、凸面には縄目叩きが施される。２次調整は認められない。CP98 は右辺を端面に対して約 30 度の角度で焼成前に切り落としている。凹面には布目痕、凸面には縄目叩きが施される。焼成は良好で須恵質である。２次調整として右側面の凹面にヘラケズリを施している。

鍛冶関連遺物として、CP123 を図化した。CP123 は炉壁の下段部分と考えられるものである。



第 50 図　Ｐ２・３区調査区内出土瓦（排土中）

写真７　Ｐ３区 表土掘削後段階確認（南西から）

写真８　Ｐ３区 作業風景（東から）

第５節　Ｐ４区の調査

第１項　概要と基本層序

Ｐ４区は、石塚廃寺跡から約10m東に位置し、比高差は約４～５ｍを測る。調査区の現況は１筆の水田であり、南を市道、西を農道によって画されている。北東に向けて緩やかに下がる旧地形は圃場整備によって改変され、北東に厚く造成土が堆積していた。重機による造成土と近世までの耕作土の除去後、Ｐ５区で確認された１流路の検出面を第１遺構面とした。調査区中心にある倉吉市教育委員会による試掘トレンチの断面及び壁面沿いに巡らした排水トレンチ断面の観察から、下層は調査区全域が流路であることが確認され遺物の出土状況が希薄であることから、第１遺構面の調査終了後に引き続き重機による基盤層までの掘削を進めた。北壁排水トレンチではⅧ層まで掘削し、基盤層の堆積状況を確認したが、それ以外はⅦ層上面までの掘削によって調査を終了した（第53図、図版８）。

本調査区は丘陵裾を北東方向に流れる自然流路上に位置し、少なくとも３流路→２流路→１流路の３段階にわたり川筋を変えながら変遷していることが確認された。

基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ　層　造成土下の調査区西壁で堆積が確認された褐灰色細粒砂混じりシルト層。

Ⅱ　層　調査区南・北・西壁で堆積が確認された黒褐色粗粒砂混じりシルト層。中世の土器を含む。

Ⅲ　層　調査区のほぼ全面で堆積する黒色中粒砂～細粒砂混じりシルト層。中世の土器などを含む。

Ⅳ　層　調査区東・南壁で堆積が確認された褐灰色粗粒砂混じりシルト層。中世の土器などを含む。

Ⅴ　層　調査区東・南壁で堆積が確認された褐灰色中粒砂混じりシルト層。中世の土器などを含む。

Ⅵ　層　調査区東・南壁で堆積が確認された褐灰色細粒砂混じりシルト層。中世の土器などを含む。以下、Ⅶ層までの間に古代の流路の堆積土が介在する。

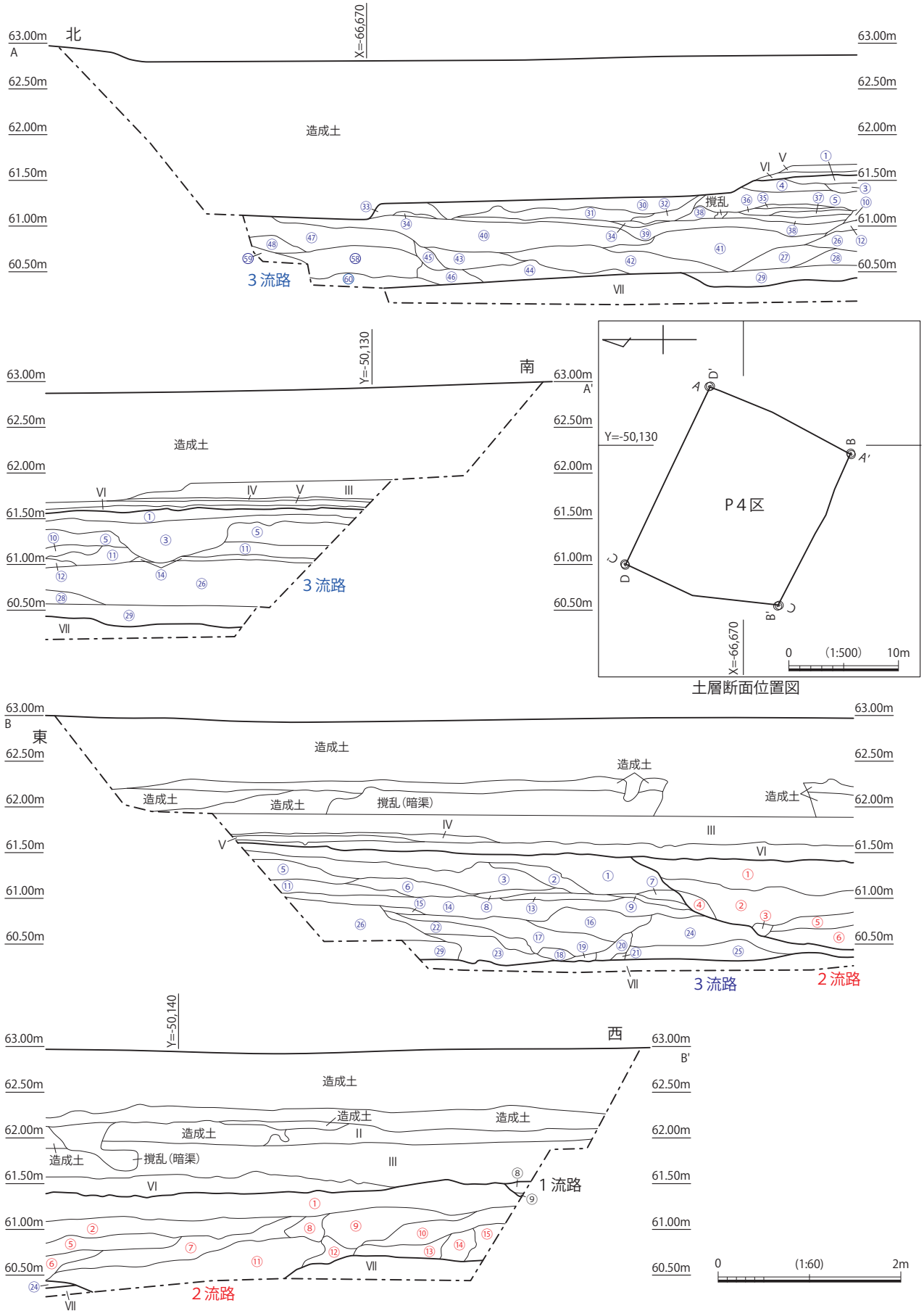
Ⅶ　層　黄灰色細礫～中礫で調査区全面において確認された基盤層である。

Ⅷ　層　灰黄色粘土層で基盤層である。

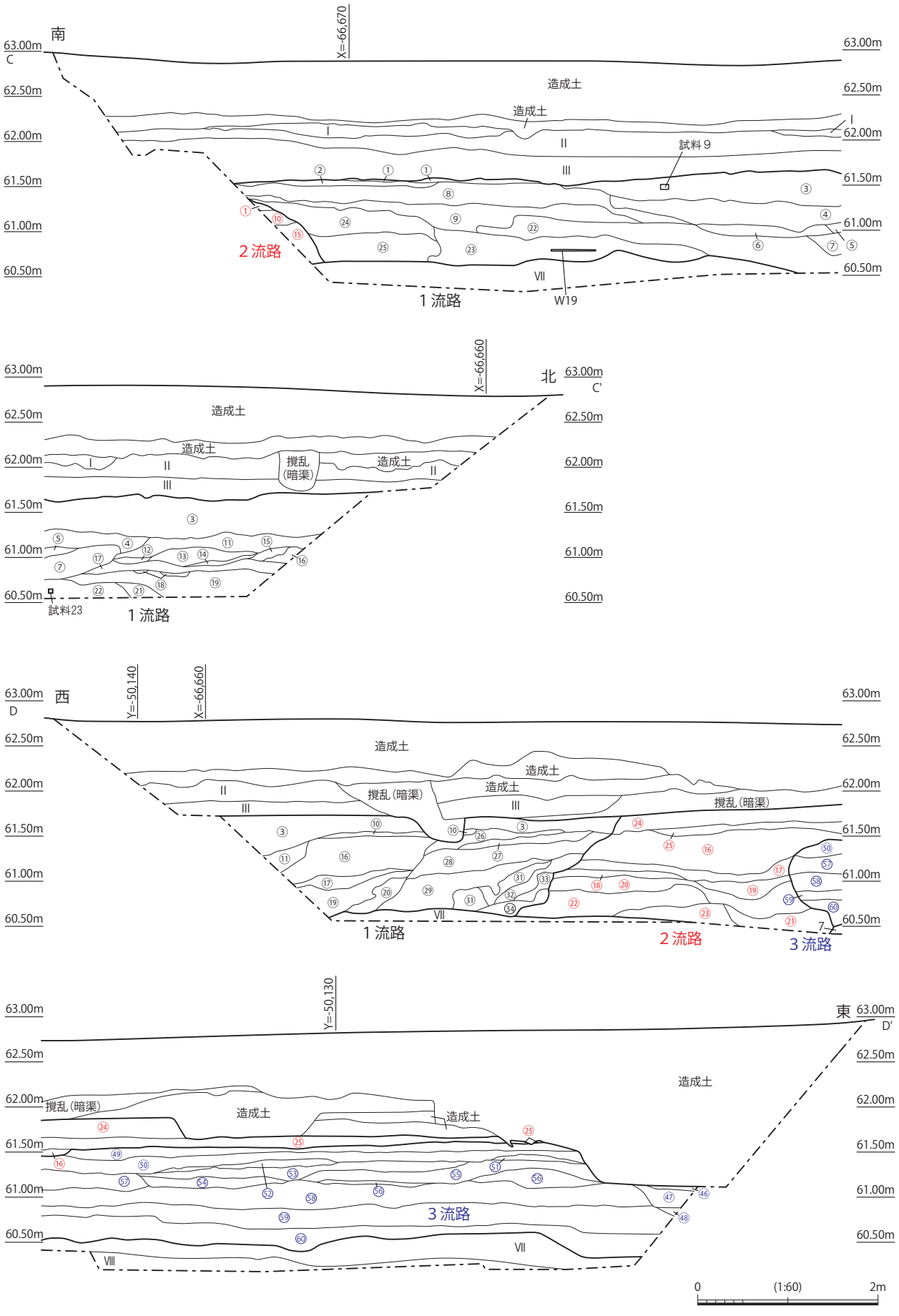
第２項　検出した遺構と遺物

１流路（第53～56・86図、第３・７・14・20・23表、図版43・49）

調査区西に位置し、南北方向に主軸をとる。Ⅲ層下面で検出され、北壁西寄りで立ち上がり２流路を切っている。西側は調査区外に拡がるため全容は不明である。Ⅲ層と基盤層であるⅦ層の間隙に①～㉞層の砂混じりシルト及び砂層が互層を呈して堆積する。検出した規模は、長さ約8.3m、幅約3.7m、深さは最深部で1.1mを測る。堆積土⑬～⑮層はシルト層が、⑳・㉓・㉔層などは粗粒砂がラミナ状に介在することから、比較的急流であった時期と滞留している時期があったと想定される。遺物



第 51 図　調査区東壁・南壁土層断面図、土層断面位置図



第 52 図　調査区西壁・北壁土層断面図

基本層序
Ⅰ　10YR6/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ1～2cmブロック混)
　粘性中　しまり中
Ⅱ　10YR3/1 黒褐色 粗粒砂混じりシルト (φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
Ⅲ　10YR2/1 黒色 中粒砂～細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
Ⅳ　10YR5/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
Ⅴ　10YR4/1 褐灰色 中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
Ⅵ　10YR5/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
Ⅶ　2.5Y5/1 黄灰色 細礫～中礫　粘性なし　しまりなし　(基盤層)
Ⅷ　2.5Y7/2 灰黄色 粘土　粘性強　しまり中　(基盤層)

１流路
①　2.5Y5/1 黄灰色 中粒砂～粗粒砂　粘性なし　しまり弱
②　2.5Y6/1 黄灰色 中粒砂～極粗粒砂　粘性なし　しまり弱
③　10YR4/1 褐灰色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト (生木混)　粘性中　しまり中
④　10YR4/1 褐灰色 粗粒砂～極粗粒砂混じりシルト (粗粒砂～極粗粒砂ラミナ状混)
　粘性弱　しまり中
⑤　10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト (生木混　φ2cm炭化物混)　粘性強　しまり中
⑥　10YR5/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑦　10YR5/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑧　10YR5/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑨　10YR7/1 灰白色 ～10YR6/1 褐灰色 シルト混じり粗粒砂　粘性弱　しまり弱
⑩　10YR7/2 灰黄色 中粒砂混じりシルト　粘性弱　しまり中
⑪　10YR4/1 褐灰色 粗粒砂～中粒砂混じりシルト (粗粒砂～中粒砂ラミナ状混)
　粘性中　しまり中
⑫　2.5Y5/1 黄灰色 極粗粒砂～粗粒砂　粘性なし　しまりなし
⑬　10YR5/1 褐灰色 シルト混じり中粒砂～粗粒砂 (シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑭　10YR5/1 褐灰色 シルト混じり中粒砂～粗粒砂 (シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑮　10YR5/1 褐灰色 シルト混じり中粒砂～粗粒砂 (シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑯　10YR5/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性弱　しまり弱
⑰　10YR4/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑱　2.5Y6/2 灰黄色 中粒砂～粗粒砂　粘性なし　しまりなし
⑲　10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細粒砂 (シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑳　10YR4/1 褐灰色 粗粒砂～中粒砂混じりシルト (粗粒砂～中粒砂ラミナ状混)
　粘性弱　しまり弱
㉑　10YR5/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり中
㉒　2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト混じり中礫～大礫　粘性なし　しまりなし
㉓　10YR3/1 黒褐色 粗粒砂～極粗粒砂混じりシルト
　(粗粒砂～極粗粒砂ラミナ状混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
㉔　10YR3/1 黒褐色 ～10YR4/1 褐灰色 中粒砂 (粗粒砂ラミナ状混)　粘性弱　しまり中
㉕　10YR2/1 黒色 粗粒砂～極粗粒砂混じりシルト (粗粒砂～極粗粒砂ラミナ状混)
　粘性中　しまり中
㉖　10YR5/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
㉗　10YR5/1 褐灰色 細粒砂～中粒砂混じりシルト　粘性弱　しまり中
㉘　10YR4/1 褐灰色 細粒砂～細礫混じりシルト (細粒砂～細礫ラミナ状混)
　粘性弱　しまり中
㉙　10YR3/1 黒褐色 中粒砂～細粒砂混じりシルト (中粒砂～細粒砂ラミナ状混)
　粘性弱　しまり弱
㉚　10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり弱
㉛　10YR5/1 褐灰色 粗粒砂～中粒砂混じりシルト (粗粒砂～中粒砂ラミナ状混)
　粘性弱　しまり中
㉜　10YR4/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
㉝　10YR5/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
㉞　10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強

２流路
①　10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト (φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
②　10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混　φ1cm炭化物混)
　粘性中　しまり中
③　10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
④　10YR5/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑤　2.5Y6/1 黄灰色 極粗粒砂～中礫　粘性なし　しまりなし
⑥　10YR3/1 黒褐色 極細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
⑦　10YR5/1 褐灰色 シルト混じり中粒砂 (シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑧　10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混　生木混)　粘性強　しまり中
⑨　10YR7/1 灰白色 シルト混じり中粒砂～粗粒砂 (シルトラミナ状混)　粘性なし　しまり弱
⑩　10YR4/1 褐灰色 粗粒砂～中粒砂混じりシルト (粗粒砂～中粒砂ラミナ状混)
　粘性弱　しまり弱
⑪　2.5Y6/2 灰黄色 シルト混じり粗粒砂～細礫　粘性弱　しまり弱
⑫　10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混　生木混)　粘性強　しまり中
⑬　2.5Y6/1 黄灰色 中粒砂～粗粒砂　粘性なし　しまりなし
⑭　10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混　φ1cm炭化物混)
　粘性強　しまり中
⑮　10YR5/1 褐灰色 粗粒砂～極粗粒砂　粘性なし　しまり弱
⑯　10YR4/1 褐灰色 粗粒砂～中粒砂混じりシルト (粗粒砂～中粒砂ラミナ状混)
　粘性中　しまり中
⑰　10YR4/1 褐灰色 細粒砂～中粒砂混じりシルト (細粒砂～中粒砂ラミナ状混)
　粘性弱　しまり中
⑱　10YR5/1 褐灰色 細粒砂～中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑲　10YR5/1 褐灰色 細粒砂～中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑳　10YR3/1 黒褐色 極粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
㉑　10YR4/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性弱　しまり弱
㉒　10YR4/1 褐灰色 粗粒砂～中粒砂混じりシルト　粘性強　しまり中
㉓　10YR5/1 褐灰色 極粗粒砂～粗粒砂　粘性なし　しまりなし
㉔　2.5Y4/1 黄灰色 中礫混じりシルト　粘性中　しまり強
㉕　2.5Y5/1 黄灰色 極粗砂粒混じりシルト　粘性中　しまり強

３流路
①　10YR5/1 褐灰色 細粒砂～中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
②　10YR4/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
③　10YR5/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
④　10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり中
⑤　10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細粒砂 (シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり中
⑥　10YR5/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑦　10YR4/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑧　10YR5/1 褐灰色 細粒砂～中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑨　10YR5/1 褐灰色 細粒砂～中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑩　10YR2/1 黒色 粗粒砂混じりシルト (粗粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑪　2.5Y6/2 灰黄色 シルト混じり粗粒砂 (粗粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑫　10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑬　10YR5/1 褐灰色 中粒砂混じりシルト (中粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑭　10YR2/1 黒色 極細粒砂～細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
⑮　2.5Y6/2 灰黄色 粗粒砂　粘性なし　しまりなし
⑯　2.5Y6/2 灰黄色 シルト混じり中粒砂～粗粒砂　粘性弱　しまり弱
⑰　2.5Y6/2 灰黄色 シルト混じり粗粒砂～極粗粒砂 (シルトラミナ状混)
　粘性弱　しまり弱
⑱　10YR2/1 黒色 中粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
⑲　10YR3/1 黒褐色 中粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
⑳　10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
㉑　10YR5/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
㉒　10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混　φ1cm炭化物混)
　粘性中　しまり中
㉓　2.5Y6/2 灰黄色 シルト混じり粗粒砂～極粗粒砂 (シルトラミナ状混)
　粘性弱　しまり弱
㉔　10YR5/1 褐灰色 極細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
㉕　2.5Y6/1 黄灰色 中粒砂～中礫　粘性なし　しまりなし
㉖　10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
㉗　2.5Y6/2 灰黄色 粗粒砂～極粗粒砂　粘性なし　しまりなし
㉘　2.5Y6/2 灰黄色 粗粒砂混じりシルト (粗粒砂ラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
㉙　10YR2/1 黒色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト (中粒砂～粗粒砂ラミナ状混)
　粘性弱　しまり中
㉚　10YR4/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
㉛　10YR3/1 黒褐色 粗粒砂混じりシルト (粗粒砂ブロック状混)　粘性中　しまり中
㉜　10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
㉝　10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
㉞　10YR7/2 にぶい黄橙色 シルト混じり細粒砂　粘性弱　しまり弱
㉟　10YR8/2 灰白色 シルト混じり極細粒砂　粘性弱　しまり弱
㊱　10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
㊲　10YR4/1 褐灰色 極粗粒砂　粘性なし　しまりなし
㊳　10YR7/2 にぶい黄橙色 シルト混じり極細粒砂 (シルトラミナ状混)
　粘性弱　しまり弱
㊴　10YR2/1 黒色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト (中粒砂～粗粒砂ラミナ状混)
　粘性中　しまり中
㊵　10YR3/1 黒褐色 細粒砂～中粒砂混じりシルト (細粒砂～中粒砂ラミナ状混)
　粘性中　しまり中
㊶　10YR5/1 褐灰色 シルト混じり粗粒砂～極粗粒砂 (シルトラミナ状混)
　粘性弱　しまり弱
㊷　10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
㊸　10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
㊹　10YR3/1 黒褐色 粗粒砂～中粒砂混じりシルト (粗粒砂～中粒砂ラミナ状混)
　粘性中　しまり中
㊺　10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
㊻　10YR6/1 褐灰色 シルト混じり細礫　粘性弱　しまり弱
㊼　10YR2/1 黒色 極細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
㊽　2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂混じりシルト　粘性弱　しまり弱
㊾　10YR4/1 褐灰色 極粗粒砂～粗粒砂混じりシルト (φ0.5cm炭化物混)
　粘性中　しまり強
㊿　10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
(51)　10YR4/1 褐灰色 極細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
(52)　10YR5/1 褐灰色 中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
(53)　2.5Y5/2 暗灰黄色 粗粒砂～極粗粒砂　粘性なし　しまりなし
(54)　10YR3/1 黒褐色 粗粒砂～極粗粒砂混じりシルト
　(粗粒砂～極粗粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
(55)　10YR5/1 褐灰色 シルト混じり極細粒砂　粘性弱　しまり弱
(56)　10YR4/1 褐灰色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト (中粒砂～粗粒砂ラミナ状混)
　粘性中　しまり中
(57)　10YR4/1 褐灰色 細粒砂～中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
(58)　10YR2/1 黒色 中粒砂～細粒砂混じり粘土　粘性強　しまり強
(59)　2.5Y5/2 暗灰黄色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
(60)　2.5Y5/1 黄灰色 極細粒砂～細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり強

調査区壁面土層土色注記

は、流路上層から摩耗した瓦 CP99 や古代の土器 Po55 ～ 57、Po59 ～ 62、木製板材 W20 が、㉓層では木製板材 W19、最上層から炉壁の下段部分と考えられる CP121 が出土している。なお、最下層である㉒層から出土した木材（試料 23）について放射性炭素年代測定を実施したところ、calAD726-773（暦年較正２σの確率１位）の値が得られており、出土した遺物の年代観と調和している。１流路③層の土壌サンプル（試料９）の自然科学分析の結果、古代から中世の流路内は水の動きが少なく湿地的な環境であったことが示されている。イネ科やソバ属などの花粉が同定され、流路沿いにおいて稲作や畑作などが行われていたことが推測されている。一方、縄文時代から弥生時代の流路内は、流水による堆積と削剥を繰り返していたが、基本的に好気的環境下であった状況が推測されている（第５章第１節）。

２流路（第 51・52・54・56 図、第７・14 表、図版 4）

南・北壁面で確認された流路であり、南北方向に主軸をとる。東側の立ち上がりは壁面で確認でき、西側の立ち上がりは１流路に切られているため全容は不明である。南・北壁の断面から検出した規模は、長さ約 11m、幅約 7.6m、深さは最深部で約 1.1m を測る。Ⅲ・Ⅵ層と基盤層であるⅦ層の間隙に①～㉕層まで砂混じりシルト及び砂層が互層を呈して堆積している。堆積土にはシルトや砂がラミナ状に介在することから、比較的急流であった時期と滞留している時期があったと想定される。遺物は、流路上層から摩耗した瓦や土器 Po58 が散漫に出土した。

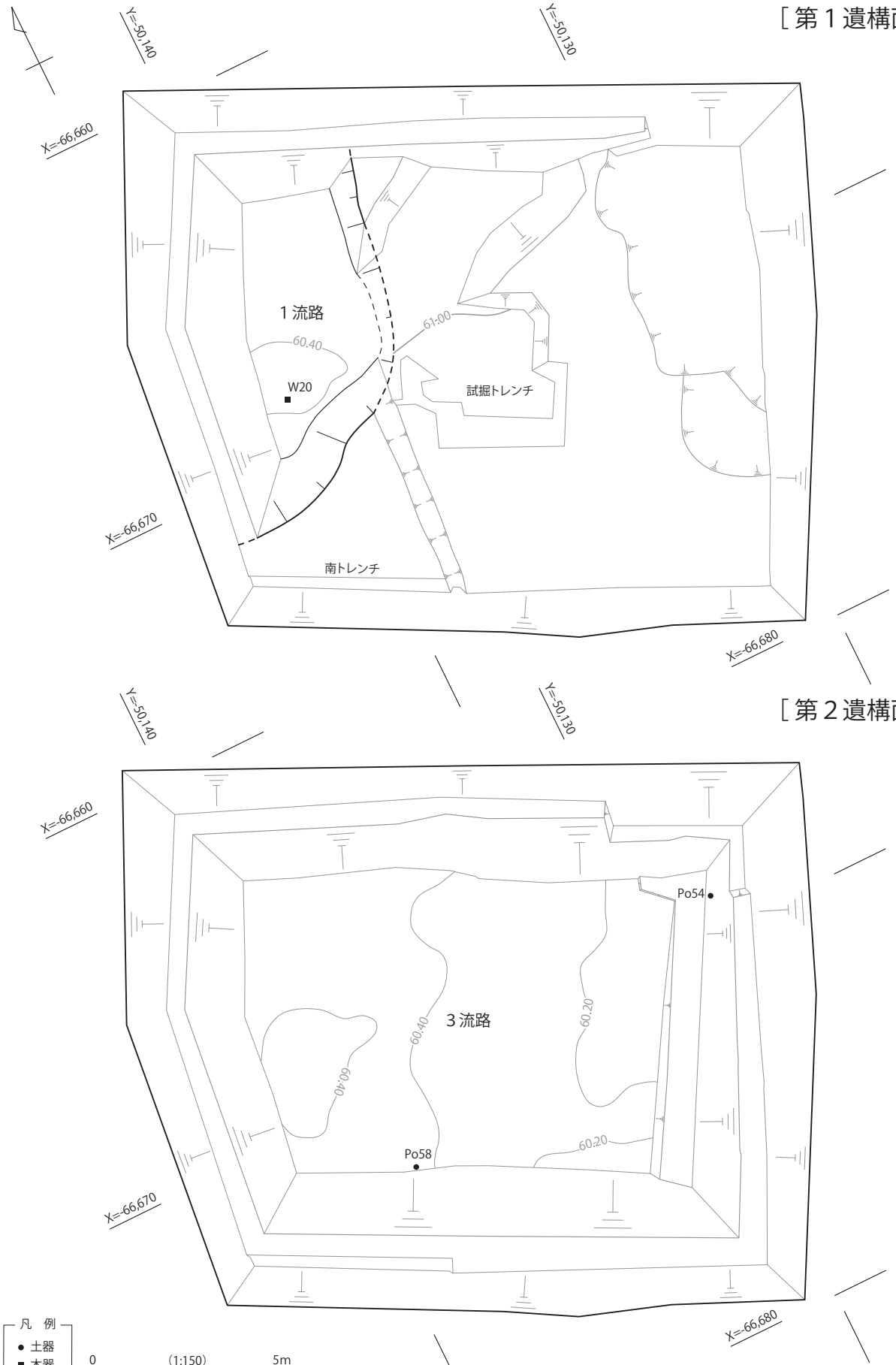
３流路（第 53・54・56 図、第７・14 表、図版 43）

南・北壁面で確認された流路であり、南北方向に主軸をとる。流路の西側を１・２流路に切られ、東側は調査区外に拡がるため全容は不明である。南・北壁の断面から検出した規模は、長さ約 11m、幅は約 7.9m、深さは最深部で約 1.3m を測る。Ⅲ・Ⅵ層と基盤層であるⅦ層の間隙に①～㊿層まで砂混じりシルト及び砂層が互層を呈して堆積している。堆積土にはシルトや砂がラミナ状に互層を呈していることから、比較的急流であった時期と滞留している時期があったと想定される。遺物は、流路下層から摩耗した古墳時代の土師器や縄文時代早期の高山寺式 Po54 などが散漫に出土した。

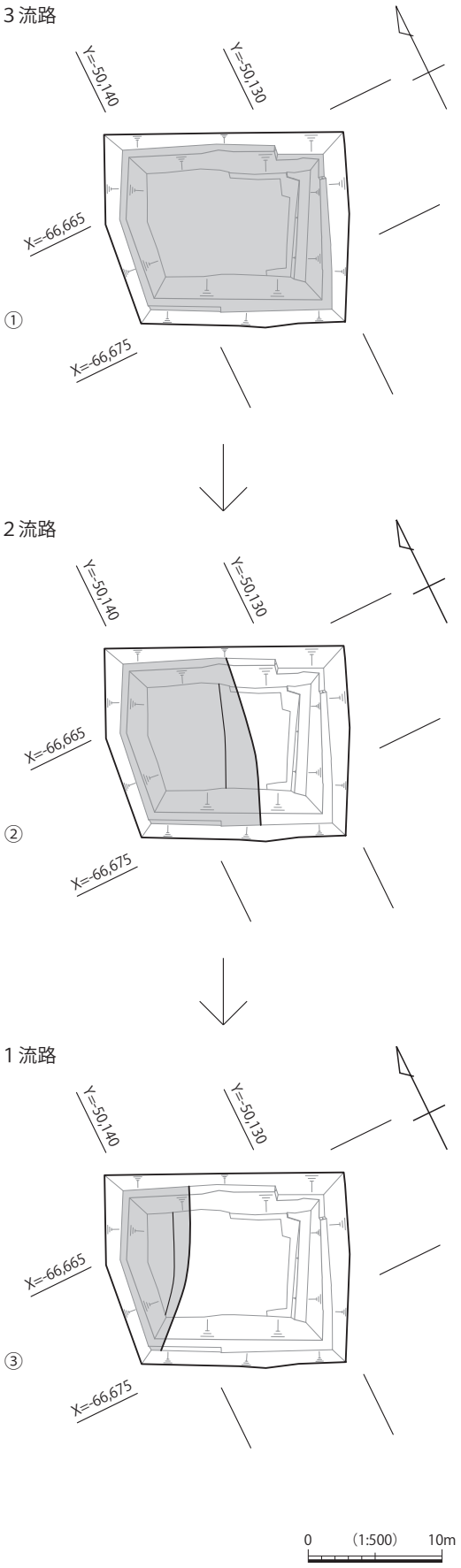
出土遺物（第 55・56 図、第 14・21・23 表、図版 43）

W19 は約 2.0 × 1.5cm のほぞ穴を持ち、最大長 48.0cm、最大幅 21.0cm、最大厚 3.4cm を測るスギの板材で建築部材の可能性がある。W20 は残存長 52.1cm、最大幅 7.0cm、最大厚 1.9cm のスギの板材である。

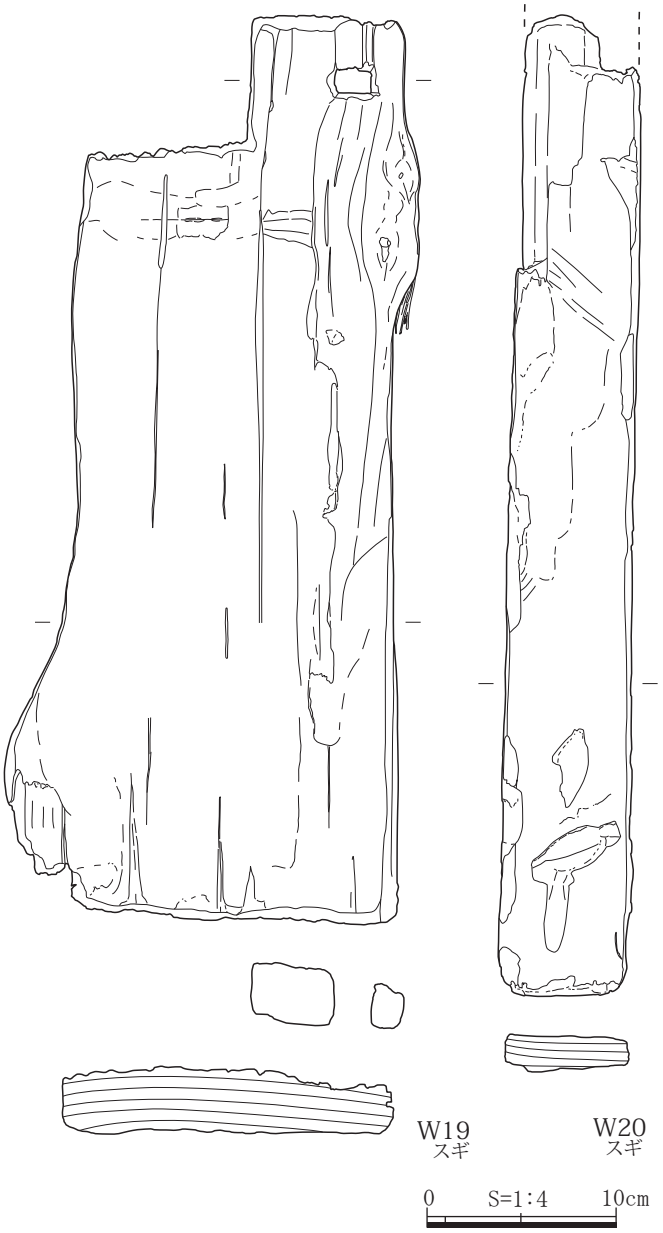
Po54 は縄文時代早期の高山寺式深鉢の口縁部であり、全体に摩滅が著しく端部は欠損している。外面は楕円押型文が僅かな痕跡を残し、内面は断面蒲鉾状の斜行沈線が施されている。Po55 は口縁部に多条平行沈線を施した弥生時代後期の甕である。Po58・59 は土師器高坏の脚裾部と脚柱部である。前者は内外面に横方向のナデ、後者の外面は面取り後、タテ方向のナデ調整を施し赤色塗彩がなされている。Po60 は喇叭状に開いた古墳時代前期の土師器壺の口縁から頸部の破片で、口縁下端が大きく摘まみ出されている。Po61 は複合口縁を有する古墳時代中期の土師器甕である。口縁から肩部はヨコナデ、体部はハケ調整後に部分的にナデが施されている。土師器甕 Po62 は頸部から体部で、外面は頸部がヨコナデ、体部はハケ調整が施されている。内面は頸部はハケ調整、体部はヘラケズリ


［第１遺構面］
Y=-50,140
Y=-50,130
X=-66,660
X=-66,670
X=-66,680
１流路
60.40
61.00
W20
試掘トレンチ
南トレンチ
［第２遺構面］
Y=-50,140
Y=-50,130
X=-66,660
X=-66,670
X=-66,680
Po54
３流路
60.40
60.20
60.40
60.20
Po58
凡 例
● 土器
■ 木器
0
(1:150)
5m

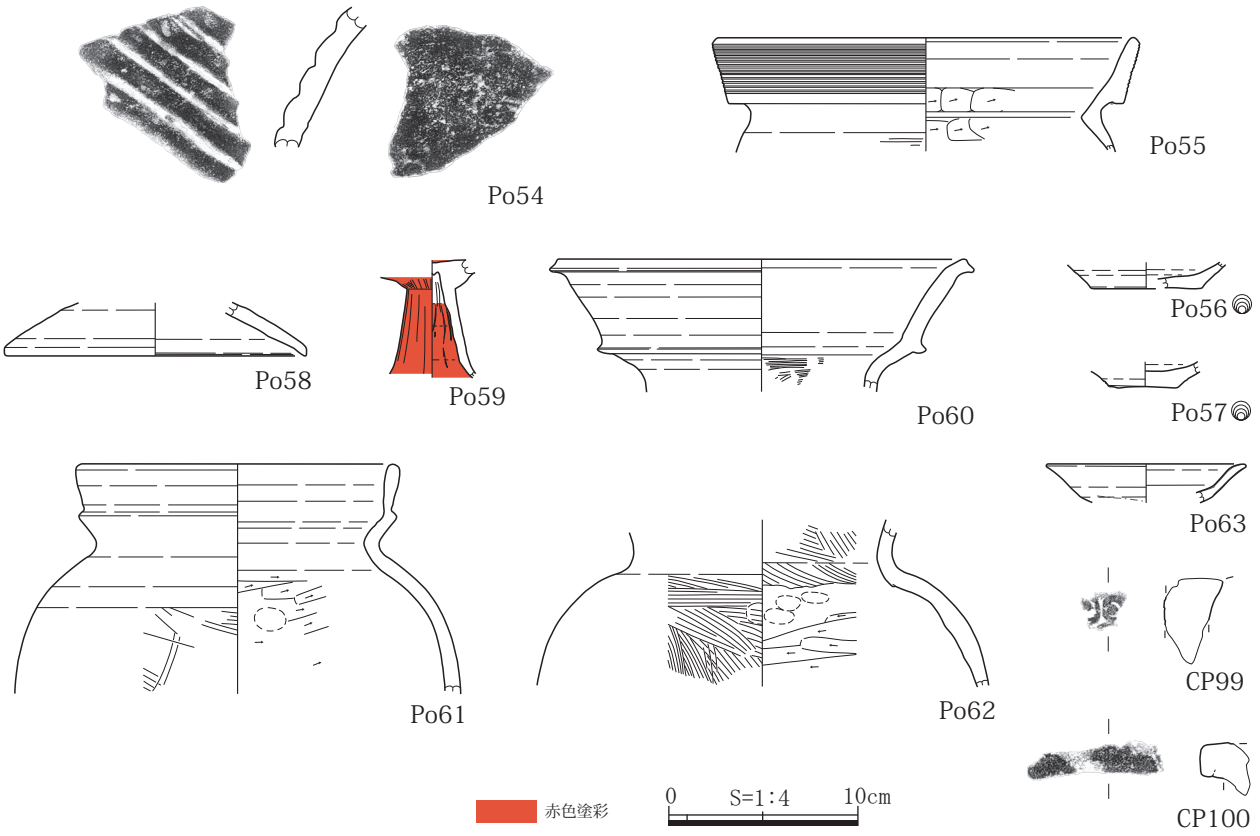
第 53 図　Ｐ ４区全体図



第 54 図　Ｐ４区流路変遷模式図



第 55 図　Ｐ４区出土木器



第 56 図　Ｐ４区出土遺物

が施され、部分的に指頭圧痕が残っている。Po56・57 は土師器坏の底部であり、底面には回転糸切り痕が確認できる。Po63 は口縁が緩やかに外反する白磁皿である。外面体部下半は露胎で内面は全て施釉されていることから、白磁皿Ⅲ類に比定される。

CP99・100 は軒丸瓦で笵型施文から前者はⅠ類の可能性が推察される。

写真９　Ｐ４区 表土掘削後段階確認（南東から）

写真 10　石塚廃寺跡 近景（北東から）

第６節　Ｐ５区の調査

第１項　概要と基本層序

Ｐ５区は、Ｐ４区の北北東約13mに位置する。調査区の現況は２筆の水田であり、圃場整備によって調査区内は造成土が盛られていた。重機による造成土と近世までの耕作土の除去後、南東隅で確認された２溝の検出面を第１遺構面とした。また北東隅からは近現代の１溝が検出された。調査区中心にある倉吉市教育委員会による試掘トレンチの断面及び壁面沿いに巡らした排水トレンチ断面の観察から、下層は調査区全域が流路であることが確認され遺物の出土状況が希薄であることから、第１遺構面の調査終了後に引き続き重機による基盤層までの掘削を進めた。

本調査区は丘陵裾を南北方向に流れる自然流路上に位置し、少なくとも８流路→７流路の２段階にわたり川筋を変えながら変遷していることが確認された。その間、２回にわたり６溝及び２溝が中世以降に開削されている。排水トレンチではⅦ層まで掘削し、基盤層の堆積状況を確認したうえでⅥ層上面までの掘削によって調査を終了した。

基本層序は以下の通りである。

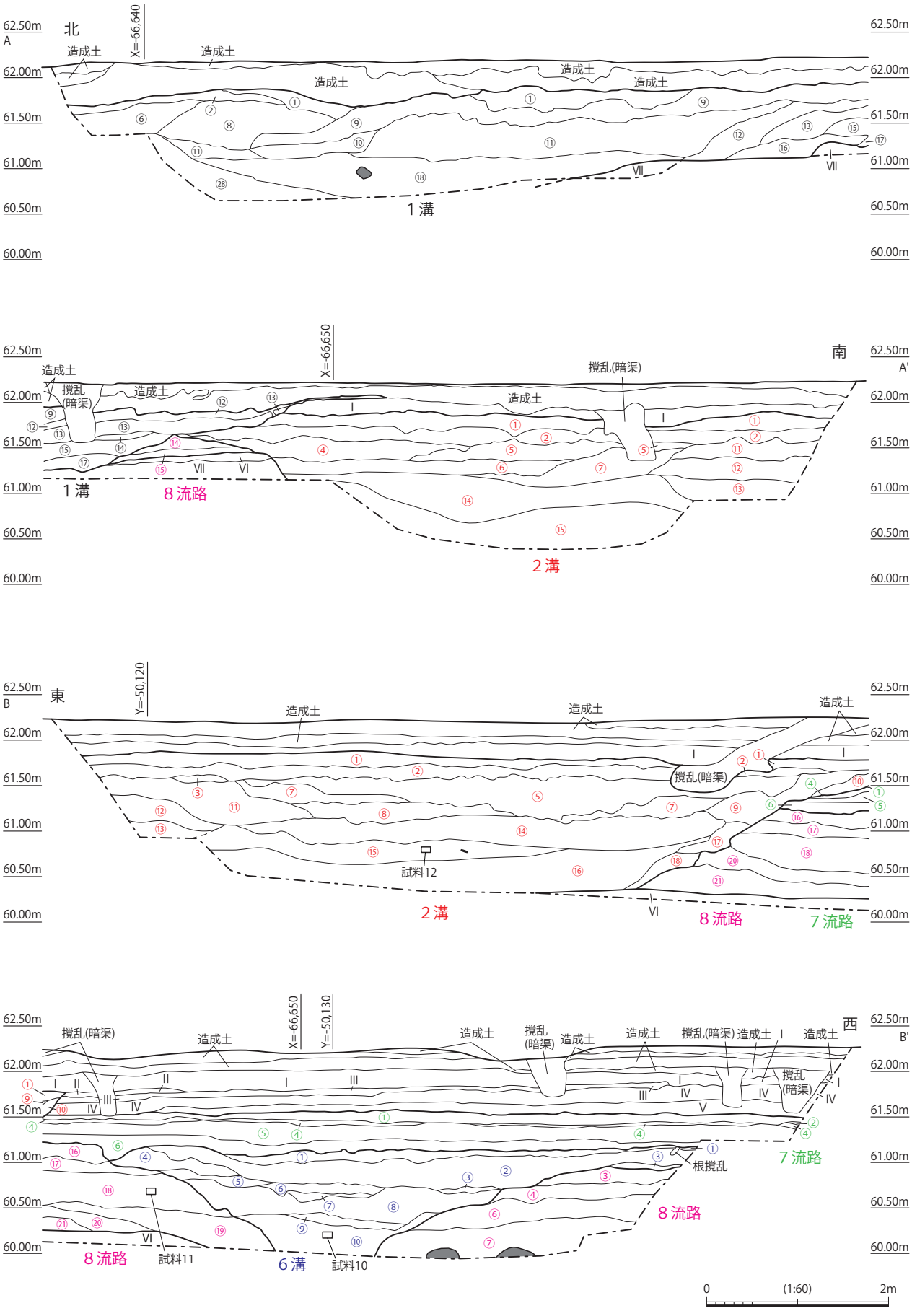
Ⅰ　層　造成土下の調査区南・西壁で堆積が確認された褐灰色シルト層。
Ⅱ　層　調査区南壁で堆積が確認された褐灰色シルト層。
Ⅲ　層　調査区南壁で堆積が確認された黒褐色粗粒砂混じりシルト層。
Ⅳ　層　調査区南・西壁で堆積が確認された褐灰色粗粒砂混じりシルト層。
Ⅴ　層　調査区北・東・南壁で堆積が確認された黒褐色シルト層。中世の土器などを含む。以下、Ⅵ層までの間に古代から中世に至る流路の堆積土が介在する。
Ⅵ　層　褐灰色～灰黄褐色粘土層で基盤層である。
Ⅶ　層　にぶい黄橙色粘土で基盤層である。

第２項　検出した遺構と遺物

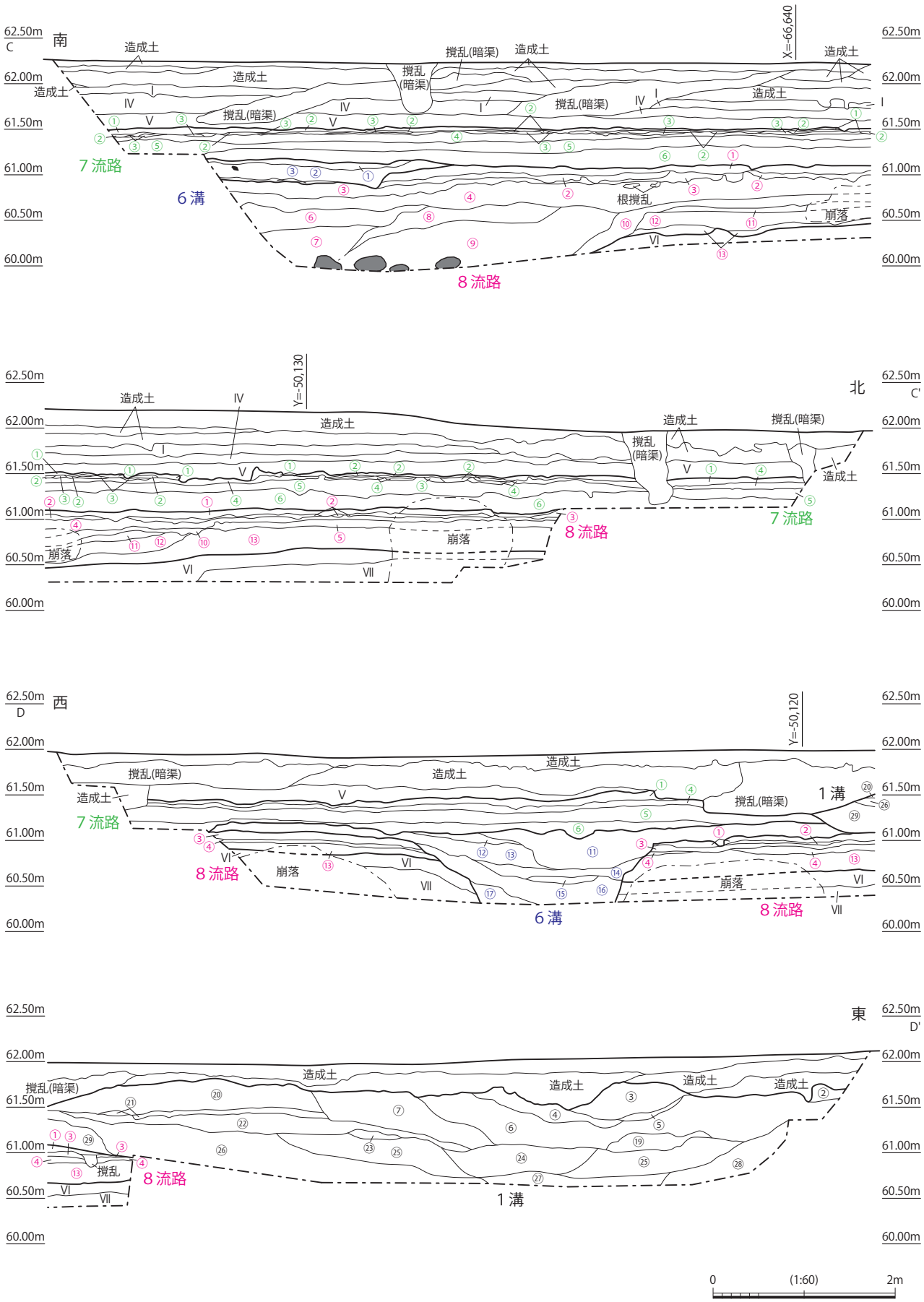
２溝（第60・63・64・86図、第３・８・14・21表、図版10・44・49）

調査区南角に位置し、西－東方向に主軸をとる。近現代の１溝に切られ、８流路を切る。東西が調査区外に拡がるため全容は不明である。東･南壁の断面から検出した規模は、長さ約5.8m、幅約3.7m、深さは最深部で約1.4mを測る。Ⅰ層と基盤層であるⅥ層の間隙に①～⑱層まで砂混じりシルト及び砂層が互層を呈して堆積している。そのことから、比較的急流であった時期と滞留している時期があったと想定される。

遺物は、⑦層や⑭層から摩耗した土器Po64や瓦CP101 ・ 102、埋土中から炉壁の下段部分と考えられるCP125が出土した。埋土から出土した炭化材(試料24)について放射性炭素年代測定を行った結果、calAD1554-1633（暦年較正２σの確率１位）の値が得られている（第５章第１節)。⑮層の土壌サンプル（試料12）の植物珪酸体・花粉分析の結果、植物珪酸体・花粉ともにほとんど検出されなかった（第５章第１節)。このことから、有機質遺体の分解が考えられ、季節的に引水される



第 57 図　調査区東壁・南壁土層断面図



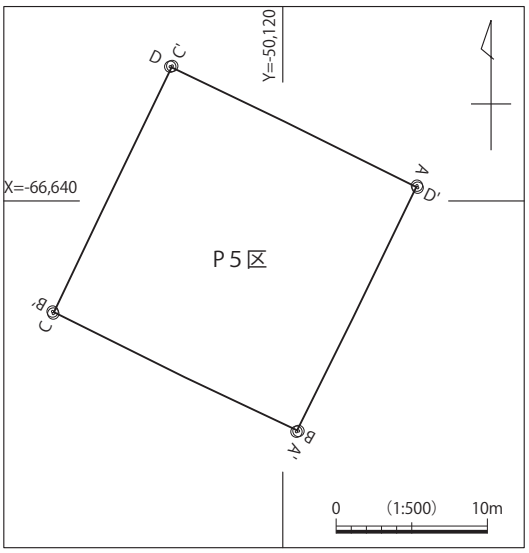
第 58 図　調査区西壁・北壁土層断面図

基本層序
Ⅰ　10YR4/1～5/1 褐灰色 シルト (10YR8/2 灰白色 極細粒砂混)　粘性弱　しまり中
Ⅱ　10YR6/1 褐灰色 シルト　粘性中　しまり中
Ⅲ　10YR3/1 黒褐色 粗粒砂混じりシルト (φ10cm礫混)　粘性中　しまり中
Ⅳ　10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト (φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
Ⅴ　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR4/1 褐灰色 シルトφ2～3cmブロック混
粗粒砂～中粒砂混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
Ⅵ　10YR6/1 褐灰色～10YR6/2 灰黄褐色 粘土　粘性強　しまり強
Ⅶ　10YR7/3 にぶい黄橙色 粘土 (人頭大礫混)　粘性強　しまり強

１溝
① 10YR4/1 褐灰色 極粗粒砂混じりシルト (φ2cm炭化物混)　粘性中　しまり中
② 10YR4/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
③ 10YR5/1 褐灰色 シルト　粘性中　しまり中
④ 10YR6/1 褐灰色 シルト混じり中粒砂 (中粒砂ラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑤ 10YR5/1 褐灰色 シルト混じり粗粒砂　粘性弱　しまり弱
⑥ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑦ 10YR4/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト (φ10cm礫混)　粘性中　しまり中
⑧ 10YR4/1 褐灰色 シルト (生木混)　粘性やや強　しまり中
⑨ 10YR8/3 浅黄色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト
(10YR4/1 褐灰色 シルトφ5～10cmブロック混)　粘性中　しまり中
⑩ 10YR5/1 褐灰色 極粗粒砂　粘性なし　しまり弱
⑪ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり中粒砂～細粒砂 (中粒砂～細粒砂マーブル状混)
粘性弱　しまり弱
⑫ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト
(10YR6/1 褐灰色 シルトφ5～10cmブロック混　生木多混)　粘性強　しまり中
⑬ 10YR4/1 褐灰色 極粗粒砂～粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑭ 10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細粒砂　粘性弱　しまり中
⑮ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑯ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり極粗粒砂～粗粒砂 (φ5cm礫多混　φ1cm炭化物混)
粘性弱　しまり弱
⑰ 10YR3/1 黒褐色 極粗粒砂混じりシルト　粘性強　しまり中
⑱ 10YR5/1 褐灰色 極粗粒砂～礫 (現代瓦等混)　粘性なし　しまり弱
⑲ 10YR5/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト
(10YR4/1 褐灰色 シルトφ3～5cmブロック混)　粘性中　しまり中
⑳ 10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細粒砂　粘性弱　しまり弱
㉑ 10YR4/1 褐灰色～10YR8/3 浅黄橙色 シルト混じり粗粒砂　粘性弱　しまり弱
㉒ 10YR4/1 褐灰色 中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
㉓ 10YR4/1 褐灰色 極粗粒砂～中礫　粘性弱　しまり弱
㉔ 10YR4/1 褐灰色 極粗粒砂～中礫 (φ5cm礫密混)　粘性なし　しまり弱
㉕ 10YR5/1 褐灰色 中粒砂～粗粒砂　粘性なし　しまり弱
㉖ 10YR3/1 黒褐色 中粒砂混じりシルト (生木混)　粘性強　しまり中
㉗ 10YR2/1 黒色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
㉘ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性強　しまり中

２溝
① 10YR6/2 灰黄褐色 細粒砂混じりシルト
(10YR7/2 にぶい黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
② 10YR7/1 灰白色～10YR7/2 にぶい黄橙色 極細粒砂～中粒砂
(10YR4/1 褐灰色 シルトφ3cmブロック混)　粘性弱　しまり弱
③ 10YR3/1 黒褐色 極細粒砂混じりシルト (極細粒砂ラミナ状混)　粘性弱　しまり中
④ 10YR3/1 黒褐色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト (φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
⑤ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂～極細粒砂混じりシルト
(極細粒砂ラミナ状混　φ1cm炭化物多混)　粘性中　しまり中
⑥ 10YR3/1 黒褐色 極細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑦ 10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細粒砂 (φ～1cm炭化物多混)　粘性弱　しまり弱
⑧ 10YR6/1 褐灰色 中粒砂～粗粒砂　粘性なし　しまり弱
⑨ 10YR5/1 褐灰色 極粗粒砂～中礫混じりシルト (10YR4/1 褐灰色 シルトφ1cmブロック混)
粘性中　しまり中
⑩ 10YR4/1 褐灰色 極粗粒砂混じりシルト (φ3～5cm礫混)　粘性中　しまり中
⑪ 10YR3/2 黒褐色 極粗粒砂～中礫混じりシルト (φ1～2cm炭化物混　生木混)
粘性弱　しまり弱
⑫ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト　粘性弱　しまり弱
⑬ 10YR6/1 褐灰色 シルト混じり細礫～極粗粒砂 (10YR3/1 黒褐色 シルトφ5cmブロック混)
粘性なし　しまり弱
⑭ 10YR6/1 褐灰色 中礫～大礫 (粗粒砂～極粗粒砂ラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑮ 10YR5/1 褐灰色 粗粒砂～極粗粒砂　しまり弱　粘性なし
⑯ 10YR4/1 褐灰色 細礫～大礫 (極粗粒砂～中粒砂ラミナ状混)　粘性なし　しまり弱
⑰ 10YR4/1 褐灰色 極粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑱ 10YR2/1 黒色 極細粒砂混じりシルト (極細粒砂ラミナ状混)　粘性弱　しまり弱

７流路
① 10YR5/1 褐灰色 粗粒砂～極粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり強
② 10YR8/2 灰白色 極細粒砂混じりシルト　粘性弱　しまり弱
③ 10YR3/1 黒褐色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト (φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
④ 10YR4/1 褐灰色 シルト (極細粒砂少混)　粘性中　しまり強
⑤ 10YR2/1 黒色 シルト (極細粒砂少混)　粘性強　しまり中 (本層上面第1遺構面)
⑥ 10YR3/2 黒褐色 極細粒砂混じりシルト (10YR2/1 黒色 シルトφ5～10cmブロック混)
粘性中　しまり中

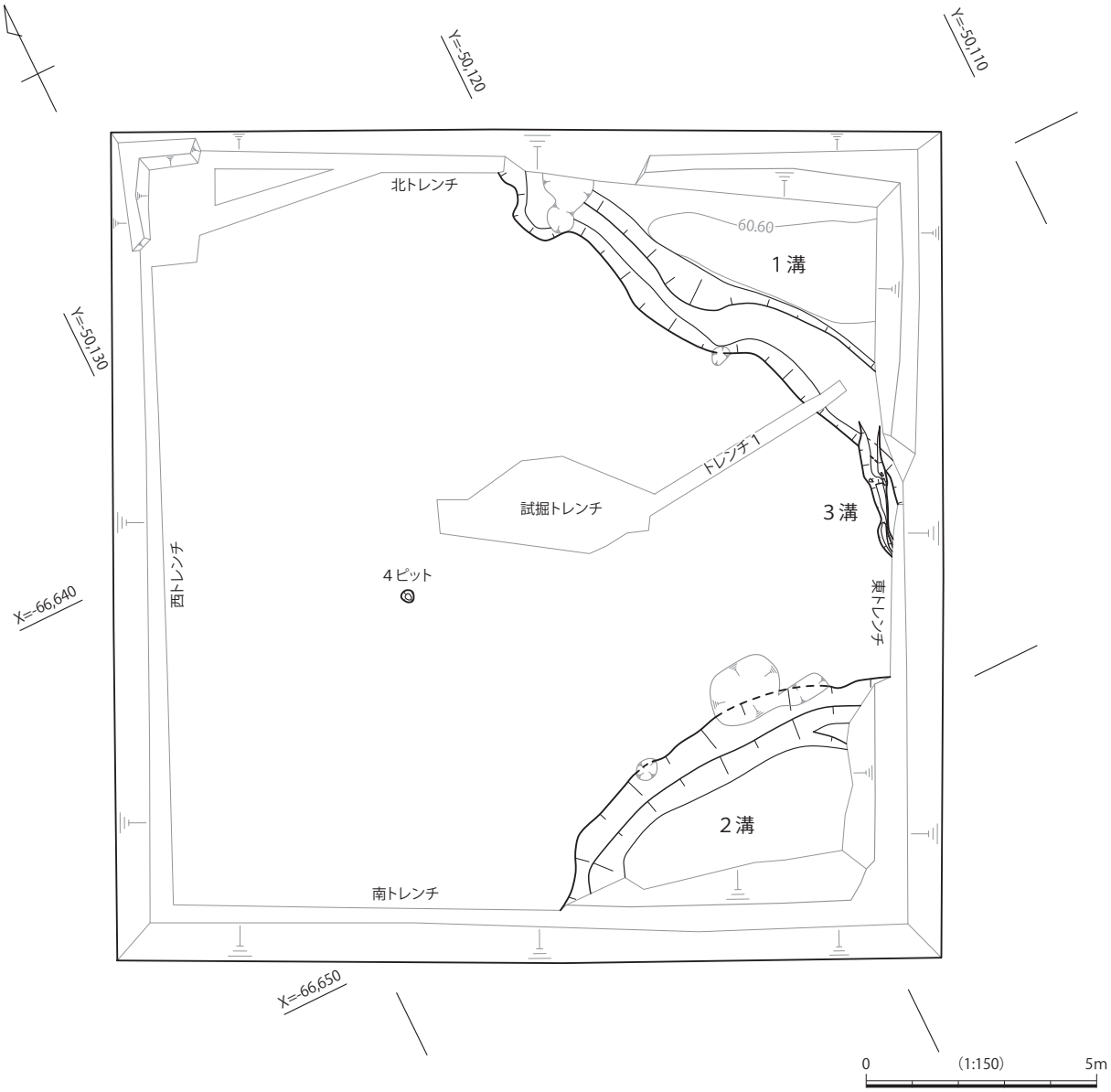


土層断面位置図

６溝
① 10YR5/1 褐灰色 極細粒砂混じりシルト
(10YR4/1 褐灰色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
② 10YR4/1 褐灰色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
③ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり極粗粒砂　粘性弱　しまり弱
④ 10YR3/1 黒褐色 極細粒砂混じりシルト (極細粒砂ラミナ状混)
粘性弱　しまり弱
⑤ 10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細粒砂　粘性弱　しまり弱
⑥ 10YR3/1 黒褐色 極細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり中
⑦ 10YR5/1 褐灰色 中礫～極粗粒砂　粘性なし　しまり弱
⑧ 10YR3/1 黒褐色 極細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
⑨ 10YR3/1 黒褐色 極シルト混じり細粒砂 (細粒砂ラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑩ 10YR2/1 黒色 極細粒砂混じりシルト (φ2～3cm炭化物多混)
粘性強　しまり強
⑪ 10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト (極細粒砂ラミナ状混)　粘性強　しまり中
⑫ 10YR2/1 黒色 極細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑬ 10YR4/1 褐灰色 極細粒砂～細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑭ 10YR3/1 黒褐色 極細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
⑮ 10YR3/1 黒褐色 極細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
⑯ 10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混)　粘性強　しまり中
⑰ 10YR4/1 褐灰色 シルト混じり粗粒砂～極粗粒砂 (人頭大礫混)
粘性なし　しまり弱

８流路
① 10YR4/1 褐灰色 細礫～中礫混じりシルト　粘性弱　しまり弱
② 10YR2/1 黒色 シルト混じり極粗粒砂　粘性弱　しまり弱
③ 10YR2/1 黒色 シルト混じり極粗粒砂　粘性弱　しまり中
④ 10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑤ 10YR6/3 にぶい黄橙色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト
(10YR2/1 黒色 シルトφ5～10cmブロック混)　粘性強　しまり中
⑥ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり粗粒砂 (細礫～中礫ラミナ状混)
粘性弱　しまり弱
⑦ 10YR3/1 黒褐色 極細粒砂　粘性弱　しまり弱
⑧ 10YR2/1 黒色 シルト混じり中粒砂　粘性弱　しまり弱
⑨ 10YR2/1 黒色 粘土　粘性強　しまり強
⑩ 10YR2/1 黒色 極細粒砂混じりシルト　粘性弱　しまり弱
⑪ 10YR4/1 褐灰色 極細粒砂混じりシルト
(10YR2/1 黒色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性強　しまり強
⑫ 10YR5/1 褐灰色 シルト　粘性強　しまり中
⑬ 10YR6/3 にぶい黄橙色 ～10YR4/1 褐灰色 極細粒砂混じりシルト
粘性強　しまり強
⑭ 10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR6/1 褐灰色 シルトφ5～10cmブロック混)
粘性中　しまり中
⑮ 10YR2/1 黒色 シルト　粘性強　しまり強
⑯ 10YR6/2 灰黄褐色 中粒砂混じりシルト
(10YR4/1 褐灰色 シルトφ5～10cmブロック混)　粘性中　しまり中
⑰ 10YR3/1 黒褐色 極細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑱ 10YR2/1 黒色 粘土　粘性強　しまり強
⑲ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり中
⑳ 10YR2/1 黒色 粘土　粘性強　しまり強
㉑ 10YR5/1 褐灰色 中礫～粗粒砂　粘性なし　しまり弱

第 59 図　調査区壁面土層断面位置図、土色注記

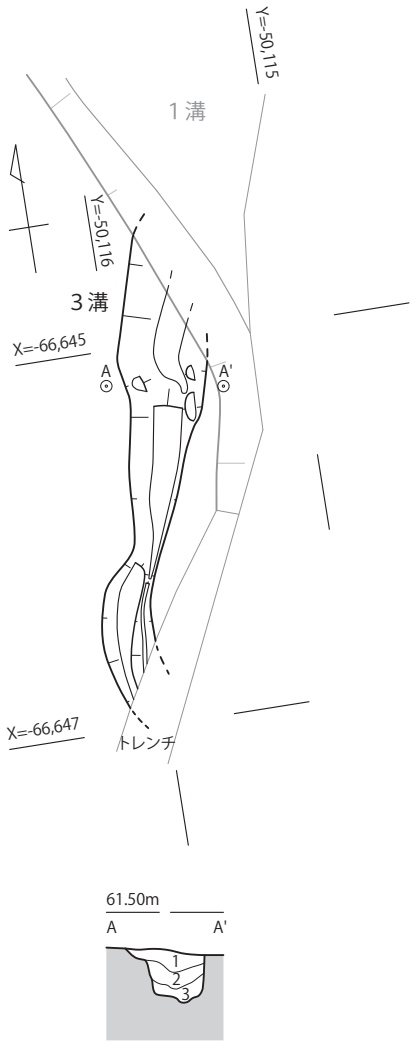


第 60 図　第 1 遺構面全体図

中世後半から近世の農耕用の溝の可能性がある。

６溝（第 62 ～ 64 図、第８・23 表、図版 12・44）

調査区西寄りに位置し、南西－北東方向に主軸をとる。東側は８流路を切り、西側は調査区外に拡がるため、全容は不明である。南・北壁の断面で検出した規模は、長さ約 16m、幅約 2.0m、深さ最深部で 0.8m を測る。堆積土は①～⑰層まで砂混じりシルト及び砂層が互層を呈して堆積している。そのことから、比較的急流であった時期と滞留している時期があったと想定される。壁面の立ち上がりから人工的に開削された溝と判断した。遺物は、古代の土器が散漫に出土しているほか、埋土から漆器椀 W21 が出土した。⑩層の土壌サンプル（試料 10）の植物珪酸体・花粉分析の結果、ススキ属型とチマキ節型が多く、花粉組成ではイネ属が少なくツリフネソウ属がやや多いことから、山地から清水性の水が流れていたと推定されている（第５章第１節）。



第 61 図　３溝

７流路（第 57・58・64 図、第８表）

調査区全域に位置し、南西－北東方向に主軸をとる。２溝に切られ、６流路埋没後に形成されたことが南・北壁で確認された。南・北壁の断面で検出した規模は、長さ約 16m、幅約 16m、深さ最深部で 0.4m を測る。堆積土は①～⑥層まで砂混じりシルトが堆積している。中世以降の短期間に比較的緩やかに流れる流路の痕跡か、断続的に軽易な洪水などを起因とする堆積土と想定される。遺物は、古代から中世に至る土器が出土している。

８流路（第 57・58・64 図、第８表）

調査区西半に位置し、南西－北東方向に主軸をとる。２溝、６流路に切られる。南・北壁の断面で検出した規模は、長さ約 16m、幅約 8.1m、深さは最深部で 1.1m を測る。堆積土は①～㉑層まで砂混じりシルト及び砂層が互層を呈して堆積している。そのことから、比較的急流であった時期と滞留している時期があったと想定される。遺物は、摩滅した古代の土器が散漫に出土している。

⑱層の土壌サンプル（試料 11）の植物珪酸体・花粉分析の結果、チマキザサ節型が多く、花粉組成ではクリの産出率が高く、トチノキと草本のヨモギ属が比較的多く検出されていることから、近接する丘陵地から大地の裾部にかけて、ヨモギ属の草本とクリ二次林が分布し、低地部は湿潤化しトチノキの湿地林が分布していたと想定されている（第５章第１節）。

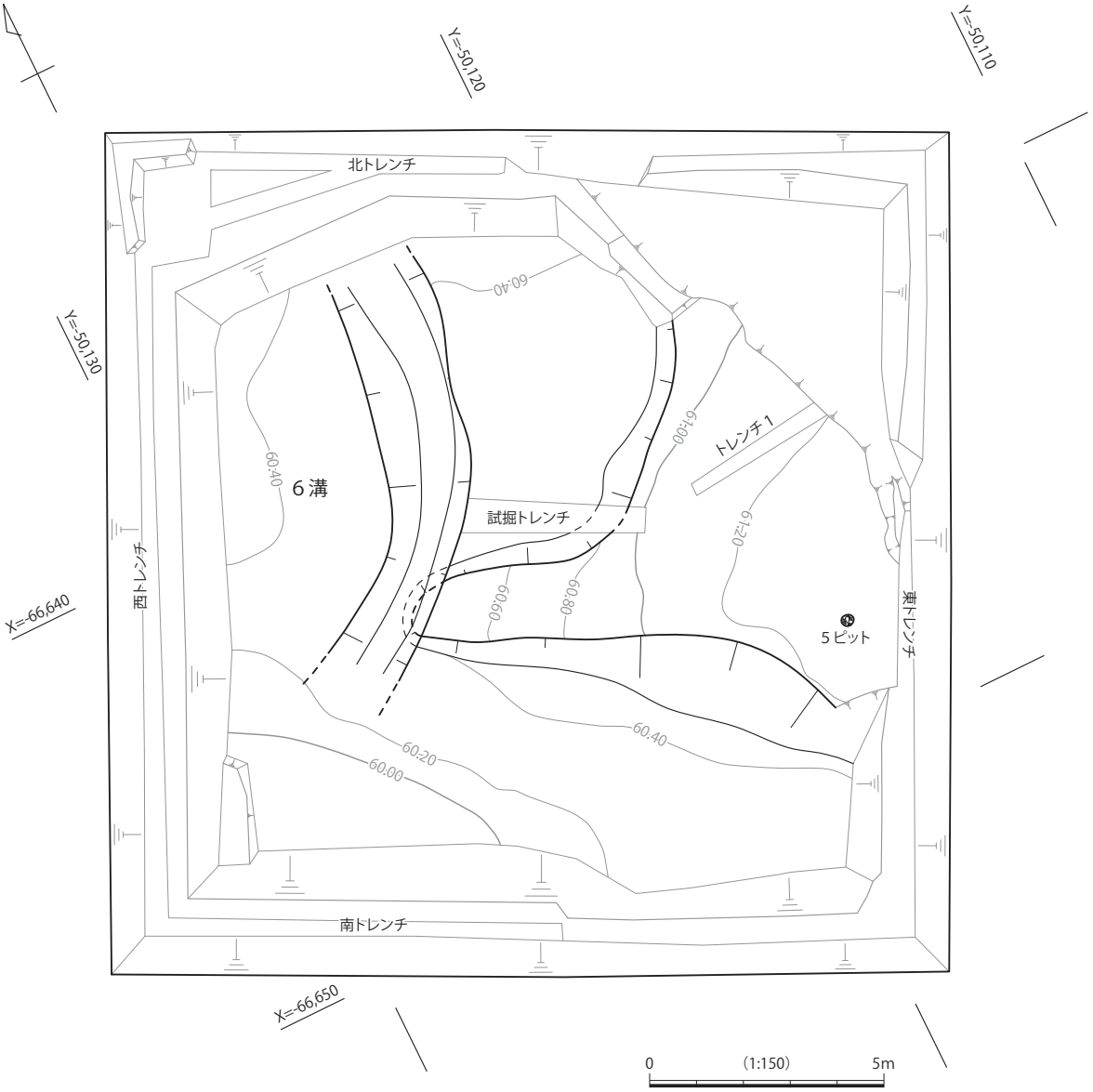
３溝（第 60・61 図、第８表、図版 11）

調査区東端に位置し、第１遺構面で検出された。北側は１溝に切られ、南側は調査区外に延びる。主軸は N-16° -E。長軸 2.77m、短軸 0.48m、深さ 0.26m を測る。埋土は１層黒色シルト、２層褐灰色粘質土、３層明黄褐色粘質土に分かれる。

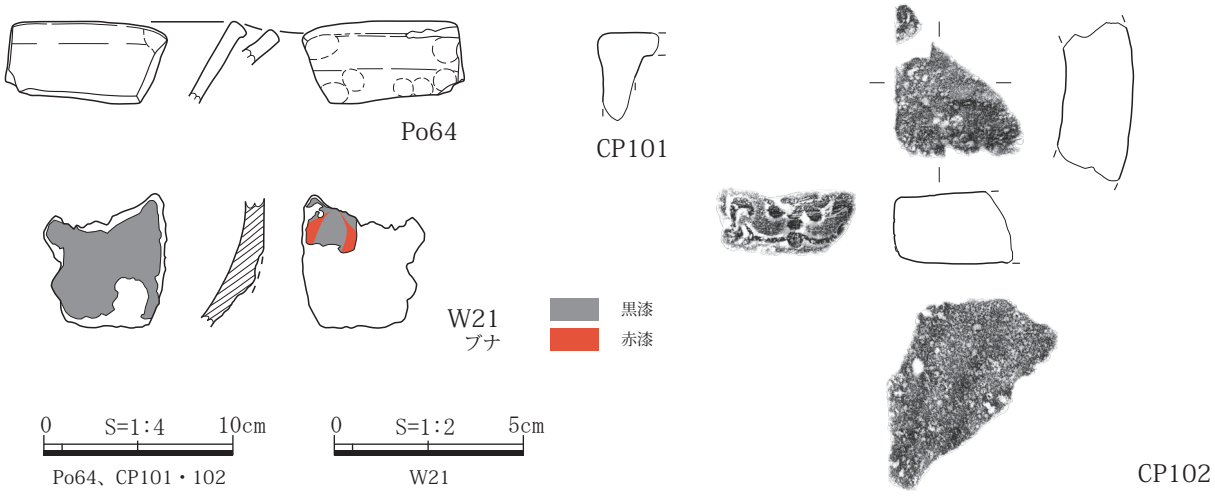
遺物は出土しておらず、時期・性格とも不明である。

出土遺物（第 63 図、第 14・21・23 表、図版 44）

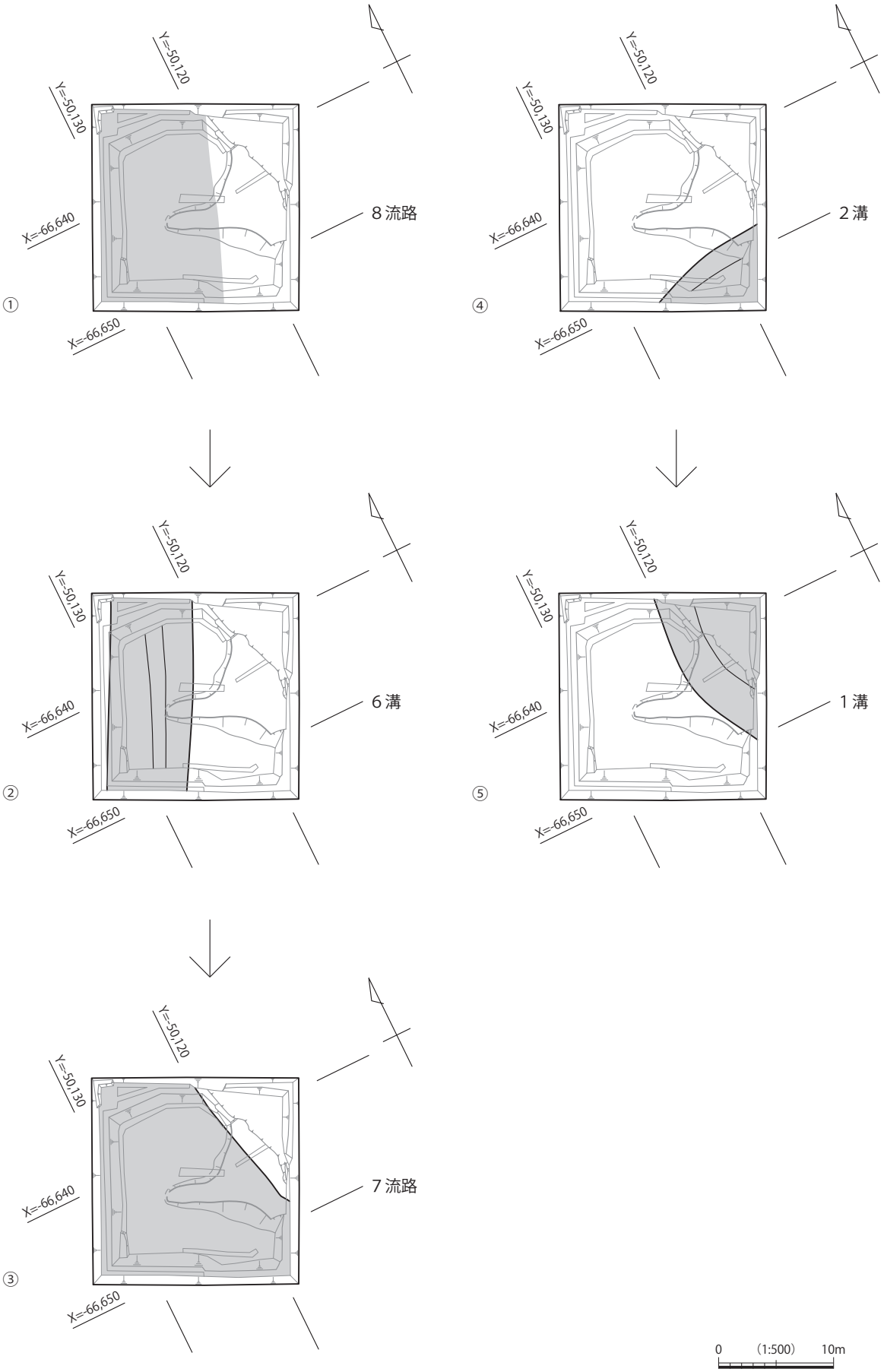
Po64 は瓦質土器の片口鉢である。口縁端部が僅かに張り出し、外面は指オサエ痕が顕著に残る。CP101 は軒丸瓦であるが摩滅が著しく類型は不明。CP102 は軒平瓦Ⅰ類で、瓦当面に忍冬唐草文が認められる。W21 は漆器椀の体部片で、樹種同定の結果ブナ科ブナ属で内外面に黒漆、外面に赤漆が施文されている。



第 62 図　第２遺構面全体図



第 63 図　Ｐ５区出土遺物



第 64 図　Ｐ５区　溝・流路変遷模式図

第７節　Ｐ６区の調査

第１項　概要と基本層序

Ｐ６区は、Ｐ５区の北北東約13mに位置する。調査区の現況は１筆の水田であり、圃場整備によって調査区内は造成土が盛られていた。重機による造成土と近世までの現代耕作土の除去後、調査区西寄りで確認された16溝の検出面を第１遺構面とした。なお、調査区中心部には近現代の１溝が縦走していたため重機によって掘削を行った。調査区全体の堆積状況を把握するため、調査区中心にある倉吉市教育委員会による試掘トレンチの北壁断面を利用し、東西方向に幅0.6mほどの中央トレンチを設定した。まず２・16溝の掘削・記録を進めた。中央トレンチの断面観察から、下層は調査区全域が流路であることが確認され遺物の出土状況が希薄であることから、引き続き重機による基盤層までの掘削を進めた。

本調査区は丘陵裾を南北方向に流れる自然流路上に位置し、少なくとも17流路→18流路→11流路の３段階に渡り川筋を変えながら変遷していることが確認された（14流路は小規模のため除く）。その後、11流路が埋没し中世に至り、新たに２・16溝が開削されている。この溝については性格が不明であるが､断面の形状から人為的なものと判断している。基盤層の堆積状況を確認したうえでⅥ・Ⅶ層上面までの掘削によって調査を終了した。

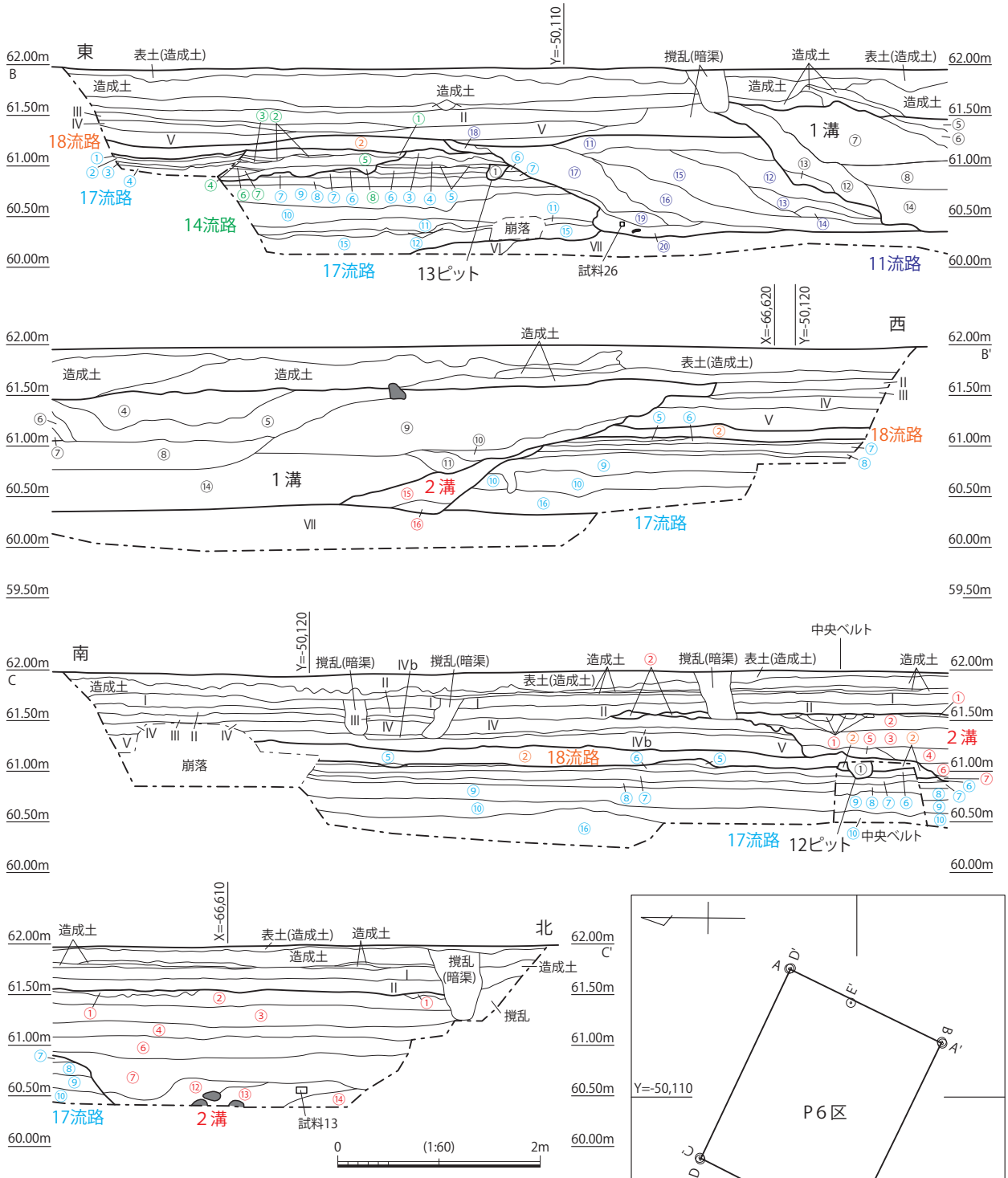
基本層序は以下の通りである。

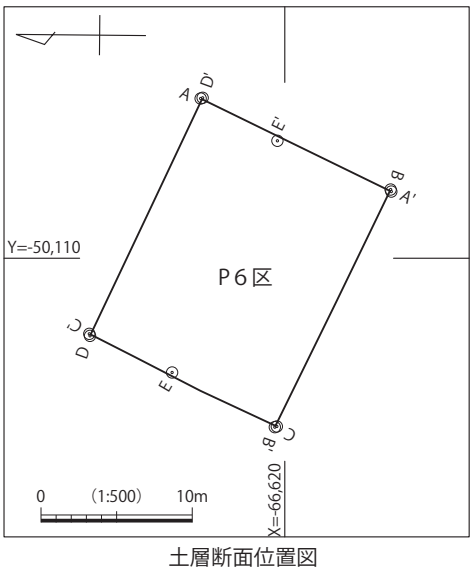
Ⅰ　層　造成土下の調査区北・西壁で堆積が確認された褐灰色粗粒砂混じりシルト層。
Ⅱ　層　調査区全域で堆積が確認されたにぶい黄橙色粗粒砂～極粗粒砂混じりシルト層。
Ⅲ　層　調査区のほぼ全域で堆積が確認された褐灰色粗粒砂混じりシルト層。
Ⅳ　層　調査区東・南・西壁で堆積が確認された褐灰色粗粒砂混じりシルト層。
Ⅳb層　調査区西壁で堆積が確認された褐灰色砂混じりシルト層。
Ⅴ　層　調査区全域で堆積が確認された黒褐色粗粒砂混じりシルト層。以下、Ⅵ層までの間に古代から中世に至る流路の堆積土が介在する。
Ⅵ　層　灰白色粘土層で基盤層である。
Ⅶ　層　暗灰黄色極粗粒砂～礫で基盤層である。

第２項　検出した遺構と遺物

２溝（第68・70～72図、第９・14・23表、図版15・45）

調査区西寄りに位置し、南－北方向に主軸をとる。16溝と近現代の１溝に切られているため、全容は不明である。検出された規模は、長さ約4.8m、幅約2.5m、深さは最深部で約0.86mを測り、断面は逆台形を呈する。Ⅱ層と基盤層であるⅥ層の間隙に①～㉓層まで砂混じりシルト及び砂層が互層を呈して堆積している。遺物は、⑧層より木製品の板材や斎串か、角杭（W22～26）、底面付近で漆器椀（W27）が出土している。⑧層から出土した炭化材（試料25）について放射性炭素年代測定を行った結果、calAD1274-1300（暦年較正２σの確率１位）の値が得られた（第５章第１節）。





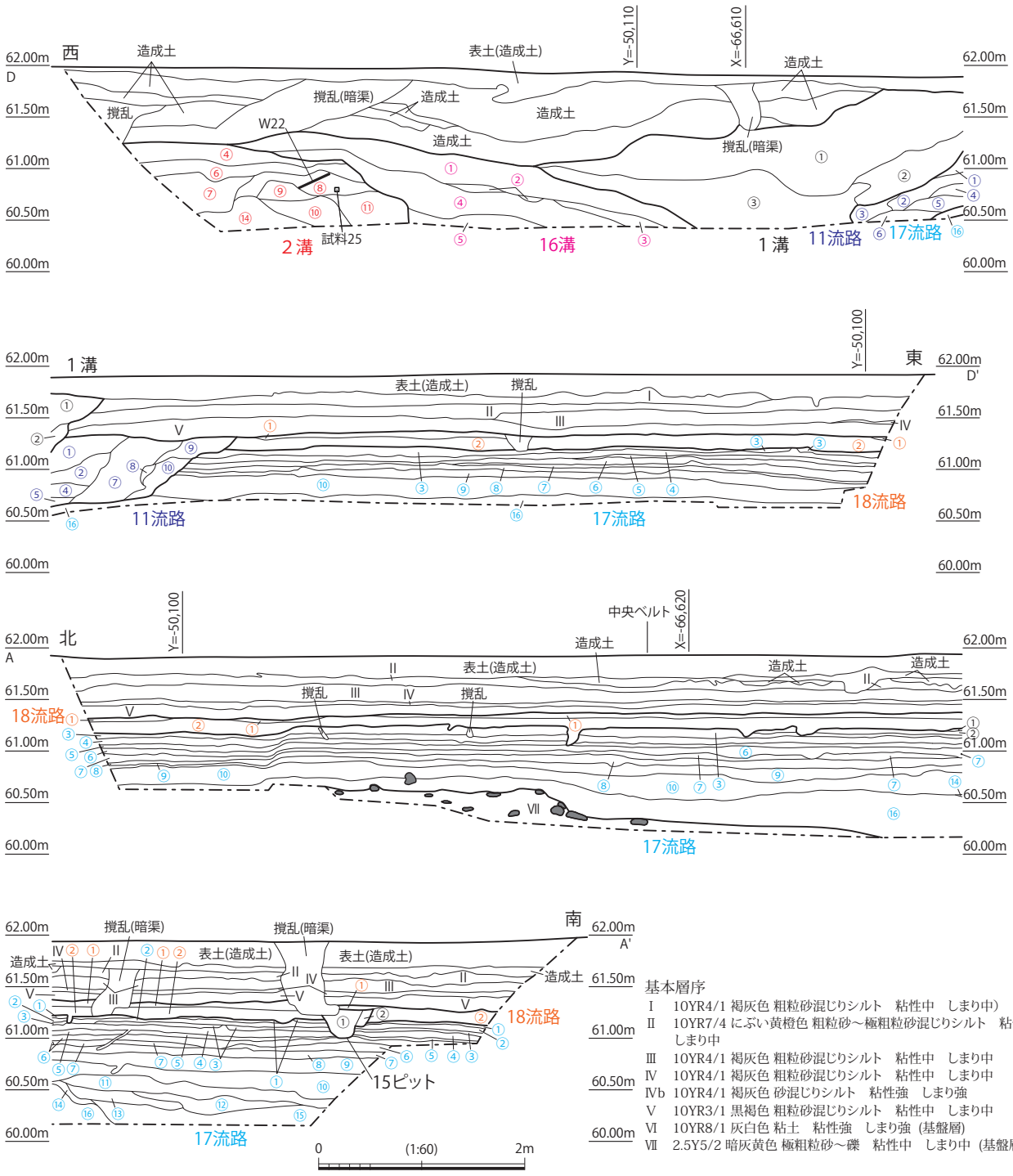
土層断面位置図

12ピット
① 10YR3/1 黒褐色 シルト　粘性中　しまり中

13ピット
① 10YR2/1 黒色 極細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強

14流路
① 10YR4/1 褐灰色 中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
② 10YR7/1 灰白色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
③ 10YR4/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
④ 10YR7/1 灰白色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑤ 10YR5/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑥ 10YR7/1 灰白色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑦ 10YR4/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑧ 10YR4/1 褐灰色 極粗粒砂混じりシルト (極粗粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中

第 65 図　調査区南壁・西壁土層断面図、土層断面位置図、土色注記（１）



15ピット
① 10YR4/1 褐灰色 極細粒砂～細粒砂混じりシルト (極細粒砂～細粒砂ブロック状混) 粘性中　しまり中
② 10YR4/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり中

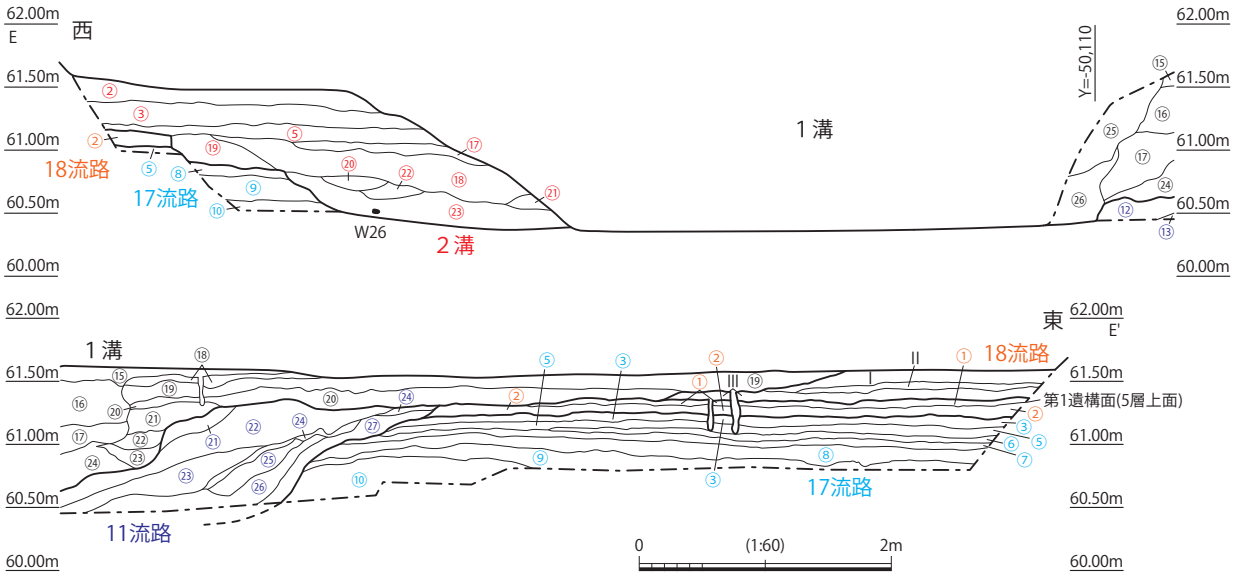
16溝
① 10YR3/1 黒褐色 粗粒砂～中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
② 2.5Y5/2 暗灰黄色 中粒砂～粗粒砂　粘性なし　しまり弱
③ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり中礫 (シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり中
④ 10YR3/1 黒褐色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト (中粒砂～粗粒砂ラミナ状混)　粘性強　しまり中
⑤ 2.5Y6/2 灰黄色 中礫～細礫　粘性なし　しまり弱

17流路
① 10YR6/2 灰黄褐色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
② 10YR4/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
③ 10YR6/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
④ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
⑤ 10YR6/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
⑥ 10YR3/1 黒褐色 極細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑦ 10YR6/1 褐灰色 ～10YR7/2 にぶい黄橙色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑧ 10YR5/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑨ 10YR2/1 黒色 粘土　粘性強　しまり強
⑩ 2.5Y3/1 黒褐色 粘土 (φ0.5cm炭化物混)　粘性強　しまり強
⑪ 2.5Y5/1 黄灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑫ 2.5Y3/1 黒褐色 極粗粒砂混じりシルト (極粗粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑬ 10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細粒砂～中粒砂 (シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑭ 10YR5/1 褐灰色 細粒砂～中粒砂　粘性なし　しまり弱
⑮ 2.5Y4/1 黄灰色 細礫～中礫　粘性なし　しまり弱
⑯ 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト　粘性中　しまり強

18流路
① 10YR5/1 褐灰色 中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
② 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中　(本層上面第1遺構面)

基本層序
Ⅰ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中)
Ⅱ 10YR7/4 にぶい黄橙色 粗粒砂～極粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
Ⅲ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
Ⅳ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
Ⅳb 10YR4/1 褐灰色 砂混じりシルト　粘性強　しまり強
Ⅴ 10YR3/1 黒褐色 粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
Ⅵ 10YR8/1 灰白色 粘土　粘性強　しまり強 (基盤層)
Ⅶ 2.5Y5/2 暗灰黄色 極粗粒砂～礫　粘性中　しまり中 (基盤層)

第 66 図　調査区北壁・東壁土層断面図、土色注記（2）



１溝
① 10YR4/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト (φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
② 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂～中粒砂混じりシルト (粗粒砂～中粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
③ 2.5Y5/2 暗灰黄色 中礫～大礫 (現代瓦等混)　粘性なし　しまり弱
④ 10YR3/1 黒褐色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト (中粒砂～粗粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑤ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト (杭混　生木混　人頭大礫混)　粘性中　しまり中
⑥ 10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑦ 10YR4/1 褐灰色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑧ 10YR6/2 灰黄色 シルト混じり中礫～大礫 (10YR5/2 暗灰黄色 シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑨ 2.5Y6/1 黄灰色 極細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑩ 10YR6/2 灰黄色 極細粒砂～細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑪ 2.5Y6/1 黄灰色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑫ 10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑬ 10YR7/1 灰白色 シルト混じり中粒砂 (シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑭ 2.5Y5/1 黄灰色 シルト混じり極粗粒砂～大礫 (シルトラミナ状混　現代瓦等混)　粘性弱　しまり弱
⑮ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂～細礫混じりシルト　しまり中　粘性中
⑯ 10YR4/1 褐灰色～10YR5/1褐灰色中粒砂混じりシルト　しまり中　粘性中
⑰ 10YR3/1 黒褐色 極粗粒砂～細礫混じりシルト (細粒砂ラミナ状混)　しまり中　粘性中
⑱ 10YR3/1 黒褐色 極細粒砂混じりシルト (10YR4/1褐灰色シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり中
⑲ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂～細礫混じりシルト　粘性中　しまり中
⑳ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
㉑ 10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細粒砂　粘性弱　しまり弱
㉒ 10YR8/2 灰白色 極細粒砂～中粒砂　粘性弱　しまり弱
㉓ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
㉔ 10YR4/1 褐灰色～10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細粒砂　粘性弱　しまり弱
㉕ 10YR4/1 褐灰色 極細粒砂～細粒砂混じりシルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ5cmブロック混　生木混)　粘性中　しまり中
㉖ 10YR4/1～5/1 褐灰色 細粒砂　粘性弱　しまり弱　粘性弱

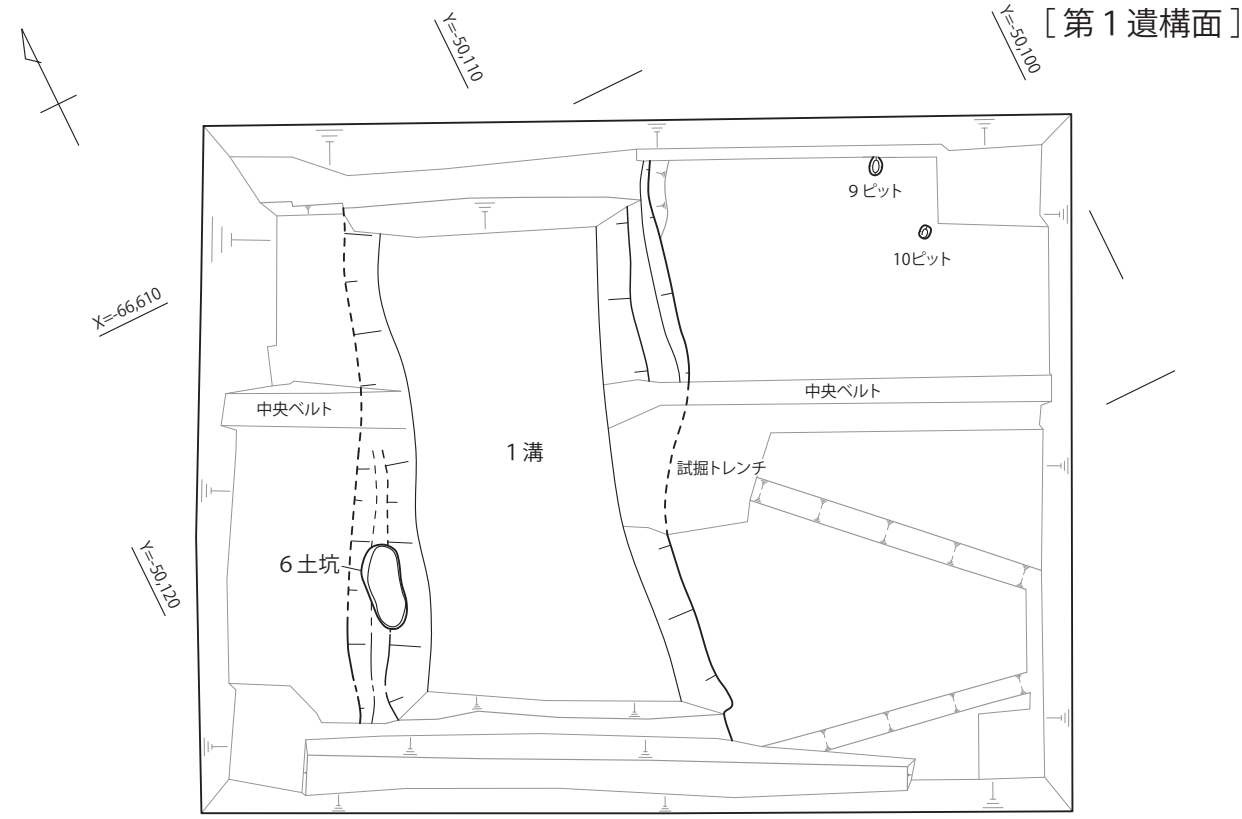
２溝
① 10Y6/1 褐灰色 中粒砂混じりシルト　粘性弱　しまり中
② 10YR4/1 褐灰色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト (φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
③ 10YR3/1 黒褐色 中粒砂～極粗粒砂混じりシルト (φ1～2cm炭化物混)　粘性中　しまり中
④ 10YR3/1 黒褐色 極粗粒砂混じりシルト (φ0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
⑤ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
⑥ 10YR3/1 黒褐色 極細粒砂～粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑦ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂～極粗粒砂混じりシルト (細粒砂～極粗粒砂ラミナ状混生木多混　φ1cm炭化物混)　粘性弱　しまり中
⑧ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑨ 10YR3/1 黒褐色 極細粒砂～細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑩ 10YR3/1 黒褐色 中粒砂～細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑪ 2.5Y5/2 暗灰黄色 極粗粒砂～中礫　粘性なし　しまり弱
⑫ 10YR7/3 にぶい黄橙色 極粗粒砂～大礫 (極粗粒砂ラミナ状混)　粘性なし　しまり弱
⑬ 10YR3/1 黒褐色 中礫～大礫混じりシルト (中礫～大礫ラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑭ 10YR4/1 褐灰色 シルト混じり粗粒砂～中礫 (10YR3/1 黒褐色 シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑮ 10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト～大礫 (細粒砂ラミナ状混)　粘性強　しまり中
⑯ 2.5Y5/2 暗灰黄色 中礫～大礫混じりシルト　粘性中　しまり中
⑰ 10YR6/1 褐灰色 シルト混じり極細粒砂　粘性弱　しまり弱
⑱ 10YR3/1 黒褐色 粗粒砂混じりシルト (粗粒砂ラミナ状混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
⑲ 10YR5/1 褐灰色 極粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑳ 10YR7/2 にぶい黄橙色 中粒砂　粘性なし　しまり弱
㉑ 2.5Y7/4 浅黄色 極粗粒砂～中礫　粘性なし　しまり弱
㉒ 10YR3/1 黒褐色 粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
㉓ 10YR7/2 にぶい黄橙色 シルト混じり細粒砂　粘性弱　しまり弱

11流路
① 10Y4/1 褐灰色 中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
② 10YR3/1 黒褐色 細粒砂～中粒砂混じりシルト (生木混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
③ 10YR3/1 黒褐色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
④ 2.5Y6/2 灰黄色 シルト混じり粗粒砂　粘性弱　しまり弱
⑤ 10YR3/1 黒褐色 粗粒砂混じりシルト (生木混)　粘性強　しまり中
⑥ 2.5Y6/2 灰黄色 中礫～細礫　粘性なし　しまり弱
⑦ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂～中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑧ 10YR3/1 黒褐色 中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑨ 10Y4/1 褐灰色 粗粒砂～中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑩ 10YR4/1 褐灰色 極細粒砂混じりシルト (極細粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑪ 10Y4/1 褐灰色 極粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑫ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂～中粒砂混じりシルト (生木混)　粘性中　しまり中
⑬ 10YR5/1 褐灰色 シルト混じり中粒砂 (褐色 シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑭ 10YR5/1 褐灰色 極粗粒砂～中礫　粘性なし　しまり弱
⑮ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂～中粒砂混じりシルト (生木混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
⑯ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂～中粒砂混じりシルト (生木混　φ1～2cm炭化物混)　粘性中　しまり中
⑰ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑱ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混)　粘性強　しまり中
⑲ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
⑳ 2.5Y6/2 灰黄色 シルト混じり極粗粒砂～中礫 (10YR3/1 黒褐色 シルトラミナ状混土器混)　粘性弱　しまり弱
㉑ 10YR3/1 黒褐色 細粒砂～中粒砂混じりシルト (φ1～2cm炭化物混)　粘性中　しまり中
㉒ 10YR3/1 黒褐色 極細粒砂混じりシルト　粘性中　しまり中
㉓ 10YR3/1 黒褐色 粗粒砂～極粗粒砂混じりシルト (極粗粒砂ラミナ状混)　粘性弱　しまり中
㉔ 10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細粒砂　粘性弱　しまり弱
㉕ 10YR3/1 黒褐色 シルト　粘性中　しまり中
㉖ 10YR5/1 褐灰色 極粗粒砂～中粒砂　粘性弱　しまり弱
㉗ 10YR5/1 褐灰色 シルト　粘性強　しまり強

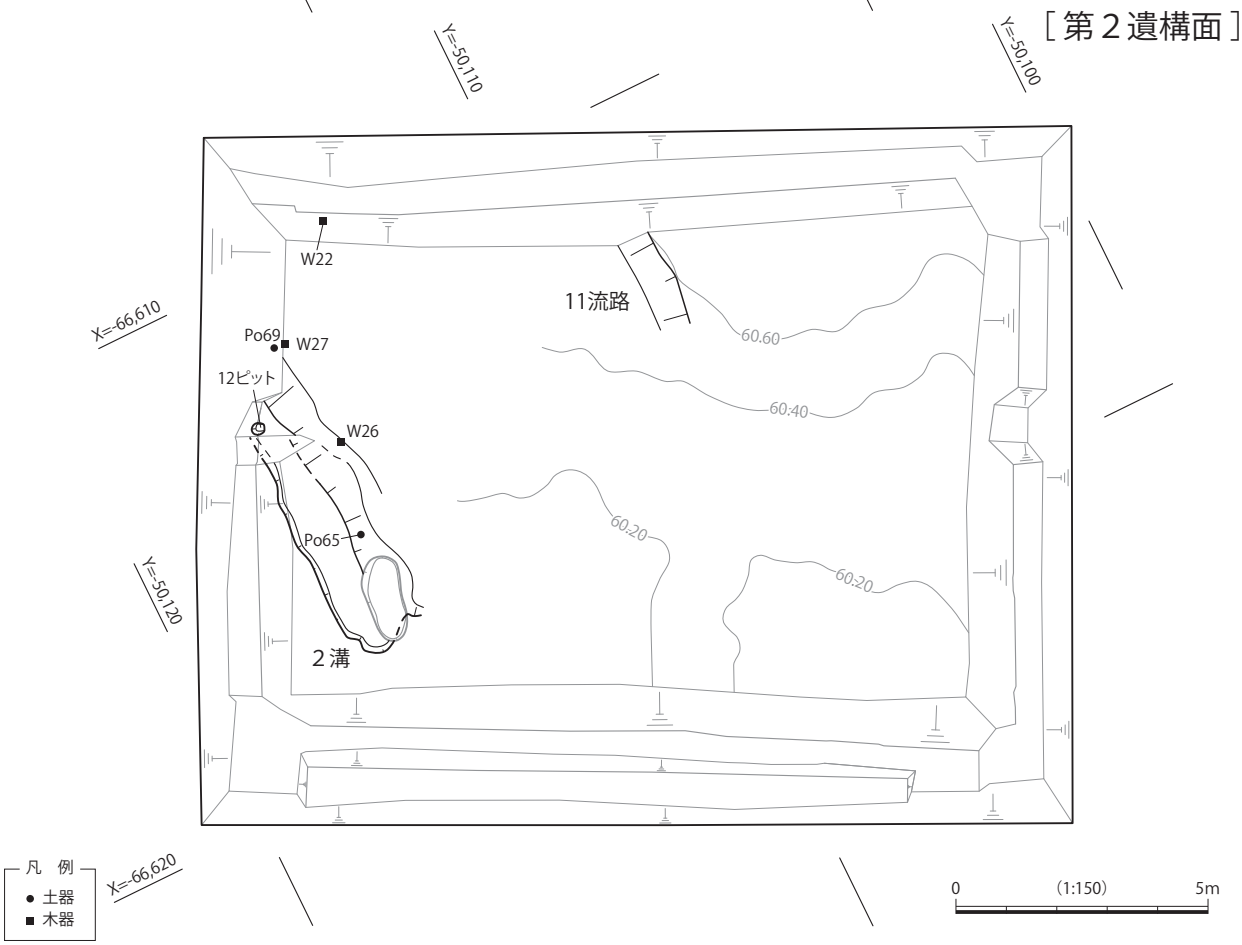
第 67 図　調査区中央ベルト土層断面図、土色注記（３）

２溝⑬層の土壌サンプル（試料 13）の自然科学分析の結果、イネ属が水田雑草のカヤツリグサ科、オモダカ属、ミズアオイ属を伴って産出することから、本遺構は農耕用に利用されたと推測されている。わずかに検出される鞭虫卵は、生活汚染程度の密度で近接して生活域の分布が示唆されている（第

［第１遺構面］



［第２遺構面］



第 68 図　Ｐ６区全体図

５章第１節）。

11 流路（第 68・70 図、第９表）

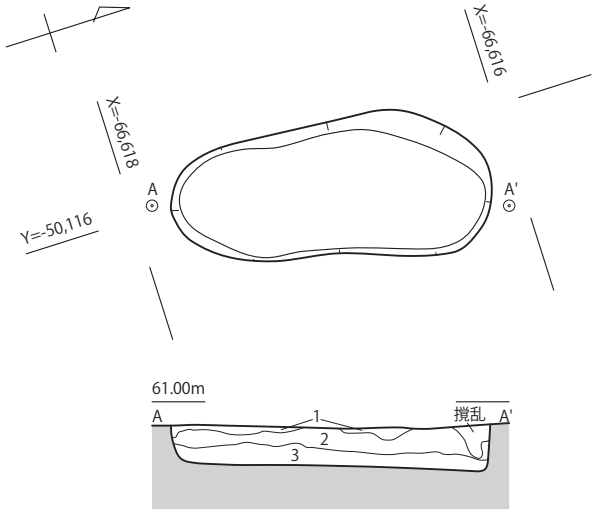
調査区中心部に位置し、南西－北東方向に主軸をとる。南・北壁で確認され、西側を近現代の１溝に切られているため全容は不明である。南・北壁の断面で確認された規模は、長さ約 16m、幅約３m、深さは最深部で約 1.0mを測る。堆積土は①～㉗層まで砂混じりシルト及び砂層が互層を呈して堆積している。そのことから、比較的急流であった時期と滞留している時期があったと想定される。遺物は、古代から中世の土器が散漫に出土している。⑳層から出土した炭化材（試料 26）について放射性炭素年代測定を行った結果、calAD1156-1221（暦年較正２σの確率１位）の値が得られた（第５章第１節）。出土した中世土器の年代観と概ね調和している。

16 溝（第 66・70 図、第９表）

調査区西寄りの北壁で確認された流路である。北東－南西方向に主軸をとる。北壁と中央ベルトのみで確認され、全容は不明である。近現代の１溝に切られ、２溝を切っている。北壁と中央ベルトで確認された規模は、長さ約 16m、幅約 4.5m、深さは最深部で約 0.75mを測り、断面は逆台形を呈する。堆積土は①～⑤層で砂混じりシルト及び砂礫層が互層を呈して堆積している。遺物は、古代から中世の土器小片が散漫に出土している。

17 流路（第 65 ～ 67・70 図、第９表）

調査区全域で確認された流路である。南－北方向に主軸をとる。１・２・16 溝、11 流路に切られ、東西の立ち上がりは調査区外のため、全容は不明である。検出された規模は、長さ約 15.0m、幅約 12.0m、深さは最深部で約 0.95mを測る。堆積土は①～⑯層まで砂混じりシルト及び砂層が互層を呈して堆積している。そのことから、比較的急流であった時期と滞留している時期があったと想定される。遺物は、古代の土器が散漫に出土している。



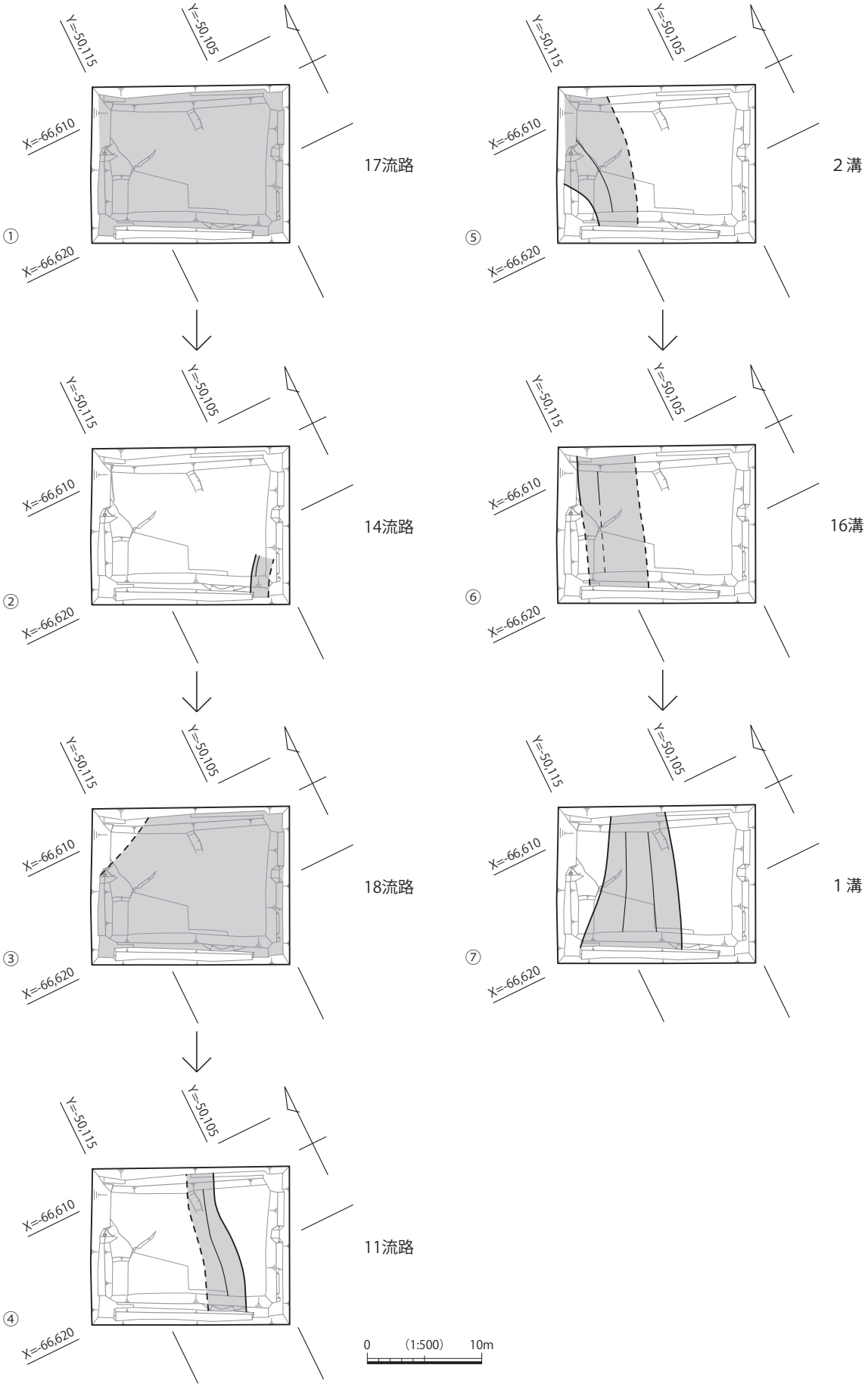
第 69 図　６土坑

18 流路（第 65 ～ 67・70 図、第９表）

調査区ほぼ全域で確認された流路である。南－北方向に主軸をとる。２溝、18 流路と１溝に切られる。検出された規模は、長さ約 15.0m、幅約 12.0m、深さは最深部で約 0.2mを測る。Ⅴ層と 17 流路上面の間に介在し、短期間形成された流路と想定される。遺物は、土器小片が散漫に出土している。

６土坑（第 68・69 図、第９表、図版 15）

調査区南西に位置し、２溝を切る。主軸は N-16° -E。長軸 1.7m、短軸 0.7m、深さ 0.2mを測る。埋土は１層黒色粘質土、２層灰白色粘質土、



第 70 図　Ｐ６区　溝・流路変遷模式図

３層褐灰色粘質土に分かれる。

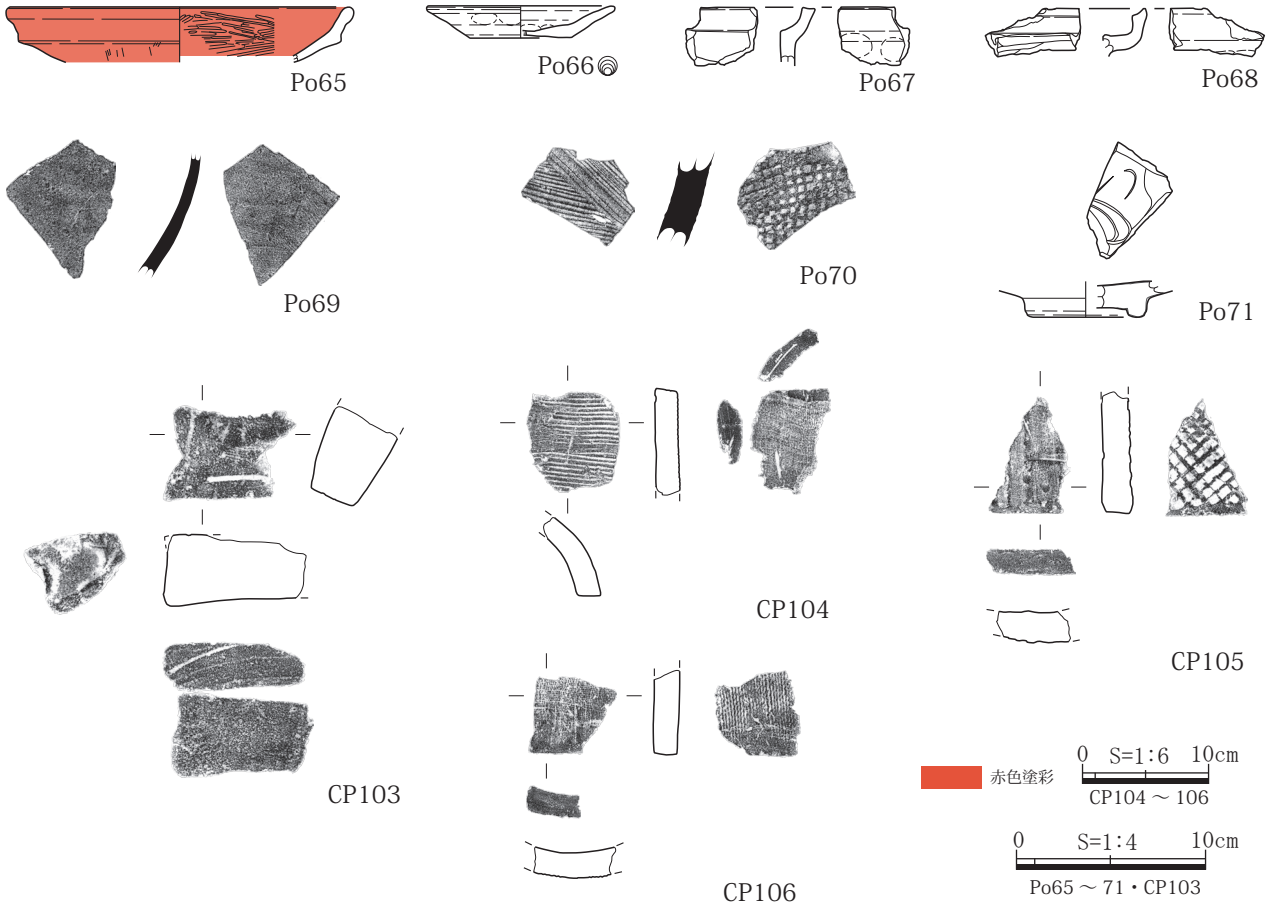
遺物は出土しておらず、時期・性格とも不明である。

出土遺物（第 71・72 図、第 14・21・23 表、図版 45）

Po65 は弥生時代後期の高坏坏部で、内面は丁寧にミガキが施される。内外面赤色塗彩がなされている。Po66 は底部から口縁部に向かって直線的に立ち上がる土師器皿である。底面には回転糸切り痕跡と板目痕跡が残る。Po67・68 は瓦質土器の鍋口縁部である。前者は受け部が狭く、口縁端部がほぼ平坦であるのに対し、後者は受け部がやや広く、斜め上方に張り出す。Po69 は須恵器甕の体部片であり、内外面丁寧なナデが施されている。Po70 は同じく須恵器甕の体部片で、外面は格子目タタキ、内面はカキメの調整がみられる。Po71 は青磁碗の底部片であり、見込みにヘラ状工具による施文がなされている。

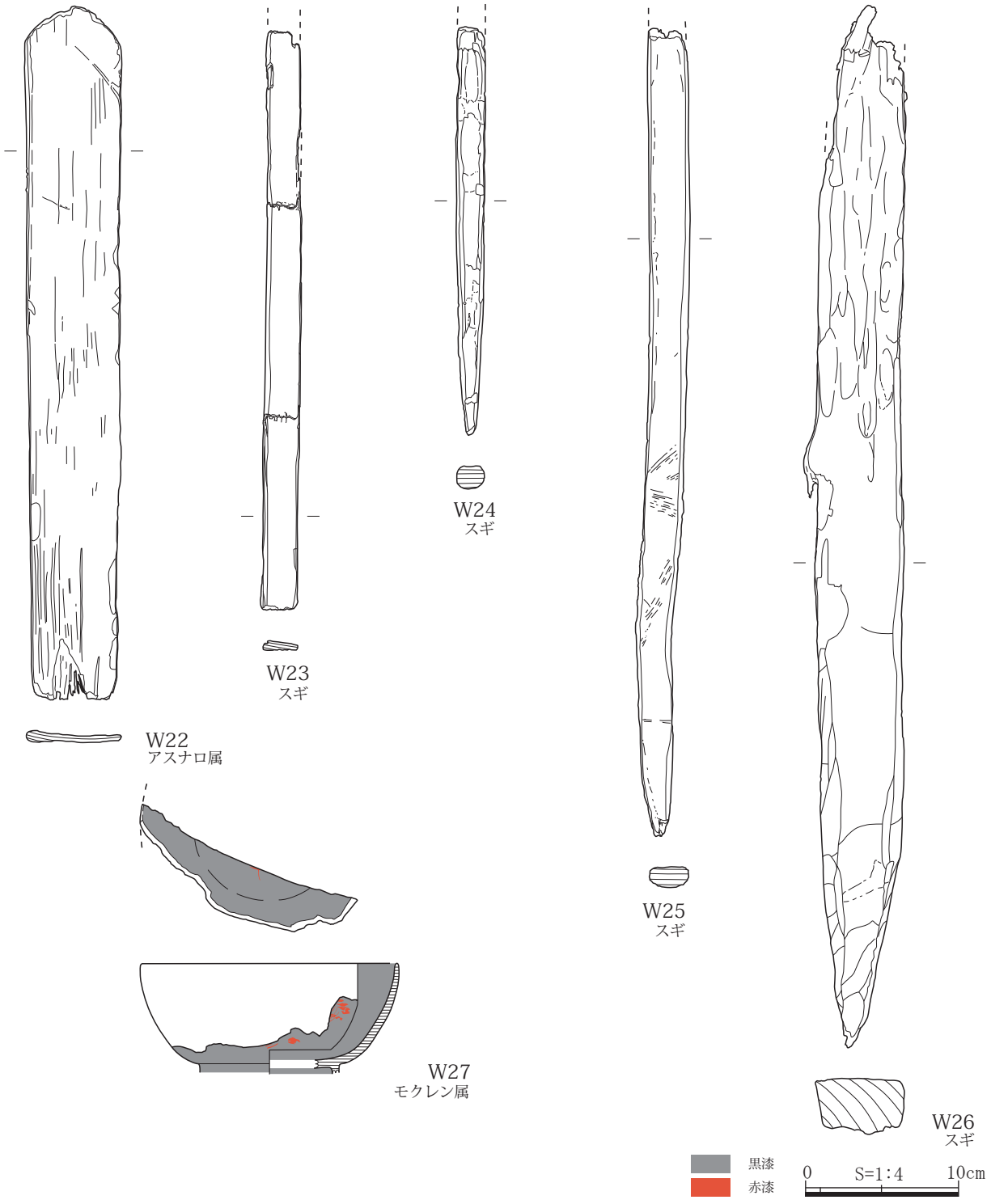
CP103 ～ 106 は瓦をまとめている。CP103 は軒平瓦であり、瓦当面に忍冬唐草文と想定される文様がみられることからⅠ類に比定される。CP104 は丸瓦であり、凸面に１単位 13 条のハケ、凹面には布目が観察される。CP105 ・ 106 は平瓦であり、前者は凸面に正方形格子叩き、凹面は布目と模骨痕が観察される。後者は、凸面が縄目叩き、凹面には布目がみられる。

W22 はヒノキ科アスナロ属の板材で、最大長 45.5cm、最大幅 6.2cm、最大厚 0.8cm を測る。頭部が丸みを帯びるように加工されている。W23 はスギの板材で、上下とも欠損しており不明品である。W24 は残存長 26.9cm、最大幅 1.9cm、最大厚 1.5cm のスギ材の棒状木製品である。断面が丸みを



第 71 図　Ｐ６区出土遺物

帯びて厚みがあるものの、先端を尖らしていることから斎串と想定している。W25 は残存長 53cm、最大幅 2.7cm、最大厚 1.3cm のスギ材の棒状木製品である。厚みはあるものの平坦に加工し、先端も尖らせていることから、同じく斎串と想定した。W26 は残存長 68.4cm、最大幅 6.4cm、最大厚 3.7cm のスギ材の角杭である。建築材を転用したものであろうか。W27 は漆器椀である。内外面に黒漆の下地が塗られ、内面に赤漆により文様が描かれている。樹種同定の結果、モクレン科モクレン属であることが判明した。



第 72 図　Ｐ６区出土木器

第８節　Ｐ７区の調査

第１項　概要と基本層序

Ｐ７区は、Ｐ６区の北北東約16mに位置する。調査区の現況は２筆の水田であり、圃場整備によって調査区内は薄く造成土・現代耕作土が覆っていた。

重機による造成土と現代耕作土の除去後､東壁から北壁沿いにＬ字状に折れ曲がる近現代の１溝と、中世の遺物包含層を検出した。１溝の埋土からは若干の古瓦などが出土している。その後、人力による包含層の掘削を行い、Ⅳ層上面を遺構面とした。遺構面からは奈良時代の掘立柱建物１棟、鎌倉時代の掘立柱建物１棟、その他柱穴やピットなどを検出している。倉吉市教育委員会による試掘トレンチ断面からⅣ層黒色シルト下部にローム層（Ⅴ層）の堆積を確認し、無遺物層であるⅣ層上面で調査を終了した。なお、基本層序Ⅳ層の土壌分析（植物珪酸体・花粉分析）（試料14）の結果、乾燥した環境で、周囲にヨモギ属、クリ、コナラ属コナラ亜属が分布していた環境が推測されている（第５章第１節)。基本層序は以下の通りである。

Ⅰ　層　１溝の範囲を除き、調査区全域で堆積が確認されたにぶい黄橙色シルト層で、中世の土器を含む。

Ⅱ　層　１溝の範囲を除き、調査区全域で堆積が確認された褐灰色シルト層で、中世の土器を含む。

Ⅲ　層　１溝の範囲を除き、調査区全域で堆積が確認された黒褐色砂混じりシルトで古代の土器を含む。

Ⅳ　層　１溝の範囲を除き、調査区全域で堆積が確認された黒色シルト層。無遺物層でローム層上部に堆積する。本層上面を遺構面とする。

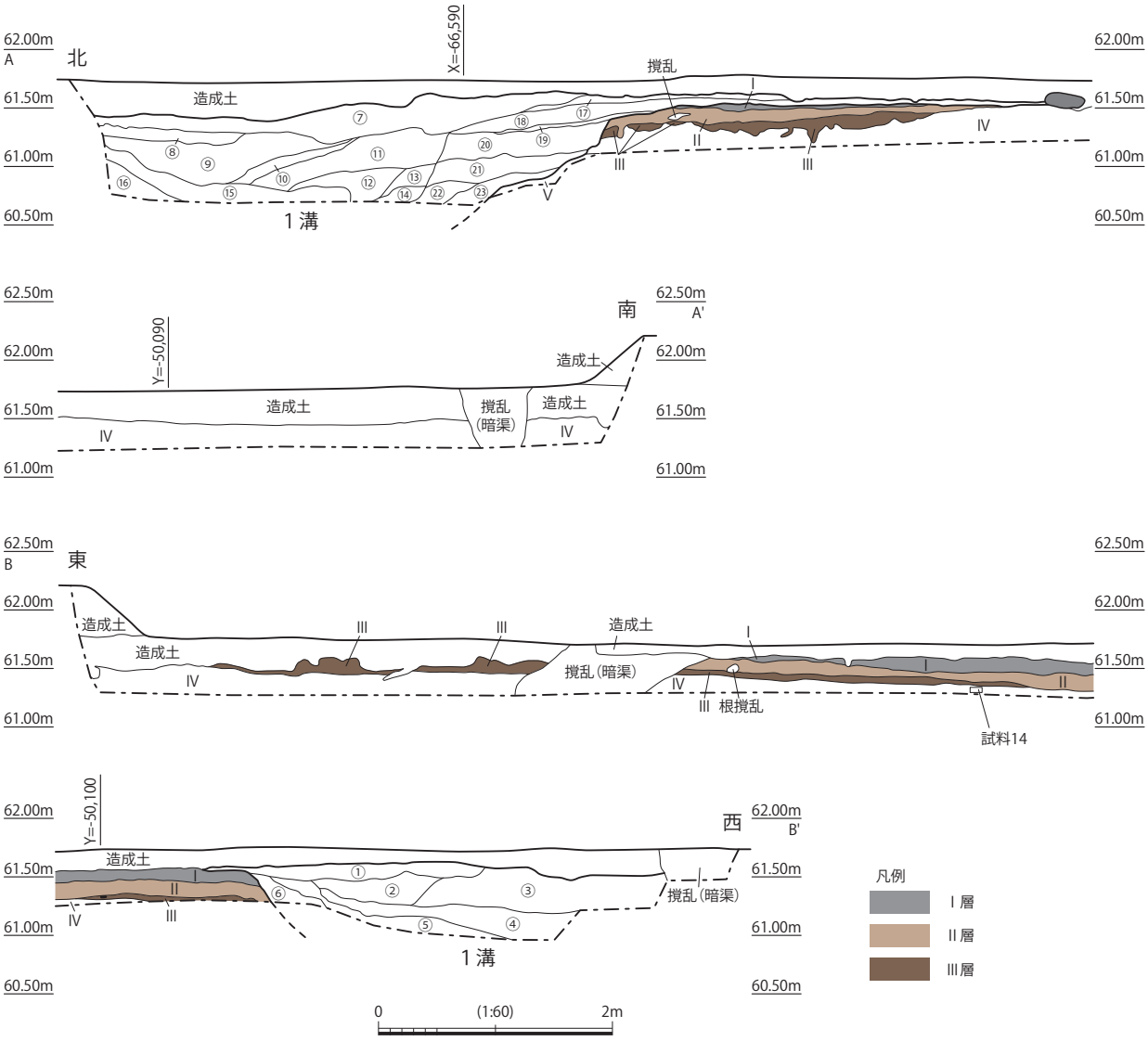
Ⅴ　層　１溝の範囲を除き、調査区全域で堆積が確認された黄色粘土層（ローム層)。基盤層であり、倉吉市教育委員会試掘トレンチ内及び１溝壁面で確認している。

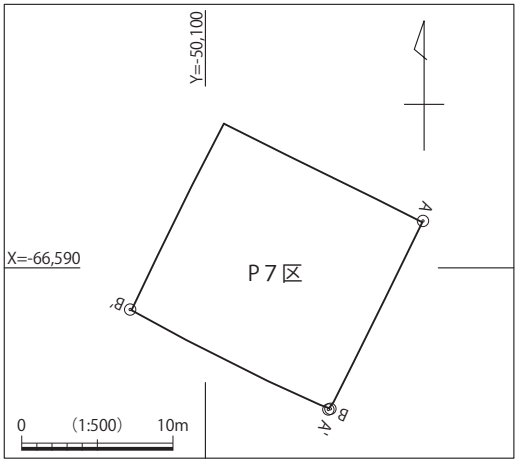
第２項　検出した遺構と遺物

掘立柱建物１（第 74 ～ 76 図、第 10・11 表、図版２・17）

調査区南において、Ⅴ層上面で検出した掘立柱建物である。主軸は推定でN-79° -Wをとり、梁行の北辺の柱穴のみの検出で、建物全体の規模は不明である。梁行１間（2.65m）を測り、桁行は不明である。

本建物は２・３柱穴で構成される。２柱穴の平面形は不整円形を呈し､規模は長軸0.38m､短軸0.37m、検出面からの深さは0.65m、底面の標高は60.86mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の１層で、径20 ～ 25cmの亜円礫が３段にわたり出土している。これらの礫は根巻石や礎盤石であったものが、柱が抜き取られた後に埋め戻されたものと想定している。３柱穴の平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.38m、短軸0.32m、検出面からの深さは0.52m、底面の標高は61.00mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の１層で、径10 ～ 25cmの大小礫が複数出土している。これらの礫は根巻石などに使用さ





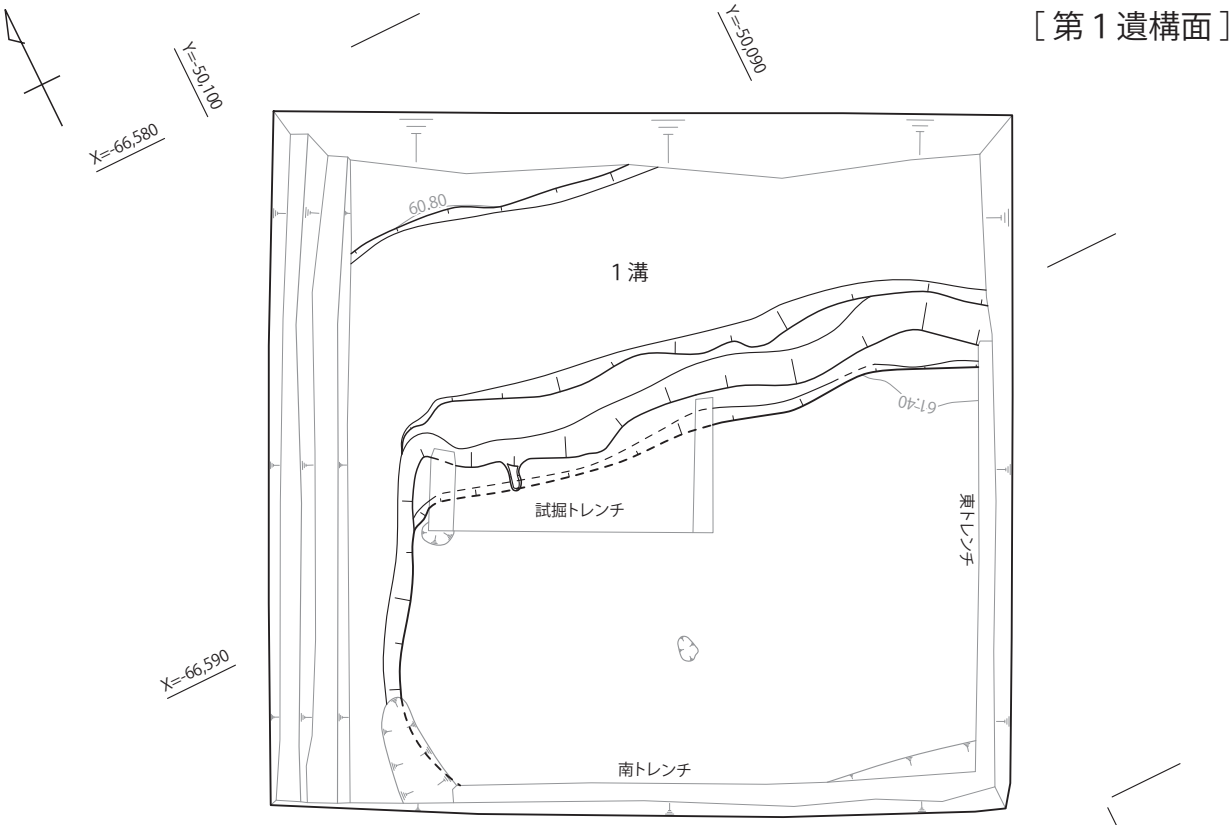
土層断面位置図

1溝
① 10YR5/1 褐灰色 シルト（φ0.5～1cm炭化物少混） 粘性中 しまり中
② 10YR5/1 褐灰色 砂混じりシルト（細粒砂～粗粒砂混 10YR8/2 灰白色 シルトφ1～2cmブロック混） 粘性弱 しまり弱
③ 10YR4/1 褐灰色 シルト（生木多混） 粘性強 しまり中
④ 10YR4/1 褐灰色 シルト（極細粒砂～中粒砂ラミナ状混） 粘性弱 しまり弱
⑤ 10YR7/1 灰白色 砂（10YR5/1 褐灰色 シルトφ10cmブロック混） 粘性弱 しまり弱
⑥ 10YR4/1 褐灰色 砂混じりシルト（中粒砂～極粗粒砂多混） 粘性中 しまり中
⑦ 10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト（粗粒砂～細礫混 10YR7/6 明黄褐色 シルトマーブル状混） 粘性強 しまり強
⑧ 10YR4/1 褐灰色 砂混じりシルト（中粒砂～粗粒砂混） 粘性中 しまり中
⑨ 10YR4/1 褐灰色 砂混じりシルト（中粒砂～粗粒砂混 生木混） 粘性強 しまり中
⑩ 10YR7/2 にぶい黄橙色 砂（生木小片混） 粘性弱 しまり弱
⑪ 10YR4/1 褐灰色 砂混じりシルト（細粒砂～中粒砂混 生木混） 粘性中 しまり中
⑫ 10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト（中粒砂～粗粒砂ラミナ状混 φ1～2cm炭化物混） 粘性中 しまり中
⑬ 10YR4/1 褐灰色 シルト混じり砂（φ1～2cm炭化物混） 粘性弱 しまり弱
⑭ 10YR4/1 褐灰色 砂礫（粗粒砂～極粗粒砂混 拳大礫混） 粘性弱 しまり弱
⑮ 10YR4/1 褐灰色 礫砂 粘性弱 しまりなし
⑯ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり砂（中粒砂～極粗粒砂ラミナ状混） 粘性弱 しまり弱
⑰ 10YR5/2 灰黄色 砂混じりシルト（粗粒砂～極粗粒砂混） 粘性中 しまり中
⑱ 10YR6/2 灰黄色 砂混じりシルト（極細粒砂～細粒砂混） 粘性中 しまり中
⑲ 10YR6/2 灰黄色 シルト混じり砂 粘性弱 しまり弱
⑳ 10YR4/1 褐灰色 砂混じりシルト（中粒砂～極粗粒砂混） 粘性中 しまり中
㉑ 10YR4/1 褐灰色 砂混じりシルト（細粒砂混） 粘性やや強い しまり中
㉒ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり砂（φ1～2cm炭化物混） 粘性弱 しまり弱
㉓ 10YR4/1 褐灰色 砂 粘性弱 しまり弱

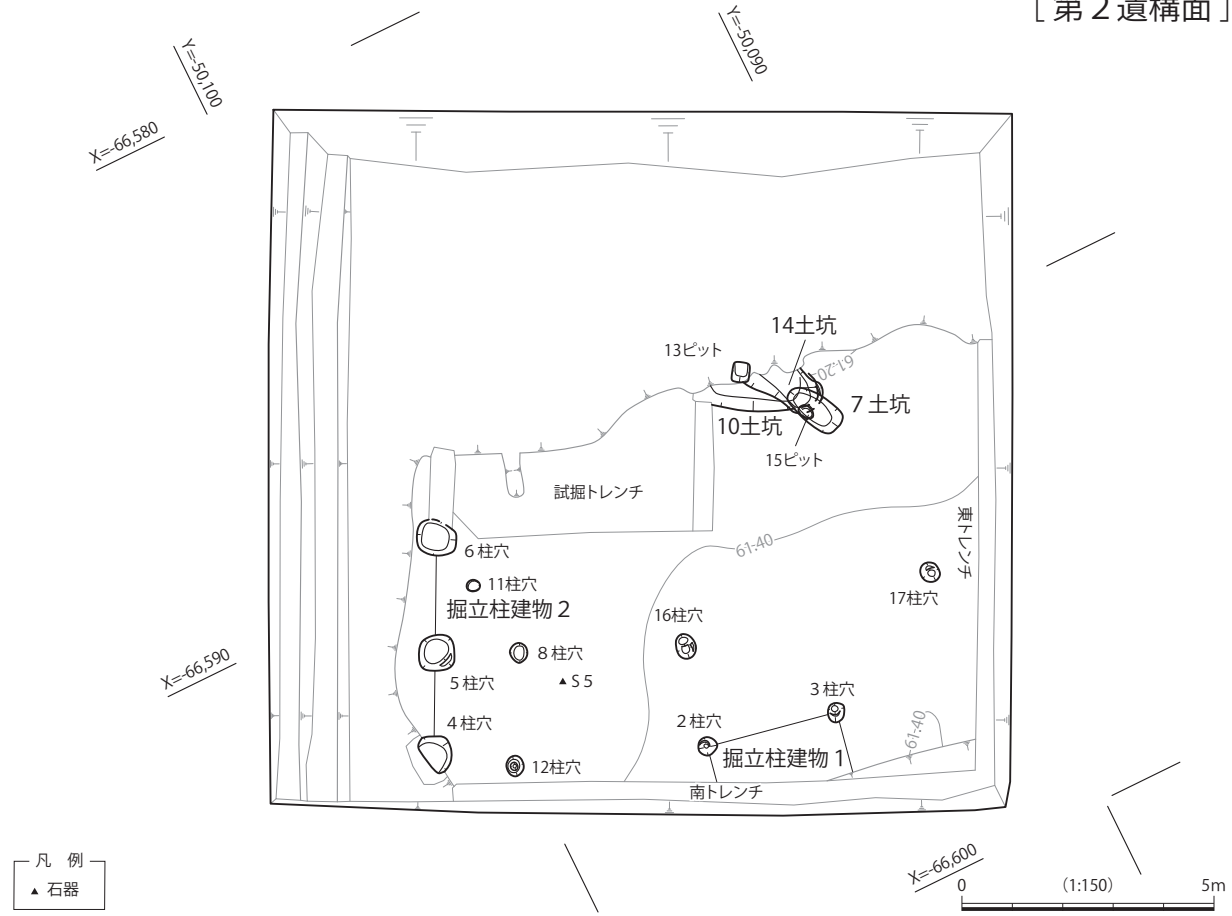
基本層序
Ⅰ 10YR7/3 にぶい黄橙色 シルト（細粒砂～細礫多混） 粘性中 しまり中
Ⅱ 10YR4/1 褐灰色 シルト（細粒砂～細礫多混 φ1cm炭化物混） 粘性中 しまりやや強
Ⅲ 10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト（細粒砂～細礫密混） 粘性中 しまりやや強
Ⅳ 10YR2/1 黒色 シルト（極細粒砂～中粒砂混） 粘性強 しまり強
Ⅴ 2.5Y8/6 黄色 粘土 粘性強 しまり強 （ローム層）

第 73 図　調査区東壁・南壁土層断面図、土層断面位置図、土色注記

［第１遺構面］

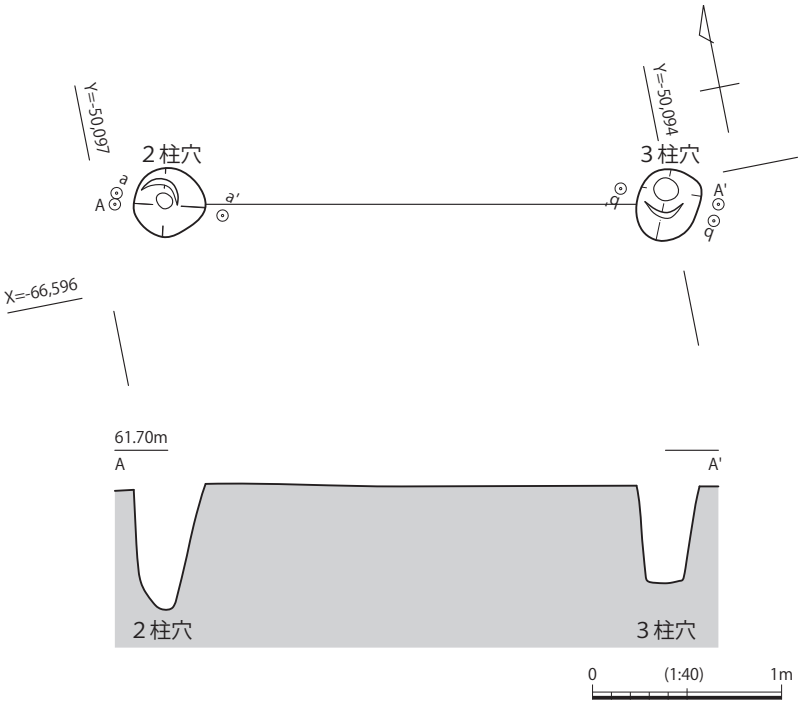


［第２遺構面］



第 74 図　Ｐ７区全体図

れたものが、柱が抜き取られた後に埋め戻されたものと想定している。柱穴中程から長さ16cmの炭化材が出土している。柱穴規模は小さいものの、柱穴には丁寧な基礎固めが行われていたものと考える。出土土器は図化していないが、２・３柱穴埋土中から土師器小片が出土している。３柱穴から出土した炭化材（試料27）について放射性炭素年代測定を行った結果、calAD1407-1438（暦年較正２σの確率１位）の値が得られた（第５章第１節）。建物柱穴から出土した土器の年代観と概ね調和している。



第 75 図　掘立柱建物１

掘立柱建物２（第 74・77 図、第 10・11 表、図版２・18・19）

調査区西において、Ⅴ層上面で検出した掘立柱建物である。主軸は推定でN-27°-Wをとり、桁行の東辺の柱穴のみの検出で、建物全体の規模は不明である。桁行は２間（4.3m）であるが、本来はもう１間存在した可能性もある。梁行は１溝に切られ不明である。

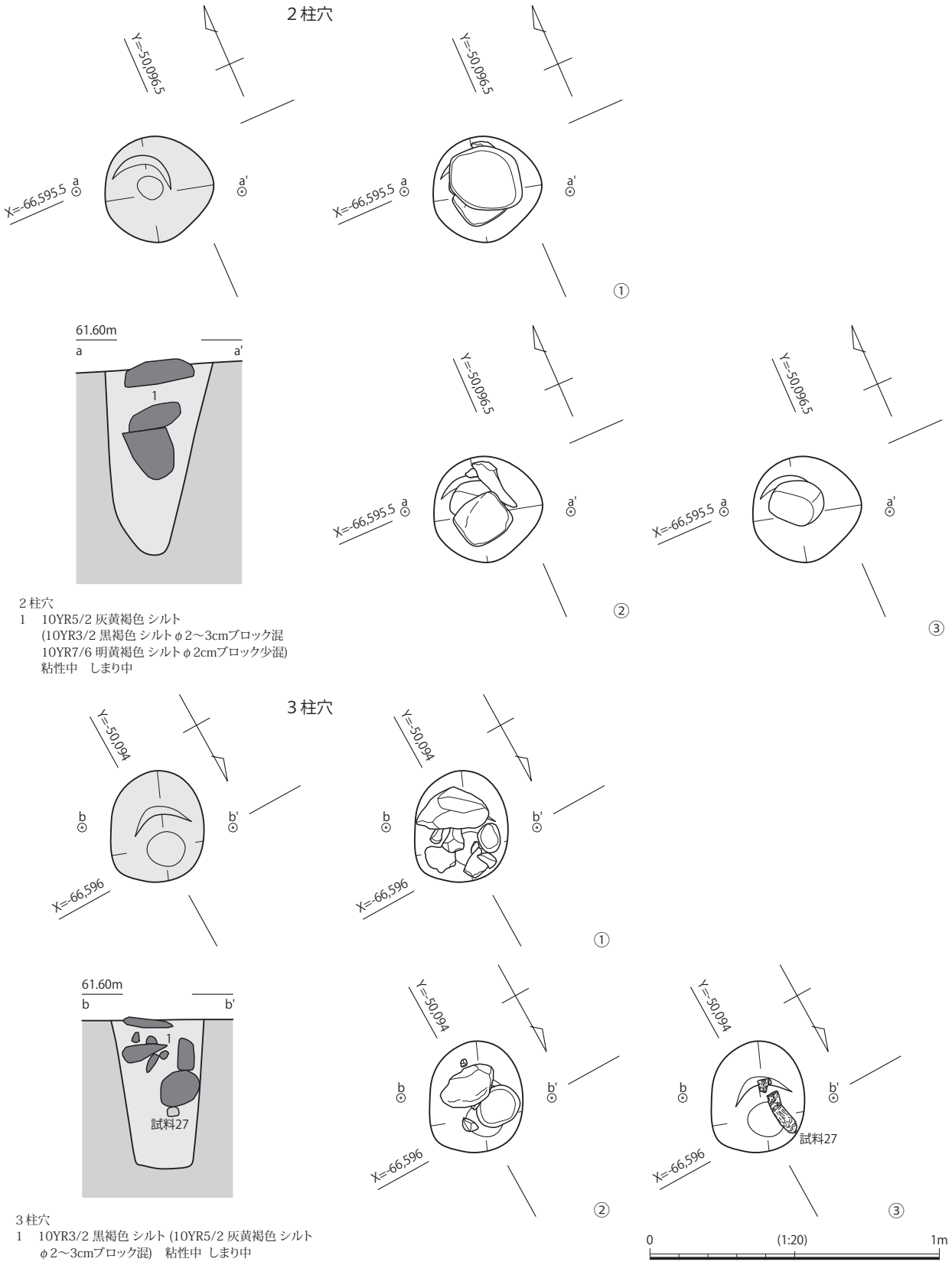
本建物は４～６柱穴で構成される。４柱穴の平面形は不整円形を呈し、西側の一部が１溝に切られる。残存規模は長軸0.79m、短軸0.59m、検出面からの深さは0.31m、底面の標高は60.85mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の１・２層と掘方埋め土の３・４層からなる。５柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸0.81m、短軸0.75m、検出面からの深さは0.39m、底面の標高は60.84mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の１層と掘方埋め土２・３層からなる。６柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、北側の一部が試掘トレンチにより欠失している。規模は長軸0.78m、短軸0.70m、検出面からの深さは0.37m、底面の標高は60.94mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の１・２層と掘方埋め土３～６層からなる。

本建物の帰属時期は明確にはできないが、大鴨遺跡３区の調査成果を踏まえれば、建物の主軸、柱穴規模などから判断し、８～９世紀に帰属する可能性が考えられる。

７土坑（第 74・78 図、第 10 表）

調査区北東寄りにおいてⅤ層上面で検出した土坑である。北側で10・14土坑を切っている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.18m、短軸0.58m、検出面からの深さは0.18mを測る。埋土は１層のにぶい黄橙色～褐灰色砂混じりシルト、２層の褐灰色砂混じりシルト、３層の黒褐色シルトが堆積する。

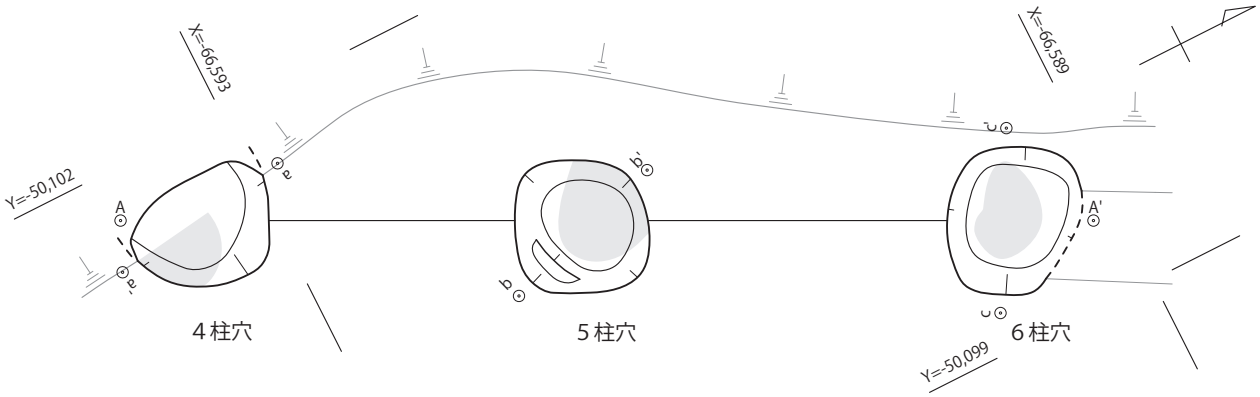
本遺構の帰属時期と性格は不明である。

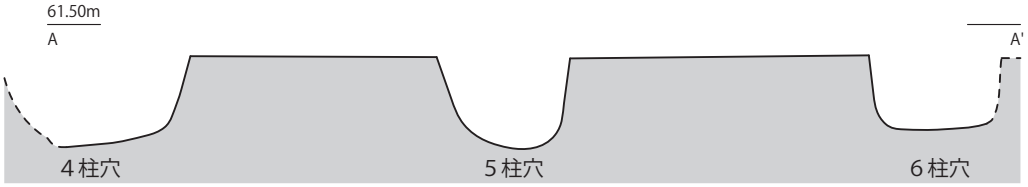


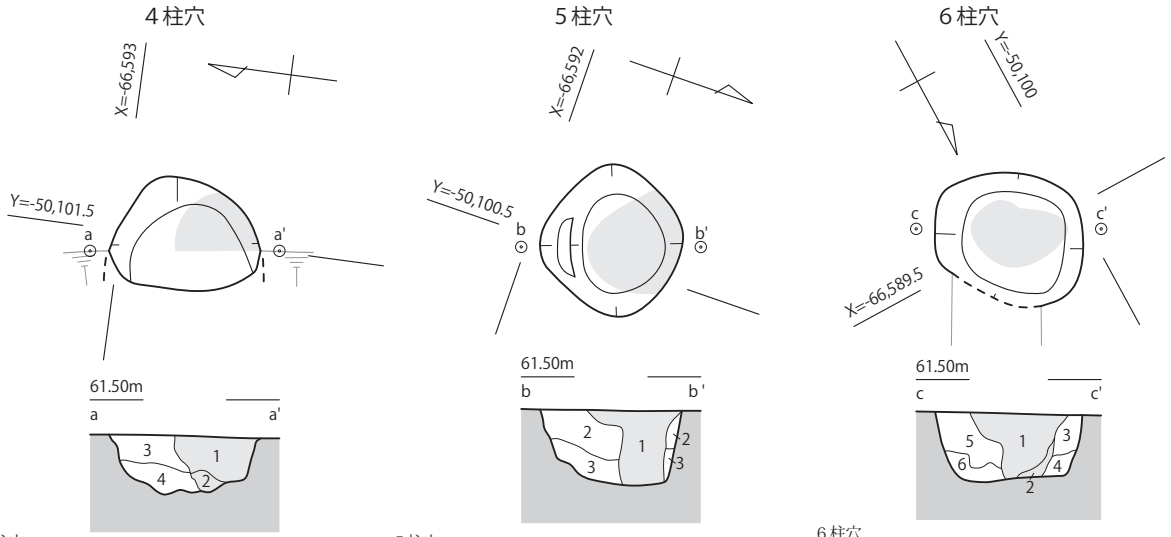
第 76 図　掘立柱建物１　２・３柱穴

10 土坑（第 74・78 図、第 10 表）

調査区北東寄りにおいてⅤ層上面で検出した土坑である。北東側で14土坑を切り、南東側で７土坑、北側で１溝に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸 2.45m、短軸 0.55m、検出面からの深さは 0.37m を測る。埋土は１層の明褐色砂混じりシルトと２～４層の褐灰色シルトや







4柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 砂混じりシルト
(10YR3/1 黒褐色 シルトφ2～3cmブロック密混
10YR8/4 浅黄色 シルトφ1～2cmブロック少混)
粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR5/1 褐灰色 シルト
φ2cmブロック混)　粘性強　しまり強
3　10YR5/1 褐灰色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト
φ3cmブロック混)　粘性強　しまり強
4　10YR5/1 褐灰色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト
φ2～3cmブロック密混　10YR8/4 浅黄色 シルト
φ1～2cmブロック混)　粘性強　しまり強

5柱穴
1　10YR6/2 灰黄褐色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト
φ2～3cmブロック混　10YR8/4 浅黄色 シルト
φ2cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR6/2 黄灰褐色 シルト
φ3～5cmブロック密混　10YR8/4 浅黄色 シルト
φ2cmブロック混)　粘性強　しまり強
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR5/1 褐灰色 シルト
φ5～10cmブロック混)　粘性強　しまり強

6柱穴
1　10YR6/2 灰黄褐色 砂混じりシルト
(10YR3/1 黒褐色 シルトφ2～3cmブロック混
10YR8/4 浅黄色 シルトφ1cmブロック混)
粘性中　しまり中
2　10YR8/4 浅黄色 シルト
(10YR4/1 褐灰色 シルトφ2cmブロック少混)
粘性強　しまり中
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄色 シルト
φ1～2cmブロック混)　粘性強　しまり強
4　10YR5/1 褐灰色 シルト　粘性中　しまり中
5　10YR5/1 褐灰色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト
φ3～5cmブロック混　10YR8/4 浅黄色 シルト
φ1cmブロック混)　粘性中　しまり中
6　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄色 シルト
φ1～2cmブロック混)　粘性強　しまり強

0　(1:40)　1m

第 77 図　掘立柱建物２　４～６柱穴

砂混じりシルトが堆積する。

本遺構の帰属時期と性格は不明である。

14 土坑（第 74・78 図、第 10 表、図版 19）

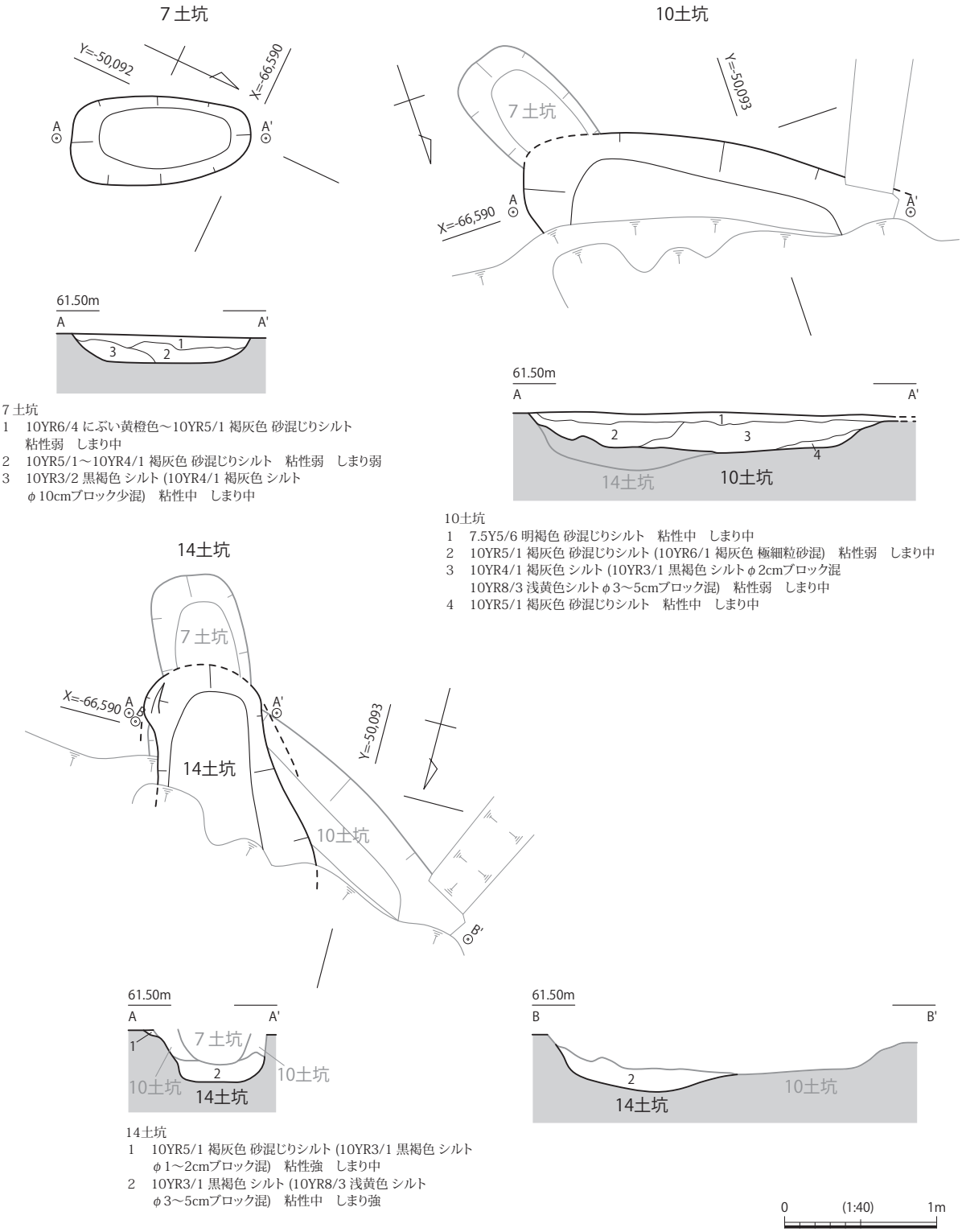
調査区北東寄りにおいてⅤ層上面で検出した土坑である。７・10 土坑及び１溝に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸 1.19m、短軸 0.74m、検出面からの深さは 0.33m を測

る。埋土は１層の褐灰色砂混じりシルトと２層の黒褐色シルトが堆積する。

本遺構の帰属時期と性格は不明である。

８柱穴（第 74・79 図、第 10 表、図版 20）

調査区南西においてⅤ層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.39m、短軸 0.35m、検出面からの深さは 0.42m、底面の標高は 60.93m を測る。埋土は柱痕の１層と掘方



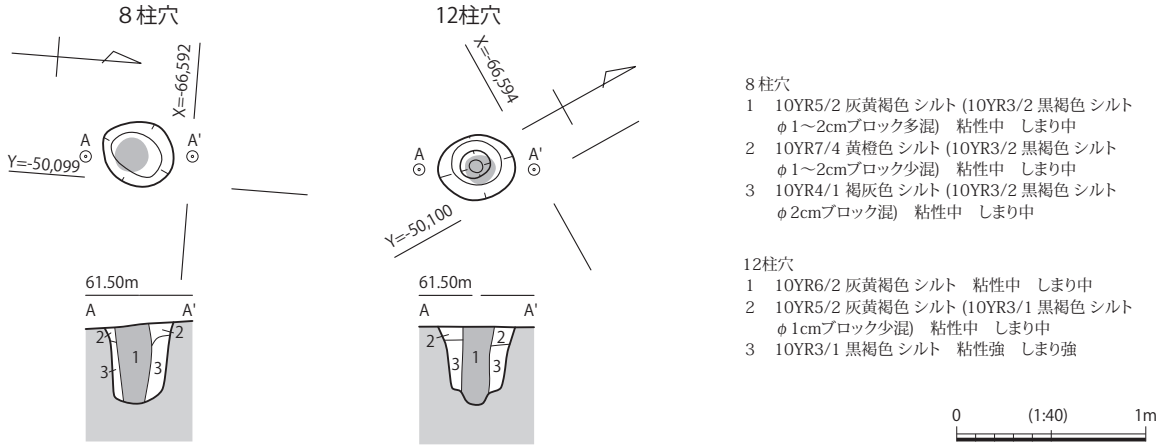
7 土坑
1　10YR6/4 にぶい黄橙色～10YR5/1 褐灰色 砂混じりシルト
　粘性弱　しまり中
2　10YR5/1～10YR4/1 褐灰色 砂混じりシルト　粘性弱　しまり弱
3　10YR3/2 黒褐色 シルト (10YR4/1 褐灰色 シルト
　φ10cmブロック少混)　粘性中　しまり中

10土坑
1　7.5Y5/6 明褐色 砂混じりシルト　粘性中　しまり中
2　10YR5/1 褐灰色 砂混じりシルト (10YR6/1 褐灰色 極細粒砂混)　粘性弱　しまり中
3　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ2cmブロック混
　10YR8/3 浅黄色シルトφ3～5cmブロック混)　粘性弱　しまり中
4　10YR5/1 褐灰色 砂混じりシルト　粘性中　しまり中

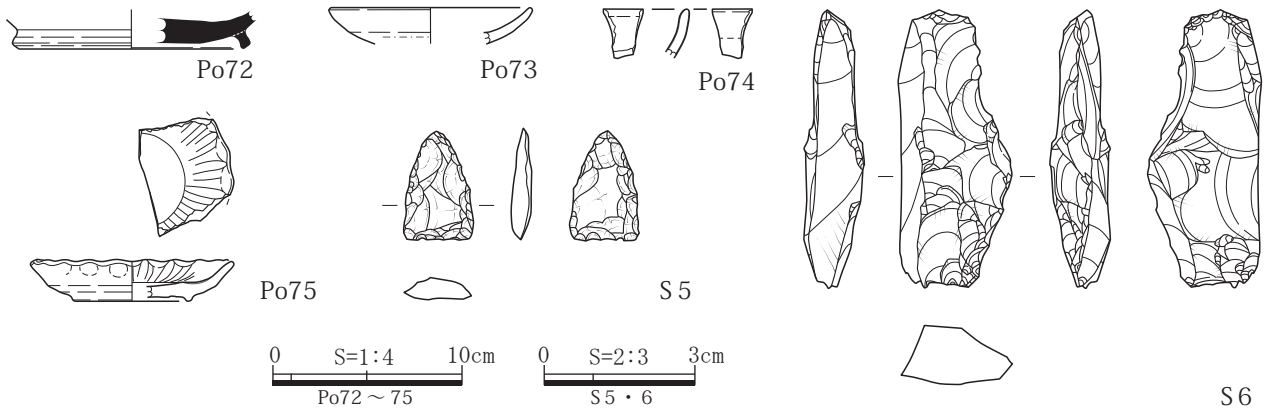
14土坑
1　10YR5/1 褐灰色 砂混じりシルト (10YR3/1 黒褐色 シルト
　φ1～2cmブロック混)　粘性強　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/3 浅黄色 シルト
　φ3～5cmブロック混)　粘性中　しまり強

0　(1:40)　1m

第 78 図　７・10・14 土坑



第 79 図　８・12 柱穴



第 80 図　Ｐ７区出土遺物

埋め土２・３層からなる。

本遺構の帰属時期は、明確にはできないが掘立柱建物１の柱穴規模や埋土などから判断し、12～13 世紀に帰属する可能性が考えられる。

12 柱穴（第 74・79 図、第 10 表、図版 20）

調査区南寄りにおいてⅤ層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.40m、短軸 0.34m、検出面からの深さは 0.41m、底面の標高は 60.92m を測る。埋土は柱痕の１層と掘方埋め土２・３層からなる。底面には径 18.0cm の柱のあたりを検出している。

本遺構の帰属時期は、明確にはできないが掘立柱建物１の柱穴規模や埋土などから判断し、12～13 世紀に帰属する可能性が考えられる。

出土遺物（第 80 図、第 14・22 表、図版 44）

Po72 は外側に張り出した高台を持つ須恵器高台付壺の底部片である。Po73 は体部から口縁部に内湾しながら立ち上がる白磁皿である。外面の体部下半は露胎である。白磁皿Ⅶ類に比定される。Po74 は天目碗の口縁部片である。Po75 は瀬戸美濃系の菊皿で見込み部は露胎である。Ｓ５は無斑晶安山岩製の平基無茎式石鏃である。押圧剥離による成形で、裏面に素材面を残している。Ｓ６は黒曜石製の二次加工のある剥片である。右側縁の一部に加工が施される。

第９節　Ｐ８区の調査

第１項　概要と基本層序

Ｐ８区は、Ｐ７区の北北東約17mに位置する。調査区の現況は１筆の水田であり、圃場整備によって調査区内は造成土が盛られていた。重機による造成土と現代耕作土の除去後、人力による包含層の掘削を行い、Ⅲ層上面を第１遺構面とした。第１遺構面では、中世の溝１条、中世以降の擬似畦畔１条を検出している。その後、調査区全域に堆積するⅢ層と西半に堆積するⅣ層の包含層を掘削して、Ⅴ層上面を第２遺構面とした。第２遺構面ではピット１基が確認された。

倉吉市教育委員会による試掘トレンチ断面で、Ⅴ層黒色シルト下部にローム層（Ⅵ層）の堆積を確認し、無遺物層であるⅤ層上面で調査を終了した。

基本層序は以下の通りである。

Ⅰ　層　調査区のほぼ全域で堆積が確認された褐灰色砂混じりシルト層。

Ⅱ　層　調査区のほぼ全域で堆積が確認された黒褐色砂混じりシルト層。中世の土器を含む。

Ⅲ　層　調査区全域で堆積が確認された褐灰色砂混じりシルト層。中世の土器を含む。本層上面を第１遺構面とする。

Ⅳ　層　調査区西半に堆積が確認された褐灰色砂混じりシルト層。

Ⅴ　層　調査区全域で堆積が確認された黒色シルト層。無遺物層。本層上面を第２遺構面とする。

Ⅵ　層　調査区全域で堆積が確認された褐灰色粘土層（漸移層）。無遺物層でローム層上部に堆積する。

第２項　検出した遺構と遺物

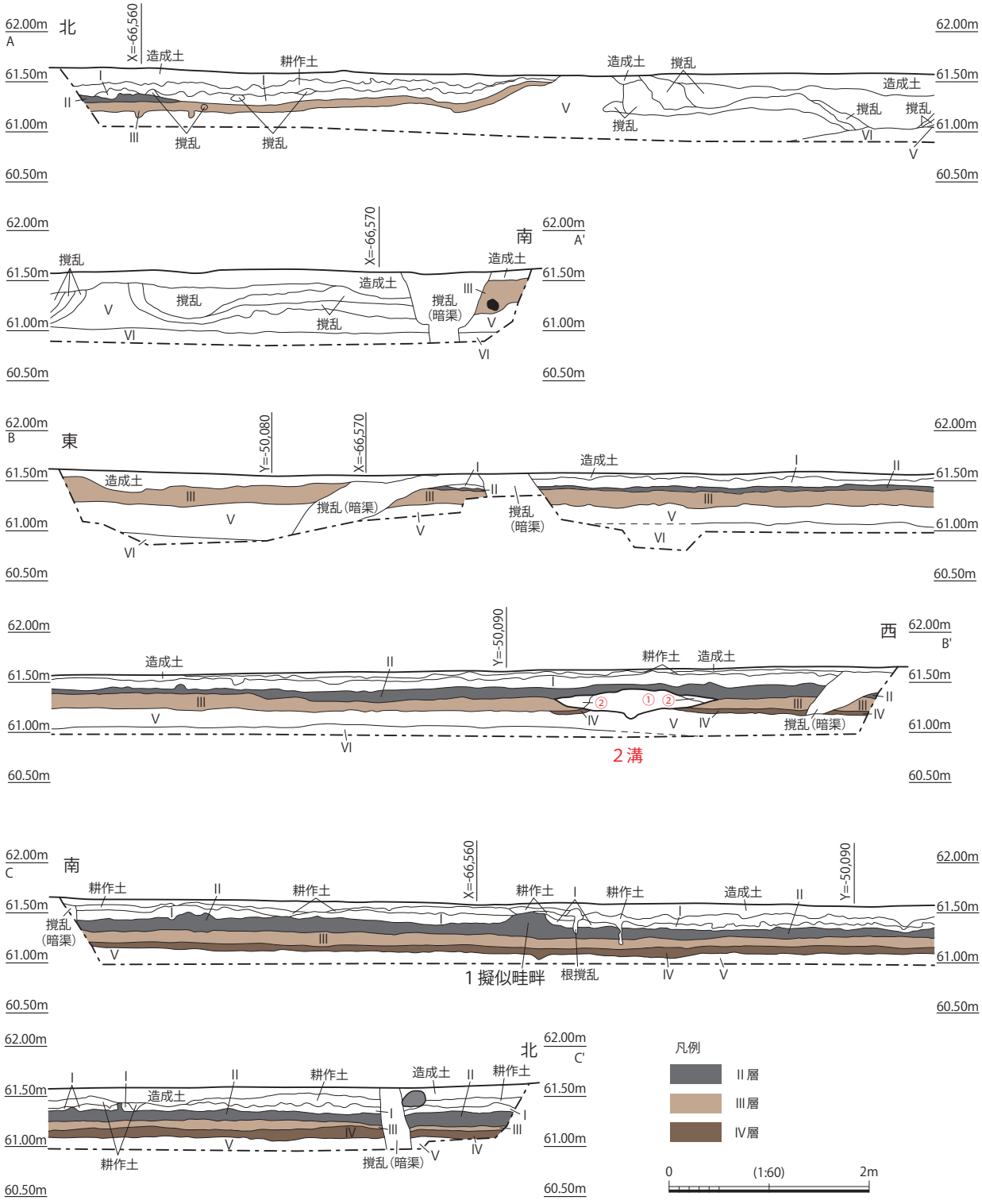
１擬似畦畔（第 83 ～ 85 図、第 12・15 表、図版 21・22・47）

調査区西寄りにおいてⅡ層上面で帯状の高まりを確認し、擬似畦畔と認識して調査を行った。Ⅱ層黒褐色砂混じりシルトを母材とした耕作が行われ、畦畔内の削り残された部分が帯状に残存したものと想定される。擬似畦畔は東西方向（N-74° -W）を主軸にとり、長さ5.62m、最大幅0.81mを測る。遺物は土師器皿Po78が出土した。

本遺構の帰属時期は、Ⅱ層内から中世の土器が散見されることから、中世以降のものと考えられる。

２溝（第 83・84 図、第 12 表、図版 21）

調査区西寄りにおいてⅢ層上面で検出した。主軸はN-40° -Eをとり、北・南端は調査区外に向かって延びている。規模は全長13.6m、最大幅は1.25m、検出面からの最大の深さは0.30mを測る。断面は皿状を呈し、底面は緩やかに湾曲し、南端は長さ４mにわたり中心部が抉れている。埋土は砂礫層とシルト層が堆積するが前者が主体である。したがって、比較的安定的に水が流下している状態が想定される。遺物は図化していないが、摩滅した古代の土師器小片が出土している。

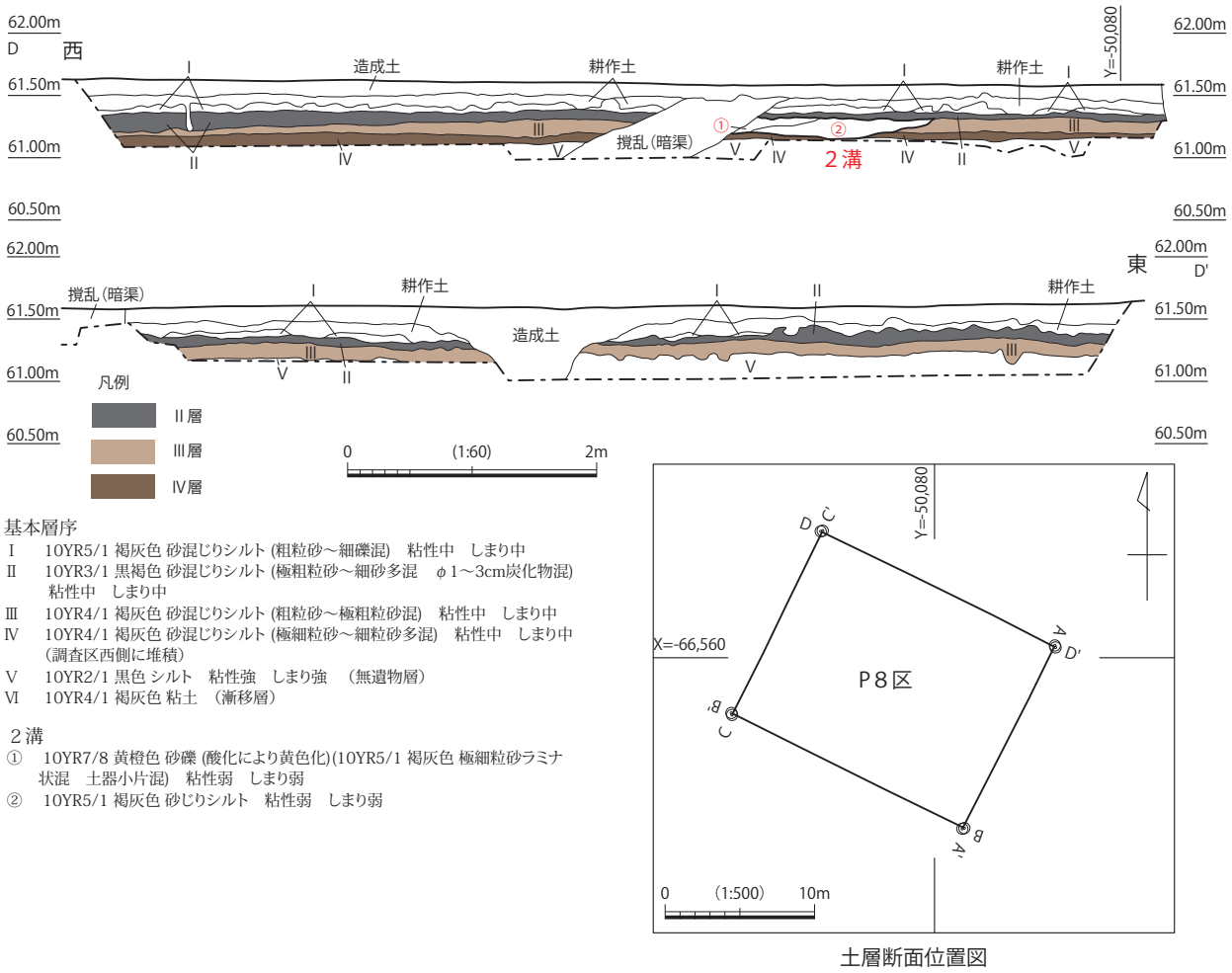


第 81 図　調査区東壁・南壁・西壁土層断面図

遺構の帰属時期は、出土土器から古代のものと考えられる。

３ピット（第 83・84 図、第 12 表）

調査区南端においてＶ層上面で検出した小穴である。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸 0.78m、短軸 0.30m、検出面からの深さは 0.12m を測る。埋土は１層灰黄褐色シルトの単層である。



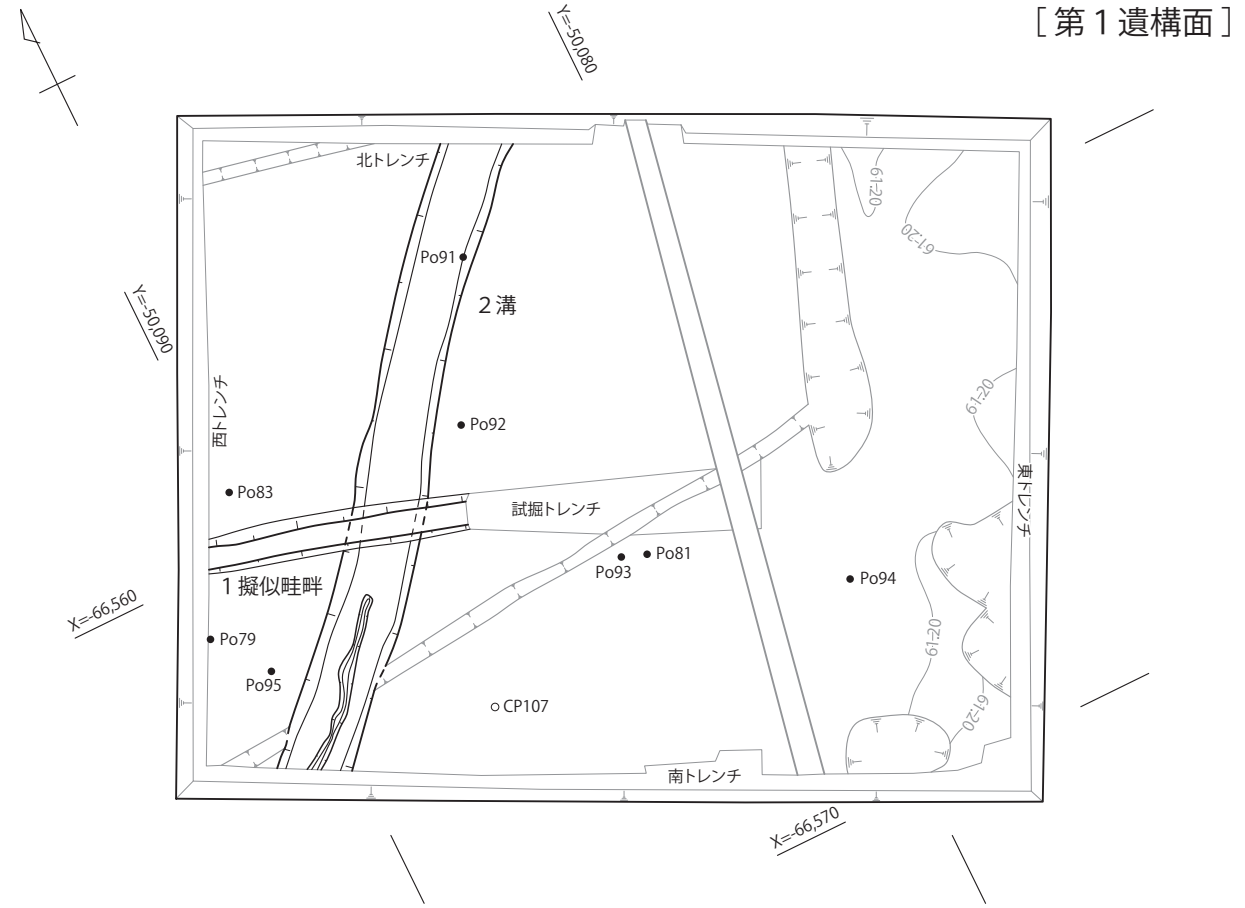
第 82 図　調査区北壁土層断面図、土層断面位置図、土色注記

本遺構の帰属時期と性格は不明である。

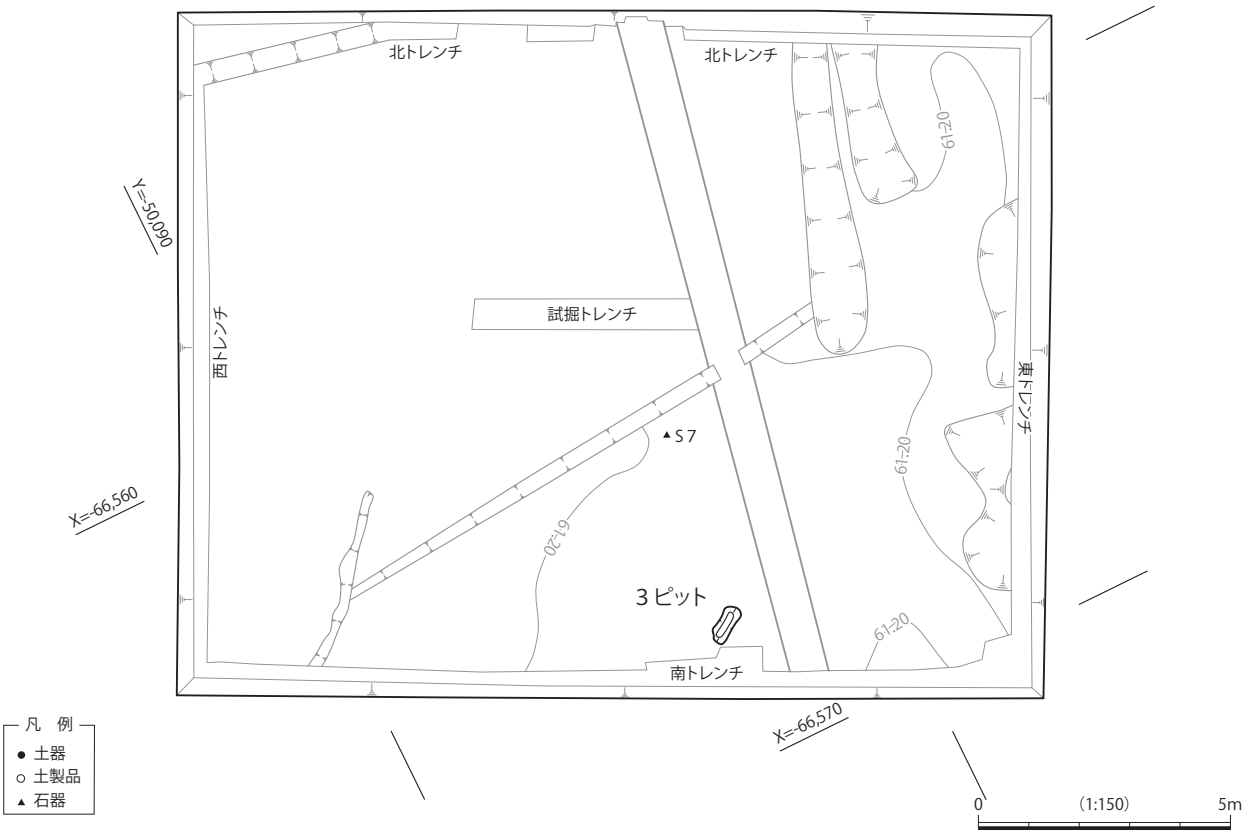
出土遺物（第 85 図、第 15・16・21・22 表、図版 47・48）

Po76 は内外面赤色塗彩された土師器坏である。器形は内湾気味に立ち上がり器壁がやや厚く、内外面とも丁寧なミガキ調整が施されている。Po77 は同じく内外面赤色塗彩された土師器坏である。体部から口縁部に向かい直線的に立ち上がり、Po76 に比べ器壁が薄い。Po78 ～ 86 は土師器皿であり、いずれも手づくね成形である。口縁部は横方向のナデを施し、体部下半から底部にかけて指頭圧痕を残している。Po80・81・83 のように口縁部と体部の境にナデによりわずかな段を持たせるものが認められる。Po84 ～ 86 は小皿で底部から口縁部に直線的に立ち上がる器形の Po84 と湾曲して立ち上がる器形の Po85・86 がみられる。Po87 は回転糸切り成形の土師器皿である。Po88 ～ 91 は瓦質土器で、Po88 ～ 90 は鍋、Po91 は鉢である。Po88 の受け部は狭く、口縁端部が丸みを帯びる。それに比べ Po89 ・ 90 は受け部がやや広く、端部はナデにより凹み、後者は外側へ少し張り出す。Po91 は口縁端部が丸みを帯び、外側に張り出す。外面は棒状工具によるナデ調整が施される。Po92 は土師器鉢であり内外面にハケ調整が施されている、指頭圧痕も観察される。Po93 ～ 95 は須恵器壺もしくは甕の体部片である。Po93 は外面が格子目タタキ、内面はカキメ、Po94 は外面が格子目タタキ、内面が不定方向のカキメ、Po95 は外面は格子目タタキ、内面はナデ調整を施している。

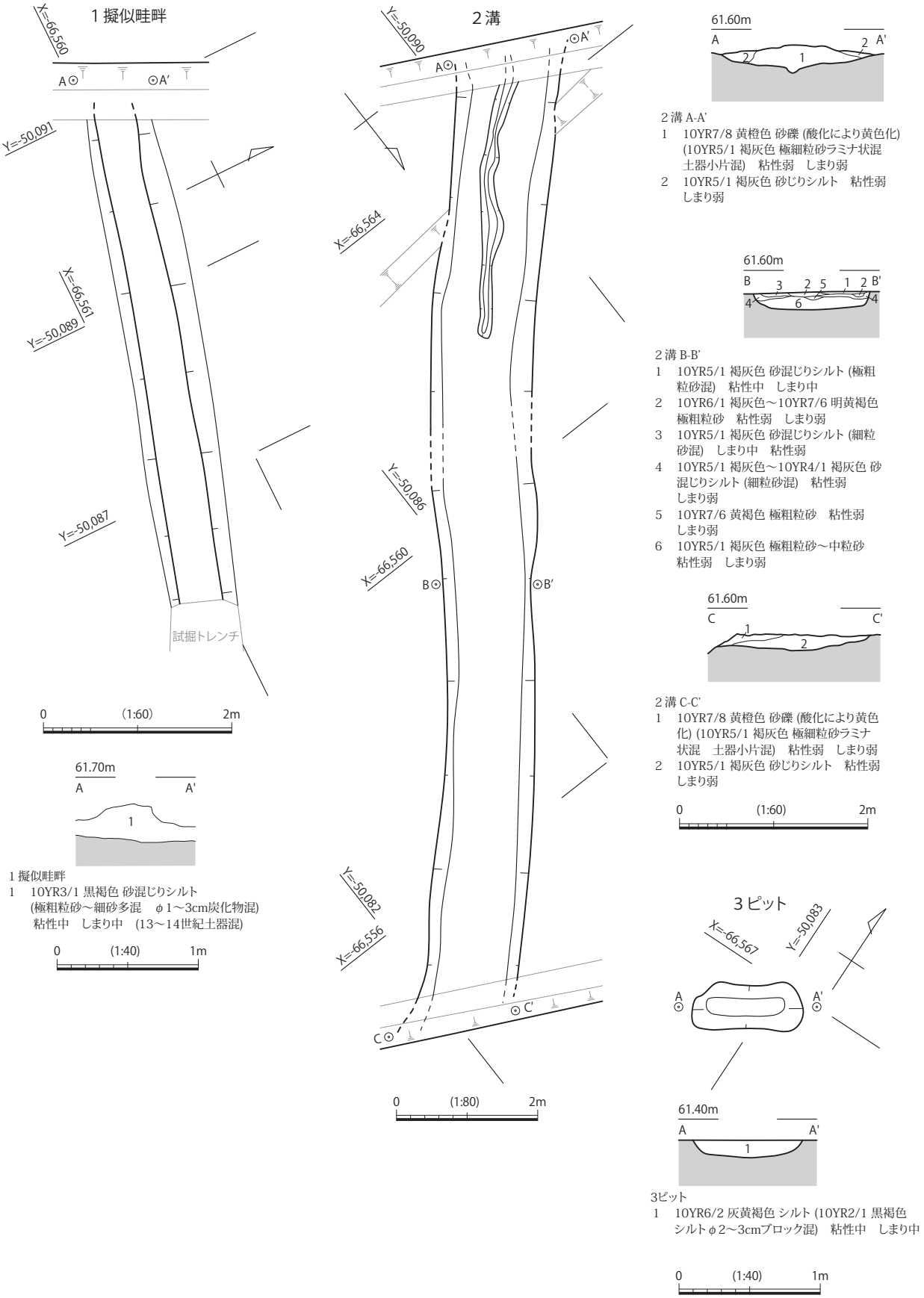
［第１遺構面］



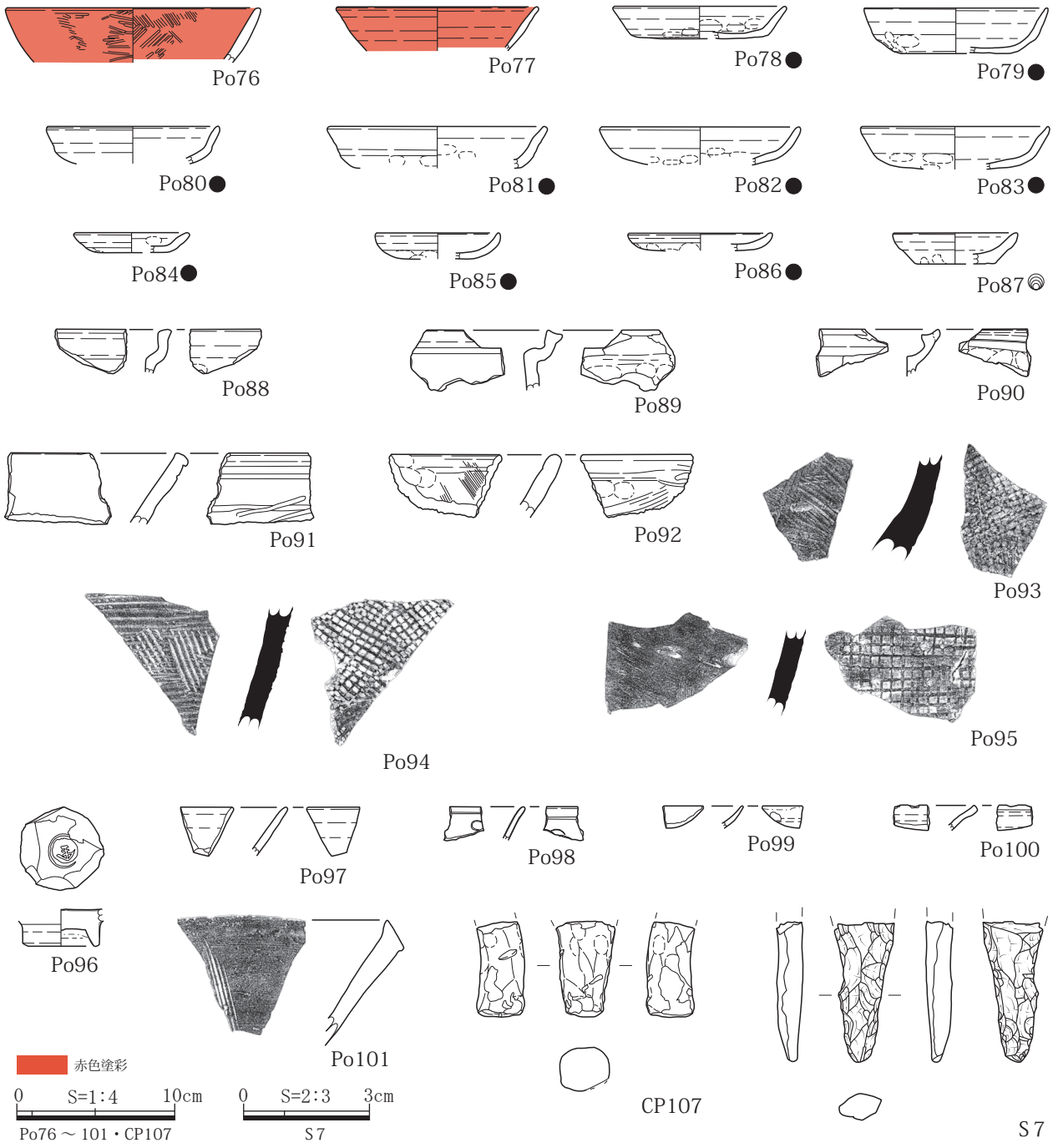
［第２遺構面］



第 83 図　Ｐ８区全体図



第 84 図　１擬似畦畔、２溝、３ピット



第 85 図　Ｐ８区出土遺物

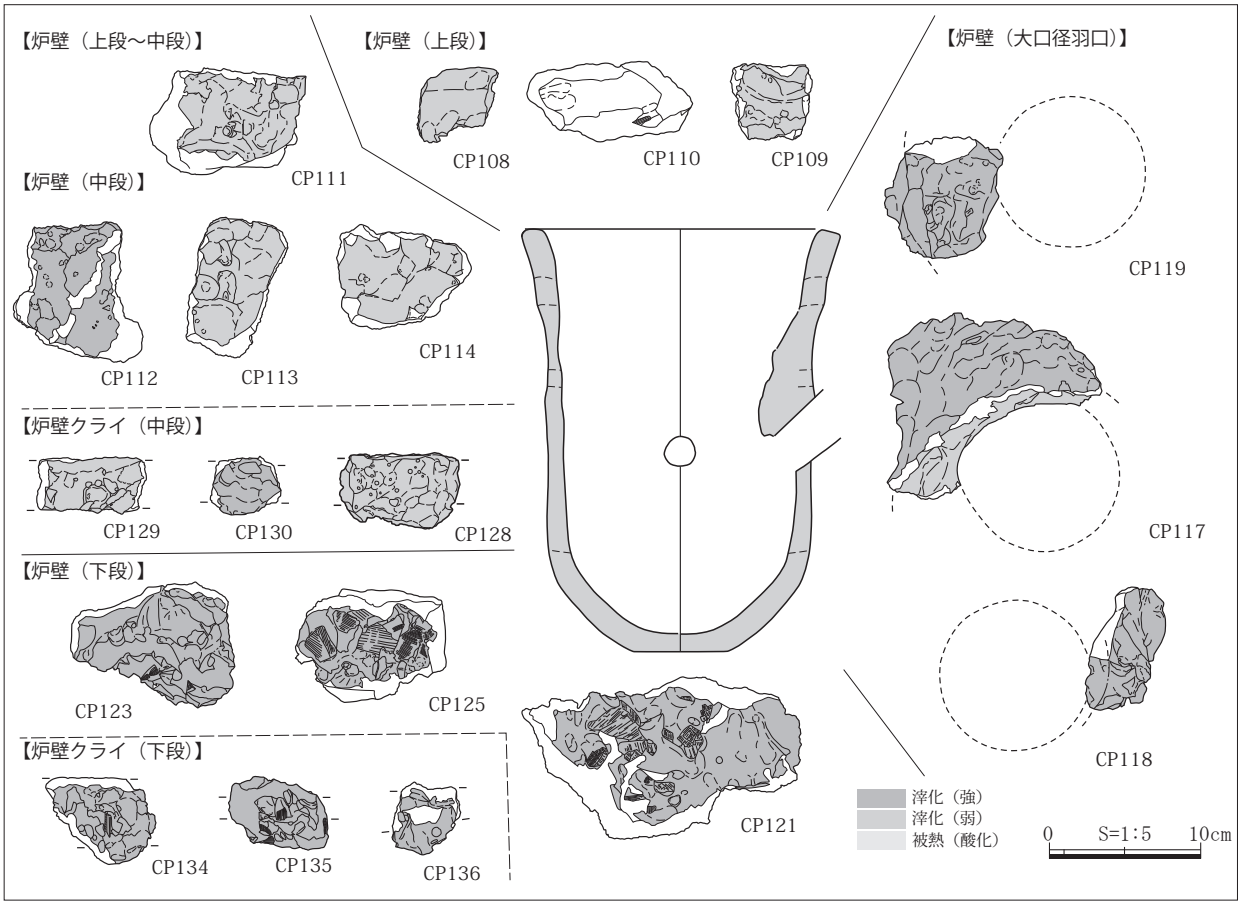
Po101 は備前焼の擂鉢である。口縁部は外剝ぎ状を呈し、端部内面が少し張り出す。Po96 ～ 98 は青磁碗である。Po96 の底部外面は高台内部は露胎で、内面の見込みに印刻のスタンプ文が施されている。Po97 は器壁が薄く、体部から口縁部にかけて直線的に広がる器形を呈する。Po98 は口縁端部がやや外反する。Po99 ・ 100 は朝鮮陶器皿の口縁部である。CP107 は表面が細かく面取りされ、緩やかに湾曲している。上部から下部に向かい幅が細くなる。土馬の脚部と考えられる。Ｓ７は頭部が欠損した無斑晶安山岩製の錐である。

第 10 節　鋳造関連遺物

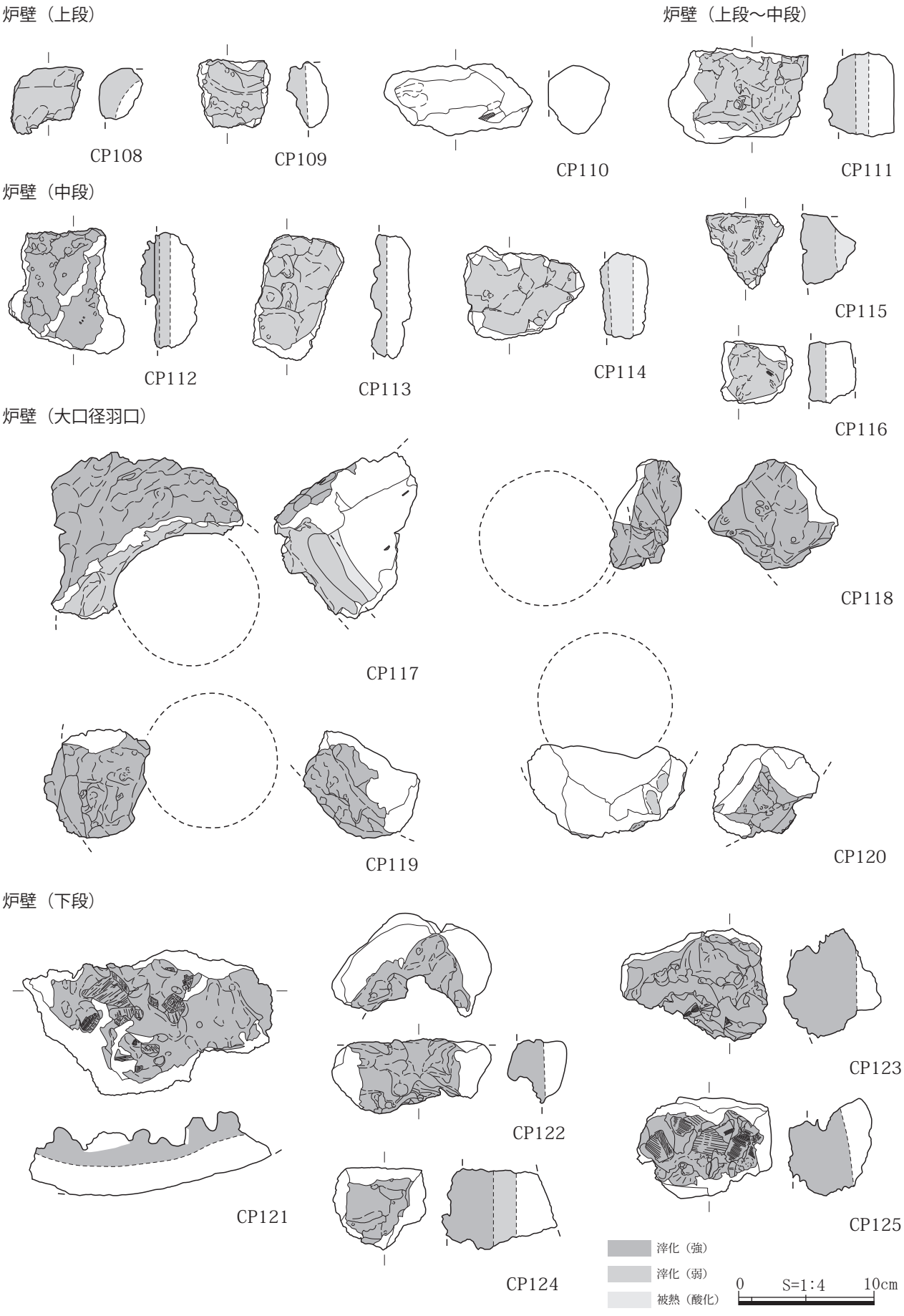
第 1 項　出土傾向と特徴

石塚廃寺東遺跡では、Ｐ３区を中心に鋳造関連遺物が 148 点（総重量 14.1095kg）出土している。遺跡内で鋳造関連遺構は確認されておらず、遺物の大部分は現代の用水路である１溝や中世までの遺物を包含する２流路、包含層から出土し、二次的な出土状況を示す。調査区毎の出土点数は、Ｐ２区が１点、Ｐ３区が 128 点、Ｐ４区が２点、Ｐ５区が５点、P6 区が３点、Ｐ７区が５点、Ｐ８区が９点で、Ｐ３区に集中する。流路を中心とした出土状況ながら、南側の上流に隣接する大鴨遺跡では鋳造関連遺物がほとんど出土していないことから、まとまった資料群とみなしうる。

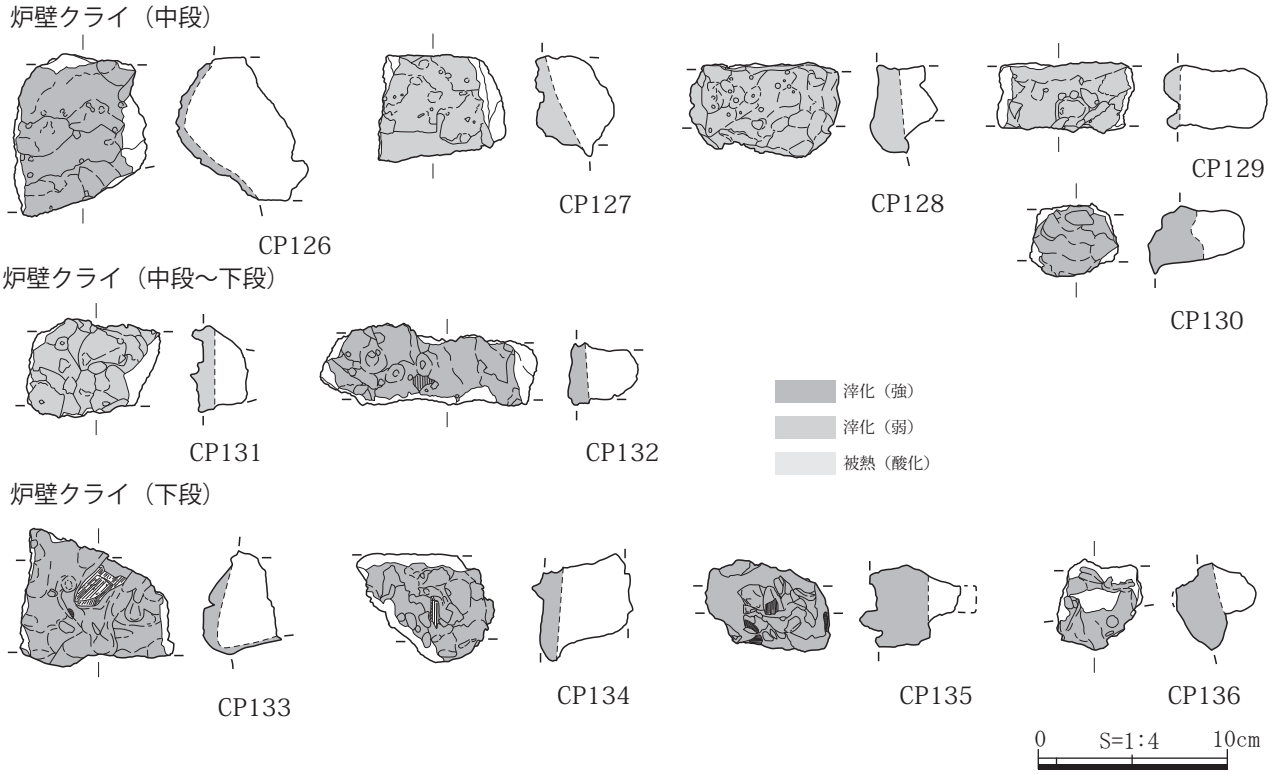
これら鋳造関連遺物は、古代寺院の石塚廃寺に近接する調査区に集中して出土すること、１溝や２流路で鋳造関連遺物とともに石塚廃寺の瓦類が大量に出土していることから、当初は、石塚廃寺跡に付属する鋳造工房に伴う資料の可能性を想定した。そのため、炉壁内面に噛み込んだ木炭６点について放射性炭素年代測定を行ったところ、１点が９世紀後半から 10 世紀末であるのに対して、４点が 15 ～ 17 世紀の年代を示すことが判明した（第５章第６節）。したがって、石塚廃寺に伴う可能性は低く、鋳造関連遺物は、遺跡の隣接地に中世後半から近世にかけての鋳造工房が存在したことを示唆する。



第 86 図　溶解炉復元想定図



第 87 図　鋳造関連遺物（1）



第 88 図　鋳造関連遺物（２）

鳥取県内における鋳造遺跡の調査事例のうち、中世では、鳥取市円護寺坂ノ下遺跡で 11 世紀後半とみられる溶解炉と鉄鍋の鋳型が出土し、伯耆町三部古城山遺跡では 15 ～ 17 世紀に鉄鍋を中心に茶釜や梵鐘を生産していたと考えられている。また、日南町霞の要害跡では鋳造土坑が確認され、梵鐘の鋳型などが出土している。本遺跡では鋳型が出土していないため、生産された製品は特定できないが、当地域における鋳物の生産と流通を考えるうえで重要な資料といえる。

第２項　出土遺物の概要

鋳造関連遺物（第 86 ～ 88 図、第３表、図版 49）

鋳造関連遺物は、詳細な分類整理は行っていないが、すべて溶解炉の炉壁である。炉底塊や鋳型は出土していない。炉壁は溶融状況などから上段・中段・下段の３段に大別することができ、つなぎ目を粘土（クライ）で接続する、円筒形の甑炉に復元することができる。炉の規模は出土資料が少なく明らかにしえない。生産品は前述の通り特定できないが、炉壁内面のガラス質に滓化した部分の色調が紫紅色を呈するものが大半を占めていることから、操業内容の中心は鋳銅であったと考えられ、大型品が鋳造された可能性がある。

本書では、26 点を図化した（第 87 ・ 88 図）。CP108 ～ 110 は炉壁上段の破片資料である。CP108 は上端破片の可能性があり、内面の被熱は弱いが、僅かに発泡する。内面または上端面に炉体を成形した際の指押さえの痕跡が残る。CP110 は胎土にスサが大量に混和されている。CP111 は炉壁上段、もしくは中段の破片資料である。外面が平滑で、イキていると考えられる。

第３表　鋳造関連遺物観察表

△：残存値

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区	グリッド T52-7a-	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量 (cm・g) 最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
CP108	87	49	41	P2 区	8B-3g	—	10 層	炉壁（上段）	△ 5.0	△ 5.4	△ 3.2	54.0	上端部片
CP109	87	49	83-1	P3 区	7B-10d	2 流路	埋土	炉壁（上段）	△ 5.1	△ 5.4	△ 3.1	63.5	
CP110	87	49	81-1	P3 区	7B-10e	2 流路	埋土	炉壁（上段）	△ 5.3	△ 11.0	△ 4.5	197.5	
CP111	87	49	103	P3 区	7B-10e	1 溝	埋土	炉壁（上～中段）	△ 7.1	△ 10.3	△ 5.2	329.0	
CP112	87	49	108-1	P3 区	7B-10e	2 流路	埋土	炉壁（中段）	△ 9.3	△ 8.6	△ 4.1	226.0	
CP113	87	49	118	P3 区	7B-10e	2 流路	北壁	炉壁（中段）	△ 9.3	△ 6.7	△ 3.0	118.5	
CP114	87	49	50	P3 区	7B-10e	1 溝	埋土	炉壁（中段）	△ 6.9	△ 9.0	△ 3.5	195.5	
CP115	87	49	90-4	P3 区	7B-10e	2 流路	埋土	炉壁（中段）	△ 5.7	△ 5.7	△ 4.1	83.0	
CP116	87	49	83-2	P3 区	7B-10d	2 流路	埋土	炉壁（中段）	△ 4.6	△ 5.3	△ 3.5	85.0	
CP117	87	49	81-4	P3 区	7B-10e	2 流路	埋土	炉壁（大口径羽口）	△ 12.3	△ 10.6	△ 2.8	495.0	通風孔径※ 10.4
CP118	87	49	81-6	P3 区	7B-10e	2 流路	埋土	炉壁（大口径羽口）	△ 10.1	△ 9.6	△ 4.2	171.0	
CP119	87	49	41-4 41-3	P3 区	7B-10f	1 溝	埋土	炉壁（大口径羽口）	△ 7.9	△ 8.7	△ 7.9	312.0	
CP120	87	49	41-4	P3 区	7B-10f	1 溝	埋土	炉壁（大口径羽口）	△ 6.9	△ 7.9	△ 5.1	366.5	
CP121	87	49	8	P4 区	7B-7e	1 流路	最上層	炉壁（下段）	△ 10.7	△ 18.5	6.2	520.0	
CP122	87	49	81-5	P3 区	7B-10e	2 流路	埋土	炉壁（下段）	△ 11.3	△ 5.5	4.4	240.0	
CP123	87	49	5	P2 区 P3 区	—	—	排土	炉壁（下段）	△ 8.3	△ 10.9	△ 7.2	369.0	
CP124	87	49	90-3	P3 区	7B-10e	2 流路	埋土	炉壁（下段）	△ 6.1	△ 6.8	△ 8.5	308.5	
CP125	87	49	37	P5 区	7B-6c	2 溝	埋土	炉壁（下段）	△ 7.3	△ 10.0	△ 6.0	334.0	
CP126	88	49	91	P3 区	7B-10d	2 流路	埋土	炉壁 クライ (中段)	△ 8.5	△ 7.1	△ 7.0	294.0	
CP127	88	49	90-2	P3 区	7B-10e	2 流路	埋土	炉壁 クライ (中段)	△ 5.7	△ 6.8	△ 4.2	133.0	
CP128	88	49	39	P3 区	7B-9e・10e	1 溝	埋土	炉壁 クライ (中段)	△ 5.0	△ 8.0	△ 3.5	105.0	
CP129	88	49	90-1	P3 区	7B-10e	2 流路	埋土	炉壁 クライ (中段)	△ 3.8	△ 7.3	△ 5.5	146.0	
CP130	88	49	41-1	P3 区	7B-10f	1 溝	埋土	炉壁 クライ (中段)	△ 3.9	△ 4.7	5.1	68.0	
CP131	88	49	108-2	P3 区	7B-10e	2 流路	埋土	炉壁 クライ (中段～下段)	△ 5.3	△ 7.1	△ 3.1	99.0	
CP132	88	49	46	P3 区	7B-10e	1 溝	埋土	炉壁 クライ (中段～下段)	△ 4.4	△ 11.6	△ 3.7	142.0	
CP133	88	49	108-3	P3 区	7B-10e	2 流路	埋土	炉壁 クライ (下段)	△ 7.3	△ 8.2	△ 3.9	158.0	
CP134	88	49	81-2	P3 区	7B-10e	2 流路	埋土	炉壁 クライ (下段)	△ 5.8	△ 7.3	5.3	145.0	
CP135	88	49	41-2	P3 区	7B-10f	1 溝	埋土	炉壁 クライ (下段)	△ 4.9	△ 6.7	△ 5.3	120.0	
CP136	88	49	81-3	P3 区	7B-10e	2 流路	埋土	炉壁 クライ (下段)	△ 4.8	△ 4.6	△ 4.2	54.0	

CP112 ～ 116 は炉壁中段の破片資料である。CP112 は内面の溶融面に粘土が貼り付けられた補修痕跡と考えられる。補修された炉壁の方が滓化が強い。CP115 は上面が接合面となっている。

CP117 ～ 120 は大口径羽口の破片である。通風孔径を復元できる資料は CP117 のみで、10.4 cm 程度に復元される。炉内への挿入角度は明確にできないが、比較的急角度とみられる。外面は黒褐色から紫紅色でガラス質に滓化している。羽口の先端部は比較的シャープな面をなしており、溶損により先端部が脱落、または意図的に切り落された可能性がある。

CP121 ～ 125 は、炉壁下段の破片資料である。CP121 は炉床に近い資料で、内面は紫紅色にガラス質滓化し、大きめの木炭を多く噛み込む。放射性炭素年代測定で唯一、9 世紀後半から 10 世紀の年代を示した資料である。胎土も他の資料に比べ籾殻を大量に混和しており、やや異質である。

CP126 ～ 136 はクライである。粘土幅は CP126 が 7.5cm と厚いが、その他は２～４cm 前後となる。

第 11 節　遺構計測表・遺物観察表

凡例　△：残存値

※　長さ 10m を超える場合は小数点以下第１位までとした

第４表　Ｐ１区　遺構計測表

遺構名	調査区	グリッド T52-7a-	遺構面	規模 (m)			備　考	掲載遺物
				長さ	幅	深さ		
１流路	Ｐ１区	8B-5h・6g ～ 6i・7h	１面	南北△約 9.7	東西△約 13.4	△約 1.1		Po1・3・7・10・12、CP2 ～ 4、W1、試料 3
２流路	Ｐ１区	8B-5h・6g ～ 6i	２面	南北△約 6.3	東西△約 8.3	△約 0.6		Po2・11
３流路	Ｐ１区	8B-5h・6h	２面	東西△約 3.1	南北△約 3.7	△約 0.35	古代の遺物を包含	
４溝	Ｐ１区	8B-6i	１面	南北△約 7.6	東西△約 1.5	△約 0.9	調査区壁面で確認	

第５表　Ｐ２区　遺構計測表

遺構名	調査区	グリッド T52-7a-	遺構面	規模 (m)			備　考	掲載遺物
				長さ	幅	深さ		
１流路	Ｐ２区	8B-2g ～ 4g・3f・4f	１面	南北△約 11.5	東西△約 14.5	△約 1.1		Po18・23・26、CP5・6・8・10・12 ～ 14・16 ～ 18、W2、試料 6
２流路	Ｐ２区	8B-3f・4f	１面	南北△約 7.3	東西△約 1.6	△約 0.7	矢板、杭で護岸	W3 ～ 11
３流路	Ｐ２区	8B-3f・3g・4f・4g	２面	南北△約 9.6	東西△約 12.0	△約 0.8	古代の遺物を包含	Po13・14・25・26

第６表　Ｐ３区　遺構計測表

遺構名	調査区	グリッド T52-7a-	遺構面	規模 (m)			備　考	掲載遺物
				長さ	幅	深さ		
１溝	Ｐ３区	7B-10d ～ 10f	１面	△約 15.0	△約 5.6	△ 1.1	近現代の水路 昭和後半に廃絶	Po30・31・34・37・44・50・51・53、S2 ～ 4、CP19 ～ 64
２流路	Ｐ３区	7B-10d ～ 10f	１面	△約 14.4	△約 14.6	△ 1.2	近・現代の遺物を包含	Po32・39・48、CP65 ～ 87、W17
３耕地段差	Ｐ３区	7B-10e・10f 8B-1e・1f	１面	東西△約 13.0	南北△約 3.3	△約 0.25	古代の遺物を包含	
４流路	Ｐ３区	7B-10e・10f 8B-1e・1f	２面	△約 9.3	△約 12.0	△ 0.5	古代の遺物を包含	Po36・38・42・43・45 ～ 47・49、CP88・89

第７表　Ｐ４区　遺構計測表

遺構名	調査区	グリッド T52-7a-	遺構面	規模 (m)			備　考	掲載遺物
				長さ	幅	深さ		
１流路	Ｐ４区	7B-7d・7e・8d・8e	１面	△ 8.29	△ 3.74	△ 1.10		Po55 ～ 57・59 ～ 62、CP99、W19・20、試料 9・23
２流路	Ｐ４区	7B-7d・7e・8d・8e	－	△約 11.0	△約 7.6	1.10	調査区壁面で確認	Po58
３流路	Ｐ４区	7B-7c ～ 7e・8c ～ 8e	－	△約 11.0	△約 7.9	1.27	調査区壁面で確認	Po54

第８表　Ｐ５区　遺構計測表

遺構名	調査区	グリッド T52-7a-	遺構面	規模 (m)			主軸	備　考	掲載遺物
				長軸	短軸	深さ			
１溝	Ｐ５区	7B-4b・4c・5b・5c	１面	△ 8.20	△ 5.51	△ 1.21	－	近現代の水路	CP102
２溝	Ｐ５区	7B-5b・5c・6b・6c	１面	△ 5.83	△ 3.69	△ 1.43	－		Po64・102、CP101、試料 12・24
３溝	Ｐ５区	7B-5b	１面	△ 2.77	0.48	0.26	N-16° -E		
４ピット	Ｐ５区	7B-5c	１面	0.28	0.26	0.23	－		
５ピット	Ｐ５区	7B-5b	２面	0.27	0.24	0.16	－		
６溝	Ｐ５区	7B-4c・5c・5d	２面	△約 16.0	2.03	△ 0.79	－		W21、試料 10
７流路	Ｐ５区	7B-4c ～ 6c・4d・5d	－	△約 16.0	△約 16.0	0.40	－	調査区壁面で確認	
８流路	Ｐ５区	7B-4b ～ 4d・5b ～ 5d・6c	－	△約 16.0	△約 8.1	△ 1.06	－	調査区壁面で確認	試料 11

第９表　Ｐ６区　遺構計測表

遺構名	調査区	グリッド T52-7a-	遺構面	規模 (m)			主軸	備　考	掲載遺物
				長さ	幅	深さ			
1 溝	Ｐ 6 区	7B-2a・2b・3a・3b	1 面	△ 11.38	6.50	△ 0.69	N-21° -E	近現代の水路	CP103・105・106
2 溝	Ｐ 6 区	7B-1b ～ 3b	2 面	△ 4.80	△ 2.5	△ 0.86	−		Po65・69・104、W22 ～ 27、試料 13・25
6 土坑	Ｐ 6 区	7B-2b	1 面	1.70	0.70	0.20	−		
9 ピット	Ｐ 6 区	7B-2a	1 面	△ 0.37	0.25	0.07	−		
10 ピット	Ｐ 6 区	7B-2a	1 面	0.26	0.21	0.08	−		
11 流路	Ｐ 6 区	7B-2a・2b・3a・3b	2 面	△約 16.0	△約 3.0	△約 1.0	−		試料 26
12 ピット	Ｐ 6 区	7B-2b	2 面	0.26	0.23	0.17	−	調査区壁面で確認	
13 ピット	Ｐ 6 区	7B-3a	−	0.21	−	0.15	−	調査区壁面で確認	
14 流路	Ｐ 6 区	7B-3a	−	△ 1.83	−	△ 0.29	−	調査区壁面で確認	
15 ピット	Ｐ 6 区	7B-3a	−	△ 0.50	−	0.28	−	調査区壁面で確認	
16 溝	Ｐ 6 区	7B-2a・1b ～ 3b	1 面	△約 16.0	△約 4.5	△ 0.75	−	調査区壁面で確認	
17 流路	Ｐ 6 区	7B-1b・2a ～ 2c・3a・3b	2 面	△約 15.0	△約 12.0	△ 0.95	−	調査区壁面で確認	
18 流路	Ｐ 6 区	7B-2a・2b・3a・3b	2 面	△約 15.0	△約 12.0	△約 0.2	−	調査区壁面で確認	

第 10 表　Ｐ７区　遺構計測表

集合遺構名	遺構名	調査区	グリッド T52-7a-	遺構面	規模 (m)			底面の標高 (m)	面積 (㎡)	備　考	掲載遺物
					長さ	幅	深さ				
	1 溝	Ｐ 7 区	6A-9i・9j 6B-9a・10a	1 面	△ 5.13	2.23	△ 0.42		△ 11.47	近現代の水路	Po72・109
掘立柱建物 1	2 柱穴	Ｐ 7 区	6A-10j	2 面	0.38	0.37	0.65	60.86	0.10		
掘立柱建物 1	3 柱穴	Ｐ 7 区	6A-10j	2 面	0.38	0.32	0.52	61.00	0.10		試料 27
掘立柱建物 2	4 柱穴	Ｐ 7 区	6B-10a	2 面	0.79	0.59	0.31	60.85	0.36		
掘立柱建物 2	5 柱穴	Ｐ 7 区	6B-10a	2 面	0.81	0.75	0.39	60.84	0.43		
掘立柱建物 2	6 柱穴	Ｐ 7 区	6A-9j	2 面	0.78	0.70	0.37	60.94	0.45		
	7 土坑	Ｐ 7 区	6A-10j	2 面	1.18	0.58	0.18		0.58		
	8 柱穴	Ｐ 7 区	6A-10j	2 面	0.39	0.35	0.42	60.93	0.10		
	10 土坑	Ｐ 7 区	6A-9j	2 面	2.45	△ 0.55	0.37		△ 1.16		
	11 柱穴	Ｐ 7 区	6A-10j	2 面	0.27	0.23	0.12		0.05		
	12 柱穴	Ｐ 7 区	6B-10a	2 面	0.40	0.34	0.41	60.92	0.11		
	13 ピット	Ｐ 7 区	6A-9j	2 面	0.40	0.34	0.31		0.13		
	14 土坑	Ｐ 7 区	6A-9j	2 面	△ 1.19	0.74	0.33		△ 0.84		
	15 ピット	Ｐ 7 区	6A-10j	2 面	0.33	0.22	0.09		0.06		
	16 柱穴	Ｐ 7 区	6A-10j	2 面	0.50	0.39	0.55		0.15	断面記録なし	
	17 柱穴	Ｐ 7 区	6A-10j	2 面	0.41	0.37	0.29		0.12	断面記録なし	

第 11 表　Ｐ７区　掘立柱建物遺構計測表

集合遺構名	建物区分	調査区	グリッド T52-7a-	規模 (m)		主軸	備考	掲載遺物
				桁行	梁行			
掘立柱建物 1	−	Ｐ 7 区	6A-10j	−	1 間 (2.7)	N-79° -W		
掘立柱建物 2	−	Ｐ 7 区	6A-9j 6B-10a	2 間 (4.3)	−	N-27° -W		

第 12 表　Ｐ８区　遺構計測表

遺構名	調査区	グリッド T52-7a-	遺構面	規模 (m)			主軸	備　考	掲載遺物
				長さ	幅	深さ			
1 擬似畦畔	Ｐ 8 区	6A-6i・6j・7i・7j	1 面	△ 5.62	0.81	−	N-74° -W		Po78
2 溝	Ｐ 8 区	6A-6i・7i・7j	1 面	△ 13.60	1.25	0.30	N-40° -E		
3 ピット	Ｐ 8 区	6A-7i	2 面	0.78	0.30	0.12	−		

第 13 表　土器観察表（１）

△：残存値　※：復元値

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区	グリッド T52-7a-	集合遺構 個別遺構	層位	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	特徴 (調整等)	胎土 焼成	色調	備考
Po 1	17	23	18	Ｐ１区	8B-6g	１流路	埋土	土師器 甕	△ 4.6	※ 18.6	—	内外面とも横ナデ	密 良好	外面：浅黄橙色 内面：灰白色	
Po 2	17	24	23	Ｐ１区	8B-6h	２流路	埋土	土師器 坏	△ 4.0	※ 14.6	※ 12.7	内外面とも横方向のナデ、底面ナデ	密 良好	内外面とも橙色	内外面とも赤色塗彩
Po 3	17	23	14-2	Ｐ１区	8B-6h	１流路	埋土	土師器 坏	△ 3.5	※ 16.1	—	内外面とも横方向のナデ、底面ナデ	密 良好	外面：橙色 内面：明赤褐色	内外面とも赤色塗彩
Po 4	17	24	34	Ｐ１区	—		層位不明	土師器 坏	△ 3.2	—	—	内外面とも口縁部ミガキ、内面口縁上端付近横方向のナデ	密 良好	内外面とも明赤褐色	内外面とも赤色塗彩
Po 5	17	24	3-1	Ｐ１区	8B-6h		表土	土師器 坏	△ 2.1	—	—	内外面とも横方向のナデ	密 良好	内外面とも明赤褐色	内外面とも赤色塗彩
Po 6	17	24	27	Ｐ１区	8B-6h		層位不明	土師器 坏	△ 1.7	—	—	内外面とも横方向のナデ	密 良好	内外面ともにぶい橙色	内外面とも赤色塗彩
Po 7	17	23	14-1	Ｐ１区	8B-6h	１流路	埋土	墨書土器 高台付坏	△ 1.0	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ、高台部回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙色 内面：橙色	内面赤色塗彩 外面底部に墨書
Po 8	17	24	3-2 5	Ｐ１区	8B-6h 8B-6g		表土 層位不明	土師器 皿	△ 2.3	※ 12.3	—	内外面とも横方向のナデ	密 良好	内外面ともにぶい黄橙色	
Po 9	17	24	20	Ｐ１区	8B-6h		層位不明	土師器 甕	△ 6.8	※ 22.4	—	外面：口縁部ハケ後ナデ一部指オサエ、体部ハケ後ナデ 内面：口縁ハケ後ナデ、体部ケズリ	密 良好	外面：にぶい黄橙色・浅黄橙色 内面：にぶい黄橙色・灰白色	
Po10	17	23	12	Ｐ１区	8B-6h	１流路	埋土	須恵器 坏蓋	△ 2.7	—	—	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰色	
Po11	17	24	22	Ｐ１区	8B-6h	２流路	埋土	須恵器 高台付坏	△ 2.7	—	※ 9.2	外面：回転ナデ、高台端部ナデ 内面：回転ナデ、底面ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰オリーブ色	
Po12	17	23	18	Ｐ１区	8B-6g	１流路	埋土	須恵器 壺？	△ 13.1	—	—	外面：平行タタキ後頸部付近弱いカキメ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	内外面とも灰色	
Po13	24	27	79-1	Ｐ２区	8B-3g	３流路	埋土	土師器 甕	△ 4.0	—	—	内外面とも横ナデ	密 良好	内外面ともにぶい黄橙色	
Po14	24	27	79-2	Ｐ２区	8B-3g	３流路	埋土	ミニチュア 土器	△ 4.2	※ 4.6	—	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	密 良好	外面：にぶい黄色 内面：浅黄色	
Po15	24	27	34	Ｐ２区	8B-4g		８層	土師器 坏	△ 2.1	—	※ 5.4	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色	
Po16	24	27	59-1	Ｐ２区	8B-3g		層位不明	土師器 坏	3.6	※ 15.3	※ 12.2	外面：横方向のナデ、底部工具によるナデ 内面：横方向のナデ、底部ナデ	密 良好	外面：橙色・にぶい赤褐色・黒色 内面：橙色	内外面赤色塗彩、口縁部内外面に黒斑あり
Po17	24	27	59-2	Ｐ２区	8B-3g		層位不明	土師器 坏	△ 1.2	—	※ 6.8	内外面とも横方向のナデ、底部ナデ	密 良好	外面：明赤褐色・にぶい黄橙色 内面：明赤褐色	内外面赤色塗彩、外面の赤色は退色著しい
Po18	24	—	22	Ｐ２区	8B-4f	１流路	埋土	土師器 高台付坏	△ 2.9	—	※ 8.4	内外面とも回転ナデ、底面ナデ	密 良好	内外面ともにぶい黄橙色	
Po19	24	27	45-2	Ｐ２区	8B-2g・3g		層位不明	土師器 高台付坏	△ 1.5	—	※ 5.9	外面：回転ナデ、底面回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面ともにぶい黄橙色	
Po20	24	27	45-1	Ｐ２区	8B-2g・3g		層位不明	黒色土器 高台付坏	△ 1.9	—	—	外面：回転ナデ、底面回転糸切り 内面：ミガキ	密 良好	外面：にぶい黄橙色 内面：暗灰色	内面黒色
Po21	24	27	7	Ｐ２区	8B-3f		８層上面	黒色土器 高台付坏	△ 2.2	—	—	外面：回転ナデ、底面回転糸切り 内面：一部ミガキ？	密 良好	外面：にぶい黄橙色～灰黄橙色 内面：黒褐色	内面黒色
Po22	24	27	31	Ｐ２区	8B-3g		11 層	土師器 皿	△ 1.6	※ 8.2	—	外面：口縁部横方向のナデ、底面ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部横方向のナデ、底面ナデ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい橙色	手づくね
Po23	24	25	40	Ｐ２区	8B-3g	１流路	最下層	土師器 甕	△ 9.8	※ 30.8	—	外面：横ナデ 内面：口縁部横ナデ、体部ケズリ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：明褐色	体部煤付着
Po24	24	27	20	Ｐ２区	8B-4f		11 層	瓦質土器 火鉢	△ 6.2	—	—	外面：口縁部横方向のナデ、体部ナデ、一部指オサエ 内面：横方向のナデ	密 良好	外面：灰白色・黄灰色 内面：灰黄色・黄灰色	
Po25	24	27	82	Ｐ２区	8B-3g	３流路	埋土	須恵器 蓋	3.4	※ 13.8	—	外面：つまみ部ナデ、口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰白色	
Po26	24	27	79-3 60	Ｐ２区	8B-3g	３流路 1 流路	埋土 埋土	須恵器 提瓶	△ 10.3	※ 10.0	—	外面：口縁部から頸部回転ナデ、肩部ナデ 内面：口縁部回転ナデ、頸部から肩部ナデ	密 良好	内外面とも灰白色～灰色	
Po27	24	27	59-3	Ｐ２区	8B-3g		層位不明	須恵器 壺？	△ 6.7	—	—	外面：体部回転ナデ、底部付近回転ヘラケズリ、底面ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰色	
Po28	24	27	92 15 16	Ｐ２区	8B-3g 8B-3g 8B-3h		西壁 10 層 層位不明 層位不明	瀬戸美濃 皿	2.5	※ 11.0	6.4	外面：施釉、底部一部と高台畳付露胎 内面：施釉	密 良好	施釉部：浅黄色～暗オリーブ色 露胎部：にぶい黄褐色・明黄褐色	
Po29	35	39	111-2	Ｐ３区	7B-10f		層位不明	弥生土器 甕	△ 5.5	※ 21.1	—	外面：口縁端部ナデ、口縁部 12 条の擬凹線、頸部ナデ 内面：横ナデ、頸部ケズリ	密 良好	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色・明褐色	
Po30	35	29	103	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	土師器 坏	△ 3.0	※ 11.1	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙色・にぶい橙色 内面：橙色	
Po31	35	29	120	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	土師器 坏	△ 2.5	※ 10.8	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	内外面とも浅黄橙色	
Po32	35	34	5	Ｐ３区	7B-10f	２流路	埋土	土師器 坏	△ 2.8	※ 10.4	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙色 内面：灰黄褐色	
Po33	35	39	111-1	Ｐ３区	7B-10f		層位不明	土師器 坏	△ 1.7	—	※ 6.0	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面ともにぶい黄橙色	
Po34	35	29	102	Ｐ３区	7B-10f	１溝	埋土	土師器 坏	△ 1.3	—	5.2	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面ともにぶい黄色	
Po35	35	39	116	Ｐ３区	8B-1f		Ⅲ層	土師器 高台付坏	△ 2.6	—	※ 7.0	外面：口縁部回転ナデ、底面ナデ、高台部ナデ 内面：口縁部回転ナデ	密 良好	内外面とも明赤褐色・にぶい黄橙色	内外面赤色塗彩
Po36	35	38	135-1	Ｐ３区	7B-10e	４流路	最下層	土師器 皿	△ 2.2	※ 19.4	—	外面：横方向のナデ 内面：ハケ後暗文	密 良好	内外面とも明赤褐色	内外面赤色塗彩
Po37	35	29	15 11	Ｐ３区	7B-10d・10e —	１溝	埋土	土師器 皿	△ 1.6	※ 8.5	—	外面：口縁部ナデ、底部指オサエ 内面：口縁部ナデ、底部指オサエ	密 良好	内外面ともにぶい黄橙色	手づくね
Po38	35	38	128-1	Ｐ３区	7B-10f	４流路	最下層	土師器 甕	△ 4.7	—	—	外面：口縁部横ナデ、胴部ハケ 内面：口縁部ハケ後ナデ、頸部指オサエ、胴部ケズリ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい黄橙色・橙色	
Po39	35	34	97	Ｐ３区	7B-10e	２流路	埋土	瓦質土器 鍋	△ 6.0	—	—	外面：口縁部ナデ、体部指オサエ 内面：ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：にぶい黄橙色	
Po40	35	39	89	Ｐ３区	7B-10f		撹乱	須恵器 蓋	△ 1.9	—	—	外面：つまみ部ナデ、口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：黄灰色 内面：灰色	
Po41	35	39	147	Ｐ３区	7B・8B		層位不明	須恵器 蓋	△ 1.8	※ 10.4	—	外面：口縁部回転ナデ、天井部ナデ 内面：ナデ	密 良好	内外面とも灰色	

第 14 表　土器観察表（2）

△：残存値　※：復元値

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区	グリッド T52-7a-	集合遺構 個別遺構	層位	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	特徴 (調整等)	胎土 焼成	色調	備考
Po42	35	38	132	P３区	7B-10f	４流路	最下層	須恵器 蓋	△ 2.4	※ 12.0	—	内外面とも回転ナデ、端部ナデ	密 良好	内外面とも灰色	
Po43	35	38	128-2	P３区	7B-10f	４流路	最下層	須恵器 高坏？	△ 2.7	※ 10.3	—	外面：口縁端部ナデ、口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：口縁端部ナデ、回転ナデ	密 良好	内外面とも灰色	
Po44	35	29	38	P３区	7B-9f	１溝	埋土	須恵器 高坏	△ 6.7	—	—	外面：回転ナデ 内面：坏部ナデ、脚部回転ナデ	密 良好	外面：黄灰色～灰白色 内面：灰白色～灰色	２方向に透かしあり
Po45	35	38	128-4	P３区	7B-10f	４流路	最下層	須恵器 長頸壺	△ 12.6	※ 9.8	—	外面：口縁から肩部回転ナデ、一部ナデ 内面：口縁部から肩部回転ナデ、口縁端部ナデ	密 良好	外面：灰色～灰オリーブ色 内面：黄灰色～灰オリーブ色	外面肩部、内面口縁部に自然釉付着
Po46	35	38	126	P３区	7B-10f	４流路	最下層	須恵器 短頸壺	9.6	※ 9.2	—	外面：口縁から頸部ナデ、体部から底部カキメ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰色	
Po47	35	38	135-2	P３区	7B-10e	４流路	最下層	須恵器 鉢	△ 9.9	※ 19.1	—	内外面とも口縁端部ナデ、回転ナデ	密 良好	外面：黄灰色 内面：灰白色	
Po48	35	34	130	P３区	7B-10e	２流路	ベルト２	須恵器 壺？	△ 3.4	—	※ 9.4	外面：回転ナデ、底面静止糸切り 内面：底面から底部付近回転ナデ	密 良好	内外面とも灰色	
Po49	35	38	128-3	P３区	7B-10f	４流路	最下層	須恵器 甕	△ 10.9	—	—	外面：ナデ、11 本の波状文 内面：ナデ	密 良好	内外面とも灰色	
Po50	35	29	43	P３区	7B-10e	１溝	埋土	白磁 碗	△ 2.7	—	—	外面：体部施釉、下端露胎 内面：施釉	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	
Po51	35	29	41 29 40	P３区	7B-10f 7B-10e 7B-10e	１溝	埋土	白磁 壺	△ 6.1	—	※ 9.3	外面：総釉、高台畳付釉カキ取り 内面：露胎	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	
Po52	35	39	7	P３区	—		造成土	青磁 碗	△ 3.5	—	※ 6.4	外面：施釉、高台内一部透明釉 内面：施釉、見込みにスタンプ文	密 良好	外面：緑灰色・明緑灰色・にぶい橙色 内面：緑灰色	見込みに草花の陰刻スタンプ紋
Po53	35	29	50	P３区	7B-10e	１溝	埋土	備前 甕	△ 6.4	—	—	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ、頭部ナデ	密 良好	外面：にぶい赤褐色・灰褐色・灰白色 内面：灰褐色・灰白色	
Po54	56	43	42	P４区	7B-7c	３流路	埋土	縄文土器 押型文深鉢	△ 7.4	—	—	外面：楕円文 内面：斜行沈線	密 良好	内外面ともにぶい黄橙色	
Po55	56	43	45-2	P４区	7B-7d・7e	１流路	下層	弥生土器 甕	△ 6.1	※ 22.0	—	外面：口縁端部・頸部ナデ、口縁部 14 条の平行沈線、肩部ハケ 内面：口縁部・頸部ナデ、口縁部から肩部ケズリ	密 良好	内外面ともにぶい赤褐色	
Po56	56	43	44-1	P４区	7B-7d・7e	１流路	上層	土師器 坏	△ 1.4	—	※ 6.0	外面：口縁部回転ナデ、底面回転糸切り 内面：口縁部回転ナデ、底面ナデ	密 良好	内外面ともにぶい橙色	外面底部に板目痕跡あり
Po57	56	43	14	P４区	7B-7d	１流路	最上層	土師器 坏	△ 1.4	—	3.6	外面：口縁部回転ナデ、底面回転糸切り 内面：口縁部回転ナデ、底面ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙色・暗灰色 内面：にぶい黄褐色	内面炭化物付着
Po58	56	43	39	P４区	7B-8d	２流路	埋土	土師器 高坏？	△ 2.8	※ 15.8	—	内外面とも横ナデ	密 良好	外面：橙色～明赤褐色 内面：橙色	
Po59	56	43	45-1	P４区	7B-7d・7e	１流路	下層	土師器 高坏	△ 6.2	—	—	外面：坏底部ハケ、脚部面取り後ナデ 内面：坏底面ナデ、脚部シボリ	密 良好	外面：橙色 内面：明赤褐色	内外面とも赤彩
Po60	56	43	21	P４区	7B-7e	１流路	下層	土師器 壺	△ 7.0	※ 21.5	—	外面：横ナデ 内面：口縁部横ナデ、頸部ハケ後ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙色 内面：灰黄褐色	
Po61	56	43	44-2	P４区	7B-7d・7e	１流路	上層	土師器 甕	△ 12.2	※ 16.5	—	外面：口縁から肩部横ナデ、体部ハケ後ナデ 内面：口縁から頸部横ナデ、肩から体部ケズリ・指オサエ	密 良好	内外面ともにぶい橙色・灰白色	外面体部煤付着
Po62	56	43	12	P４区	7B-7e	１流路	下層	土師器 甕	△ 8.9	—	—	外面：頸部横ナデ、肩部ハケ一部指オサエ 内面：頸部ハケ、肩部指オサエ・ケズリ	密 良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面体部煤付着
Po63	56	43	35	P４区	7B-8d		層位不明	白磁 皿	△ 2.1	※ 10.4	—	外面：体部施釉、体部下半露胎 内面：施釉	密 良好	施釉部：明オリーブ灰色 露胎部：灰白色	
Po64	63	44	18	P５区	7B-6b	２溝	埋土	瓦質土器 鉢	△ 4.4	—	—	外面：口縁部横方向のナデ・指オサエ、体部指オサエ 内面：口縁部横方向のナデ・指オサエ、体部ナデ	密 良好	内外面とも灰色	片口鉢
Po65	71	45	38	P６区	7B-2b	２溝	埋土	弥生土器 高坏	△ 2.9	※ 18.0	—	外面：口縁部ナデ、頸部ハケ後ナデ 内面：口縁端部ナデ、ミガキ	密 良好	内外面とも明赤褐色	内外面とも赤彩
Po66	71	45	22	P６区	7B-3a		Ⅴ層	土師器 皿	△ 1.7	※ 9.6	※ 5.4	外面:口縁部回転ナデ一部指オサエ、底面回転糸切り 内面：口縁部回転ナデ、底面・底部ナデ	密 良好	外面：褐灰色～灰褐色 内面：にぶい橙色～橙色	外面底部に板目痕跡あり
Po67	71	45	25	P６区	7B-2a		Ⅴ層	瓦質土器 鍋	△ 3.1	—	—	外面：口縁部ナデ、頸部指オサエ 内面：ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po68	71	45	20	P６区	7B-2a		Ⅴ層	瓦質土器 鍋	△ 2.5	—	—	外面：口縁部ナデ、頸部指オサエ 内面：ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙色～褐灰色・黒色 内面：にぶい黄橙色・黒色	内面口縁部から外面口縁端部に煤付着
Po69	71	45	40	P６区	7B-2b	２溝	埋土	須恵器 甕	△ 6.7	—	—	外面：指オサエ、ナデ 内面：ナデ	密 良好	内外面とも灰色	
Po70	71	45	46	P６区	7B-3a		第１面直上	須恵器 甕	△ 5.1	—	—	外面：格子目叩き 内面：カキメ	密 良好	内外面とも褐灰色	
Po71	71	45	25	P６区	7B-2a		Ⅴ層	青磁 碗	△ 1.9	—	※ 6.2	外面：施釉、高台内露胎 内面：施釉	密 良好	外面施釉部：オリーブ灰色 外面露胎部：灰白色 内面施釉部：灰オリーブ色	見込みにヘラ状工具による施文
Po72	80	44	10	P７区	6A-9j	１溝	埋土	須恵器 高台付壺	△ 2.1	—	※ 12.6	内外面とも回転ナデ、底面ナデ	密 良好	外面：灰色・灰白色 内面：灰色	
Po73	80	44	18	P７区	6A-9j・10j		Ⅰ層	白磁 皿	△ 1.9	※ 10.5	—	外面：口縁部施釉、底部付近露胎 内面：施釉	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	
Po74	80	44	13	P７区	6A-10j		検出面	天目 碗	△ 2.6	—	—	内外面とも天目釉	密 良好	内外面とも黒色	
Po75	80	44	1	P７区	6A・6B-		表採	瀬戸美濃 菊皿	2.2	※ 10.5	※ 6.3	外面：施釉、高台畳付露胎 内面：施釉、底面露胎	密 良好	外面施釉部：灰オリーブ 外面露胎部：灰白色 内面施釉部：灰白色・灰オリーブ色 内面露胎部：赤褐色・灰白色	
Po76	85	47	18	P８区	6A-7h・7i		撹乱	土師器 坏	△ 3.5	※ 16.0	—	外面：口縁端部ナデ、口縁部ミガキ 内面：口縁部ミガキ	密 良好	内外面とも明赤褐色	内外面とも赤色塗彩
Po77	85	47	1	P８区	6A-		表採	土師器 坏	△ 2.8	※ 12.6	—	内外面ともナデ	密 良好	外面：明赤褐色 内面：にぶい黄褐色	内外面とも赤色塗彩

第 15 表　土器観察表（3）

△：残存値　※：復元値

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区	グリッド T52-7a-	集合遺構 個別遺構	層位	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	特徴 (調整等)	胎土 焼成	色調	備考
Po78	85	47	48	Ｐ８区	6A-7i	１掘似畦畔	埋土	土師器 皿	△ 2.1	※ 10.9	—	外面：口縁部ナデ、底部から底面ヘラケズリ後指オサエ 内面：口縁部ナデ、底面から底部指オサエ後ナデ	密 良好	内外面とも灰黄褐色～浅黄橙色	手づくね
Po79	85	47	33 6 54	Ｐ８区	6A-7j 6A-6i・6j・7j 6A-7i		Ⅳ層 層位不明 Ⅲ～Ⅳ層	土師器 皿	△ 2.9	※ 11.6	※ 7.0	外面：口縁部横方向のナデ、底部ナデ後指オサエ、底面ヘラケズリ後指オサエ 内面：口縁端部ナデ、口縁部横方向のナデ、底面ナデ	密 良好	内外面とも橙色	手づくね、二段ナデ
Po80	85	47	62	Ｐ８区	6A-6i		Ⅴ層直上	土師器 皿	△ 2.4	※ 10.2	—	外面：口縁部横方向のナデ、底面ナデ 内面：横方向のナデ	密 良好	外面：灰白色～にぶい黄橙色 内面：灰白色	手づくね、二段ナデ
Po81	85	47	23	Ｐ８区	6A-7i		Ⅲ層	土師器 皿	△ 2.6	※ 13.6	—	外面：口縁部横方向のナデ、底面指オサエ 内面:口縁部から底部横方向のナデ、指オサエ	密 良好	内外面とも浅黄橙色	手づくね、二段ナデ
Po82	85	47	30-1	Ｐ８区	6A-7i		Ⅲ層	土師器 皿	△ 2.4	※ 12.5	—	外面：口縁部横方向のナデ、底面指オサエ 内面：口縁部横方向ナデ、底部から底面にかけて指オサエ	密 良好	外面：にぶい黄橙色・灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	手づくね
Po83	85	47	16 13	Ｐ８区	6A-6i 6A-6h		Ⅳ層 Ⅲ層	土師器 皿	△ 2.7	※ 11.8	—	外面：口縁部横方向のナデ、底部から底面ナデ・指オサエ 内面：口縁部横方向のナデ、指オサエ	密 良好	内外面ともにぶい黄橙色	手づくね、二段ナデ 灯明皿
Po84	85	47	57	Ｐ８区	6A-6i		Ⅲ～Ⅳ層	土師器 皿	1.3	※ 7.0	—	外面：口縁部横方向のナデ、底部から底面ナデ・指オサエ 内面：口縁部横方向のナデ、底面に指オサエあり	密 良好	外面：橙色・にぶい黄橙色 内面：橙色	手づくね
Po85	85	47	47	Ｐ８区	6A-6i		Ⅲ～Ⅳ層	土師器 皿	1.7	※ 7.7	—	外面：口縁部横方向のナデ、底面付近指オサエ 内面：ナデ	密 良好	内外面ともにぶい橙色	手づくね
Po86	85	47	30-3	Ｐ８区	6A-7i		Ⅲ層	土師器 皿	△ 1.1	※ 9.0	—	外面：口縁部横方向のナデ、底部指オサエ 内面：ナデ	密 良好	外面：暗褐色 内面：にぶい黄橙色	手づくね
Po87	85	47	30-2	Ｐ８区	6A-7i		Ⅲ層	土師器 皿	△ 2.0	※ 7.7	※ 5.2	外面：口縁部回転ナデ、底部付近指オサエ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄橙色	
Po88	85	47	13	Ｐ８区	6A-6h		Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△ 2.8	—	—	外面：口縁部横方向のナデ、頸部ナデ・指オサエ 内面：横方向のナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰黄色・灰色	口縁内面上部から外面黒斑あり 外面煤付着
Po89	85	47	30-4	Ｐ８区	6A-7i		Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△ 3.8	—	—	外面：口縁部横方向のナデ、体部指オサエ 内面：横方向のナデ	密 良好	外面：黒色 内面：灰白色・暗灰色	内面口縁部から外面煤付着
Po90	85	47	30-5	Ｐ８区	6A-7i		Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△ 2.9	—	—	外面：口縁部ナデ・頸部指オサエ、粘土貼り付け痕 内面：ナデ	密 良好	内外面とも黒色	外面煤付着
Po91	85	47	26	Ｐ８区	6A-6i		Ⅲ層	瓦質土器 鉢	△ 4.4	—	—	外面：口縁部横方向のナデ・２条の沈線、体部粗いナデ・ヘラ状工具によるナデ 内面：横方向のナデ	密 良好	外面：明黄褐色～灰黄褐色 内面：黄褐色	
Po92	85	47	25	Ｐ８区	6A-6i		Ⅲ層	土師器 鉢	△ 4.0	—	—	外面：口縁部横方向のナデ、体部ナデ・指オサエ 内面：口縁部横方向のナデ、口縁から体部指オサエ、体部ハケ	密 良好	外面：にぶい黄橙色・にぶい橙色 内面：浅黄橙色・灰黄褐色	
Po93	85	48	22	Ｐ８区	6A-7i		Ⅲ層	須恵器 壺？	△ 6.9	—	—	外面：格子目叩き 内面：カキメ	密 良好	外面：灰オリーブ色 内面：黄灰色	
Po94	85	48	24	Ｐ８区	6A-7h		Ⅲ層	須恵器 甕	△ 7.8	—	—	外面：格子目叩き 内面：不定方向のカキメ	密 良好	内外面とも褐灰色	
Po95	85	48	27	Ｐ８区	6A-7j		Ⅲ層	須恵器 甕	△ 5.6	—	—	外面：格子目叩き 内面：横ナデ・ハケ・指オサエ	密 良好	内外面とも黄灰色	
Po96	85	48	8	Ｐ８区	6A-7i		Ⅱ層	青磁 碗	△ 2.4	—	4.9	外面：高台部施釉、高台裏底部露胎 内面：施釉	密 良好	外面施釉部：オリーブ灰色・浅黄色 外面露胎部：褐灰色 内面施釉部：灰白色・オリーブ灰色	見込みに文字の陰刻スタンプ文
Po97	85	48	30-7	Ｐ８区	6A-7i		Ⅲ層	青磁 碗	△ 3.1	—	—	内外面とも施釉	密 良好	内外面ともオリーブ黄色	
Po98	85	48	15	Ｐ８区	6A-7i		Ⅲ層	青磁 碗	△ 2.2	—	—	内外面とも施釉	密 良好	内外面とも灰オリーブ色	口縁部内外面にヘラ状工具による施文
Po99	85	48	12-1	Ｐ８区	6A-7i		Ⅱ層	朝鮮陶器 皿	△ 1.4	—	—	外面：口縁端部施釉、胴部露胎 内面：施釉	密 良好	施釉部：オリーブ灰色 露胎部：灰色	
Po100	85	48	10	Ｐ８区	6A-6h・7h・7i		Ⅱ層検出面	朝鮮陶器 皿	△ 1.6	—	—	内外面とも施釉	密 良好	内外面とも灰黄色	
Po101	85	48	5	Ｐ８区	6A-6h・7h・8h		層位不明	備前 擂鉢	△ 7.9	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ、卸目 (5 本)	密 良好	外面：褐灰色、口縁端部にぶい黄褐色・灰白色、口縁部暗赤褐色 内面：灰色・にぶい黄褐色	
Po102	—	44	18	Ｐ５区	7B-6b	２溝	埋土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密 良好	内外面とも灰白色	
Po103	—	44	15	Ｐ５区	7B-5c		Ⅴ層	青磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密 不良	内外面とも灰オリーブ色	細蓮弁紋
Po104	—	46	56	Ｐ６区	7B-2b	２溝	埋土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉、外面の一部露胎	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰色	
Po105	—	46	34	Ｐ６区	7B-2a		Ⅴ層	白磁 壺	—	—	—	内外面とも施釉	密 良好	内外面とも灰白色	
Po106	—	46	19	Ｐ６区	7B-3a		Ⅴ層	青磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密 良好	内外面ともオリーブ灰色	
Po107	—	46	22	Ｐ６区	7B-3a		Ⅴ層	青磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密 良好	内外面ともオリーブ灰色	蓮弁紋
Po108	—	44	3	Ｐ７区	6A-9i・10i・10j		東 Tr	青磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密 良好	内外面ともオリーブ灰色	
Po109	—	44	11	Ｐ７区	6A-9i	１溝	埋土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密 良好	内外面とも灰白色	
Po110	—	48	9-1	Ｐ８区	6A-7i・7j		Ⅱ層検出面	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密 良好	内外面とも灰白色	
Po111	—	48	13	Ｐ８区	6A-6h		Ⅲ層	白磁 皿	—	—	—	外面：体部施釉、底部付近露胎 内面：施釉	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰色	
Po112	—	48	30-6	Ｐ８区	6A-7i		Ⅲ層	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密 良好	内外面とも灰白色	
Po113	—	48	3	Ｐ８区	6A-7i・7j・8h・8i		層位不明	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密 良好	内外面とも灰白色	
Po114	—	48	9-2	Ｐ８区	6A-7i・7j		Ⅱ層検出面	青磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密 良好	内外面ともオリーブ灰色	内面にヘラ状工具による施文

第 16 表　土器観察表（4）

△：残存値　※：復元値

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区	グリッド T52-7a-	集合遺構 個別遺構	層位	器種	法量 (cm)			特徴 (調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po115	—	48	12-2	P 8 区	6A-7i		Ⅱ層	青磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密 良好	内外面とも灰オリーブ色	内面にヘラ状工具による施文
Po116	—	48	19	P 8 区	6A-6i・7i		Ⅳ層検出面	青磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密 良好	内外面とも灰オリーブ色	蓮弁紋

第 17 表　土製品観察表（1）

△：残存値

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区	グリッド T52-7a-	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量 (cm・g)	特徴 (調整等)	胎土 焼成	色調	備考
CP 1	18	24	16	P 1 区	8B-6g		表土	軒平瓦Ⅲ類？	最大長：△ 9.5 最大幅：△ 8.4 最大厚：1.7 重　量：144.0	瓦当面：素文 凸面：ナデ、ヘラ状工具による 4 本線の鋸歯状の施文 (沈線)、端縁ケズリ 凹面：ナデ？、一部剥離	密 良好	凸面：浅黄橙色 凹面：灰白色	
CP 2	18	23	9	P 1 区	8B-6g	1 流路	埋土	丸瓦	最大長：△ 10.0 最大幅：△ 7.9 最大厚：1.5 重　量：195.0	端面：切断面 凸面：ナデ、一部風化の為調整不明 凹面：布目、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	凸面：灰黄色 凹面：浅黄色	
CP 3	18	23	17	P 1 区	8B-6i	1 流路	埋土	平瓦	最大長：△ 15.5 最大幅：△ 14.6 最大厚：4.1 重　量：1102.5	端面：切断面 凸面：ナデ 凹面:布目、一部ナデ、側縁面取り (ヘラ切り) 側面：切断面	密 良好	浅黄橙色	
CP 4	18	23	14	P 1 区	8B-6h	1 流路	埋土	平瓦	最大長：△ 16.9 最大幅：△ 19.0 最大厚：2.9 重　量：873.0	端面：切断面 凸面：正方形格子叩き (格子幅 5 ～ 6mm) 凹面：布目、一部布目後ナデ	密 良好	凸面：灰白色 凹面：灰黄色	
CP 5	25	25	51	P 2 区	8B-3g	1 流路	埋土	軒丸瓦Ⅱ類	最大長：△ 17.5 最大幅：△ 15.5 最大厚：3.2 重　量：937.0	瓦当面：笵型施文 (蓮弁文)、笵への粘土充填不十分 瓦当裏面：指ナデ 丸瓦部欠損	密 良好	瓦当面：灰白色 瓦当裏面：にぶい黄橙色	
CP 6	25	25	47-1	P 2 区	8B-3g	1 流路	埋土	軒丸瓦Ⅱ類	最大長：△ 4.7 最大幅：△ 5.7 最大厚：4.0 重　量：33.0	瓦当部：ナデ 瓦当面：笵型施文 (珠文・蓮弁文) 瓦当裏面：剥離・欠損のため調整不明	密 良好	灰白色	
CP 7	25	28	37	P 2 区	8B-2g・3g		層位不明	軒丸瓦Ⅱ類	最大長：△ 2.8 最大幅：△ 6.3 最大厚：2.2 重　量：45.0	瓦当部：ナデ、はみだし粘土付着 瓦当面：笵型施文風化の為文様不明瞭 瓦当裏面：欠損のため調整不明	密 良好	灰白色	
CP 8	25	25	54	P 2 区	8B-3g	1 流路	埋土	軒丸瓦Ⅱ類	最大長：△ 3.2 最大幅：△ 5.1 最大厚：1.6 重　量：33.0	瓦当部：未調整 瓦当面：笵型施文風化の為文様不明瞭 瓦当裏面：剥離・欠損の為調整不明	密 やや良好	にぶい黄橙色	
CP 9	25	27	2	P 2 区	8B- 不明		11 層	軒丸瓦Ⅱ類	最大長：△ 3.2 最大幅：△ 3.2 最大厚：5.0 重　量：54.5	瓦当部：ナデ？ 瓦当面：笵型施文風化の為文様不明瞭 瓦当裏面：ナデ、丸瓦凹面ナデ	密 良好	灰白色	
CP10	25	25	53-1	P 2 区	8B-3g	1 流路	埋土	軒平瓦Ⅳ類	最大長：△ 3.6 最大幅：△ 3.9 最大厚：1.7 重　量：20.5	瓦当部：ナデ？ 瓦当面：笵型施文 (唐草文)	密 良好	灰白色	
CP11	25	28	58	P 2 区	8B-3g		層位不明	軒平瓦Ⅳ類	最大長：△ 22.6 最大幅：△ 29.1 最大厚：4.5 重　量：3,100.0	瓦当面：笵型施文 (唐草文) 凸面：縄目叩き (太) 凹面：風化の為調整不明、側縁面取り (ヘラ切り) 側面：切断面	密 良好	瓦当面・凸面：暗灰黄色・灰白色 凹面：暗灰黄色・灰黄褐色	
CP12	26	25	56	P 2 区	8B-3g	1 流路	埋土	軒平瓦Ⅲ類？	最大長：△ 7.6 最大幅：△ 6.0 最大厚：2.0 重　量：89.5	瓦当面：素文 凹面：縦方向のハケ目後粗くナデ 凸面：ナデ、狭端縁面取り (ヘラ切り)	密 良好	にぶい黄橙色	
CP13	26	25	47	P 2 区	8B-3g	1 流路	埋土	軒平瓦Ⅲ類	最大長：△ 6.0 最大幅：△ 5.6 最大厚：1.5 重　量：52.0	瓦当面：素文 凸面：ナデ、工具による 2 本線以上の鋸歯状文？ 凹面：粗いナデ	密 良好	凸面：灰白色 凹面：にぶい黄橙色	
CP14	26	25	47-3	P 2 区	8B-3g	1 流路	埋土	丸瓦	最大長：△ 5.9 最大幅：△ 5.5 最大厚：1.9 重　量：64.5	端面：切断面 凸面：カキ目 (縦・横)、ハケ目 凹面：布目、布末端痕	密 良好	灰白色	
CP15	26	27	19	P 2 区	8B-3f		11 層	平瓦	最大長：△ 19.2 最大幅：△ 19.5 最大厚：2.8 重　量：1,246.0	端面：切断面 凸面：正方形格子叩き 凹面:布目、模骨痕、側縁面取り (ヘラ切り) 側面：切断面	密 良好	凸面：にぶい黄橙色 凹面：にぶい黄橙色・灰白色	
CP16	26	25	47-4	P 2 区	8B-3g	1 流路	埋土	平瓦	最大長：△ 24.6 最大幅：△ 19.9 最大厚：2.3 重　量：988.0	端面：切断面 凸面：縄目回転 (細) または縄目叩き (細) 凹面：布目、布末端痕、端縁面取り	密 良好	凸面：灰褐色 凹面：灰白色・灰褐色	
CP17	26	25	47-2	P 2 区	8B-3g	1 流路	埋土	平瓦	最大長：△ 17.3 最大幅：△ 17.8 最大厚：2.8 重　量：894.0	端面：切断面 凸面：縄目叩き (細) 凹面:布目、模骨痕 (不明瞭)、端縁面取り (ヘラ切り)	密 良好	凸面：灰色・にぶい黄橙色 凹面：灰色	
CP18	26	25	53-2	P 2 区	8B-3g	1 流路	埋土	熨斗瓦	最大長：△ 12.3 最大幅：△ 12.6 最大厚：1.6 重　量：466.5	端面：切断面 凸面：ナデ 凹面：布目、側縁面取り (ヘラ切り) 側面：切断面	密 良好	にぶい黄橙色～灰白色	
CP19	36	30	55 103	P 3 区	7B-10e	1 溝	埋土	軒丸瓦Ⅰ類	最大長：△ 10.5 最大幅：△ 14.0 最大厚：3.5 重　量：474.5	瓦当部：ナデ 瓦当面：笵型施文 (蓮弁文) 瓦当裏面：ナデ、丸瓦部剥離痕	密 良好	にぶい橙色	
CP20	36	30	54	P 3 区	7B-10e	1 溝	埋土	軒丸瓦Ⅰ類	最大長：△ 8.9 最大幅：△ 14.2 最大厚：2.8 重　量：365.0	瓦当部：ナデ？ 瓦当面：笵型施文 (蓮弁文) 瓦当裏面：ナデ、丸瓦部剥離痕	密 良好	灰白色	
CP21	36	29	37	P 3 区	7B-10e	1 溝	埋土	軒丸瓦Ⅰ類	最大長：△ 6.8 最大幅：△ 8.0 最大厚：1.8 重　量：106.0	瓦当部：ナデ？ 瓦当面：笵型施文 (蓮弁文) 瓦当裏面：風化の為調整不明	密 良好	灰白色	
CP22	36	29	115-1	P 3 区	7B-10f	1 溝	埋土	軒丸瓦Ⅰ類	最大長：△ 6.6 最大幅：△ 8.0 最大厚：2.4 重　量：119.0	瓦当面：笵型施文 (蓮弁文) 瓦当裏面：ナデ、指頭圧痕	密 良好	灰白色	

第 18 表　土製品観察表（2）

△：残存値

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区	グリッド T52-7a-	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量 (cm・g)	特徴 (調整等)	胎土 焼成	色調	備考
CP23	36	29	103-1	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒丸瓦Ⅰ類	最大長：△ 5.9 最大幅：△ 7.0 最大厚：2.5 重　量：124.0	瓦当部：ナデ？ 瓦当面：笵型施文 (蓮弁文) 瓦当裏面：ナデ？風化の為調整不明瞭	密 良好	灰白色	
CP24	36	29	102-1	Ｐ３区	7B-10f	１溝	埋土	軒丸瓦Ⅰ類	最大長：△ 3.4 最大幅：△ 3.4 最大厚：1.0 重　量：11.0	瓦当面：笵型施文 (蓮弁文)	密 良好	にぶい黄橙色	
CP25	36	30	119 125	Ｐ３区	7B-10f 8B-1f	１溝	埋土	軒丸瓦Ⅱ類	最大長：△ 13.0 最大幅：△ 8.8 最大厚：3.8 重　量：308.5	瓦当面：笵型施文 (蓮弁文) 風化の為調整不明瞭 瓦当裏面：剥離・欠損の為調整不明	密 良好	瓦当面：灰白色・灰黄色 瓦当裏面：灰黄色	
CP26	36	30	101-1	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒丸瓦Ⅱ類	最大長：△ 5.5 最大幅：△ 10.0 最大厚：3.0 重　量：176.0	瓦当部：ナデ？ 瓦当面：笵型施文 (蓮弁文) 風化激しく調整不明瞭 瓦当裏面：風化の為調整不明	密 不良	灰白色	
CP27	36	30	59-1	Ｐ３区	7B-10f	１溝	埋土	軒丸瓦Ⅱ類	最大長：△ 6.5 最大幅：△ 7.8 最大厚：2.4 重　量：125.0	瓦当面：笵型施文 (蓮弁文)、摩滅激しい 瓦当裏面：摩滅激しく調整不明	密 不良	灰白色	
CP28	36	30	101-2	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒丸瓦Ⅱ類	最大長：△ 4.2 最大幅：△ 7.0 最大厚：1.8 重　量：67.0	瓦当部：ナデ 瓦当面：笵型施文 (蓮弁文)、風化の為調整不明瞭 瓦当裏面：調整不明	密 やや 良好	瓦当面：灰色 瓦当裏面：にぶい黄橙色	
CP29	36	30	45	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒丸瓦Ⅱ類	最大長：△ 3.1 最大幅：△ 6.7 最大厚：4.2 重　量：68.0	瓦当部：風化の為調整不明 瓦当面：笵型施文 (珠文)、風化の為調整不明瞭 瓦当裏面：ナデ？	密 良好	にぶい黄橙色	
CP30	37	31	48	Ｐ３区	7B-10f	１溝	埋土	軒丸瓦Ⅰ類？	最大長：△ 15.8 最大幅：△ 17.9 最大厚：4.1 重　量：1176.0	瓦当面：ナデ 丸瓦部凸面：ナデか？風化の為調整不明瞭 丸瓦部凹面：布目、糸切痕らしきもの 丸瓦部側面：切断面	密 良好	瓦当面・凸面：灰白色 凹面：にぶい黄橙色	
CP31	37	30	101-4	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒丸瓦	最大長：△ 4.5 最大幅：△ 9.5 最大厚：10.8 重　量：425.5	丸瓦部凸面：ナデか？風化の為調整不明瞭 丸瓦部凹面：風化の為調整不明 丸瓦部側面：切断面	密 やや 良好	にぶい黄橙色	
CP32	37	30	102-3	Ｐ３区	7B-10f	１溝	埋土	軒丸瓦	最大長：△ 9.7 最大幅：△ 10.9 最大厚：3.8 重　量：417.5	丸瓦部凸面：風化の為調整不明、端縁面取り 丸瓦部凹面：布目	密 やや 良好	凸面：灰白色 凹面：にぶい黄橙色	
CP33	37	31	101-3	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒丸瓦	最大長：△ 8.8 最大幅：△ 7.4 最大厚：2.8 重　量：297.5	丸瓦部凸面：ナデ 丸瓦部凹面：ナデ、補充粘土下に布目、接着の為の棒状品痕跡残る、側縁面取り 丸瓦部側面：切断面	密 良好	灰黄色	
CP34	37	30	43	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒丸瓦	最大長：△ 6.0 最大幅：△ 9.5 最大厚：4.3 重　量：152.5	瓦当面：剥離の為調整不明 瓦当裏面：ナデ、補充粘土に丸瓦凹面の布目が反転転写	密 良好	橙色	
CP35	38	31	106-1	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 14.1 最大幅：△ 13.0 最大厚：3.4 重　量：690.5	瓦当面：笵型施文 (唐草文) 凸面：ナデ 凹面：ナデ？調整不明瞭、模骨痕、側縁面取り（ヘラ切り） 側面：切断面	密 良好	凹凸面：灰白色 瓦当面：灰色	
CP36	38	31	57	Ｐ３区	7B-10d	１溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 11.8 最大幅：△ 13.0 最大厚：3.3 重　量：645.0	瓦当面：笵型施文 (唐草文) 凸面：風化 (摩滅) の為調整不明 凹面：風化 (摩滅) の為調整不明、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	凸面：灰黄色・浅黄色 瓦当面・凹面：浅黄色	
CP37	38	31	50-2	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 10.7 最大幅：△ 10.9 最大厚：3.7 重　量：376.0	瓦当面：笵型施文 (唐草文) 風化の為不明瞭 凹凸面とも風化の為調整不明 側面：切断面	密 やや 良好	凸面：灰白色・浅黄橙色 瓦当面・凹面：浅黄色	
CP38	38	31	58	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 12.8 最大幅：△ 11.4 最大厚：3.3 重　量：522.0	瓦当面：笵型施文 (唐草文) 風化の為不明瞭 凹凸面とも風化 (摩滅) の為調整不明	密 良好	灰白色	
CP39	38	31	106-2	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 11.3 最大幅：△ 8.4 最大厚：3.4 重　量：350.5	瓦当面：笵型施文 (唐草文) 凹凸面とも風化の為調整不明	密 やや 不良	灰色	
CP40	38	31	106-3	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 2.8 最大幅：△ 6.2 最大厚：3.1 重　量：36.0	瓦当面：笵型施文 (唐草文) 凸面：ナデ 凹面：端縁面取り	密 良好	灰色・灰白色	
CP41	39	31	36	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 11.3 最大幅：△ 17.7 最大厚：3.9 重　量：973.5	瓦当面：笵型施文 (唐草文の中心飾り) 凸面：風化の為調整不明 凹面：布目後ケズリ？、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	凸面：浅黄橙色 瓦当面・凹面：灰色	
CP42	39	31	88	Ｐ３区	7B-10f	１溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 10.0 最大幅：△ 12.4 最大厚：4.3 重　量：467.0	瓦当面：笵型施文 (唐草文の中心飾り) 凸面：ナデ？調整不明瞭 凹面：調整不明	密 やや 良好	灰白色	
CP43	39	31	41	Ｐ３区	7B-10f	１溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 4.4 最大幅：△ 8.8 最大厚：4.2 重　量：191.0	瓦当面：笵型施文 (唐草文の中心飾り) 凹凸面とも風化の為調整不明	密 やや 良好	瓦当面・凸面：淡黄色 凹面：灰白色	
CP44	39	31	31-1	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 10.8 最大幅：△ 12.4 最大厚：3.2 重　量：406.0	瓦当面：笵型施文 (唐草文) 凹凸面とも風化の為調整不明	密 やや 不良	灰色	
CP45	39	31	29	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 16.0 最大幅：△ 9.9 最大厚：3.4 重　量：652.0	瓦当面：笵型施文 (唐草文の中心飾り) 凸面：風化の為調整不明 凹面：風化の為調整不明、わずかに布目らしき痕跡、端縁面取り	密 良好	灰白色・にぶい黄橙色	
CP46	39	31	4	Ｐ３区	7B-10e・ 10f	１溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 9.9 最大幅：△ 11.8 最大厚：3.8 重　量：593.5	瓦当面：笵型施文 (唐草文) 凸面：ナデ 凹面：布目、模骨痕	密 良好	灰色	
CP47	40	31	50-1	Ｐ３区	7B-10e	１溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 10.1 最大幅：△ 10.3 最大厚：3.6 重　量：474.5	瓦当面：笵型施文 (唐草文) 凸面：風化の為調整不明 凹面：風化の為調整不明、模骨痕 側面：切断面	密 やや 不良	凸面：灰色 瓦当面・凹面：灰色・灰白色	
CP48	40	31	59-2	Ｐ３区	7B-10f	１溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 8.0 最大幅：△ 7.9 最大厚：4.0 重　量：234.5	瓦当面：笵型施文 (唐草文) 凸面：ナデ 凹面：ケズリ、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	灰白色・にぶい黄橙色	

第 19 表　土製品観察表（3）

△：残存値

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区	グリッド T52-7a-	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量 (cm・g)	特徴 (調整等)	胎土 焼成	色調	備考
CP49	40	32	120-1	P 3 区	7B-10e	1 溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 4.1 最大幅：△ 5.5 最大厚：1.9 重　量：39.5	瓦当面：笵型施文 (唐草文) 凸面：ナデ 凹面：剥離のため調整不明	密 良好	灰色	
CP50	40	32	47	P 3 区	7B-10e	1 溝	埋土	軒平瓦Ⅱ類	最大長：△ 17.8 最大幅：△ 11.4 最大厚：2.9 重　量：807.0	瓦当面：重弧文 凸面：ナデ後２段の複線波状文、玉縁式 凹面：布目、模骨痕、端縁面取り	密 良好	灰白色・灰色	
CP51	40	32	56	P 3 区	7B-10f	1 溝	埋土	軒平瓦Ⅱ類	最大長：△ 6.8 最大幅：△ 8.5 最大厚：2.2 重　量：96.5	瓦当面：重弧文 凸面：風化の為調整不明 凹面：風化の為調整不明、模骨痕	密 やや 良好	にぶい黄橙色	
CP52	40	32	38	P 3 区	7B-9f	1 溝	埋土	軒平瓦Ⅲ類？	最大長：△ 10.5 最大幅：△ 12.7 最大厚：3.0 重　量：507.5	瓦当面：素文 凸面：縄目叩き (太) 凹面：布目、端縁・側縁面取り 側面：切断面	密 良好	浅黄橙色	
CP53	40	32	59-3	P 3 区	7B-10f	1 溝	埋土	軒平瓦Ⅳ類	最大長：△ 3.1 最大幅：△ 9.3 最大厚：2.6 重　量：45.0	瓦当面：唐草文 凸面：縄目叩き？ 凹面：欠損のため調整不明	密 やや 良好	にぶい橙色	
CP54	41	32	50-3	P 3 区	7B-10e	1 溝	埋土	丸瓦	最大長：△ 12.9 最大幅：△ 4.6 最大厚：1.7 重　量：202.5	凸面：横ハケ 凹面：布目、模骨痕、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	凸面：灰白色・灰色 凹面：灰色	
CP55	41	32	115	P 3 区	7B-10f	1 溝	埋土	丸瓦	最大長：△ 17.2 最大幅：△ 7.2 最大厚：2.4 重　量：394.5	端面：切断面 凸面：工具による横ナデ 凹面：布目、糸切痕	密 良好	凸面：明褐灰色 凹面：灰白色	
CP56	41	33	29 59	P 3 区	7B-10e・ 10f	1 溝	埋土	平瓦	最大長：△ 16.0 最大幅：△ 14.9 最大厚：2.15 重　量：740.5	端面：切断面 凸面：正方形格子叩き (大)、端縁面取り 凹面：布目、ケズリ、側縁面取り	密 良好	オリーブ灰色	
CP57	41	33	115-2	P 3 区	7B-10f	1 溝	埋土	平瓦	最大長：△ 12.5 最大幅：△ 13.3 最大厚：2.7 重　量：188.5	端面：切断面 凸面：正方形格子叩き (大) 凹面：布目、一部風化の為調整不明瞭 (わずかに布目)、側縁面取り（ヘラ切り）、端縁面取り 側面：切断面	密 良好	にぶい黄橙色	
CP58	41	33	50	P 3 区	7B-10e	1 溝	埋土	平瓦	最大長：△ 10.7 最大幅：△ 12.7 最大厚：3.1 重　量：519.0	凸面：正方形格子叩き (大) 凹面：布目、模骨痕、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	にぶい黄橙色	
CP59	41	33	103-2 125	P 3 区	7B-10e 8B-1f	1 溝	埋土	平瓦	最大長：△ 15.0 最大幅：△ 16.1 最大厚：2.3 重　量：554.0	凸面：縄目叩き (細)、側縁面取り 凹面：布目、一部布目ナデ消し、ナデ、模骨痕、布かがり末端痕、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	灰白色	
CP60	41	33	120-2	P 3 区	7B-10e	1 溝	埋土	平瓦	最大長：△ 11.3 最大幅：△ 12.6 最大厚：1.9 重　量：329.5	凸面：縄目叩き 凹面：布目、糸切痕、模骨痕、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	凸面：黄灰色・浅黄色 凹面：黄灰色・灰黄色	
CP61	41	33	106-6	P 3 区	7B-10e	1 溝	埋土	平瓦	最大長：△ 10.1 最大幅：△ 10.0 最大厚：2.5 重　量：363.0	凸面：ハケ目 凹面：布目、模骨痕、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	凸面：灰色・灰黄色 凹面：灰色	
CP62	41	33	40-1	P 3 区	7B-10e	1 溝	埋土	平瓦	最大長：△ 24.4 最大幅：△ 17.3 最大厚：2.7 重　量：1413.5	凸面：工具によるナデ、一部指ナデ、側縁布目 凹面：布目、模骨痕、糸切痕、端縁面取り 側面：切断面	密 良好	凸面：灰白色、にぶい黄橙色 凹面：灰白色	
CP63	42	33	31-2	P 3 区	7B-10e	1 溝	埋土	平瓦 (転用硯)	最大長：△ 8.6 最大幅：△ 4.2 最大厚：1.8 重　量：70.5	凸面：ナデ 凹面：磨面	密 良好	凹凸面とも灰色	
CP64	42	33	59-4	P 3 区	7B-10f	1 溝	埋土	熨斗瓦	最大長：△ 13.8 最大幅：△ 13.5 最大厚：2.7 重　量：477.0	端面：切断面 凸面：縄目叩き (風化の為不明瞭)、側縁面取り 凹面：風化の為調整不明、模骨痕？、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	凸面：灰色 凹面：灰色・灰白色	
CP65	43	34	87	P 3 区	7B-10e	2 流路	埋土	軒丸瓦Ⅰ類	最大長：△ 12.3 最大幅：△ 10.0 最大厚：2.4 重　量：295.0	瓦当面：笵型施文 (蓮弁文) 瓦当裏面：ナデ、指頭圧痕	密 やや 不良	灰白色	
CP66	43	34	80	P 3 区	7B-10e	2 流路	埋土	軒丸瓦Ⅰ類	最大長：△ 6.5 最大幅：△ 9.5 最大厚：2.6 重　量：137.5	瓦当面：笵型施文 (蓮弁文)、摩滅著しい 瓦当裏面：指頭圧痕、ナデ	密 良好	瓦当面：灰白色 瓦当裏面：浅黄色	
CP67	43	35	79	P 3 区	7B-10e	2 流路	埋土	軒丸瓦Ⅰ類	最大長：△ 5.8 最大幅：△ 10.3 最大厚：3.8 重　量：241.0	瓦当部：焼成悪く調整不明瞭 瓦当面：笵型施文 (蓮弁文) 焼成悪く文様不明瞭 瓦当裏面：風化の為調整不明	密 やや 不良	瓦当部・瓦当面：浅黄色 瓦当裏面：灰黄色	
CP68	43	35	61	P 3 区	7B-10f	2 流路	埋土	軒丸瓦Ⅱ類	最大長：△ 6.8 最大幅：△ 8.7 最大厚：3.1 重　量：187.5	瓦当部：指ナデ 瓦当面：笵型施文 (蓮弁文) 瓦当裏面：指ナデ	密 良好	瓦当部・瓦当面：灰白色 瓦当裏面：にぶい黄橙色	
CP69	43	35	78	P 3 区	7B-10a	2 流路	埋土	軒丸瓦Ⅰ類？	最大長：△ 2.8 最大幅：△ 5.2 最大厚：2.5 重　量：34.0	瓦当部：ナデ？風化の為調整不明瞭 瓦当裏面：ナデ？風化の為調整不明瞭	密 良好	灰白色	
CP70	43	35	91	P 3 区	7B-10d	2 流路	埋土	軒丸瓦Ⅰ類？	最大長：△ 2.4 最大幅：△ 5.1 最大厚：2.0 重　量：30.0	瓦当部：ナデ 瓦当裏面：ナデ？風化の為調整不明瞭	密 良好	灰白色	
CP71	43	35	130-1	P 3 区	7B-10e	2 流路	ベルト 2	軒丸瓦Ⅰ類	最大長：△ 8.3 最大幅：△ 9.6 最大厚：2.6 重　量：216.0	瓦当部：ナデ、一部ヘラ状工具の圧痕 瓦当面：外区のみ 凹面：ナデ、不十分な充填粘土痕、丸瓦部剥離	密 良好	にぶい黄橙色	
CP72	43	35	76-2	P 3 区	7B-10e	2 流路	埋土	軒丸瓦	最大長：△ 14.6 最大幅：△ 12.8 最大厚：3.7 重　量：607.5	丸瓦部凸面：ナデ？風化の為調整不明瞭、側縁面取り 丸瓦部凹面：補充粘土下に布目、補充粘土指ナデ、端縁・側縁面取り 丸瓦部側面：切断面	密 やや 不良	灰白色	
CP73	44	36	72	P 3 区	7B-10f	2 流路	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 6.5 最大幅：△ 13.1 最大厚：3.6 重　量：422.0	瓦当面：笵型施文 (唐草文) 凸面：工具によるナデ 凹面：ケズリ、端縁面取り 側面：切断面	密 良好	瓦当面：灰黄褐色 凹凸面：にぶい橙色	
CP74	44	36	71	P 3 区	7B-10e	2 流路	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 13.5 最大幅：△ 11.4 最大厚：4.6 重　量：752.0	瓦当面：笵型施文 (唐草文) 凸面：工具によるナデ？(調整不明瞭) 凹面：布目、模骨痕、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	瓦当面・凸面：灰色 凹面：灰色・灰白色	

第 20 表　土製品観察表（4）

△：残存値

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区	グリッド T52-7a-	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量 (cm・g)	特徴 (調整等)	胎土 焼成	色調	備考
CP75	44	36	107-1	Ｐ３区	7B-10f	２流路	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 17.1 最大幅：△ 13.3 最大厚：3.8 重　量：908.0	瓦当面：笵型施文 (唐草文) 凸面：工具によるナデ、側縁面取り 凹面：風化の為調整不明、模骨痕、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	凸面：灰白色 瓦当面・凹面：淡黄色	
CP76	44	36	81-1	Ｐ３区	7B-10e	２流路	埋土	軒平瓦Ⅱ類	最大長：△ 7.9 最大幅：△ 8.3 最大厚：2.2 重　量：115.0	瓦当面：重弧文 凸面：布目ナデ消し、端縁・側縁面取り 凹面：ナデ、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	凸面：にぶい黄橙色 瓦当面・凹面：灰白色	
CP77	45	36	77	Ｐ３区	7B-10f	２流路	埋土	平瓦	最大長：△ 5.8 最大幅：△ 3.5 最大厚：2.4 重　量：56.0	凸面：縄目叩き？調整不明瞭、側縁面取り 凹面：ナデ、布目、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	黄灰色	
CP78	45	36	76-7	Ｐ３区	7B-10e	２流路	埋土	平瓦	最大長：△ 12.1 最大幅：△ 10.9 最大厚：2.8 重　量：507.0	端面：切断面 凸面：横ハケ、側縁面取り一部に指頭圧痕 凹面：布目、模骨痕、端縁面取り 側面：切断面	密 良好	凸面：暗灰色・灰黄色 凹面：灰白色・暗灰色	
CP79	45	36	81-2	Ｐ３区	7B-10e	２流路	埋土	平瓦	最大長：△ 8.3 最大幅：△ 6.5 最大厚：2.5 重　量：144.5	端面：切断面 凸面：横ハケ 凹面：布目	密 良好	凸面：灰白色 凹面：灰色	
CP80	45	36	107-2	Ｐ３区	7B-10f	２流路	埋土	平瓦	最大長：△ 14.5 最大幅：△ 9.1 最大厚：2.7 重　量：435.5	凸面：格子叩き 凹面:布目、模骨痕、側縁面取り (ヘラ切り) 側面：切断面	密 良好	灰色・灰白色	
CP81	45	36	77-1	Ｐ３区	7B-10f	２流路	埋土	平瓦	最大長：△ 9.4 最大幅：△ 10.7 最大厚：2.1 重　量：303.0	端面：切断面 凸面：格子叩き 凹面：布目、模骨痕、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	橙色	
CP82	45	36	76	Ｐ３区	7B-10e	２流路	埋土	平瓦	最大長：△ 12.8 最大幅：△ 15.9 最大厚：2.2 重　量：552.0	端面：切断面 凸面：ナデ？風化の為調整不明瞭 凹面：布目、糸切痕、指ナデ、模骨痕、端縁面取り	密 良好	灰色	
CP83	45	36	130-2	Ｐ３区	7B-10e	２流路	ベルト２	平瓦	最大長：△ 26.5 最大幅：△ 18.7 最大厚：2.2 重　量：1411.0	端面：切断面 凸面：工具による丁寧なナデ、端縁面取り 凹面：布目、糸切痕、模骨痕、端縁・側縁面取り 側面：切断面	密 良好	にぶい黄橙色	
CP84	45	36	90	Ｐ３区	7B-10e	２流路	埋土	平瓦	最大長：△ 13.2 最大幅：△ 10.0 最大厚：2.1 重　量：268.0	端面：切断面 凸面：ナデ、３本爪の引っ掻き傷？、端縁面取り 凹面：布目、糸切痕、端縁面取り	密 良好	凸面：灰黄色・灰色 凹面：灰色	
CP85	45	37	76	Ｐ３区	7B-10e	２流路	埋土	面戸瓦？	最大長：△ 13.5 最大幅：△ 7.8 最大厚：1.3 重　量：199.5	凸面：丁寧なナデ 凹面：布目、糸切痕 側面：切断面	密 良好	灰白色	
CP86	45	37	76-8	Ｐ３区	7B-10e	２流路	埋土	隅切瓦	最大長：△ 10.8 最大幅：△ 10.2 最大厚：2.2 重　量：324.0	端面：切断面 凸面：縄目叩き 凹面：布目、模骨痕、端縁・側縁面取り 側面：切断面	密 良好	凸面：灰色 凹面：灰白色・灰色	
CP87	45	37	65-2	Ｐ３区	7B-10e	２流路	埋土	隅切瓦	最大長：△ 10.2 最大幅：△ 8.0 最大厚：2.3 重　量：249.0	端面：切断面 凸面：縄目叩き 凹面：布目、模骨痕、端縁・側縁面取り 側面：切断面	密 良好	にぶい黄橙色	
CP88	46	38	128	Ｐ３区	7B-10f	４流路	最下層	丸瓦	最大長：△ 20.8 最大幅：△ 14.5 最大厚：2.4 重　量：960.0	端面：切断面 凸面：ナデ？風化の為調整不明瞭、側縁面取り 凹面：布目、縦方向の糸切痕？ 側面：切断面	密 良好	にぶい橙色	
CP89	46	39	128	Ｐ３区	7B-10f	４流路	最下層	平瓦	最大長：△ 11.4 最大幅：△ 12.0 最大厚：2.7 重　量：477.5	凸面：格子叩き 凹面：布目、模骨痕、側縁面取り 側面：切断面	密 良好	凸面：浅黄橙色 凹面：にぶい黄橙色	
CP90	47	40	7-1	Ｐ３区	—		造成土	軒丸瓦Ⅰ類	最大長：△ 16.6 最大幅：△ 16.2 最大厚：3.4 重　量：1030.5	瓦当部：摩滅の為調整不明 瓦当面：笵型施文 (蓮弁文) 焼成悪く不明瞭 瓦当裏面：ナデ？風化の為調整不明瞭	密 やや不良	瓦当面：灰色 瓦当裏面：にぶい黄橙色	
CP91	47	41	114	Ｐ３区	8B-1e		層位不明	軒丸瓦Ⅰ類	最大長：△ 3.7 最大幅：△ 13.5 最大厚：13.5 重　量：604.5	瓦当部：ナデ 瓦当面：外区に指紋多数 凸面：工具による粗いタテナデ 凹面：布目一部に指頭圧痕、側縁面取り後ナデ 側面：切断面	密 良好	黄灰色	南トレンチ 須恵質
CP92	47	40	60	Ｐ３区	7B-10e		撹乱	軒丸瓦Ⅱ類	最大長：△ 13.6 最大幅：△ 15.0 最大厚：4.4 重　量：724.5	瓦当面：笵型施文 (蓮弁文) 瓦当裏面：指ナデ 全体に摩滅・風化進む、焼成悪い	密 やや不良	灰白色・灰色	
CP93	47	40	7-2	Ｐ３区	—		造成土	軒丸瓦Ⅱ類	最大長：△ 12.7 最大幅：△ 7.8 最大厚：3.4 重　量：328.0	瓦当部：ナデ 瓦当面：笵型施文 (蓮弁文) 瓦当裏面：指ナデ	密 やや良好	瓦当面：灰白色 瓦当裏面：にぶい黄橙色	
CP94	47	40	68	Ｐ３区	7B-10e		撹乱	丸瓦	最大長：△ 9.3 最大幅：△ 7.7 最大厚：2.1 重　量：136.0	端面：切断面 凸面：平行タタキ 凹面：布目、模骨痕、布末端痕、側縁面取り (ヘラ切り？) 側面：切断面	密 良好	灰白色	
CP95	50	42	5-2	Ｐ２・３区	—		排土	軒丸瓦Ⅱ類？	最大長：△ 5.8 最大幅：△ 8.2 最大厚：3.0 重量：149.0	瓦当面：笵型施文風化の為文様不明瞭 瓦当裏面：風化の為調整不明	密 やや不良	灰白色	
CP96	50	42	5-1	Ｐ２・３区	—		排土	軒丸瓦Ⅰ類？	最大長：△ 4.2 最大幅：△ 12.8 最大厚：12.0 重量：537.5	瓦当部：ナデ？調整不明瞭 瓦当面：笵型施文欠損のため文様不明 凹凸面：ナデ？調整不明瞭	密 良好	凸面：灰白色 凹面：にぶい黄橙色	
CP97	50	42	5-4	Ｐ２・３区	—		排土	隅切瓦	最大長：△ 6.9 最大幅：△ 6.0 最大厚：2.2 重　量：115.0	端面：切断面 凸面：縄目叩き (太) 凹面：布目一部ケズリ、模骨痕	密 良好	凸面：にぶい黄橙色 凹面：にぶい橙色	
CP98	50	42	5-5	Ｐ２・３区	—		排土	隅切瓦	最大長：△ 7.6 最大幅：△ 5.8 最大厚：2.3 重　量：100.5	端面：切断面 凸面：縄目叩き (太) 凹面：布目、側縁面取り	密 良好	凸面：灰白色 凹面：灰色・灰白色	
CP99	56	43	11	Ｐ４区	7B-7e	１流路	上層	軒丸瓦	最大長：△ 5.1 最大幅：△ 5.2 最大厚：3.2 重　量：57.0	瓦当部：欠損の為調整不明 瓦当面：笵型施文 瓦当裏面：ナデ、補充粘土に丸瓦凹面の布目が反転転写	密 良好	にぶい黄橙色	

第 21 表　土製品観察表（5）

△：残存値

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区	グリッド T52-7a-	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量 (cm・g)	特徴 (調整等)	胎土 焼成	色調	備考
CP100	56	43	29	P 4 区	7B-8d		層位不明	軒丸瓦Ⅰ類？	最大長：△ 2.8 最大幅：△ 7.3 最大厚：2.8 重　量：53.0	瓦当部：ナデ 瓦当面：外区ナデ 瓦当裏面：欠損の為調整不明	密 良好	灰白色	試掘トレンチ
CP101	63	44	18	P 5 区	7B-6b	2 溝	埋土	軒丸瓦	最大長：△ 4.5 最大幅：△ 7.8 最大厚：3.2 重　量：86.0	瓦当部：風化・摩滅激しく調整不明 瓦当面：風化・摩滅激しく調整不明 瓦当裏面：欠損の為調整不明	密 良好	瓦当面：にぶい褐色 瓦当裏面：にぶい橙色	
CP102	63	44	3	P 5 区	7B-4b	1 溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類	最大長：△ 9.2 最大幅：△ 10.4 最大厚：4.0 重　量：328.0	瓦当面：笵型施文 (唐草文の中心飾り) 凹凸面：風化の為調整不明	密 良好	灰色	
CP103	71	45	12	P 6 区	7B-2b	1 溝	埋土	軒平瓦Ⅰ類？	最大長：△ 8.2 最大幅：△ 5.5 最大厚：3.9 重　量：164.5	瓦当面：笵型施文 (唐草文？) 凸面：ナデ？ 凹面：調整不明一部に布目	密 良好	凸面：灰白色 瓦当面・凹面：淡黄色	
CP104	71	45	23	P 6 区	7B-3a		包含層	丸瓦	最大長：△ 8.4 最大幅：△ 5.4 最大厚：1.9 重　量：138.0	端面：切断面 凸面：１単位 13 条以上のハケ目 凹面：布目、布末端痕 側面：切断面	密 良好	凸面：褐灰色・灰白色 凹面：灰白色	
CP105	71	45	24	P 6 区	7B-2b	1 溝	埋土	平瓦	最大長：△ 9.6 最大幅：△ 7.1 最大厚：2.5 重　量：163.0	端面：切断面 凸面：正方形格子叩き (大)、端縁面取り 凹面：布目、模骨痕、布末端痕、端縁面取り	密 良好	凸面：灰褐色 凹面：褐灰色	
CP106	71	45	24	P 6 区	7B-2b	1 溝	埋土	平瓦	最大長：△ 6.8 最大幅：△ 7.3 最大厚：2.1 重　量：119	端面：切断面 凸面：縄目叩き 凹面：布目、端縁面取り	密 良好	灰色	
CP107	85	48	46	P 8 区	6A-7i		Ⅲ～Ⅳ層	土馬脚	最大長：△ 6.1 最大幅：△ 3.8 最大厚：2.7	ナデ・指オサエ	密 良好	灰色	

第 22 表　石器・石製品観察表

△：残存値

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区	グリッド T52-7a-	集合遺構 個別遺構	層位	器種	法量 (cm・g) 最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
S 1	24	28	35	P 2 区	8B-3g		層位不明	石庖丁	△ 5.1	△ 5.8	6.5	30.9	板状安山岩	
S 2	48	34	58	P 3 区	7B-10e	1 溝	埋土	砥石	△ 9.5	4.9	1.8	118.0	デイサイト	
S 3	48	34	27	P 3 区	7B-10d	1 溝	埋土	五輪塔 空風輪	18.4	18.5	19.2	5560.0	花崗岩	
S 4	48	34	69	P 3 区	7B-10e	1 溝	埋土	五輪塔	17.0	24.2	23.4	16050.0	花崗岩	
S 5	80	44	23	P 7 区	6A-10j		Ⅲ層	平基無茎式石鏃	2.2	1.4	0.4	1.2	無斑晶安山岩	
S 6	80	44	18	P 7 区	6A-9j・10j		Ⅰ層	二次加工のある剥片	5.5	2.3	1.2	13.4	黒曜石	
S 7	85	48	40	P 8 区	6A-7j		Ⅲ層～Ⅳ層	石錐？	△ 3.4	1.4	0.6	3.1	無斑晶安山岩	

第 23 表　木器観察表

△：残存値　※：推定復元値

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上 No.	調査区	グリッド T52-7a-	遺構名	層位	種別	法量 (cm) 最大長	最大幅	最大厚	法量 (cm) 器高	口径	底径	樹種	木取り	備考
W 1	18	23	28-1	P 1 区	8B-6h	1 流路	埋土	曲物底板	29.5	9.5	0.8	—	—	—	スギ科スギ属スギ	追柾目材	
W 2	27	25	46	P 2 区	8B-2g・3g	1 流路	埋土	角棒材	22.6	1.5	1.4	—	—	—	スギ科スギ属スギ	芯去り材	炭化部分あり
W 3	27	26	77	P 2 区	8B-3f	2 流路	埋土	角棒材	21.2	2.7	1.2	—	—	—	スギ科スギ属スギ	板目材	
W 4	27	26	75	P 2 区	8B-3f	2 流路	埋土	角棒材	30.4	1.9	1.4	—	—	—	スギ科スギ属スギ	板目材	
W 5	27	26	73	P 2 区	8B-3f	2 流路	埋土	角棒材	51.0	2.1	1.3	—	—	—	スギ科スギ属スギ	板目材	
W 6	27	26	72	P 2 区	8B-3f	2 流路	埋土	斎串？	67.1	2.1	1.2	—	—	—	スギ科スギ属スギ	芯去り材	
W 7	27	26	65 70	P 2 区	8B-3f	2 流路	埋土	建築部材？	160.5	3.9	2.7	—	—	—	スギ科スギ属スギ	芯去り材	
W 8	27	26	68	P 2 区	8B-3f	2 流路	埋土	建築部材？	54.9	5.7	6.2	—	—	—	スギ科スギ属スギ	芯去り材	炭化部分あり
W 9	27	26	62	P 2 区	8B-3f	2 流路	埋土	建築部材？	177.4	17.8	3.3	—	—	—	スギ科スギ属スギ	柾目材	
W10	28	26	63	P 2 区	8B-3f	2 流路	埋土	建築部材？	194.0	16.4	3.8	—	—	—	スギ科スギ属スギ	板目材	
W11	28	26	66	P 2 区	8B-3f	2 流路	埋土	建築部材？	154.0	13.4	2.6	—	—	—	スギ科スギ属スギ	板目材	
W12	28	28	5	P 2 区	7B-4f	—	層位不明	漆器椀	—	—	—	△ 1.7	※ 15.3	—	モクレン科モクレン属	横木取り	黒漆
W13	28	28	13	P 2 区	8B-4g	—	層位不明	部材？	10.2	5.0	3.2	—	—	—	ヒノキ科ヒノキ属	柾目材	
W14	28	28	26	P 2 区	8B-4f	—	層位不明	板状材	18.4	9.8	1.2	—	—	—	スギ科スギ属スギ	柾目材	
W15	28	28	25-1	P 2 区	8B-3f	—	層位不明	角棒材	35.9	2.2	1.2	—	—	—	スギ科スギ属スギ	芯去り材	
W16	28	28	25-2	P 2 区	8B-3f	—	層位不明	斎串？	61.8	1.9	0.9	—	—	—	スギ科スギ属スギ	芯去り材	
W17	49	34	6	P 3 区	7B-10e	2 流路	埋土	漆器椀	—	—	—	△ 2.3	—	—	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	横木取り	黒漆・赤漆
W18	49	39	3	P 3 区	—	—	造成土	漆器椀	—	—	—	△ 2.5	—	※ 5.2	ブナ科クリ属クリ	縦木取り	黒漆・赤漆
W19	55	43	63	P 4 区	7B-7e	1 流路	埋土	建築部材？	48.0	20.9	3.4	—	—	—	スギ科スギ属スギ	板目材	
W20	55	43	6	P 4 区	7B-7e	1 流路	最上層	板材	52.1	7.0	1.9	—	—	—	スギ科スギ属スギ	板目材	
W21	63	44	6	P 5 区	7B-5c	6 溝	埋土	漆器椀	—	—	—	△ 3.5	—	—	ブナ科ブナ属	横木取り	赤漆・黒漆
W22	72	46	61	P 6 区	7B-1b	2 溝	埋土	板材	45.5	6.2	0.8	—	—	—	ヒノキ科アスナロ属	板目材	
W23	72	46	43-1	P 6 区	7B-2b	2 溝	埋土	板材	38.0	2.4	0.6	—	—	—	スギ科スギ属スギ	板目材	
W24	72	46	55-2	P 6 区	7B-2b	2 溝	埋土	棒状木製品	26.9	1.9	1.5	—	—	—	スギ科スギ属スギ	芯去り材	
W25	72	46	55-1	P 6 区	7B-2b	2 溝	埋土	棒状木製品	53.0	2.7	1.3	—	—	—	スギ科スギ属スギ	板目材	
W26	72	46	54	P 6 区	7B-2b	2 溝	埋土	角杭	68.4	6.4	3.7	—	—	—	スギ科スギ属スギ	芯去り材	
W27	72	45	53	P 6 区	7B-2b	2 溝	埋土	漆器椀	—	—	—	△ 7.2	※ 16.7	※ 9.2	モクレン科モクレン属	横木取り	黒漆・赤漆

第４章　大鴨遺跡の調査成果

第１節　概要

第１項　調査区の概要

大鴨遺跡は小鴨川左岸の河岸段丘上に立地し、遺跡の西側には天神野台地が近接する。現況は水田または畑が営まれ、調査地内は圃場整備等による削平を受けている。１区は東西方向に主軸をおく水田１筆、２・３区は南北方向に主軸をおき東西に並列する水田２筆ずつで、並列する水田は圃場整備により段差が形成されている。西側の水田東端は盛土がなされ、東側の水田は大きな削平を受けており、包含層の遺存状況は不良である。４区は東西方向に主軸をおく水田２筆、南北方向に主軸をおく水田２筆で、同じく東側ほど削平されて造成土が厚く盛られている。

１～４区とも遺構確認面は２面であり、地区ごとに基本層序の番号を付している。そのため遺跡全体の土層の堆積状況を整理する必要があり、ローマ数字により改めて基本層序を付し、それぞれの対応模式図を第90図に示した。また、第１面については、中世以降の遺構埋土と古代の遺構埋土は明瞭に分けられることから、中世と古代の面を分けて記述する。

遺構は１区では中世後期の火葬墓２基、中世前期の掘立柱建物５棟と柵列２基、奈良時代の道路遺構２条、古代の流路１条、弥生時代のピット群、２区では奈良時代の掘立柱建物２棟、道路遺構２条、木製祭祀具集中部１箇所、木製構造物１箇所、弥生時代の土坑１基、縄文時代の落とし穴１基、３区では中世前期の掘立柱建物２棟、奈良時代の掘立柱建物５棟、飛鳥時代から奈良時代の竪穴建物２棟、柵列２基、道路遺構、柱穴・ピット多数、その他弥生時代中期の土器埋納ピット、４区では中世の掘立柱建物４棟、水田10筆、足跡群10箇所、飛鳥時代から平安時代の掘立柱建物６棟、竪穴建物２棟、道路遺構、柱穴・ピット多数、古墳時代前期の竪穴建物２棟、古墳時代以前と考えられる掘立柱建物２棟などを検出している。遺物は各地区で弥生土器、土師器、須恵器、国産陶器、貿易陶磁器、土製品、石器、木製祭祀具・建築部材、鍛冶関連遺物などが出土している。

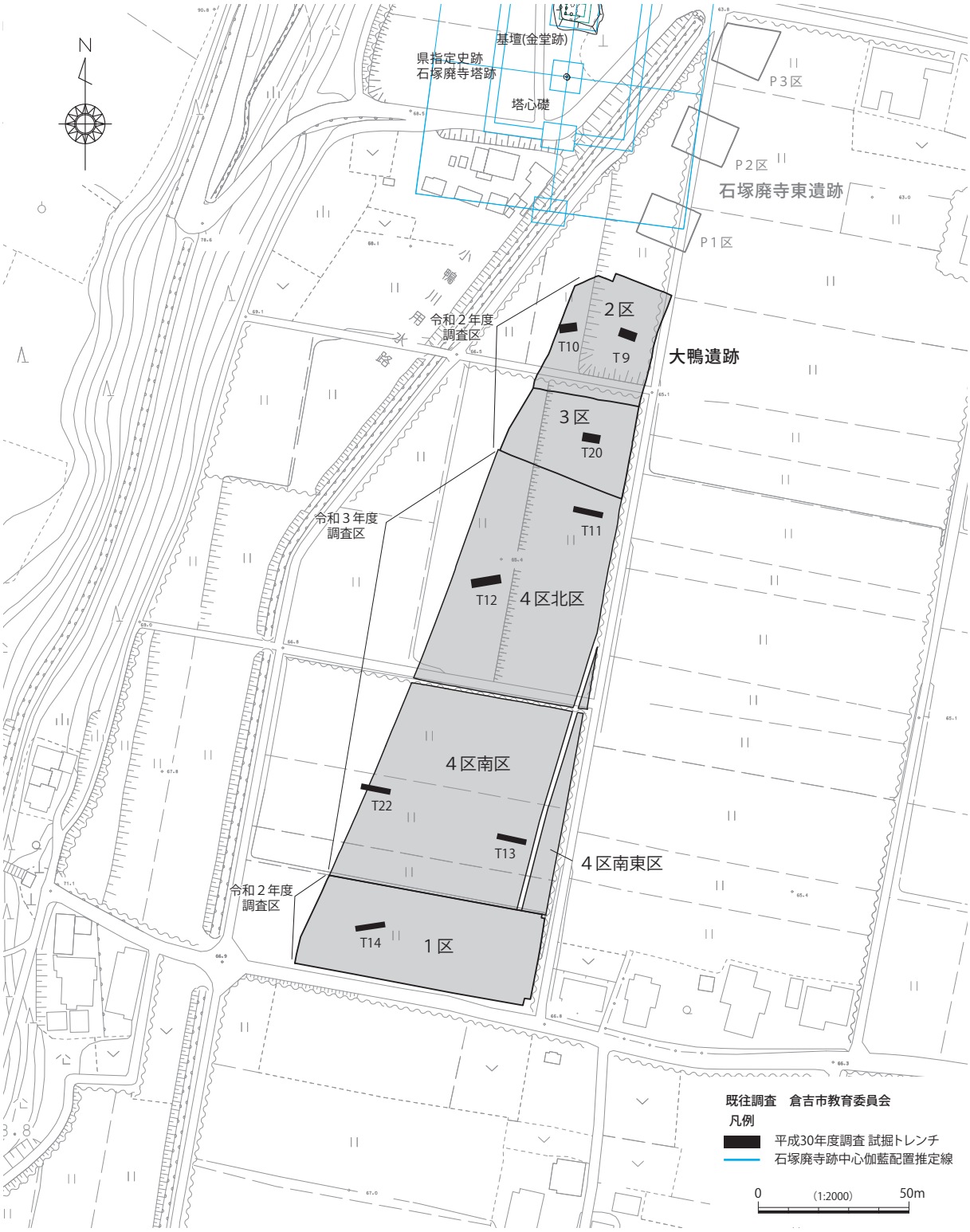
第２項　調査区と遺構の確認面

大鴨遺跡の調査区は東西30～80m、南北約240mで、調査区の南北方向に流路が縦断する。

流路の西側は天神野台地の裾部、東側は沖積平野である。調査区の西壁と東壁では堆積状況が異なり遺構面は対応しないため、以下に概要を記す。

［**流路西側**］１区には301流路（４区の２流路と同じ）が南西方向に延び、立ち上がりはない。４区北区から３区、２区では、上からⅡ層（黒褐色シルト）、Ⅲ層（黒ボク）、Ⅳ層（漸移層）、Ⅴ層（ソフトローム）が堆積する。Ⅱ層はⅡａ層、Ⅱｂ層、Ⅱｃ層に分かれ、Ⅱａ層は中世の遺物包含層、Ⅱｂ層は古代までの遺物包含層、Ⅱｃ層は弥生時代までの遺物を包含する。

第１遺構面では２時期の遺構を検出した。Ⅲ層上面で中世の掘立柱建物、中世の耕作溝群、土坑等、

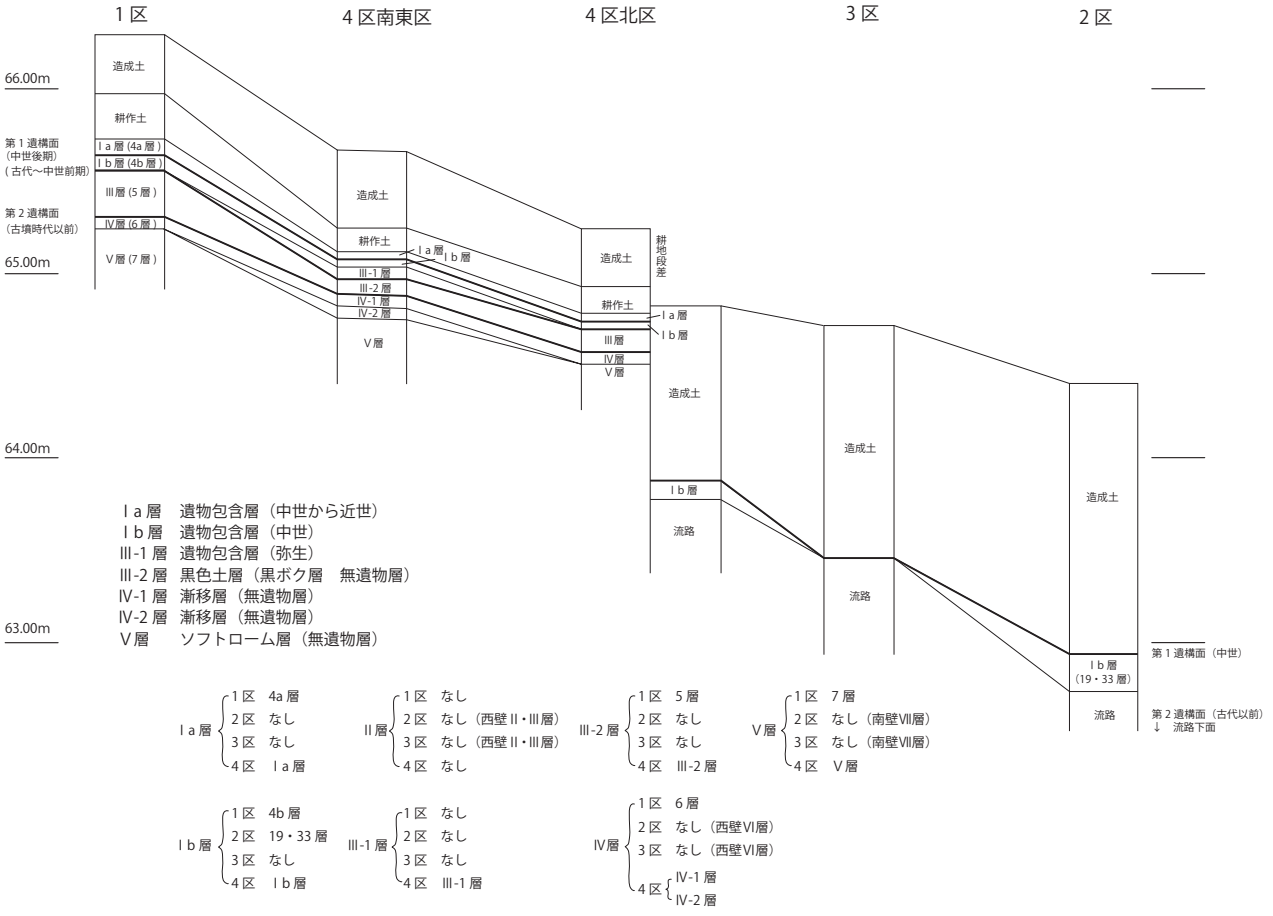


第 89 図　調査区周辺の地形

Ⅱｃ層上面で古代の竪穴建物、掘立柱建物、道路等を検出した。第２遺構面はⅣ層上面で、古墳時代の竪穴建物、弥生時代の土坑、縄文時代の落とし穴等を検出した。

［**流路東側**］１区から４区南東区まで造成土の下に現代まで続く耕作土が堆積する。このうちⅠａ層は中世後期、Ⅰｂ層は中世前期～近世の遺物包含層である。４区北区から３区と２区には、２流路の立ち上がりはない。２流路の埋没した直上層上面が遺構面となる。それ以外は、西側と同様に、上

〈大鴨遺跡１～４区　東壁　基本層序〉 ※（ ）内は調査時の層名



Ⅰa層　遺物包含層（中世から近世）
Ⅰb層　遺物包含層（中世）
Ⅲ-1層　遺物包含層（弥生）
Ⅲ-2層　黒色土層（黒ボク層　無遺物層）
Ⅳ-1層　漸移層（無遺物層）
Ⅳ-2層　漸移層（無遺物層）
Ⅴ層　ソフトローム層（無遺物層）

Ⅰa層
- １区　4a層
- ２区　なし
- ３区　なし
- ４区　Ⅰa層

Ⅱ層
- １区　なし
- ２区　なし（西壁Ⅱ・Ⅲ層）
- ３区　なし（西壁Ⅱ・Ⅲ層）
- ４区　なし

Ⅲ-2層
- １区　5層
- ２区　なし
- ３区　なし
- ４区　Ⅲ-2層

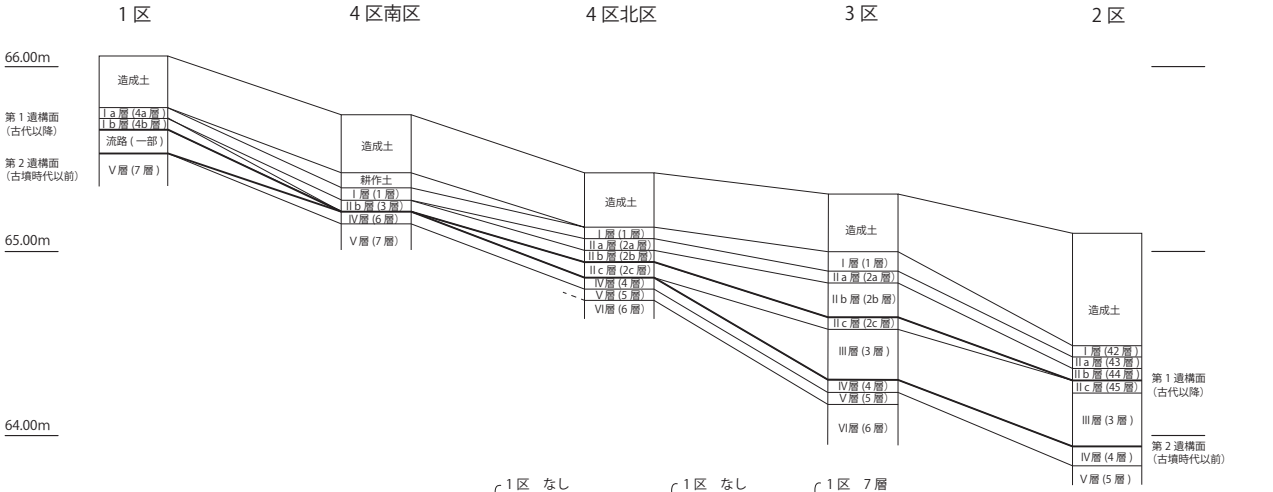
Ⅴ層
- １区　7層
- ２区　なし（南壁Ⅶ層）
- ３区　なし（南壁Ⅶ層）
- ４区　Ⅴ層

Ⅰb層
- １区　4b層
- ２区　19・33層
- ３区　なし
- ４区　Ⅰb層

Ⅲ-1層
- １区　なし
- ２区　なし
- ３区　なし
- ４区　Ⅲ-1層

Ⅳ層
- １区　6層
- ２区　なし（西壁Ⅵ層）
- ３区　なし（西壁Ⅵ層）
- ４区　Ⅳ-1層、Ⅳ-2層

〈大鴨遺跡１～４区　西壁　基本層序〉 ※（ ）内は調査時の層名



Ⅰ層　遺物包含層（中世）
Ⅱa層　遺物包含層（中世）
Ⅱb層　遺物包含層（弥生～古代）
Ⅱc層　遺物包含層（弥生）
Ⅲ層　黒色土層（黒ボク層　無遺物層）
Ⅳ層　漸移層（無遺物層）
Ⅴ層　ソフトローム層（無遺物層）
Ⅵ層　ホーキ層（無遺物層）

Ⅰ層
- １区　なし
- ２区　42層
- ３区　1層
- ４区　1層

Ⅲ層
- １区　なし
- ２区　3層
- ３区　3層
- ４区　なし

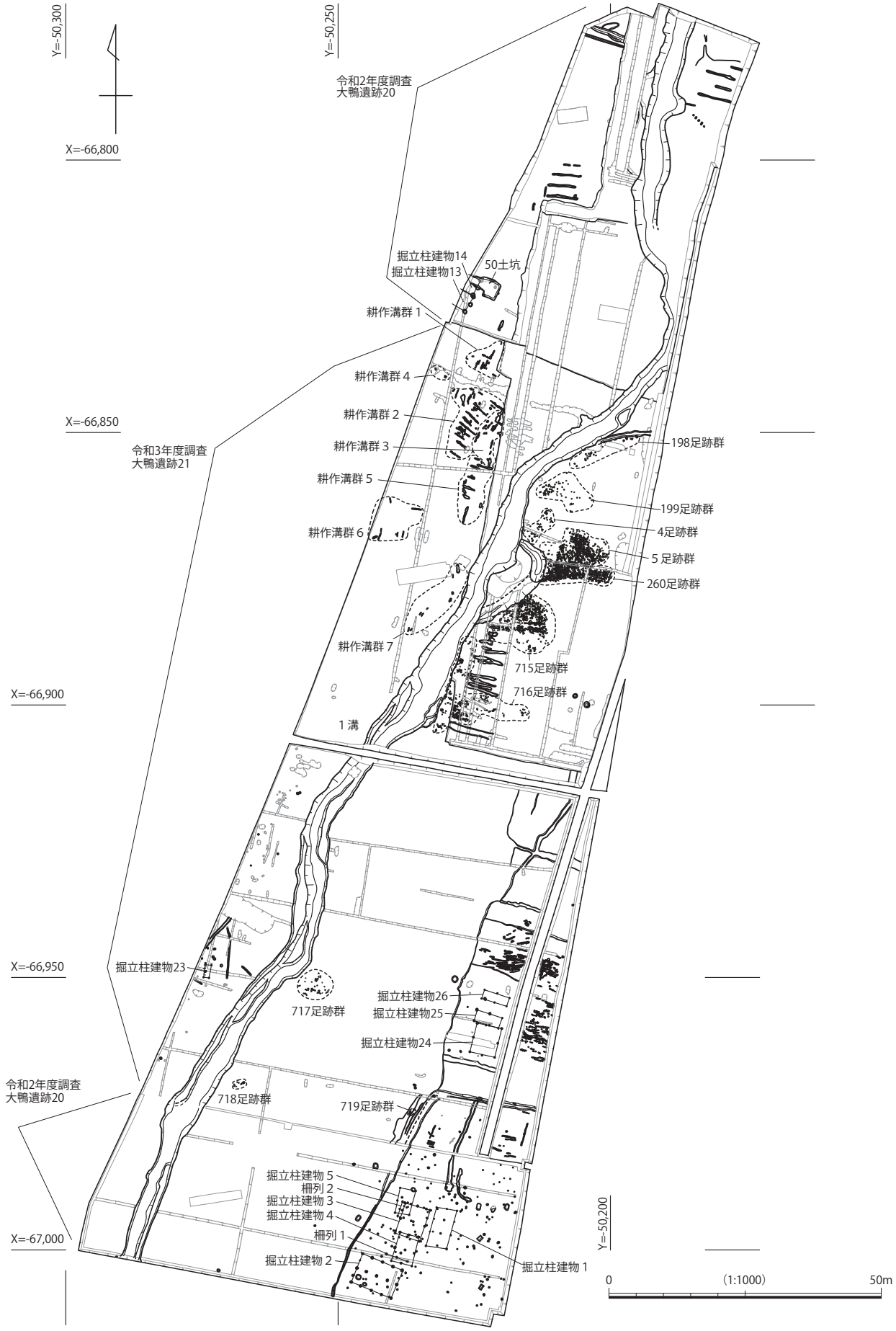
Ⅴ層
- １区　7層
- ２区　5層
- ３区　5層
- ４区　7層

Ⅱ層
- １区　なし
- ２区　43～45層
- ３区　2a層、2b層、2c層
- ４区　2b層、2c層

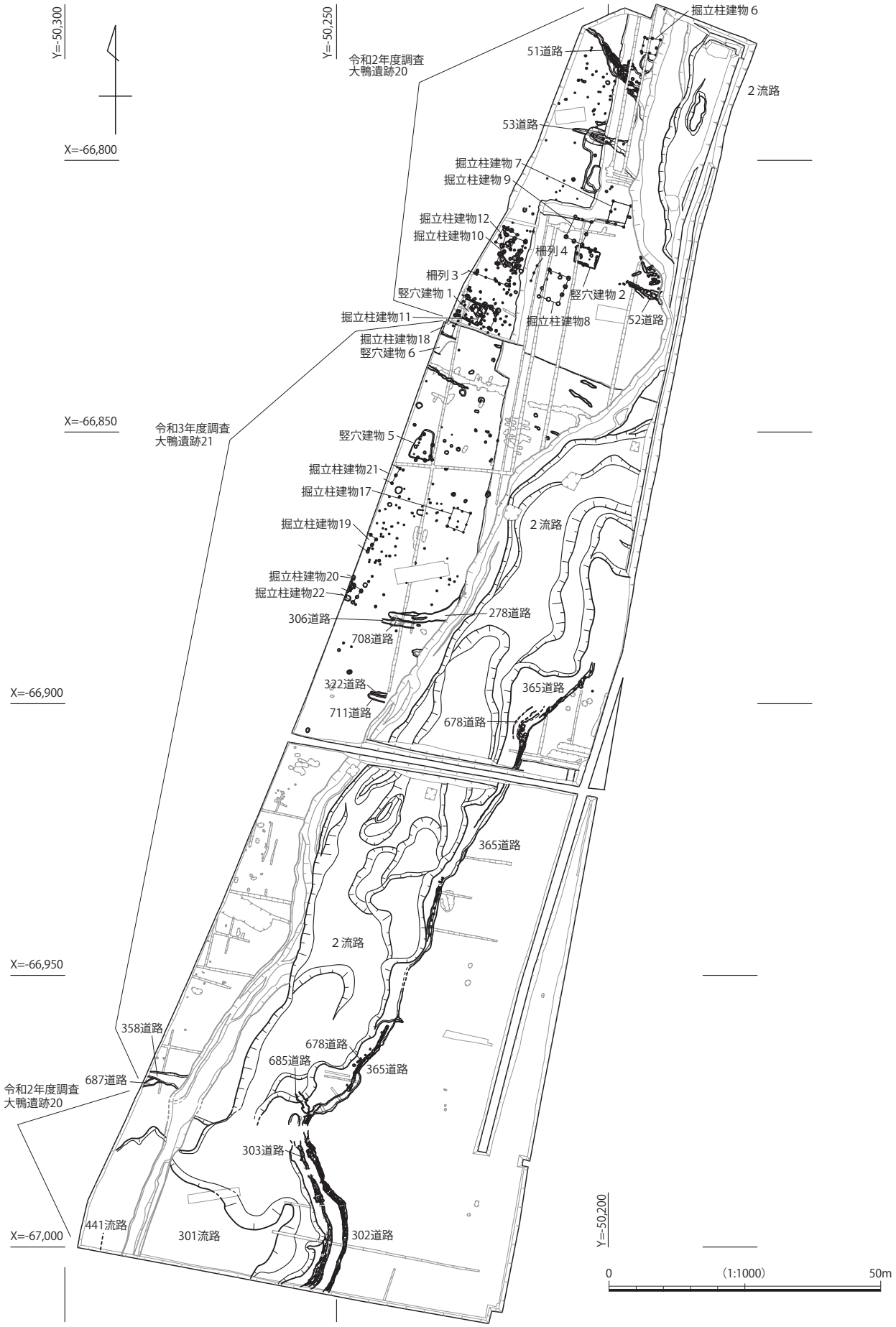
Ⅳ層
- １区　なし
- ２区　4層
- ３区　4層
- ４区　6層

Ⅵ層
- １区　なし
- ２区　なし
- ３区　6層
- ４区　8層

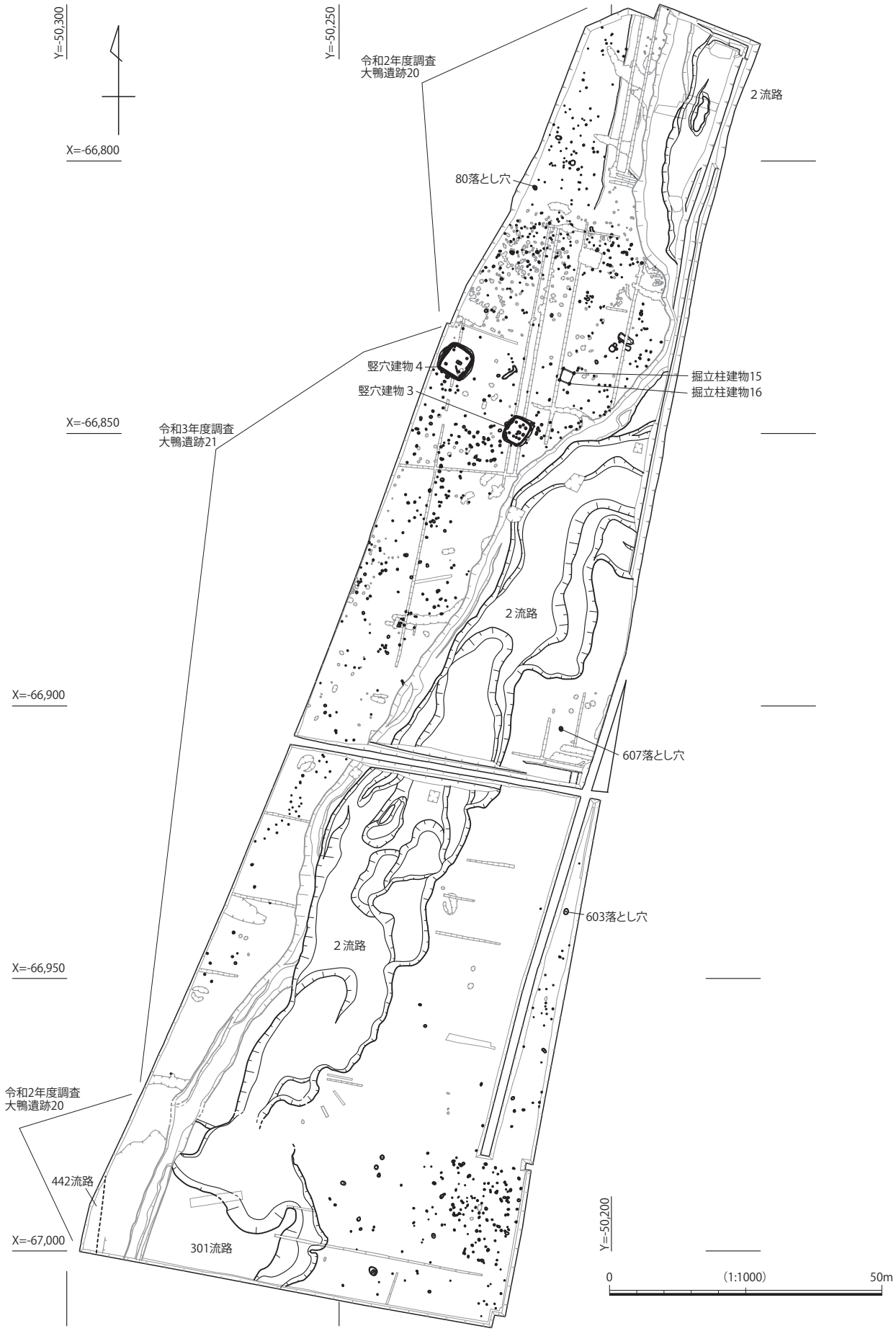
第 90 図　調査区の層序



第 91 図　１～４区　第１遺構面（中世以降）全体図



第 92 図　１～４区　第１遺構面（古代）全体図



第 93 図　１～４区　第２遺構面（古墳時代以前）全体図

からⅢ層（黒ボク）、Ⅳ層（漸移層）、Ⅴ層（ソフトローム）が堆積する。

第１遺構面はⅢ層上面で、１区・４区では中世前期の掘立柱建物、柵列、中世後期の火葬墓、田、耕作溝、足跡群等を検出した。第２遺構面はⅣ層上面で、２時期の遺構を検出した。１区・４区で古代の道路遺構、２区では流路の底面上から木製構造物や木製祭祀具集中部を検出した。４区南東区と北区では縄文時代の落とし穴を検出した。

第２節　１区の調査

第１項　基本層序

調査区の東側では耕作土及び造成土が厚さ0.7m程あり、その下に遺物包含層であるＩａ・Ｉｂ層が0.2～0.5mの厚さで堆積する。下層のⅢ層（黒ボク）は西及び北に向かい緩やかに下り、調査区の中央付近から西側は自然流路の堆積となる。東側には２～４区の西側にみられるⅡ層はなく、Ⅲ層（黒ボク）、Ⅳ層（漸移層）、Ⅴ層（ソフトローム）が堆積するが、中央から西側は古代流路で浸食されている。

調査では倉吉市教育委員会試掘トレンチに基づき、遺構検出面を２面確認した。表土・造成土を重機により除去し、Ｉａ・Ｉｂ層は人力と重機を併用して掘削した。Ⅲ層上面の第１遺構面では、中世前期の掘立柱建物５棟、柵列２基、中世後期の火葬墓２基、溝、土坑、柱穴、ピットを検出した。Ⅳ層上面の第２遺構面では、古代の道路、流路のほか、古墳時代以前とみられる土坑、柱穴、ピットを検出した。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、国産陶器、貿易陶磁器、土製品、鉄器、石器、玉類、木製品、鍛冶関連遺物等が出土している。

造成土以下の基本層序は以下の通りである。

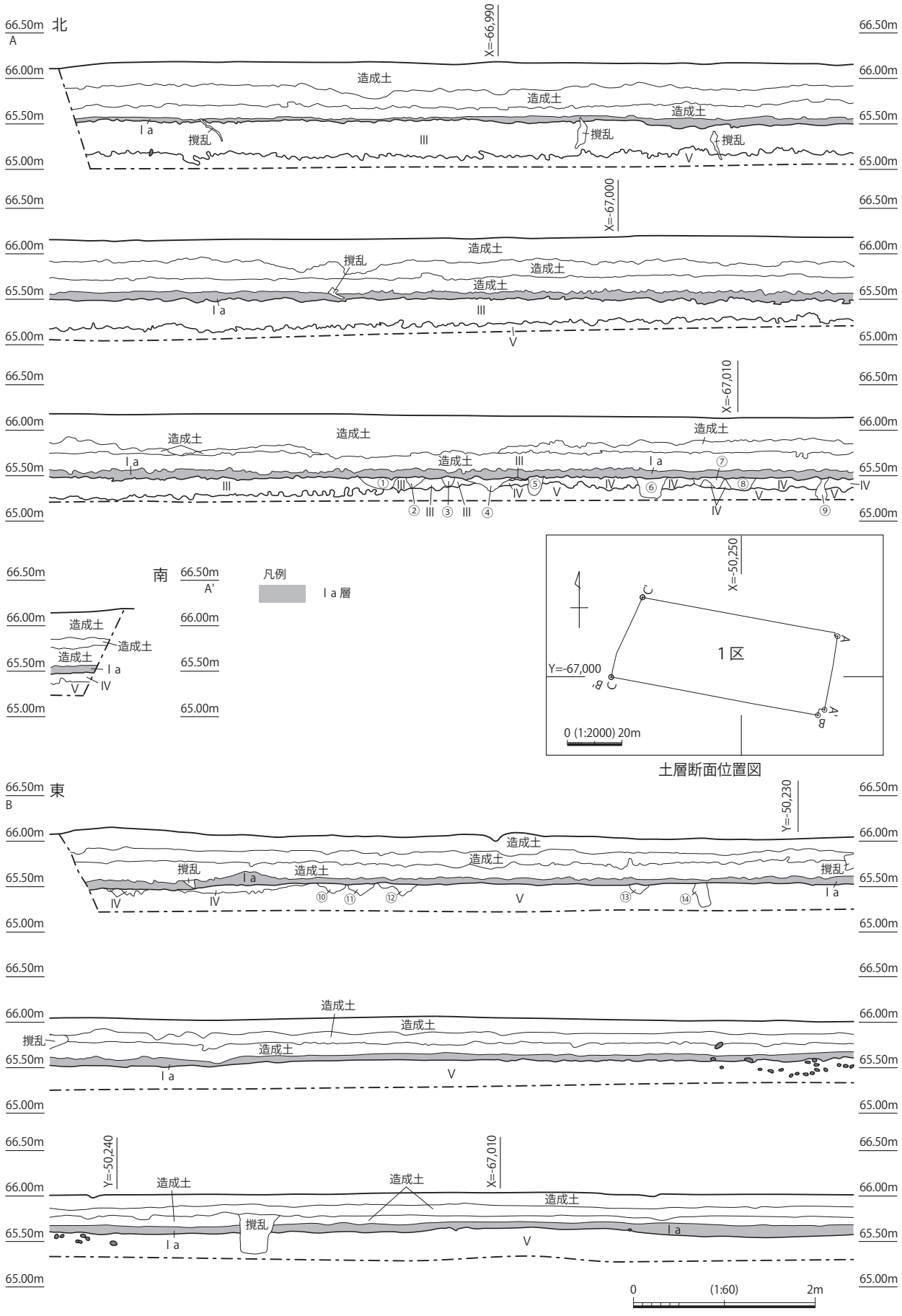
Ｉａ層　調査区の東側に堆積する。褐灰色砂質シルトを母体に、鉄分ブロック、礫、炭化物を含む。遺物は、中世後期から近世前期を含む。

Ｉｂ層　古代流路周辺に堆積する。古代流路埋没後の直上層である。黄灰色砂質シルトを母体とし、鉄分の沈着が顕著である。

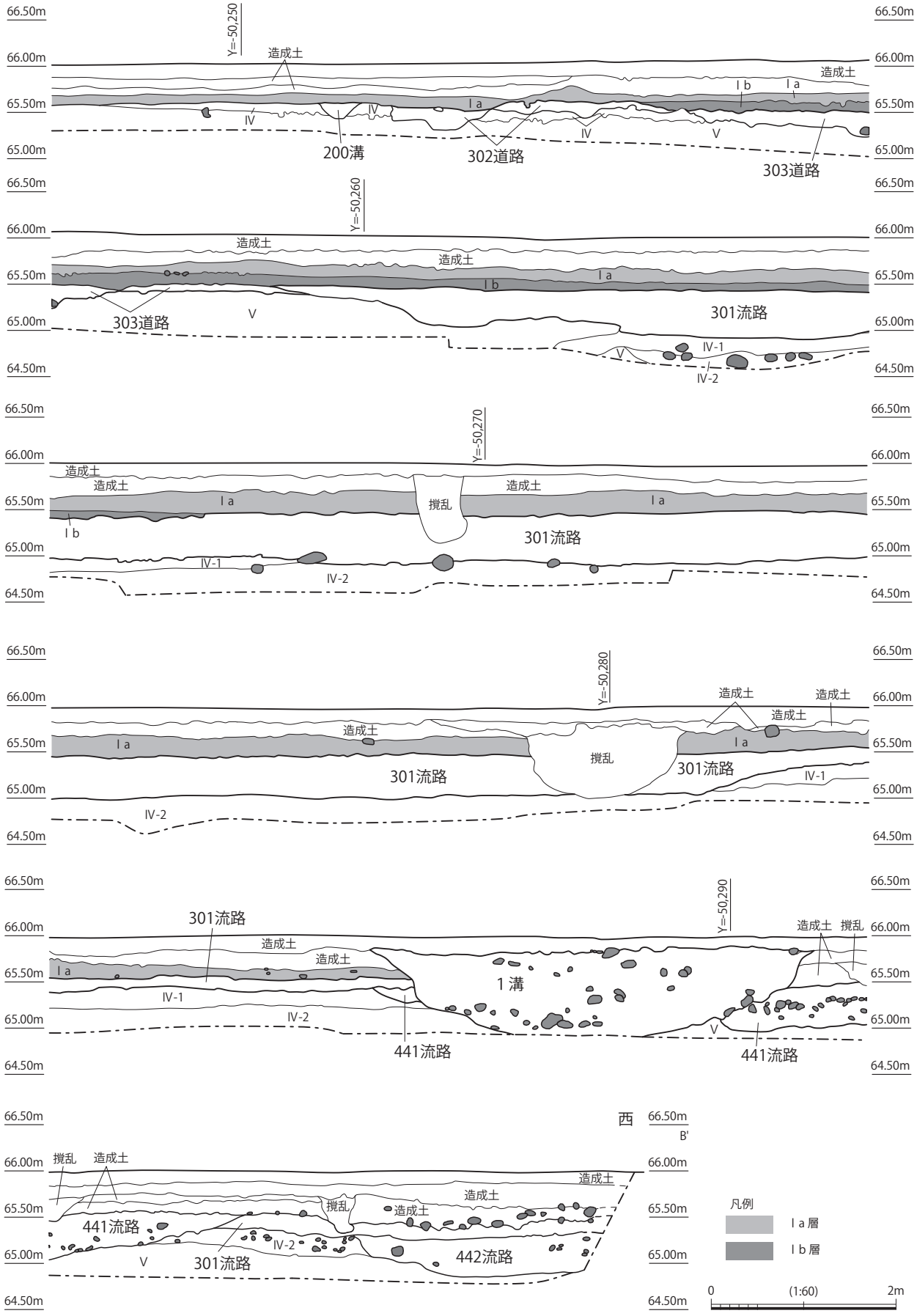
Ⅲ　層　調査区の北東側に堆積する。黒色から黒褐色のシルトを母体とし、遺物を含まない、いわゆる黒ボク層である。部分的に径10cm大までの礫を含む範囲がある。調査区の北東隅では50cm程堆積するが、南側と西側では徐々に薄くなる。上面を第１遺構面としている。標高は65.5m程で、西及び北に向かい緩やかに下る。

Ⅳ　層　古代流路の西側に堆積する。浅黄橙色のシルト層を母体とし、遺物を含まない、いわゆる漸移層である。上面を第２遺構面としている。標高は65.2m程で、西及び北に向かい緩やかに下る。

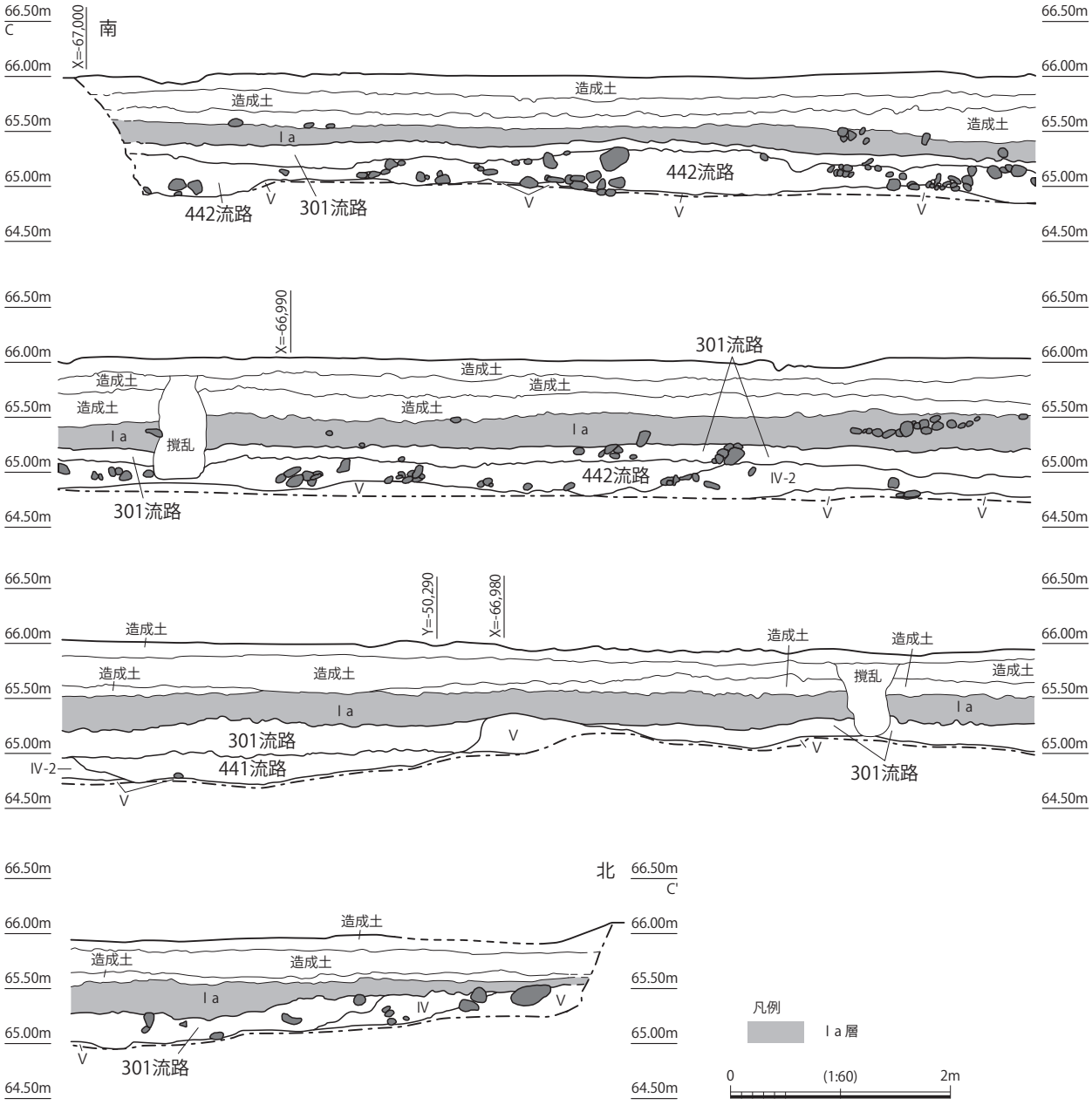
Ⅴ　層　古代流路を除く調査区の全域に堆積する。粘性の強い黄橙色シルト層を母体とし、遺物を含まない。いわゆるソフトロームである。



第 94 図　調査区東壁・南壁（１）土層断面図、土層断面位置図



第 95 図　調査区南壁（２）土層断面図



基本層序

Ⅰa　10YR6/1 褐灰色 砂質シルト (7.5YR6/8橙色 鉄分φ～1cmブロック混　φ～2cm 炭化物混　φ～0.4cm礫混)　粘性中 しまり中（中世後期～近世前期の包含層）

Ⅰb　2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (7.5YR6/8 橙色 鉄分φ～0.5cmブロック混　φ～0.5 cm炭化物混　φ～0.4cm礫混)　粘性中 しまり中（中世前期の包含層）

Ⅲ　2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (10YR7/2 にぶい黄橙色 シルトφ～5cmブロック混　φ～0.3cm炭化物混　φ0.4～5cm礫混)　粘性中 しまり中（黒ボク層 無遺物層）

Ⅳ　2.5Y6/3 にぶい黄色 シルト　粘性中　しまり中

Ⅳ-1　2.5Y6/3 にぶい黄色 シルト (2.5Y8/4 淡黄色 シルトφ～3cmブロック(ホーキ層)混　φ～1cm礫混　炭化物φ～0.5cm少混)　粘性中　しまり中

Ⅳ-2　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (φ～0.5cm礫少混)　粘性やや弱　しまり中

Ⅴ　10YR8/6 黄橙色 シルト　粘性中　しまり中　(ソフトローム　無遺物層)

土坑・ピット

① 2.5Y2/1 黒色 砂質シルトと 10YR7/2 にぶい黄橙色 シルトとの混合土 (φ～0.5cm礫混)　粘性やや弱 しまり中

② 2.5Y2/2 黒褐色 砂質シルト (φ～0.5cm礫混)　粘性やや弱 しまり中

③ 2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト (10YR7/2 にぶい黄橙色 砂質シルトφ～3cmブロック混)　粘性やや弱 しまり中

④ 2.5Y2/2 黒褐色 砂質シルト (10YR7/3 にぶい黄橙色 砂質シルトφ～3cmブロック少混)　粘性やや弱 しまり中

⑤ 10YR6/2 灰黄褐色 シルト (10YR7/3 にぶい黄橙色 砂質シルトφ～2cmブロック多混)　粘性やや弱　しまり弱

⑥ 2.5Y6/2 灰黄色 砂質シルトと 2.5Y2/1 黒色 砂質シルトとの混合土 (φ～0.5cm礫混)　粘性やや弱　しまり中

⑦ 2.5Y2/1 黒色 砂質シルト (10YR7/3 にぶい黄橙色 シルトφ～10cmブロック少混 φ～0.5cm礫多混)　粘性やや弱　しまり中

⑧ 2.5Y7/3 浅黄色 砂質シルト (φ～0.5cm礫多混)　粘性やや弱 しまり中

⑨ 2.5Y6/2 灰黄色 砂質シルト (φ～0.5cm礫混)　粘性やや弱 しまり中

⑩ 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルトと 2.5Y7/3 浅黄色 砂質シルトとの混合土 (φ～5cmブロック状)　粘性やや弱 しまり中

⑪ 10YR2/1 黒色 砂質シルト (10YR7/3 にぶい黄橙色 砂質シルトφ～5cmブロック混)　粘性中 しまり中

⑫ 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (2.5Y7/3 浅黄色 砂質シルトφ～3cmブロック混　φ～0.5cm礫少混)　粘性やや弱 しまり中

⑬ 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (φ～0.5cm炭化物混　φ～0.5cm礫混)　粘性やや弱 しまり中

⑭ 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (φ～0.5cm炭化物混　φ～0.5cm礫少混)　粘性やや弱 しまり中

第 96 図　調査区西壁土層断面図、土色注記

第２項　第１遺構面の調査（中世の遺構と遺物）

調査区は南北約 30m、東西約 80mの範囲である。標高 65.5m 前後のほぼ水平な地形で、西側は 301 流路に向かい緩やかに下がる。田畑の耕作のため、南東側はⅤ層（ソフトローム）上面まで掘削が及んでいた。調査区の西側は流路の堆積で、Ⅲ層（黒ボク）は調査区の東側で検出した。遺構の埋土は褐灰色～黄灰色シルトを主体とする。遺構を検出したのは、Ⅲ層（黒ボク）の上面である。

遺構が集中するのは調査区の東側で、第１遺構面で中世前期の掘立柱建物５棟、建物に伴う柵列２基、中世後期の火葬墓２基を調査した。ほか、鎌倉時代以降の溝４条、土坑６基、単独の柱穴 31 基、単独のピット 113 基を調査した。以下、個々の遺構について記述する。

（1）掘立柱建物

掘立柱建物 1 （第 97 ～ 100 図、第 29・30・37 表、図版 50・142）

１区東側中央 7a-10C-10c・10d グリッドにおいて検出した。本遺構は、63 ～ 74 柱穴によって構成される。桁行３間（7.3m）、梁行２間（3.9m）の南北棟の総柱建物である。主軸は N-14° -E をとり、平面積は 28.5㎡を測る。

柱穴の平面形は概ね円形で、長軸の平均は 0.20m、短軸の平均は 0.17mである。柱穴の深さは深い柱穴が 0.43m、浅い柱穴は 0.03mで差が大きい。平均は 0.25mである。以下、各々の柱穴について記述する。

63 柱穴（第 98・99 図、第 30 表）

建物の北東隅にある。平面形は不整な円形、断面形はＵ字形である。底面中央やや北側に、やや硬化し、汚濁した柱のあたりがある。規模は長軸 0.19m、短軸 0.18m、検出面からの深さ 0.14mを測る。埋土は２層に分けられる。柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は出土していない。

64 柱穴（第 98・99 図、第 30 表）

建物東辺の北寄りにある。平面形は円形、断面形は先の丸いＶ字形で、底面に硬化した柱のあたりがある。規模は長軸 0.12m、短軸 0.11m、検出面からの深さ 0.22mを測る。埋土は２層に分けられる。柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は出土していない。

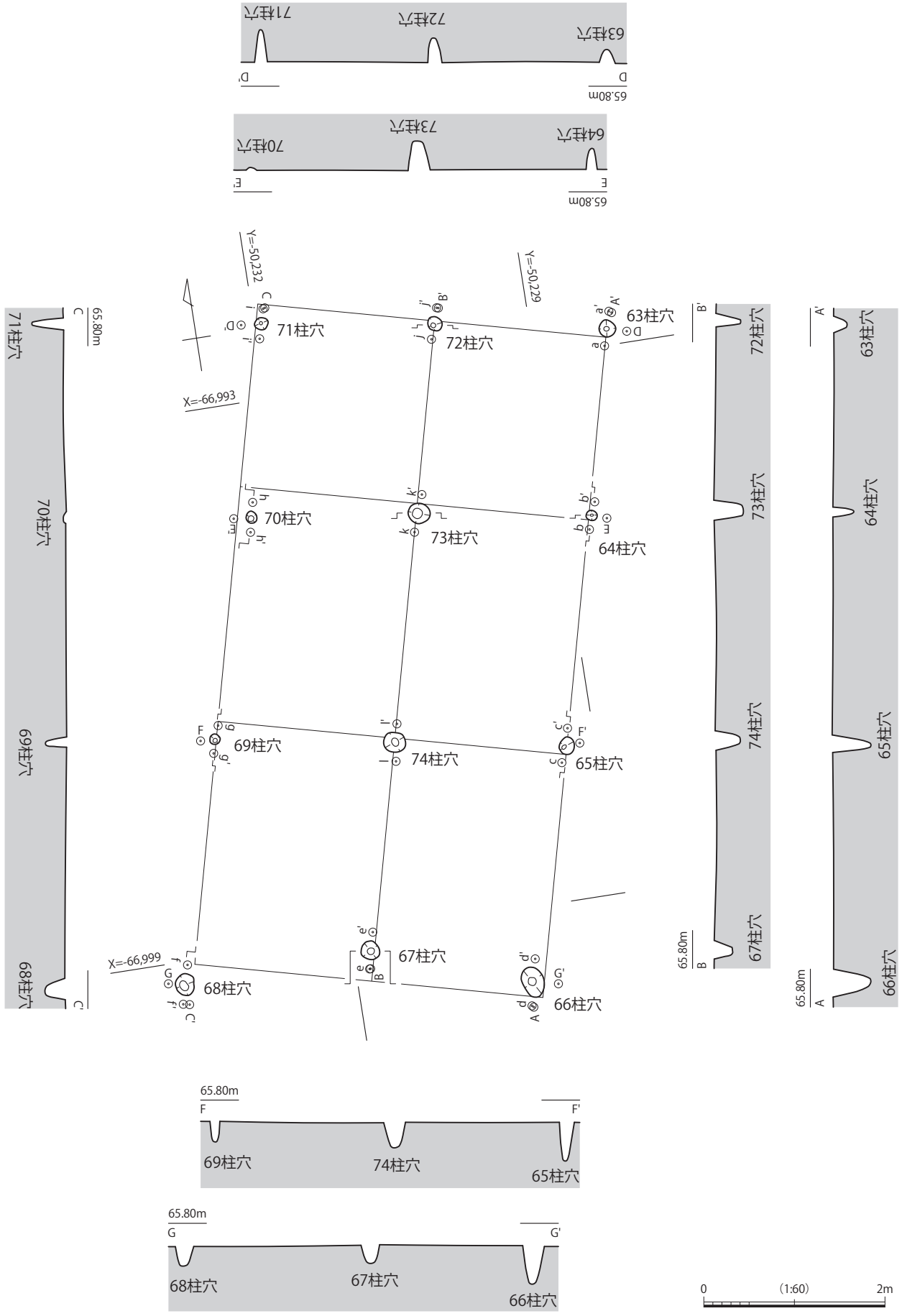
65 柱穴（第 98・99 図、第 30 表）

建物東辺の南寄りにある。平面形は不整な円形、断面形は深いＵ字状である。底面の北側に、やや硬化した柱のあたりがある。規模は長軸 0.19m、短軸 0.17m、検出面からの深さ 0.43mを測る。埋土は５層に分けられる。柱痕とみられる２・３層、掘方埋め土の４・５層が堆積する。柱痕は検出面まで立ち上がらず、途中で折り取られたと考えられる。遺物は土師器片が出土したものの、小片で図化していない。

66 柱穴（第 98・99 図、第 30 表）

建物の南東隅にある。平面形は不整な楕円形、断面形は不整なＵ字形で、検出面での径は大きいが、

第 97 図　第 1 遺構面全体図


71柱穴
72柱穴
63柱穴
65.80m
D'
D
70柱穴
73柱穴
64柱穴
E'
E
Y=-50,232
Y=-50,229
X=-66,993
X=-66,999
71柱穴
72柱穴
63柱穴
70柱穴
73柱穴
64柱穴
69柱穴
74柱穴
65柱穴
68柱穴
67柱穴
66柱穴
A
A'
B
B'
C
C'
F
F'
G
G'
0
(1:60)
2m

第 98 図　掘立柱建物 1

下に向けてすぼまる。底面は柱のあたりとみられる、やや硬化した箇所がある。規模は長軸 0.34m、短軸 0.24m、検出面からの深さ 0.43m を測る。埋土は６層に分けられる。柱痕はない。遺物は土師器片が出土したものの、小片で図化していない。

67 柱穴（第 98・99 図、第 30 表）

建物南辺の中間にあるが、柱通りから 0.3m 建物の内側に入る。平面形は不整な円形、断面形は不整な逆台形である。底面南側には柱のあたりとみられるやや硬化した箇所がある。規模は長軸 0.21m、短軸 0.20m、検出面からの深さ 0.18m を測る。埋土は３層に分けられる。柱痕はない。遺物は出土していない。

68 柱穴（第 98・99 図、第 30 表、図版 50）

建物の南西隅にある。平面形は不整な円形、断面形は南側の深い不整な袋形で、深い底部はやや硬化しており、柱のあたりとみられる。規模は長軸 0.24m、短軸 0.21m、検出面からの深さ 0.21m を測る。埋土は４層に分けられる。柱痕はない。遺物は出土していない。

69 柱穴（第 98・100 図、第 30 表）

建物西辺の南側にある。平面形は不整な円形、断面形は細い長方形で、径に比べて比較的深い。底面南側はやや硬化しており、柱のあたりとみられる。規模は長軸 0.11m、短軸 0.11m、検出面からの深さ 0.22m を測る。埋土は２層に分けられる。柱痕はない。遺物は出土していない。

70 柱穴（第 98・100 図、第 30 表）

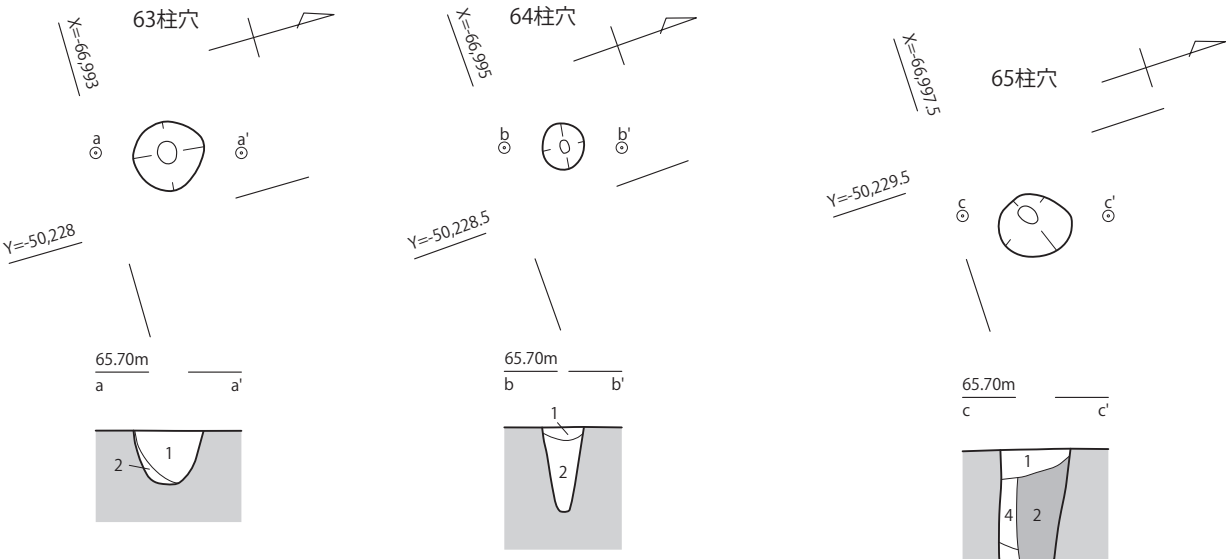
建物の西辺の北側にある。平面形は不整な円形、断面形は皿状で浅い。規模は長軸 0.13m、短軸 0.12m、検出面からの深さは 0.03m で、他の柱穴より浅い。埋土は単層である。遺物は出土していない。

71 柱穴（第 98・100 図、第 30 表）

建物の北西隅にある。平面形は円形、断面形は深いＵ字形である。底面中央に、柱のあたりとみられるやや硬化した箇所がある。規模は長軸 0.15m、短軸 0.14m、検出面からの深さ 0.37m を測る。埋土は３層に分けられる。２層は柱痕、３層は掘方埋め土で、途中で折り取られたと考える。遺物は出土していない。

72 柱穴（第 98・100 図、第 30 表）

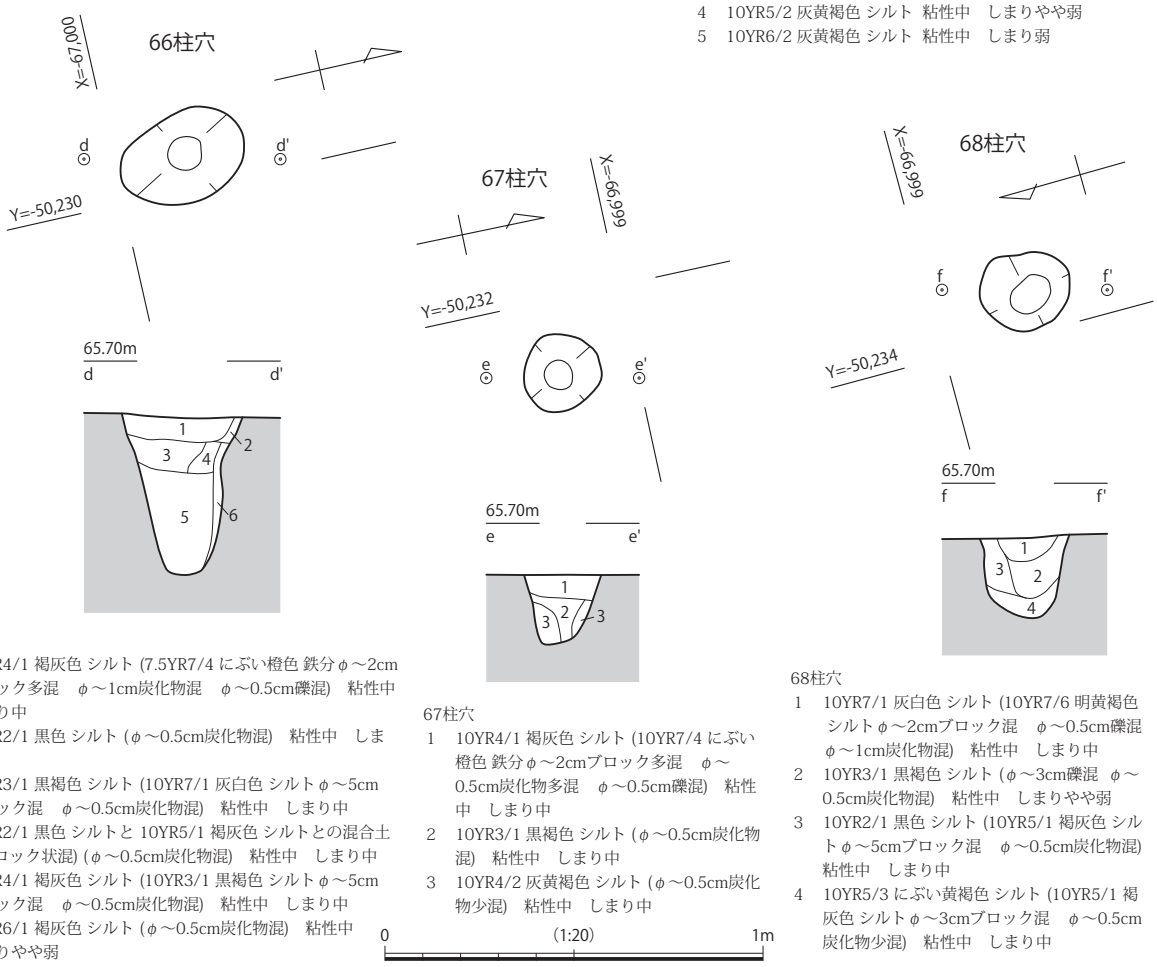
建物の北辺の中間にある。平面形は不整な円形、断面形はやや深い不整な袋形である。規模は長軸 0.17m、短軸 0.15m、検出面からの深さ 0.27m を測る。埋土は２層に分けられる。柱痕ではなく、抜き取り痕跡と考えられる。遺物は出土していない。



63柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR4/6 褐色 鉄分 φ～2cmブロック多混　φ～0.5cm炭化物混) 粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR4/1 褐灰色 シルトφ～3cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中

64柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック混　10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR4/1 褐灰色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中

65柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 シルト (7.5YR にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック多混　φ0.3～0.5cm礫混　φ～0.5cm炭化物混) 粘性中　しまり中
2　10YR4/1 褐灰色 シルト　粘性中　しまりやや弱
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR7/2 にぶい黄橙色 シルト φ～1cmブロック混)　粘性中　しまり弱
4　10YR5/2 灰黄褐色 シルト 粘性中　しまりやや弱
5　10YR6/2 灰黄褐色 シルト 粘性中　しまり弱

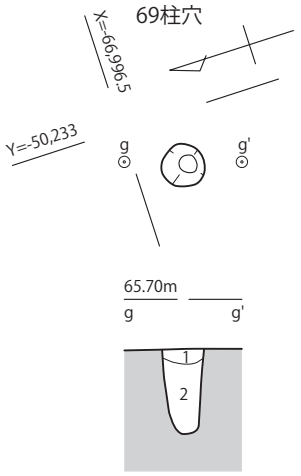


66柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック多混　φ～1cm炭化物混　φ～0.5cm礫混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～5cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　10YR2/1 黒色 シルトと 10YR5/1 褐灰色 シルトとの混合土 (ブロック状混) (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
5　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ～5cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
6　10YR6/1 褐灰色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや弱

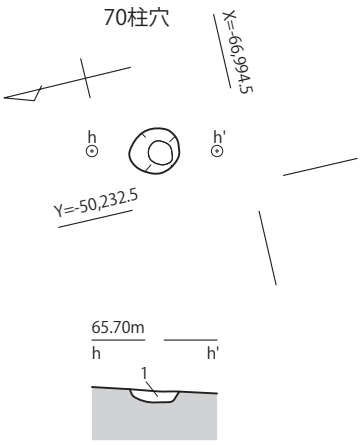
67柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック多混　φ～0.5cm炭化物多混　φ～0.5cm礫混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR4/2 灰黄褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物少混)　粘性中　しまり中

68柱穴
1　10YR7/1 灰白色 シルト (10YR7/6 明黄褐色 シルトφ～2cmブロック混　φ～0.5cm礫混 φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (φ～3cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや弱
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR5/1 褐灰色 シルトφ～5cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混) 粘性中　しまり中
4　10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト (10YR5/1 褐灰色 シルトφ～3cmブロック混　φ～0.5cm炭化物少混)　粘性中　しまり中

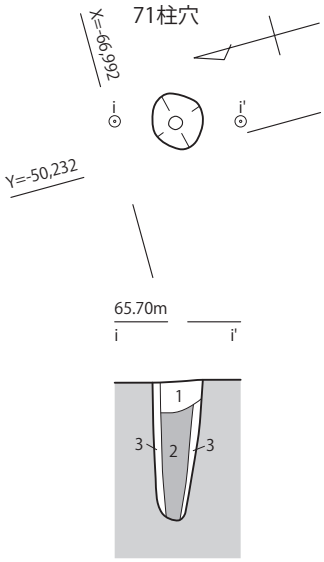
第 99 図　掘立柱建物 1　63 ～ 68 柱穴



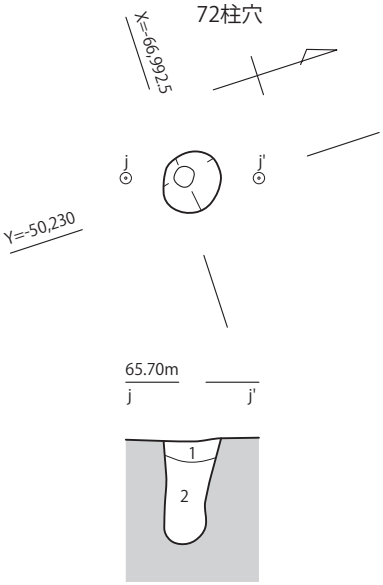
69柱穴
1　7.5YR6/3 にぶい褐灰色 シルト
(10YR5/1 褐灰色 シルトφ～3cmブロック混
φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR4/1 褐灰色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)
粘性中　しまり中



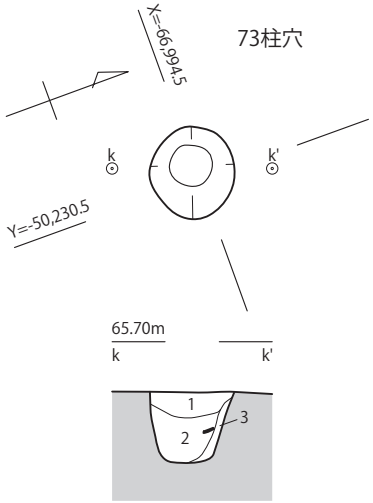
70柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト
(7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック混
φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中



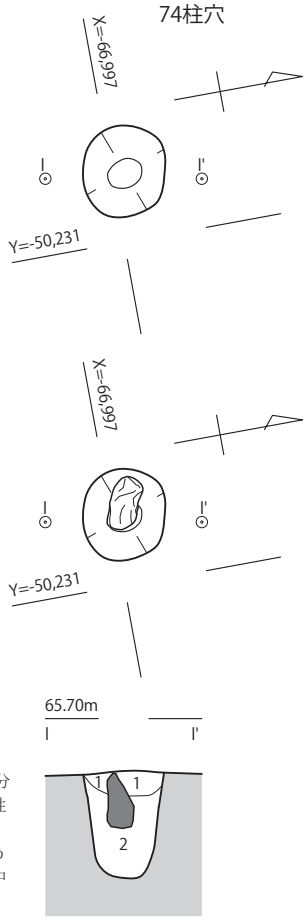
71柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 シルト (10YR7/6 明黄褐色 鉄分
φ～5cmブロック多混　φ～3cm礫混
φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや強
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物少混)
粘性中　しまり中
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR5/1 褐灰色 シルト
φ～1cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)
粘性中　しまり中



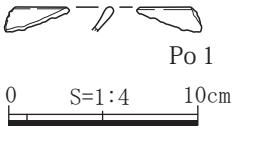
72柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4
にぶい橙色 シルト)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (φ～0.5cm
炭化物少混)　粘性中　しまり中

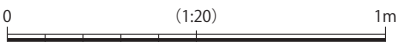


73柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 シルト (7.5YR4/6 褐色 鉄分φ～2cm
ブロック多混　φ～3cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)
粘性中　しまり中
2　10YR4/1 褐灰色 シルト (φ～0.5cm炭化物混　土器片
混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR5/1 褐灰白色 シルトφ
～3cmブロック混)　粘性中　しまりやや弱



74柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色鉄分
φ～2cmブロック多混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性
中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR6/1 褐灰色 シルトφ
～2cmブロック少混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中
しまりやや弱





第 100 図　掘立柱建物 1　69 ～ 74 柱穴、73 柱穴出土土器

73 柱穴（第 98・100 図、第 30・69 表、図版 50・142）

建物中央の北寄りにある。平面形は不整な円形、断面形はやや不整な逆台形である。規模は長軸 0.25m、短軸 0.23m、検出面からの深さ 0.19ｍを測る。埋土は３層に分けられる。抜き取り痕跡と考えられる。遺物は埋土から土師器の坏 Po１が出土した。内外面とも横方向のナデである。

74 柱穴（第 98・100 図、第 30 表、図版 50）

建物中央の南寄りにある。平面形は不整な円形、断面形はやや深いＵ字形である。規模は長軸 0.24m、短軸 0.22m、検出面からの深さ 0.29ｍを測る。埋土は２層に分けられる。中位から径８～ 15cm 程の角礫が出土した。掘方の中央から尖る面を上にしているため、周囲または使用されていた礫を埋め戻したと考えられる。遺物は土師器片が出土したものの、小片で図化していない。

掘立柱建物２（第 97・101 ～ 106 図、第 29・30・37 表、図版 50 ～ 53・56・142）

１区東側中央 8a-1C-1d・1e グリッドにおいて検出した。本遺構は、129・130・158 ～ 170 柱穴によって構成される。桁行４間（8.0m）、梁行２間（5.6m）の東西棟の総柱建物である。主軸は N-68° -W をとり、平面積は 44.8㎡を測る。周辺の建物の中では最も大型である。

柱穴の平面形は概ね円形で、長軸の平均は 0.43m、短軸の平均は 0.39ｍである。柱穴の深さは深い柱穴が 0.70m、浅い柱穴は 0.39m、平均の深さは 0.55ｍである。柱穴には底面にあたり痕をもつものが多く、同じ位置で礎盤石や根石を用いて建て替えられた痕跡をもつものがある。以下、各々の柱穴について記述する。

166 柱穴（第 101・102 図、第 30・69 表、図版 52・142）

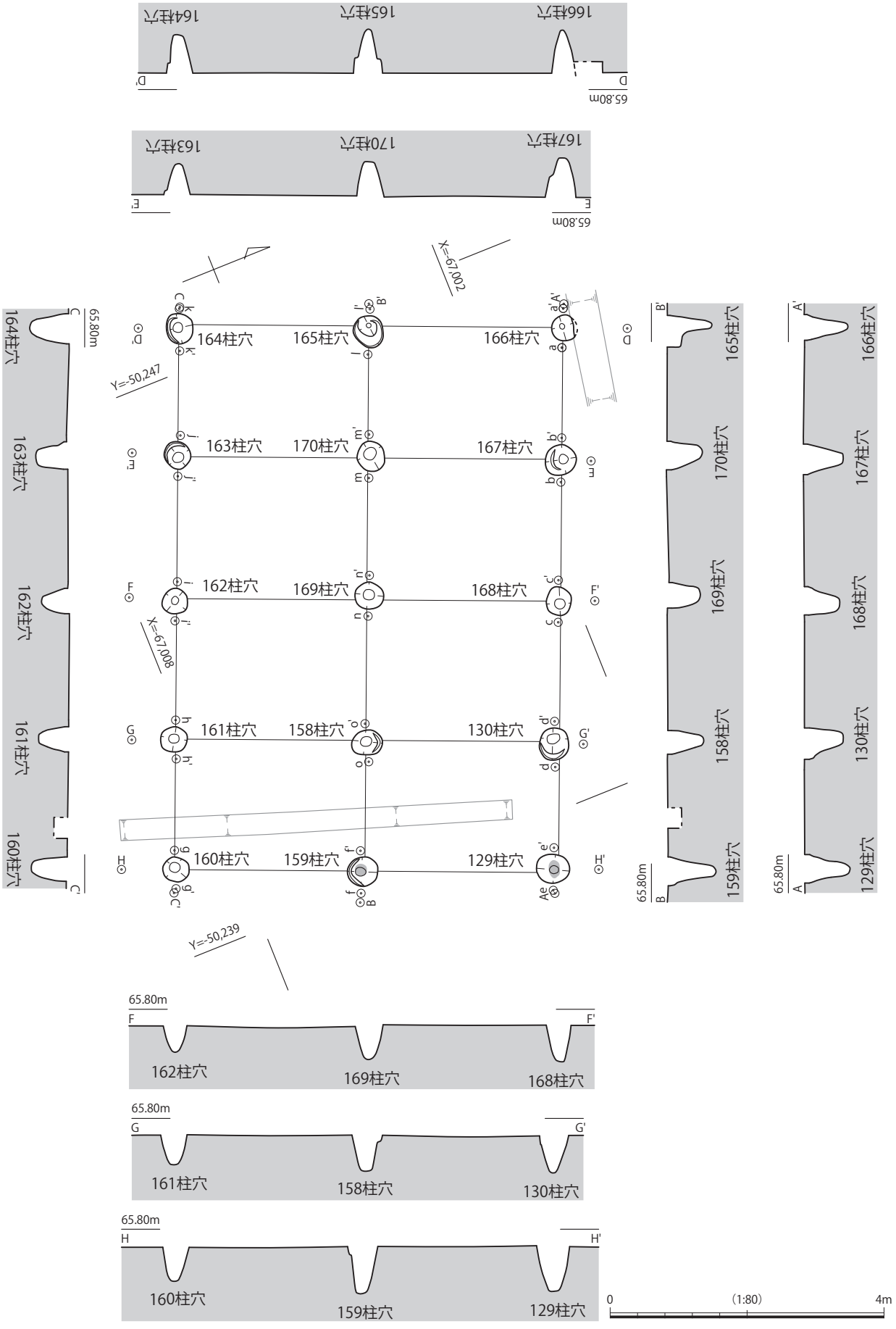
建物の北西隅にある。平面形は不整な円形、断面形は先の丸いＶ字形である。規模は長軸 0.37m、残存する短軸 0.33m、検出面からの深さ 0.63ｍを測る。埋土は８層に分けられる。１～３層から径８～ 25cmの扁平な礫が複数出土した。４層は柱痕で５～８層は水平方向に堆積するため、掘方埋め土と考えられる。１～３層と扁平な礫は、折り取った柱の埋め土である。下位の小礫は固め石とみられることから、上位の礫は建て替え後の礎盤石と考えられる。遺物は掘り下げ中に手づくね土師器の皿口縁部 Po２が出土した。口縁部が外反し口径は大きい。14 世紀代の所産と考えられる。

167 柱穴（第 101・102 図、第 30 表）

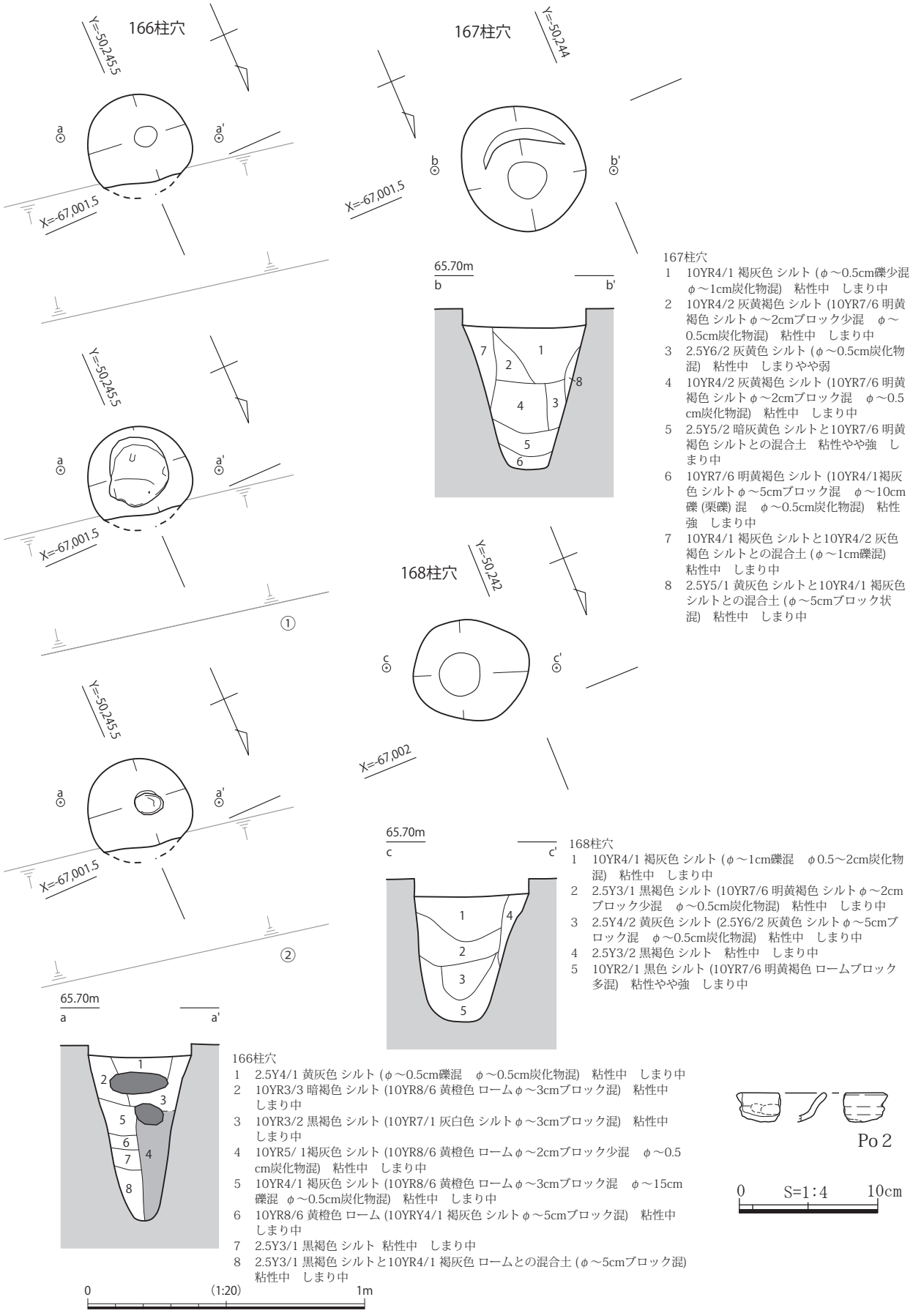
建物北辺中間の西寄りにある。平面形は不整な円形、断面形は深い逆台形である。規模は長軸 0.47m、短軸 0.44m、検出面からの深さ 0.58ｍを測る。埋土は８層に分けられる。５・６層が礫を含む混合土であるため、柱を据えるための掘方埋め土と考えられる。また６層下の底面に柱のあたりとみられる、やや硬く表面が汚濁する面があり、建て替え前の柱のあたりと考えられる。１～４層は建て替え後の柱の抜き取り痕跡であろう。遺物は出土していない。

168 柱穴（第 101・102 図、第 30 表）

建物北辺の中間にある。平面形は不整な円形、断面形は東側に屈曲部をもつ不整なＵ字形である。規模は長軸 0.40m、短軸 0.36m、検出面からの深さ 0.53ｍを測る。埋土は５層に分けられる。２・



第 101 図　掘立柱建物２



第 102 図　掘立柱建物２　166 ～ 168 柱穴、166 柱穴出土土器

５層にＶ層由来のブロックを含む。底面西際に柱のあたりとみられるやや硬化し、表面の汚濁した箇所がある。遺物は土師器片が出土したものの、小片で図化していない。

130 柱穴（第 101・103 図、第 30 表、図版 52）

建物北辺中間の東寄りにある。平面形は不整な円形、断面形は東側に段をもつ不整なＵ字形である。規模は長軸 0.47m、短軸 0.42m、検出面からの深さ 0.56ｍを測る。埋土は７層に分けられる。底面付近は確認できていない。１～４層から円礫が出土しており、抜き取り痕跡と考えられる。５～７層は掘方埋め土の可能性があるが明瞭ではない。遺物は出土していない。

129 柱穴（第 101・103 図、第 30 表、図版 51）

建物の北東隅にある。平面形は不整な円形、断面形は中位から細くなる、先の丸いＶ字形である。規模は長軸 0.49m、短軸 0.42m、検出面からの深さ 0.66ｍを測る。埋土は７層に分けたが、底面付近は確認できていない。検出後の段下げの際に１～３層の径 0.15 ～ 0.26ｍで柱痕が認められた。柱痕をとりまく４～７層では径７～ 16cmの礫が複数あり、礫の上面に柱痕が接している。そのため、建て替え前の掘方から柱を抜き取り、根石を据えた後に建て替え後の柱を建てたと考えられる。遺物は出土していない。

159 柱穴（第 101・103 図、第 30・69 表、図版 52・142）

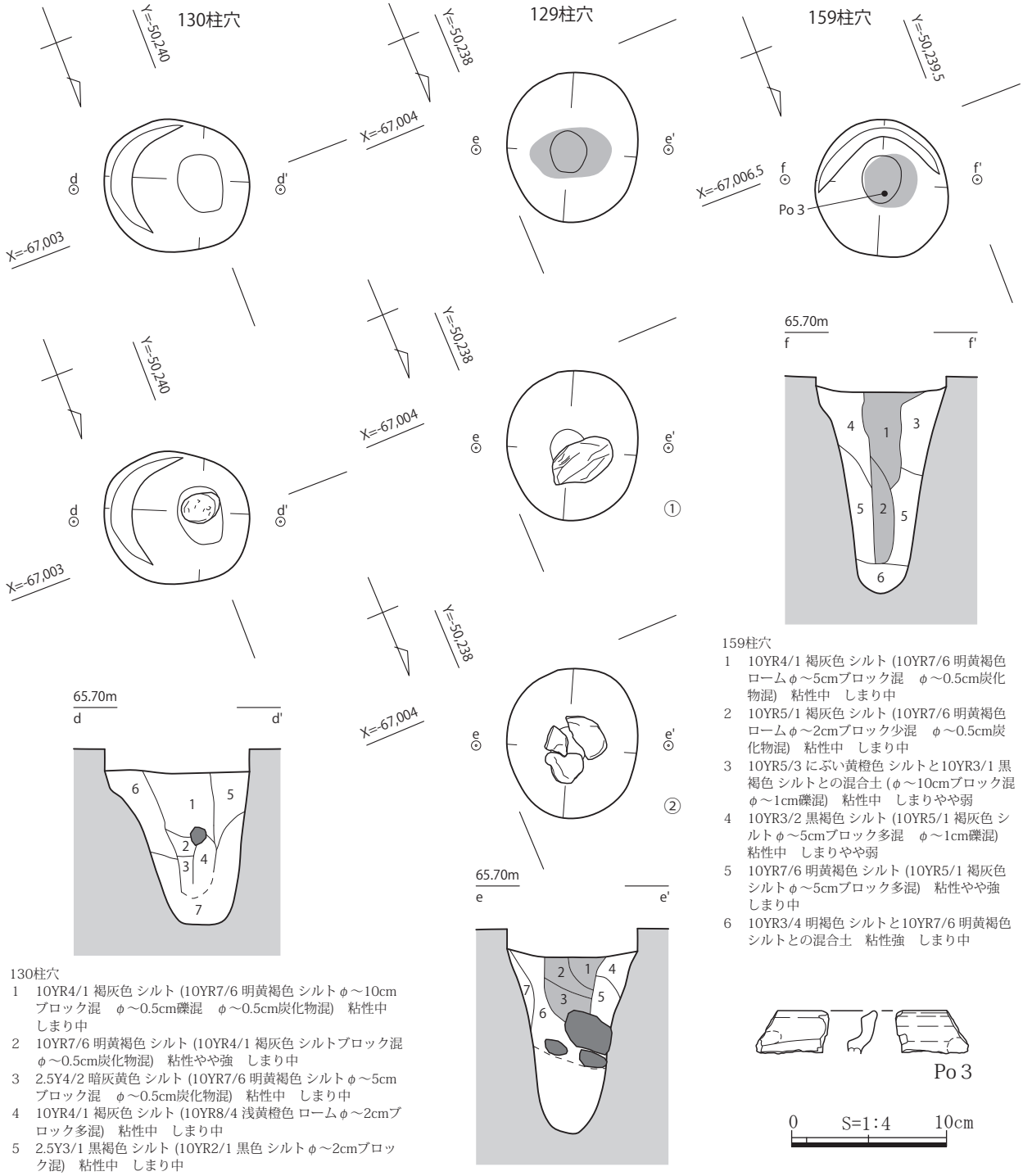
建物東辺の中間にある。平面形は不整な円形、断面形は先の丸いＶ字形である。規模は長軸 0.44m、短軸 0.43m、検出面からの深さ 0.70ｍを測る。埋土は６層に分けられる。検出後の段下げで、柱痕とみられる１・２層を検出した。１層と２層は不整合で、１層から遺物が出土していることから、当初の柱の痕跡は２層のみで、１層は折り取られた痕跡と考えられる。２層の底面で柱のあたりを検出した。３～６層は掘方埋め土である。遺物は埋土から瓦質土器の鍋 Po３が出土した。口縁部の立ち上がりが短く、外側の段が緩いことから、14 世紀の所産と考えられる。掘立柱建物の廃絶に伴う遺物と考えられる。

160 柱穴（第 101・104 図、第 30 表）

建物の南東隅にある。平面形は不整な円形、断面形は深いＵ字状である。規模は長軸 0.38m、短軸 0.34m、検出面からの深さ 0.52ｍを測る。埋土は５層に分けられる。５層下の底面中央には柱のあたりとみられ、やや硬化する。５層には径５cmまでの小礫が含まれることから柱は建て替えられ、２・３層は建て替え後の柱痕、４・５層は建て替え段階の掘方埋め土で、柱は折り取られたと考えられる。遺物は出土していない。

161 柱穴（第 101・104 図、第 30 表、図版 51）

建物南辺中間の東寄りにある。平面形は不整な円形、断面形は深い逆台形である。規模は長軸 0.39m、短軸 0.38m、検出面からの深さ 0.44ｍを測る。埋土は２層に分層したが、底面付近は確認していない。１層から径 10 ～ 18cmの礫が２点出土した。上位の礫は水平面ではあるが、柱痕は不明瞭である。遺物は礫の横から炭化物が出土したため、放射性炭素年代測定（試料 28）を行った（第



第 103 図　掘立柱建物２　129・130・159 柱穴、159 柱穴出土土器

５章第３節）ところ、calAD1307-1363（暦年較正２σの確率１位）の値が得られている。掘立柱建物２を構成する 166 柱穴の Po ２、159 柱穴の Po ３は概ね 14 世紀代の所産であり、年代は概ね調和している。

162 柱穴（第 101・104 図、第 30 表、図版 51）

建物の南辺中間にある。平面形は不整な円形、断面形は先の細い不整なＵ字形である。規模は長軸 0.38m、短軸 0.37m、検出面からの深さ 0.39ｍを測る。埋土は２層に分けられたが、底面付近は確認していない。径５～ 17cmの礫が多数出土し、周囲または柱の抜き取り後に戻された礫と考えられる。遺物は出土していない。

163 柱穴（第 101・105 図、第 30 表）

建物南辺中間の西寄りにある。平面形は不整な円形、断面形は西側に段をもつ長方形である。規模は長軸 0.40m、短軸 0.37m、検出面からの深さ 0.46ｍを測る。埋土は６層に分けられる。６層下の底面中央付近は柱のあたり痕とみられる、やや硬化した箇所がある。１・２層は柱抜き取り痕跡で、１層から径５～ 18cmの礫２点が出土した。上位は円礫、下位は角礫である。柱の抜き取り後に戻された礫と考えられる。遺物は出土していない。

164 柱穴（第 101・105 図、第 30 表、図版 53）

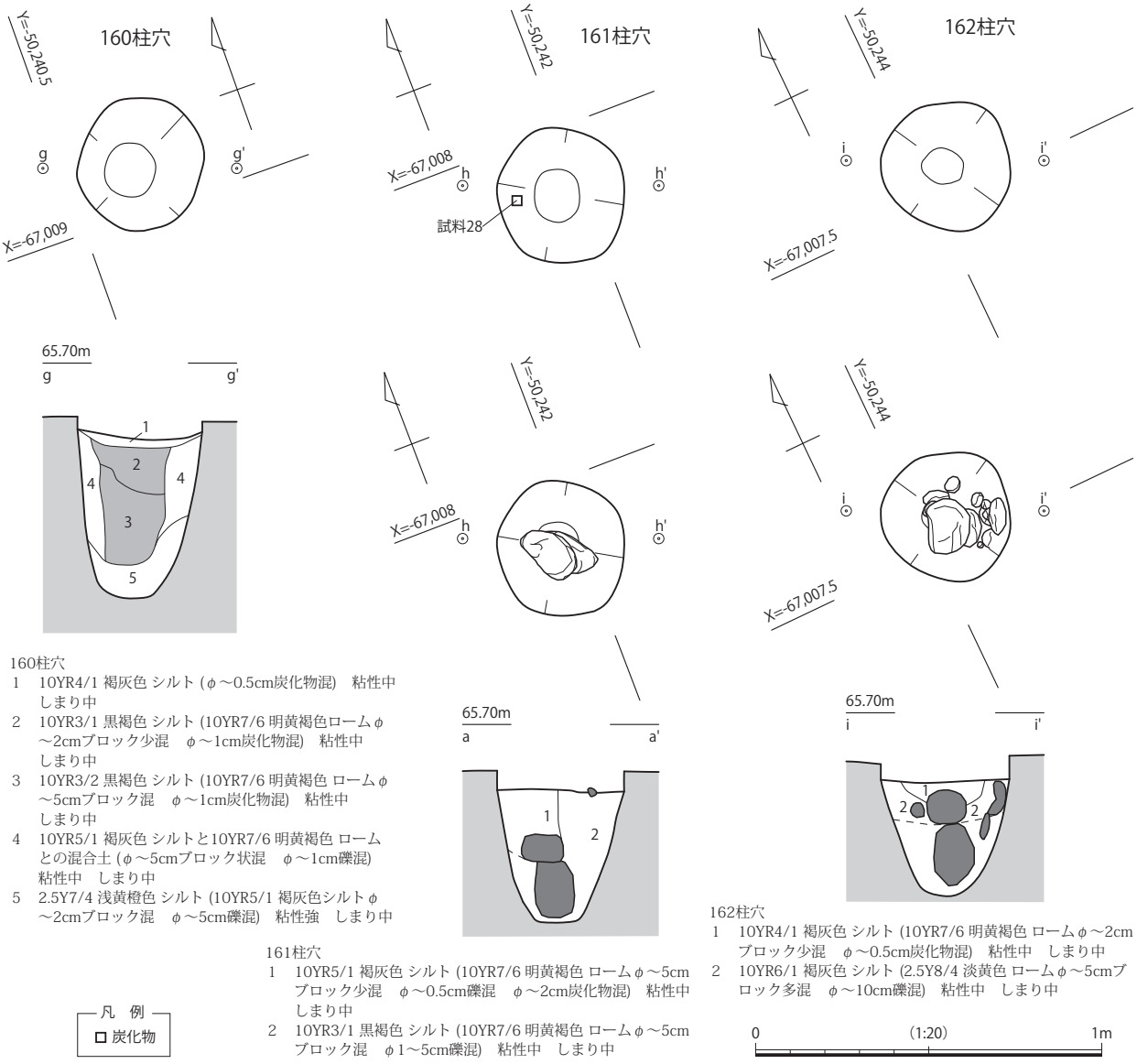
建物西辺中間の東寄りにある。平面形は不整な円形、断面形は不整なＵ字形である。規模は長軸 0.44m、短軸 0.39m、検出面からの深さ 0.58ｍを測る。埋土は５層に分けられたが、底面付近は確認していない。底面には柱のあたりとみられるやや硬化した箇所がある。埋土中位から径 10 ～ 21cmの礫が２点出土した。礫から下の堆積は不明瞭ではあるが、底面はさらに深く、下位の円礫は建て替えの際の根石、上位の角礫は抜き取り後に入れられたと考えられる。遺物は土師器片が出土したものの、小片で図化していない。

165 柱穴（第 101・105 図、第 30 表）

建物西辺の中間にある。平面形は不整な楕円形、断面形は東側に段をもつ、先の丸いＶ字形である。規模は長軸 0.48m、短軸 0.43m、検出面からの深さ 0.65ｍを測る。埋土は６層に分けられる。底面は柱のあたりにより、やや硬化する。５層は柱痕で、１～４層は抜き取りの掘方と考えられる。遺物は出土していない。

170 柱穴（第 101・105 図、第 30 表）

建物の中央西寄りにある。平面形は円形、断面形は不整なＵ字形である。規模は長軸 0.45m、短軸 0.40m、検出面からの深さ 0.52ｍを測る。埋土は６層に分けられる。６層下の底面中央はやや硬化し、表面が汚濁しており、柱のあたり痕がある。明瞭ではないが、１層は建て替え後の柱痕とも考えられる。遺物は出土していない。



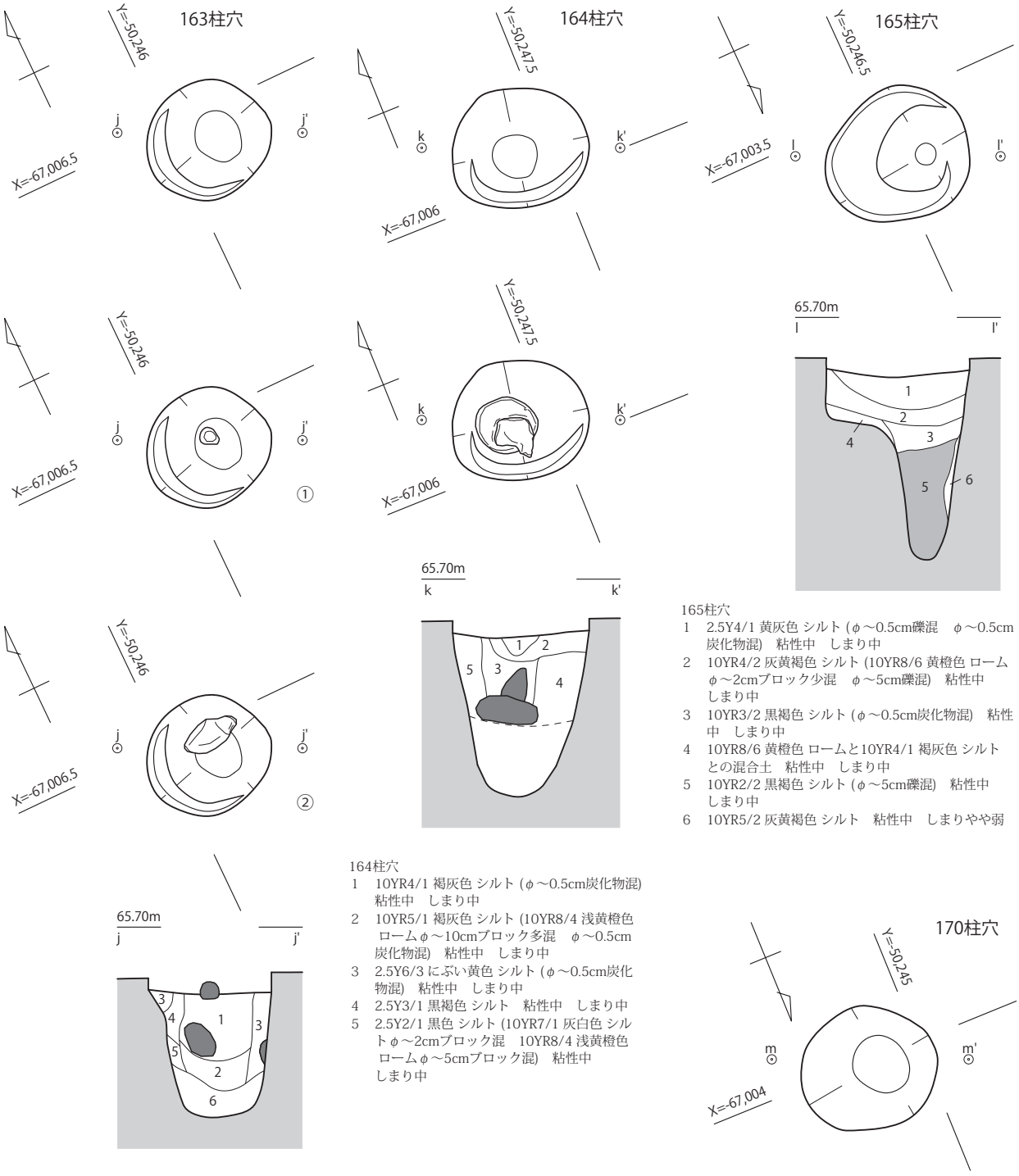
第 104 図　掘立柱建物２　160 ～ 162 柱穴

169 柱穴（第 101・106 図、第 30 表、図版 53）

建物の中央にある。平面形は円形、断面形は不整なＵ字形である。規模は長軸 0.42m、短軸 0.38m、検出面からの深さ 0.47m を測る。埋土は６層に分けられる。底面に柱のあたりとみられるやや硬化した箇所があり、底面から浮いた状態で径 10 ～ 13cm の円礫が出土していることから、柱の抜き取りに伴い、礫を含めて埋め戻されたと考えられる。遺物は土師器片が出土したものの、体部片のため図化していない。

158 柱穴（第 101・106 図、第 30 表、図版 52）

建物中央東寄りにある。平面形は楕円形、断面形は先の細いＵ字形である。規模は長軸 0.44m、短軸 0.36m、検出面からの深さ 0.53m を測る。埋土は４層に分けられたが、底部付近は確認していない。径 10 ～ 21cm の角礫が複数出土した。柱抜き取り後に周囲または使用されていた礫を埋め戻したと考えられる。遺物は土師器片が出土したものの、体部片のため図化していない。



165柱穴
1　2.5Y4/1 黄灰色 シルト (φ～0.5cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR4/2 灰黄褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 ロームφ～2cmブロック少混　φ～5cm礫混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/2 黒褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　10YR8/6 黄橙色 ロームと10YR4/1 褐灰色 シルトとの混合土　粘性中　しまり中
5　10YR2/2 黒褐色 シルト (φ～5cm礫混)　粘性中　しまり中
6　10YR5/2 灰黄褐色 シルト　粘性中　しまりやや弱

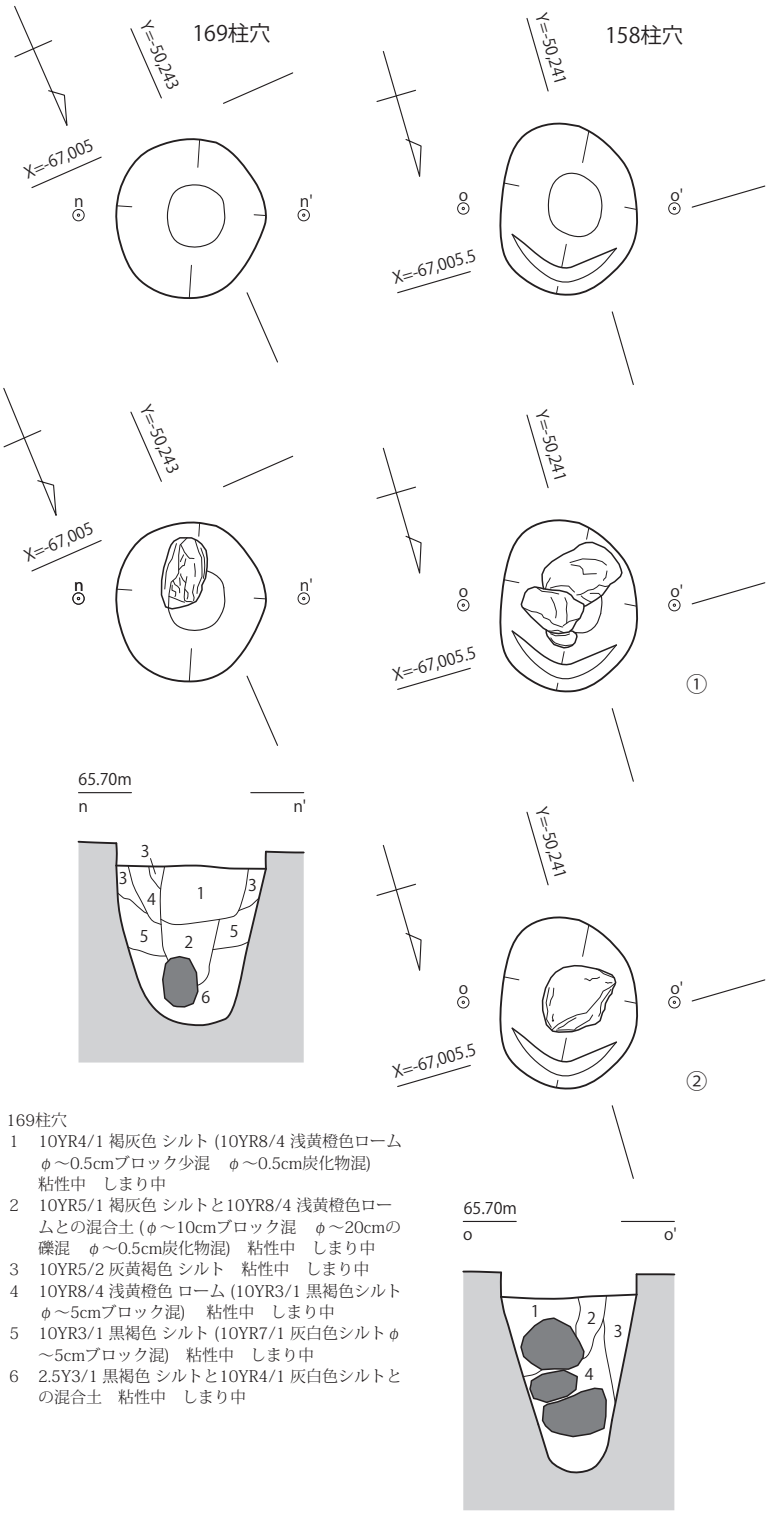
164柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR5/1 褐灰色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 ロームφ～10cmブロック多混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　2.5Y6/3 にぶい黄色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　2.5Y3/1 黒褐色 シルト　粘性中　しまり中
5　2.5Y2/1 黒色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック混　10YR8/4 浅黄橙色 ロームφ～5cmブロック混)　粘性中　しまり中

163柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (2.5Y8/4 淡黄褐色 ロームφ～5cmブロック混　φ～10cm礫混　φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや弱
3　2.5Y5/3 黄褐色 シルト (2.5Y8/4 淡黄色 ロームφ～2cmブロック少混)　粘性中　しまり弱
4　2.5Y4/1 黄灰色 シルト (2.5Y8/4 淡黄色 ロームφ～5cmブロック少混)　粘性中　しまり中
5　2.5Y8/4 淡黄色 ロームと 2.5Y4/1 黄灰色 シルトとの混合土 (φ～1cm礫混)　粘性中　しまり弱
6　2.5Y7/4 浅黄色 ローム (φ～5cm礫混)　粘性強　しまり中

0　(1:20)　1m

170柱穴
1　10YR2/2 黒褐色 シルト (10YR7/6 明黄褐色 ロームφ～2cmブロック混　φ～1cm礫混　φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR7/6 明黄褐色 ロームφ～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR7/6 明黄褐色 ロームφ～5cmブロック混)　粘性中　しまり中
4　10YR5/1 褐灰色 シルト (10YR7/6 明黄褐色 ロームφ～5cmブロック混)　粘性中　しまり中
5　2.5Y6/2 灰黄色 シルト　粘性中　しまり中
6　2.5Y7/4 浅黄色 シルトと10YR7/6 明黄褐色 ロームとの混合土 (ブロック状混)(φ～5cm礫混)　粘性強　しまり中

第 105 図　掘立柱建物２　163 ～ 165・170 柱穴



第 106 図　掘立柱建物２　158・169 柱穴

掘立柱建物３（第 97・107 ～ 110 図、第 29・30・37 表、図版 50・53・54・142）

１区東側中央 7a-10C-10d グリッドにおいて検出した。本遺構は、78・82・84・91・113・114・122・125・126・135・136・176・181・182 柱穴によって構成される。桁行２間(5.9m)、梁行２間（4.7m）の南北棟の総柱建物である。主軸は N-18° -E をとり、平面積は 27.7㎡を測る。

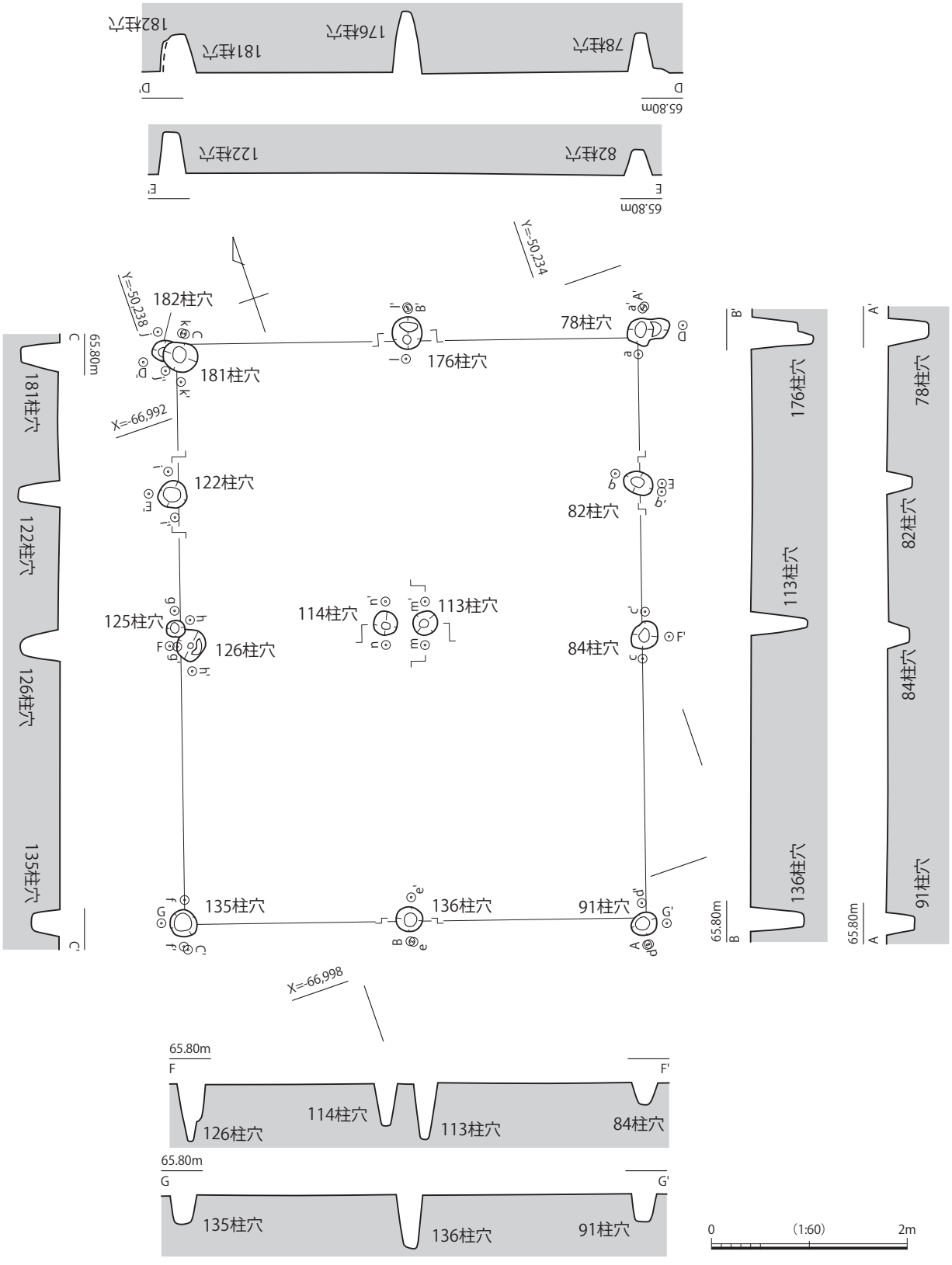
柱穴の平面形は概ね円形で、長軸の平均は 0.29m、残存値を除いた短軸の平均は 0.25m である。柱穴の深さは、深い柱穴が 0.64m、浅い柱穴は 0.22m、平均の深さは 0.41m である。南北軸の東辺北側 78 柱穴と 84 柱穴の中間に 82 柱穴、西辺北側 125・126 柱穴と 181・182 柱穴の中間に 122 柱穴をもつ。また、四隅のうち 78 柱穴・91 柱穴・135 柱穴と中心の 114 柱穴に礎盤石とみられる礫が出土した。

以下、各々の柱穴について記述する。

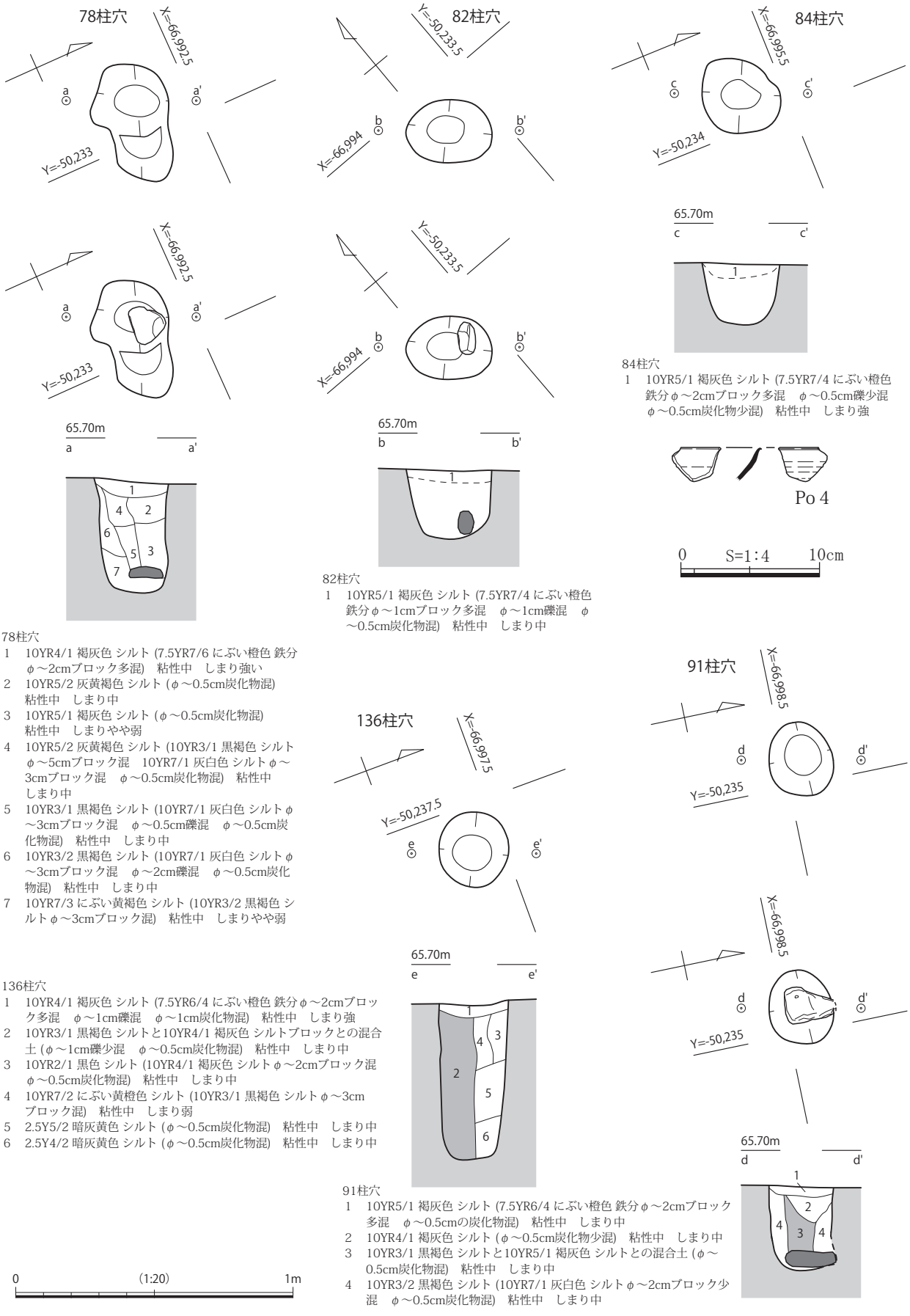
78 柱穴（第 107・108 図、第 30 表、図版 53）

建物北東隅にある。平面形は不整形、断面形は東側に段をもつ長方形である。規模は長軸 0.44m、短軸 0.29m、検出面からの深さ 0.40m を測る。埋土は７層に分けられるが、底面付近は不明瞭である。底面やや上から礎盤石とみ

られる径13～20cmの扁平な礫が出土した。６・７層は掘方埋め土とみられるが、柱痕は不明瞭である。遺物は土師器片が出土したものの、小片で図化していない。



第 107 図　掘立柱建物３



78柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/6 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック多混)　粘性中　しまり強い
2　10YR5/2 灰黄褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR5/1 褐灰色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや弱
4　10YR5/2 灰黄褐色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ～5cmブロック混　10YR7/1 灰白色 シルトφ～3cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
5　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～3cmブロック混　φ～0.5cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
6　10YR3/2 黒褐色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～3cmブロック混　φ～2cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
7　10YR7/3 にぶい黄褐色 シルト (10YR3/2 黒褐色 シルトφ～3cmブロック混)　粘性中　しまりやや弱

82柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～1cmブロック多混　φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中

84柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック多混　φ～0.5cm礫少混　φ～0.5cm炭化物少混)　粘性中　しまり強

136柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR6/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック多混　φ～1cm礫混　φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり強
2　10YR3/1 黒褐色 シルトと10YR4/1 褐灰色 シルトブロックとの混合土 (φ～1cm礫少混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR4/1 褐灰色 シルトφ～2cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　10YR7/2 にぶい黄橙色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ～3cmブロック混)　粘性中　しまり弱
5　2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
6　2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中

91柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 シルト (7.5YR6/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック多混　φ～0.5cmの炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR4/1 褐灰色 シルト (φ～0.5cm炭化物少混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/1 黒褐色 シルトと10YR5/1 褐灰色 シルトとの混合土 (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　10YR3/2 黒褐色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック少混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中

第 108 図　掘立柱建物３　78・82・84・91・136 柱穴、84 柱穴出土土器

82 柱穴（第 107・108 図、第 30 表）

建物東辺の中央北寄りにある。平面形は楕円形、断面形はＵ字形である。規模は長軸 0.31m、短軸 0.23m、検出面からの深さ 0.25m を測る。埋土は検出面付近のみ確認した。底面付近から円礫が１点出土した。遺物は出土していない。

84 柱穴（第 107・108 図、第 30・69 表、図版 142）

建物東辺の中央にある。平面形は不整な円形、断面形はＵ字形である。規模は長軸 0.31m、短軸 0.26m、検出面からの深さ 0.22m を測る。埋土は検出面付近のみ確認した。遺物は須恵器の坏 Po ４口縁部１点が出土した。端部が細く外反する。

91 柱穴（第 107・108 図、第 30 表、図版 54）

建物南東隅にある。平面形は楕円形、断面形は不整なＵ字形である。規模は長軸 0.27m、短軸 0.23m、検出面からの深さ 0.30m を測る。埋土は４層に分けられる。３層は柱痕で、柱は折り取られたと考えられる。４層は掘方埋め土、１・２層は抜き取り痕跡である。底面付近から礎盤石とみられる扁平な礫が出土した。遺物は出土していない。

136 柱穴（第 107・108 図、第 30 表）

建物南辺の中央にある。平面形は円形、断面形は不整な長方形である。規模は長軸 0.27m、短軸 0.25m、検出面からの深さ 0.56m を測る。埋土は６層に分けられる。２層は柱痕で柱は折り取られたと考えられる。３～６層は掘方埋め土である。底面に硬化し、表面が汚濁する柱のあたりが認められた。遺物は出土していない。

135 柱穴（第 107・109 図、第 30 表）

建物の南西隅にある。平面形は円形、断面形は不整な長方形である。規模は長軸 0.29m、短軸 0.27m、検出面からの深さ 0.29m を測る。埋土は８層に分けられる。２・３層は柱痕で、柱は折り取られたと考えられる。４～８層は掘方埋め土である。底面上から径 10 ～ 14cm の礎盤石とみられる扁平な礫が出土した。遺物は出土していない。

126・125 柱穴（第 107・109 図、第 30 表）

［126 柱穴］

建物の西辺中央にあり、125 柱穴に切られる。平面形は不整な円形、断面形はＵ字形である。底面より下部に撹乱がある。規模は長軸 0.32m、短軸 0.28m、検出面からの深さ 0.38m を測る。埋土は５層に分けられる。２層は柱痕で、柱は折り取られたと考えられる。３～５層は掘方埋め土である。遺物は出土していない。

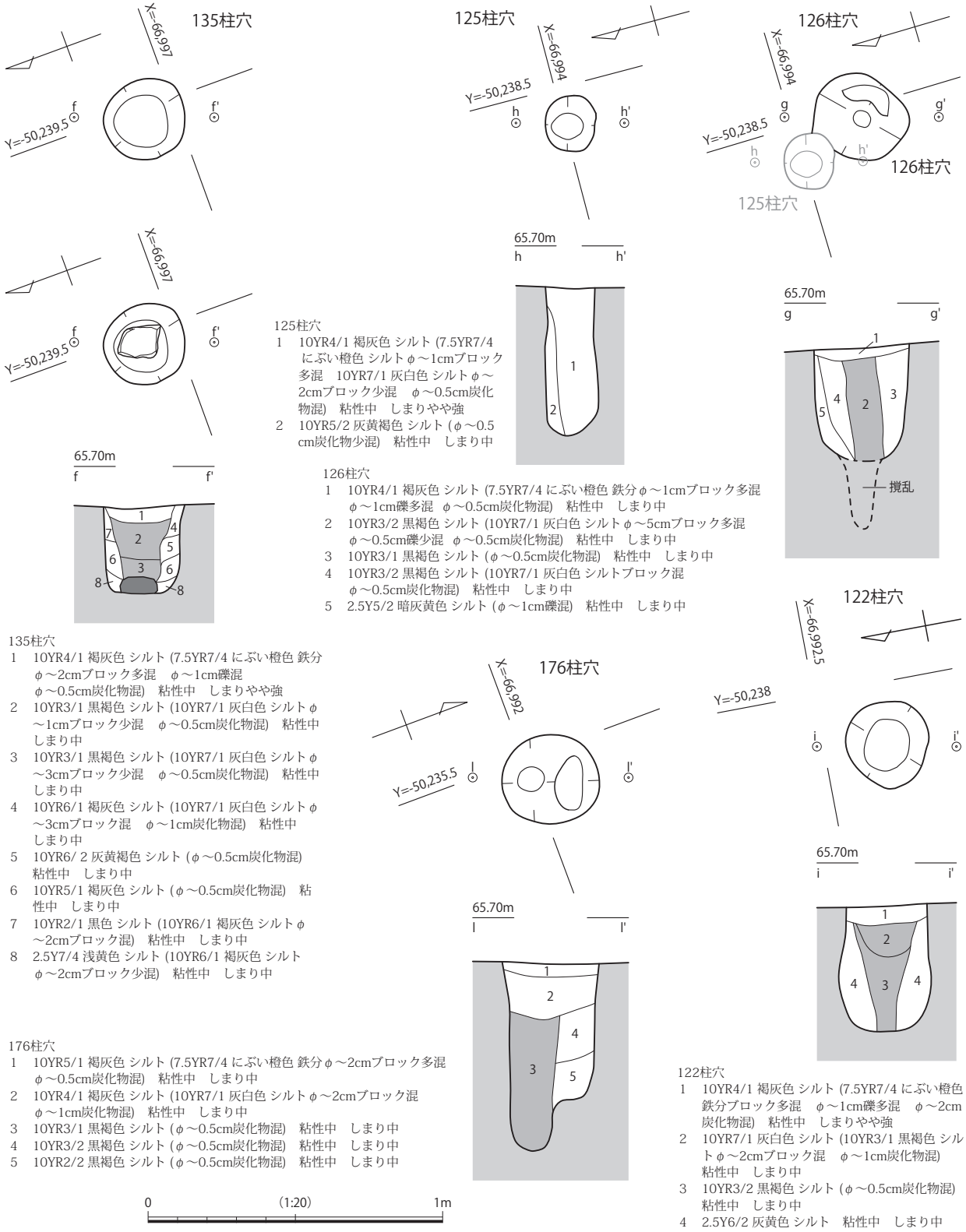
［125 柱穴］

建物の西辺中央にあり、126 柱穴を切る。径が小さいことから、126 柱穴の補助柱穴と考えられる。平面形は円形、断面形は深いＵ字形である。規模は長軸 0.19m、短軸 0.17m、検出面からの深さ 0.50m を測る。埋土は２層に分けられる。底面には柱のあたりとみられるやや硬化した面があるものの、柱

痕は不明瞭である。遺物は出土していない。

122 柱穴（第 107・109 図、第 30 表）

建物西辺の中間北寄りにある。平面形は円形、断面形は袋形であるが、範囲は確認していない。規模は長軸 0.30m、短軸 0.27m、検出面からの深さ 0.43m を測る。埋土は４層に分けられる。２・３



125柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 シルトφ～1cmブロック多混　10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック少混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや強
2　10YR5/2 灰黄褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物少混)　粘性中　しまり中

126柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～1cmブロック多混　φ～1cm礫多混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/2 黒褐色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～5cmブロック多混　φ～0.5cm礫少混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　10YR3/2 黒褐色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
5　2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト (φ～1cm礫混)　粘性中　しまり中

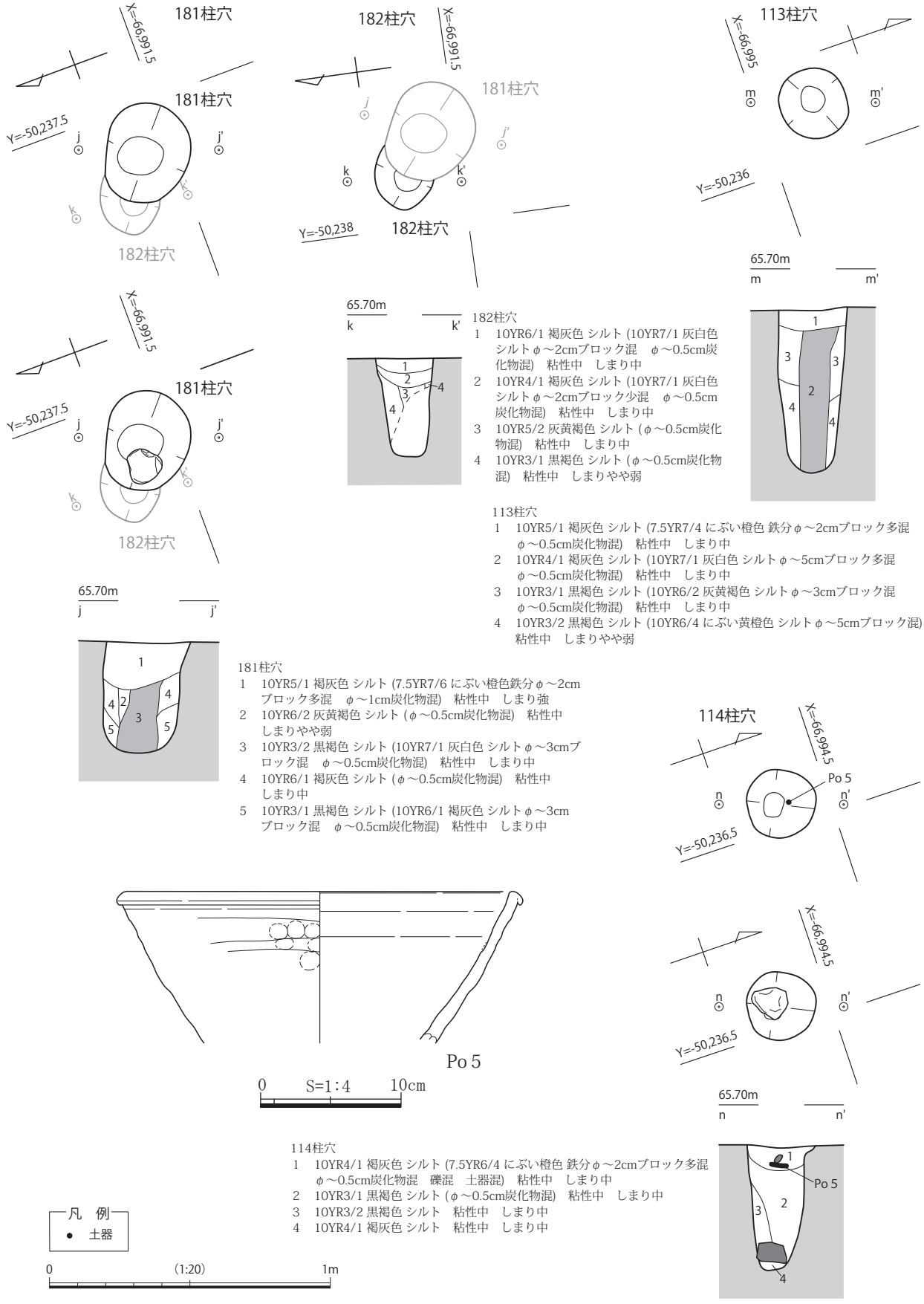
135柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック多混　φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや強
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～1cmブロック少混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～3cmブロック少混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　10YR6/1 褐灰色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～3cmブロック混　φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
5　10YR6/ 2 灰黄褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
6　10YR5/1 褐灰色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
7　10YR2/1 黒色 シルト (10YR6/1 褐灰色 シルトφ～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
8　2.5Y7/4 浅黄色 シルト (10YR6/1 褐灰色 シルトφ～2cmブロック少混)　粘性中　しまり中

176柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック多混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック混　φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　10YR3/2 黒褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
5　10YR2/2 黒褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中

122柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分ブロック多混　φ～1cm礫多混　φ～2cm炭化物混)　粘性中　しまりやや強
2　10YR7/1 灰白色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ～2cmブロック混　φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/2 黒褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　2.5Y6/2 灰黄色 シルト　粘性中　しまり中

0　(1:20)　1m

第 109 図　掘立柱建物３　122・125・126・135・176 柱穴



第 110 図　掘立柱建物３　113・114・181・182 柱穴、114 柱穴出土土器

層は柱痕、４層は掘方埋め土と考えられるが、柱のあたりは不明瞭である。遺物は出土していない。

181・182 柱穴（第 107・110 図、第 30 表、図版 54）

［181 柱穴］

建物北西隅にあり、182 柱穴を切る。平面形は不整な円形、断面形は不整なＵ字形である。規模は長軸 0.35m、短軸 0.30m、検出面からの深さ 0.39m を測る。埋土は５層に分けられる。３層が柱痕、４・５層が掘方埋め土である。底面上から径９～ 12cm の礎盤石とみられる扁平な礫が出土した。遺物は土師器片が出土したものの、小片のため図化していない。

［182 柱穴］

建物北西隅にあり、181 柱穴に切られるため、181 柱穴の補助柱穴または建て替え前の柱穴の可能性もある。平面形は円形、断面形は深い逆台形である。規模は長軸 0.22m、残存する短軸は 0.13m、検出面からの深さ 0.35m を測る。埋土は４層に分けられるが、下部は 181 柱穴に切られる。遺物は出土していない。

176 柱穴（第 107・109 図、第 30 表）

建物北辺中間にある。平面形は円形、断面形は北側に段をもつ深いＵ字形である。規模は長軸 0.33m、短軸 0.30m、検出面からの深さ 0.64m を測る。埋土は５層に分けられる。３層は柱痕で、柱は折り取られたと考えられる。底面には柱のあたりとみられる硬化した箇所がある。４・５層は掘方埋め土である。遺物は出土していない。

113 柱穴（第 107・110 図、第 30 表）

建物中央東寄りにある。0.2m 西隣に 114 柱穴がある。平面形は円形、断面形は深いＵ字形である。規模は長軸 0.25m、短軸 0.24m、検出面からの深さ 0.58m を測る。埋土は４層に分けられる。２層は柱痕で、柱は折り取られたと考えられる。３・４層は掘方埋め土である。遺物は出土していない。

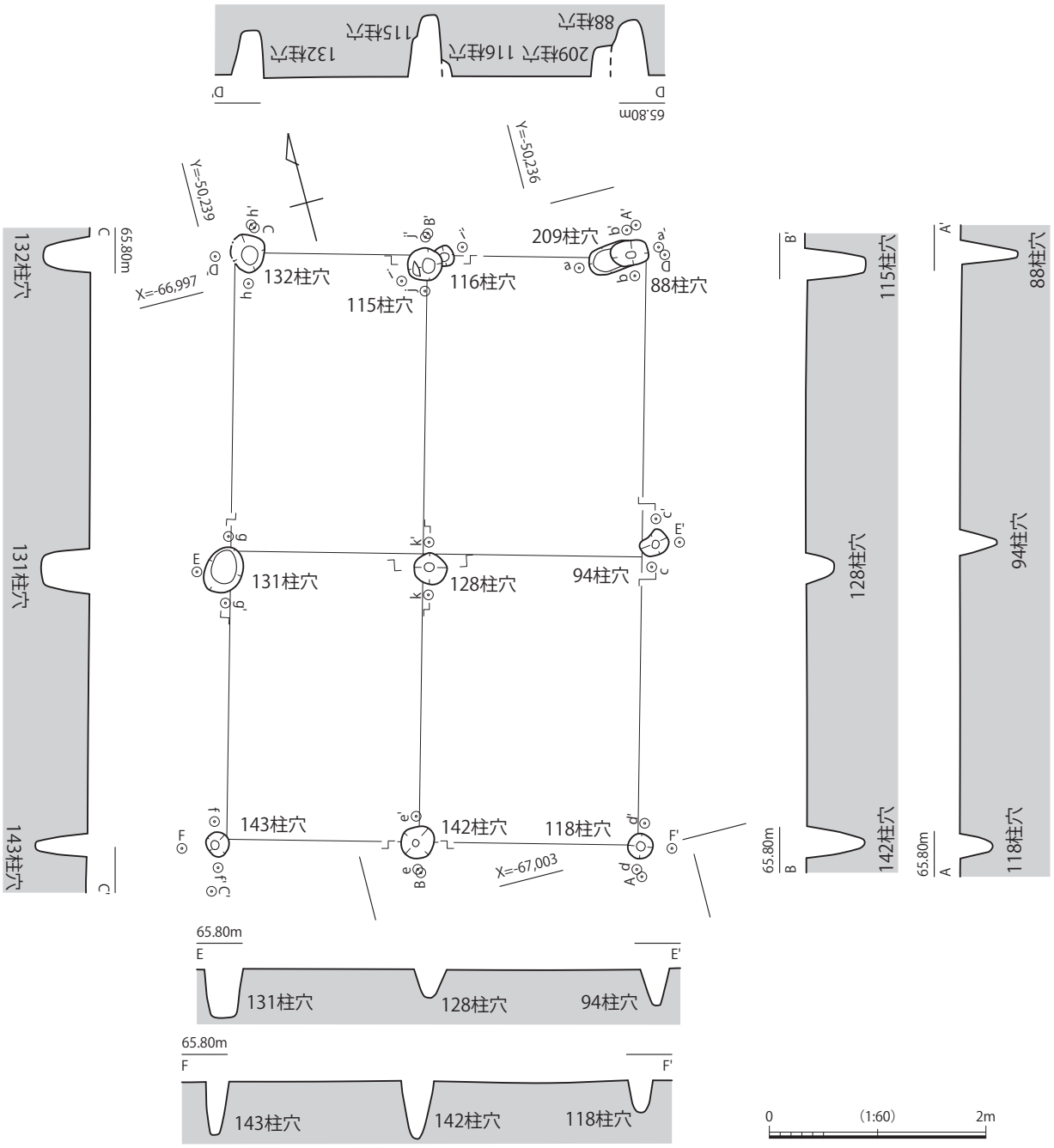
114 柱穴（第 107・110 図、第 30・69 表、図版 54・142）

建物中央西寄りにある。0.2m 東隣に 113 柱穴がある。南北方向中軸の柱筋から外れることから中央柱の建て替えの柱と考えられる。平面形は円形、断面形は不整な先の丸いＶ字形である。規模は長軸 0.24m、短軸 0.24m、検出面からの深さ 0.44m を測る。埋土は４層に分けられる。底面からやや浮いた状態で径 10 ～ 14cm の角礫が出土した。柱痕がないため、抜き取り後の堆積とみられる。遺物は１層から土師器焼成の鉢 Po５が出土した。端部が玉縁状に張り出す形状から、土師器焼成ではあるものの播磨周辺の系譜で、13 ～ 14 世紀の所産と考えられる。

掘立柱建物４（第 97・111 ～ 114 図、第 29・30・37 表、図版 50・54・55・142）

１区東側中央 7a-10C-10d、8a-1C-1d・1e グリッドにおいて検出した。本遺構は、88・94・115・116・118・128・131・132・142・143・209 柱穴によって構成される。桁行２間（5.4m）、梁行２間（3.7m）の南北棟の総柱建物である。主軸は N-15° -E をとり、平面積は 20.0㎡を測る。

柱穴の平面形は概ね円形で、不明瞭な 116 柱穴と 209 柱穴を除いた長軸の平均は 0.31m、短軸の



第 111 図　掘立柱建物４

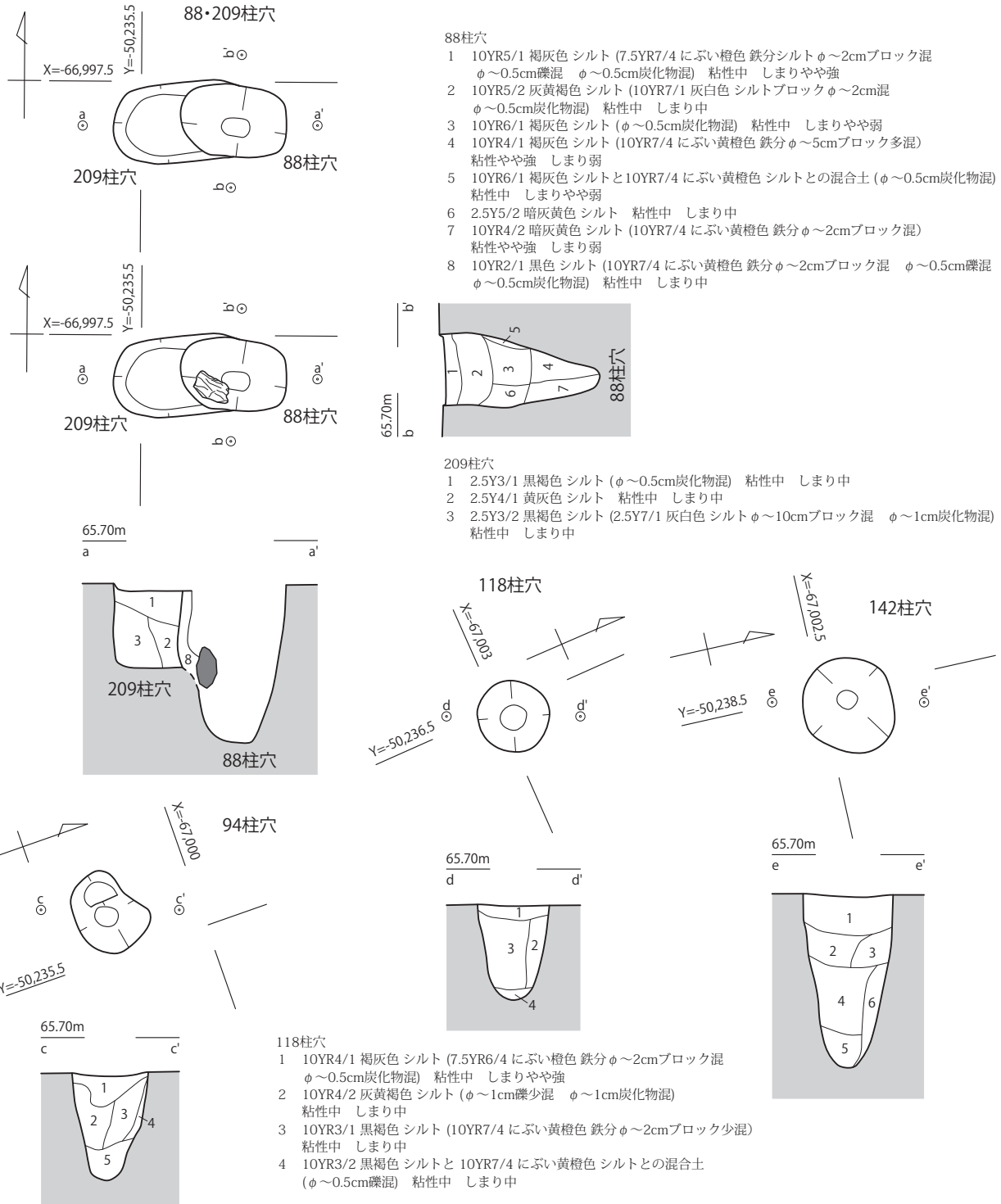
平均は 0.27ｍである。柱穴の深さは深い柱穴が 0.59ｍ、浅い柱穴は 0.26ｍで、平均の深さは 0.43ｍである。

以下、各々の柱穴について記述する。

88・209 柱穴（第 111・112 図、第 30 表、図版 55）

［88 柱穴］

建物北東隅にあり、209 柱穴を切る。平面形は楕円形、断面形は先の細いＵ字形である。規模は長軸 0.35ｍ、短軸 0.23ｍ、検出面からの深さ 0.50ｍを測る。埋土は８層に分けられる。柱痕や掘方埋め土は確認できない。埋土中位から径７～ 13cm の礫が出土した。底面中央は柱のあたりか、硬化す



88柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分シルトφ～2cmブロック混
　φ～0.5cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや強
2　10YR5/2 灰黄褐色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトブロックφ～2cm混
　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR6/1 褐灰色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや弱
4　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR7/4 にぶい黄橙色 鉄分φ～5cmブロック多混)
　粘性やや強　しまり弱
5　10YR6/1 褐灰色 シルトと10YR7/4 にぶい黄橙色 シルトとの混合土 (φ～0.5cm炭化物混)
　粘性中　しまりやや弱
6　2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト　粘性中　しまり中
7　10YR4/2 暗灰黄色 シルト (10YR7/4 にぶい黄橙色 鉄分φ～2cmブロック混)
　粘性やや強　しまり弱
8　10YR2/1 黒色 シルト (10YR7/4 にぶい黄橙色 鉄分φ～2cmブロック混　φ～0.5cm礫混
　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中

209柱穴
1　2.5Y3/1 黒褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y4/1 黄灰色 シルト　粘性中　しまり中
3　2.5Y3/2 黒褐色 シルト (2.5Y7/1 灰白色 シルトφ～10cmブロック混　φ～1cm炭化物混)
　粘性中　しまり中

118柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR6/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック混
　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや強
2　10YR4/2 灰黄褐色 シルト (φ～1cm礫少混　φ～1cm炭化物混)
　粘性中　しまり中
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR7/4 にぶい黄橙色 鉄分φ～2cmブロック少混)
　粘性中　しまり中
4　10YR3/2 黒褐色 シルトと 10YR7/4 にぶい黄橙色 シルトとの混合土
　(φ～0.5cm礫混)　粘性中　しまり中

94柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR6/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック混
　φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや強
2　10YR7/1 灰白色 シルトと10YR3/1黒褐色 シルトとの混合土
　(φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり弱
3　10YR7/1 灰白色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ～5cmブロック混
　10YR7/4 にぶい黄橙色 鉄分φ～2cmブロック少混　φ～0.5cm炭化物混)
　粘性中　しまり弱
4　5Y5/2 灰オリーブ色 砂質シルト　粘性弱　しまり弱
5　5Y5/3 灰オリーブ シルトと10YR7/4にぶい黄橙色 シルトとの混合土
　粘性強　しまり中

142柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR6/4 にぶい橙色 鉄分φ～5cmブロック混
　φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR6/1 褐灰色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ～3cmブロック混
　φ～0.5cm礫多混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR5/2 灰黄褐色 シルト (φ～1cm礫多混　φ～0.5cm炭化物混)
　粘性中　しまり弱い
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR7/6 明黄褐色 シルトφ～1cmブロック混
　φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり弱
5　10YR3/2 黒褐色 シルト (10YR7/6 明黄褐色 シルトφ～1cmブロック混
　φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性強　しまり弱
6　10YR4/2 灰黄褐色 シルト (10YR7/6 明黄褐色 鉄分φ～2cmブロック多混
　φ～0.5cm炭化物混)　粘性強　しまり中

0　(1:20)　1m

第 112 図　掘立柱建物４　88・94・118・142・209 柱穴

る。遺物は出土していない。

［209 柱穴］

建物北東隅にあり、88 柱穴に切られる。建物の軸から外れるため、単独の柱穴の可能性がある。平面形は楕円形、断面形は長方形である。残存する規模は長軸 0.40m、短軸 0.29m、検出面からの深さ 0.25m を測る。埋土は３層に分けられる。柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は出土していない。

94 柱穴（第 111・112 図、第 30 表）

建物東辺中央にある。平面形は不整形、断面形は西側に段をもち、先の細いＵ字形である。規模は長軸 0.26m、短軸 0.19m、検出面からの深さ 0.34m を測る。埋土は５層に分けられる。底面は柱のあたりのため、やや硬化していたものの、柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は出土していない。

118 柱穴（第 111・112 図、第 30 表）

建物南東隅にある。平面形は円形、断面形はＵ字形である。規模は長軸 0.23m、短軸 0.23m、検出面からの深さ 0.30m を測る。埋土は４層に分けられる。底面中央は柱のあたりか、やや硬化するものの、柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は出土していない。

142 柱穴（第 111・112 図、第 30 表）

建物南辺中央にある。平面形は円形、断面形は先の細いＵ字形である。規模は長軸 0.32m、短軸 0.30m、検出面からの深さ 0.55m を測る。埋土は６層に分けられる。底面中央にやや硬化し、汚濁した柱のあたりがあるものの、柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は出土していない。

143 柱穴（第 111・113 図、第 30 表）

建物南西隅にある。平面は円形、断面は先の細い長方形である。規模は長軸 0.23m、短軸 0.21m、検出面からの深さ 0.50m を測る。埋土は５層に分けられる。底面南側に柱のあたりがあり、やや窪んで硬化するものの、柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は出土していない。

131 柱穴（第 111・113 図、第 30 表、図版 55）

建物西辺中央にある。平面形は楕円形、断面形は長方形である。規模は長軸 0.44m、短軸 0.34m、検出面からの深さ 0.46m を測る。埋土は４層に分けられる。底面中央にやや硬化した柱のあたりがあるものの、柱痕や掘方埋め土は確認できない。１層中から径６～ 16cm の礫が５点出土した。周囲または使用されていた礫が廃棄されたと考えられる。遺物は出土していない。

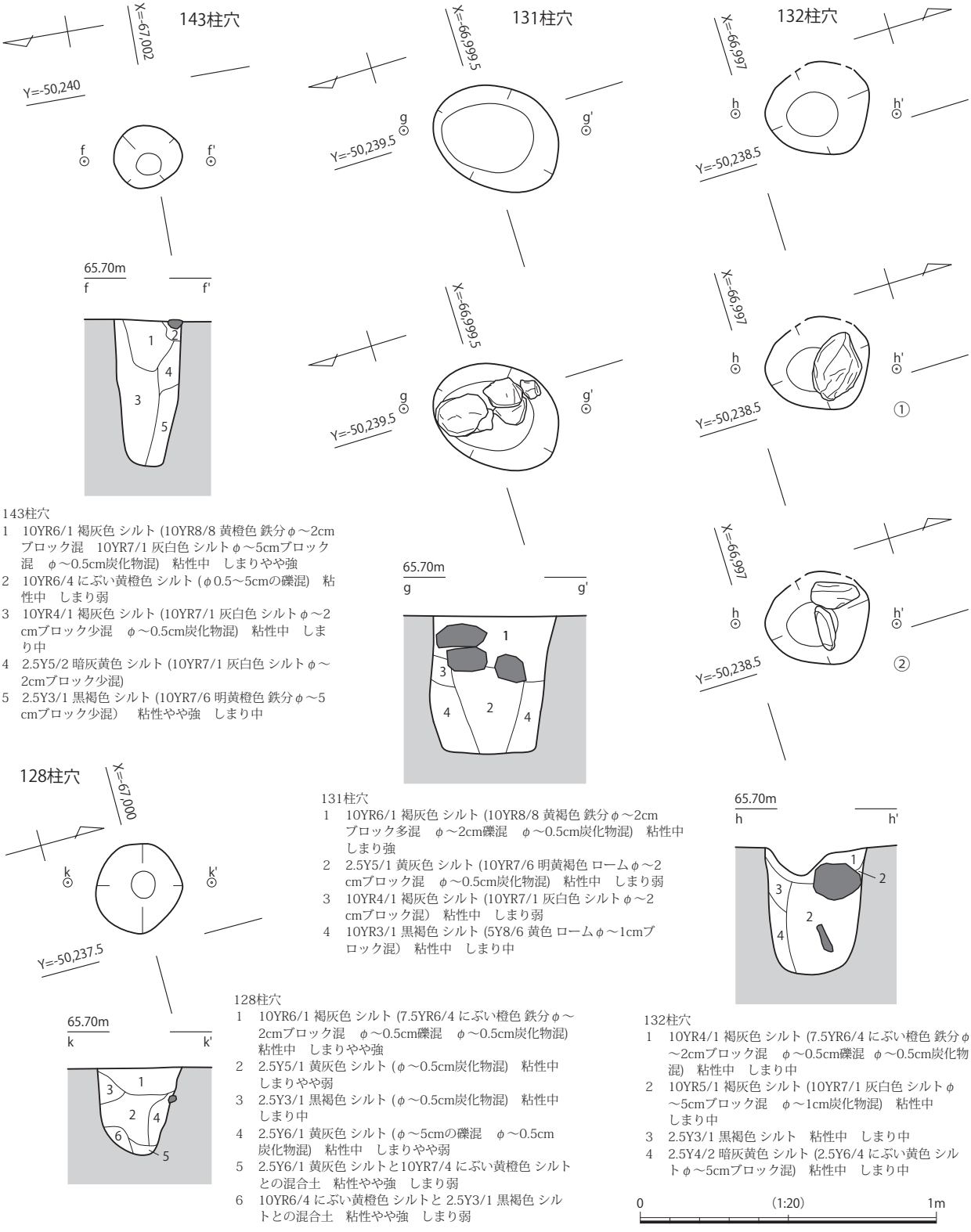
132 柱穴（第 111・113 図、第 30 表、図版 55）

建物北西隅にある。平面形は円形、断面形はＵ字形である。規模は長軸 0.34m、短軸 0.31m、検出面からの深さ 0.41m を測る。埋土は４層に分けられる。柱痕や掘方埋め土は確認できない。１・２層から径７～ 20cm の礫が３点出土した。周囲または使用されていた礫が廃棄されたと考えられる。遺物は出土していない。

115・116 柱穴（第 111・114 図、第 30 表、図版 54）

［115 柱穴］

建物北辺中間にあり、116 柱穴を切る。平面形は円形、断面形は西側に段をもつ長方形である。規模は長軸 0.33m、短軸 0.31m、検出面からの深さ 0.56m を測る。埋土は５層に分けられる。柱痕や掘方埋め土は確認できない。１層から径 10 ～ 17cm の扁平な礫が出土した。周囲または使用されて



143柱穴
1　10YR6/1 褐灰色 シルト (10YR8/8 黄橙色 鉄分φ～2cm ブロック混　10YR7/1 灰白色 シルトφ～5cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや強
2　10YR6/4 にぶい黄橙色 シルト (φ0.5～5cmの礫混)　粘性中　しまり弱
3　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック少混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック少混)
5　2.5Y3/1 黒褐色 シルト (10YR7/6 明黄橙色 鉄分φ～5cmブロック少混)　粘性やや強　しまり中

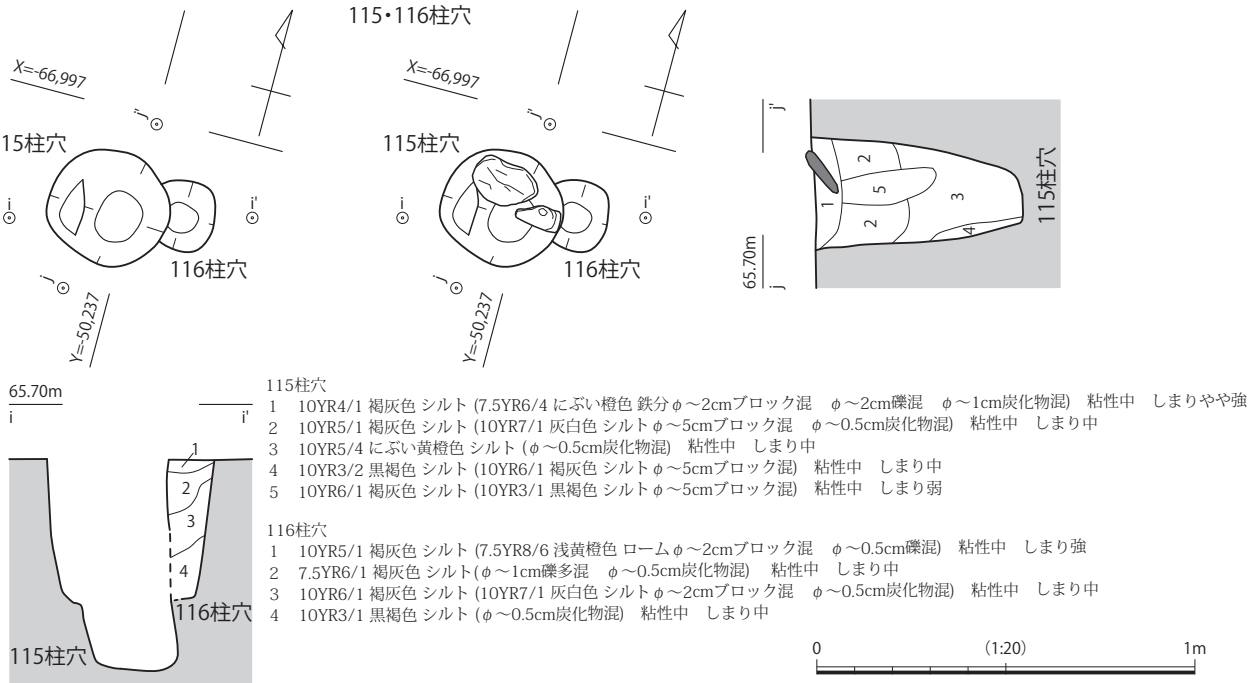
131柱穴
1　10YR6/1 褐灰色 シルト (10YR8/8 黄褐色 鉄分φ～2cm ブロック多混　φ～2cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり強
2　2.5Y5/1 黄灰色 シルト (10YR7/6 明黄褐色 ロームφ～2cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり弱
3　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック混)　粘性中　しまり弱
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (5Y8/6 黄色 ロームφ～1cmブロック混)　粘性中　しまり中

128柱穴
1　10YR6/1 褐灰色 シルト (7.5YR6/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック混　φ～0.5cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや強
2　2.5Y5/1 黄灰色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや弱
3　2.5Y3/1 黒褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　2.5Y6/1 黄灰色 シルト (φ～5cmの礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや弱
5　2.5Y6/1 黄灰色 シルトと10YR7/4 にぶい黄橙色 シルトとの混合土　粘性やや強　しまり弱
6　10YR6/4 にぶい黄橙色 シルトと 2.5Y3/1 黒褐色 シルトとの混合土　粘性やや強　しまり弱

132柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR6/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック混　φ～0.5cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR5/1 褐灰色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～5cmブロック混　φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　2.5Y3/1 黒褐色 シルト　粘性中　しまり中
4　2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト (2.5Y6/4 にぶい黄色 シルトφ～5cmブロック混)　粘性中　しまり中

0　(1:20)　1m

第 113 図　掘立柱建物４　128・131・132・143 柱穴



115柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR6/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック混　φ～2cm礫混　φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまりやや強
2　10YR5/1 褐灰色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～5cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR5/4 にぶい黄橙色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　10YR3/2 黒褐色 シルト (10YR6/1 褐灰色 シルトφ～5cmブロック混)　粘性中　しまり中
5　10YR6/1 褐灰色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ～5cmブロック混)　粘性中　しまり弱

116柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 シルト (7.5YR8/6 浅黄橙色 ロームφ～2cmブロック混　φ～0.5cm礫混)　粘性中　しまり強
2　7.5YR6/1 褐灰色 シルト(φ～1cm礫多混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR6/1 褐灰色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中

第 114 図　掘立柱建物４　115・116 柱穴

いた石が廃棄されたと考えられる。遺物は出土していない。

［116 柱穴］

建物北辺中間にあり、115 柱穴に切られると判断したが、115 柱穴の一部の可能性もある。平面形は円形、断面形は深い逆台形である。規模は長軸 0.19m、残存する短軸 0.15m、検出面からの深さは最大で 0.38m を測る。埋土は４層に分けられる。柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は出土していない。

128 柱穴（第 111・113 図、第 30 表）

建物中央にある。平面形は不整な円形、断面形は不整なＵ字形である。規模は長軸 0.31m、短軸 0.30m、検出面からの深さ 0.29m を測る。埋土は６層に分けられる。柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は出土していない。

掘立柱建物５（第 97・115 ～ 118 図、第 29・30・38 表、図版 50・55・142）

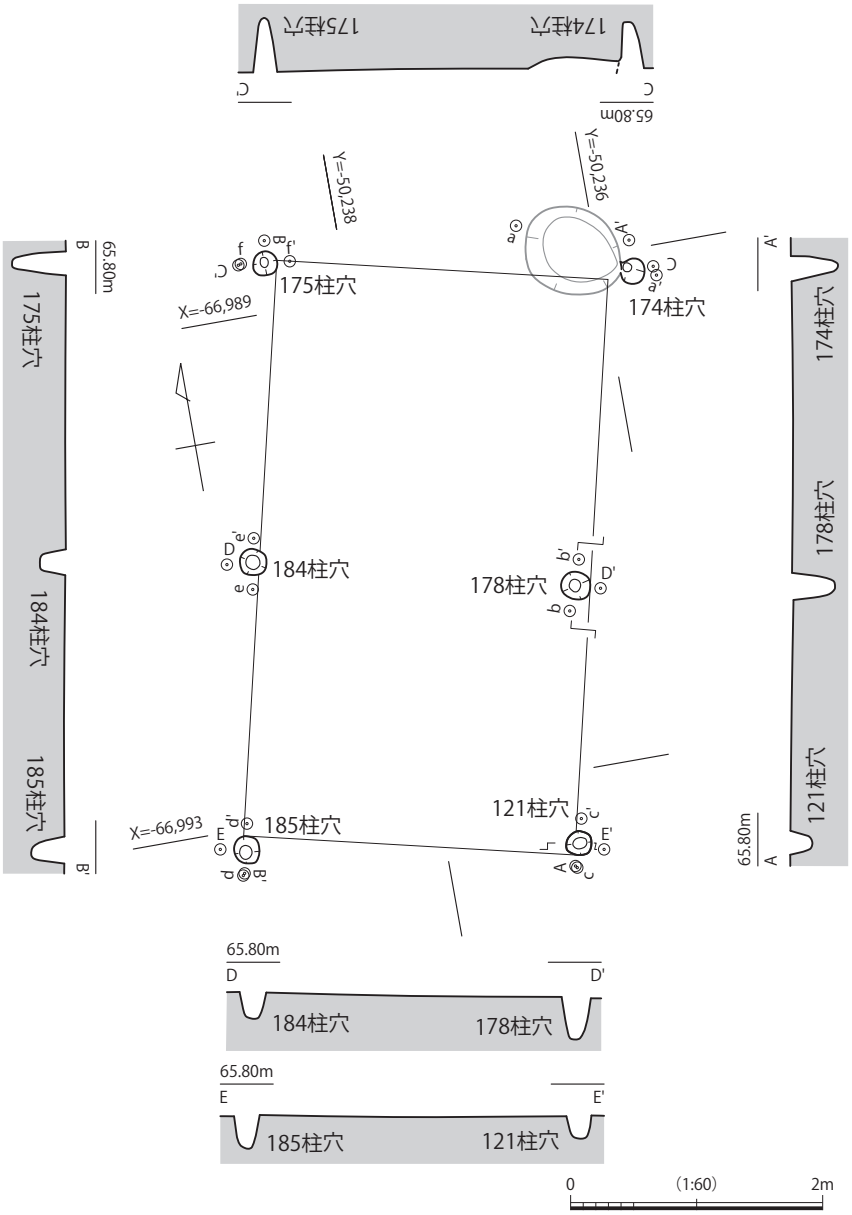
１区東側中央 7a-10C-9d・10d グリッドにおいて検出した。柱穴の完掘後に建物として復元した。本遺構は、121・174・175・178・184・185 柱穴によって構成される。桁行２間（4.6m）、梁行１間（2.6m）の南北棟の側柱建物である。主軸は N-13° -E をとり、平面積は 12.0㎡を測る。柱穴の平面形は概ね円形で、長軸の平均は 0.23m、短軸の平均は 0.21m である。柱穴の深さは深い柱穴が 0.44m、浅い柱穴は 0.19m で差が大きい。平均の深さは 0.31m である。

以下、各々の柱穴について記述する。

174 柱穴（第 115・116 図、第 30・69 表、図版 55・142）

建物北東隅にある。平面形は円形で西側は浅い土坑状の撹乱と重なる。断面形は先の細いＵ字形で

ある。規模は長軸0.23m、短軸0.22m、検出面からの深さ0.40mを測る。埋土は６層に分けられる。柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は、柱の検出面上から土師器の鍋Po６が出土した。受け口になる前の形状で、器壁が厚く、内面に横方向のハケ調整を施すことから、甕から鍋への過渡期にあたる、12～13世紀の所産と考えられる。



第115図　掘立柱建物５

178柱穴（第115・116図、第30表）

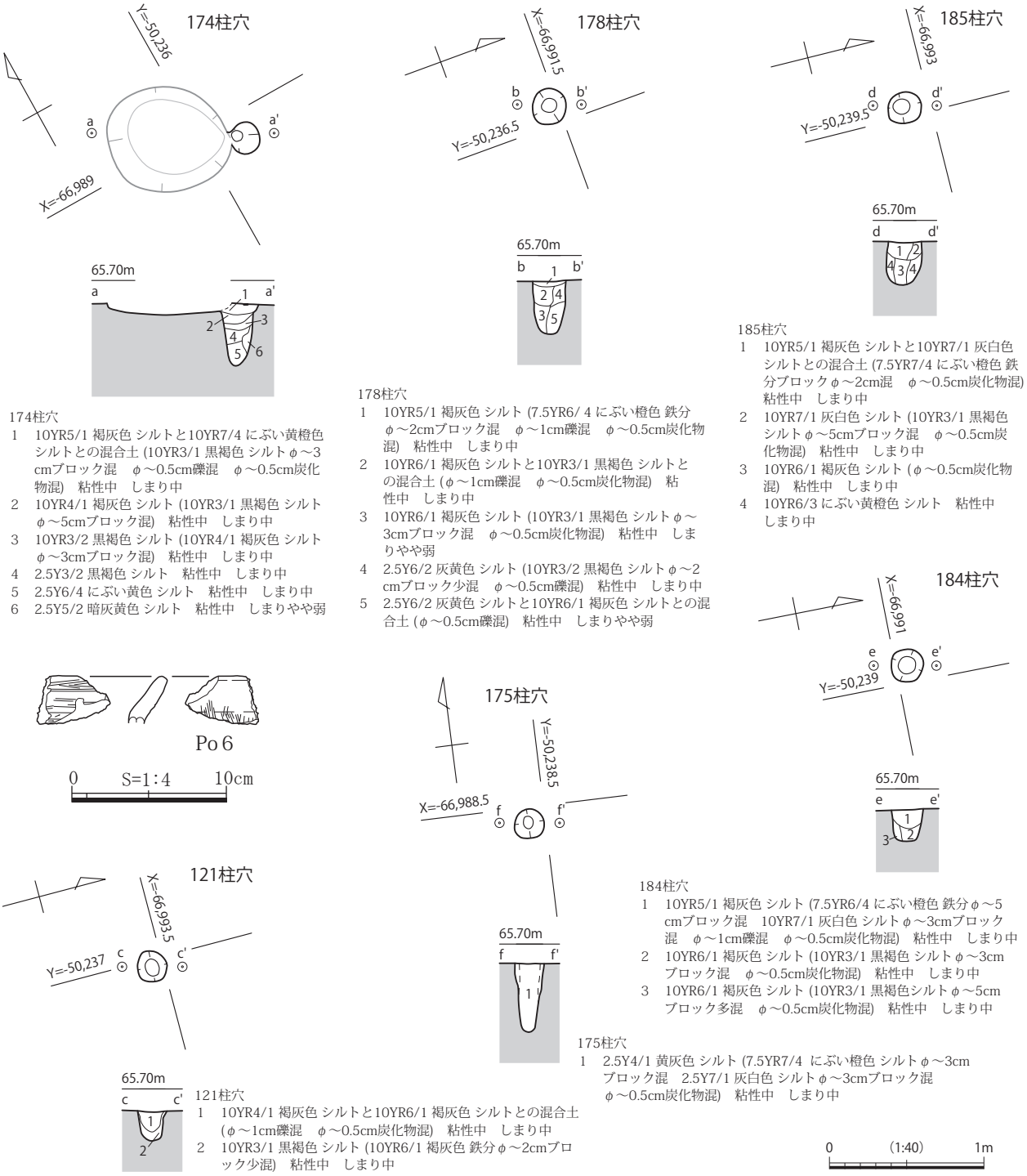
建物東辺の中央にある。平面形は円形、断面形はU字形である。規模は長軸0.24m、短軸0.22m、検出面からの深さ0.35mを測る。埋土は５層に分けられる。底面付近は柱のあたりで汚濁するものの、柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は出土していない。

121柱穴（第115・116図、第30表）

建物南東隅にある。平面形は円形、断面形は不整なU字形である。規模は長軸0.21m、短軸0.20m、検出面からの深さ0.19mを測る。埋土は２層に分けられる。底面での柱のあたりは不明瞭で、柱痕や掘方埋め土も確認できない。遺物は出土していない。

185柱穴（第115・116図、第30表）

建物南西隅にある。平面形は円形、断面形はやや不整な袋形である。規模は長軸0.23m、短軸0.20m、検出面からの深さ0.27mを測る。埋土は４層に分けられる。底面中央は柱のあたりのためやや硬化し、汚濁するものの、柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は鉄片が出土したものの、錆化が著しく図化していない。



174柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 シルトと10YR7/4 にぶい黄橙色 シルトとの混合土 (10YR3/1 黒褐色 シルトφ～3cmブロック混　φ～0.5cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ～5cmブロック混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/2 黒褐色 シルト (10YR4/1 褐灰色 シルトφ～3cmブロック混)　粘性中　しまり中
4　2.5Y3/2 黒褐色 シルト　粘性中　しまり中
5　2.5Y6/4 にぶい黄色 シルト　粘性中　しまり中
6　2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト　粘性中　しまりやや弱

178柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 シルト (7.5YR6/ 4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック混　φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR6/1 褐灰色 シルトと10YR3/1 黒褐色 シルトとの混合土 (φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR6/1 褐灰色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ～3cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや弱
4　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR3/2 黒褐色 シルトφ～2cmブロック少混　φ～0.5cm礫混)　粘性中　しまり中
5　2.5Y6/2 灰黄色 シルトと10YR6/1 褐灰色 シルトとの混合土 (φ～0.5cm礫混)　粘性中　しまりやや弱

185柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 シルトと10YR7/1 灰白色 シルトとの混合土 (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分ブロックφ～2cm混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR7/1 灰白色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ～5cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR6/1 褐灰色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　10YR6/3 にぶい黄橙色 シルト　粘性中　しまり中

184柱穴
1　10YR5/1 褐灰色 シルト (7.5YR6/4 にぶい橙色 鉄分φ～5cmブロック混　10YR7/1 灰白色 シルトφ～3cmブロック混　φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR6/1 褐灰色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ～3cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR6/1 褐灰色 シルト (10YR3/1 黒褐色シルトφ～5cmブロック多混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中

175柱穴
1　2.5Y4/1 黄灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 シルトφ～3cmブロック混　2.5Y7/1 灰白色 シルトφ～3cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中

121柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルトと10YR6/1 褐灰色 シルトとの混合土 (φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR6/1 褐灰色 鉄分φ～2cmブロック少混)　粘性中　しまり中

第 116 図　掘立柱建物５　121・174・175・178・184・185 柱穴、174 柱穴出土土器

184 柱穴（第 115・116 図、第 30 表）

建物西辺中央にある。平面形は円形、断面形は長方形である。規模は長軸 0.22m、短軸 0.21m、検出面からの深さ 0.20m を測る。埋土は３層に分けられる。柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は須恵器片が出土したものの、体部片のため図化していない。

175 柱穴（第 115・116 図、第 30 表）

建物北西隅にある。平面形は円形、断面形は先の丸いＶ字形である。規模は長軸 0.20m、短軸 0.19m、

検出面からの深さ 0.44ｍを測る。埋土は単層で、柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は土師器片が出土したものの、小片で図化していない。

（２）柵列

柵列１（第 97・117 図、第 40 ～ 42 表、図版 55・56・142）

１区東側中央8a-1C-1d･1eグリッドにおいて検出した。掘立柱建物２北辺の東側に、1.65m ～ 1.80m離れて概ね平行する。本遺構は、95 ・ 141 ・ 171 柱穴によって構成される。長さは 4.0m、主軸は N-70° -W を測る。南隣の掘立柱建物２の主軸は、東西棟の建物であり、N-68° -W である。軸のずれはあるものの、柱穴が梁柱の延長上 3.3 ～ 3.7ｍにある。

柱穴の平面形は概ね円形で、長軸の平均は 0.29m、短軸の平均は 0.25ｍである。柱穴の深さは深い柱穴が 0.45m、浅い柱穴は 0.36ｍで、平均の深さは 0.40ｍである。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から中世前期と考えられる。

以下、各々の柱穴について記述する。

95 柱穴（第 117 図、第 41 表、図版 55）

柵列東端にある。北側を暗渠で掘削される。平面形は円形、断面形は不整なＵ字形である。規模は長軸 0.24m、短軸 0.19m、検出面からの深さ 0.36ｍを測る。埋土は３層に分けられる。柱痕や掘方埋め土は確認できない。１・３層から径 10 ～ 15cmの礫が出土した。断面では柱痕は確認できないため、周囲または使用されていた礫を埋め戻したと考えられる。遺物は出土していない。

141 柱穴（第 117 図、第 41 表）

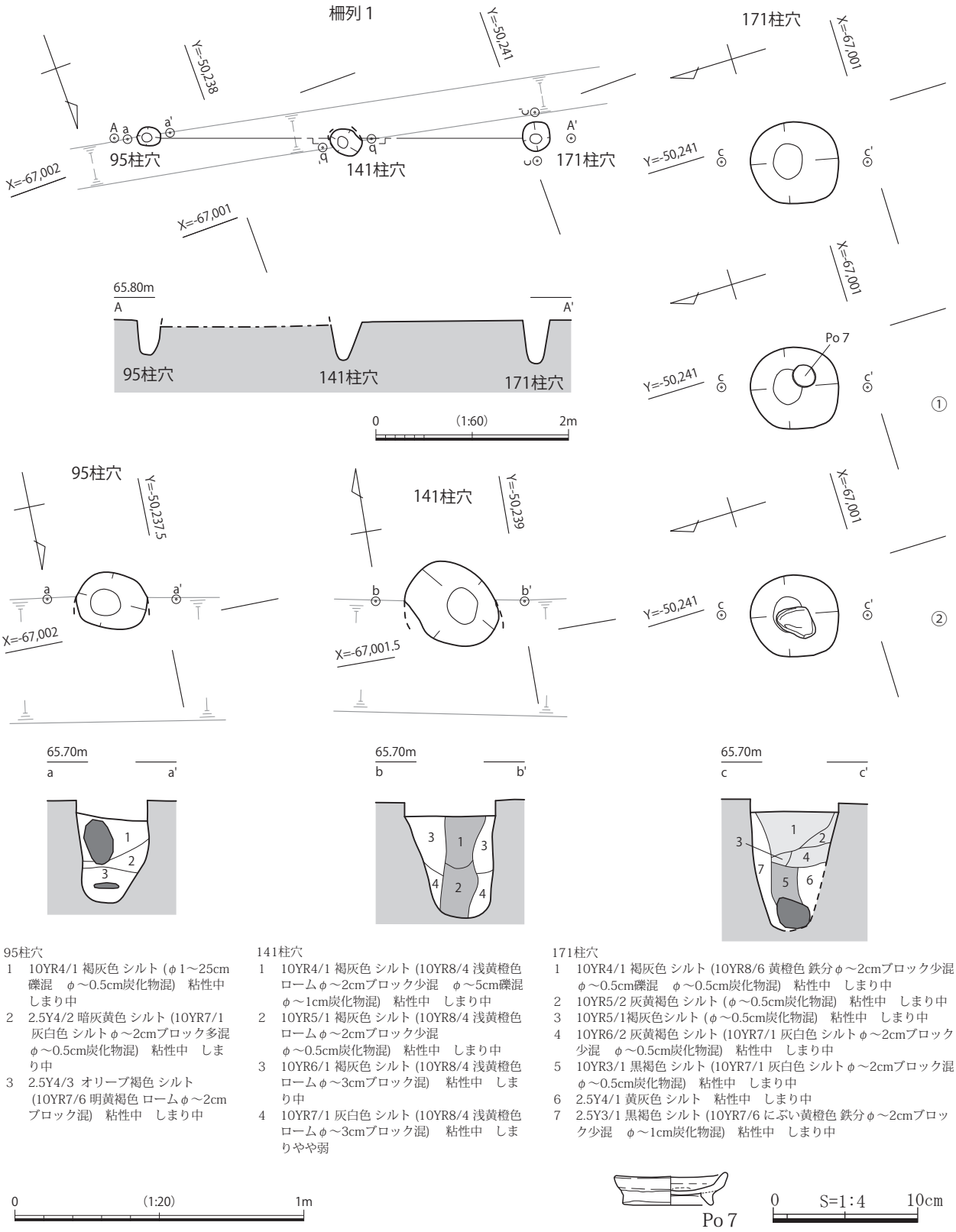
柵列中央にある。平面形は不整な円形、断面形は不整なＵ字形である。規模は長軸 0.32m、短軸 0.26m、検出面からの深さ 0.41ｍを測る。埋土は４層に分けられる。南側を暗渠で掘削される。底面西側に硬化した柱のあたりがある。１・２層は柱痕、３・４層は掘方埋め土である。遺物は出土していない。

171 柱穴（第 117 図、第 41・69 表、図版 56・142）

柵列西端にある。平面形は円形、断面形は先の丸いＶ字形である。規模は長軸 0.30m、短軸 0.28m、検出面からの深さ 0.45ｍを測る。埋土は７層に分けられる。１～４層は抜き取り痕、５層は柱痕、６・７層は掘方埋め土である。柱は折り取られたと考えられる。底面付近には礎盤石とみられる径 10 ～ 14cmの亜角礫がある。遺物は、礫の西辺直上から土師器の高台付皿 Po ７が出土した。柱を抜き取り、完形の台付皿を正位置に入れている。手づくねの皿で断面三角形状の高台を貼り付け、内面には油煙の痕跡がある。13 ～ 14 世紀の所産と考えられる。

柵列２（第 97・118 図、第 40 ～ 42 表）

１区東側中央7a-10C-10dグリッドにおいて検出した。掘立柱建物３西辺の北側に、0.60m ～ 0.65m離れて概ね平行する。本遺構は、123 ・ 127 ・ 183 柱穴によって構成される。長さ 2.7m、主軸は N-18° -E を測る。東隣の掘立柱建物３の主軸は N-18° -E で主軸が一致する。柱穴は掘立柱建物３西



95柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (φ1～25cm 礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック多混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト (10YR7/6 明黄褐色 ロームφ～2cmブロック混)　粘性中　しまり中

141柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 ロームφ～2cmブロック少混　φ～5cm礫混　φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR5/1 褐灰色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 ロームφ～2cmブロック少混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR6/1 褐灰色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 ロームφ～3cmブロック混)　粘性中　しまり中
4　10YR7/1 灰白色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 ロームφ～3cmブロック混)　粘性中　しまりやや弱

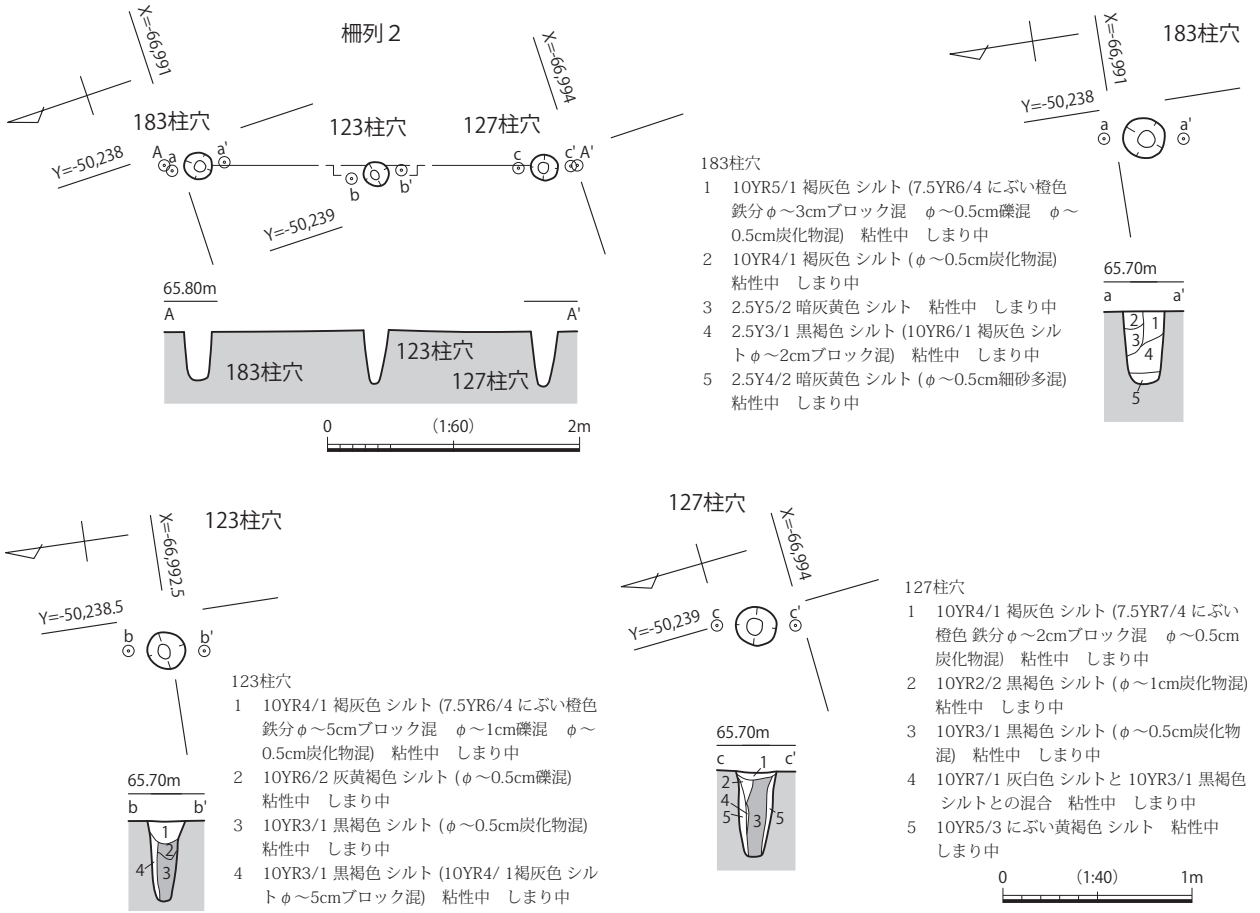
171柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/6 黄橙色 鉄分φ～2cmブロック少混　φ～0.5cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR5/2 灰黄褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR5/1褐灰色シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　10YR6/2 灰黄褐色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック少混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
5　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
6　2.5Y4/1 黄灰色 シルト　粘性中　しまり中
7　2.5Y3/1 黒褐色 シルト (10YR7/6 にぶい黄橙色 鉄分φ～2cmブロック少混　φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中

第 117 図　柵列１　95・141・171 柱穴、171 柱穴出土土器

側に平行するが、間隔は0.6mと短い。

柱穴の平面形は概ね円形で、長軸の平均は0.21m、短軸の平均は0.20mである。柱穴の深さは深い柱穴が0.45m、浅い柱穴は0.39mで、平均の深さは0.42mである。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から中世前期と考えられる。



第 118 図　柵列２　123・127・183 柱穴

以下、各々の柱穴について記述する。

183 柱穴（第 118 図、第 41 表）

柵列の北端にある。平面形は円形、断面形はＵ字形である。規模は長軸 0.22m、短軸 0.21m、検出面からの深さ 0.39m を測る。埋土は５層に分けられる。底面中央にやや汚濁した柱のあたりがあるものの、柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は出土していない。

123 柱穴（第 118 図、第 41 表）

柵列中央にある。平面形は円形､断面形は先の細いＵ字形である。規模は長軸 0.20m､短軸 0.19m､検出面からの深さ 0.42m を測る。埋土は４層に分けられる。２・３層は柱痕、４層は掘方埋め土である。底面南側にやや硬化した柱のあたりがある。柱は折り取られたと考えられる。遺物は出土していない。

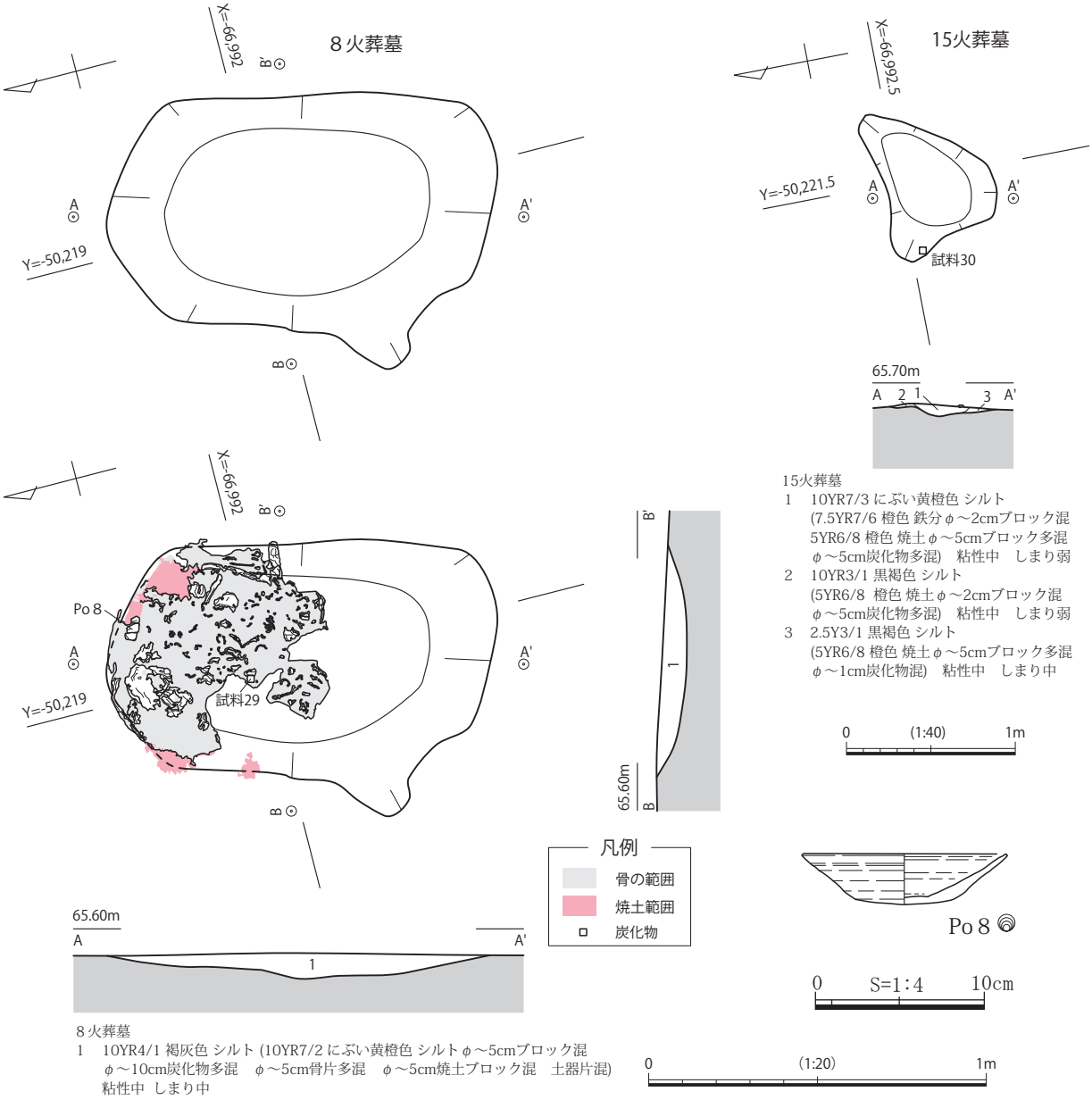
127 柱穴（第 118 図、第 41 表）

柵列南端にある。平面形は円形、断面形は深い逆台形である。規模は長軸 0.22m、短軸 0.20m、検出面からの深さ 0.45m を測る。埋土は５層に分けられる。３層は柱痕、４・５層は掘方埋め土である。底面中央にやや硬化した柱のあたりがある。柱は折り取られたと考えられる。遺物は出土していない。

（３）火葬墓

８火葬墓（第 97・119 図、第 43・69 表、図版 57・142）

１区北東端 7a-10C-10b グリッドにおいて検出した。平面形は不整な楕円形、断面形は切り取って取り上げたため不明である。規模は長軸 1.14m、短軸 0.70m、検出面からの深さ 0.08m を測る。楕円形の主軸は N-15° -E を測る。埋土は単層で、炭化物と骨片、焼土を多量に含み、底面の一部は硬化していた。人骨は被熱により遺存状態は悪く、粉末状となり、土と一体化した状態で出土した。出土範囲を精査し、北側で頭骨、南側で大腿骨、西側で四肢と推測できる骨片を確認した。出土状況から、頭を北、顔を西に向けた横臥屈葬の状態と考えられる。骨片は形を維持したまま取り上げることが困難なため、複数に分割して周囲の土ごと取り上げた。遺物は、頭骨の東隣から土師器の皿 Po８が出土した。やや浮いた状態で被熱し、小片となっていた。底面は回転糸切りで口縁部まで直線状に外傾することから 15 世紀後半の所産と考えられる。火葬の際に燃料として使用された炭化木の放



第 119 図　８・15 火葬墓、８火葬墓出土土器

射性炭素年代測定（試料 29）を行った（第５章第３節）。暦年代は calAD1452-1520（暦年較正２σの確率１位）の結果であった。遺物の年代観と概ね調和している。

15 火葬墓（第 97・119 図、第 43 表、図版 58）

１区北東端 7a-10C-10c グリッドにおいて検出した。８火葬墓の西 2.5ｍに位置する。平面形は不整形、断面形は不明である。規模は長軸 0.49m、短軸 0.39m、検出面からの深さ 0.07ｍを測る。埋土は３層に分けられる。北側が大きく撹乱を受けており、炭化物、骨片を検出したものの遺存状態は不良で、明瞭な被熱痕跡は確認できなかった。遺物は土師器片と円礫が出土した。土師器片は被熱した小皿とみられるが小片のため図化していない。円礫は被熱しているため、棺の台として使われたと考えられる。時期を判断できる遺物がないため、骨片とともに出土した炭化物の放射性炭素年代測定（試料 30）を実施した（第５章第３節参照）。暦年代は calAD1435-1473（暦年較正２σの確率１位）の結果であった。

15 火葬墓の時期は、８火葬墓と大きな差がないと考えられる。

（４）溝

１溝（第 97・120 図、第 44・69・98 表、図版 142）

１区西側 7a-10C-8h ～ 8a-1C-1i グリッドにおいて、造成土下面で検出した。平面形は、幅が一定で南から北方向にほぼ直線状に向く。断面形はＵ字状、底面レベルは南壁が 64.9m、北壁で 64.7m と緩やかに北に下る。残存規模は長さ 30.10m、最大幅 6.30m、検出面からの深さ 0.90ｍを測る。主軸は N-20° -E をとる。埋土は北壁面で６層、南壁面で 13 層に分けられる。北壁をみると水路は西側から埋められ、６ｍ程の溝幅は、圃場整備前には約 3.7ｍまで縮小している。遺物は近世以降の陶磁器で、多くは明治期の染付や型紙刷り、大正期の銅板転写の碗皿や、陶器の壺・甕・鉢類、施釉瓦が主体を占める。少量であるが、古墳時代の土師器甕、古代の瓦片、平安～鎌倉期の土師器皿や坏の小片、中世の五輪塔、鉄滓等が出土した。このうち土師器の甕 Po９と五輪塔の空風輪Ｓ１を図化した。301 流路埋没後に掘削され、現代まで使用された溝と考えられる。

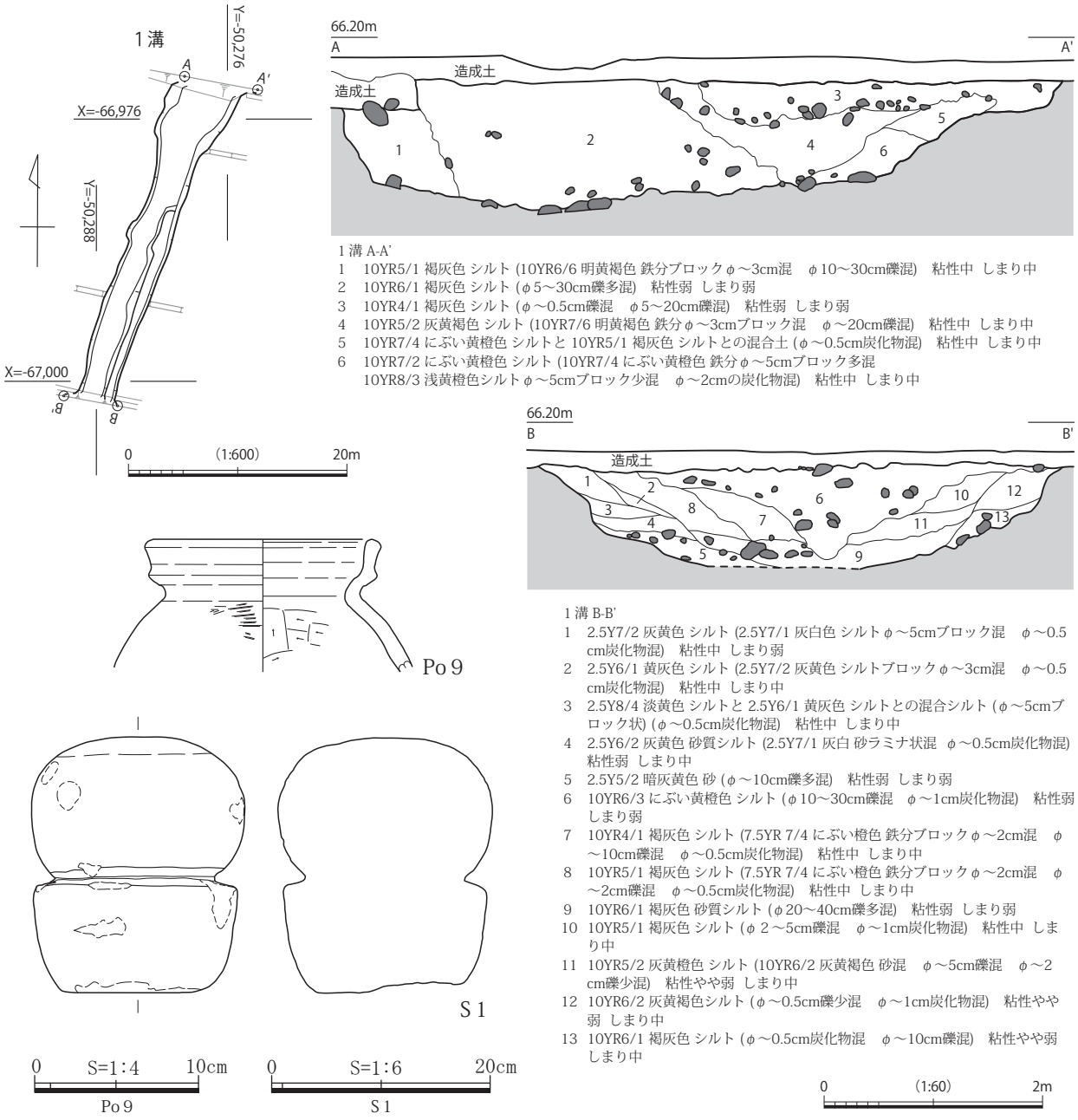
157 溝（第 97・121 図、第 44 表）

１区東側 7a-10C-9c・ 10c グリッドにおいて検出した。平面形は幅・向きとも一定せず、北から東方向に向きを変え、両端ともに浅くなり途切れる。断面形は皿状で底面は平坦である。残存規模は長さ 7.30m、最大幅 0.71m、検出面からの深さ 0.07ｍを測る。主軸は南側で N-69° -W、北側で N-12° -E をとる。埋土は単層で、底面に鉄分のブロックが多量に付着する。遺物は土師器片が出土したものの、体部片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土や形状から中世と考えられる。

188 溝（第 97・121 図、第 44 表）

１区東側 7a-10C-9c・9d グリッドにおいて検出した。平面形は幅が一定せず、南側は袋状に広がり、北側では幅が狭くなる。残存規模は長さ 6.70m、最大幅 1.44m、検出面からの深さ 0.06ｍを測る。主軸は N-8° -E をとる。埋土は２層に分けられる。底面に鉄分のブロックが多量に付着する。遺物は



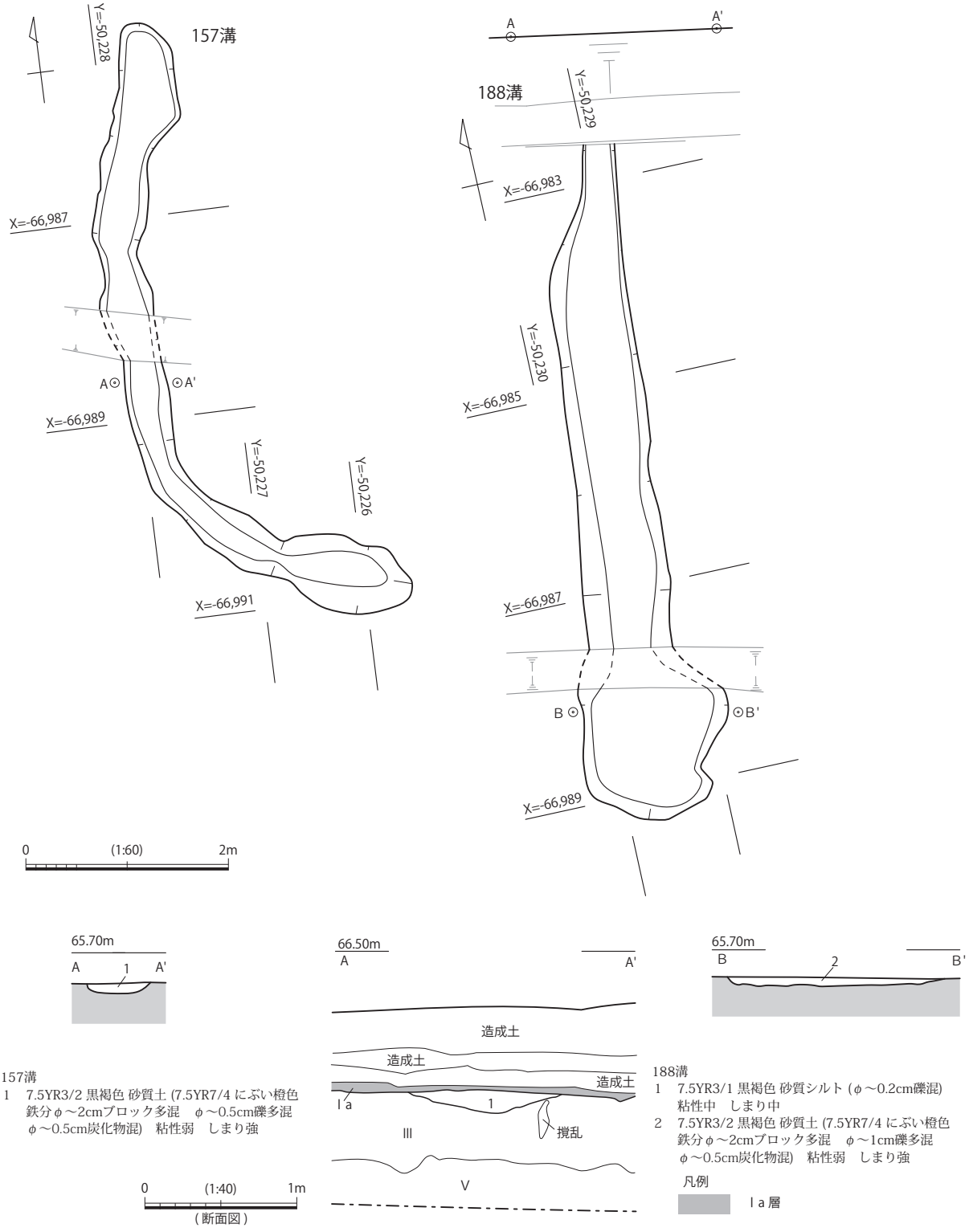
第 120 図　１溝、１溝出土遺物

出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土や形状から中世と考えられる。

200 溝（第 97・122 図、第 44 表）

１区東側 7a-10C-9d・9e・10e、8a-1C-1e・1f グリッドにおいて検出した。残存規模は長さ 30.61m、最大幅 0.80m、検出面からの深さ 0.20m を測る。調査区の中央を南北に貫通する。南北両壁面では溝として検出したが、中央北側の一部では北に向かい分岐し、溝としては不明瞭な箇所もある。主軸は南端で N-20° -E、10m 程北側で向きを N-30° -E に変えて直線状に延びる。中央付近から北側で、N-20° -E に分岐する。埋土は北壁面では単層、南壁面では３層に分けられる。黄灰色シルトを母体とする。遺物は土師器片が出土したものの、小片や体部片のため図化していない。４区南



第 121 図　157・188 溝

区及び南東区で延長部を検出した。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から中世と考えられる。

（5）土坑

16 土坑（第 97・123 図、第 45 表、図版 142）

１区東側中央 7a-10C-10c グリッドにおいて検出した。平面形は隅丸長方形、断面形は長方形であ

る。規模は長軸1.18m、短軸0.73m、検出面からの深さ0.82mを測る。埋土は６層に分けられる。上層の１～３層と下層の４～６層で分かれる。上層から径40～50cmの大型の礫が出土した。下層はしまりが弱く浅黄色のブロックが多量に含まれており、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は土師器片が出土したものの、小片で図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から中世と考えられる。

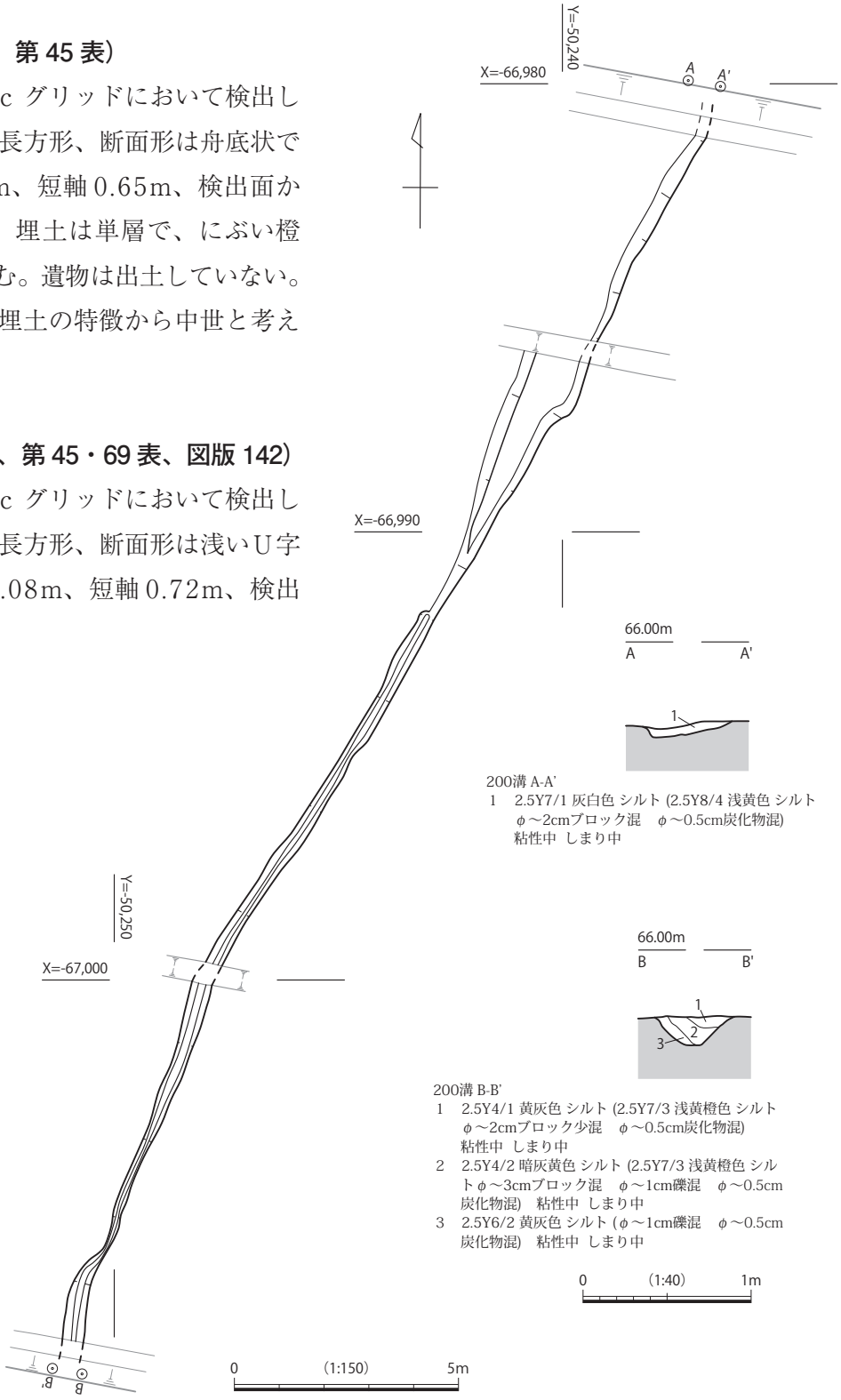
31 土坑（第 97・124 図、第 45 表）

１区東側中央8a-1C-1c グリッドにおいて検出した。平面形は不整な隅丸長方形、断面形は舟底状である。規模は長軸0.85m、短軸0.65m、検出面からの深さ0.15mを測る。埋土は単層で、にぶい橙色シルトのブロックを含む。遺物は出土していない。

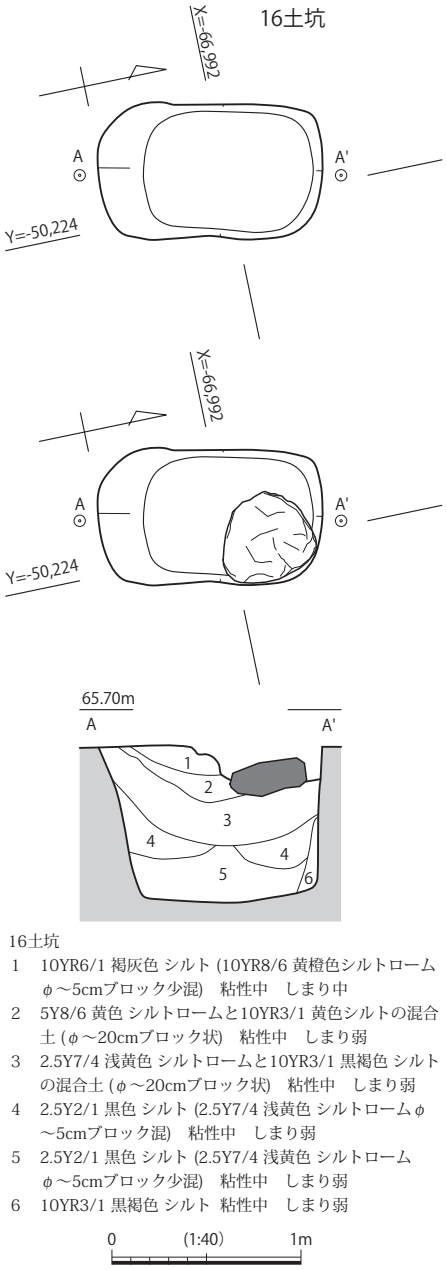
本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から中世と考えられる。

197 土坑（第 97・124 図、第 45・69 表、図版 142）

１区東側中央8a-1C-1c グリッドにおいて検出した。平面形は不整な隅丸長方形、断面形は浅いU字形である。規模は長軸1.08m、短軸0.72m、検出



第 122 図　200 溝



第 123 図　16 土坑

面からの深さ 0.24m を測る。埋土は６層に分けられ、褐灰色シルトを母体とする。遺物は埋土から土師器の皿 Po10 が出土した。口縁端部にかけて緩く外反し、端部は丸い。胎土は密で 13 ～ 14 世紀の所産と考えられる。

198 土坑（第 97・124 図、第 45・69 表、図版 142）

１区東側中央 7a-10C-9e グリッドにおいて検出した。平面形は不整な隅丸方形、断面形は浅いＵ字形である。規模は長軸 0.96m、短軸 0.87m、検出面からの深さ 0.34m を測る。南側の一部がトレンチで掘削される。埋土は４層に分けられ、褐灰色シルトを母体とする。遺物は瓦質の羽釜 Po11 が出土した。鍔が短く口縁部の立ち上がりも緩いことから 14 世紀の所産と考えられる。

206 土坑（第 97・124 図、第 45 表、図版 58）

１区東側中央 8a-1C-1e グリッドにおいて検出した。掘立柱建物２の南西隅、207 柱穴の東隣に位置するが、関係は不明である。平面形は不整な円形、断面形は緩い舟底状である。規模は長軸 0.92m、短軸 0.91m、検出面からの深さ 0.19m を測る。埋土は３層に分けられ、褐灰色シルトを母体とする。遺物は土師器片が出土したものの、体部片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から中世と考えられる。

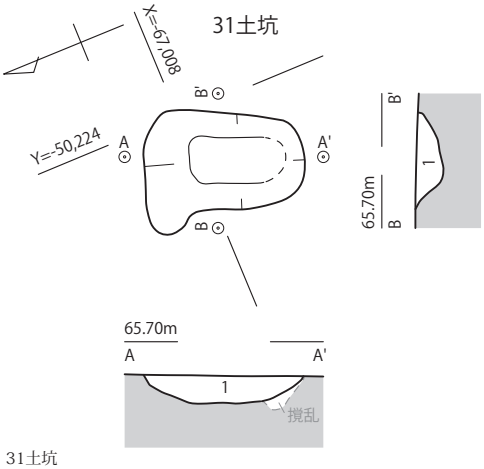
215 土坑（第 97・124 図、第 45 表）

１区東側中央 8a-1C-1e グリッドにおいて検出した。掘立柱建物２の南西隅、163 柱穴の北東隣に位置するが、関係は不明である。平面形は不整な円形、断面形は緩い舟底状である。規模は長軸 0.75m、短軸 0.57m、検出面からの深さ 0.18m を測る。埋土は単層で暗灰黄色シルトを母体とする。遺物は出土していない。

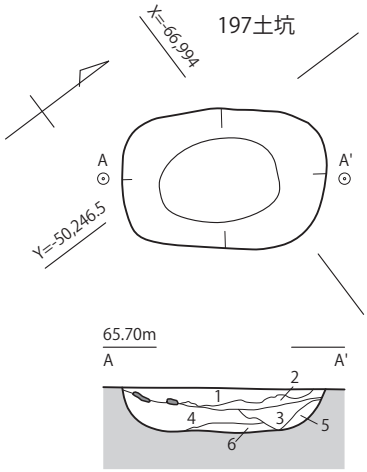
本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から中世と考えられる。

（6）柱穴・ピット

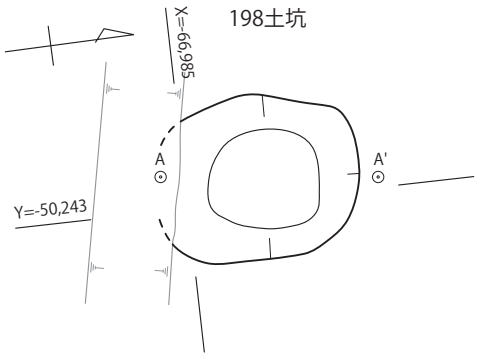
単独の柱穴 31 基、単独のピット 113 基を検出した。いずれも調査区の東側半分に広がる。建物として配置が確定できないものの、断面で柱痕があるものを柱穴とした。柱穴状ではあるが、断面で柱痕が確認できないものをピットとした。ほとんどの遺構から遺物が出土していないこと、出土していても古い遺物が含まれていることから、遺構の埋土で分類した。暗褐色・黄褐色シルト、灰色・黄色シルトを主体に堆積する遺構を第１遺構面に帰属することにした。以下、主な遺構についてのみ記

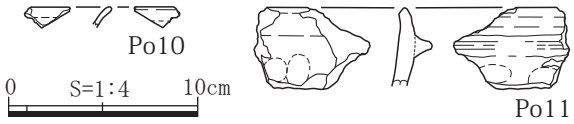


31土坑
1　10YR2/1 黒色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 シルト　φ～2cmブロック少混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中

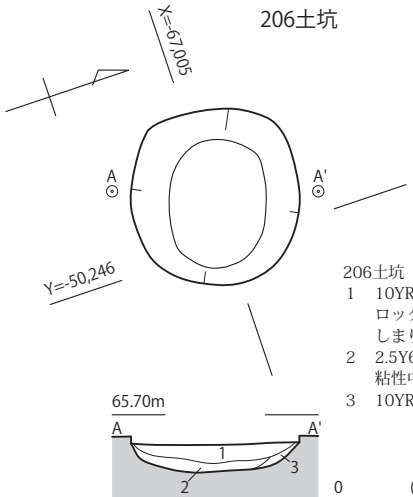


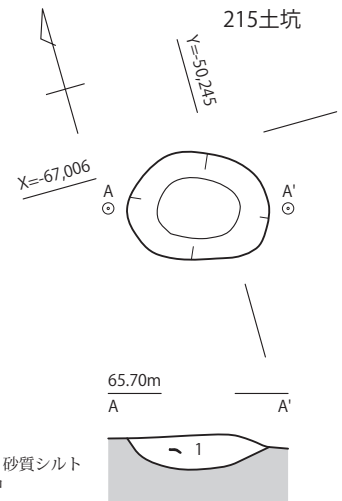
197土坑
1　10YR6/1 褐灰色 シルト (10YR8/8 黄橙色 鉄分φ～10cmブロック混　φ1～5cm礫混　鉄片混)　粘性中　しまり中
2　10YR7/1 灰白色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ～5cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR7/2 にぶい黄橙色 シルト (10YRY3/1 黒褐色 シルトφ～20cmブロック多混　φ～0.1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　10YR7/2 にぶい黄橙色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ～5cmブロック少混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
5　2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト (φ～0.5cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや弱
6　2.5Y7/1 灰白色 シルト (2.5Y8/1 灰白色 シルトφ～5cmブロック混　φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中





198土坑
1　7.5YR6/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック混　10YR2/1 黒色 シルトφ～10cmブロック少混　φ～5cm礫混　φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　7.5YR6/2 灰褐色 シルト (10YR2/1 黒褐色 シルトφ～20cmブロック多混　φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10Y7/1 灰白色 シルト　粘性やや強　しまり中
4　10YR6/1 褐灰色 シルト (10YR2/1 黒褐色 シルトφ～5cmブロック混)　粘性中　しまり中





206土坑
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 ロームφ～0.5cmブロック少混　φ～1cm礫少混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (φ～1cm礫少混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中

0　(1:40)　1m

215土坑
1　2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト (2.5Y8/6 淡黄色 砂質シルトφ～3cmブロック少混)　粘性中　しまり中

第 124 図　31・197・198・206・215 土坑、197・198 土坑出土土器

述する。

86 柱穴（第 97・125 図、第 46・69 表、図版 142）

１区東側 7a-10C-10d グリッドにおいて検出した。掘立柱建物３の中央付近、113 柱穴の南 0.6m に位置し、中央柱の補助の柱穴の可能性もあるが断定は難しい。平面形は円形、断面形は先の細いＵ字形である。規模は長軸 0.20m、短軸 0.20m、検出面からの深さ 0.49m を測る。埋土は７層に分けられ褐灰色シルトを母体とする。柱痕や掘方埋め土は確認できず、不規則な堆積である。遺物は土師器の坏 Po12 が出土した。口縁部は外反するが器壁は厚くやや深い。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から中世前期と考えられる。

90 柱穴（第 97・125 図、第 46・69 表、図版 142）

１区東側 7a-10C-10d グリッドにおいて検出した。掘立柱建物３の南東隅にあたる 91 柱穴の東側 0.1m に位置するものの関係は不明である。平面形は円形、断面形は深いＵ字形である。規模は長軸 0.21m、短軸 0.20m、検出面からの深さ 0.48m を測る。埋土は５層に分けられ褐灰色シルトを母体とする。２・３層は柱痕であるが、検出面までの立ち上がりはなく、柱は折り取られたと考えられる。４・５層は掘方埋め土である。遺物は須恵器甕の体部片 Po13 が出土したものの、周囲からの混入と考える。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から中世と考えられる。

92 柱穴（第 97・125 図、第 46・69 表、図版 142）

１区東側 7a-10C-10d グリッドにおいて検出した。掘立柱建物３と４が重複し、掘立柱建物３の 136 柱穴の東側 0.7m にある。平面形は不整な円形､断面形は深いＵ字形である。規模は長軸 0.16m、短軸 0.15m、検出面からの深さ 0.30m を測る。埋土は４層に分けられ、褐灰色シルトを母体とする。柱痕や掘方埋め土は確認できない。遺物は３層中から鉄滓が出土した。出土位置には高低差があることから、柱を埋め戻す過程で入れられたと考えられる。ほかに土師器の小皿 Po14 が出土した。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から中世前期と考えられる。

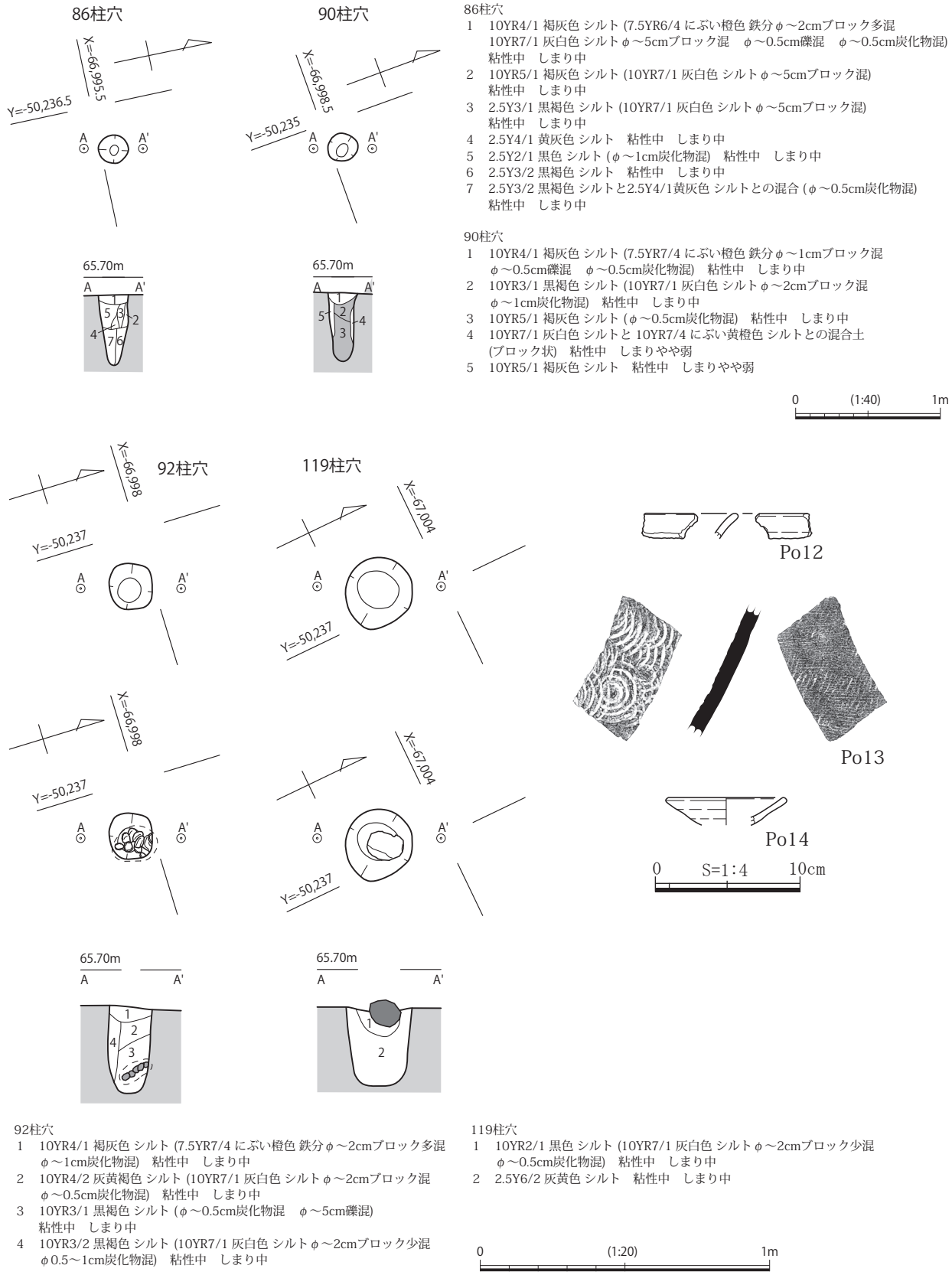
119 柱穴（第 97・125 図、第 46 表）

１区東側 8a-1C-1d グリッドにおいて検出した。掘立柱建物２と４の周辺ではあるが、いずれも関係は不明である。平面形は不整な円形、断面形はＵ字形である。規模は長軸 0.26m、短軸 0.23m、検出面からの深さ 0.26m を測る。埋土は２層に分けられ、灰黄色シルトを母体とする。検出面から径 10 ～ 13cm の円礫が出土した。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から中世と考えられる。

156 柱穴（第 97・126 図、第 46 表）

１区東側 8a-1C-1d グリッドにおいて検出した。掘立柱建物２の東側に位置するが、関係は不明である。規模は長軸 0.25m、短軸 0.23m、検出面からの深さ 0.27m を測る。平面形は不整な円形、断面形はＵ字形である。埋土は３層に分けられたが、底面付近は確認できていない。褐灰色シルトを母



86柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR6/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック多混
10YR7/1 灰白色 シルトφ～5cmブロック混　φ～0.5cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)
粘性中　しまり中
2　10YR5/1 褐灰色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～5cmブロック混)
粘性中　しまり中
3　2.5Y3/1 黒褐色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～5cmブロック混)
粘性中　しまり中
4　2.5Y4/1 黄灰色 シルト　粘性中　しまり中
5　2.5Y2/1 黒色 シルト (φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
6　2.5Y3/2 黒褐色 シルト　粘性中　しまり中
7　2.5Y3/2 黒褐色 シルトと2.5Y4/1黄灰色 シルトとの混合 (φ～0.5cm炭化物混)
粘性中　しまり中

90柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～1cmブロック混
φ～0.5cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック混
φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR5/1 褐灰色 シルト (φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
4　10YR7/1 灰白色 シルトと 10YR7/4 にぶい黄橙色 シルトとの混合土
(ブロック状)　粘性中　しまりやや弱
5　10YR5/1 褐灰色 シルト　粘性中　しまりやや弱

0　(1:40)　1m

92柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック多混
φ～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR4/2 灰黄褐色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック混
φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (φ～0.5cm炭化物混　φ～5cm礫混)
粘性中　しまり中
4　10YR3/2 黒褐色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック少混
φ0.5～1cm炭化物混)　粘性中　しまり中

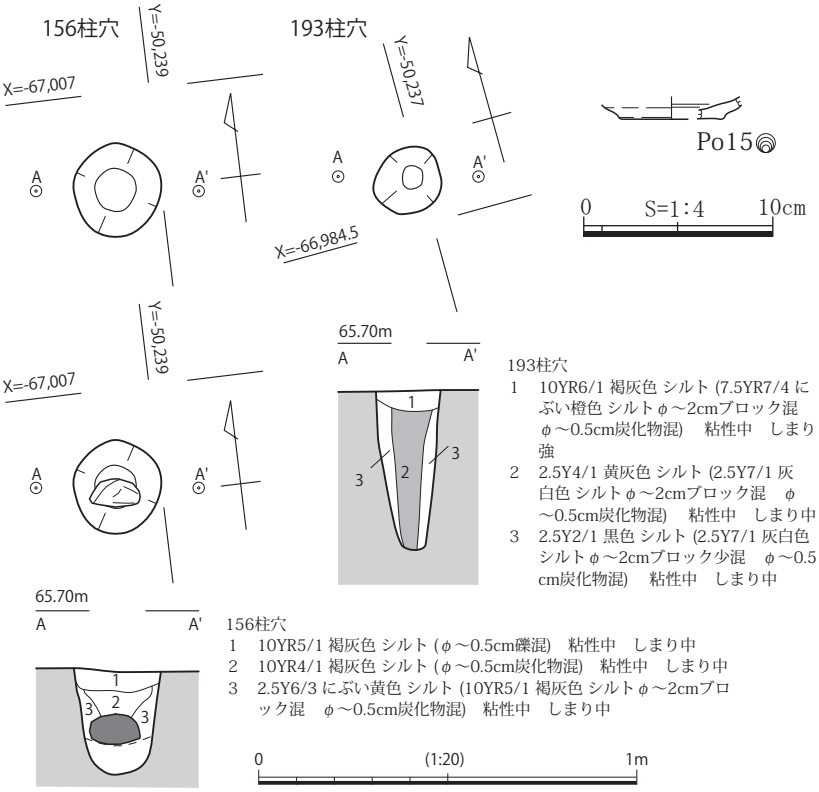
119柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR7/1 灰白色 シルトφ～2cmブロック少混
φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y6/2 灰黄色 シルト　粘性中　しまり中

0　(1:20)　1m

第 125 図　86・90・92・119 柱穴、86・90・92 柱穴出土土器

体とする。底面から浮いた状態で、径８～15cmの礫が出土した。柱痕や掘方埋め土は確認できないため、柱の抜き取り後に埋め戻されたと考えられる。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から中世と考えられる。



第 126 図　156・193 柱穴、193 柱穴出土土器

193 柱穴（第 97・126 図、第 46・69 表、図版 142）

１区東側 7a-10C-9d グリッドにおいて検出した。平面形は不整な円形、断面形は細いＵ字形である。規模は長軸 0.19m、短軸 0.17m、検出面からの深さ 0.43m を測る。埋土は３層に分けられ、褐灰色シルトを母体とする。２層は柱痕であるが、検出面までの立ち上がりはないため、柱は折り取られたと考えられる。３層は掘方埋め土である。遺物は土師器の皿の底部 Po15 が出土した。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から中世と考えられる。

第３項　第２遺構面の調査（古代・古墳時代以前の遺構と遺物）

地形は、標高 65.2m 前後で緩やかに北西方向に下る。遺構を検出したのはⅢ層（黒ボク）の下面、Ⅳ層（漸移層）またはⅤ層（ソフトローム）の上面である。調査区の西側は流路の堆積で、Ⅴ層は調査区の東側で検出した。

１区中央部から西側に 301 流路、流路の東側に沿うように 302･303 道路があり、その東側に土坑、柱穴、ピットが分布する。遺構の埋土は、古代では黒褐色に黄灰色シルトブロックを含み、古墳時代以前はⅢ層由来の黒色または黒褐色シルトを母体とする。

古代の遺構には流路２条、道路２条、土坑３基があり、古墳時代以前の遺構には流路１条、土坑３基、単独の柱穴８基、単独のピット 176 基がある。

（1）道路

１区の西側に、南から北方向に向かう 301 流路があり、流路の東岸に沿うように 303 道路、さらに東側 0.6 ～ 2.8m に 302 道路がある。道路はいずれも溝状の掘り込みで、底面に波板状凹凸面がある。道路の掘方は基盤層のソフトローム層まで達し、底面を掘削した後に底面付近を埋め戻している。隣接する⑭～⑯層は、⑭・⑮層は 302 道路、⑯層は 303 道路に関する盛土とみられる。

道路の加工痕跡は波板状凹凸面と呼称されている（近江 2006）が、ここでは段状の掘り込み、不整形土坑、小土坑に分類して記述する。

段状の掘り込み：溝の両肩から掘り込んだ平面方形または長方形の土坑と、同じ方向に連続して掘削する階段状のものがある。

不整形土坑：底面状に掘削された不整楕円形の掘り込みで、幅の狭い楕円形状を呈する。溝の主軸に並行、直交するものがある。断面は皿状である。

小土坑：直径５～10cm、深度も直径と同じか、それ以上に深い。木根のような不整形でなく、垂直方向に掘り込まれる。溝の底面、肩等で多数検出した。

こうした波板状凹凸面を成形した後、黒色土を入れて埋め戻した簡易な構造である。使用や経年により土が流出して凹凸面が磨滅し、その度に近接する範囲を繰り返し溝状に掘削したと考えられる。

両遺構の関係をみると、西隣に位置する 301 流路との位置では、303 道路では接するものの、302 道路では東側に張り出し、間隔が一定ではない。間に硬化面もなく、遺存状況に差があり同時に機能したとは考えにくいことから、個々の遺構として記述する。

302 道路（第 127 ～ 134 図、第 47・69・98 表、図版 59・60・69・143）

１区中央東側 7a-10C-8f ～ 10f・ 10e、8a-1C-1e・ 1f において検出した。現存長は 31.4m、遺構底面レベルは南端部で 65.3m、北端部で 64.92m と南から北へ 0.38m 下る。最大幅は 0.5 ～ 1.7m と一定せず、深さは最大で 0.28m を測る。主軸方向は、南端で N-26° -E、中央付近で東側に袋状に広がり、ほぼ南北に向きを変え、北側にかけて N-21° -W となる。南壁の断面では、道路の西隣に 14 ・ 15 層から形成される幅 1.9m、最大高 0.19m の低い盛土状の高まりを確認したものの、道路を検出する際に平坦にしたため、平面プランは検出できなかった。

道路の埋土は黒褐色シルトを主体とし、礫をほとんど含まない。路面と考えられる。下層は黒色または黒褐色シルトで、褐灰色から暗褐色のブロックを含む凹凸が連続する。埋土中に含まれている礫の量を確認するため、C-C' ベルトから北側１m の範囲をサンプルとして篩いにかけた。５mm 以上の礫は、乾燥重量 27.9kg の中に 0.5kg、割合は 1.8% である。ほぼ砂またはシルトの均一な土である。意図的に礫を除いたとも考えられる。道路は同じ方向の溝状の掘り込み３条が重複する。南端では２列、中央付近にかけて部分的に３列となり、北端では１列となる。調査区外に続く。以下、古→新へ 302a 段階・302b 段階・302c 段階の順に記述する。

［302a 段階］

道路の中央から北側にかけて、立ち上がりの一部を検出したものの、遺存状況は悪い。最大幅は 0.39m である。断面は皿状で、検出面からの深さは 0.04m を測る。底面には連続する不整形土坑のほか、小土坑が散在する程度である。段状の掘り込み２基、不整形土坑７基、小土坑 19 基を検出した。埋土は黒色シルトから黒褐色シルト層に、にぶい褐色シルトのブロック土が混じる。

［302b 段階］

道路の南端から北端まで、ほぼ連続する。最大幅は 0.82m、断面は浅い逆台形で、検出面からの深さは 0.17m である。底面では、南端に小土坑が散在する。中央付近には小土坑のほか段状の掘り込みと、北側の一部に長方形掘り込みが連続する。北端には底面付近に小土坑がある。段状の掘り込み 33 基、不整形土坑 17 基、小土坑 146 基を検出した。埋土は暗灰色シルトまたは暗灰黄色シルトである。北端では基盤層に含まれている径 10 ～ 30cm の礫が多く含まれ、しまりが強いことから路面の一部と考えられる。

［302c 段階］

道路の南端と中央から北側にあり、中央北側では２条の掘方が並行する。南端から中央に向かい段

第 127 図　第２遺構面全体図

状の掘り込みが連続する。途切れた後、北側に延びる。北側の一部では並行して２条の溝状の掘り込みがあるが、切り合いはなく、遺存状況は良好である。最大幅は0.51m、断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.28mを測る。底面には段状の掘り込み53基、不整形土坑27基、小土坑57基を検出した。埋土は黒色シルトである。

埋土中から弥生土器の高坏Po16、壺または甕の底部Po17、古墳時代の土師器の甕Po18、管玉Ｓ２が出土した。埋土内の炭化物（試料32）の放射性炭素年代測定（第５章第３節）では、暦年代はcalBC3045-2919（暦年較正２σの確率１位）の結果で、遺構の時期を示すものではない。土壌に混入した炭化物と考えられる。道路の北側は４区南区の365道路に延伸するとみられ、古代の道路と考えられる。

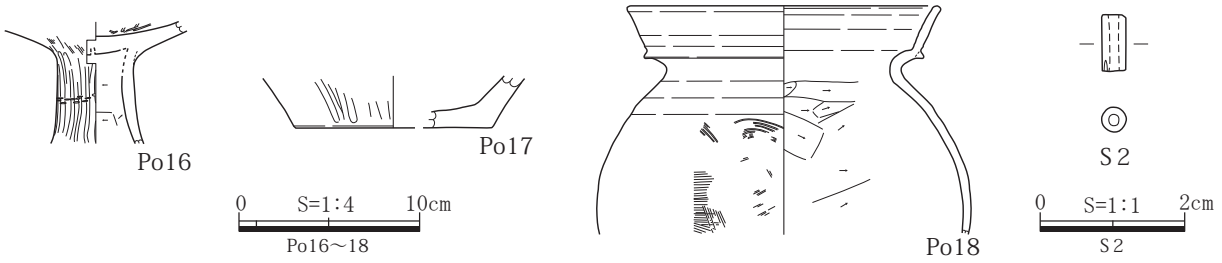
303道路（第127・129～134図、第47表、図版59・60）

１区中央東側7a-10C-9f・10f、8a-1C-1fグリッドにおいて検出した。現存長は28.3m、遺構底面レベルは南端部で65.24m、北端部64.88mと南から北へ0.36m下る。最大幅は0.3～1.9mと一定せず、深さは最大で0.3mを測る。302道路と比較すると、深い箇所もあるものの、全体的に掘方の摩滅が進んでいる。主軸方向は、南端でN-33°-E、中央付近で緩やかに向きを変え、北側でN-21°-Wとなり、302道路に概ね並行する。南壁の断面では、道路の西隣に16層から形成される幅2.1m、最大高0.09mの低い盛土状の高まりを確認したものの、道路を検出する際に平坦にしたため、平面プランは検出できなかった。

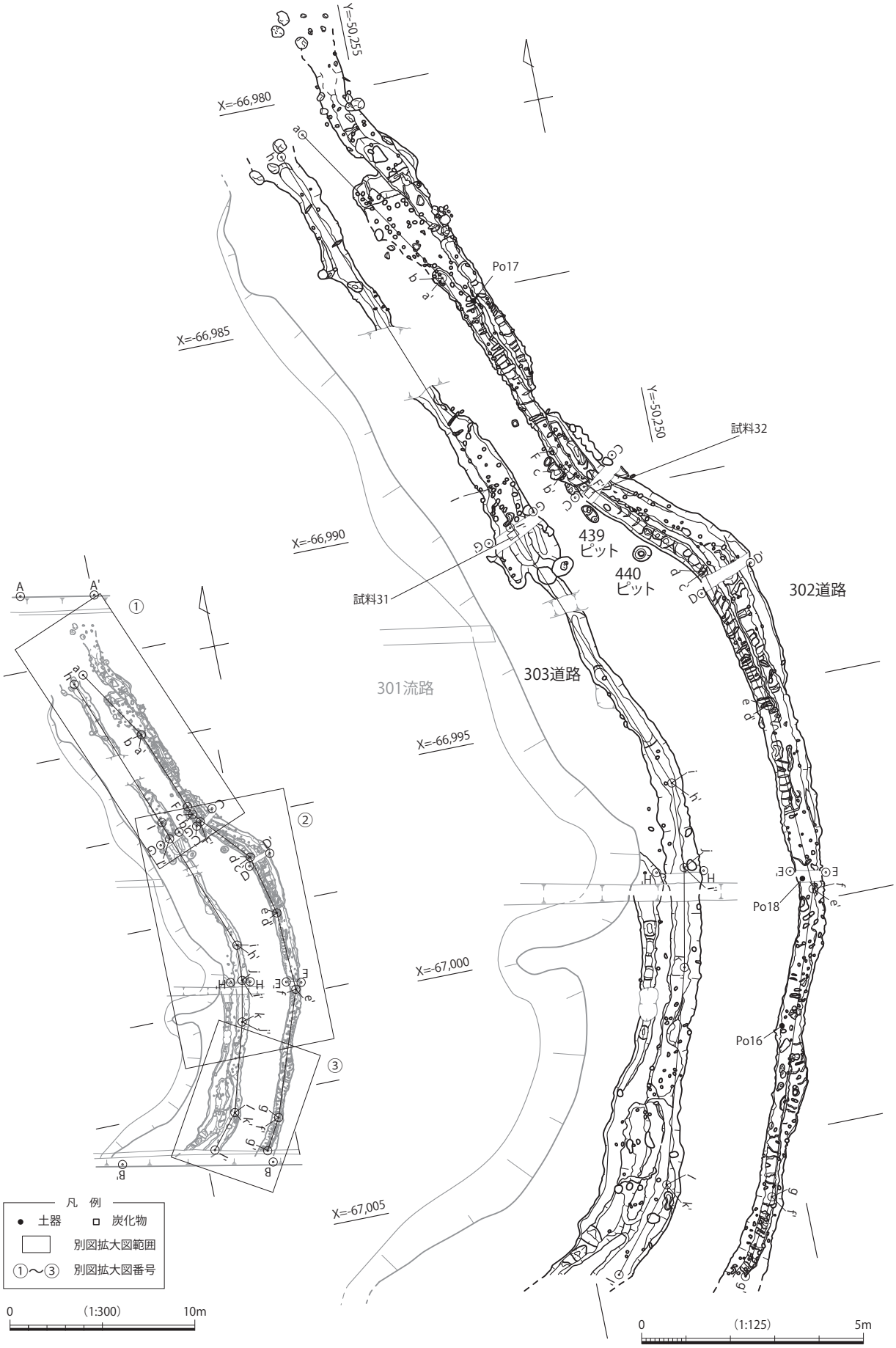
埋土は黒褐色シルトを主体とし、礫をほとんど含まない。検出面上では流出したのか、しまりの強い層は確認できない。下層は黒色または黒褐色シルトで、褐灰色や暗褐色を主体とする凹凸が連続する。埋土中に含まれている礫の量を確認するため、G-G'ベルトから北側１mの範囲をサンプルとして篩いにかけた。５mm以上の礫は、乾燥重量53.7kgの中に0.7kgで、割合は1.3%である。ほぼ砂またはシルトの均一な土である。302道路と同様、意図的に礫を除いたとも考えられる。遺物は土師器片が出土したものの、小片や体部片のため図化していない。いずれも弥生土器と古墳時代の土器のため、遺構の時期を示す遺物はない。東隣の302道路が古代の遺構であること、遺存状態が悪いことから、同時期であるとはいえ、若干遡ると考えられる。道路は同じ方向の溝状の掘り込み３条が重複する。調査区の南側と中央の一部は３列ある。南端は２列、北端は１列で調査区外に延びる。以下、古→新へ303ａ段階・303ｂ段階・303ｃ段階の順に記述する。

［303a段階］

道路の南側と中央から東側の一部で検出したものの、遺存状態は悪い。最大幅は0.57mである。

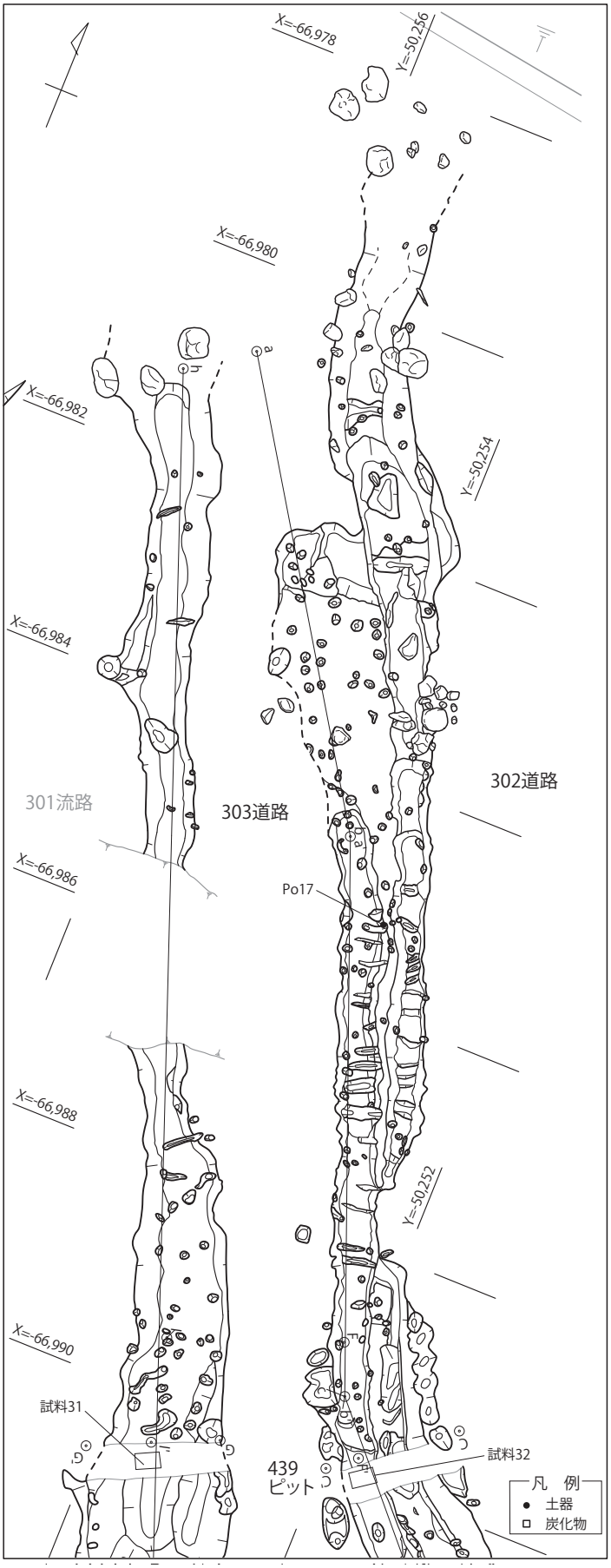


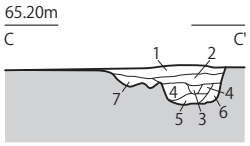
第128図　302道路出土遺物



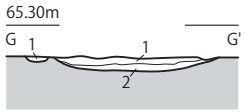
第 129 図　302・303 道路（１）

拡大図①

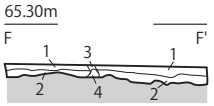




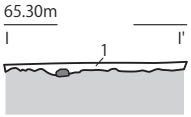
302道路 C-C'
1　2.5Y3/2 黒褐色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック混 2.5Y8/4 淡黄色 砂質シルトφ～1cmブロック混　φ～1cm礫多混) 粘性中　しまり中
2　2.5Y3/1黒褐色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～2cmブロック混 φ～3cm礫多混)　粘性中　しまり中
3　2.5Y2/2 黒褐色 シルト　粘性中　しまり中
4　2.5Y3/2 黒褐色 シルトと 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルトとの混合土 (φ～2cmブロック状混)　粘性中　しまり中
5　2.5Y2/1 黒色 シルト (2.5Y5/2 暗灰黄色 シルトφ～2cmブロック少混 φ～1cm礫混)　粘性中　しまり中
6　2.5Y2/1 黒色 シルト (2.5Y3/2 暗灰黄色 シルトφ～2cmブロック少混) 粘性中　しまり中
7　2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト (2.5Y7/4 浅黄色 砂質シルト φ～2cmブロック混　φ～1cm礫混)　粘性中　しまり中



303道路 G-G'
1　2.5Y2/1 黒色 シルト (2.5Y7/4 浅黄色 シルトφ～3cmブロック混 φ～2cm礫混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y3/2 黒褐色 シルト (2.5Y7/4 浅黄色 シルトφ～2cmブロック多混 φ1～5cm礫混)　粘性中　しまり中



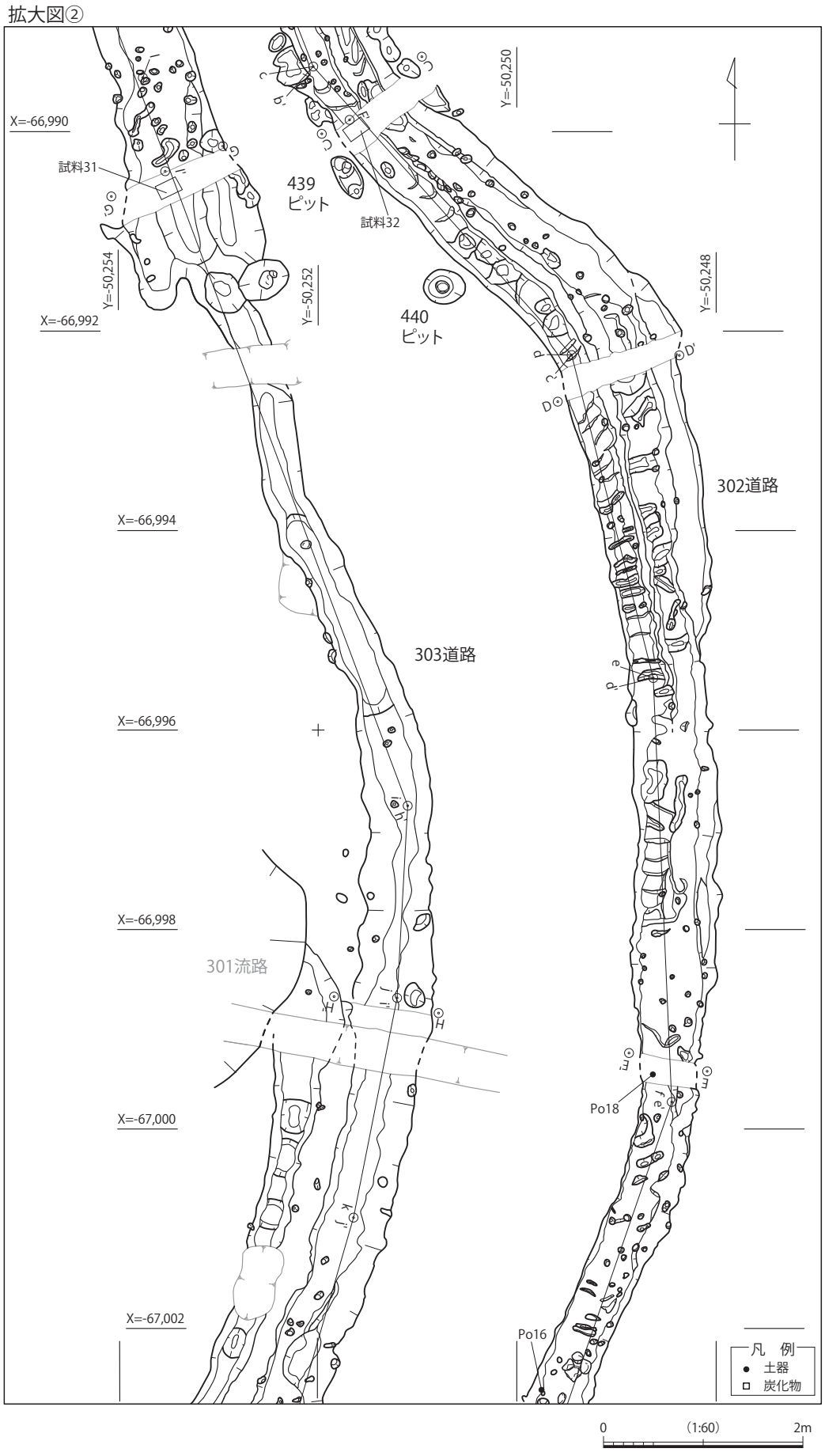
302道路 F-F'
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (7.5YR6/4 にぶい橙色 シルト鉄分 φ～2cmブロック多混　10YR8/4　淡黄色 シルト φ～2cmブロック混 φ～1cm礫多混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまりやや強
2　10YR5/1 褐灰色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ～3cmブロック多混　φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物混) 粘性中　しまり中
3　2.5Y7/4 浅黄色 砂質シルト と2.5Y5/2 暗灰色 砂質シルトの混合土 粘性中　しまり中
4　10YR5/1 褐灰色 シルト　粘性中　しまり中



303道路 I-I'
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ～2cmブロック少混 φ0.5cm礫混　φ10cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中

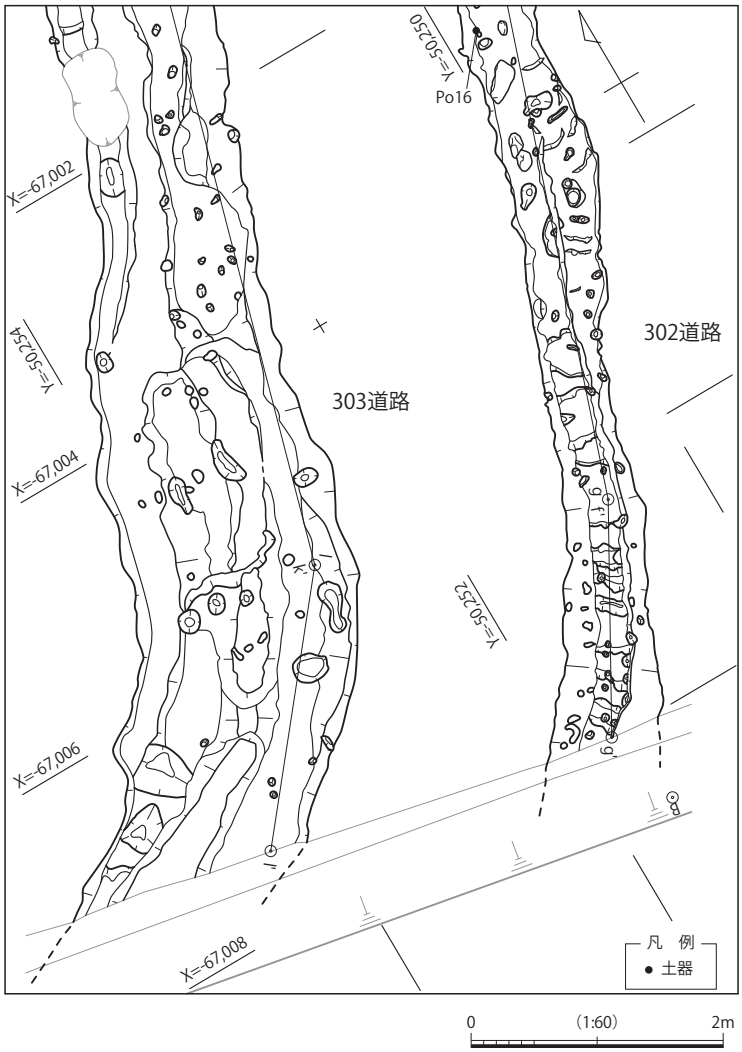
0　(1:40)　1m

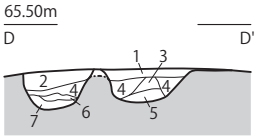
第 130 図　302・303 道路（２）



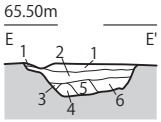
第 131 図　302・303 道路（３）

拡大図③

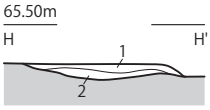




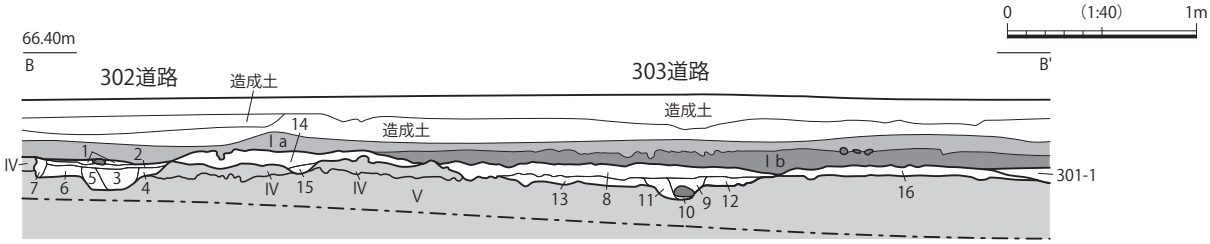
302道路 D-D'
1　2.5Y4/1 黄灰色 シルト (2.5Y7/4 浅黄色シルトφ～3cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y4/1 黄灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 シルトφ～3cmブロック混)　粘性中　しまり中
3　2.5Y4/2 暗灰黄 砂質シルト (2.5Y7/4 浅黄色 砂質シルトφ～3cmブロック混)　粘性中　しまり中
4　2.5Y5/2 暗灰色 砂質シルト (2.5Y7/4 浅黄色 砂質シルトφ～2cmブロック少混)　粘性中　しまり中
5　2.5Y5/1 黄灰色 砂質シルト (2.5Y7/4 浅黄色 砂質シルトφ～3cmブロック多混)　粘性中　しまり中
6　2.5Y5/1 黄灰色 砂質シルト (2.5Y7/4 浅黄色 砂質シルトφ～5cmブロック多混)　粘性中　しまり中
7　2.5Y5/2 暗灰色 砂質シルト (2.5Y7/4 浅黄色 砂質シルトφ～2cmブロック少混)　粘性中　しまり中



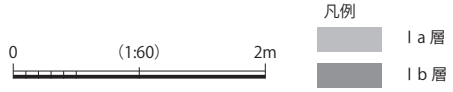
302道路 E-E'
1　2.5Y3/1 黒褐色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 シルトφ～1cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y3/2 黒褐色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 シルトφ～1cmブロック少混)　粘性中　しまり中
3　2.5Y 4/1黄灰 砂質シルト　粘性中　しまり中
4　2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (φ～0.5cm礫混)　粘性中　しまり中
5　2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質シルト (2.5Y7/4 浅黄色 砂質シルトφ～2cmブロック少混)　粘性中　しまり中
6　2.5Y5/1 黄灰色 砂質シルト (φ～1cm礫多混)　粘性中　しまり中



303道路 H-H'
1　2.5Y2/1 黒色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 シルトφ～2cmブロック混　φ～0.5cm礫混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y3/2 黒褐色 シルト (2.5Y7/4 浅黄色 シルトφ～2cmブロック混　φ～1cm礫混)　粘性中　しまり中



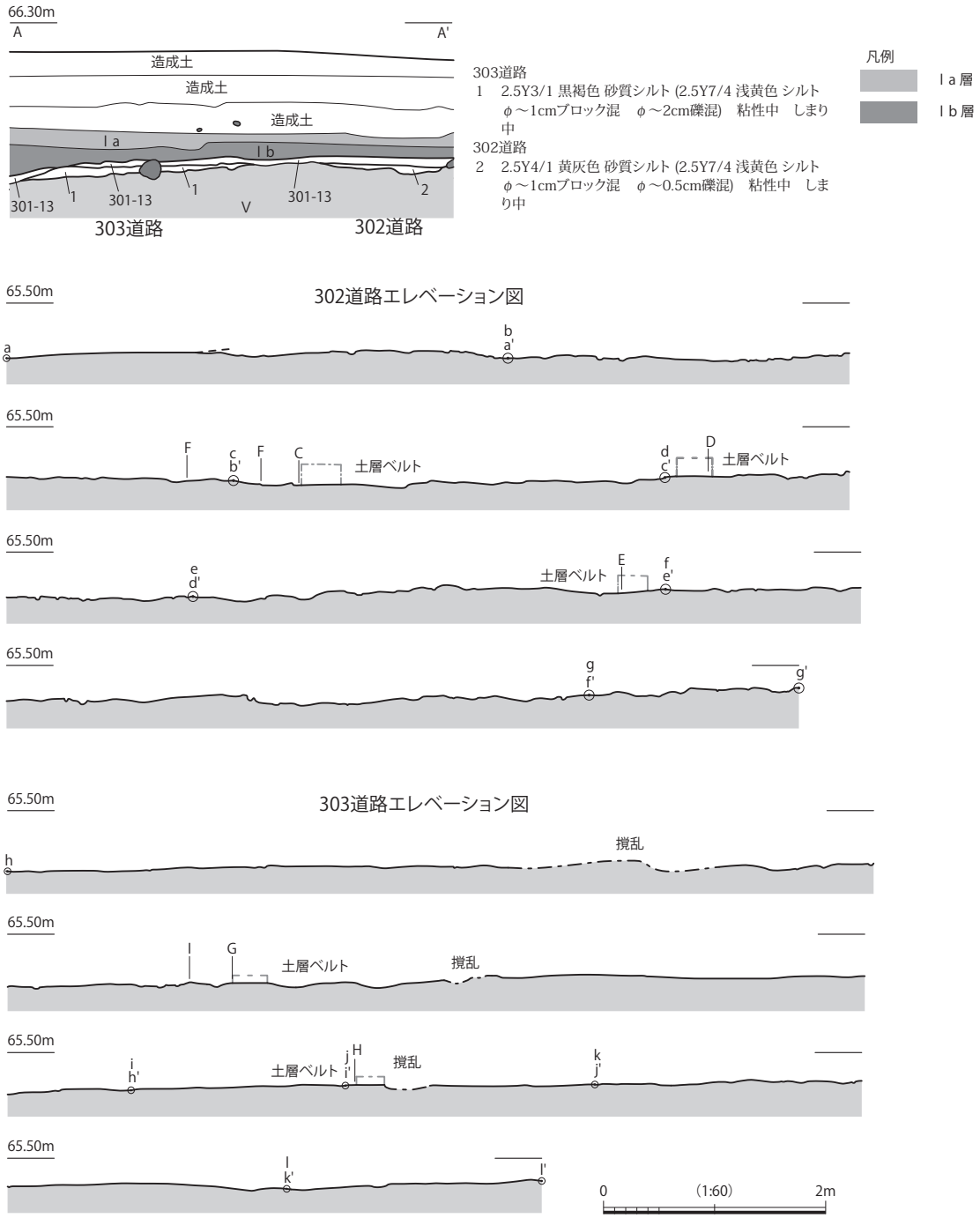
302道路 B-B'
1　10YR5/1 黄灰色 砂質シルト (φ～10cm石混　φ～0.5cm礫多混)　粘性中　しまり強
2　10YR2/1 黒色 シルト (φ～3cm礫混　10YR7/1 灰色 シルトφ～3cmブロック混)　粘性中　しまり中
3　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR7/1 灰色 シルトφ～5cmブロック混　φ～0.5cm礫混)　粘性中　しまり中
4　10YR3/2 黒褐色 シルト (φ～5cm石混　10YR7/1 灰色 シルトφ～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
5　10YR3/3 暗褐色 シルト (10YR7/1 灰色 シルトφ～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
6　10YR2/3 黒褐色 シルト (10YR7/1 灰色 シルトφ～3cmブロック混)　粘性中　しまり中
7　10YR4/2 灰黄褐色 シルト (10YR7/1 灰色 シルトφ～1cmブロック混)　粘性中　しまりやや弱



303道路 B-B'
8　10YR2/1 黒色 シルト (φ～0.5cm礫多混　10YR7/1 灰色 シルトφ～2cmブロック少量混)　粘性中　しまり中
9　10YR4/1 褐灰色 シルト (φ～20cm石混　φ～0.5cm礫混)　粘性中 しまり中
10　10YR5/1 褐灰色 砂質シルト (φ～1cm礫多混)　粘性弱 しまり弱
11　10YR3/2 黒褐色 シルト (φ～0.5cm礫混　10YR7/1 灰色 シルトφ～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
12　10YR4/2 灰黄褐色 シルト (φ～0.5cm礫混　10YR7/1 灰色 シルトφ～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
13　10YR3/3 暗褐色 シルト (φ～0.5cm礫混　10YR7/1 灰色 シルトφ～2cmブロック混)　粘性中　しまり中

盛土
14　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR7/1 灰色 シルトφ～2cmブロック混 10YR7/3 にぶい黄橙色 シルトφ～3cmブロック多混)　粘性中　しまり中
15　2.5Y3/1 黒褐色 シルト (2.5Y7/3 浅黄色 シルトφ～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
16　2.5Y2/1 黒色 シルト (7.5YR7/6 橙色 シルトφ～5cmブロック混　φ～5cm礫混 φ～1cm礫多混)　粘性中　しまり中

第 132 図　302・303 道路（4）



第 133 図　302・303 道路（５）

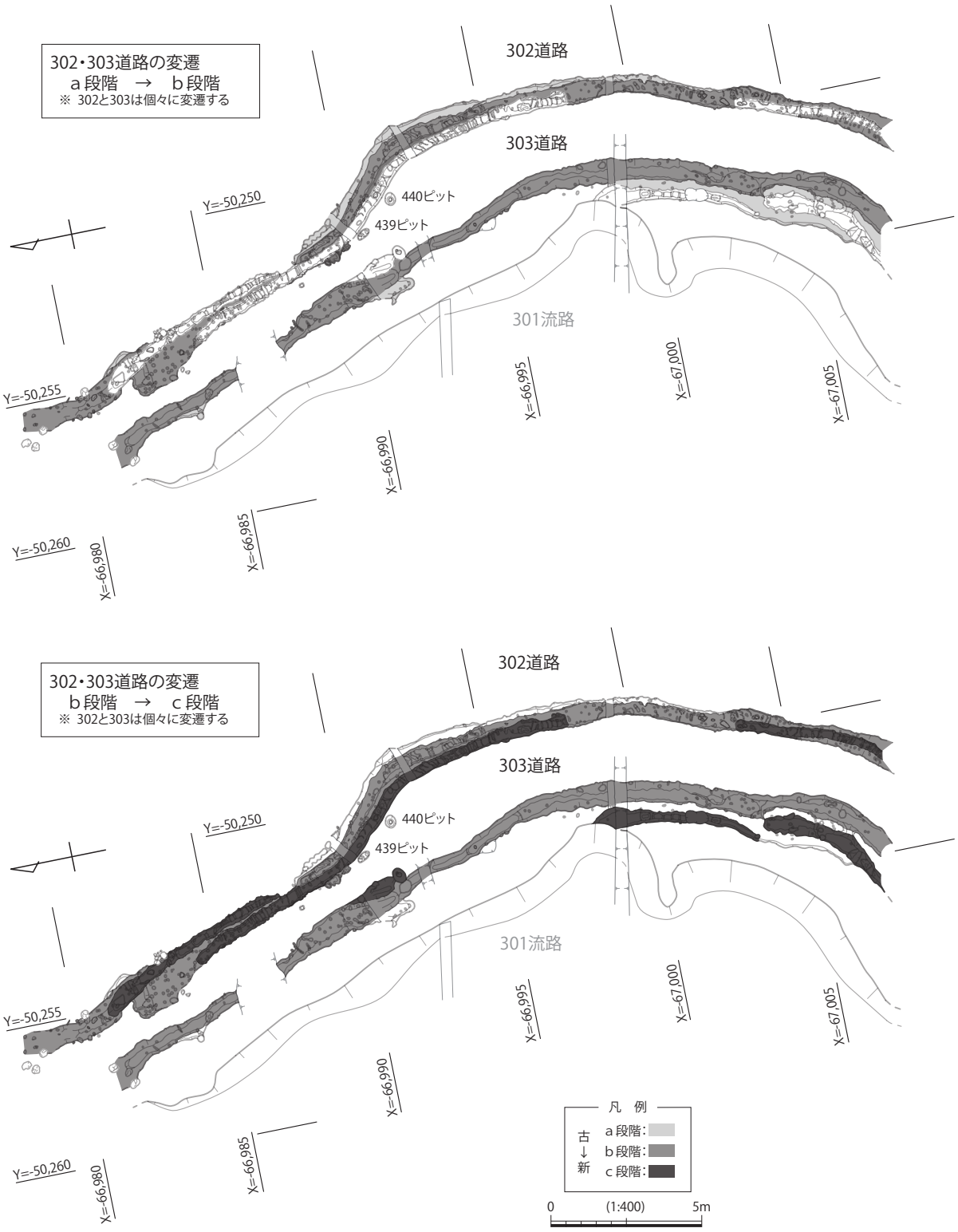
断面は皿状で、検出面からの深さは 0.10ｍである。底面には小土坑が散在する程度で、不整形土坑３基、小土坑 19 基を検出した。埋土は黒色シルトを基調とする。

［303b 段階］

道路の南から北までほぼ連続するものの、遺存状況は悪い。最大幅は 0.89ｍである。断面は皿状で、検出面からの深さは 0.13ｍを測る。底面で段状の掘り込み６基、不整形土坑 16 基、南側と中央付近の一部で小土坑 77 基を検出した。埋土は黒褐色シルトで灰色シルトのブロックを含む。

［303c 段階］

道路の南側と中央付近の一部にある。遺存状況が比較的良い。南側では一部途切れ、北端では屈曲



第 134 図　302・303 道路変遷図

して 301 流路の肩と重複する。最大幅は 0.65ｍである。断面は浅い逆台形状で、検出面からの深さは 0.3ｍを測る。底面では、南側で段状の掘り込み６基、北側で不整形土坑 13 基、小土坑８基を検出した。埋土は褐灰色シルトで、灰色シルトのブロックを含む。

埋土内の炭化物（試料 31）の放射性炭素年代測定（第５章第３節）では、calBC540-402（暦年較正２σの確率１位）の結果で、遺構の時期を示すものではない。土壌に混入した炭化物と考えられ

る。302 道路と同様に古代の道路と考えられる。北側は４区南区の 365 道路西側に向かうものの、延伸部を検出していないため、消失の可能性がある。

（２）流路

301 流路（第 127・135 ～ 137 図、第 44・98 表、図版 146）

１区東側 7a-10C-8f ～ 9i グリッドにおいて検出した。平面形は不整形で、幅は北壁で 13m 程度、南壁では西側で立ち上がりが確認できないことから 30m 以上ある。南側は袋状に広がるものの、北側で幅が狭くなり４区南区に延びる。東岸に並行するように 303 道路がある。南北の長さ 34m、検出面からの深さは 0.70m を測る。断面形は、東側で検出面から斜めに下がり、一旦立ち上がるものの西側ではさらに深くなる。西側については南から北流する１溝に切られるほか、441・442 流路と重複する。埋土は南壁で４層、北壁で５層に分けられる。底面付近の堆積は、南側では砂層や青灰色の粘土層を主体とし、北側では径 20 ～ 50cm の礫を含む灰色砂である。東岸に水路状遺構と入り江状遺構がある。

［水路状遺構］

東岸に沿って溝状に窪む範囲を確認し、水路状遺構とした。東岸から約 30° の角度で川底に続き、西側は緩く立ち上がりながら川底に続く。幅は 3.50 ～ 8.50m、長さは 15.50m で、北側は袋状に広がる。南壁での深さは 0.46m を測る。主軸は南端付近の N-31° -E の北東向きから、中央から北側にかけて N-20° -W の北西向きとなる。流路の東岸沿いの水深を確保するため、溝状に深く掘削したと考えられる。

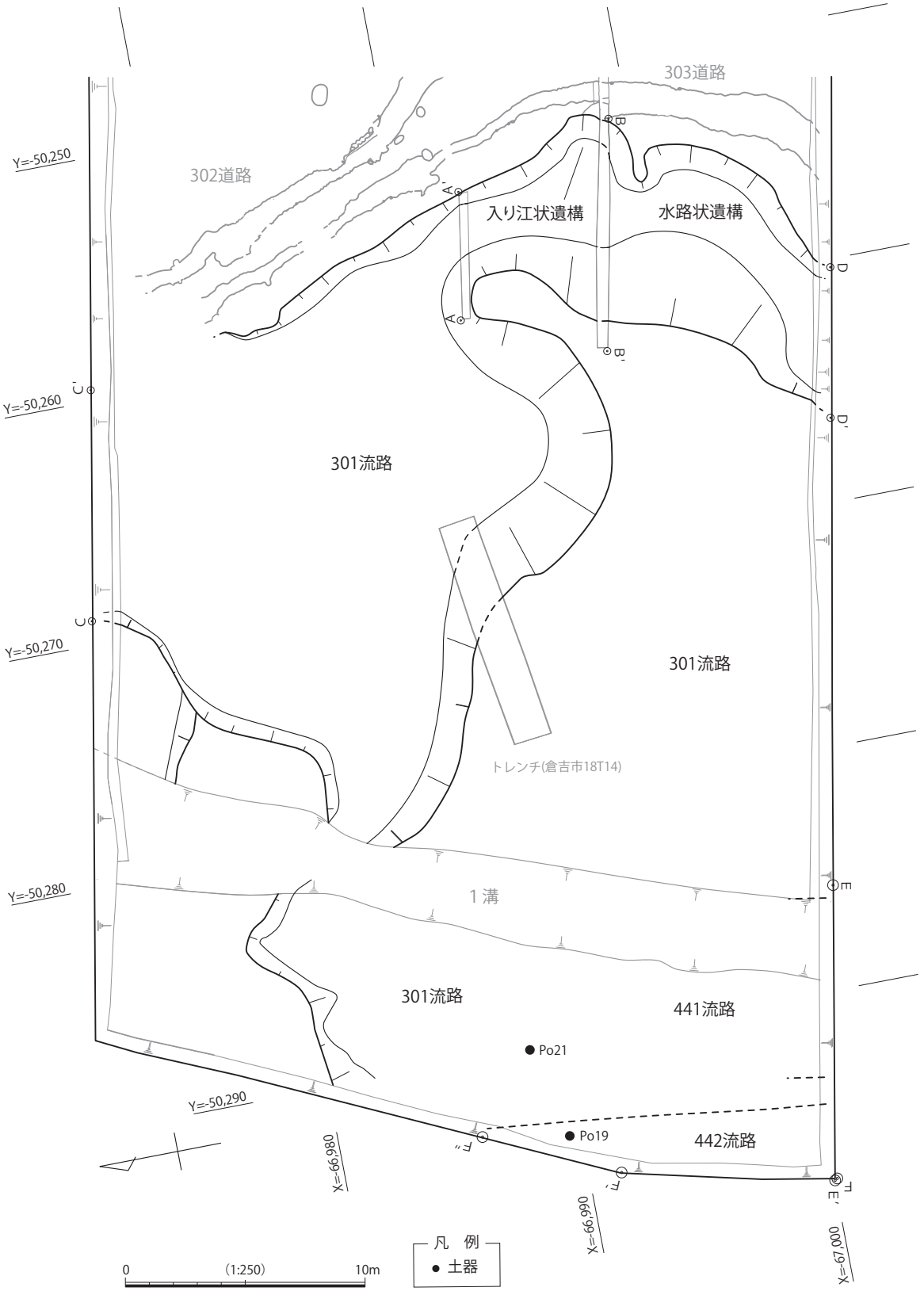
［入り江状遺構］

東岸の中央やや南側に、幅２m、長さ２m の突出部と連続する幅３m、長さ２m の入り江状に湾曲する箇所がある。東岸からの深さは 0.50m で、掘削面が平滑に整えられた湾状を呈する。南東側は 303 道路と接する。南東側で 303 道路と接するものの、平面、断面とも切り合いは確認していない。水路状遺構と道路との交差する箇所であり、陸側との接続を目的とした造作と考えられる。

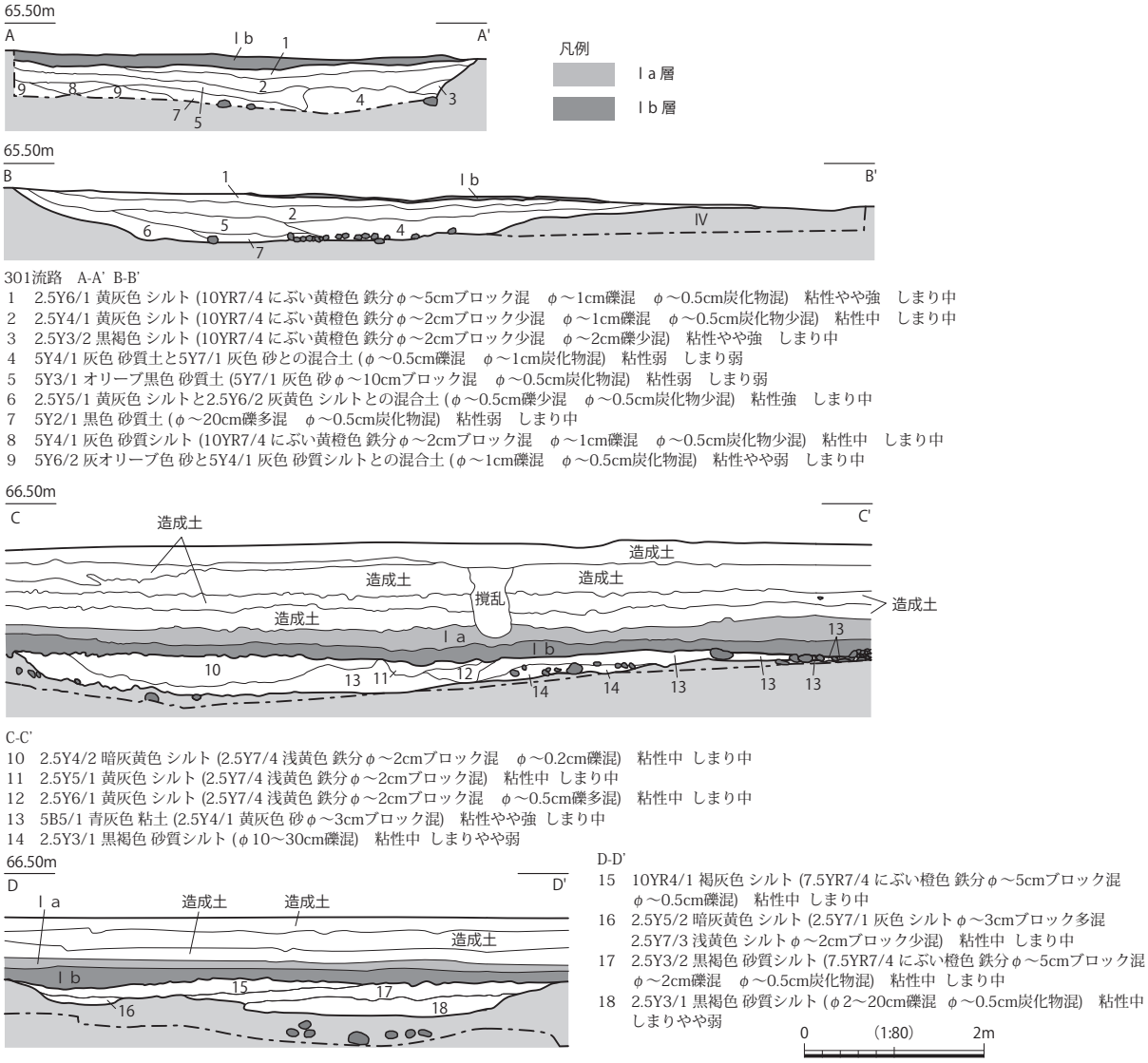
遺物は１溝の調査後、流路の北西隅の 7a-10C-9i グリッドにおいて、１溝の近くからＳ３が出土した。楕円形の礫の中央に溝をもち、有溝石錘に類似した形状である。一部欠損しているものの、最大長約 24cm、最大幅約 17cm、残存する重量は 6.8kg である。出土位置や層位、形状と大きさ、重量から古代の碇石と判断した。類例には高知県中村市（現在の四万十市）の船戸遺跡がある。柱穴の根石に転用され、川船の碇石として報告されている（高知県埋蔵文化財センター 1996『船戸遺跡』）。土器など遺構の時期を判断する遺物は出土していない。下流にあたる２～４区の調査成果から、古代を下限とする流路である。

441 流路（第 127・135・138 図、第 44・69 表、図版 143）

１区東側 7a-10C-10i・10j、8a-1C-1i・1j グリッドにおいて、301 流路内の南壁で細砂の立ち上がりを検出した。残存規模は、推定の長さ 13m、南壁での幅 7.2m、南壁での深さ 0.45m を測る。南壁での断面形は底面に凹凸のある舟底状である。主軸は不明ではあるが、１溝とほぼ重複しながら南から北方向に向かうと考えられる。遺物は埋土から須恵器の底部 Po21 が出土した。301 流路と重複することから、流路の一部と考えられる。



第 135 図　301・441・442 流路



301流路　A-A'　B-B'

1　2.5Y6/1 黄灰色 シルト (10YR7/4 にぶい黄橙色 鉄分φ～5cmブロック混　φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性やや強　しまり中
2　2.5Y4/1 黄灰色 シルト (10YR7/4 にぶい黄橙色 鉄分φ～2cmブロック少混　φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物少混)　粘性中　しまり中
3　2.5Y3/2 黒褐色 シルト (10YR7/4 にぶい黄橙色 鉄分φ～2cmブロック少混　φ～2cm礫少混)　粘性やや強　しまり中
4　5Y4/1 灰色 砂質土と5Y7/1 灰色 砂との混合土 (φ～0.5cm礫混　φ～1cm炭化物混)　粘性弱　しまり弱
5　5Y3/1 オリーブ黒色 砂質土 (5Y7/1 灰色 砂φ～10cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性弱　しまり弱
6　2.5Y5/1 黄灰色 シルトと2.5Y6/2 灰黄色 シルトとの混合土 (φ～0.5cm礫少混　φ～0.5cm炭化物少混)　粘性強　しまり中
7　5Y2/1 黒色 砂質土 (φ～20cm礫多混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性弱　しまり中
8　5Y4/1 灰色 砂質シルト (10YR7/4 にぶい黄橙色 鉄分φ～2cmブロック混　φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物少混)　粘性中　しまり中
9　5Y6/2 灰オリーブ色 砂と5Y4/1 灰色 砂質シルトとの混合土 (φ～1cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性やや弱　しまり中

C-C'

10　2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト (2.5Y7/4 浅黄色 鉄分φ～2cmブロック混　φ～0.2cm礫混)　粘性中 しまり中
11　2.5Y5/1 黄灰色 シルト (2.5Y7/4 浅黄色 鉄分φ～2cmブロック混)　粘性中 しまり中
12　2.5Y6/1 黄灰色 シルト (2.5Y7/4 浅黄色 鉄分φ～2cmブロック混　φ～0.5cm礫多混)　粘性中 しまり中
13　5B5/1 青灰色 粘土 (2.5Y4/1 黄灰色 砂φ～3cmブロック混)　粘性やや強 しまり中
14　2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (φ10～30cm礫混)　粘性中 しまりやや弱

D-D'

15　10YR4/1 褐灰色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～5cmブロック混　φ～0.5cm礫混)　粘性中 しまり中
16　2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト (2.5Y7/1 灰色 シルトφ～3cmブロック多混　2.5Y7/3 浅黄色 シルトφ～2cmブロック少混)　粘性中 しまり中
17　2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～5cmブロック混　φ～2cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中 しまり中
18　2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (φ2～20cm礫混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中 しまりやや弱

0　(1:80)　2m

第 136 図　301 流路土層断面図

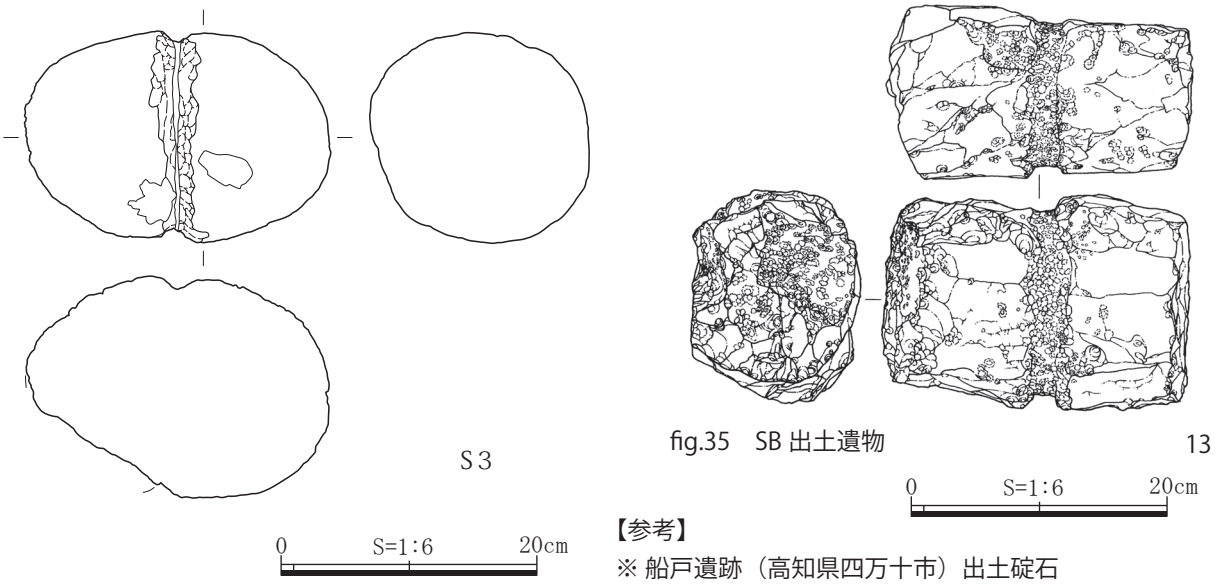


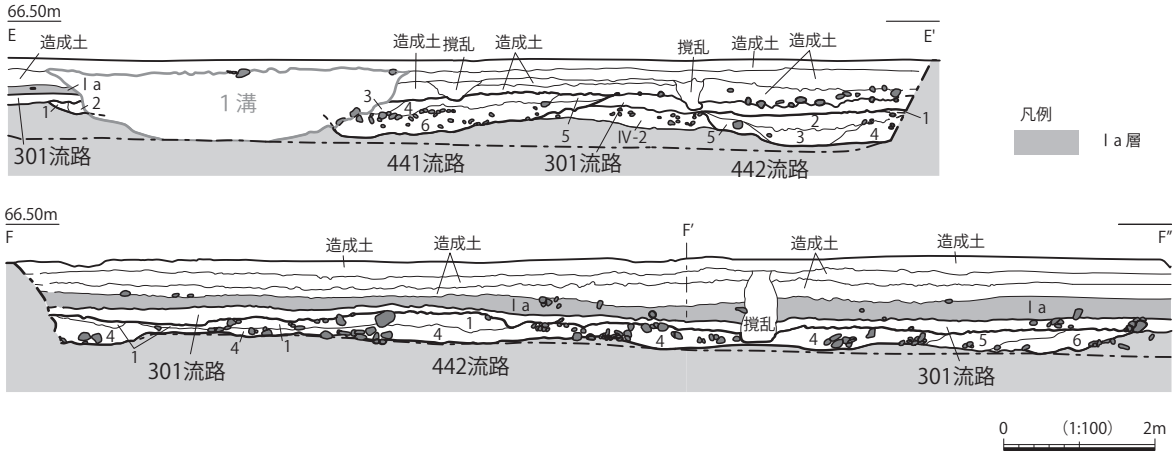
fig.35　SB 出土遺物

【参考】
※ 船戸遺跡（高知県四万十市）出土碇石

第 137 図　301 流路出土石器・参考図

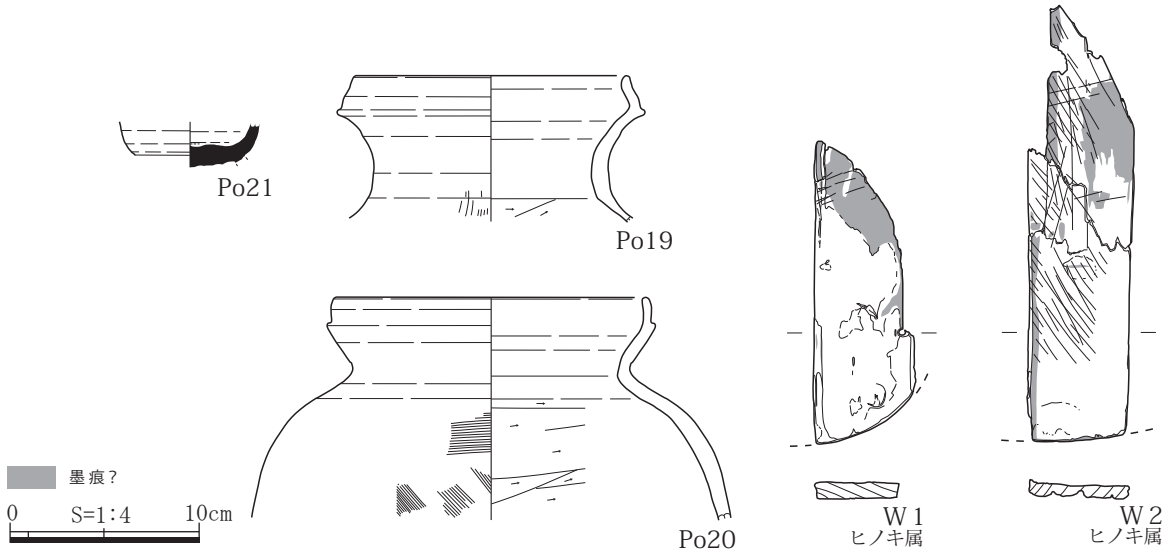
442 流路（第 127・135・138 図、第 44・69・100 表、図版 60・143）

１区東側 7a-10C-9j・10j、8a-1C-1j グリッドにおいて、301 流路内の南壁と西壁で黒色シルト層の立ち上がりを検出した。残存規模は、推定の長さ 14m、南壁での幅 5.5m、南壁での深さ 0.75m を測る。南壁での断面形は東側に段をもつ舟底状である。主軸は不明ではあるが、１溝とほぼ重複しながら南から北方向に向かうと考えられる。２～４区では、流路の一部として黒色シルトの広がりを調査している。遺物は、調査区の南から西側の調査区際から、土師器の壺 Po19、甕 Po20、木製品Ｗ１・２が出土した。ともに曲物の底板（ヒノキ属）である。442 流路は 301 流路と重複することから、流路の一部と考えられる。



441流路
1　2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト (7.5YR7/4 にぶい橙色 鉄分φ～3cmブロック混　φ～2cm礫少混)　粘性中 しまり中
2　5YR4/1 褐灰色 シルト (5YR6/2 灰褐色 シルトφ～3cmブロック多混)　粘性中 しまり中
3　2.5YR4/1 黄灰色 砂質シルト (φ～0.1cm砂混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性弱 しまり弱
4　2.5YR6/2 灰黄色 砂 (2.5Y7/1 灰色 砂ラミナ状混　φ～5cm礫少混)　粘性弱 しまり弱
5　2.5YR7/1 灰白色 砂 (2.5YR 6/2 灰黄色 砂ラミナ状混)　粘性弱 しまり弱
6　2.5Y5/2 暗灰黄色 砂 (φ～20cm礫多混)　粘性弱 しまり弱

442流路
1　10YR7/1 灰白色 砂 (φ～0.5cm礫混)　粘性弱 しまり弱
2　10YR3/2 黒褐色 砂質シルト (10YR7/2 にぶい黄褐色 砂ラミナ状混　φ～2cm礫混)　粘性弱 しまり弱
3　10YR3/1 黒褐色 砂質シルト (φ5～20cm礫多混　φ～1cm炭化物混)　粘性弱 しまり弱
4　2.5Y6/2 灰黄色 砂質シルト (2.5Y7/1 灰白色 砂ラミナ状混　φ10～20cm礫多混)　粘性弱 しまり弱
5　2.5Y5/1 黄灰色 砂質シルト (φ10～20cm礫混)　粘性弱 しまり弱
6　2.5Y5/2 暗灰黄色 砂 (2.5Y7/1 灰白色 砂ラミナ状混　φ2～10cm礫混)　粘性弱 しまり弱



第 138 図　441・442 流路土層断面図、出土遺物

（３）土坑

307 土坑（第 127・139 図、第 45 表）

7a-10C-10d グリッドにおいて検出した。平面形は楕円形、断面形は浅い舟底状である。規模は長軸 0.84m、短軸 0.65m、検出面からの深さは 0.22m を測る。埋土は２層に分けられ、Ⅳ層由来の黄灰色砂質シルトを母体とする。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古墳時代以前と考えられる。

327 土坑（第 127・139 図、第 45 表、図版 60）

7a-10C-10e グリッドにおいて検出した。平面形は不整な楕円形、断面形は皿状である。底面中央から南側にかけて鉄分が沈着する。規模は長軸 0.76m、短軸 0.55m、検出面からの深さは 0.11m を測る。埋土は２層に分けられ、Ⅲ層由来の黒褐色シルトを母体とする。Ⅲ層から掘り込まれたと考えられる。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古墳時代以前と考えられる。

328 土坑（第 127・139 図、第 45 表、図版 60）

7a-10C-9e グリッドにおいて検出した。平面形は北辺が不整な楕円形、断面形は皿状で底面は平らである。規模は長軸 0.75m、短軸 0.66m、検出面からの深さは 0.04m を測る。埋土は単層で、Ⅲ層由来の黒色シルトを母体とする。底面の中央から北側にかけて鉄分が沈着する。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古墳時代以前と考えられる。

377 土坑（第 127・139 図、第 45 表）

8a-1C-1e グリッドにおいて検出した。平面形は楕円形、断面形は不整な逆台形である。南側を除いて径 0.8 ～ 0.9m の落ち込みがあり、中央には径 0.2m 程の小円孔がある。規模は長軸 1.73m、短軸 1.31m、検出面からの深さは 0.37m を測る。埋土は４層に分けられ、Ⅳ層由来の黄褐色砂質シルトを母体とする。下層から径８～ 15cm の礫や砂が多数出土したが、南壁面に入り込んでいることから、Ⅴ層中の礫と考えられる。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古墳時代以前と考えられる。

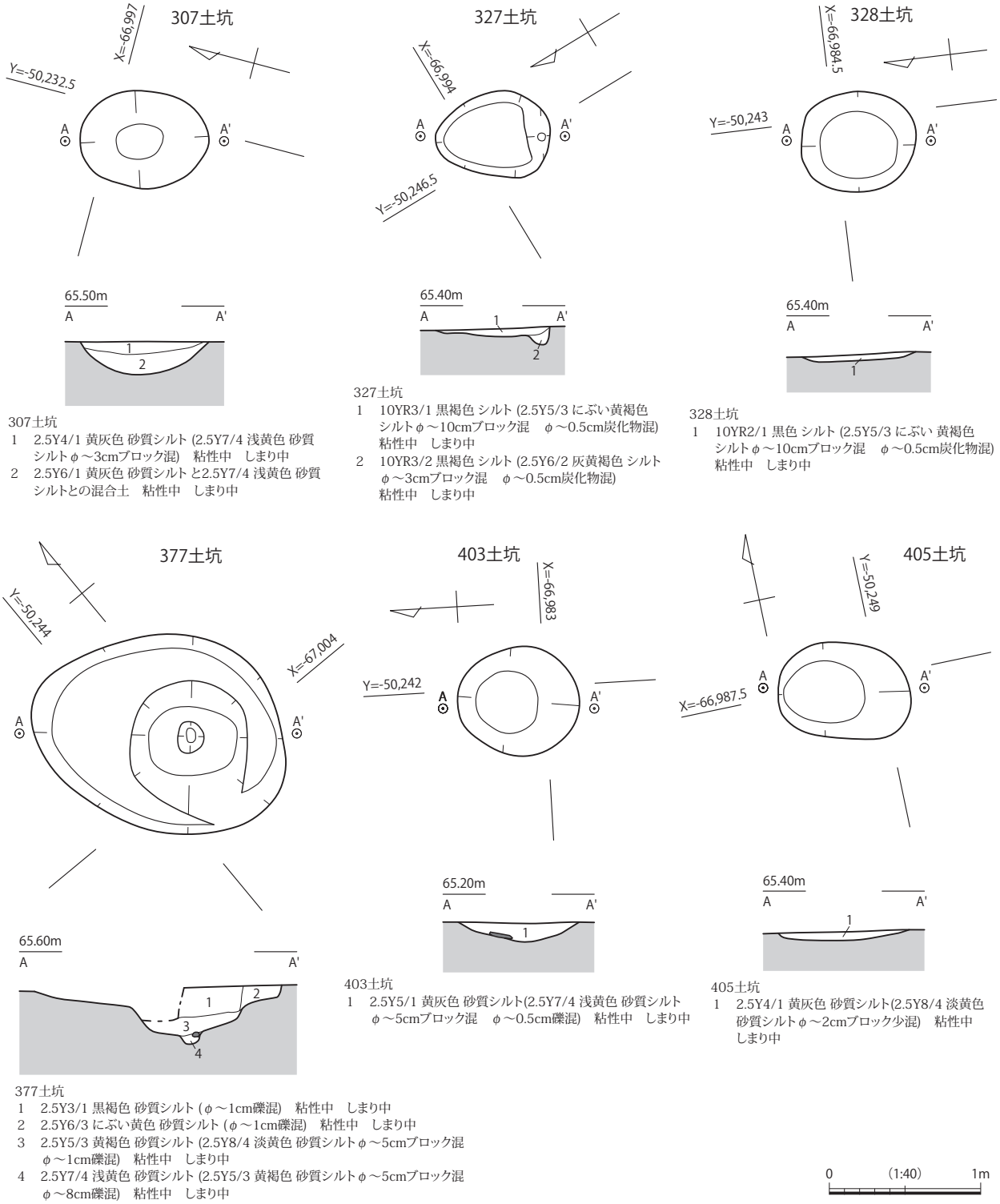
403 土坑（第 127・139 図、第 45 表）

7a-10C-9e グリッドにおいて検出した。平面形は不整な円形、断面形は浅い舟底状である。規模は長軸 0.80m、短軸 0.73m、検出面からの深さは 0.12m を測る。埋土は単層である。埋土はⅣ層由来の黄灰色砂質シルトを母体とする。底面付近から一辺 10cm 程の板状の礫１点が出土した。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古墳時代以前と考えられる。

405 土坑（第 127・139 図、第 45 表）

7a-10C-9e グリッドにおいて検出した。平面形は不整な楕円形、断面形は皿状である。規模は長軸



307土坑
1　2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (2.5Y7/4 浅黄色 砂質シルトφ～3cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y6/1 黄灰色 砂質シルト と2.5Y7/4 浅黄色 砂質シルトとの混合土　粘性中　しまり中

327土坑
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (2.5Y5/3 にぶい黄褐色 シルトφ～10cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/2 黒褐色 シルト (2.5Y6/2 灰黄褐色 シルトφ～3cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中

328土坑
1　10YR2/1 黒色 シルト (2.5Y5/3 にぶい 黄褐色 シルトφ～10cmブロック混　φ～0.5cm炭化物混)　粘性中　しまり中

377土坑
1　2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (φ～1cm礫混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y6/3 にぶい黄色 砂質シルト (φ～1cm礫混)　粘性中　しまり中
3　2.5Y5/3 黄褐色 砂質シルト (2.5Y8/4 淡黄色 砂質シルトφ～5cmブロック混　φ～1cm礫混)　粘性中　しまり中
4　2.5Y7/4 浅黄色 砂質シルト (2.5Y5/3 黄褐色 砂質シルトφ～5cmブロック混　φ～8cm礫混)　粘性中　しまり中

403土坑
1　2.5Y5/1 黄灰色 砂質シルト(2.5Y7/4 浅黄色 砂質シルトφ～5cmブロック混　φ～0.5cm礫混)　粘性中　しまり中

405土坑
1　2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト(2.5Y8/4 淡黄色 砂質シルトφ～2cmブロック少混)　粘性中　しまり中

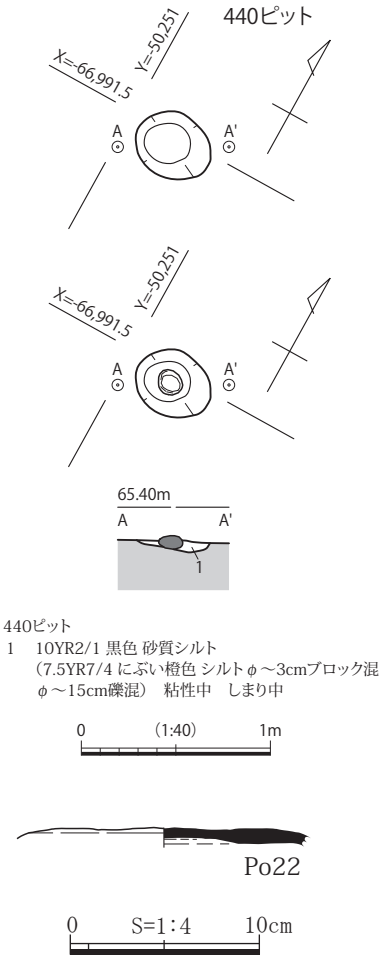
第 139 図　307・327・328・377・403・405 土坑

0.88m、短軸 0.63m、検出面からの深さは 0.06m を測る。埋土は単層である。埋土はⅣ層由来の黄灰色砂質シルトを母体とする。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古墳時代以前と考えられる。

（4）柱穴・ピット

単独の柱穴８基、単独のピット 176 基を検出した。いずれも調査区の東側半分に広がる。調査区



第 140 図　440 ピット、440 ピット出土土器

の南東部ではⅤ層（ソフトローム）上面まで掘削が及んでいるため、埋土の異なる遺構を混在して検出した。Ⅲ層由来の黒色または黒褐色を主体に堆積する遺構は第２遺構面に帰属する。以下、主な遺構についてのみ記述した。

440 ピット（第 127・140 図、第 46・69 表、図版 143）

7a-10C-10f グリッドにおいて検出した。平面形が不整な円形、断面形は皿状である。規模は長軸 0.42m、短軸 0.34m、検出面からの深さは 0.06ｍを測る。埋土は単層である。Ⅲ層由来の黒色砂質シルトを母体とする。検出面中央に径 14 ～ 16cmの円礫がある。遺物は須恵器 Po22 が出土した。天井部付近とみられるものの、つまみは無い。坏蓋の可能性もあるが径は大きい。時期は古墳時代後期以降である。

302 道路のほぼ中央西 0.1ｍに位置するものの関係は不明である。

第４項　調査区内出土遺物

調査区内出土遺物（第 141・142 図、第 69・70・91・92・98・99 表、図版 143 ～ 146）

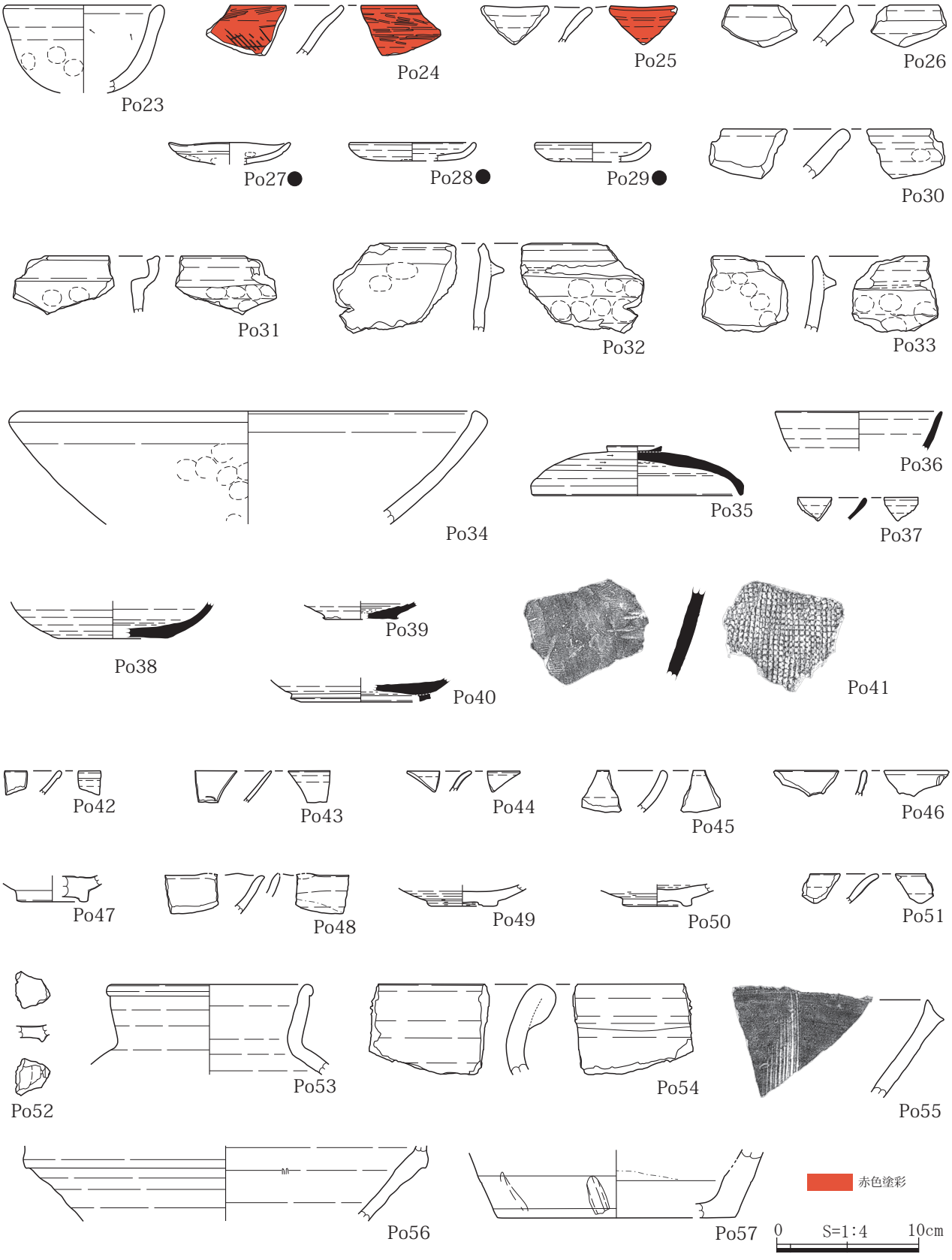
Ⅰａ層・Ⅲ層直上・撹乱・排土からの採集品を一括した。包含層であるⅠａ層は中世建物群の廃絶後の耕作土である。古墳時代から近世初頭までの遺物を含む。以下、遺物についての所見を記す。

Po23 ～ 30 は土師器。Po23 は古墳時代の埦である。Po24 ・ 25 は赤彩土師器の坏。Po24 は口縁端部付近が外反し、内面に暗文が認められる。奈良時代前半の所産。Po26 は製塩土器。浅い器形か。Po27 ～ 29 は手づくねの皿。13 世紀から 14 世紀の所産。Po30 は鍋。

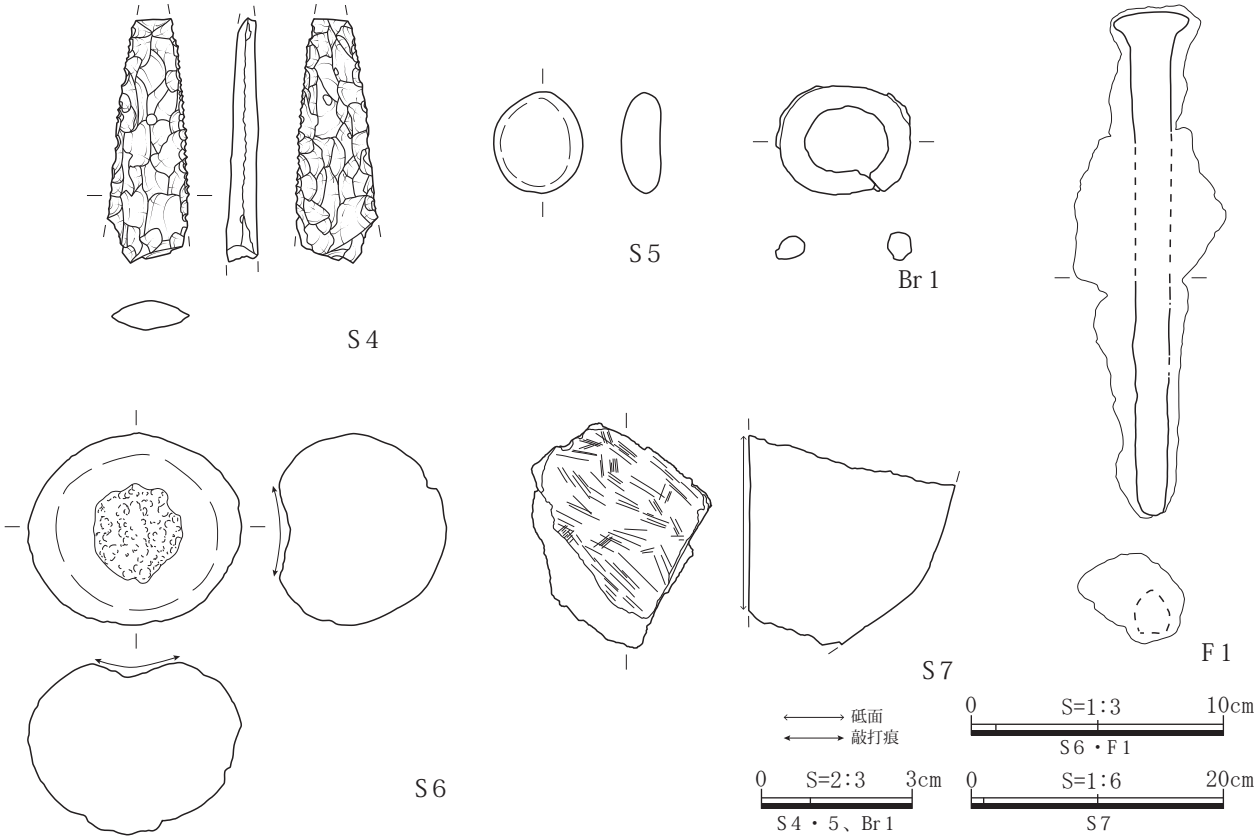
Po31 ～ 34 は瓦質土器。Po31 は鍋。口縁部の屈曲は比較的しっかりとしている。ハケ調整の痕跡はない。13 世紀から 14 世紀の所産。Po32・33 は羽釜。口縁部にちかい位置に鍔部があり、鍔の突出は低い。14 世紀以降の所産。Po34 は鉢である。

Po35 ～ 41 は須恵器。Po35 は環状つまみの蓋。かえりはない。奈良時代前半の所産。Po36 ・ 37 は坏の口縁部。Po37 は器壁が薄く小型で、９世紀～ 10 世紀か。Po38 ・ 39 は無台の坏底部。Po39 は小型で円盤状の底部をもつ。10 世紀で搬入品か。Po40 は高台の付く坏。Po41 は甕の体部で、外面は細かな格子目、内面はカキ目後ナデ。勝間田または亀山産で、12 世紀から 13 世紀の所産か。

Po42 ～ 47 は貿易陶磁器。Po42 ～ 45 は白磁。Po42 は口縁端部に小型の玉縁をもつ碗。Po43 は器壁が薄く端部まで外傾する碗。Po44 は口縁部が端反する皿。Po45 は鉢か。Po42 ～ 44 は 11 世紀後半から 12 世紀の所産。Po46 は青磁の碗で、僅かに蓮弁がある。Po47 は青磁の碗の底部。いずれも龍泉窯で 13 世紀の所産である。Po828 ～ 841 は貿易陶磁器の細片で、写真のみ掲載する。



第 141 図　調査区内出土土器



第 142 図　調査区内出土遺物

Po828 ～ 835 は白磁で、Po828 ～ 831 は碗、Po832 は小坏、Po833 ～ 835 は皿である。Po836 は青白磁の皿である。Po837 ～ 841 は青磁で、Po837 ～ 840 は碗、Po841 は壺とみられる。

Po48 ～ 57 は国産陶器。Po48 は唐津の埦で近世初頭の所産。Po49 ・ 50 は唐津の皿で、戦国時代末期から近世初頭の所産。Po51･52 は瀬戸の皿である。大窯段階で、15 世紀末～ 16 世紀の所産か。Po53 は備前焼の壺、Po54 は備前焼の大甕である。Po55 ・ 56 は備前焼の擂鉢で Po 55 ・ 56 は口縁端部が欠損している。いずれも 14 世紀から 15 世紀の所産。Po57 は越前焼の底部か。底部片のため、詳細な時期は不明である。

Ｓ４は尖頭器で、旧石器から縄文時代のもの。Ｓ５は黒の碁石、Ｓ６は敲石、Ｓ７は砥石である。Ｓ４・６はＩａ層から出土した。Ｓ７は第２遺構面の検出中に出土した。古墳時代以前の所産か。Ｓ５は東壁際の側溝掘削中に出土。出土層位は不明である。

Ｆ１は鍛である。Ｉａ層から出土した。先端部は欠損し、頭部は平坦である。Br１は銅製の環である。楕円形の棒を曲げているが間隔が狭く、耳環とは考えにくい。調度品の引き環、火葬墓や西隣の禅宗寺院の存在などから袈裟の留め金具等の可能性がある。中世後期以降の所産と考えられる。

【参考文献】

石原渉 2015『碇の文化史』佛教大学研究叢書 25　思文閣出版

近江俊秀 2006『古代国家と道路』青木書店

第３節　２区の調査

第１項　概要と基本層序

２区は、石塚廃寺跡の塔心礎から南へ約70ｍに位置し、調査開始前には高低差約1.4ｍの２筆の水田および農道であった。西側の天神野台地から東側の小鴨川に向けて緩やかに下降する旧地形は、圃場整備による削平を受けており、高所である西側で削平が激しく、一部は基盤層となるソフトローム層まで削平を受けているが、東側は削平の影響は少なかった。

調査では、倉吉市教育委員会試掘トレンチに基づき、遺構検出面を２面設定し、表土や造成土などは重機により除去した。

基本層序は、調査区の北壁東側・東壁・南壁東側で確認した。北壁西側・西壁・南壁西側は、基盤層であるソフトローム層、その上層である漸移層近くまで削平を受けており、基本的に堆積の確認はできなかった。なお、北壁および南壁には近現代の水路である１溝がかかっており、１溝を挟んだ東西両側の堆積のつながりは確認できない。

なお、東壁の11・18層およびⅠb-1層で採取した土壌サンプル（試料15～17）の自然科学分析（第５章第３節）の結果、18層からは植物珪酸体が高い密度で検出されたことから稲作が行われていた可能性が高く、水田として利用されていたことが想定される。一方、11層及びⅠb-1層では植物珪酸体の検出密度が低いため、水田として利用されていた可能性は低いと想定されている。周辺環境は、11層の時期になると比較的乾いた環境となり、周辺にはススキや竹・笹類が生育していたが、18層およびⅠb-1層の時期には周辺は湿った環境にあり、周辺の比較的乾いたところにススキや竹・笹類が生育していたと推定されている。

［第１遺構面］

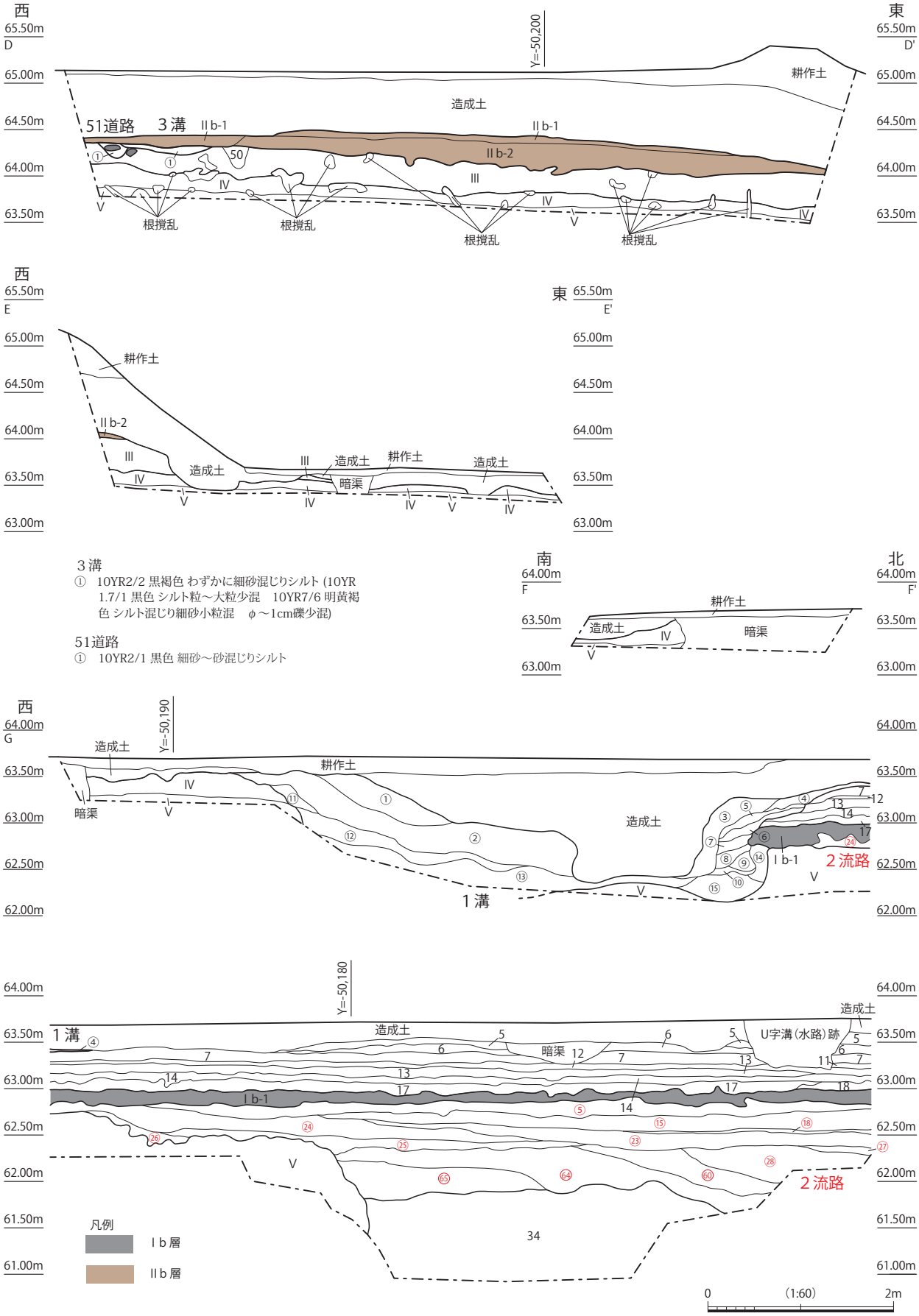
基本層序が良好に確認できた調査区東半部では、自然流路（２流路）を被覆するⅠｂ層上面を第１遺構面とした。標高は北端部で約62.9m、南端部で約62.2ｍである。一方、調査区西半部はⅡｃ層上面を第１遺構面としたが、圃場整備に伴う削平のために堆積層の多くが失われており、Ⅱｃ層の遺存範囲はわずかであり、造成土を除去すると無遺物層のⅢ層やその直下のⅣ層（漸移層）、あるいは基盤層であるⅤ層（ソフトローム）となっている部分も多かった。Ⅲ層上面の最高標高は約64.4ｍである。そのため、Ⅲ層を掘り込んでいる遺構、および造成土直下がⅣ層・Ⅴ層となっていた範囲で検出した遺構についても、Ⅲ層上面で検出した遺構と共通するⅠ層やⅡ層を埋土とする遺構を一括して第１遺構面検出遺構とした。

［第２遺構面］

調査区東半部では、自然流路（２流路）の底面を第２遺構面とした。一方、調査区西半部はⅢ層を除去したⅣ層上面を第２遺構面としたが、削平等のために造成土直下がⅣ層やⅤ層となっていた範囲で検出した遺構についてもⅢ層を埋土とする遺構を第２遺構面検出遺構とした。

基本層序は以下のとおりであるが、調査区西半部に堆積するⅠ～Ⅴ層と、調査区東半部に堆積するⅠｂ層は、１溝によって分断されているため層位的な上下関係は不明である。

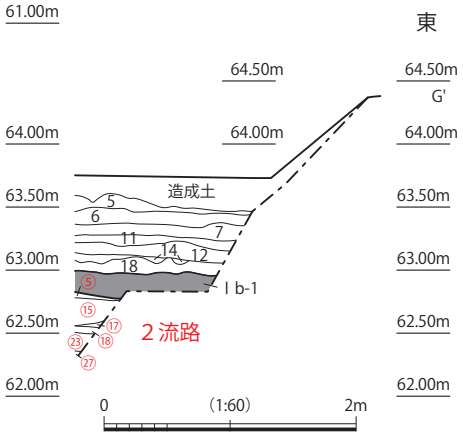
Ⅰ　層　　西壁から南壁にかけて存在する褐灰色のシルトを主とする堆積。古代～中世の遺物包含



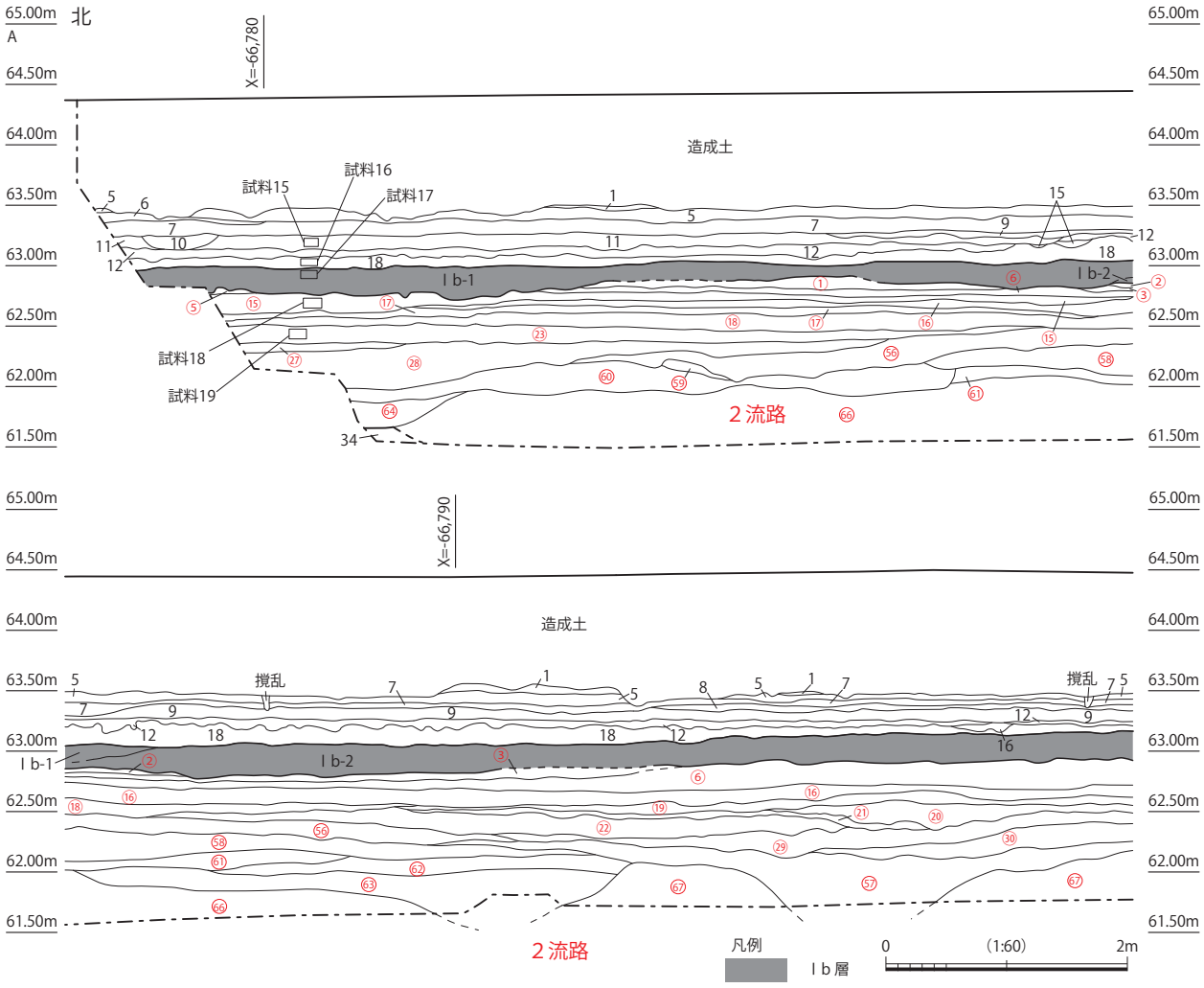
３溝
① 10YR2/2 黒褐色 わずかに細砂混じりシルト (10YR 1.7/1 黒色 シルト粒～大粒少混　10YR7/6 明黄褐色 シルト混じり細砂小粒混　φ～1cm礫少混)

51道路
① 10YR2/1 黒色 細砂～砂混じりシルト

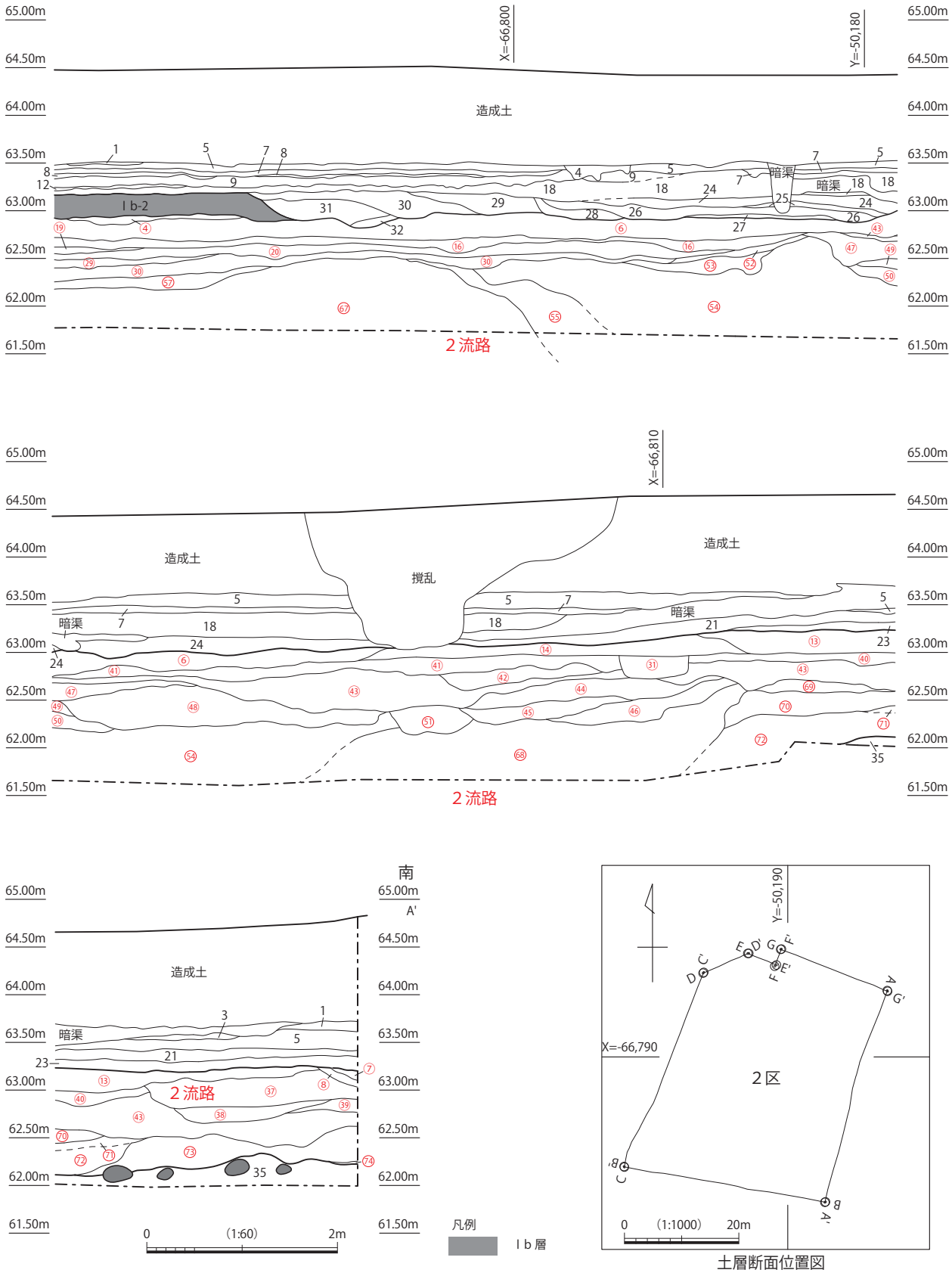
第 143 図　調査区北壁（１）土層断面図、土色注記（１）



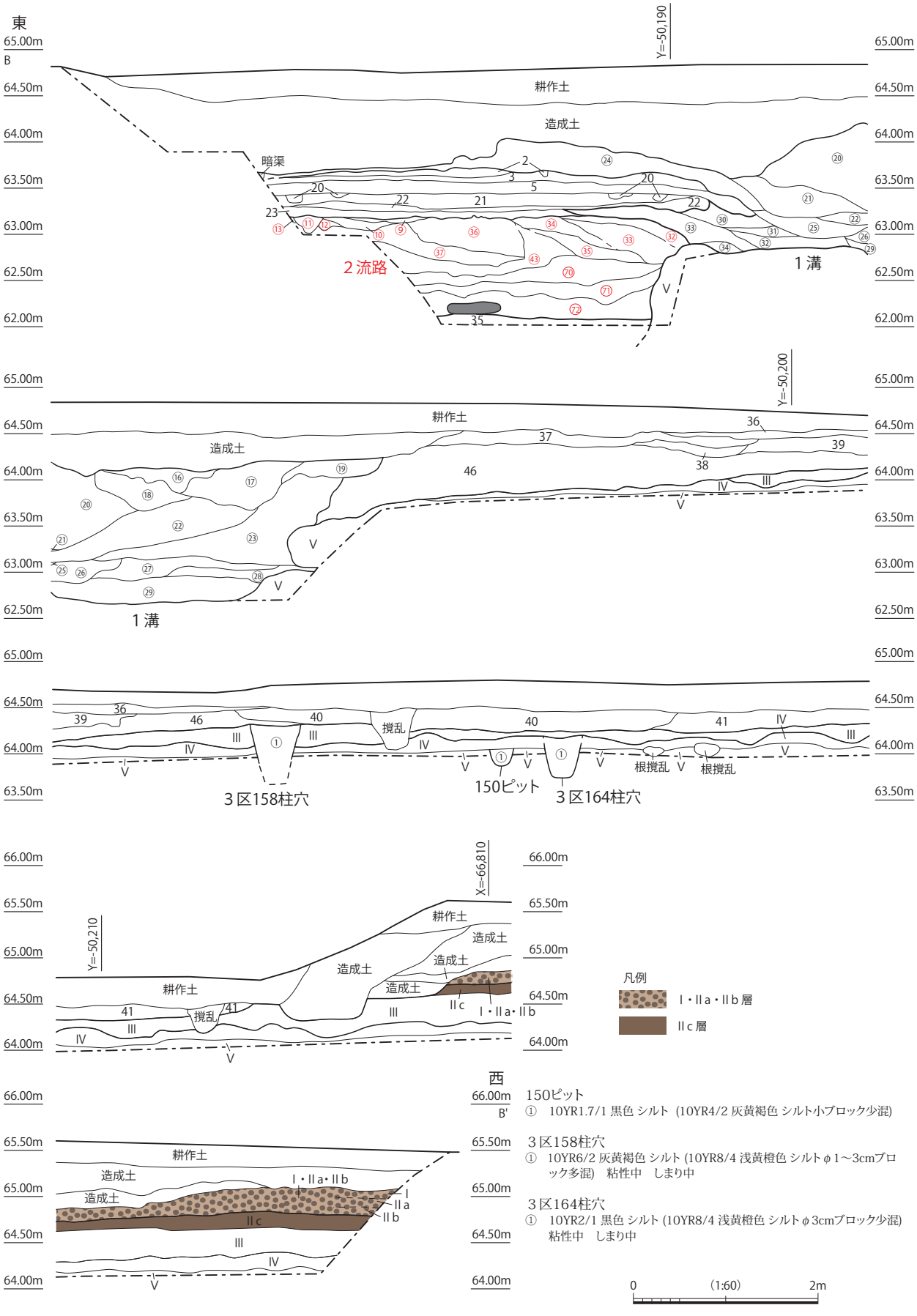
１溝
① 10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR2/2 黒褐色 わずかに細砂混じりシルト大ブロック混)　(耕作土が溝に流れ込んだもの)
② 10YR2/2 黒褐色 わずかに細砂混じりシルト (10YR5/2 灰黄褐色 細砂～砂大ブロック少混　植物片混)
③ 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト (10YR3/2 黒褐色 わずかに細砂混じりシルト混　植物根多混)　粘性弱
④ 10YR5/1 褐灰色 わずかにシルト混じり細砂～砂 (10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト小ブロック少混)
⑤ 10YR5/3 にぶい黄褐色 細砂～砂 (10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト小ブロック混)
⑥ 2.5Y4/1 黄灰色 わずかにシルト混じり細砂～砂 (10YR3/3 暗褐色 粗砂層状混)
⑦ 10YR3/1 黒褐色 砂～細砂混じりシルト (10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂～砂層状混)
⑧ 10YR1.7/1 黒色 わずかに細砂混じりシルト大ブロック と10YR2/1 黒色 砂混じりシルトブロック と10YR3/1 黒褐色 粗砂～細砂混じりシルトブロックの混合土 (炭化物小片極少混)
⑨ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (炭化物小片少混　植物片極少混)
⑩ 10YR5/1 褐灰色 シル ト混じり細砂～粗砂
⑪ 10YR2/2 黒褐色 わずかに細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 シルト小ブロック多混)
⑫ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト と10YR6/2 灰黄褐色 細砂～粗砂との互層 (10YR2/1 黒色 シルト大ブロック少混　炭化物小片少混)
⑬ 10YR6/2 灰黄褐色 細砂～粗砂 (φ1～10cm礫混)
⑭ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 シルトブロック多混　炭化物小片混)
⑮ 10YR3/1 黒褐色 砂～粗砂 (φ1～2cm礫混)
⑯ 10YR3/2 黒褐色 わずかに砂混じりシルト (10YR3/1 黒褐色 シルト小ブロック混)
⑰ 10YR3/1 黒褐色 わずかに砂混じりシルト (10YR3/2 黒褐色 シルトブロック少混)
⑱ 10YR3/2 黒褐色 わずかに砂混じりシルト
⑲ 10YR3/2 黒褐色 シルト
⑳ 10YR2/1 黒色 わずかに砂混じりシルト (10YR3/2 黒褐色 わずかに細砂混じりシルトブロック多混)
㉑ 10YR2/1 黒色 わずかに砂混じりシルト (10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルトブロックと10YR1.7/1 黒色 シルトブロックとの混合土混)
㉒ 10YR3/1 黒褐色 わずかに砂混じりシルト (10YR2/1 黒色 わずかに砂混じりシルト小ブロック混)
㉓ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト
㉔ 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト (ほ場整備前の耕作土か) (水路脇に集められた土が水路に流れ込みか)
㉕ 10YR2/1 黒色 シルト (10YR1.7/1 黒色 シルト小ブロック少混　10YR3/1 黒褐色 わずかに砂混じりシルトブロック混　φ10cm礫少混)
㉖ 10YR3/1 黒褐色 細砂～砂混じりシルト
㉗ 10YR3/1 黒褐色 細砂～砂混じりシルト (10YR5/2 灰黄褐色 砂小ブロック少混 植物遺体多混)
㉘ 10YR5/2 灰黄褐色 砂～細砂 (10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト層状混)
㉙ 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂～砂 (φ2～10cm礫多混)
㉚ 10YR3/2 黒褐色 シルト混じり細砂
㉛ 10YR3/2 黒褐色 シルト混じり細砂～粗砂 (φ2～4cm礫混)
㉜ 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂～細砂 (10YR3/2 黒褐色 シルト混じり細砂～砂層状混　φ2～6cm礫混　植物遺体混)
㉝ 10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂
㉞ 10YR3/1 黒褐色 粗砂 (φ4～6cm礫少混　植物遺体混)



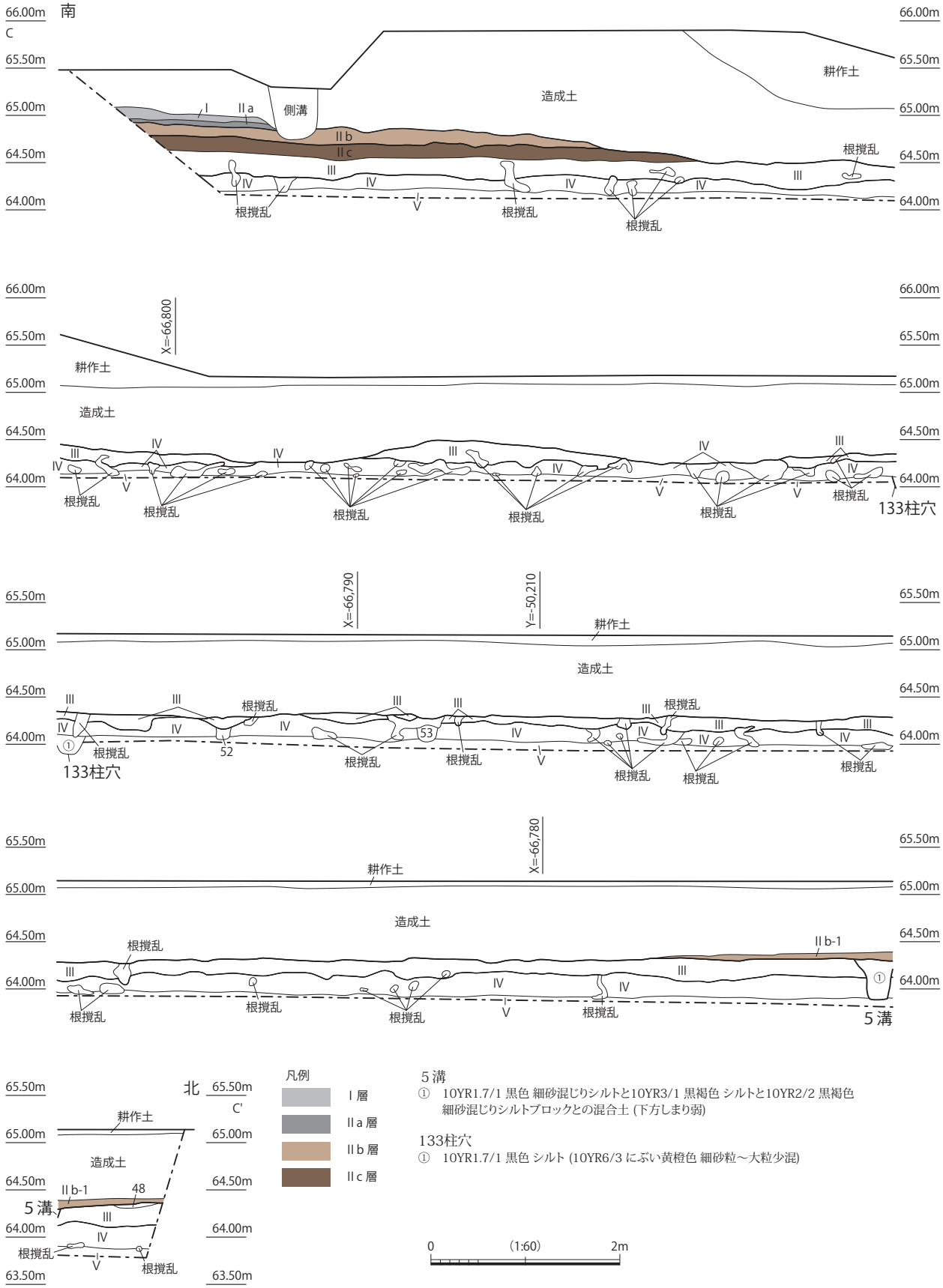
第 144 図　調査区北壁（２）・東壁（１）土層断面図、土色注記（２）



第 145 図　調査区東壁（２）土層断面図、土層断面位置図



第 146 図　調査区南壁土層断面図、土色注記（３）



第 147 図　調査区西壁土層断面図、土色注記（４）

層。

Ⅰb 層　東壁に存在する黒色の砂混じりシルトを主とする堆積。Ⅰb-1層、Ⅰb-2層に細分できる。２流路の直上に堆積する。本層上面を調査区東側の第１遺構面とする。

Ⅱa層　西壁から南壁にかけて存在する黒色の細砂混じりシルトを主とする堆積。中世までの遺物包含層。

Ⅱb層　西壁から南壁にかけてと、西壁から北壁にかけてに存在する黒色のシルトを主とする堆積。西壁から北壁にかけての堆積は、Ⅱb-1層、Ⅱb-2層に細分できる。古代までの遺物包含層。

Ⅱc層　西壁から南壁にかけて存在する黒褐色の砂混じりシルトを主とする堆積。黄橙色シルトブロックが混じる。弥生時代までの遺物包含層。本層上面を調査区西側の第１遺構面とする。

Ⅲ　層　北・西・南壁で確認した黒色のシルト。Ⅳ層の漸移層上部に存在する。無遺物層。

Ⅳ　層　北・西・南壁で確認した浅黄橙色のシルト。調査区西側の基盤層であるⅤ層のソフトローム上部に存在する漸移層。本層上面を調査区西側の第２遺構面とする。

Ⅴ　層　北・西・南壁で確認した黄橙色のシルト。調査区西側の基盤層となるソフトローム層であるが、調査区東側では自然流路によって削平されており、東壁では確認することができない。無遺物層。

基本層序

	1	10YR5/2 灰黄褐色 わずかにシルト混じり細砂 (10YR7/3 にぶい黄橙色 細砂小ブロック極少混　10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂小ブロック混)
	2	10YR4/2 灰黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト
	3	10YR5/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂 (粗砂粒少混)
	4	10YR3/2 黒褐色 シルト混じり細砂 (10YR2/2 黒褐色 細砂混じりシルトブロック少混)
	5	10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂～砂 (10YR5/3 にぶい黄褐色 砂小ブロック極少混)
	6	2.5YR5/1 黄灰色 シルト混じり細砂～砂 (鉄分沈着)
	7	10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂～砂 (炭化物小片極少混　10YR5/3 にぶい黄褐色 砂～粗砂小ブロック少混)
	8	10YR4/2 灰黄褐色 細砂 (10YR6/3 にぶい黄橙色 細砂～砂小ブロック混)
	9	10YR4/1 褐灰色 わずかにシルト混じり細砂～砂 (10YR7/2 にぶい黄橙色 細砂～砂ブロックマーブル状混) (踏み込み痕か)
	10	10YR8/1 灰白色 細砂
	11	2.5Y3/1 黒褐色 シルト混じり細砂～粗砂 (10YR7/2 にぶい黄橙色 細砂ブロック混　10YR7/2 にぶい黄橙色 細砂マーブル状少混)
	12	10YR2/2 黒褐色 シルト混じり砂～粗砂 (10YR5/1 褐灰色 粗砂～砂ブロック混)
	13	10YR4/2 灰黄褐色 細砂～砂混じりシルト (踏み込みによる10YR7/1 灰色 細砂～粗砂ブロック混)
	14	10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり粗砂～細砂
	15	10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂
	16	10YR4/1 褐灰色 細砂 (10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト小ブロック混 10YR2/1 黒色 シルト混じり細砂小ブロック混)
	17	10YR3/1 黒褐色 細砂～砂混じりシルト (10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト小ブロック少混　踏み込みによる10YR8/1 灰白色 粗砂～細砂ブロック混　炭化物小片少混)
	18	10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト (10YR3/2 黒褐色 砂～粗砂小ブロック少混　炭化物小片極少混　土器片混)
Ⅰb-1	19	10YR2/1 黒色 細砂～粗砂混じりシルト
	20	10YR7/6 明黄褐色 細砂～砂 (踏み込み痕か)
	21	7.5YR4/1 褐灰色 わずかに細砂混じりシルト (踏み込みによる10YR5/4 にぶい黄褐色 砂～粗砂ブロック混)
	22	10YR4/1 褐灰色 細砂混じりシルト
	23	10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 細砂混じりシルトマーブル状少混)
	24	10YR3/1 黒褐色 砂～粗砂混じりシルト
	25	10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト
	26	10YR2/2 黒褐色 砂～粗砂混じりシルト (φ1cm礫少混)
	27	10YR4/1 褐灰色 細砂混じりシルト (φ0.5～1cm礫混)
	28	10YR6/2 灰黄褐色 砂 (10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト小ブロック少混)
	29	10YR3/1 黒褐色 砂～粗砂混じりシルト (10YR6/2 灰黄褐色 細砂～砂小ブロック少混)
	30	10YR6/2 灰黄褐色 細砂～砂 (10YR3/1 黒褐色 シルト混じり砂～粗砂マーブル状混)
	31	10YR2/1 黒色 わずかに細砂混じりシルト (炭化物小片少混　10YR6/2 灰黄褐色 細砂～砂マーブル状混)
	32	10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂～粗砂 (10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂大粒混)
Ⅰb-2	33	10YR1.7/1 黒色 細砂混じりシルト (10YR4/1 褐灰色 砂～粗砂小ブロック～大ブロック混)
	34	10YR5/2 灰黄褐色 粗砂～砂 (φ1～30cm礫多混)　しまり極めて強
	35	10YR6/1 褐灰色 砂～粗砂 (φ1～20cm礫多混)
	36	10YR2/2 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR2/1 黒色 シルトブロック混)
	37	10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (ビニール混じる)
	38	10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR2/1 黒色 細砂混じりシルトブロック混　10YR1.7/1 黒色 シルトブロック混)
	39	10YR2/2 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR2/1 黒色 シルトブロック少混)
	40	10YR4/1 褐灰色 細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 シルト(Ⅲ層)マーブル状少混) (旧耕作土)
	41	10YR4/1 褐灰色 細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 シルトマーブル状多混)
	42	10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混 10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混　焼土φ1cmブロック混　土器混)　粘性中　しまり強　(古代～中世包含層)
Ⅰ	43	10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト
Ⅱa	44	10YR 1.7/1 黒色 シルト
Ⅱb	45	10YR3/2 黒褐色 砂混じりシルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混　中粒砂少混　φ1cm炭化物混　土器混)　(古代包含層　2区と3区の境付近のみ堆積)
Ⅱc	46	10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト
	47	10YR3/2 黒褐色 細砂～砂混じりシルト (10YR7/6 明黄褐色 シルト混じり細砂粒少混)
Ⅱb-1	48	10YR2/2 黒色 わずかに細砂混じりシルト
	49	10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト
Ⅱb-2	50	10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト (10YR 1.7/1 黒色 シルト小ブロック混)
	51	10YR 1.7/1 黒色 シルト
Ⅲ	52	10YR 1.7/1 黒色 シルト
	53	10YR 1.7/1 黒色 シルト
Ⅳ	54	10YR8/3 浅黄橙色 シルト　粘性中　しまり中　(漸移層　無遺物層)
Ⅴ	55	10YR8/6 黄橙色 シルト　粘性強 しまり中　(ソフトローム層　無遺物層)

調査区壁面土層　土色注記（５）

２流路
① 10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR2/2 黒褐色 わずかに細砂混じりシルト大ブロック混)　(耕作土が溝に流れ込んだもの)
② 10YR2/2 黒褐色 わずかに細砂混じりシルト (10YR5/2 灰黄褐色 細砂～砂大ブロック少混　植物片混)
③ 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト (10YR3/2 黒褐色 わずかに細砂混じりシルト混　植物根多混)　粘性弱
④ 10YR5/1 褐灰色 わずかにシルト混じり細砂～砂 (10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト小ブロック少混)
⑤ 10YR5/3 にぶい黄褐色 細砂～砂 (10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト小ブロック混)
⑥ 2.5Y4/1 黄灰色 わずかにシルト混じり細砂～砂 (10YR3/3 暗褐色 粗砂層状混)
⑦ 10YR3/1 黒褐色 砂～細砂混じりシルト (10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂～砂層状混)
⑧ 10YR1.7/1 黒色 わずかに細砂混じりシルト大ブロックと10YR2/1 黒色 砂混じりシルトブロックと10YR3/1 黒褐色 粗砂～細砂混じりシルトブロックの混合土 (炭化物小片極少混)
⑨ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (炭化物小片少混　植物片極少混)
⑩ 10YR5/1 褐灰色 シル ト混じり細砂～粗砂
⑪ 10YR2/2 黒褐色 わずかに細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 シルト小ブロック多混)
⑫ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルトと10YR6/2 灰黄褐色 細砂～粗砂との互層 (10YR2/1 黒色 シルト大ブロック少混　炭化物小片少混)
⑬ 10YR6/2 灰黄褐色 細砂～粗砂 (φ1～10cm礫混)
⑭ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 シルトブロック多混　炭化物小片混)
⑮ 10YR3/1 黒褐色 砂～粗砂 (φ1～2cm礫混)
⑯ 10YR3/2 黒褐色 わずかに砂混じりシルト (10YR3/1 黒褐色 シルト小ブロック混)
⑰ 10YR3/1 黒褐色 わずかに砂混じりシルト (10YR3/2 黒褐色 シルトブロック少混)
⑱ 10YR3/2 黒褐色 わずかに砂混じりシルト
⑲ 10YR3/2 黒褐色 シルト
⑳ 10YR7/1 灰白色 細砂 (10YR4/1 褐灰色 シルト層状及びマーブル状混)
㉑ 10YR7/1 灰白色 細砂 (10YR4/1 褐灰色 砂～粗砂層状多混　φ1～4cm礫混)
㉒ 10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細砂 (10YR5/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂マーブル状混)
㉓ 10YR3/1 黒褐色 わずかにシルト混じり細砂
㉔ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 (10YR7/1 灰白色 細砂マーブル状極少混)
㉕ 10YR2/1 黒色 シルト (10YR7/2 にぶい黄橙色 シルト(地山由来)小ブロック少混 10YR3/2 黒褐色 砂ブロック混)
㉖ 10YR2/1 黒色 シルト小ブロック と 10YR7/2 にぶい黄橙色 シルト小ブロック と 10YR3/2 黒褐色 砂～細砂ブロックとの混合土
㉗ 10YR8/1 灰白色 細砂～粗砂 (10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂小ブロック混)
㉘ 10YR7/1 灰白色 細砂 (φ0.5～1cm礫多混)
㉙ 10YR3/1 黒褐色 わずかに細砂混じりシルト (10YR4/2 灰黄褐色 砂ブロック混)
㉚ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂～砂 と 10YR5/2 灰黄褐色 砂とのマーブル状混合土 (植物片混)
㉛ 10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR4/2 灰黄褐色 粗砂～細砂ブロック多混)
㉜ 10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂 (植物片少混)
㉝ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 (植物片極少混)
㉞ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR2/1 黒色 シルトブロック少混)
㉟ 10YR1.7/1 黒色 シルト (10YR6/1 褐灰色 砂ブロック極少混)
㊱ 10YR1.7/1 黒色 シルト
㊲ 10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 シルト層状混　植物片混)
㊳ 10YR2/1 黒色 シルト (10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細砂マーブル状混　植物片混)
㊴ 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂～細砂 (φ1～2cm礫混)
㊵ 10YR3/2 黒褐色 粗砂～砂 (φ1～2cm礫少混)
㊶ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり砂～細砂 (φ1～2cm礫少混)
㊷ 10YR5/2 灰黄褐色 砂～粗砂
㊸ 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂と10YR7/1 灰白色 細砂～砂との互層
㊹ 10YR7/1 灰白色 砂～粗砂 (10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂薄層状混　10YR 4/1 褐灰色 粗砂～砂大ブロック混)
㊺ 10YR2/1 黒色 シルト (10YR7/1 灰白色 砂層状混　植物片混)
㊻ 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト と 10YR6/2 灰黄褐色 わずかにシルト混じり砂～粗砂との混合土 (φ1～2cm礫少混)
㊼ 7.5YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂 (10YR6/2 灰黄褐色 細砂～砂マーブル状混)
㊽ 7.5YR4/1 褐灰色 細砂 (10YR1.7/1 黒色 シルトと10YR6/2 灰黄褐色 細砂と10YR7/2 にぶい黄橙色 砂～粗砂互層状混)
㊾ 10YR4/2 灰黄褐色 わずかにシルト混じり細砂 (φ1～2cm礫混　10YR5/2 灰黄褐色 粗砂～砂ブロック混)
㊿ 10YR3/1 黒褐色 砂～細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 シルト 細砂～粗砂層状混　10YR7/2 にぶい黄橙色 細砂～粗砂層状混　植物片混)
(51) 10YR1.7/1 黒色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト小ブロック混　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり砂ブロック混　10YR6/2 灰黄褐色 粗砂～砂ブロック混)
(52) 7.5YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂～砂 (10YR4/2 灰黄褐色 細砂～粗砂大ブロック混)
(53) 7.5YR4/1 褐灰色 細砂混じりシルト (10YR6/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂 と 10YR1.7/1 黒色 シルトと10YR4/2 灰黄褐色 粗砂～砂互層状混)
(54) 10YR4/1 褐灰色 わずかにシルト混じり粗砂～砂 (φ1～10cm礫多混　10YR2/1 黒色 シルト混じり細砂ブロック少混)
(55) 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり砂～細砂 (10YR4/1 褐灰色 わずかにシルト混じり粗砂～砂ブロック多混)
(56) 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂と10YR5/1 褐灰色 細砂～砂の互層
(57) 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 (10YR2/1 黒色 わずかに細砂混じりシルト層状混　植物片混)
(58) 10YR6/1 褐灰色 細砂 (10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂薄層状混)
(59) 10YR4/2 灰黄褐色 砂～粗砂
(60) 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 (10YR5/2 灰黄褐色 わずかにシルト混じり細砂マーブル状混)
(61) 7.5YR7/1 明褐灰色 砂 (10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂ブロック混)
(62) 10YR2/2 黒褐色 シルト混じり細砂 (10YR4/1 褐灰色 砂～細砂層状混　植物遺体混)
(63) 10YR4/1 褐灰色 砂 (10YR2/1 黒色 シルト層状混　植物片混)
(64) 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルトと10YR4/1 褐灰色 わずかにシルト混じり細砂 と 10YR7/1 灰白色 細砂～砂との互層(一部マーブル状)
(65) 10YR6/1 褐灰色 細砂～砂 (10YR4/1 褐灰色 植物片混じり細砂薄層状混)
(66) 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂～砂 (φ1～30cm礫多混)
(67) 10YR5/1 褐灰色 砂 (φ1～20cm礫多混)
(68) 10YR4/1 褐灰色 粗砂～砂 (10YR6/1 褐灰色 砂～細砂大ブロック混　φ1～5cm礫多混　φ20～50cm礫混)
(69) 10YR6/2 灰黄褐色 砂～粗砂 (φ1～2cm礫少混)
(70) 10YR2/1 黒色 シルト混じり細砂 (10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂～砂層状混)
(71) 10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR6/2 灰黄褐色 細砂小ブロック少混)
(72) 10YR4/1 褐灰色 砂～粗砂 (φ1～30cm礫混)
(73) 10YR5/1 褐灰色 細砂～砂と10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂との互層
(74) 10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細砂 (10YR5/1 褐灰色 シルトラミナ状混)　粘性中　しまり中

調査区壁面土層　土色注記（６）

第２項　第１遺構面の調査（古代以降の遺構と遺物）

（１）掘立柱建物

掘立柱建物６（第 149 ～ 151 図、第 29・31・38 表、図版 64）

２区北側中央の 7a-8B-8j・ 9j グリッドに位置し、圃場整備に伴う削平のために基盤層であるⅤ層上面で検出した。本遺構は 153 柱穴～ 159 柱穴と 168 柱穴の８基で構成される。桁行２間（2.8m）、梁行２間（2.7m）の側柱建物である。面積は 7.6㎡、建物の主軸は N-12° -E である。

柱穴の平面形は概ね円形で、規模は径 0.25 ～ 0.38m、深さは 0.05 ～ 0.22m を測る。調査区内の周辺には建物跡は存在しない。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

以下、各々の柱穴について記述する。

第 148 図　第 1 遺構面（上面）全体図

153 柱穴（第 150・151 図、第 31 表、図版 64）

153 柱穴は、平面形はほぼ円形、規模は長軸 0.37m、短軸 0.34m、検出面からの深さ 0.15m を測る。建物の北西隅にあたる。中央やや南西寄りに柱痕跡が存在する。１・２層は柱痕で２層下面がやや窪むことから柱のあたり痕と考えられる。３層は掘方埋め土である。遺物としては掘方埋め土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

154 柱穴（第 150・151 図、第 31 表、図版 64）

154 柱穴は、平面形は円形、規模は長軸 0.25m、短軸 0.24m、検出面からの深さ 0.22m を測る。建物の西側にあたる。ほぼ中央に柱痕跡が存在する。１層が柱痕で下面に柱のあたり痕がある。２層は掘方埋め土である。遺物としては掘方埋め土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは

第 149 図　第１遺構面全体図

無かった。

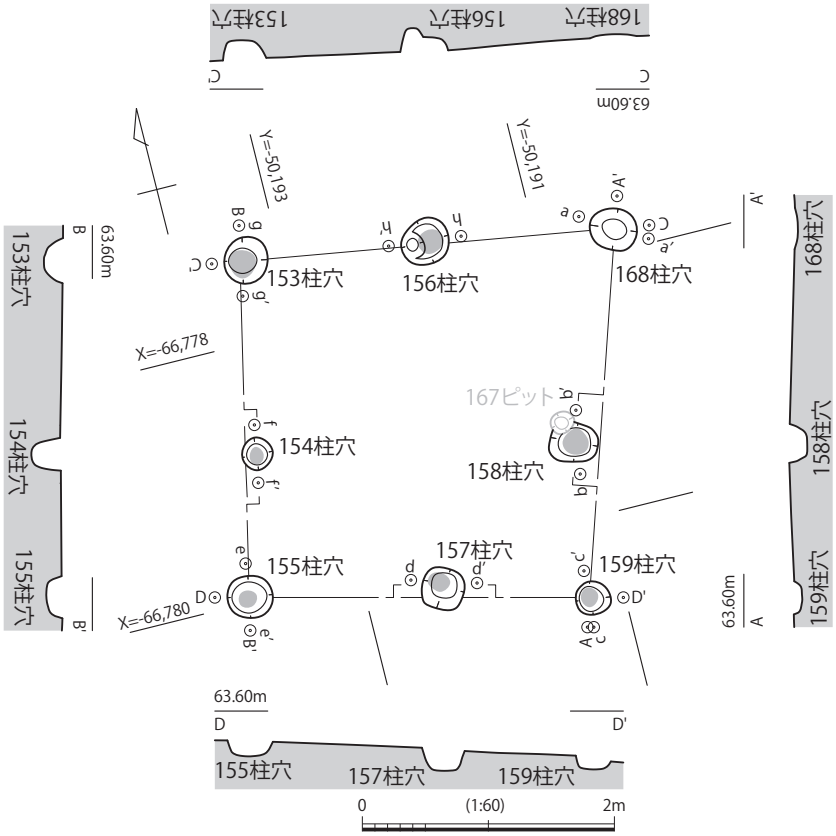
155 柱穴（第 150・151 図、第 31 表、図版 65）

155 柱穴は、平面形はほぼ円形、規模は長軸 0.36m、短軸 0.33m、検出面からの深さ 0.11m を測る。建物の南西側にあたる。ほぼ中央に柱痕跡が存在する。１層が柱痕で、２・３層は掘方埋め土である。遺物としては掘方埋め土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

156 柱穴（第 150・151 図、第 31 表、図版 65）

156 柱穴は、平面形は円形、規模は長軸 0.38m、短軸 0.35m、検出面からの深さは 0.16m を測る。建物の北側にあたる。ほぼ中央に柱痕跡が存在する。１層が柱痕で、２・３層は掘方埋め土である。

なお、底面東側が根による撹乱を受けている。遺物としては柱痕埋土および掘方埋め土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。



第 150 図　掘立柱建物６

157 柱穴（第 150・151 図、第 31 表、図版 65）

157 柱穴は、平面形は隅丸方形状、規模は長軸 0.33m、短軸 0.32m、検出面からの深さ 0.18m を測る。建物の南側にあたる。北寄りに柱痕跡が存在する。１層が柱痕で、２～４層は掘方埋め土である。遺物としては柱痕埋土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

158 柱穴（第 150・151 図、第 31 表、図版 65）

158 柱穴は、平面形は隅丸方形状、規模は長軸 0.38m、短軸 0.31m、検出面からの深さ 0.14m を測る。建物の東側にあたる。中央に柱痕跡が存在する。１層が柱痕で、２層は掘方埋め土である。北側を 167 ピットに切られる。遺物は出土していない。

159 柱穴（第 150・151 図、第 31 表、図版 65）

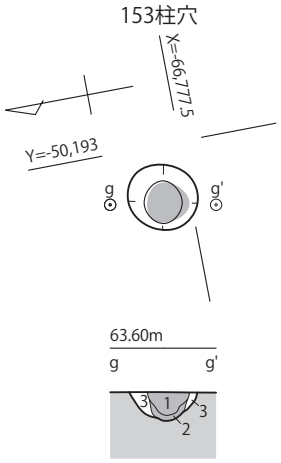
159 柱穴は、平面形はほぼ円形、規模は長軸 0.28m、短軸 0.26m、検出面からの深さ 0.05m を測る。建物の南東隅にあたる。ほぼ中央に柱痕跡が存在する。１層が柱痕で、２層は掘方埋め土である。遺物は出土していない。

168 柱穴（第 150・151 図、第 31 表）

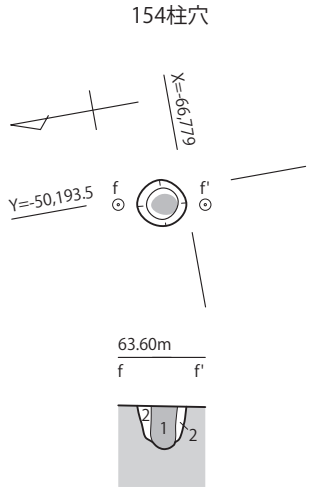
168 柱穴は、平面形は楕円形状、規模は長軸 0.37m、短軸 0.32m、検出面からの深さ 0.01m である。建物の北東隅にあたる。遺存状態が悪く、わずかに窪みが認められるだけで埋土を確認することができなかったが、他の柱穴との位置関係から柱穴の痕跡と判断した。遺物は出土していない。

掘立柱建物７（第 149・152・153 図、第 29・31・38 表、図版 66）

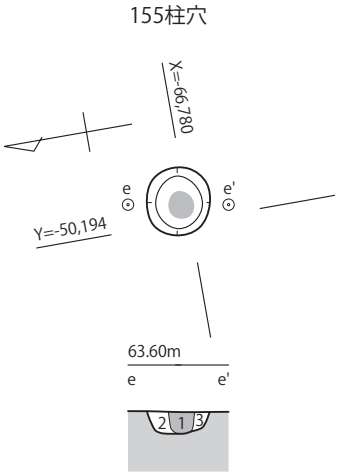
２区中央南端の 7a-9B-1j・ 2j、9C-2a グリッドに位置し、調査区内で検出した 160 ～ 162 ・ 164 柱穴の４基は、圃場整備に伴う削平を受けていたために基盤層であるⅤ層上面で検出した。後には３区の調査の過程で、境界際から 206・267・271 柱穴の３基が検出された。なお、160-161 柱穴間に



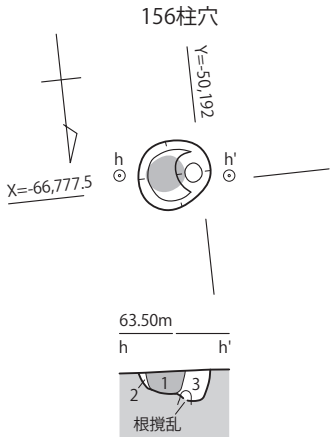
153柱穴
1　10YR1.7/1 黒色 シルト
(10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒少混)
2　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト
(10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小ブロック～粒多混)
3　10YR2/2 黒褐色 シルト
(10YR3/1 黒褐色 シルト小粒混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒～小ブロック少混)



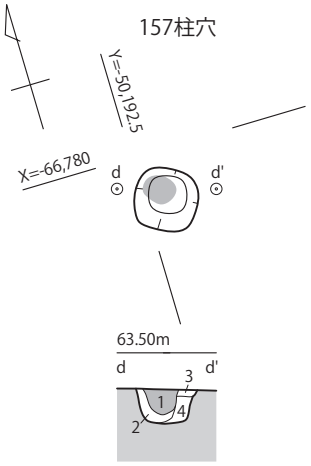
154柱穴
1　10YR1.7/1 黒色 細砂混じりシルト
(10YR5/4 にぶい黄褐色 細砂小粒～小ブロック少混)
2　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト大粒混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒～小ブロック多混)



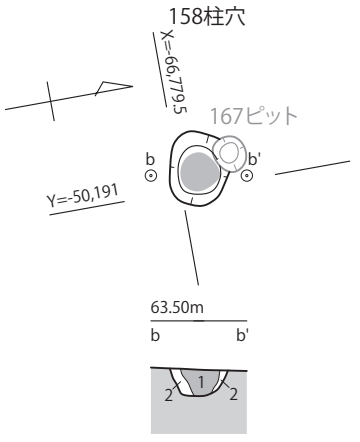
155柱穴
1　10YR1.7/1 黒色 わずかに砂混じりシルト
(10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒少混)
2　10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小ブロック極少混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂大粒～粒多混)
3　10YR1.7/1 黒色 シルト
(10YR2/1 黒色 シルト粒～小ブロック少混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒～小ブロック少混)



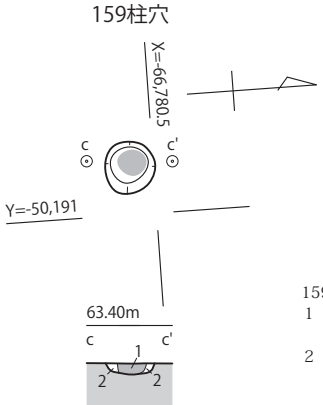
156柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト粒多混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂粒～大粒極少混)
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR1.7/1 黒色 シルト粒少混)
3　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト大粒～小ブロック少混)



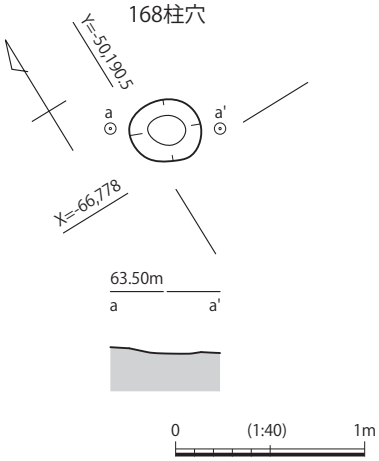
157柱穴
1　10YR1.7/1 黒色 シルト
(10YR2/1 黒色 シルト大粒少混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂粒極少混)
2　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト大粒～小ブロック混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂粒～大粒少混)
3　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト粒混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂粒少混)
4　10YR4/1 褐灰色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト大粒少混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒～大粒多混)



158柱穴
1　10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小ブロック混
10YR6/2 灰黄褐色 細砂粒～大粒少混)
2　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト



159柱穴
1　10YR1.7/1 黒色 シルト
(10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂大粒多混)
2　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト
(10YR7/3 にぶい黄橙色 細砂粒～大粒多混)



第 151 図　掘立柱建物６　153 ～ 159・168 柱穴

271 柱穴に対応する柱穴は存在しなかった。そのため、７基の柱穴で構成される掘立柱建物と判断した。桁行２間（4.0m）×梁行２間（3.2m）の側柱建物である。面積は 13.1㎡、建物の主軸は N-33°-E である。

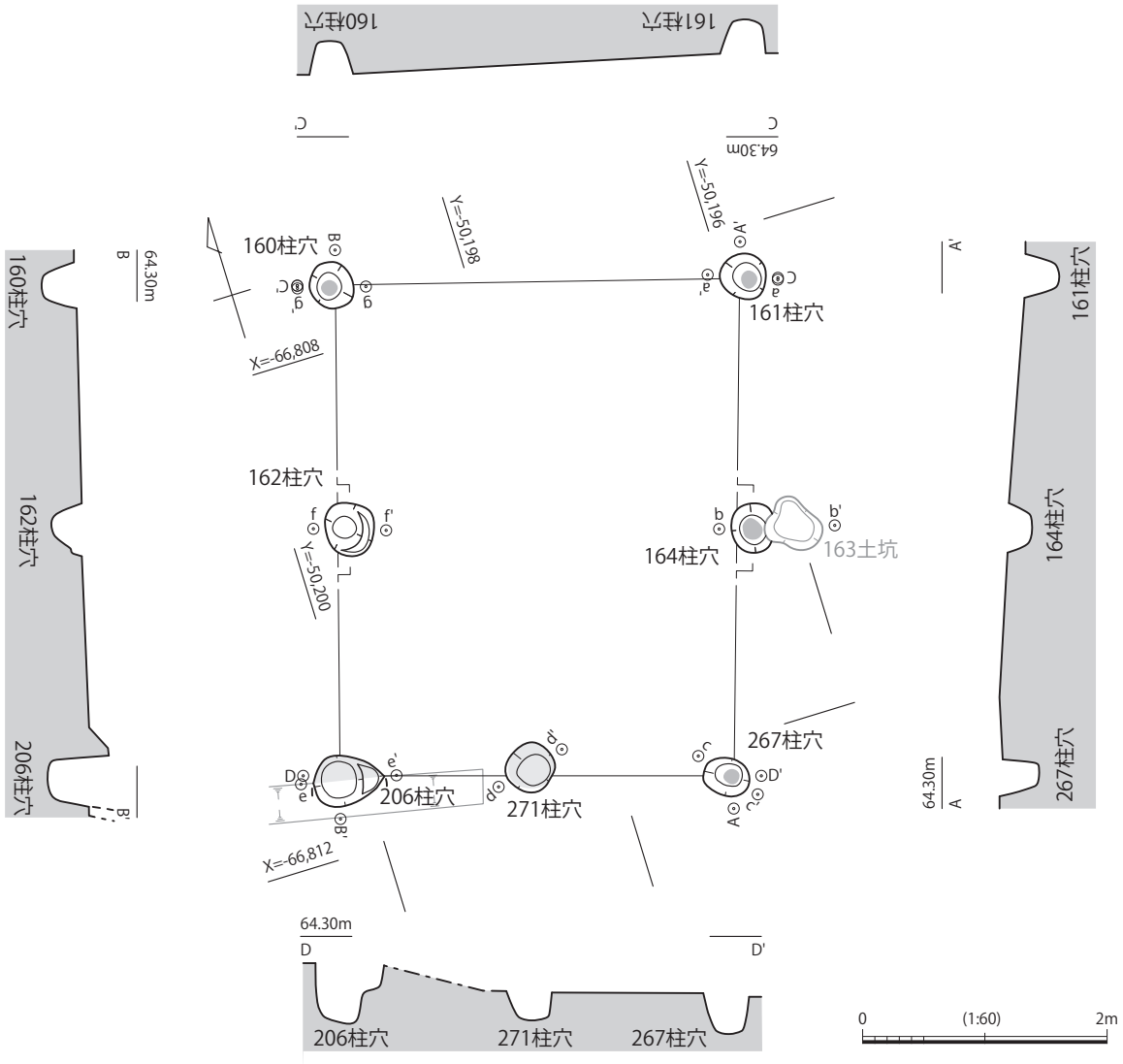
柱穴の平面形は概ね円形状で、削平の多寡により、規模は径 0.37 ～ 0.60m、深さは 0.10 ～ 0.46m とバラツキがある。掘立柱建物７の南側の３区内には掘立柱建物９ほかの建物跡があり、建物群を構成している。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

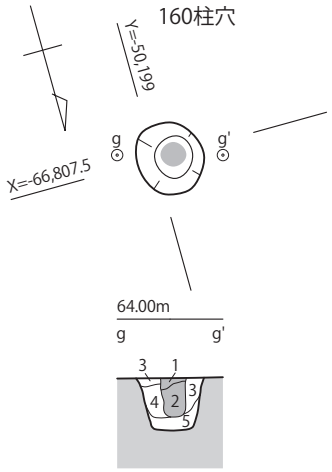
以下、各々の柱穴について記述する。

160 柱穴（第 152・153 図、第 31 表、図版 67）

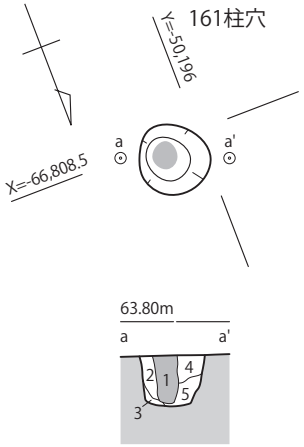
160 柱穴は、平面形はほぼ円形、規模は長軸 0.38m、短軸 0.35m、検出面からの深さ 0.27m を測る。建物の北西隅にあたる。ほぼ中央に柱痕跡が存在する。１・２層は柱痕で、３～５層は掘方埋め土である。遺物としては掘方埋め土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。



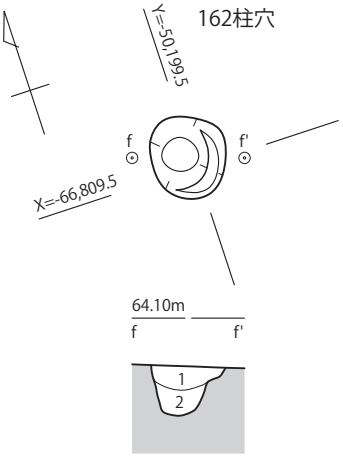
第 152 図　掘立柱建物７



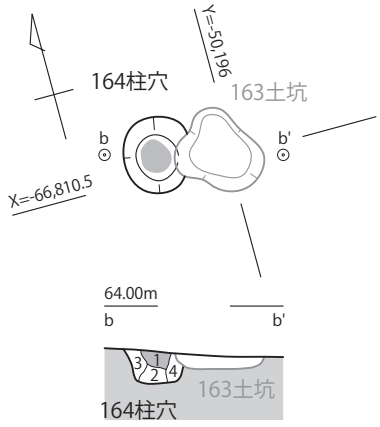
160柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小ブロック少混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒極少混)
2　10YR2/1 黒色 わずかに砂混じりシルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト粒少混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒～粒少混)
3　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト大粒混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒～粒混)
4　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト大粒～粒混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂大粒～小粒多混)
5　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト大粒少混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂粒～小ブロック極多混)



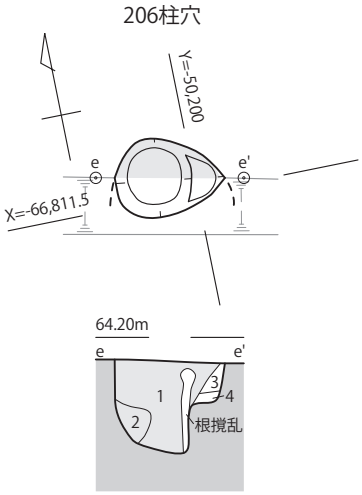
161柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR1.7/1 黒色 シルト粒混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小ブロック小粒少混)
2　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト粒～大粒多混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒～大粒多混)
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR1.7/1 黒色 シルト小粒少混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒～大粒多混)
4　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小粒～粒混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂粒～大粒少混)
5　10YR3/2 黒褐色 わずかに粗砂混じりシルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト大粒混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂粒～小ブロック混)



162柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト大粒～小ブロック多混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂大粒～ブロック混)
2　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト大粒～小ブロック混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂粒～大粒多混
ブロック少混)

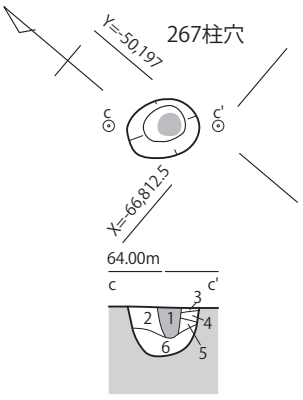


164柱穴
1　10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト
(10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒少混)
2　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小粒少混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒多混
小ブロック少混)
3　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小粒混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒混)
4　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小粒～粒混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂粒～小粒多混)

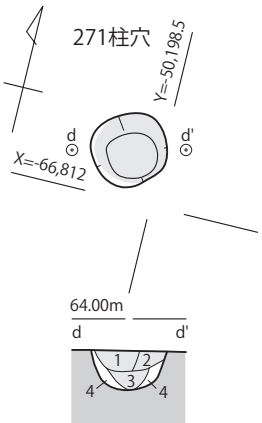


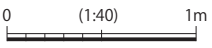
206柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色
シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色
シルトφ5～10cmブロック混)　粘性中　しまり弱
3　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色
シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色
シルトφ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり中

271柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色
シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色
シルトφ2～3cmブロック混)　粘性中　しまり中
3　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色
シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり弱
4　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色
シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中



267柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
φ2cmブロック混)　粘性中　しまり中
3　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
φ1cmブロック混)　粘性中　しまり中
4　10YR8/4 浅黄橙色 シルト　粘性中　しまり強
5　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
φ1～2cmブロック多混)　粘性中　しまり中
6　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
φ1～2cmブロック多混)　粘性中　しまり弱





第 153 図　掘立柱建物７　160 ～ 162・164・206・267・271 柱穴

161 柱穴（第 152・153 図、第 31 表、図版 66）

161 柱穴は、平面形はほぼ円形、規模は長軸 0.37m、短軸 0.36m、検出面からの深さ 0.27ｍを測る。建物の北東隅にあたる。ほぼ中央に柱痕跡が存在する。１層が柱痕で、２～５層は掘方埋め土である。遺物は出土していない。

162 柱穴（第 152・153 図、第 31 表、図版 67）

162 柱穴は、平面形は不整な円形、規模は長軸 0.42m、短軸 0.40m、検出面からの深さ 0.26ｍを測る。建物の西側にあたる。柱穴南東側上部が広がって段状となり、柱痕跡が確認できないことから、柱は抜き取られたと考えられる。埋土は２層に分層できた。遺物は出土していない。

164 柱穴（第 152・153 図、第 31 表、図版 66）

164 柱穴は、平面形はほぼ円形と考えられるが、東側を 163 土坑に切られる。規模は長軸 0.40m、短軸 0.32m 以上、検出面からの深さ 0.17ｍを測る。建物の東側にあたる。ほぼ中央に柱痕跡が存在する。１層が柱痕で、２～４層は掘方埋め土である。遺物は出土していない。

206 柱穴（第 152・153 図、第 31 表、図版 67）

206 柱穴は、平面形は、壁面に掛かっているため削平を受けた箇所があり涙滴状を呈する。東側は柱穴中段に段を持つ。規模は長軸 0.60m、短軸 0.45m、検出面からの深さ 0.48ｍを測る。建物の南西隅にあたる。柱痕跡は確認できない。柱は抜き取られたと考えられ、３・４層が掘方埋め土、１・２層は柱抜き取り痕に堆積した土と考えられる。遺物は出土していない。

267 柱穴（第 152・153 図、第 31 表、図版 66）

267 柱穴は、平面形はやや楕円形、規模は長軸 0.38m、短軸 0.30m、検出面からの深さ 0.26ｍを測る。建物の南東隅にあたる。ほぼ中央に柱痕跡が存在する。１層が柱痕で、２～６層は掘方埋め土である。遺物は出土していない。

271 柱穴（第 152・153 図、第 31 表、図版 67）

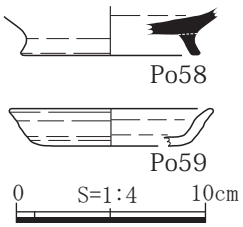
271 柱穴は、平面形は隅丸方形状、規模は長軸 0.39m、短軸 0.37m、検出面からの深さ 0.20ｍを測る。建物の南側中央にあたる。柱痕跡は確認できないことから、柱は抜き取られたと考えられ、４層が掘方埋め土、１～３層は柱抜き取り痕に堆積した土と考えられる。遺物は出土していない。

（２）流路ほか

１溝（第 143・144・146・148・154 図、第 49・70・73 表、図版 149・158）

南北方向に流れていた圃場整備以前の溝（水路）で、第２次世界大戦後にアメリカ軍が撮影した航空写真に写る溝と位置関係が一致する。南北方向に主軸をとり、調査区を東西に分断するように位置する。検出した規模は、長さ約 41.7m、幅は北壁約 7.3m、南壁約 6.9m、深さは北壁約 1.4m、南壁約 1.5ｍである。断面形は逆台形状を呈し、底面に径５cm 程度の丸杭を打ち込んだ箇所も存在した。

１溝は土砂の堆積と掘削が繰り返されていたことが、北壁および南壁の堆積状況によって判明する。



第 154 図　１溝出土土器

北壁では、⑭・⑮層の堆積を切って④～⑩層が堆積しており、その後④～⑩層の堆積を切って③層が堆積している。なお、①～③層は１溝に流入した土が土壌化したものである。一方、南壁では、㉝・㉞層の堆積を切って㉚～㉜層が堆積しており、その後㉜層を切って㉖～㉙層が堆積、その上部に⑯～㉕層が堆積している。このうち、1 溝㉝層は 23 層を切っており、22 層に覆われている。

１溝は後述する２流路の西側肩部にほぼ沿っている。１溝は、天神野台地の裾部と小鴨川による谷底平野の境界部に位置しており、２流路等による開削によって地勢が変化しており、１溝西側の緩斜面は主に畑地、東側は主に水田に利用されていたと考えられる。

遺物は、溝底を中心に多く出土したが、圃場整備以前に利用されていた溝（水路）であるため、近現代の陶磁器類や瓦などが主たるものであった。Po58 は須恵器の高台を持つ底部片で、静止糸切りされている。Po59 は土師器の皿で、口縁部が外側へ屈曲する。底部はヘラ切りと考えられる。

２流路（第 149・155 ～ 163 図、第 49・70 ～ 72・92・94・99・101 表、図版 77・78・81・151 ～ 155・160・161）

２区東側に広がる流路である。位置的には１溝のわずかに東側が流路の西側の肩部になる。東側の立ち上がりが調査区内に無いために流路幅を推定することはできないが、調査区内で確認できる規模は北壁で幅約 10.9m、深さ約 1.2m、南壁で幅約 4.3m、深さ 1.1m である。地形から考えて、南から北方向へ流れていたことが分かる。

２流路埋土は粗砂が主体の堆積であり、下層には礫が多く混じるようになる。流路の堆積であるため、堆積と浸食が繰り返されており、基本的には流れが強かったようであるが、一時的に流れが弱いあるいは滞水した時期には南壁の６層や 10 層のようにシルトの堆積が進行したことがわかる。

本遺構は、後述する出土遺物や、76 木製構造物、171 木製祭祀具集中部の存在から、古代には存在し、中世に埋没したと考えられる。

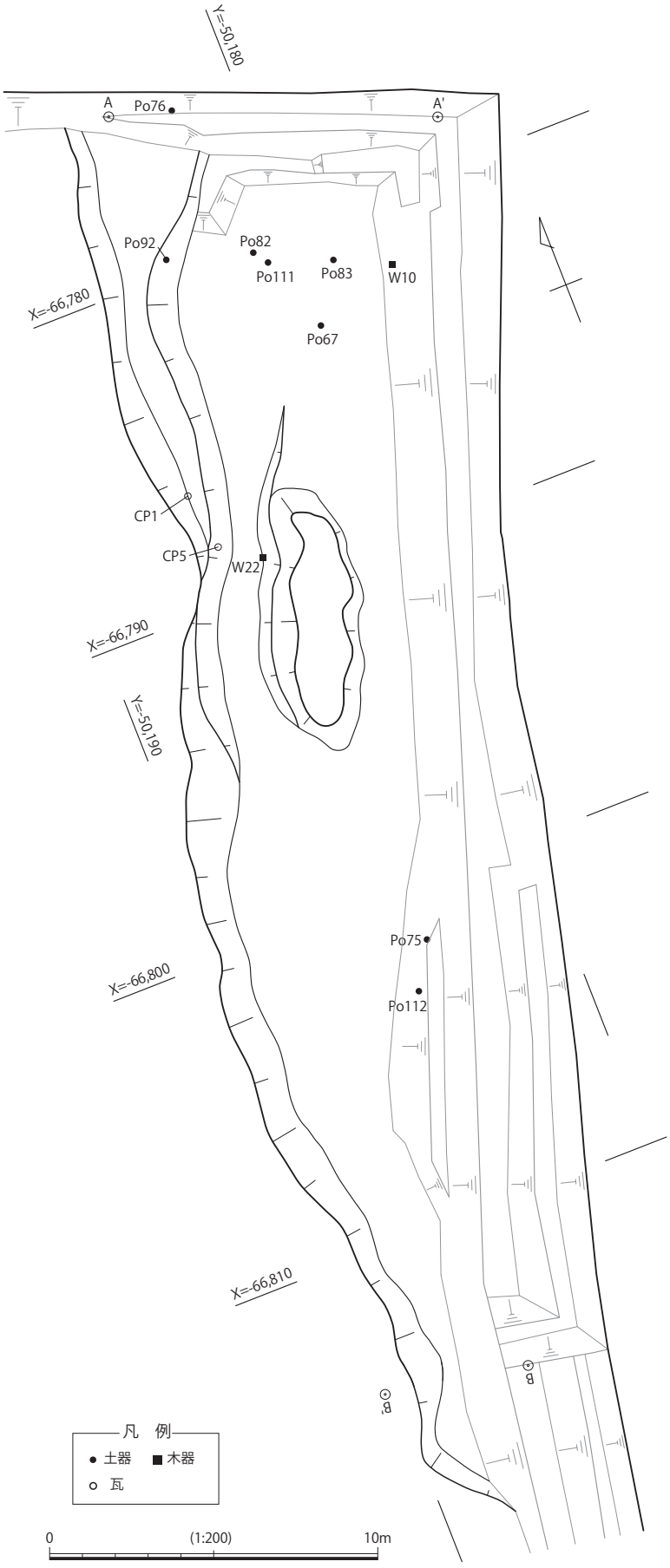
遺物には、土器類と他に隣接する石塚廃寺に伴うと考えられる瓦も含まれていた。

Po60 ～ 63 の４点は弥生土器である。このうち、Po60 ～ 62 は甕で、口縁部外面に擬凹線が施されるが、Po62 では複線波状文となっている。３点とも口縁部の立ち上がりはやや外傾する形状で、後期中葉から後葉に位置付けられる。Po63 は高坏の口縁部である。内外に拡張された口縁端部上面に５条の沈線文を施す。坏部は深さの浅い皿状で、やや内湾しながら外傾しており、外面には稜が存在する。

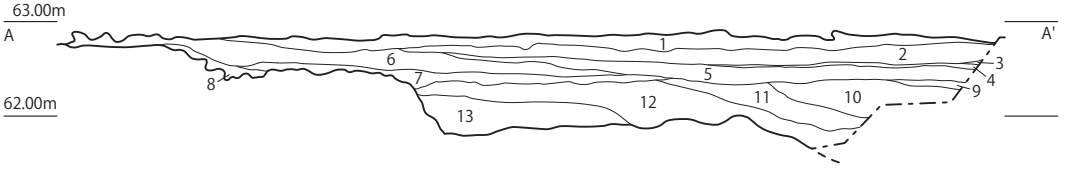
Po64 ～ 70 の７点は土師器の甕である。Po64 ～ 66 は複合口縁で、口縁下端の突出は Po64 ではシャープであるが、Po65 は丸みを帯びて鈍くなっている。Po66 は複合口縁の退化が顕著になり、口縁部が短くなると共に、下端の突出が丸みを帯び屈曲するだけになっている。Po67 ～ 70 は口頸部が「く」の字状に外反しながら大きく屈曲するものだが、Po69・70 は口縁端部近くでさらに外方に屈曲する。なお、この２点は形態や焼成状況などがよく類似しており、直接接合する箇所はないが同一個体である可能性もある。Po71 ・ 72 は赤色塗彩された土師器で、Po71 は平底から内湾気味に体部が立ち上がる坏ないし皿の底部である。Po72 は平底から口縁部が内湾気味に短く立ち上がる。Po73 ・ 74 は土師器の甕である。Po73 は平底からほぼ直立して体部が立ち上がり、上端が外側に屈

曲する。体部外面はヘラ状工具によって縦方向にナデている。円形に体部を巡らせた後に、底に粘土を詰めて底部を形成しているが、粘土の接着は甘くブロック状の粘土塊が認識できる。Po74は平底の甕である。平底からやや内湾しながら内傾し、「く」の字状の口縁部にいたる。外面の底部と体部の境には指ナデが連続して施される。底部外面には板目状の痕跡が残り、内面は雑にナデられている。Po76は律令期の土師器高坏の脚筒部で、８角形に面取りされている。筒部内面には先細りの棒（最大幅1.3cm）を回転させてから抜き取った痕跡が残されており、棒の周りに粘土を巻き付けて成形した後に抜き取ったことが想定される。Po75も土師器の高坏で、坏部外面には放射状にハケメが施される。

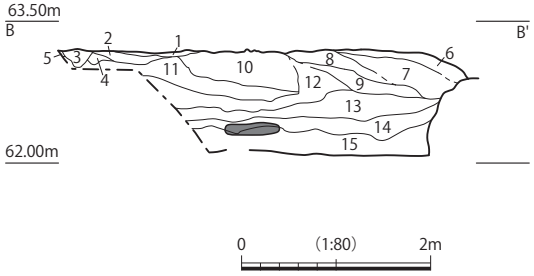
Po77～114は須恵器である。Po77～84は坏蓋で、Po77は天井部と体部の境に１条の沈線を施して稜を表現している。口縁端部は丸く仕上げられている。Po78～80は天井部と体部の境の稜表現が無くなったもの。Po81は潰れて低い擬宝珠状のつまみが付くもの。Po82・83は輪状のつまみが付くもの。Po84はつまみが付く時期のもので、口縁端部が垂直に下方に折れ曲がったものである。Po85～87は坏身である。受部の立ち上がりはPo85→Po86→Po87の順に短くなり、Po87では受部の高さと変わらなくなっている。Po88は平底で、底部切り離し後にナデ調整されている。Po89～93は坏の底部と考え



第155図　２流路（１）



２流路 A-A'
1　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂 (10YR2/1 黒色 細砂～砂混じりシルトマーブル状混)
2　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂
3　10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂 (10YR4/1 褐灰色 シルト混じり大粒少混)
4　10YR4/1 褐灰色 わずかにシルト混じり細砂
5　10YR3/1 黒褐色 わずかにシルト混じり細砂
6　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 (10YR7/1 灰白色 細砂がわずかにマーブル状混)
7　10YR2/1 黒色 シルト (10YR7/2 にぶい黄橙色 シルト小ブロック少混　10YR3/2 黒褐色 砂ブロック混)
8　10YR2/1 黒色 シルト小ブロックと10YR7/2 にぶい黄橙色 シルト小ブロックと10YR3/2 黒褐色 砂～細砂ブロックの混合土
9　10YR8/1 灰白色 細砂～粗砂 (10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂小ブロック混)
10　10YR7/1 灰白色 細砂 (φ0.5～1cm礫多混)
11　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 (10YR5/2 灰黄褐色 わずかにシルト混じり細砂マーブル状混)
12　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト
10YR4/1 褐灰色 わずかにシルト混じり細砂 と 10YR7/1 灰白色 細砂～砂の互層 (一部マーブル状)
13　10YR6/1 褐灰色 細砂～砂 (10YR4/1 褐灰色 植物片混じり細砂薄く層状混)



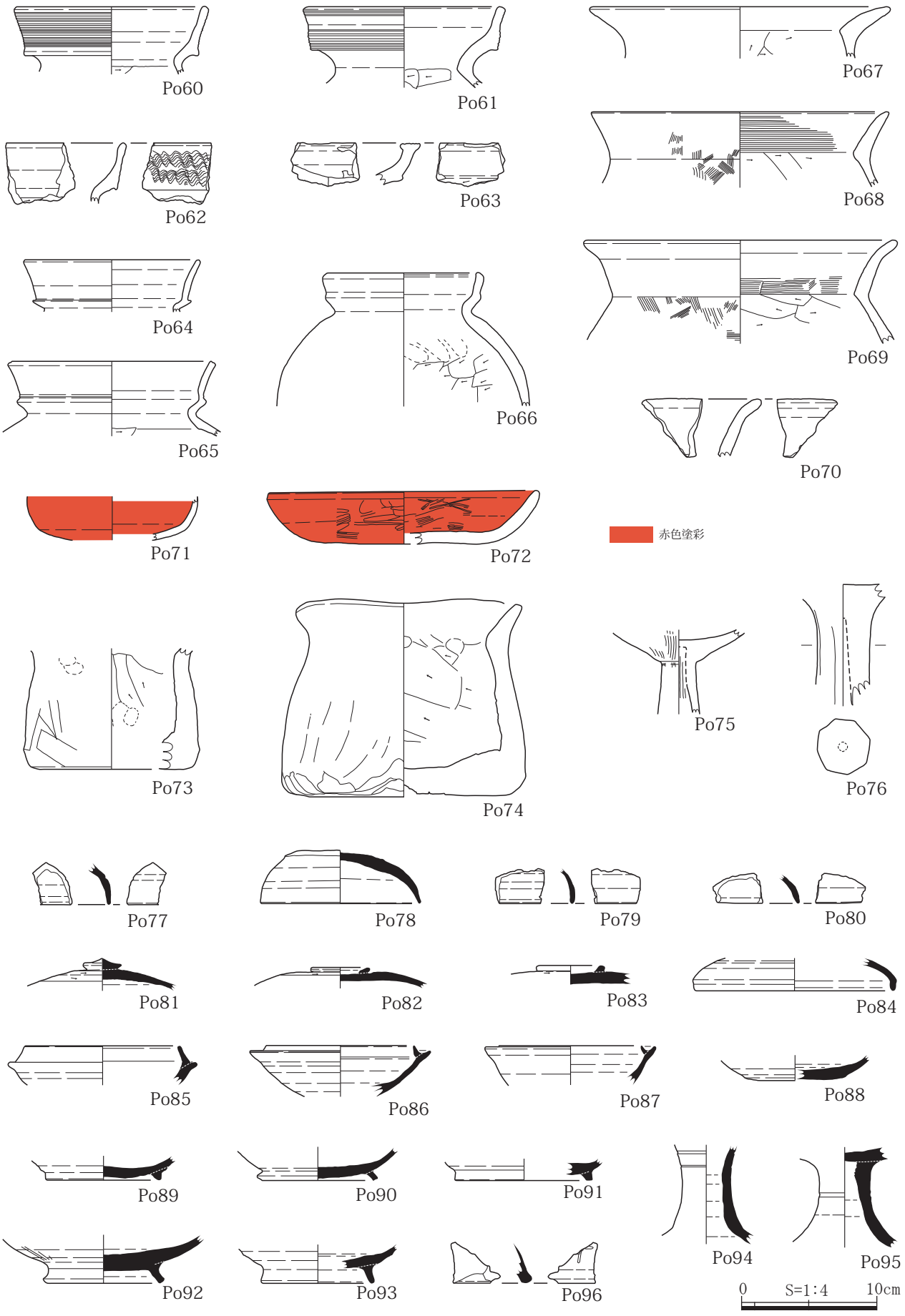
２流路 B-B'
1　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂～砂 (10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト小ブロック混)
2　10YR2/1 黒色 細砂～砂混じりシルト
3　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂～砂
4　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂
5　10YR2/1 黒色 わずかに砂混じりシルト (10YR3/2 黒褐色 シルト混じり砂～細砂層状混)
6　10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂 (植物片少混)
7　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 (植物片極少混)
8　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR2/1 黒色 シルトブロック少混)
9　10YR1.7/1 黒色 シルト (10YR6/1 褐灰色 砂ブロック極少混)
10　10YR1.7/1 黒色 シルト
11　10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 シルト層状混　植物片混)
12　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂 と 10YR7/1 灰白色 細砂～砂の互層
13　10YR2/1 黒色 シルト混じり細砂 (10YR4/1 褐灰色 シルト混じり細砂～砂層状混)
14　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR6/2 灰黄褐色 細砂小ブロック少混)
15　10YR4/1 褐灰色 砂～粗砂 (φ1～10cm礫混　φ20～30cm礫混)

第 156 図　２流路（２）

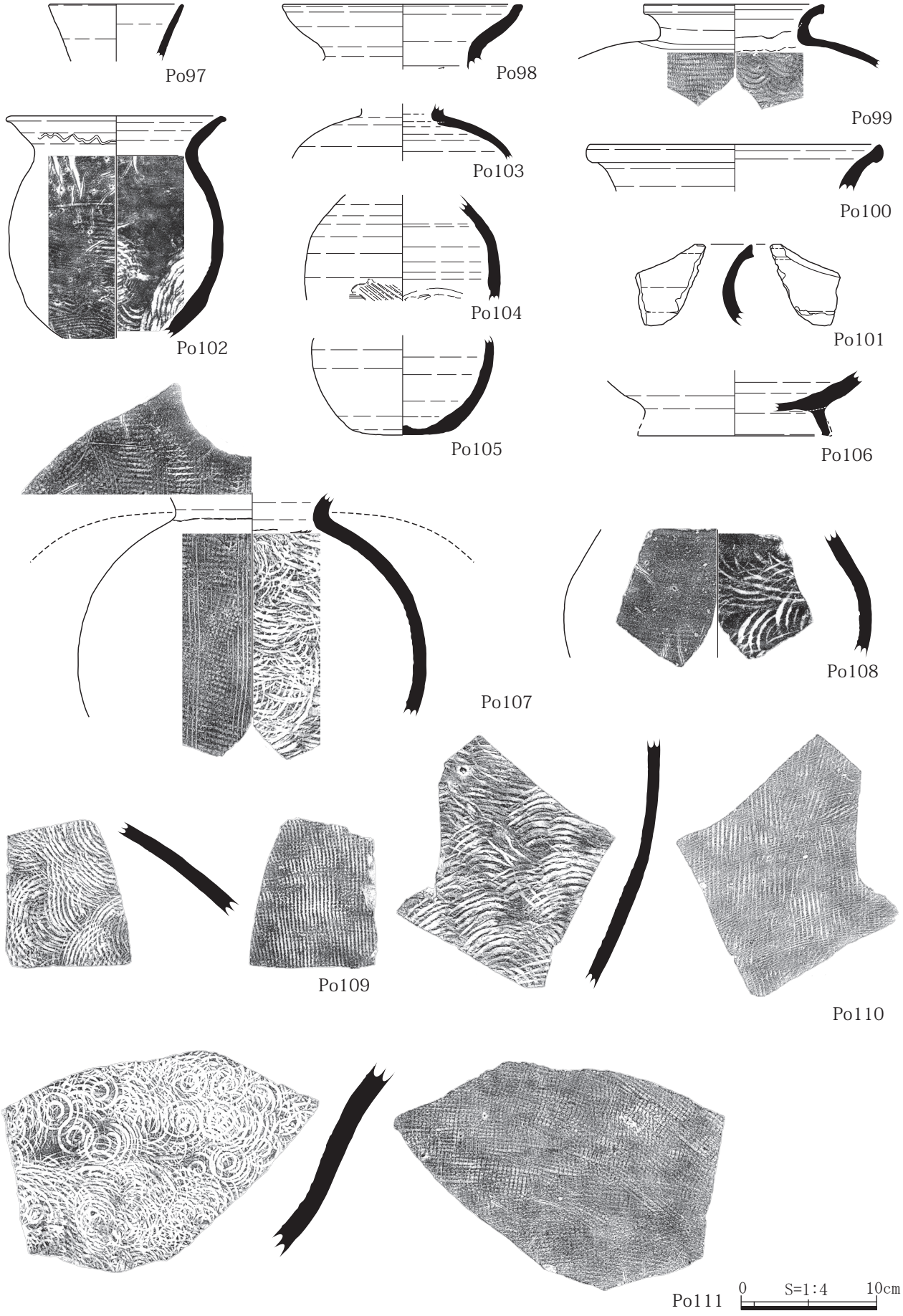
られるもので、Po89 ～ 91 は低い高台、Po92 ・ 93 はやや高い高台を持つ。なお、Po91 は焼成が不良で土師器のようにもみえる。Po94 ・ 95 は高坏の脚部である。Po94 は上方に２条の沈線が残り、下方が外側に強く屈曲する。Po95 には１条の沈線が残る。Po96 は脚部で、やや内湾するが端部が外側に屈曲する。外面に縦および横方向の線刻が施されている。欠損部が多く全体形は不明確ではあるが、「+」状であった可能性が推測される。

Po97 ～ 101 は口縁部である。Po101 は外反したのちに端部で肥厚し上方に伸ばす。Po100 は外反したのち端部近くで内側に屈曲させる。端部外面は下方に肥厚させ玉縁状とする。Po98 は外反したのち端部近くで内側に屈曲させる。Po99 は横瓶の口頸部で、口縁部は大きく外反する。端部は平端となりやや窪む。Po97 は長頸壺と考えられるもので、直線的に外傾して開く単純な筒状の口縁部である。Po102 は口縁部が直線的に外傾し端部をわずかに外方に屈曲させる壺である。口縁外面には１条の波状文が巡る。胴部はほぼ球形で、口径 11.5cm の別個体が焼成時に融着した痕跡が残る。Po103 は肩部から頸部にかけてである。頸部と胴部は別造りであり、痕跡が明瞭に残る。Po104 は胴部片で、下端部に平行叩き痕が残る。Po105 は平底の胴部下半部である。Po106 は壺または甕と考えられる高台を持つ底部である。Po109 ～ 114 は胴部片であり、甕の可能性が高い。いずれも外面には平行叩きが施され、内面には円形の当て具痕が残る。なお、Po108・113・114 には平行叩き後にナデが施されている。Po107 は横瓶である。口縁部の多くを欠損する。体部は横に長い球体をなし、外面には平行叩き後に縦方向のカキメを施す。内面には円形状の当て具痕が残る。体部上部にヘラ記号が描かれている。Po108 は体部片であり、口頸部は欠損している。外面は平行叩きがヨコナデによってナデ消されている。

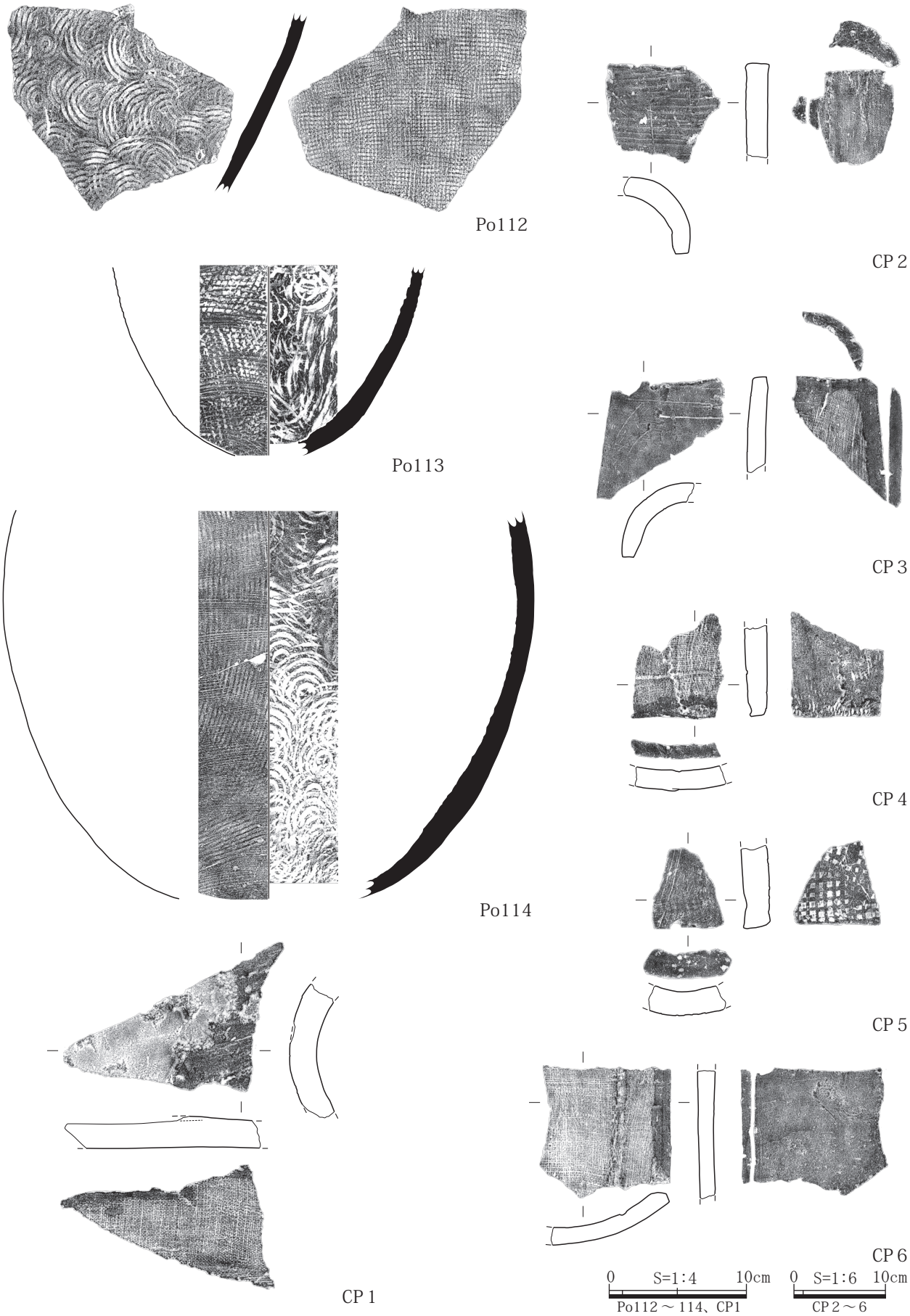
CP １は軒丸瓦の丸瓦部分である。凸面には瓦当との接合を補強するための粘土痕跡が残されている。凹面には布目痕が残る。CP ２・３は丸瓦である。CP ２は残存する狭端面および右側端の一部か



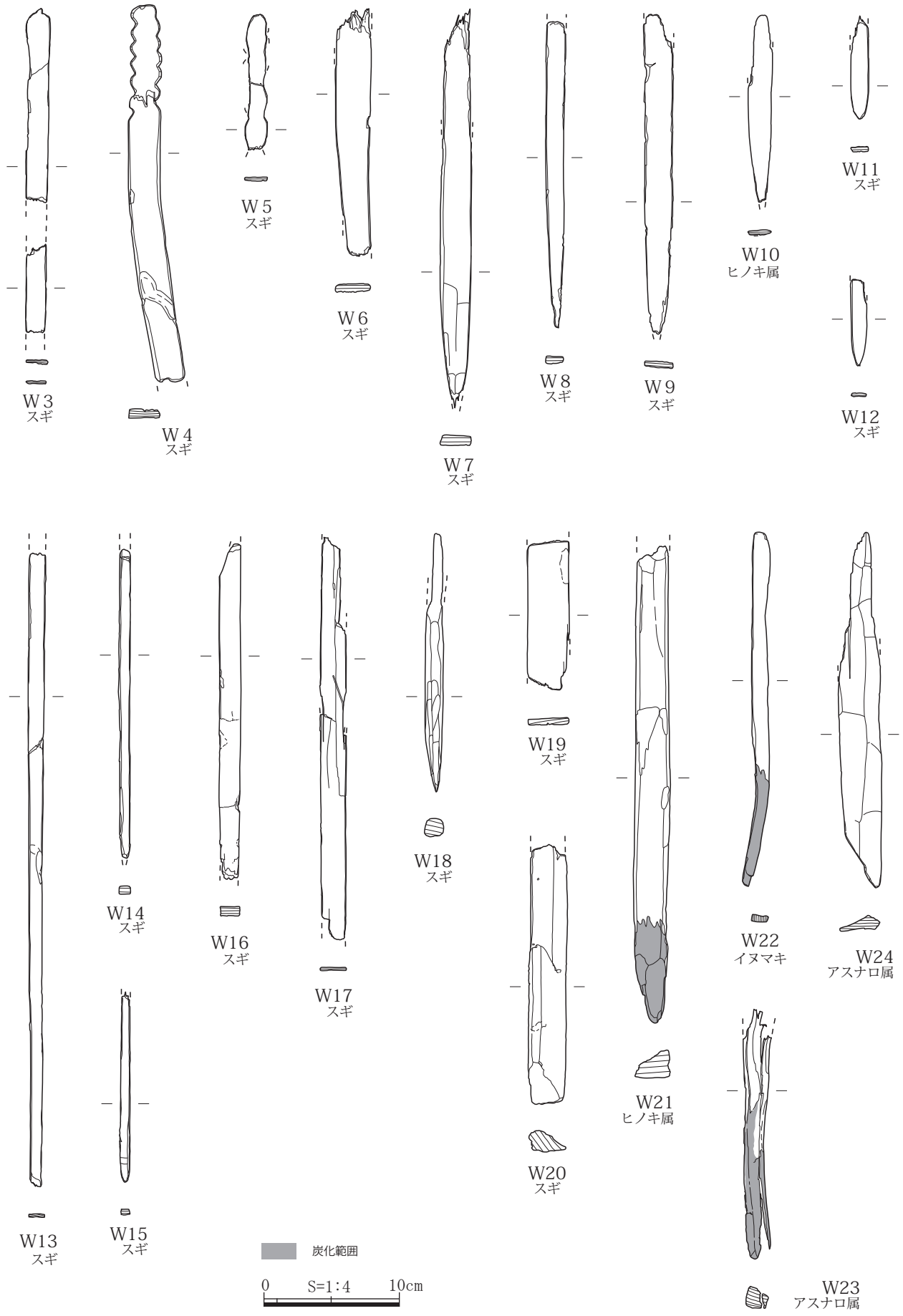
第 157 図　２流路出土土器（１）



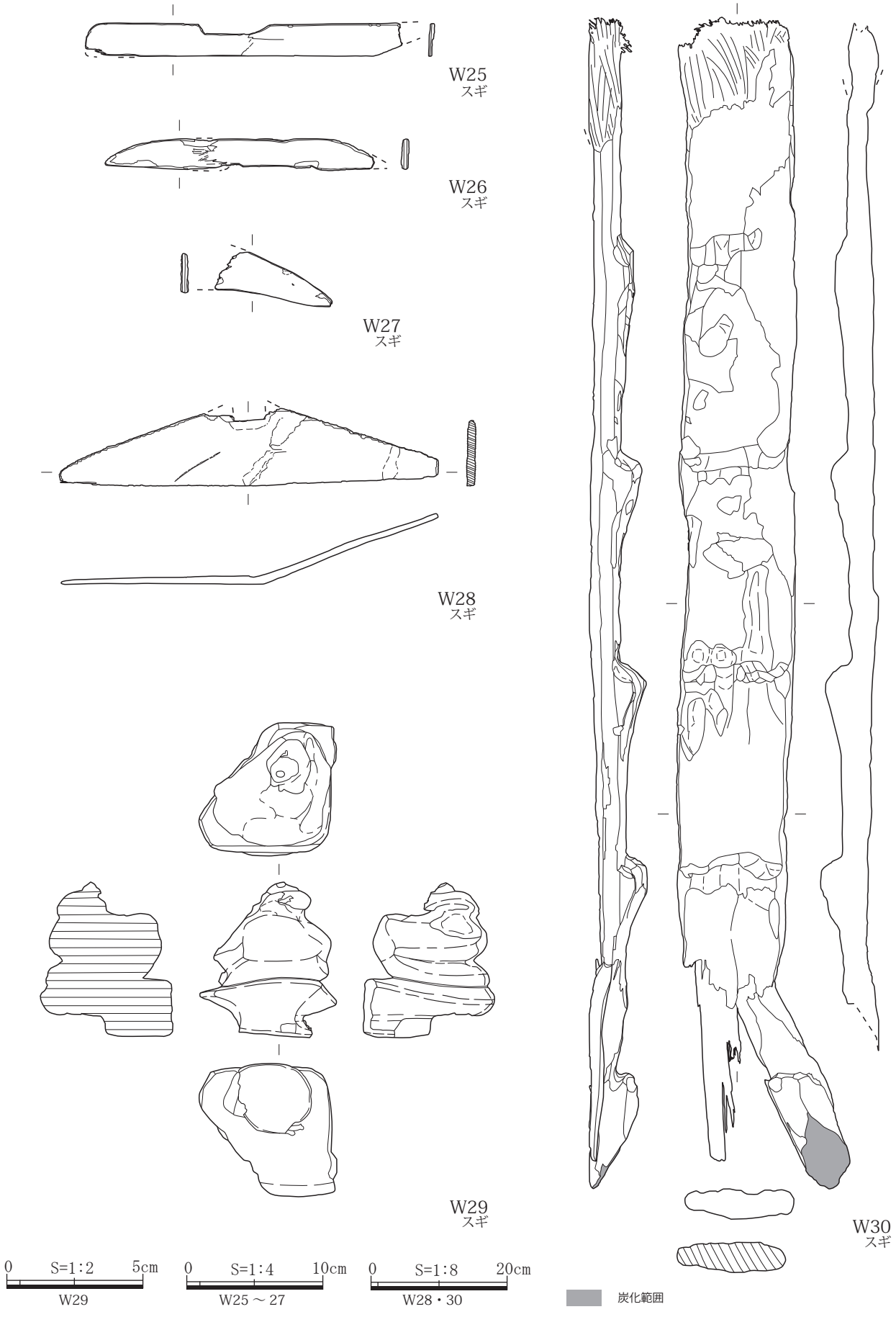
第 158 図　２流路出土土器（２）



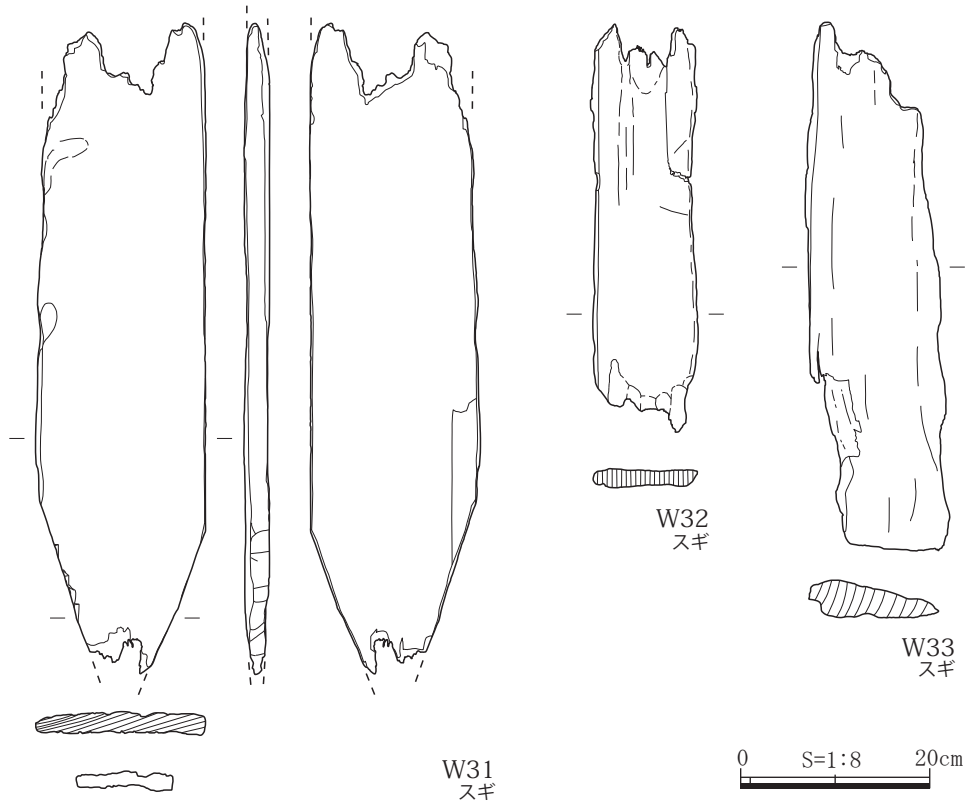
第 159 図　２流路出土遺物



第 160 図　２流路出土木器（１）



第 161 図　２流路出土木器（２）



第 162 図　２流路出土木器（３）

ら無段式の丸瓦と分かる。右側面は切断後に２次調整として凹面側をヘラケズリによって調整している。凸面は間隔の広いヨコハケメ調整、凹面には模骨痕および布目痕が残る。CP３は径の小さい狭端側で、狭端面および左側端の一部から無段式の丸瓦と分かる。狭端面および左側面は切断後に２次調整として凹面側をヘラケズリによって調整している。凸面は工具によるナデ調整、凹面には布目痕が残る。CP４～６は平瓦である。CP４は凸面の縄目叩き後に粘土を加えて工具でナデ消しており、凹面に布目痕が残る。広端面は切断後に２次調整として凹面側をヘラケズリによって調整している。CP５は凸面に正方形の格子文叩きが施され、凹面は布目痕がナデ消されているようである。広端面に切断後の２次調整は認められない。CP６は凸面に工具によるナデが、凹面には模骨痕および布目痕が残る。右側面は切断後に２次調整として凹面側をヘラケズリによって２回調整している。

２流路内からは木製祭祀具などが出土したが、２流路内に存在した遺構（76 木製構造物および 171 木製祭祀具集中部）出土遺物は別に報告するので、それらを除外した木器をここで記述する。

Ｗ３～15 は斎串と考えられるものである。Ｗ３は細長い薄板の上端が圭頭状となる。２片に分かれていて接合はしないが、出土状況や形状等から同一個体と判断できるものである。両側縁に切り欠きは認められない。Ｗ４は細長い板の上方の両側縁に切り欠きを持つもので、切り欠きは大きく明瞭。中央から下端にかけては切り欠きが存在しない。上端および下端を欠損する。Ｗ５は細長い薄板の両側縁に切り欠きを持つが、遺存状況が悪く、切り欠きによって形作られた山形部分の多くと上端および下端を欠損する。Ｗ６～12 は尖らせた下端部分と考えられるものである。Ｗ６は下端に近い部分である。上端および下端を欠損するが、下端に向けて徐々に幅が狭くなっている。Ｗ７～12 は上部を欠損するが、尖らせた下端の形状がほぼ遺存している。W13 ～ 15 は幅の狭い棒状に加工されたもので、簡略化された斎串と考えられる。いずれも上方を欠損している。W13 の下端は

尖らさずに斜めに切断されており、W14・15 は尖らせている。

W16 は細長い薄板の上端を斜めに切断している。下方を欠損するため全体形は不明だが、形代の刀形の可能性が考えられる。W17 は細長い薄板の両側縁に上から下に向けて各１ヶ所ずつの切り込みが施されている。上端および下端を欠損するため明確ではないが、形代の人形ないし斎串の可能性が考えられる。W18 は円形状に面取りされた棒状品の下端を尖らせたもの。上方を欠損するため明確ではないが、丸杭であろうか。ただし、丁寧な面取りを施していることから、形代の可能性も考えられる。W19 はやや幅の広い薄板である。上端および下端を欠損するため全体形を明確にはできないが、形代の一部の可能性が考えられる。

W20 は断面が直角三角形状のもので、下端を斜めに切断している。上端は欠損している。中央部分に切り込みが入れられ、その上方が剥離している。用途は不明である。76 木製構造物出土の W56 と形状が類似する。W21 ～ 24 は付け木と考えられるもの。W21 は角棒を転用したと考えられるもので下端が炭化する。W22 ～ 24 は母材から鉈等で裂き取られたと考えられるもの。W22・23 は下端が炭化しているが、W24 には炭化部は残っていない。

W25 ～ 27 は形代の馬形と考えられるものである。W25 は裸馬で背に切り欠きを持つ。耳の表現や足を表現する切り欠きは無く、口の表現は欠損部にあたるため不明である。後端面は下側が斜めに切り落とされており、尾が尻部から独立せず、一体として表現されている。馬形の多くには、自立させるための細棒を差し込むための棒孔が存在するが、現状では認められない。ただし、裏面の中央部分に剥離した痕跡があるため、棒孔が存在した可能性も否定できない。W26 は背の切り欠きが無く、口と耳の表現もない。足を表現する切り欠きは２つ存在するが、前足の切り欠きは不明瞭である。棒孔が１つ存在する。W27 は馬形の尾部分と考えられるもので、W26 と類似した形状か。

W28 は低い三角形状を呈するもので、上端部は欠損するが、方形状の穴または抉りの痕跡が残されている。形状が農具の「えぶり」に似ているが下面に鋸歯状の切り欠きが存在しない。用途は不明。重機による流路埋土の掘り下げ中に出土したもの。W29 は螺旋を描くように削り出された木器である。遺存状態が悪く詳細を明らかにすることはできない。用途は不明である[1)]。

W30 は裏面を平坦状に削り、表面に足掛けを削り出した一木梯子。下端は斜めに切断されており、炭化している。下端は直接地中に埋め込まれるため、腐食防止のために表面を炭化させたのではないだろうか。上端は欠損している。W31 は下端を両側から削って尖らせた矢板。W32･33 は板状の部材であるが、表面の腐食が激しく詳細は不明である。

また、写真掲載のみではあるが、大きく胴が張る須恵器甕の体部である Po842、白磁皿で内面にハケ状工具による施文が施される Po843 も出土している。

【註】

1）　大平茂氏から仮面の一部ではないかとのご意見をいただいたが、類例を見い出せなかった。

76 木製構造物（第 149・163 ～ 170 図、第 24・49・72・99・100 表、図版 80 ～ 83・154・155・162・163）

２区東側の 7a-8B-9i・ 10i グリッド、２流路の底面に南北 9.5m、東西 3.5ｍの灰白色砂質シルトを主体とする島状の基盤層があり、その南東側に位置する。東側は調査区外となる。北東から南西方向約 4m、直交方向の幅約 2.5ｍの範囲に大型の礫や自然木、加工木等の木器が混入する盛土が広がる。主軸は N-35° -W、川底面からの高さは、最大で 0.27ｍを測る。６層が基盤層、１～５層が大量の木器を含む盛土層である。以下、１・２層を上部、３～５層を下部として記述する。

［上部］

盛土の芯として、矢板 W51 を中心に、南東方向に大型の自然木、北西方向に建築部材 W50 と自然木が直線状に延びる。北西端には２流路の西岸に沿うように南西から北東方向に長さ 2.8ｍの建築部材 W52 があり、盛土内には自然木や加工木が大量に混在する。矢板と上位に延びる大型の自然木に挟み込まれたような状態で木製祭祀具の①群が出土した。

①群の木製祭祀具は６点ある。斎串 W34 ・ 35 はやや厚い板状で両側に切込みがある。斎串 W36 は板状で両側に切込みがある。斎串と思われる W38 は三点が接合した。刀形 W40 はほぼ完形である。刀形 W39 は一部欠損する。矢板から 0.5m 程北西から出土した刀子形と思われる W42 は一部欠損する。

盛土の芯は、矢板から北西方向には建築部材と思われる W50、南東側には長さ約２ｍの自然木があり、総長約 2.6ｍの盛土を構築する。盛土の北西先端には、約３ｍ長の建築部材と思われる W52 が北東から南西方向に延び、板からの列とともに「Ｔ」字状の盛土となる。盛土から出土した曲物側板 W44 は、ケビキを入れないため裂けたようである。ほか周囲から角棒材 W54 ・ 56、丸杭 W55 が出土した。

［下部］

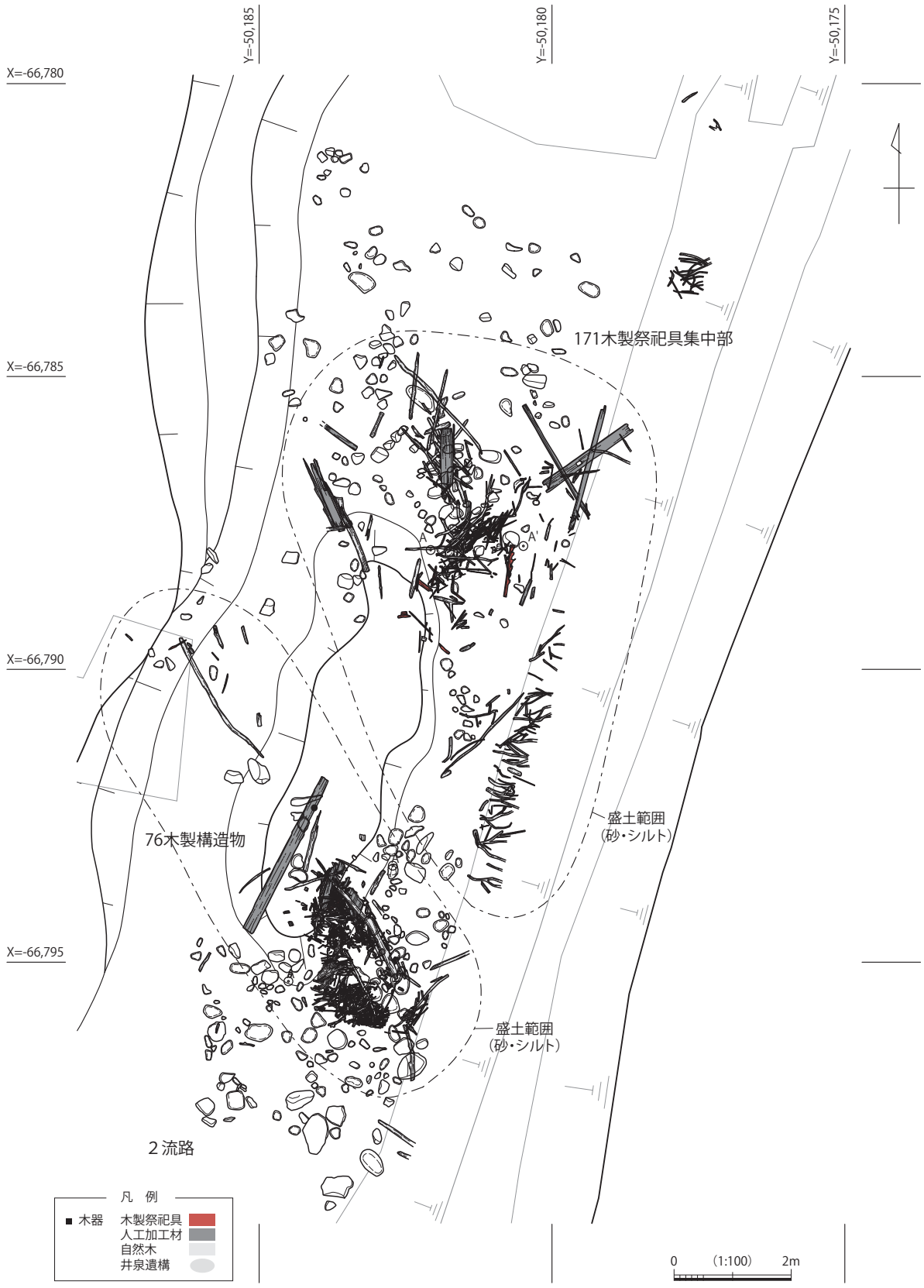
盛土の芯は、２流路底にある島状の基盤層を利用して礫や自然木、木器を含んだ黒色シルト、灰白色砂質シルトを土手状に盛り上げて土台とする。盛土のほぼ中央に矢板 W51 が川底を掘り窪めて据えられていた。矢板は建築部材からの転用材で、臍穴には折れた破片が入ったままである。盛土中には径 10 ～ 40cm の円礫が入れられ、構造物の南、上流側に集中していた。

矢板の西側には南北方向約４ｍにわたり粗朶が縦横に重ねられ、角棒材 W53 や自然木を杭状に使用して固定していた。盛土の傾斜は緩やかで、打ち込まれた杭は自然木の先端を斜めに切り、尖らせるだけの簡易な加工で、下向きに打ち込んだだけでなく、盛土や自然木の間、横方向に差し込まれたもの、自然木に臍穴を開けて組み合わせたものもある。

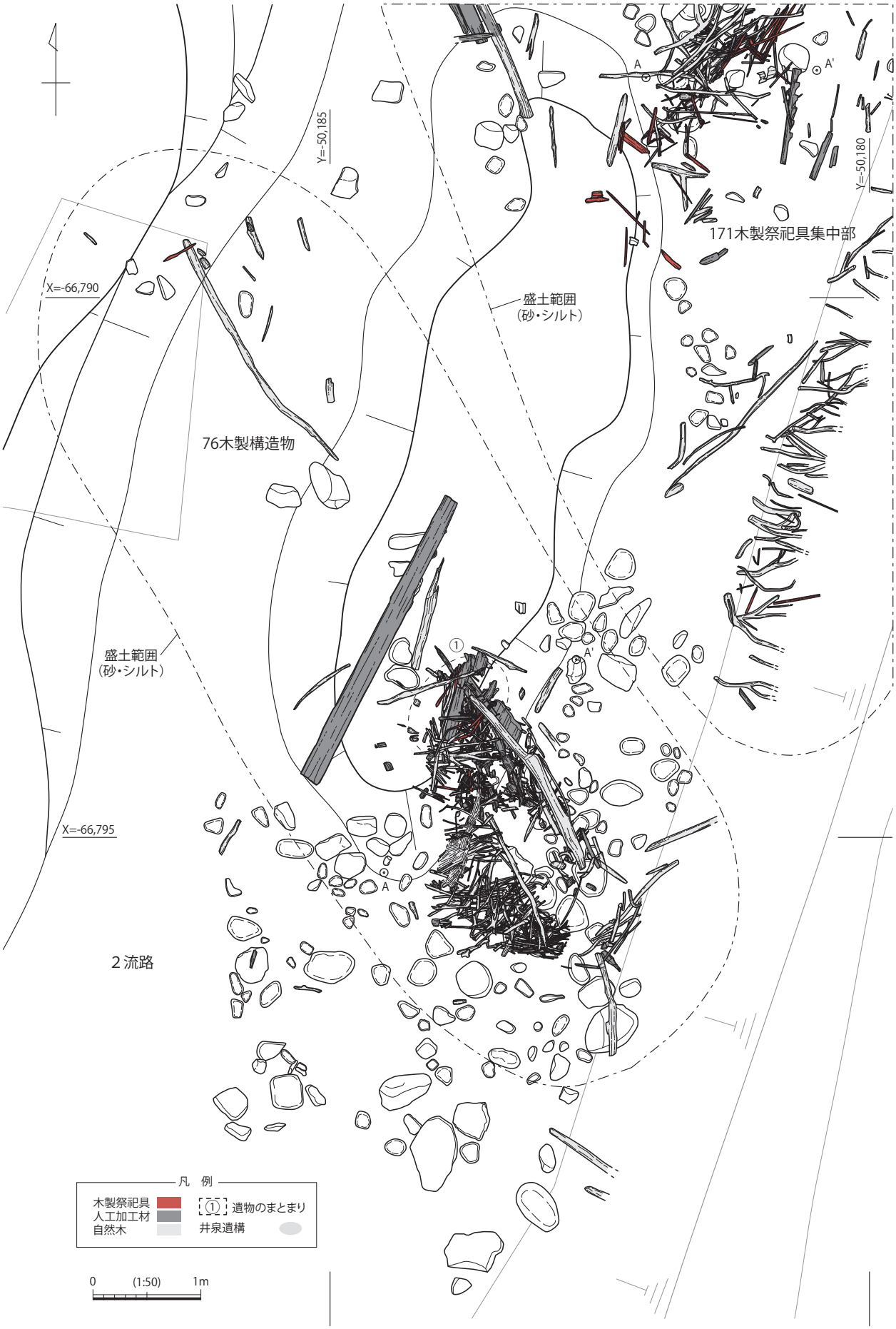
木製祭祀具は３点出土した。矢板から１ｍ程南の粗朶より下から、棒状の斎串 W37 が出土した。矢板の北隣から刀形と思われる W41、鞍の付かない馬形 W43 は、矢板から１ｍ程南東から出土した。

加工木は、矢板の西隣から付け木 W48、矢板の南西から付け木 W49、矢板から 1.5m 程南から付け木 W47 が出土した。いずれも材の一部が炭化する。南東側の調査区東際からは横槌 W46 が出土した。柄の一部が欠損する。矢板から 0.5m 程北西からは曲物底板 W45、矢板の西からは角棒材 W53 と杭 W57 が出土した。いずれも一部が欠損する。

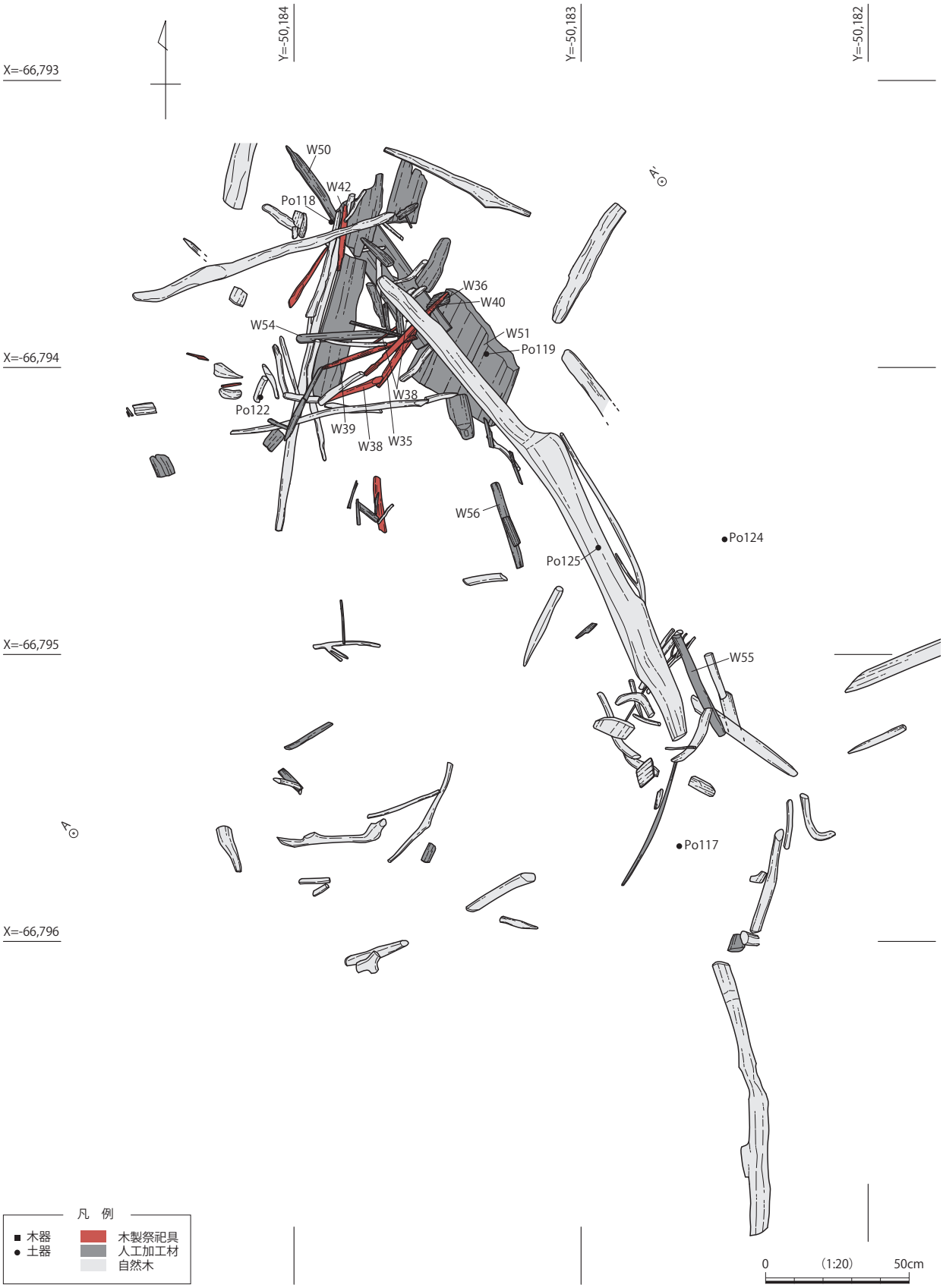
木器の総数は、細片を除いた分類可能な点数は 513 点ある。木製祭祀具は図化していないものを含め 39 点、全体の約７％ある。加工木は 116 点で、全体の約 23％ある。主体は板または板端材



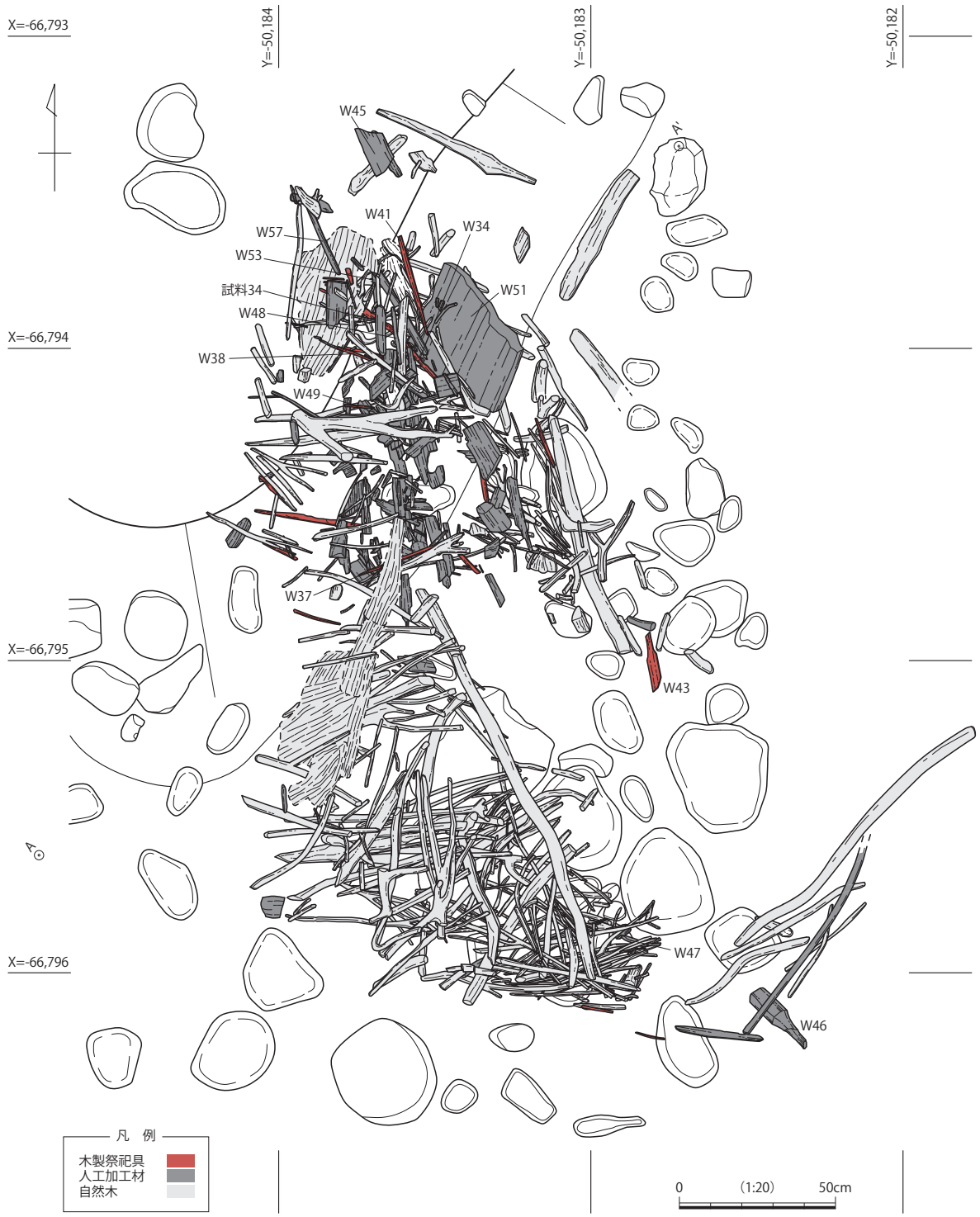
第 163 図　２流路・76 木製構造物・171 木製祭祀具集中部



第 164 図　76 木製構造物拡大図

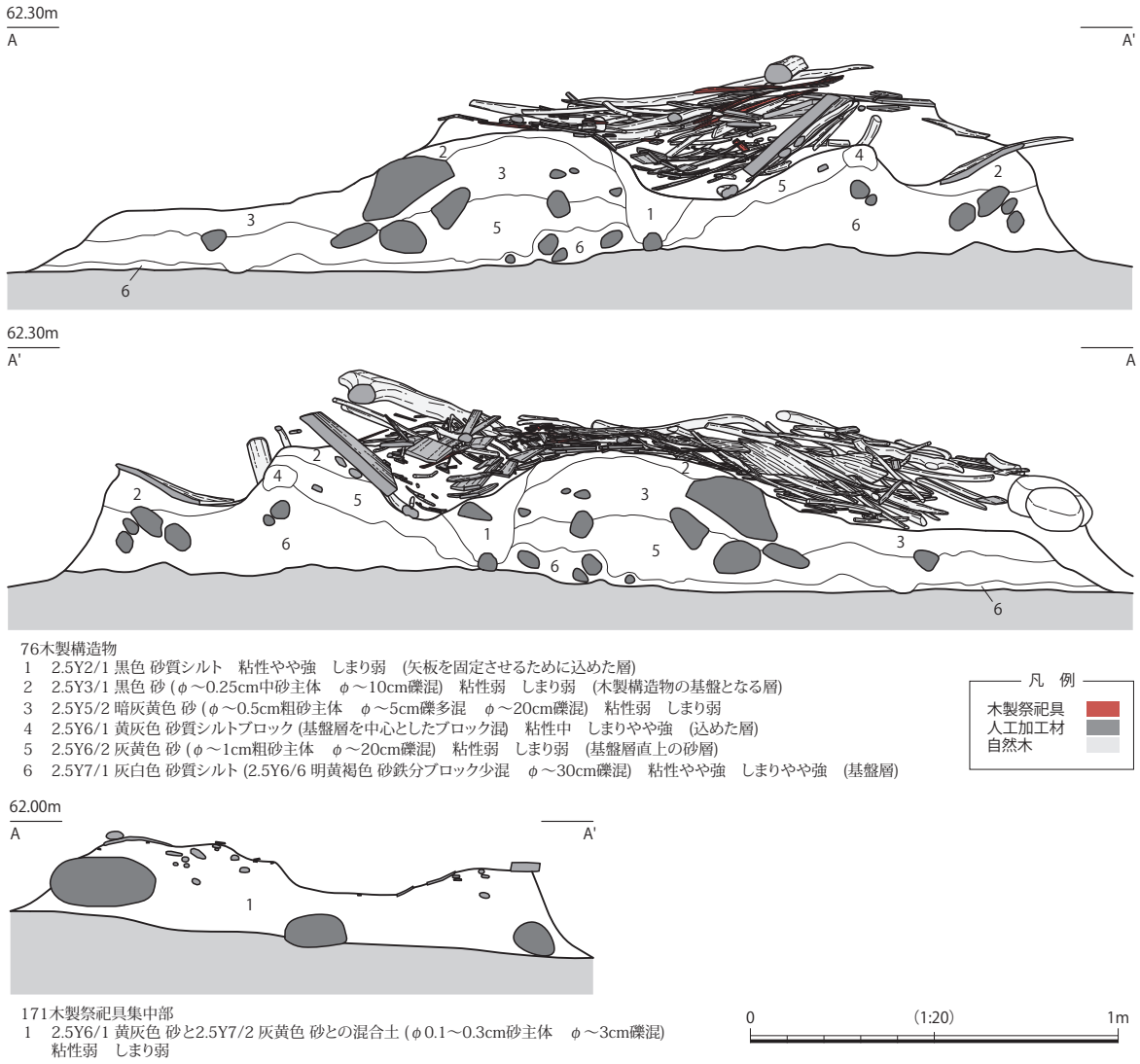


第 165 図　76 木製構造物遺物出土状況図（上部）



第 166 図　76 木製構造物遺物出土状況図（下部）

74 点である。製品としては横槌１点、曲物２点、角棒材 10 点、丸杭２点、杭の一部１点、矢板１点、建築部材２点、不明部材７点である。そのほか、付け木７点、はつり材が９点ある。主体をなすのは自然木で 358 点、全体の約 70％を占める。この中で木の枝である粗朶は 261 点で最も多い。枝の状態のままのものと切りそろえて束にして重ねたものがある。自然木の杭とした 42 点は、細かい枝を落として棒状にした枝の片側または両側を尖らせた簡易な作りである。こうした杭の中には臍穴状の



76木製構造物
1　2.5Y2/1 黒色 砂質シルト　粘性やや強　しまり弱　(矢板を固定させるために込めた層)
2　2.5Y3/1 黒色 砂 (φ～0.25cm中砂主体　φ～10cm礫混)　粘性弱　しまり弱　(木製構造物の基盤となる層)
3　2.5Y5/2 暗灰黄色 砂 (φ～0.5cm粗砂主体　φ～5cm礫多混　φ～20cm礫混)　粘性弱　しまり弱
4　2.5Y6/1 黄灰色 砂質シルトブロック (基盤層を中心としたブロック混)　粘性中　しまりやや強　(込めた層)
5　2.5Y6/2 灰黄色 砂 (φ～1cm粗砂主体　φ～20cm礫混)　粘性弱　しまり弱　(基盤層直上の砂層)
6　2.5Y7/1 灰白色 砂質シルト (2.5Y6/6 明黄褐色 砂鉄分ブロック少混　φ～30cm礫混)　粘性やや強　しまりやや強　(基盤層)

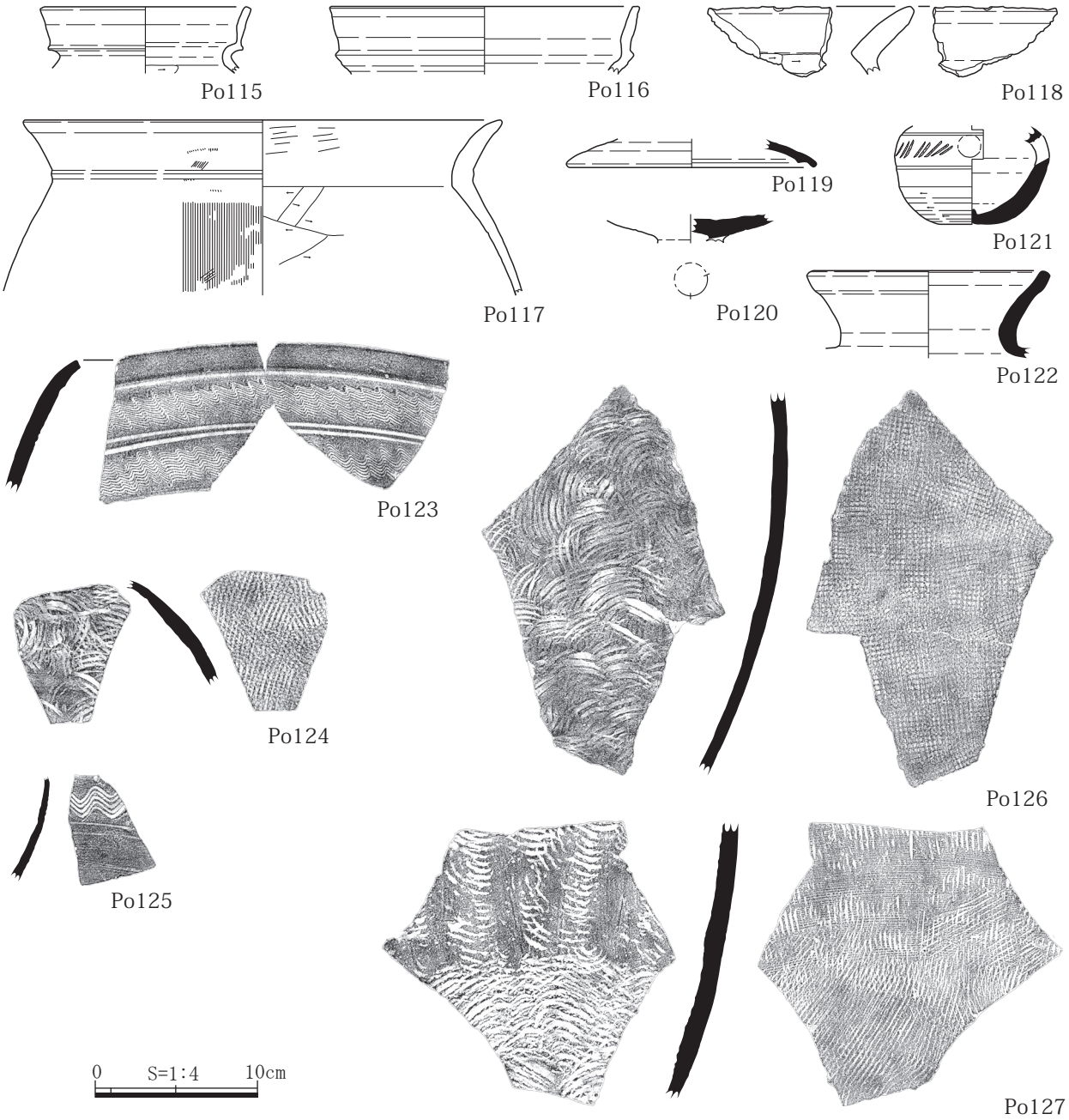
171木製祭祀具集中部
1　2.5Y6/1 黄灰色 砂と2.5Y7/2 灰黄色 砂との混合土 (φ0.1～0.3cm砂主体　φ～3cm礫混)
　粘性弱　しまり弱

第 167 図　76 木製構造物遺物出土状況図・見通し、171 木製祭祀具集中部断面図

抉りを入れた枝もある。枝を落としただけで先端を加工していない棒状材 13 点、比較的丁寧な加工を施した丸棒材 20 点がある。ほか、丸木の分割材 17 点、樹皮５点、種子 13 点が出土した。種子の種別はイネ５点、トチノミ１点、不明７点である。

土器も出土している。土師器の甕 Po115・116 は複合口縁をもつ。土師器の甕 Po117・118 の口縁部は「く」の字状である。Po117 は構造物の南側、Po118 は北側から出土した。須恵器の蓋 Po119 は、端部には「かえり」をもつ。矢板の下から出土した。須恵器の高坏 Po120 は構造物の南東側から出土した。須恵器の瓶 Po121 は、板 W52 の北東側の直下から正位置で出土した。Po122～127 は須恵器の壺または甕である。Po122 は①群の西側、Po123 は島状の基盤層の中央西側、Po124 は矢板から１m 南東側、Po125 は矢板から１m 東側から出土した。Po126・127 の位置は不明である。出土した土器は甕が多い。いずれも古代の所産である。

構造物を構築する際に伐採された樹皮が付いたままの枝（粗朶）の放射性炭素年代測定（試料 34）を行った（第５章第３節）。結果は、calAD737-773（暦年較正２σの確率１位）で、遺物の年代と矛盾しない。



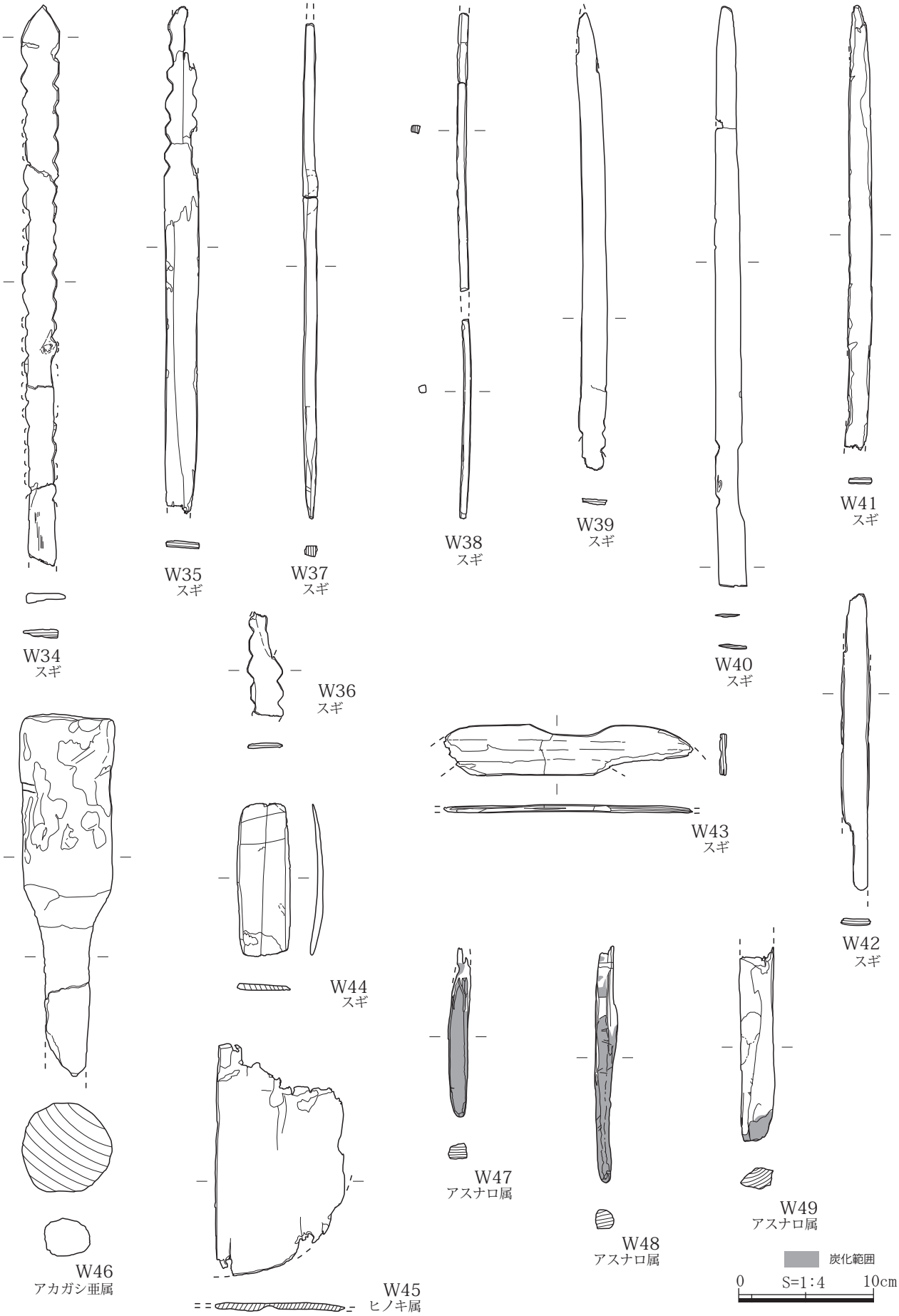
第 168 図　76 木製構造物出土土器

171 木製祭祀具集中部（第 149・163・171 ～ 181 図、第 24・72・94・100・101 表、図版 79・81・83 ～ 85・156・157・164 ～ 167）

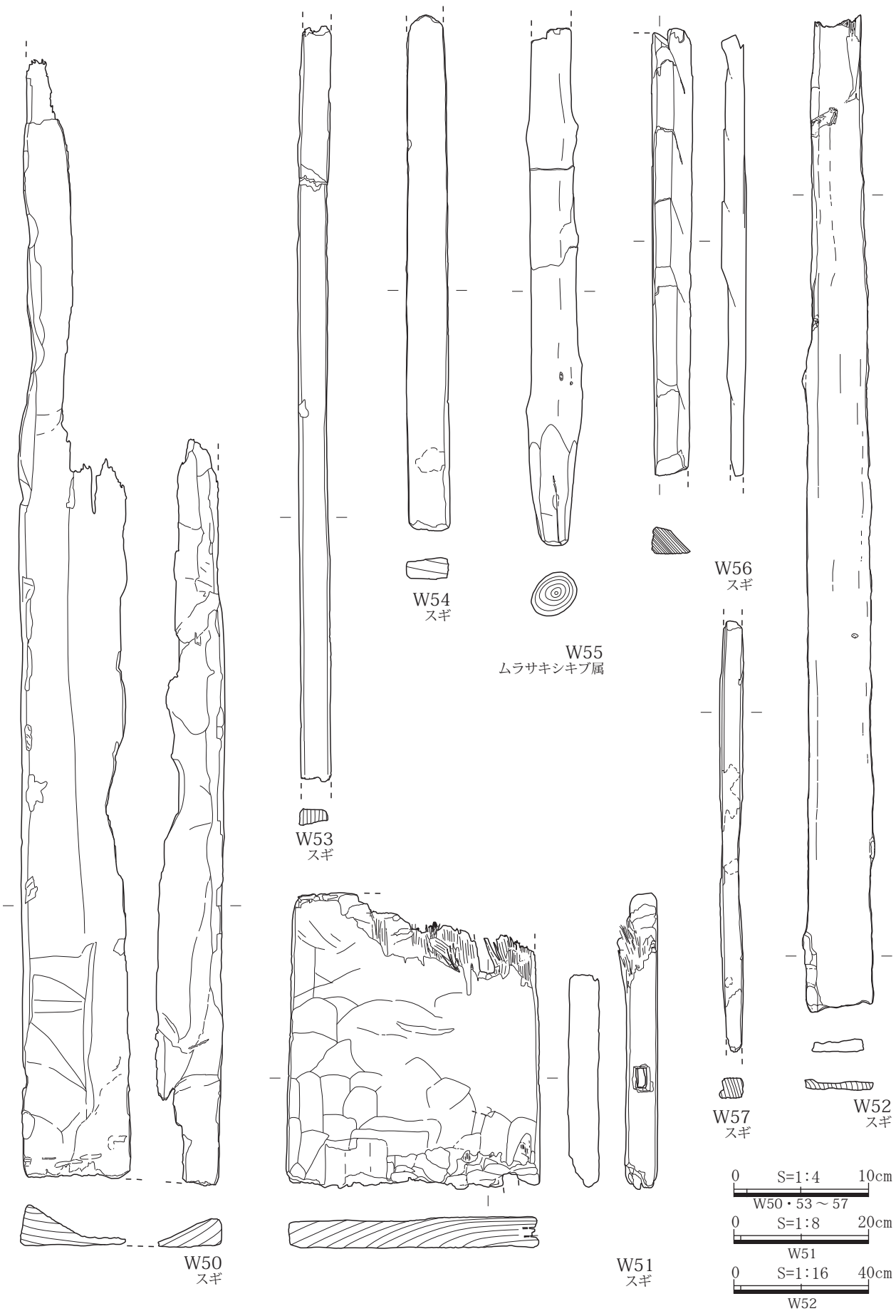
２区東側の 7a-8B-9h･10h･9i･10i グリッド、島状の基盤層の北側から南東側に位置する。木製祭祀具や加工木の出土した範囲は、島状の高まりの北端から北西方向 10.0m、南北方向 6.5m の黄灰色砂を主体とする盛土とその上面で、主軸は N-11° -W を測る。東側は調査区外となる。

北側には長さ約 3.5m、幅約 1.2m の範囲にシルトを主体とする盛土があり、その中には自然木や径 10 ～ 30cm の礫を含んでいた。北西側は２流路西際に接続する。川底からの高さは､最大で 0.44m を測る。

以下、出土した木製品について、上部と下部に分けて記述する。



第 169 図　76 木製構造物出土木器（1）



第 170 図　76 木製構造物出土木器（２）

第 171 図　171 木製祭祀具集中部拡大図

［上部］

上部は２流路の堆積層である。大型の自然木が東西または北東から南西方向に向いて出土した。木器は、北側の盛土の西側から曲物底板 W104 が出土した。土器は、土師器の甕 Po128 が島状の基盤層の上面から、須恵器の壺 Po135 が南東側から出土した。

［下部］

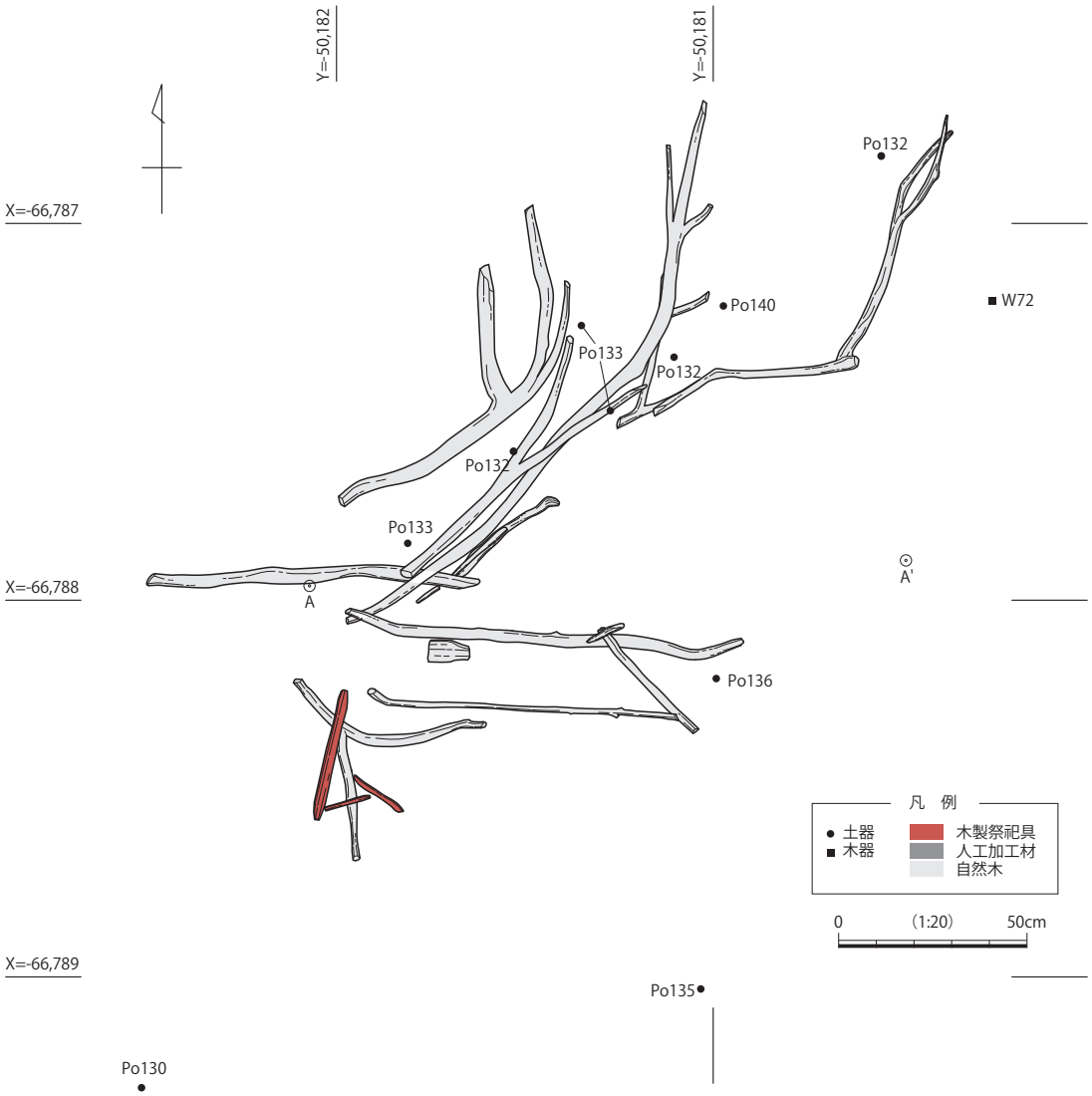
木製祭祀具や加工木のまとまり①～⑨群がある。①～⑤群は２流路の川底上面の堆積層、⑥～⑧群は川底上にある加工木や自然木の盛土から、⑨群は 171 木製祭祀具集中部北側の盛土から出土した。

①群は斎串の束を主体とする 12 点の木製祭祀具である。斎串 W58 は板状で両側に切込みがある。斎串 W59 は板状で両側に切込みがある。斎串 W60 は板状で両側に切込みをもつ。いずれも束になり先端が北東方向を向く。斎串 W61 は板状で両側に切込みをもつ。斎串 W62 は板状で両側に切込みをもつ。同じ束の中で先端が南西方向に向く。斎串 W66 は板状で両側に切込みをもつ。同じ束ではあるが先端側の向きは不明。斎串 W77 は板状で下側が尖りかける。斎串の束の中で北東から南西方向を向く。斎串 W90 は他とは異なり、棒状で頭部を二分割する。斎串の束の中で北東から南西方向を向く。斎串 W70 は板状で両側に切込みをもつ。斎串の束の下から出土した。斎串 W74 は板状で下側が尖る。斎串の束の南西端にあり、先端が南西方向に向く。斎串と思われる W89 は板状で下側が尖りかける。斎串 W67 は板状で両側に切込みをもつ。いずれも斎串の束の南西隣で束の向きと直交する。形代は、馬形と思われる W102 がある。尾が上がるため、あるいは鳥形か。斎串の束の南端から出土した。

土器は土師器の甕 Po132 ・ 133 と須恵器の体部片 Po141 がある。Po132 は斎串の束から１m 程北東の⑥群との際から、Po133 は斎串の束の南西側、Po141 は北西側から出土した。なお、Po134 は斎串の束の北東側、⑥群の際から川底の砂に埋まった状態で出土した。⑥群の盛土中ではないためここに記載しておく。

②群は斎串の束から 1.0 ～ 1.5m 南西、２流路の川底上から出土した９点の木器である。斎串 W65、斎串 W71 は板状で両側に切込みをもつ。斎串 W97 は棒状で下側が尖りかける。斎串 W95 は棒状の斎串である。人形 W98 は顔の部分を欠損する。なで肩で腰のくびれをもつ。馬形 W101 は頭部と口があり、尾は上がる、鞍の表現あり。人形と馬形は同じ位置から出土した。ささら子状木製品 W107 は、丸棒の全周囲に抉りをもつことから、「ささら」とともに楽器として使用される、ささら子状の木製品と考えられる。上部は欠損か。いずれも斎串の束から 1.5m 程南西にある。斎串 W79 は板状で下側が細くなる。武器形 W80 は中子とみられる表現がある。ともに斎串の束から１m 程南西にある。

③群は斎串の束の 1.5 ～２m 南西、２流路の川底上から出土した。斎串の束から 1.5m 程南西には７点の木器がある。斎串 W68 は両側に切込みがある。両端は欠損する。斎串 W87、斎串 W81、斎串 W86 は板状である。斎串 W92 は棒状で下側が尖りかける。馬形 W99 は大型で尾が下がる。馬形 W100 は一本足で鞍の表現あり。馬形二点は近くから出土。木簡の可能性もある W82 には墨痕なし。斎串の束から 1.8m 程南西には４点の木器がある。斎串 W73 は板状で下側が細くなる。斎串の束から南西側延長方向 1.5m 程南西で、北西から南東の直交方向を向く。斎串 W75、斎串 W84 はともに板状で下側が細くなる。形代と思われる W88 は、板状で片側に切り込みあり。斎串の束から２m 程南西から出土した斎串 W68 は板状で両側に切込みをもつ。

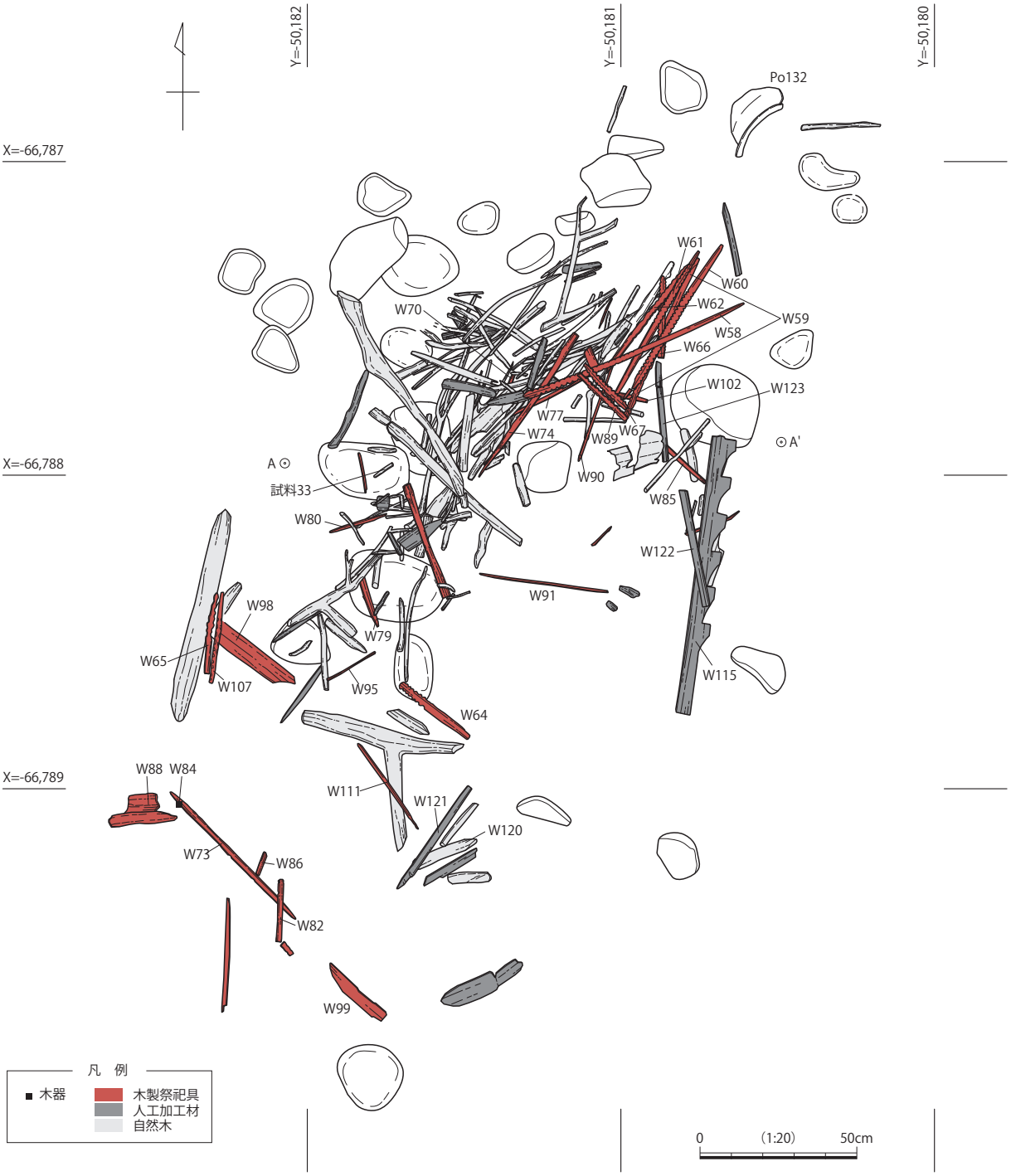


第 172 図　171 木製祭祀具集中部遺物出土状況図（上部）

ほか、土師器の甕 Po131 が南東から、軒丸瓦 CP７が③群と⑧群の間、島状の基盤層の北西側から出土した。CP７は軒丸Ⅰ類の軒丸瓦である。焼成前の乾燥時に藁のような植物の上に置かれていたようで圧痕が残されている。瓦当面はやや変形しているが、径 19.5cm を測る。単弁 16 弁の蓮華文を持ち、蓮弁間には間弁が存在するが中房には届かず、蓮弁の外周を巡る。径 8.7cm の中房はほぼ平坦で、径 1.3 ～ 1.6cm の周環を持つ蓮子を１＋８＋16 に配置する。内区径は 16.0cm。外区は素文で、直立縁である。なお、瓦当面の文様上に布目痕が認められる。過度な乾燥を防ぐために布をかぶせたのであろうか。瓦当裏面はナデ調整である。

④群は斎串の束から１m 程南、②群と③群の間にある４点の木器である。斎串 W64 は板状で両側に切込みあり、横方向のケビキ線あり。付け木 W111 は一部炭化しているため付け木としたが、斎串を転用か。角杭と思われる W121 は上側が欠損か。杭 W120 は先端部のみ。

⑤群は斎串の束の南東側 0.5 ～２m に広がる。５点の木器がある。斎串の束から 0.5m 程南東には３点ある。斎串 W85 は板状で下側が細くなる。接合しないが２流路から破片が出土する。板 W123

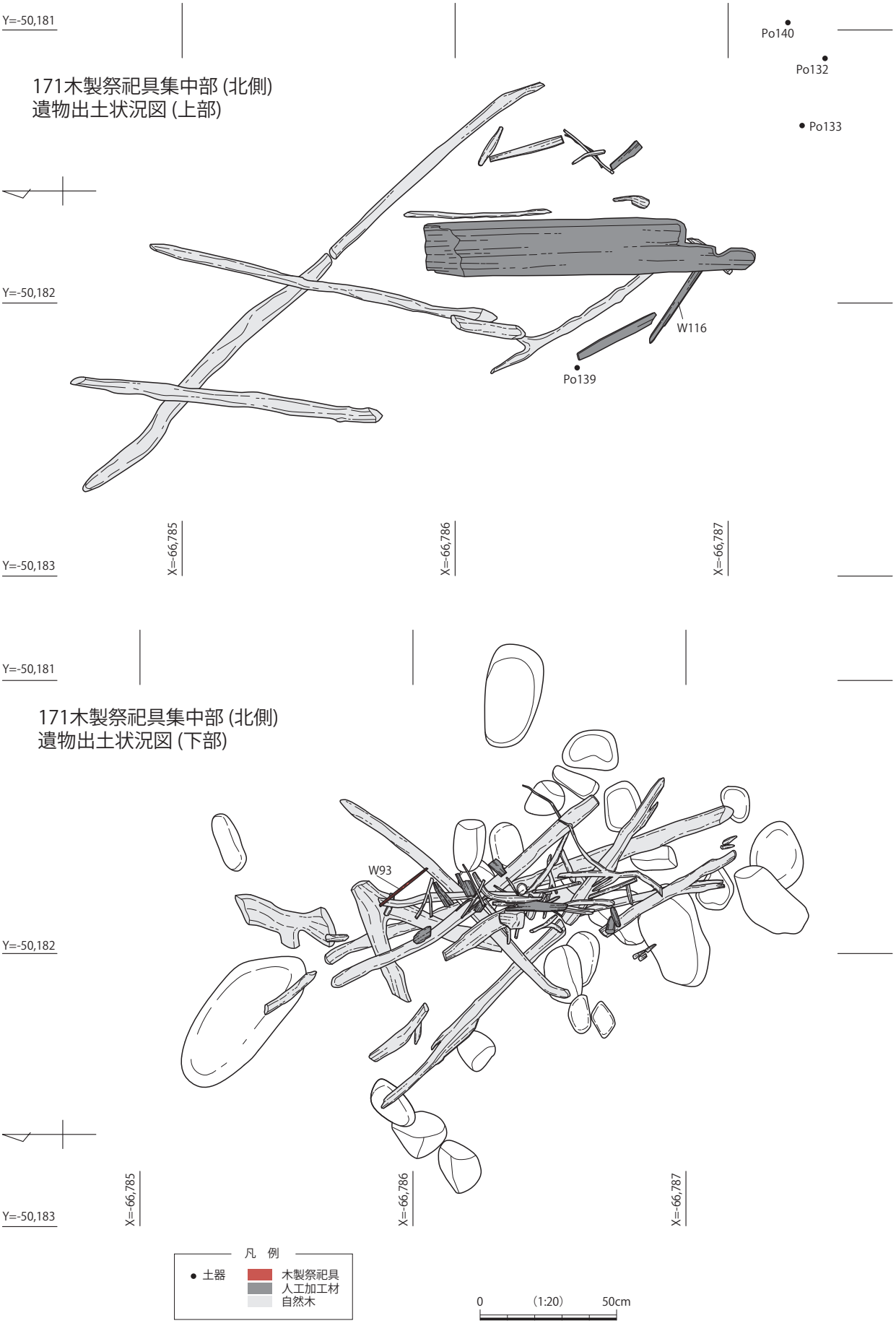


第 173 図　171 木製祭祀具集中部遺物出土状況図（下部）

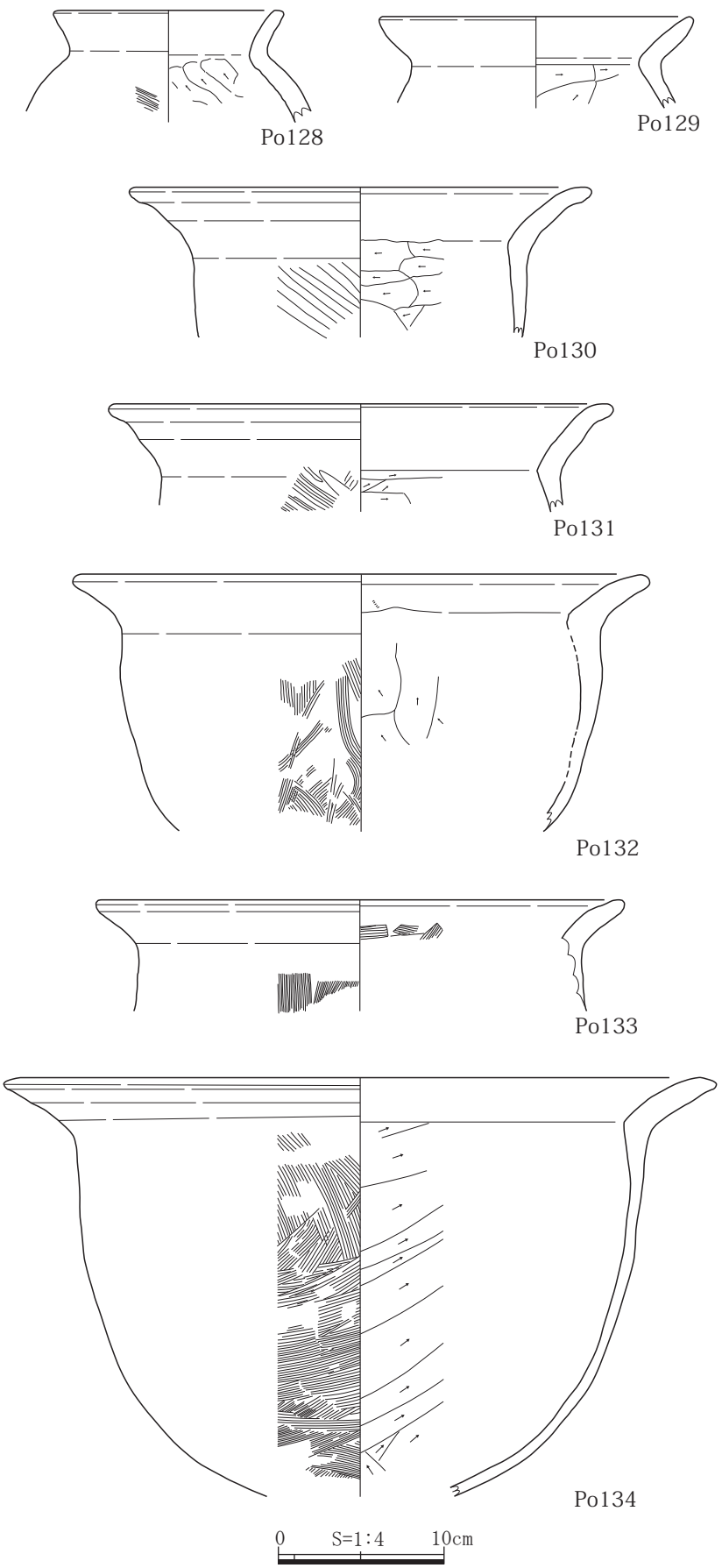
は墨痕なし。角杭と思われる W122 は両端が欠損か。斎串の束から 1m 程南東から出土した W115 は長さ約 0.9m の大型の不明品である。部材または農具か。斎串の束から 2m 程南東から出土した折敷と思われる W106 は片側が湾曲する。

土器は、須恵器の甕 Po136 が⑤群と斎串の束の間から出土した。

⑥群は斎串の束から北東方向へ 0.5 ～ 1.5m 北東側の調査区東壁際の堆積層から出土した８点の木器である。斎串の束の北東側延長方向へ 0.5m から出土したのは斎串 W69、斎串 W72 は板状で両側に切込みと横方向のケビキ線がある。斎串の束の南西 0.5m の斎串 W91 は棒状で下側が尖りかける。



第 174 図　171 木製祭祀具集中部（北側）遺物出土状況図（上部）・（下部）



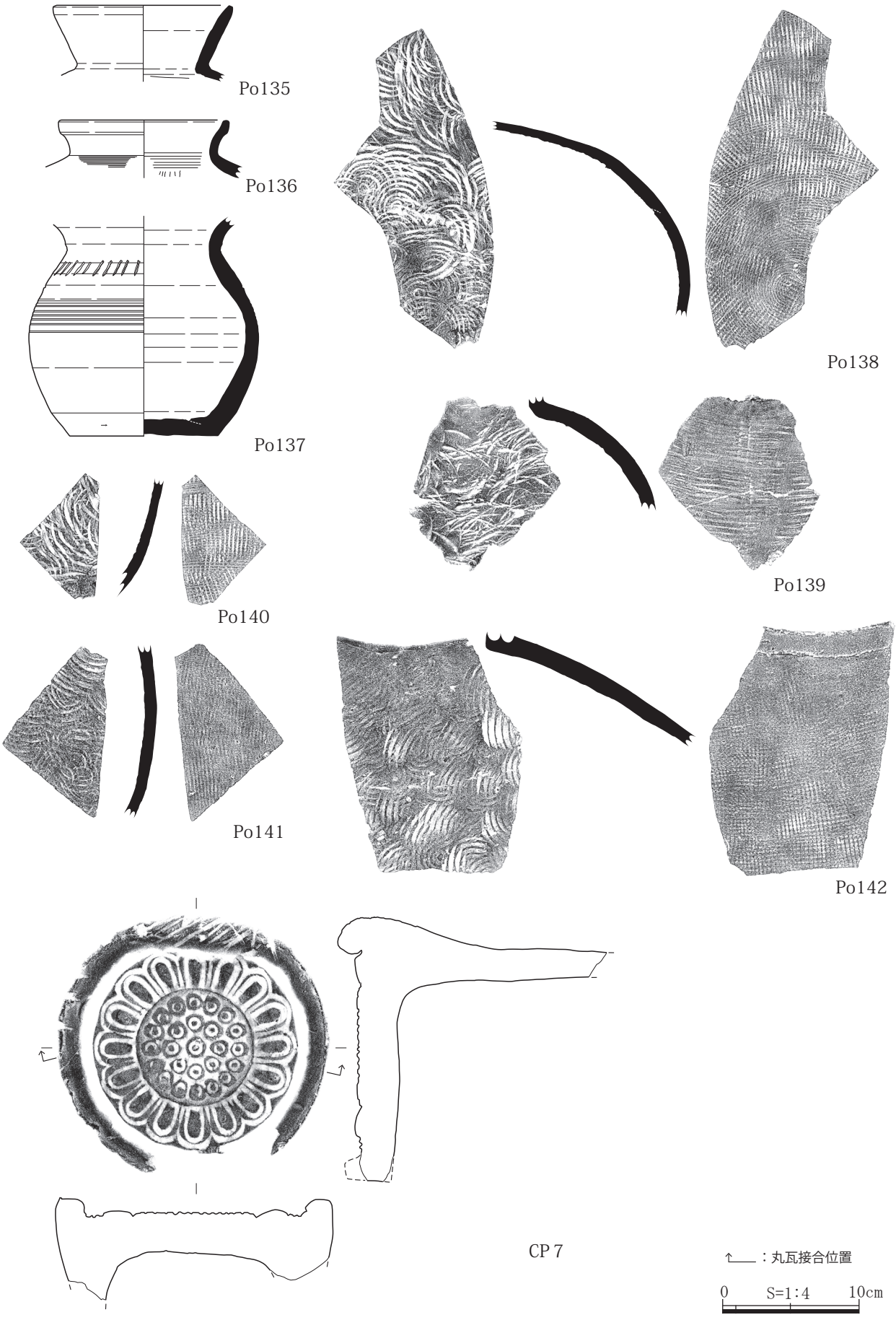
第 175 図　171 木製祭祀具集中部出土土器（１）

斎串の束の北東側延長方向へ1.5mには４点の木器がある。斎串W76は板状で下側が尖る。折敷底板と思われるW103は板状で幅が広い。付け木W109は片側に裂けあり。W110は一部炭化する。斎串の束から1.5m程東の調査区東壁沿いの付け木W113は片側が裂ける。

土器は、土師器の甕Po129が北東側の調査区の東壁際から、須恵器の壺Po137が北西側から出土した。

⑦群は斎串の束から２～３m程南東の調査区東壁沿いの堆積層から出土した11点の木器である。斎串の束から２m程南東の調査区東壁沿いから５点の木製祭祀具が出土した。斎串W63は板状で両側に切込みをもつ。斎串W78、斎串W83は板状で下側が細くなる。斎串W94は棒状のもの。斎串と思われるW96は幅のせまい板状で付け木に転用か。

加工木は６点ある。斎串の束から２m程南東の調査区東壁沿いから２点出土した。付け木W108は一部炭化する。杭W112は下側が欠損か。斎串の束から３m程南東の調査区東壁沿いから出土した折敷底板と思われるW105は樹皮側を底の部分としたものか。斎串の束から２～３m程南東の東壁際で、平面三角形状に重ねられた状態で３点の建築部材が出土した。建築部材W124は臍穴



第 176 図　171 木製祭祀具集中部出土土器（２）・瓦

第 24 表　76 木製構造物・171 木製祭祀具集中部出土木器、種実点数

木製祭祀具	76 木製構造物	171 木製祭祀具集中部	計
斎串	31	55	86
刀形	2	0	2
刀子形	1	0	1
武器形	0	1	1
人形	0	1	1
馬形	1	4	5
不明形代	4	4	8
ささら子状	0	1	1
計	39	66	105

出土した木製品の総数（分類点数）	76 木製構造物	171 木製祭祀具集中部	総　計
	513	319	832

加工木	76 木製構造物	171 木製祭祀具集中部	計
木簡状	0	1	1
板材	74	34	108
横槌	1	0	1
曲物	2	2	4
折敷	0	3	3
角杭	0	2	2
角棒材	10	7	17
丸杭	2	4	6
杭	1	2	3
矢板	1	1	2
建築部材	2	3	5
梯子	0	1	1
不明部材	7	4	11
不明木器	0	1	1
付け木	7	10	17
はつり材	9	3	12
計	116	78	194

自然木	76 木製構造物	171 木製祭祀具集中部	計
杭（一部加工）	42	11	53
棒状材	13	7	20
丸棒材	20	11	31
分割材	17	8	25
粗朶	261	127	388
樹皮	5	10	15
木根	0	1	1
計	358	175	533

種実	76 木製構造物	171 木製祭祀具集中部	計
イネ	5	1	6
モモ	0	1	1
トチノミ	1	1	2
クルミ	0	1	1
不明	7	1	8
計	13	5	18

あり、両側とも欠損する。長さ約 1.9m。建築部材 W125 には臍穴あり。長さ約 2.2m。建築部材 W126 の片側には臍をもつ。盛土の芯として使用したものか。

⑧群は島状の基盤層と北西側の２流路の肩を土橋状につなぐ盛土層から出土した。大型の木製品を盛土の芯として使用する。梯子 W114 は上側が腐朽する。部材と思われる W117 は片側に貫穴か。梯子 W114 と部材と思われる W117 は重複して出土。板 W119 の幅はせまく厚い。矢板 W118 は両側とも腐朽する。

土器は、盛土中から須恵器の横瓶 Po138 が出土した。

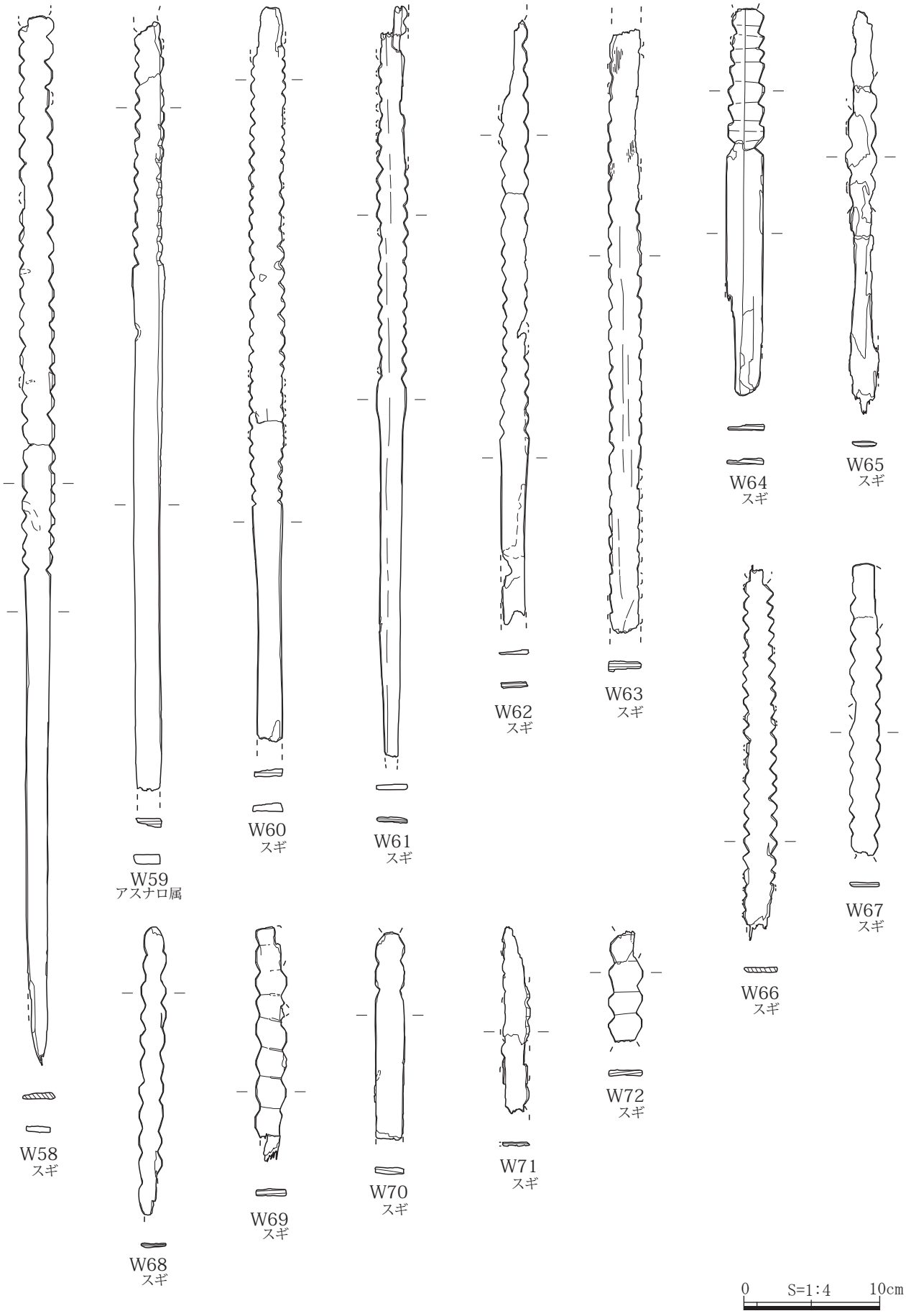
⑨群は北側の盛土内から出土した木器である。この部分は２流路の肩には接続しないものの、島状の基盤層を北側に拡張するようにみえる。北側の盛土は上部と下部に分けられる。上部では自然木が主体である。下部の盛土中から２点の木器が出土した。斎串 W93 は棒状で下側が尖りかける。杭 W116 は断面が三角形である。

出土した土器は、須恵器の体部片 Po139・140 がある。Po139 は盛土中、Po140 は⑨群と⑧群の間から出土した。そのほか、北側の離れた位置から土師器の甕 Po130 が出土した。須恵器の体部片 Po142 の出土位置は不明である。いずれも古代の所産である。

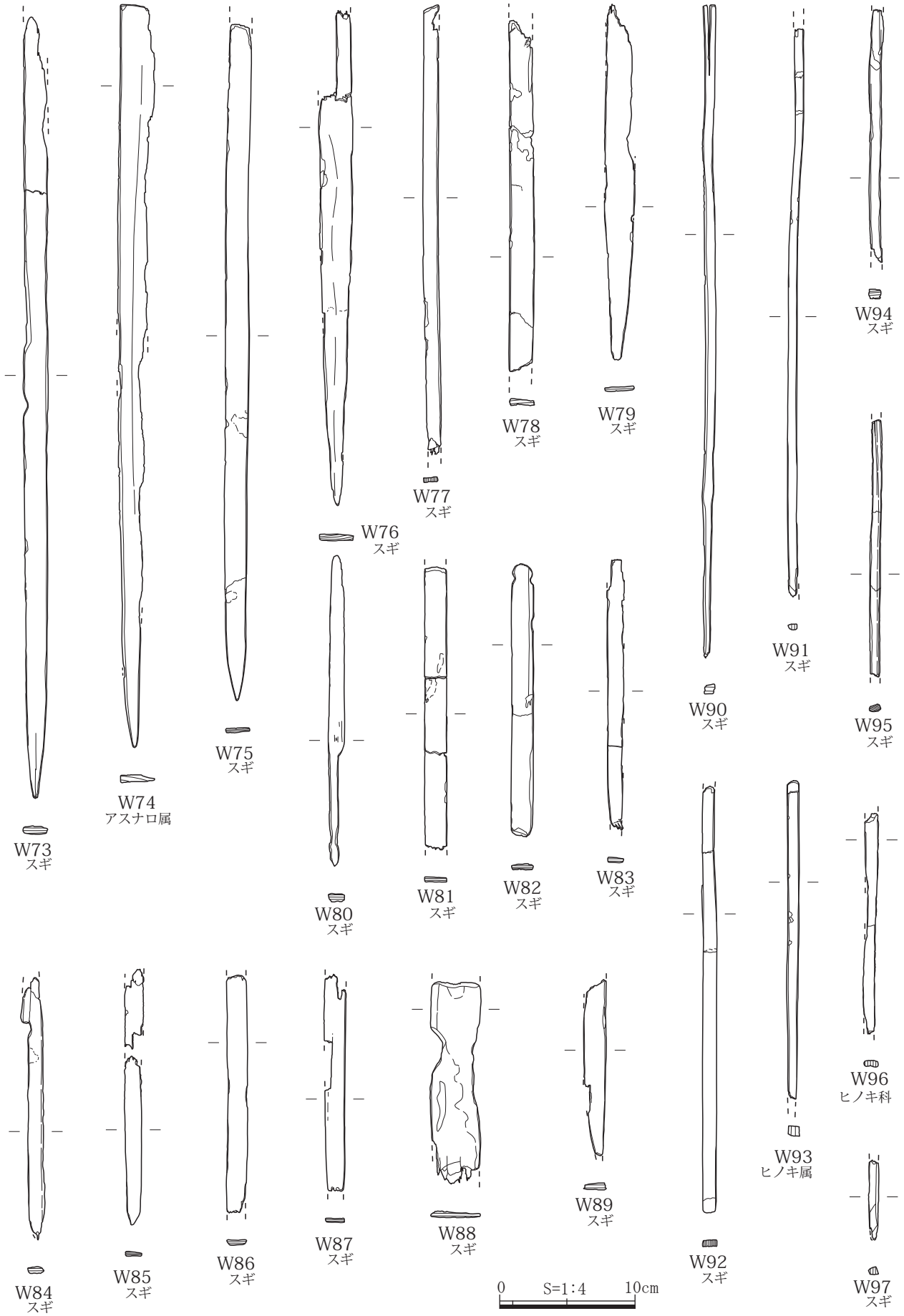
木器の総数は、細片を除いた分類可能な点数は 319 点ある。木製祭祀具は 66 点で、全体の 21％である。加工木は 78 点で、全体の 24％である。木簡状木製品１点、折敷３点、角杭２点、角棒材７点、丸杭４点、杭の一部２点、矢板１点、建築部材３点、梯子１点がある。ほか、不明部材４点、不明木器１点、板または端材 34 点、付け木 10 点、はつり材３点である。

自然木は 175 点で全体の 55％である。ほとんどが盛土の中から出土した。粗朶は 127 点、自然木の一部を加工した杭 11 点、棒状材７点、丸棒材 11 点、分割材８点、樹皮 10 点、木根１点がある。種子は５点出土した。イネ１点、モモ１点、クルミ１点、トチノミ１点、不明１点である。

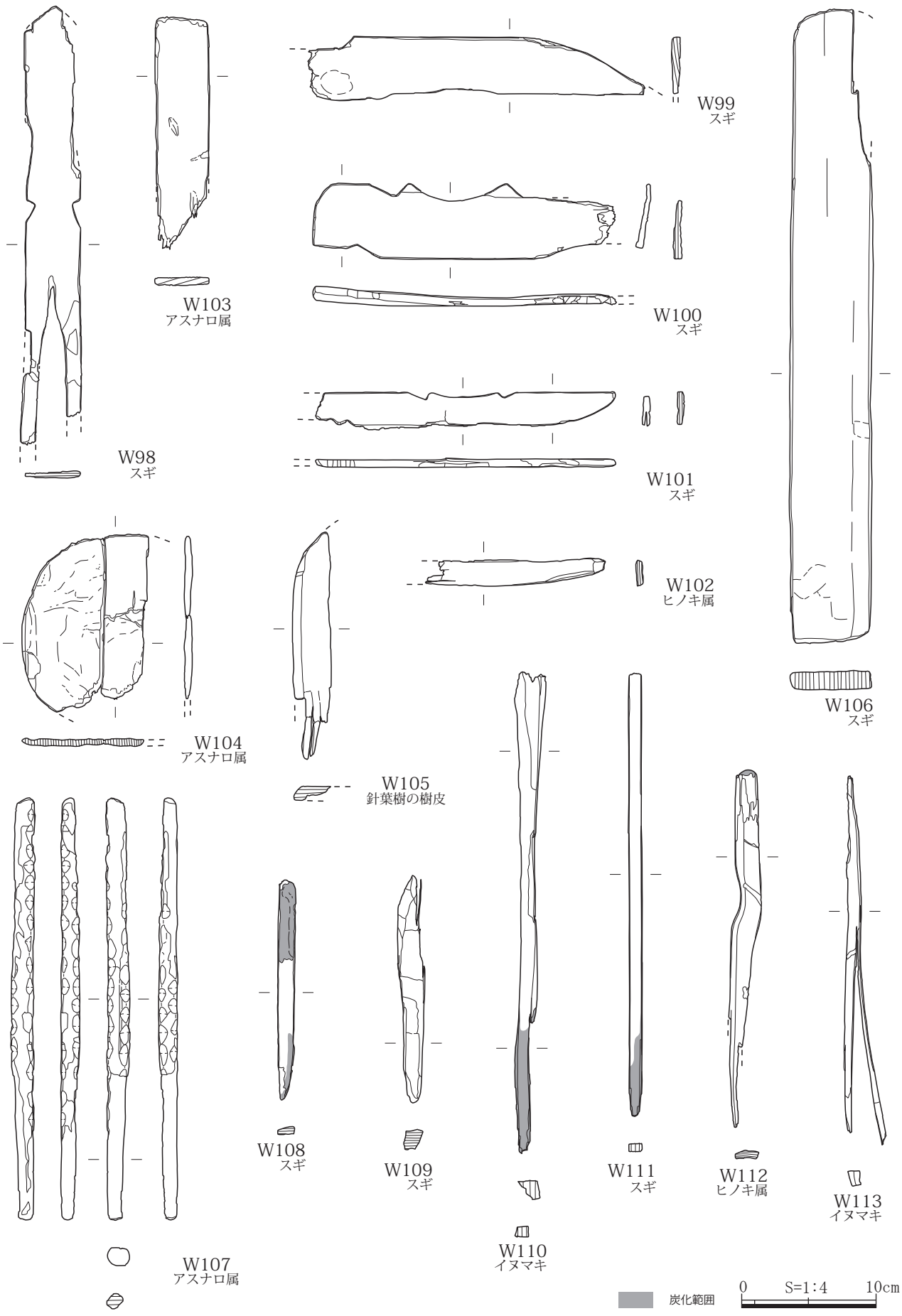
北側の⑨群の南側の盛土を構築する際に伐採されたとみられる樹皮が付いたままの枝（粗朶）の放射性炭素年代測定（試料 33）を行った（第５章第３節）。結果は、calAD659-705（暦年較正２σの確率１位）で、遺物の年代と矛盾しない。



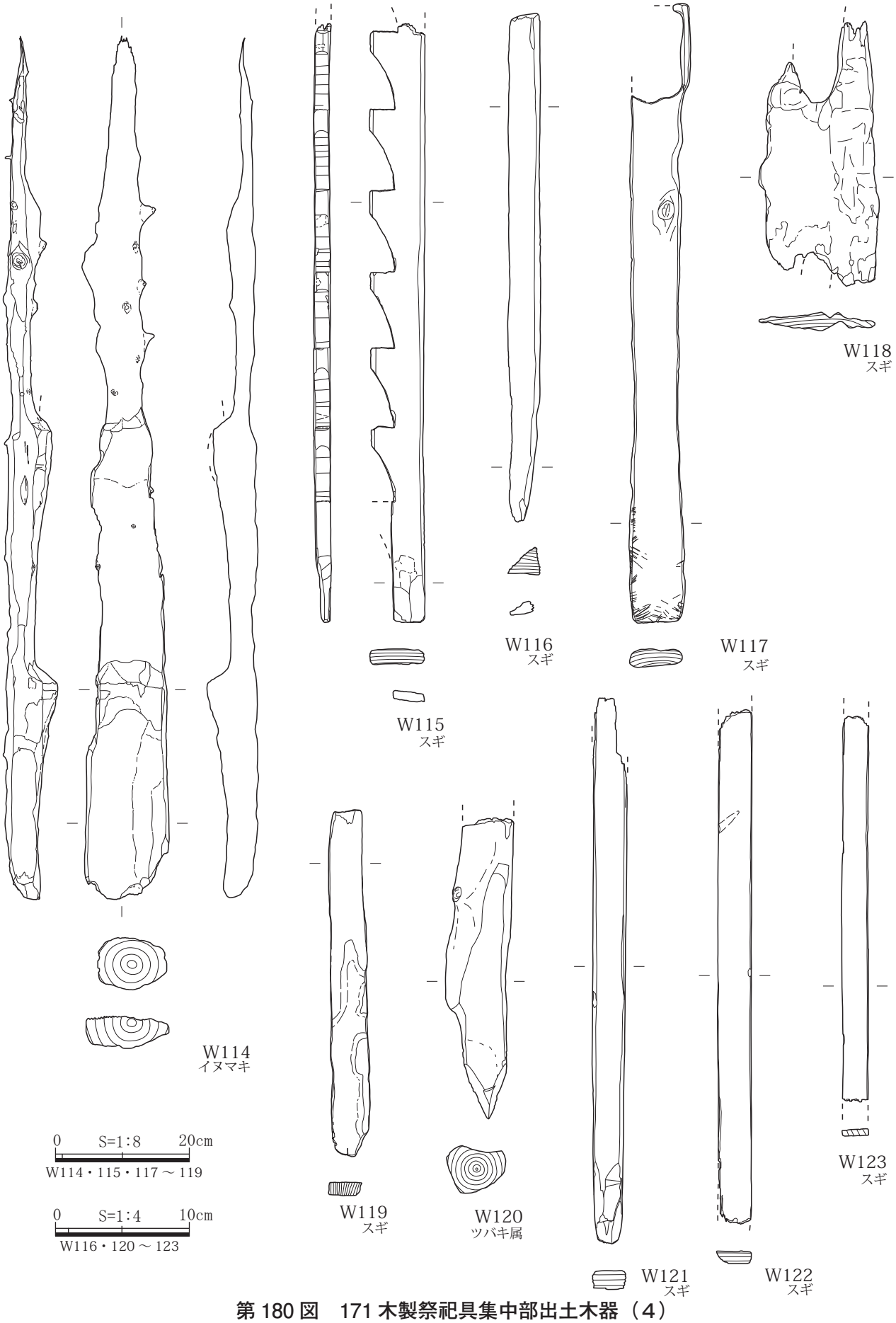
第 177 図　171 木製祭祀具集中部出土木器（１）



第 178 図　171 木製祭祀具集中部出土木器（２）



第 179 図　171 木製祭祀具集中部出土木器（３）



第 180 図　171 木製祭祀具集中部出土木器（４）

第 181 図　171 木製祭祀具集中部出土木器（５）

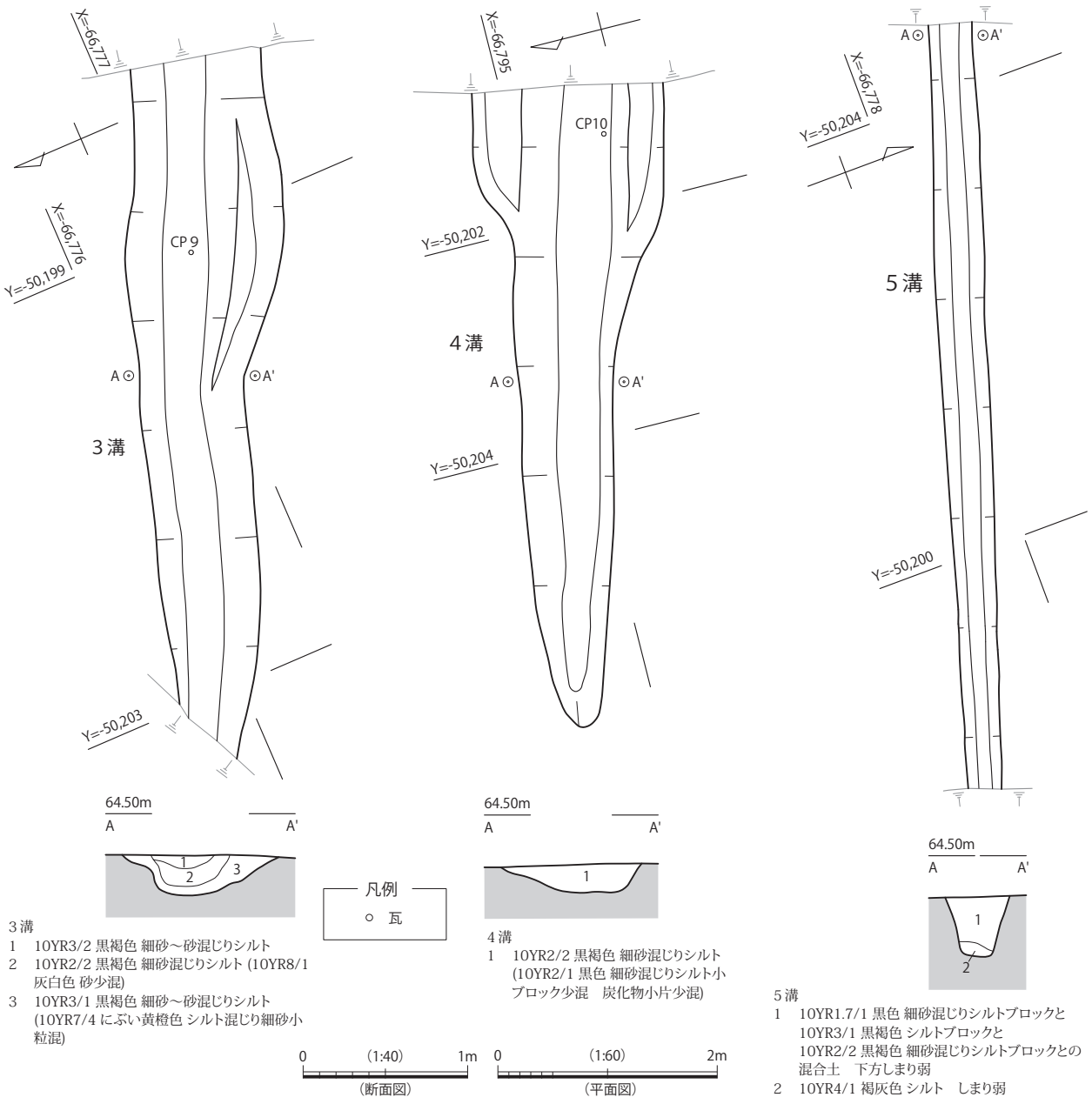
（３）溝

３溝（第 148・182・183 図、第 49・72・94 表、図版 69・149）

２区北西隅の 7a-8B-8j・ 8C-8a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。主軸方向は N-68° -W で、西側から東側に向けて下る。形状はほぼ直線状であるが、南壁の一部がわずかに段状を呈する。西側は調査区外に続いており、東側は圃場整備に伴う削平のために消滅している。幅は西側が狭く、東側が広くなっているが、高所側である西側が削平をより強く受けているためである。残存長 6.10m、最大幅 1.40m、検出面からの深さは最大 0.24m である。埋土は３層に分層でき、いずれも黒褐色の砂混じりシルトを主とする。底部は平坦状である。耕作に関係する掘削痕跡と考えられる。遺物は、埋土中から土器・土製品、布目を持つ瓦が出土している。このうち、須恵器および瓦を図化した。

Po143 は須恵器の高台を持つ底部片で、坏の可能性が考えられる。

CP８は軒丸瓦Ⅱ類の外区から蓮弁にかけての破片である。珠文が２つ、蓮弁の一部が２つ認めら

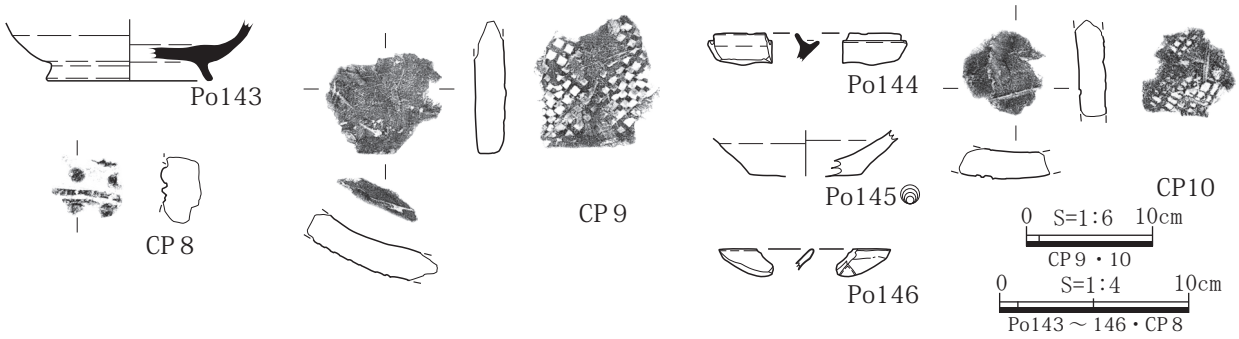


３溝
1　10YR3/2 黒褐色 細砂～砂混じりシルト
2　10YR2/2 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR8/1 灰白色 砂少混)
3　10YR3/1 黒褐色 細砂～砂混じりシルト (10YR7/4 にぶい黄橙色 シルト混じり細砂小粒混)

４溝
1　10YR2/2 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト小ブロック少混　炭化物小片少混)

５溝
1　10YR1.7/1 黒色 細砂混じりシルトブロックと 10YR3/1 黒褐色 シルトブロックと 10YR2/2 黒褐色 細砂混じりシルトブロックとの混合土　下方しまり弱
2　10YR4/1 褐灰色 シルト　しまり弱

第 182 図　３～５溝



第 183 図　３・４溝出土遺物

れる。CP９は平瓦で、凸面は格子叩きが施され、凹面は布目痕をナデ消している。２次調整としては広端面の凹凸両面をわずかにヘラケズリしている。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代以降と考えられる。

４溝（第 148・182・183 図、第 49・72・73・94 表、図版 69・150）

２区中央西寄りの 7a-8C-10a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。主軸方向は N-75° -W で、西側から東側に向けて下る。形状はほぼ直線状であるが、東端が幅広になり、南北壁とも段状となる。東側は圃場整備に伴う削平のために消滅している。幅は東側が広く、西側に向けて徐々に細くなり調査区内で収束しているが､高所側である西側が削平をより強く受けているためである。残存長 5.85m、最大幅 1.73m、検出面からの深さは最大 0.17ｍである。埋土は黒褐色の細砂混じりシルトを主とする単層であり、底部は平坦状である。耕作に関係する掘削痕跡と考えられるが、後述する 53 道路の上部に重なるように位置していることから、53 道路の痕跡が畑等の区画溝などとして利用された可能性も考えられる。

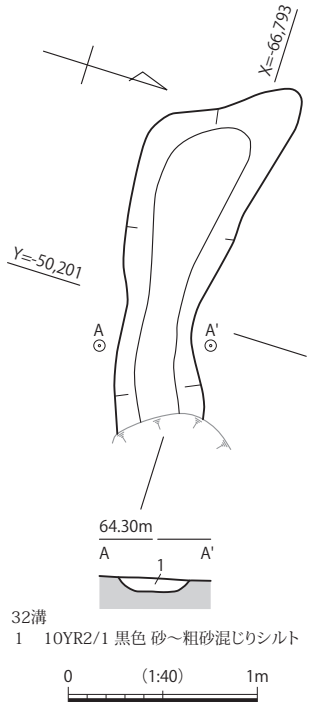
遺物は、埋土中から土器・布目を持つ瓦、鉄器・鉄滓が出土している。このうち、土器・磁器・瓦を図化した。Po144 は須恵器の坏身である。立ち上がりは低い。Po145 は土師器の底部である。坏と推測されるもので、切り離しは回転糸切りである。Po146 は龍泉窯製の青磁碗である。外面には蓮弁の一部が認められる。CP10 は平瓦で、凸面は格子叩きが施され、凹面には布目痕が残る。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から中世と考えられる。

５溝（第 148・182 図、第 49 表、図版 69）

２区北西隅の 7a-8B-8j・ 8C-8a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。３溝の南側約１ｍにほぼ並行するように位置しており、主軸方向は N-72° -W で、西側から東側に向けて下る。形状はほぼ直線で、断面は逆台形状を呈し、底部は平坦状である。西側は調査区外に続いており、東側は圃場整備に伴う削平のために消滅している。幅はほぼ一定である。残存長 6.98m、最大幅 0.45m、検出面からの深さは最大 0.36ｍである。埋土は２層に分層でき、このうち１層はブロック土の混合土で、部分的に空洞になっている箇所もあり、人為的に埋め戻されていると考えられる。耕作に関係する掘削痕跡と考えられる。遺物は、埋土中から混入と考えられる土器と布目を持つ瓦が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、出土遺物とⅡｂ層下に存在することから古代と考えられる。



第 184 図　32 溝

32 溝（第 149・184 図、第 49 表）

２区北西隅の 7a-8C-10a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。上部が削平されている。主軸方向は N-80° -E で、西側から東側に向けて下ると考えられるが、遺存状態が悪く判然としない。形状は直線的ではあるが不整で、底部は平坦状である。西側は調査区内で収束するが、東側は圃場整備に伴う削平のために消滅している。幅は一定しない。残存長 1.70m、最大幅 0.60m、検出面からの深さは最大 0.07m である。埋土は黒色の砂～粗砂混じりシルトの単層であり、耕作に関係する掘削痕跡と考えられる。遺物は、埋土中から土器が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代以降と考えられる。

44 ～ 47 溝（第 148・185 図、第 49 表）

２区南西隅の 7a-9C-1a・ 1b グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出した。いずれの溝埋土も上層のⅡｂ層土に比べてやや色が濃いもののほぼ同質であり、Ⅱｂ層中から掘り込まれていることが分かる。いずれの溝もほぼ東西方向に主軸を取り、約２ｍの間隔を空けて並行するように位置する。

44 溝（第 148・185 図、第 49 表）

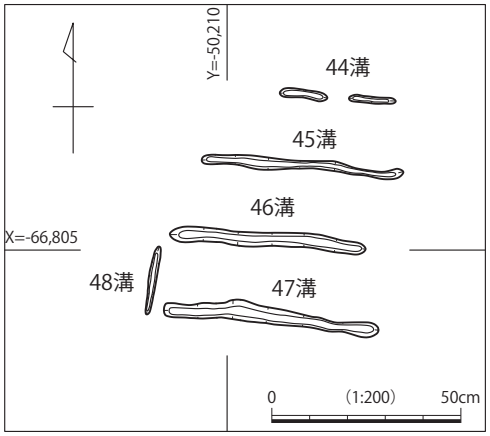
２区南西隅において、Ⅲ層上面で検出した。近接しており、ライン上に並ぶ位置関係から同一遺構と判断したほぼ同規模の溝が２基あり、西側を 44-1 溝、東側を 44-2 溝とした。44-1 溝は主軸方向が N-83° -W で、形状はほぼ直線で、底部は平坦状である。幅はほぼ一定である。規模は、長さ 1.26m、最大幅 0.24m、検出面からの深さは最大 0.02m である。一方、44-2 溝は主軸方向が N-86° -W で、形状はほぼ直線である。底部は平坦状ではあるが、44-1 溝に比べ湾曲が強い。幅はほぼ一定である。規模は、長さ 1.23m、最大幅 0.18m、検出面からの深さは最大 0.04m である。埋土はどちらも黒色シルトを主とする単層であり、耕作に関係する掘削痕跡と考えられる。遺物は、どちらの埋土中からも土器が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代以降と考えられる。

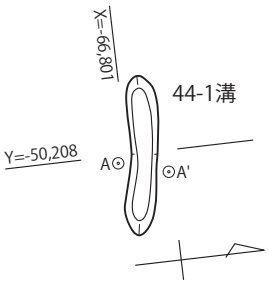
45 溝（第 148・185 図、第 49 表）

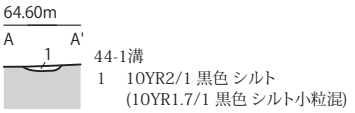
２区南西隅において、Ⅲ層上面で検出した。44 溝の南側約２ｍに並行するように位置する。主軸方向は N-85° -W で、形状はほぼ直線的で、底部は平坦状である。幅には広い部分と狭い部分があり一定ではない。規模は、長さ 5.33m、最大幅 0.34m、検出面からの深さは最大 0.05m である。埋土は黒色シルトを主とする単層であり、耕作に関係する掘削痕跡と考えられる。遺物は、埋土中から土器が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代以降と考えられる。

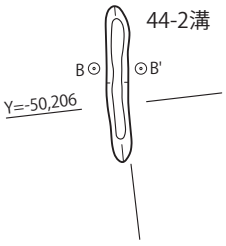


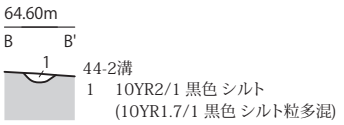
44～48溝 配置図



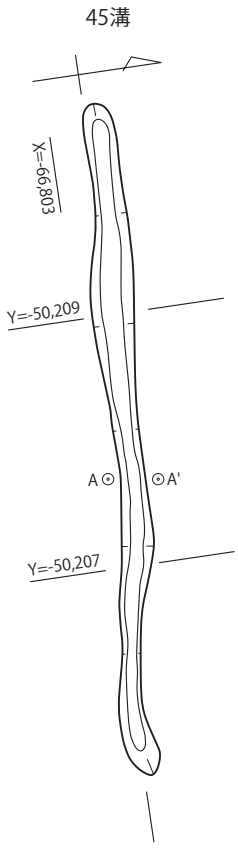


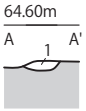
44-1溝
1　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小粒混)



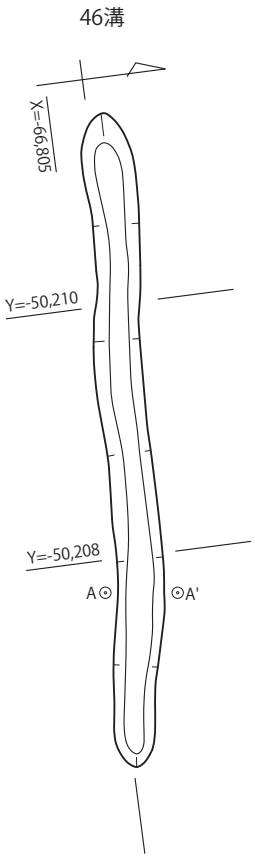


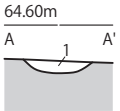
44-2溝
1　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト粒多混)



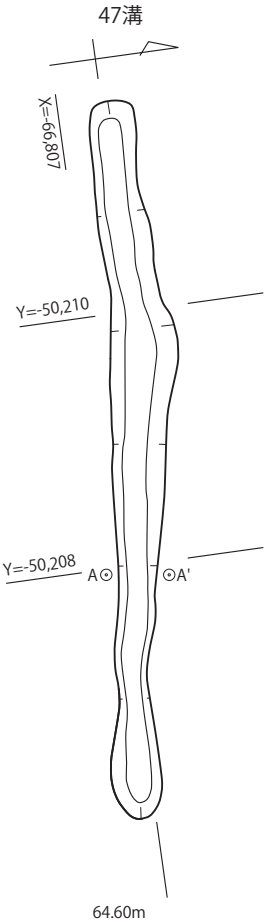


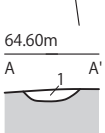
45溝
1　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト
粒混)



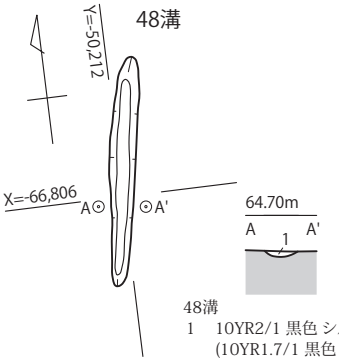


46溝
1　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト
大粒少混)

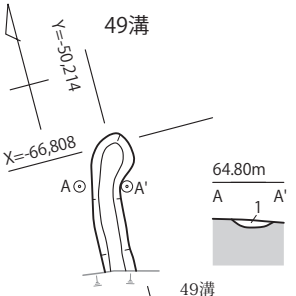




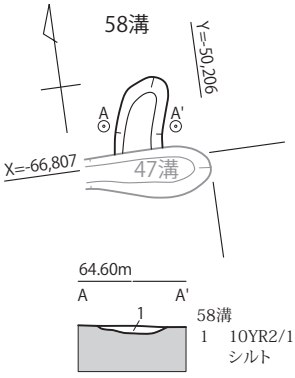
47溝
1　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト
ブロック少混)



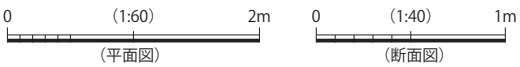
48溝
1　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト
粒混)



49溝
1　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シル
ト小粒少混)



58溝
1　10YR2/1 黒色 細砂混じり
シルト



第 185 図　44 ～ 49・58 溝

46 溝（第 148・185 図、第 49 表）

２区南西隅において、Ⅲ層上面で検出した。45 溝の南側約２ｍに並行するように位置する。主軸方向は N-85° -W で、形状はほぼ直線的で、底部は平坦状である。幅はほぼ一定している。規模は、長さ 5.19m、最大幅 0.41m、検出面からの深さは最大 0.06ｍである。埋土は黒色シルトを主とする単層であり、耕作に関係する掘削痕跡と考えられる。遺物は、埋土中から土器が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代以降と考えられる。

47 溝（第 148・185 図、第 49 表）

２区南西隅において、Ⅲ層上面で検出した。46 溝の南側約２ｍに並行するように位置する。主軸方向は N-85° -W で、形状はほぼ直線状で、底部は平坦状である。幅には広い部分と狭い部分があり一定ではない。規模は、長さ 5.70m、最大幅 0.53m、検出面からの深さは最大 0.06ｍである。埋土は黒色シルトを主とする単層であり、耕作に関係する掘削痕跡と考えられる。遺物は、埋土中から土器・土製品が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代以降と考えられる。

48 溝（第 148・185 図、第 49 表）

２区南西隅の 7a-9C-1b グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。47 溝の約 0.4m 西側に直交するように位置する。主軸方向は N-9° -E で、形状はほぼ直線状で、底部は平坦状である。幅は中央付近が最も太く、両端に向けて窄まっていく。規模は、長さ 1.82m、最大幅 0.20m、検出面からの深さは最大 0.03ｍである。埋土は黒色シルトを主とする単層であり、耕作に関係する掘削痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代以降と考えられる。

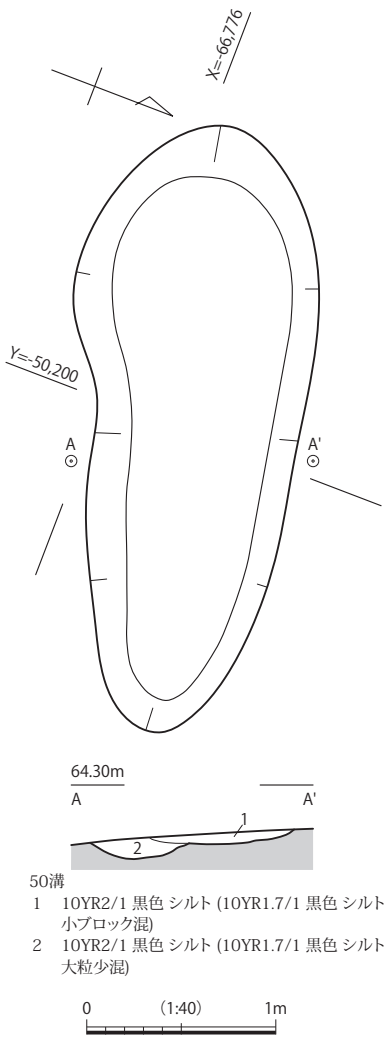
49 溝（第 149・185 図、第 49 表）

２区南西隅の 7a-9C-1b グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。主軸方向は N-14° -E で、南側は調査区外になるが、形状は歪な直線状で、底部は平坦状である。幅はほぼ一定であるが、北端近くが幅広になる。規模は、残存長 1.08m、最大幅 0.32m、検出面からの深さは最大 0.04ｍである。埋土は黒色シルトを主とする単層であり、耕作に関係する掘削痕跡と考えられる。遺物は、埋土中から土器が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代以降と考えられる。

50 溝（第 149・186・455 図、第 25・49 表、図版 324）

２区北西隅の 7a-8B-8j・ 8C-8a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。主軸方向は N-74° -E である。南西隅を３溝に切られる。形状は歪な楕円形状であり、形態的には土坑の可能性も考えたが、西から東方向へ下る溝の底部の一部と判断した。規模は、長さ 3.22m、最大幅 1.29m、検出面からの深さは最大 0.10ｍである。埋土は２層に分かれるが、いずれも黒色シルトを主としている。用途は不明である。遺物は、埋土中から土器・布目を持つ瓦などが出土しており、そのうち椀形鍛冶滓



第 186 図　50 溝

F25 を図化した。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代以降と考えられる。

58 溝（第 149・185 図、第 49 表）

２区南西寄りの 7a-9C-1a・1b グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。主軸方向は N-19° -E で、南側は 47 溝に切られるがほぼ直交しており、48 溝とほぼ並行するように位置する。形状はほぼ直線状で、底部は平坦状である。幅はほぼ一定である。規模は、残存長 0.59m、最大幅 0.36m、検出面からの深さは最大 0.04m である。埋土は黒色の砂混じりシルトを主とする単層であり、耕作に関係する掘削痕跡と考えられる。なお、58 溝と 47 溝は埋土がやや異なると判断して別遺構としたが、その違いはわずかであり、１つの遺構である可能性も残る。遺物は、埋土中から土器が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代以降と考えられる。

65 ～ 69 溝（第 148・187 図、第 49 表、図版 70）

２区北東隅の 7a-8B-9h・ 9i・ 10i グリッドに位置し、Ib-2 層を除去した２流路上面で検出した。いずれの溝埋土も上層のⅥ層と同質であり、Ⅵ層中から掘り込まれていると考えられる。いずれの溝もほぼ東西方向に主軸を取り、約２m の間隔を空けて並行するように位置する。

65 溝（第 148・187 図、第 49 表、図版 70）

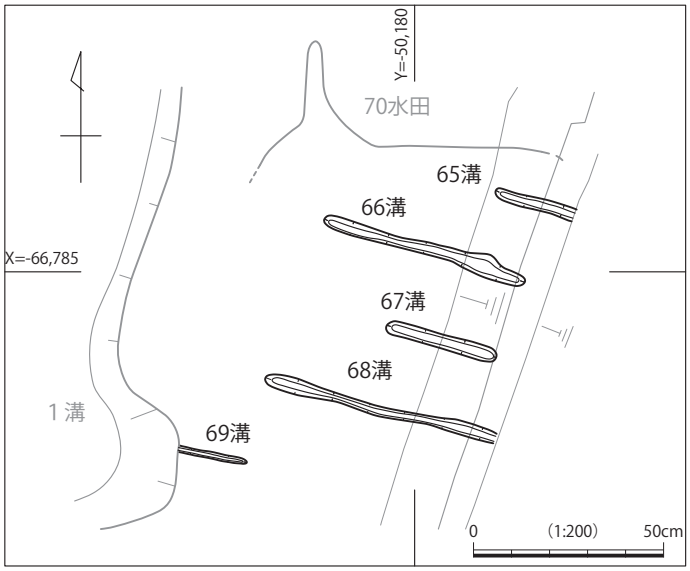
２区北東隅において、Ib-2 層を除去した２流路上面で検出した。主軸方向は N-73° -W で、東側は調査区外に続く。形状はほぼ直線状で、底部は平坦状である。幅はほぼ一定である。規模は、残存長 2.16m、最大幅 0.31m、検出面からの深さは最大 0.04m である。埋土は黒褐色のシルト混じり細砂を主とする単層であり、耕作に関係する掘削痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、２流路より新しいことと、埋土の特徴から中世以降と考えられる。

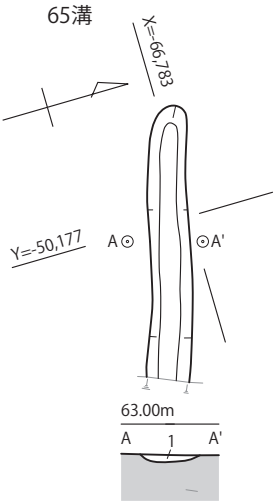
66 溝（第 148・187 図、第 49 表、図版 70）

２区北東隅において、Ib-2 層を除去した２流路上面で検出した。主軸方向は N-73° -W で、東西両端とも調査区内で収束する。形状はほぼ直線状で、底部は平坦状である。幅はほぼ一定であるが、東端近くに幅が広くなる箇所がある。規模は、長さ 5.52m、最大幅 0.36m、検出面からの深さは最大 0.04m である。埋土は黒褐色のシルト混じり細砂を主とする単層であり、耕作に関係する掘削痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

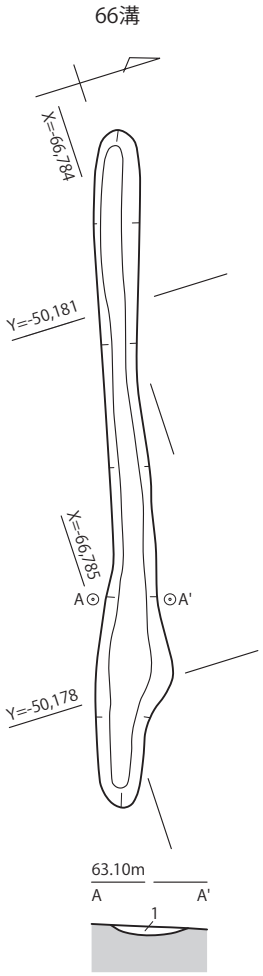
本遺構の帰属時期は、２流路より新しいことと、埋土の特徴から中世以降と考えられる。



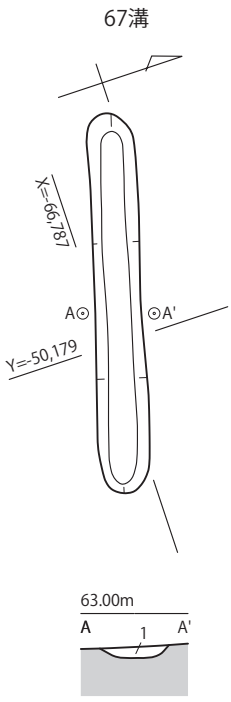
65～69溝 配置図



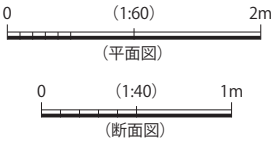
65溝
1　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂～砂
(10YR4/1 褐灰色 細砂ブロック少混)

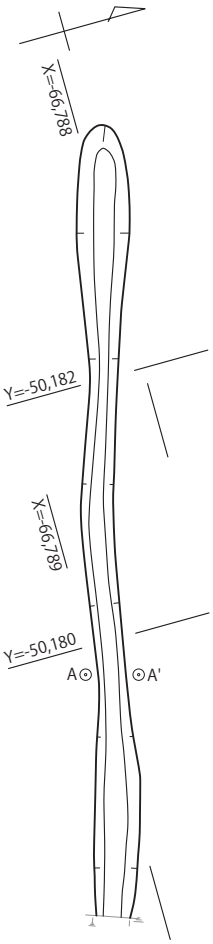


66溝
1　10YR3/1 黒褐色 わずかにシルト
混じり細砂 (10YR4/1 褐灰色
シルト混じり細砂小ブロック混)

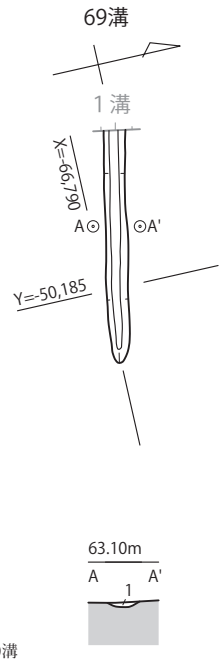


67溝
1　10YR3/1 黒褐色 シルト
混じり細砂





68溝
1　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂



69溝
1　10YR3/1 黒褐色 シルト混じり
砂～細砂 (10YR4/1 褐灰色
細砂小ブロック少混)

第 187 図　65 ～ 69 溝

67 溝（第 148・187 図、第 49 表、図版 70）

２区北東隅において、Ib-2 層を除去した２流路上面で検出した。主軸方向は N-74° -W で、東西両端とも調査区内で収束する。形状はほぼ直線状で、底部は平坦状である。幅はほぼ一定である。規模は、長さ 2.99m、最大幅 0.41m、検出面からの深さは最大 0.06m である。埋土は黒褐色のシルト混じり細砂の単層であり、耕作に関係する掘削痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、２流路より新しいことと、埋土の特徴から中世以降と考えられる。

68 溝（第 148・187 図、第 49 表、図版 70）

２区北東隅において、Ib-2 層を除去した２流路上面で検出した。主軸方向は N-75° -W で、東側は調査区外に続く。形状はほぼ直線状で、底部は平坦状である。幅はほぼ一定であるが、西端近くで幅が広くなる。規模は、残存長 6.24m、最大幅 0.41m、検出面からの深さは最大 0.02m である。埋土は黒褐色のシルト混じり細砂の単層であり、耕作に関係する掘削痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、２流路より新しいことと、埋土の特徴から中世以降と考えられる。

69 溝（第 148・187 図、第 49 表、図版 70）

２区北東寄りの 7a-8B-9i・ 10i グリッドにおいて、Ⅵ層を除去した２流路上面で検出した。主軸方向は N-79° -W で、西端は１溝に切られる。形状はほぼ直線状で、底部は平坦状である。幅はほぼ一定である。規模は、残存長 1.83m、最大幅 0.17m、検出面からの深さは最大 0.02m である。埋土は黒褐色のシルト混じり細砂を主とする単層であり、耕作に関係する掘削痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

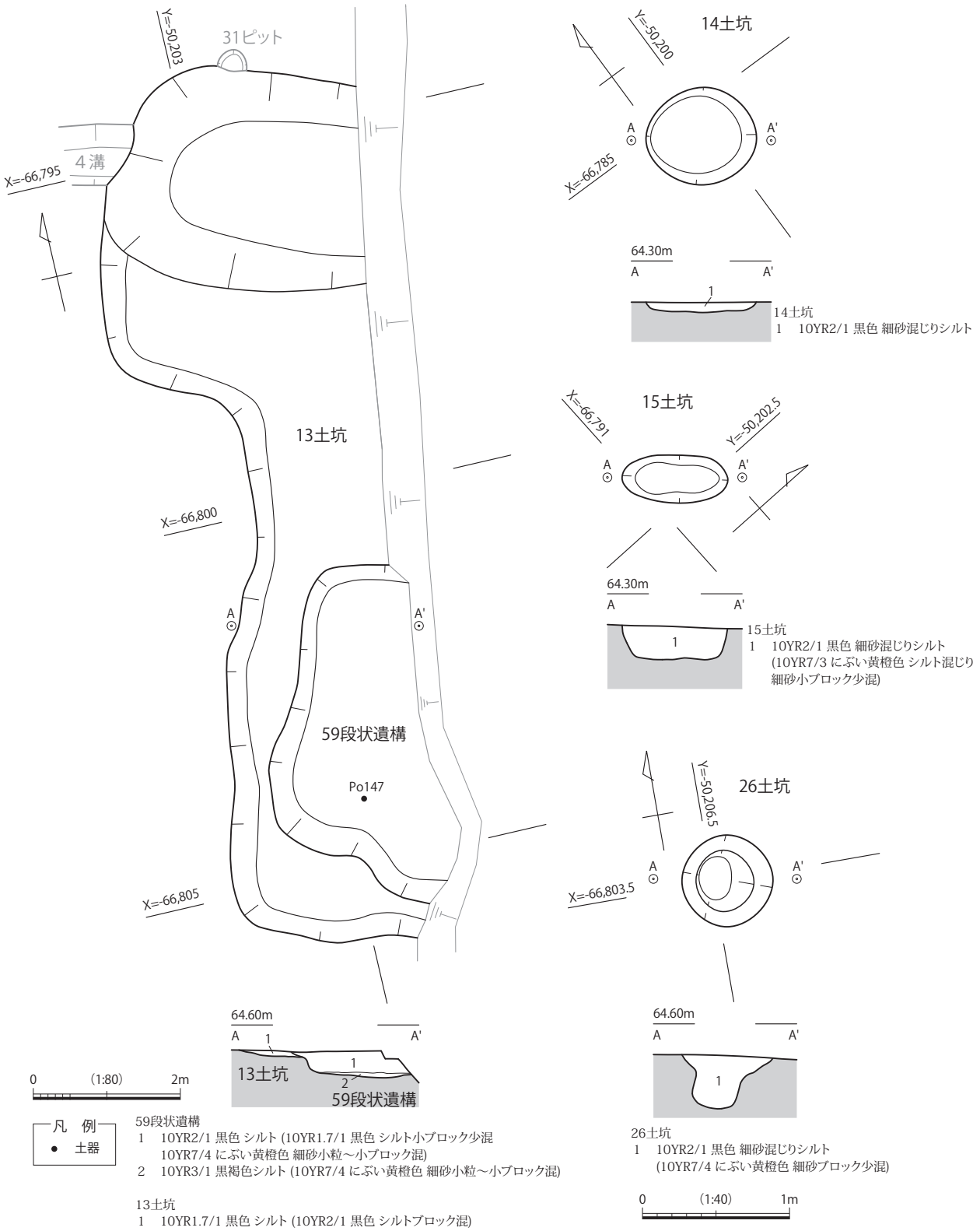
本遺構の帰属時期は、２流路より新しいことと、埋土の特徴から中世以降と考えられる。

（４）段状遺構

59 段状遺構（第 149・188・189 図、第 50・73 表、図版 71・150）

２区南寄りの 7a-9C-1a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。13 土坑を切っている。形状は方形状を基調とするが、東側が圃場整備に伴う削平のために消滅しており、全体形は明確ではない。底部は平坦状である。当初は竪穴建物の可能性も考慮して調査に着手したが、底部に柱穴等が存在していないことから段状遺構と判断した。規模は、長さ（南北方向）約 4.4m、残存幅（東西方向）約 2.3m、検出面からの深さは最大 0.37m である。埋土は２層に分層でき、黒色シルトを主とする１層の下部に、２層の黒褐色シルトが薄く存在している。遺物は、埋土中から土器が出土しており、このうち、底部近くから出土した Po147 ほかを図化した。Po149 は土師器の甕で、口頸部が「く」の字状に外反しながら大きく屈曲する。口縁内面には横方向のハケメが施される。外面には炭化物が付着している。Po147 ・ 148 は須恵器である。Po147 は坏で、口縁部はやや外反しながら外傾する。底部外面は回転糸切り後にナデ消されており、焼成時の灰が自然釉となって付着していることから、伏せた状態で焼成されたことが分かる。Po148 は甕の体部と考えられる破片である。外面は平行叩きをハケで消している。内面には円形状の当て具痕が残る。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

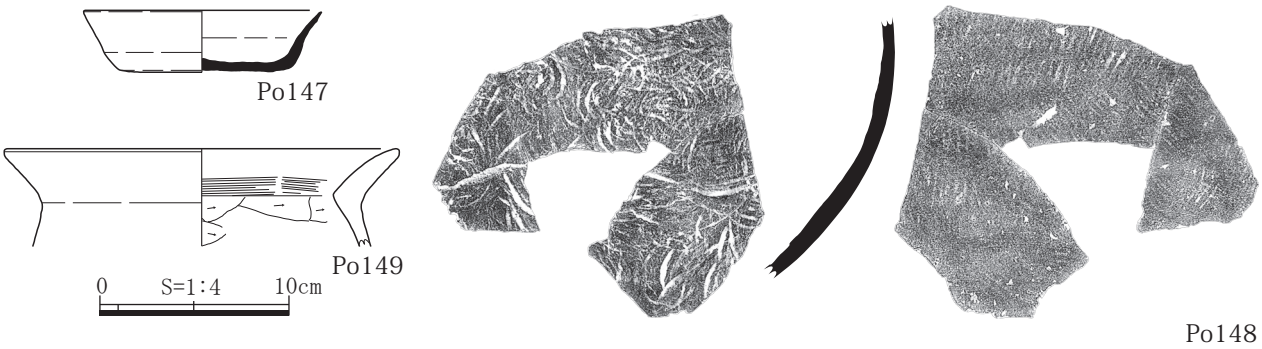


第 188 図　13 ～ 15・26 土坑、59 段状遺構

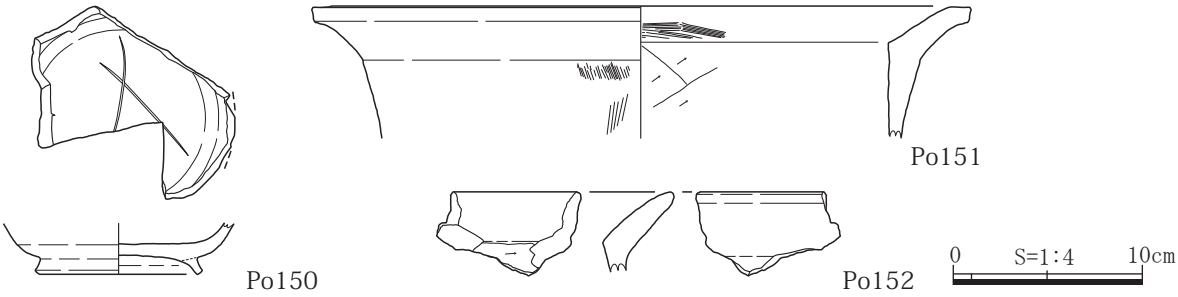
（5）土坑

13 土坑（第 149・188・190 図、第 48・73 表、図版 71・150）

２区南西寄りの 7a-8C-10a・ 9C-1a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。主軸方向は N-16°-E であるが、東側は圃場整備に伴う削平のために消滅している。当初は方形状の土坑と判断して調



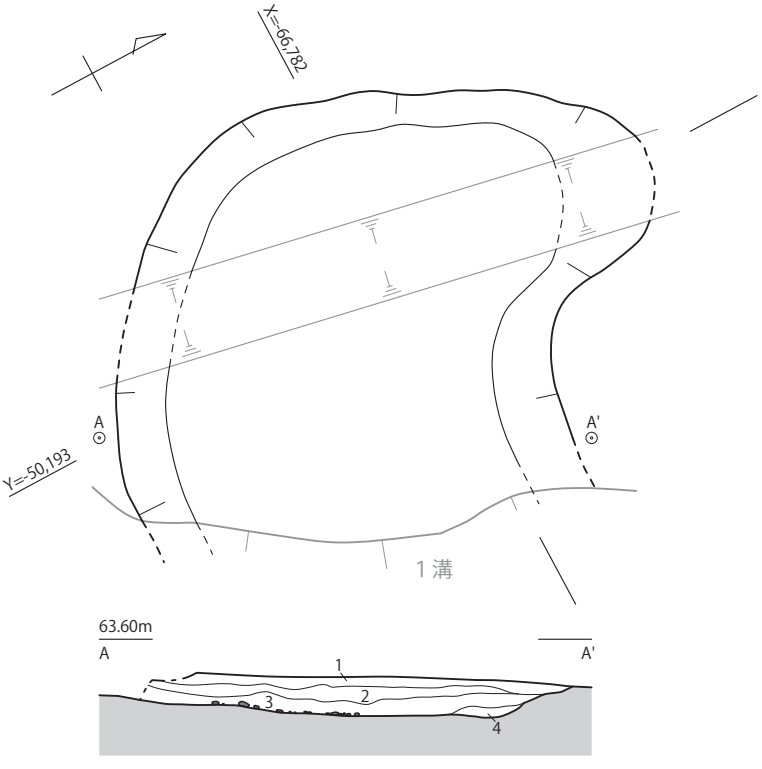
第 189 図　59 段状遺構出土土器



第 190 図　13 土坑出土土器

査に着手したが、遺構範囲が広がることが判明し、完掘時の形状は不整形状となった。北側の底部に窪みがあるが、この部分は、上部に４溝、下部には53道路が位置しており、この窪みは53道路に関係する痕跡の可能性もある。また、59段状遺構・61ピットに切られている。規模は、長軸11.71m、残存短軸3.61m、検出面からの深さは最大0.36mである。埋土は黒色シルトを主とする単層である。用途は不明である。遺物は、埋土中から土器・土製品、布目を持つ瓦が出土している。このうち、土器３点を図化した。

Po150は土師器の高台付坏である。低い高台の内面には静止糸切り痕が残る。59段状遺構出土の破片と接合した。Po151・152は土師器の甕で、口頸部が「く」の字状に外反しながら大きく屈曲する。Po151は口縁端部を平坦にするとともに、端部内面を強く



63土坑
1　10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 シルト小ブロック混　10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小ブロック混)
2　10YR1.7/1 黒色 細砂混じりシルト (10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト小ブロック少混　10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小ブロック少混)
3　10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 シルト大粒少混)
4　10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト (10YR7/4 にぶい黄橙色 細砂マーブル状混)

0　(1:40)　1m

第 191 図　63 土坑

ナデて平坦状にしている。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

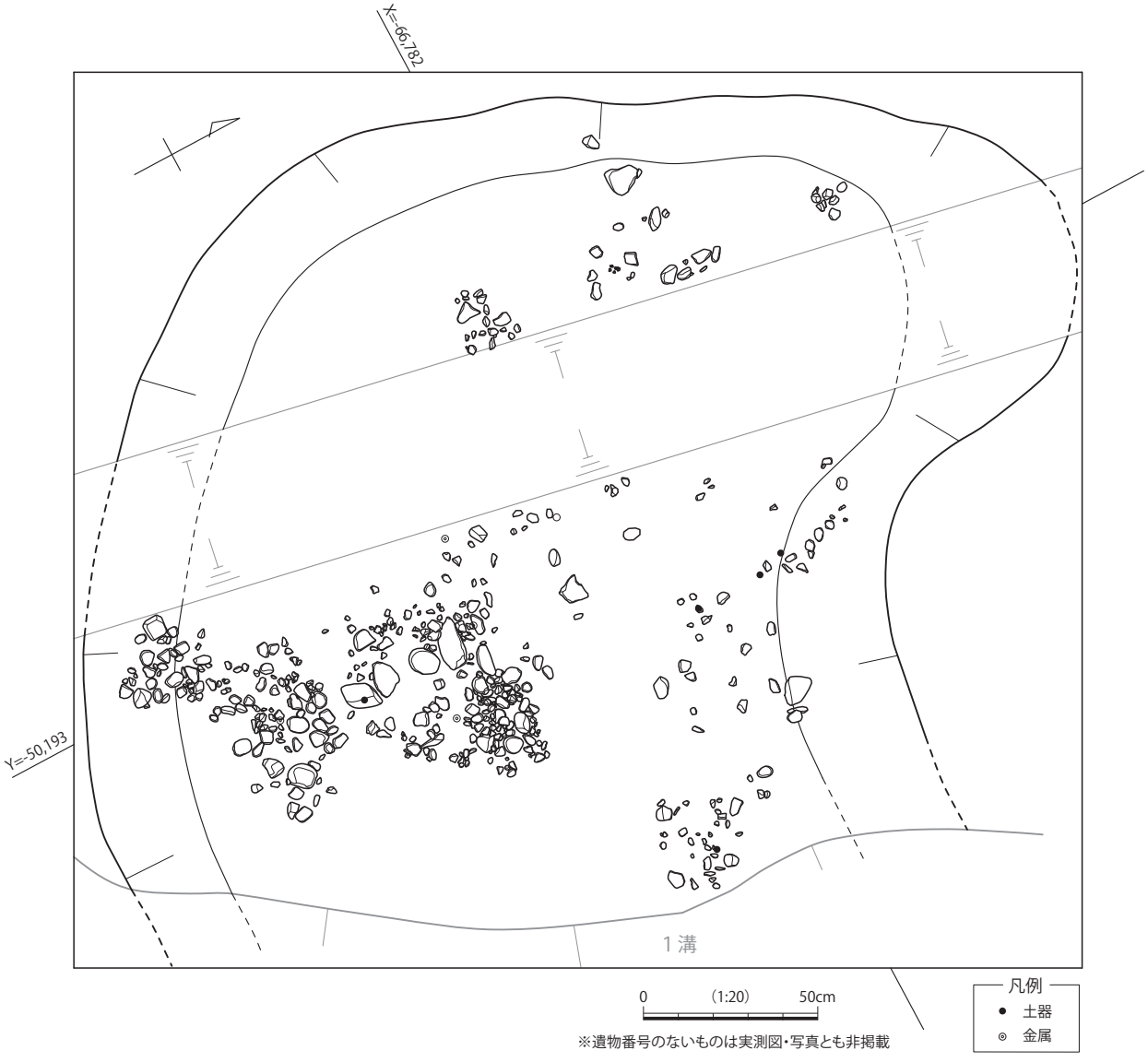
14 土坑（第 149・188 図、第 48 表）

２区南西寄りの 7a-8B-9j・ 8C-9a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。主軸方向は N-57° -W である。形状は楕円形状であり、底部はほぼ平坦である。規模は、長軸 0.75m、短軸 0.65m、検出面からの深さは最大0.06mである。埋土は黒色の細砂混じりシルトの単層である。用途は不明である。遺物は、埋土中から土器が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

15 土坑（第 149・188 図、第 48 表）

２区南西寄りの 7a-8C-10a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。主軸方向は N-42° -E である。形状は長楕円形であり、底部はほぼ平坦である。規模は、長軸 0.72m、短軸 0.32m、検出面からの



第 192 図　63 土坑遺物出土状況図

深さは最大0.22mである。埋土は黒色の細砂混じりシルトを主とする単層である。用途は不明である。遺物は、埋土中から土器が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

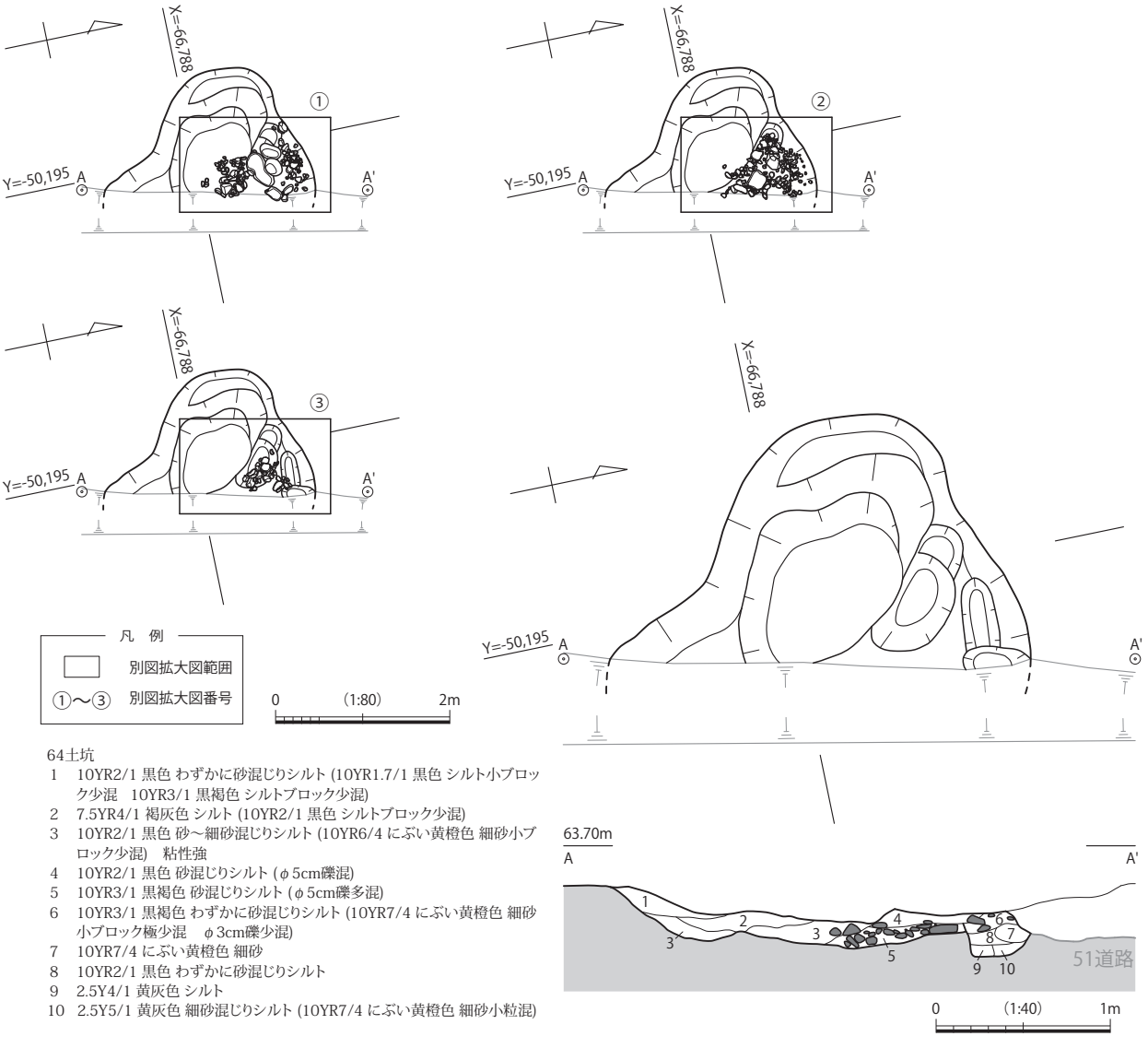
26 土坑（第 149・188 図、第 48 表）

２区南西寄りの 7a-9C-1a グリッドにおいて、Ⅴ層上面で検出した。形状は円形であり、断面形は漏斗状を呈し、底部はほぼ平坦である。規模は、径 0.60m、検出面からの深さは最大 0.36m である。埋土は黒色の細砂混じりシルトを主とする単層である。用途は不明である。遺物は、埋土中から土器が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

63 土坑（第 149・191・192・455 図、第 25・48 表、図版 324）

２区南西寄りの 7a-8B-9j グリッドにおいて、Ⅴ層上面で検出した。形状は不整形であり、東側が



64土坑
1　10YR2/1 黒色 わずかに砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 シルト小ブロック少混　10YR3/1 黒褐色 シルトブロック少混)
2　7.5YR4/1 褐灰色 シルト (10YR2/1 黒色 シルトブロック少混)
3　10YR2/1 黒色 砂～細砂混じりシルト (10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小ブロック少混)　粘性強
4　10YR2/1 黒色 砂混じりシルト (φ5cm礫混)
5　10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト (φ5cm礫多混)
6　10YR3/1 黒褐色 わずかに砂混じりシルト (10YR7/4 にぶい黄橙色 細砂小ブロック極少混　φ3cm礫少混)
7　10YR7/4 にぶい黄橙色 細砂
8　10YR2/1 黒色 わずかに砂混じりシルト
9　2.5Y4/1 黄灰色 シルト
10　2.5Y5/1 黄灰色 細砂混じりシルト (10YR7/4 にぶい黄橙色 細砂小粒混)

第 193 図　64 土坑

第 194 図　64 土坑遺物出土状況図

１溝によって切られているうえ、中央部を南北方向の暗渠溝に破壊されている。また、上部が圃場整備に伴う削平のために消失しているため、土坑底部がわずかに遺存しているに過ぎない。底部はほぼ平坦である。規模は、長軸最大2.34m、短軸2.20m、検出面からの深さは最大0.21mである。埋土は４層に分層できるが、いずれも黒色の細砂混じりシルトを主とする層である。底部には意図的に入れられたと考えられる径３cm程度を主とする小円礫が残されていた。用途は不明である。遺物は､埋土中から土器･布目を持つ瓦、鉄滓などが出土しており、そのうち羽口の先端部CP77、椀形鍛冶滓F26を図化した。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

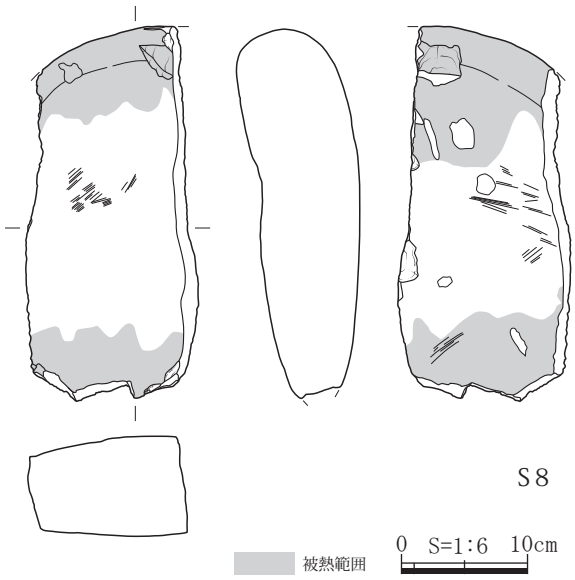
64 土坑（第 149･193 ～ 195 図、第 48・97 表、図版 68・150）

２区南西寄りの7a-8B-9jグリッドにおいて、Ⅴ層上面で検出した。形状は不整形である。東側が１溝に、北側を51道路によって切られており、上部が圃場整備に伴う削平や撹乱を受けているため遺存状態は悪い。底部には複数の窪みが存在し歪な形状である。なお、西側で77土坑を

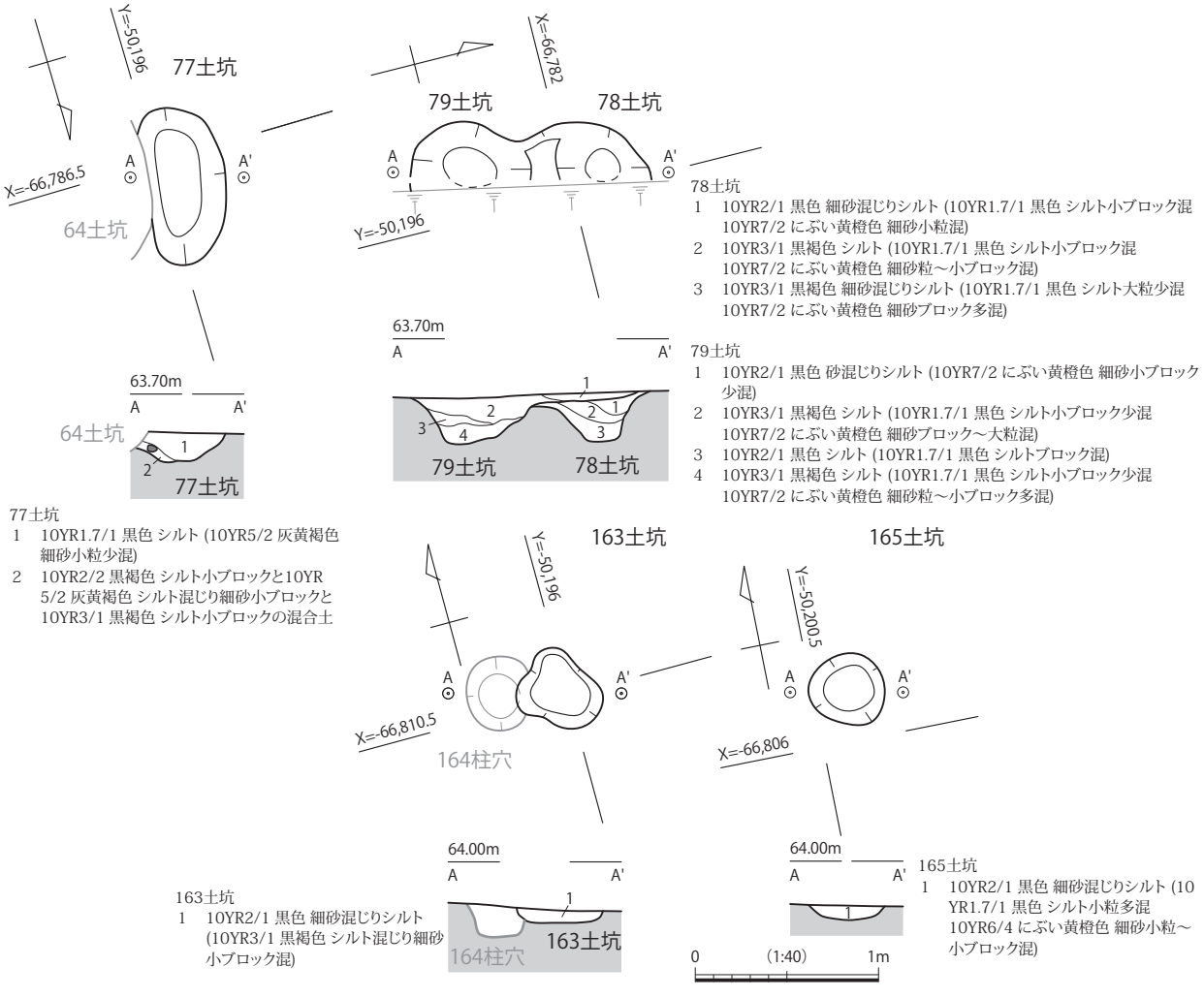
切っている。規模は、長軸2.41m、短軸最大1.47m、検出面からの深さは最大0.35mである。埋土は10層に分層できる。想定される堆積状況は、遺構底部に多量の小礫と砂混じりシルトによる５層が形成され、そこに６～10層を埋土とする窪みが掘り込まれ、その上部に１～４層が堆積する。この窪み上部を51道路によってわずかに削平されているが、土坑上部の撹乱等のため詳細は不明である。遺構北半には多くの礫が存在しているが、３層の堆積範囲にあたる遺構南半にはほとんど礫が存在していない。

埋土は窪み部の６～10層を除くと黒色～黒褐色の砂混じりシルトを主としており、基盤層であるⅤ層はほとんど混じっていない。そのため、複数回の埋土掘削が想定されるが、意図的な埋め戻しは行われていないと考えられる。遺構の用途は不明である。

遺物は、埋土中から土器、布目を持つ瓦、鉄滓



第 195 図　64 土坑出土石器



第 196 図　77 ～ 79・163・165 土坑

などが出土している。このうち、石器を図化した。

Ｓ８は台石である。欠損部が多く本来の形状は不明であるが、残存部には被熱痕が認められる。石材はデイサイトである。

本遺構の帰属時期は、出土遺物からから古代と考えられる。

77 土坑（第 149・196 図、第 48 表）

２区南西寄りの 7a-8B-9j グリッドにおいて、Ｖ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平のために消失しており、本来の遺構面は不明である。主軸方向はN-8° -Eである。形状は長楕円形であり、底部は平坦状である。規模は、長軸 0.86m、短軸最大 0.41m、検出面からの深さは最大 0.15mである。埋土は２層に分かれるが、主となる１層は黒色シルトの層である。用途は不明である。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

78・79 土坑（第 149・196 図、第 48 表）

２区南西寄りの 7a-8B-9j グリッドにおいて、Ｖ層上面で検出した。東側を南北方向の暗渠溝に破壊されている。上部が圃場整備に伴う削平のために消失しており、本来の遺構面は不明である。78 土坑を 79 土坑が切っている。両土坑とも形状は楕円形状で、底部は平坦状である。

78 土坑は、規模が長軸最大 0.64m、短軸最大 0.31m 、検出面からの深さは最大 0.26m で、埋土は黒色～黒褐色のシルトを主とする３層に分層される。

一方、79 土坑は、規模が長軸 0.65m 、短軸最大 0.36m 、検出面からの深さは最大 0.24m で、埋土は黒色～黒褐色のシルトを主とする４層に分層される。

両土坑とも用途は不明で、遺物は出土していない。

両遺構の帰属時期は、埋土の特徴が共通することから、共に古代と考えられる。

163 土坑（第 149・196 図、第 48 表、図版 66）

２区南端中央の 7a-9B-2j グリッドにおいて、Ｖ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平のために消失しており、本来の遺構面は不明である。西側が掘立柱建物７の 164 柱穴を切る。形状は不整形であるが、底部はほぼ平坦である。規模は、長軸 0.45m、短軸最大 0.32m、検出面からの深さは最大 0.07mである。埋土は黒色の細砂混じりシルトを主とする単層である。用途は不明である。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

165 土坑（第 149・196 図、第 48 表）

２区南寄りの 7a-9C-1a グリッドにおいて、Ｖ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平のために消失しており、本来の遺構面は不明である。形状はやや不整な円形で、底部は平坦状である。規模は、長軸 0.41m、短軸 0.40m、検出面からの深さは最大 0.08mである。埋土は黒色の細砂混じりシルトを主とする単層である。用途は不明である。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

（6）柱穴・ピット

単独の柱穴16基、ピット39基、計55基を検出した。穴と判断した遺構のうち、ある程度の規模を持つものを土坑、それ以外の小穴のうちで断面に柱痕跡が認められるものなどを柱穴、用途不明なものをピットとした。

８柱穴（第 149・197 図、第 54 表）

２区北西寄りの7a-8C-9aグリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平を受けている。形状はほぼ円形であり、底部は平坦状である。規模は、長軸0.29m、短軸0.27m、検出面からの深さは最大0.21mである。ほぼ中央に柱痕跡が存在する。１層が柱痕で、２層が掘方埋め土である。なお、１・２層とも多寡はあるがⅡｂ層に類似する土が含まれており、Ⅱｂ層中から掘り込みが行われている可能性が高い。遺物としては柱痕埋土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。なお、柱痕埋土の底部近くから石が出土している。柱穴底面からやや浮いた状態で出土した小ぶりな石ではあるが、礎盤石と考える。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

９柱穴（第 149・197 図、第 54 表）

２区北西寄りの7a-8C-9aグリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平を受けている。形状はほぼ円形であり、底部は逆凸状を呈する。規模は、長軸0.35m、短軸0.32m、検出面からの深さは最大0.31mである。ほぼ中央に柱痕跡が存在する。１層が柱痕で、その下面は基盤層のⅤ層に食い込んでおり、柱のあたり痕と考えられる。２層は掘方埋め土である。なお、１・２層とも多寡はあるがⅡｂ層に類似する土が含まれており、Ⅱｂ層中から掘り込みが行われている可能性が高い。遺物としては掘方埋め土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

11 柱穴（第 149・197 図、第 54・73 表、図版 150）

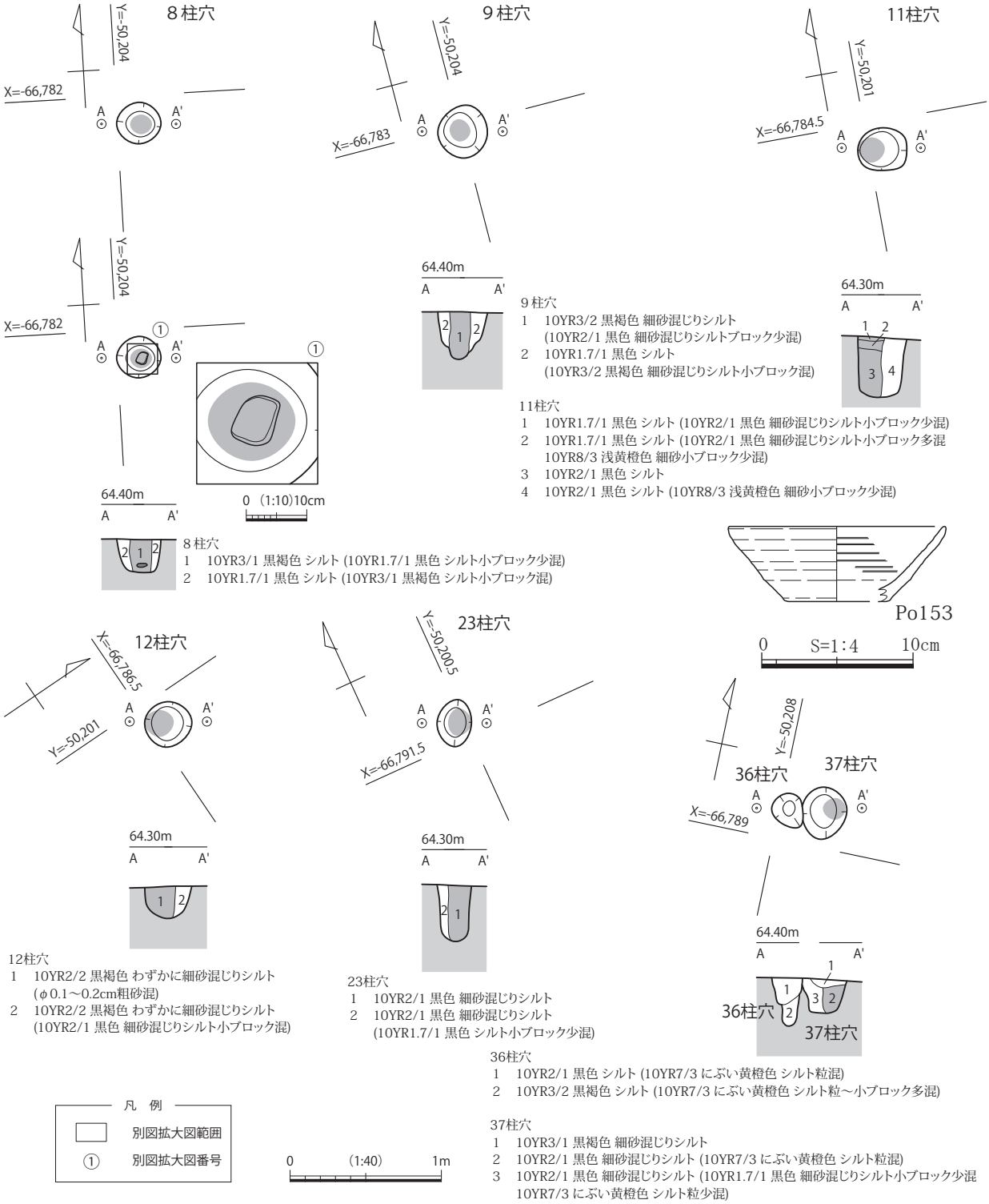
２区北西寄りの7a-8C-9aグリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平を受けている。形状はほぼ円形であり、底部はゆるく湾曲する。規模は、長軸0.32m、短軸0.28m、検出面からの深さは最大0.39mである。穴の西際に柱痕跡が存在する。１～３層が柱痕で、４層が掘方埋め土である。なお、埋土にはⅡｂ層に類似する土が多く含まれており、Ⅱｂ層中から掘り込みが行われている可能性が高い。遺物としては柱痕埋土・掘方埋め土の双方から土器片が出土しており、土器１点を図化した。

Po153は土師器の坏である。口縁部はやや内湾して外傾する。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

12 柱穴（第 149・197 図、第 54 表）

２区北西寄りの7a-8C-9aグリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平を受けている。形状はほぼ円形であり、底部は湾曲する。規模は、長軸0.30m、短軸0.29m、検出面



第 197 図　８・９・11・12・23・36・37 柱穴、11 柱穴出土土器

からの深さは最大0.21mである。穴の南西際に柱痕跡が存在する。１層が柱痕で、２層が掘方埋め土である。なお、埋土にはⅡｂ層に類似する土が多く含まれており、Ⅱｂ層中から掘り込みが行われている可能性が高い。遺物としては掘方埋め土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

23 柱穴（第 149・197 図、第 54 表）

２区西寄りの 7a-8C-10a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平を受けている。形状は楕円形状であり、底部はゆるく湾曲する。規模は、長軸 0.31m、短軸 0.22m、検出面からの深さは最大 0.37m である。穴の南東際に柱痕跡が存在する。１層が柱痕で、２層が掘方埋め土である。なお、埋土にはⅡｂ層に類似する土が多く含まれており、Ⅱｂ層中から掘り込みが行われている可能性が高い。遺物としては掘方埋め土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

36 柱穴（第 149・197 図、第 54 表）

２区西寄りの 7a-8C-9a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。東側がわずかであるが 37 柱穴を切る。上部が圃場整備に伴う削平を受けている。形状は涙滴状であり、底部は湾曲する。規模は、長軸 0.24m、短軸 0.20m、検出面からの深さは最大 0.32m である。柱痕跡は存在しないが、柱の抜き取り痕ではないかと考えた。埋土は上下２層に分層したが、下層の２層はⅤ層土が多量に含まれる堆積で、Ⅳ層上面で行った第２遺構面の調査時点で遺構でないと判断した「根撹乱」などと類似しており、２層部分は遺構ではない可能性もある。その場合は、36 柱穴は 36 ピットと遺構の性格を変更する必要があるが、ここでは、調査時点の評価のまま２層を遺構の一部として報告する。なお、埋土の１層にはⅡｂ層に類似する土が多く含まれており、Ⅱｂ層中から掘り込みが行われている可能性が高い。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

37 柱穴（第 149・197 図、第 54 表）

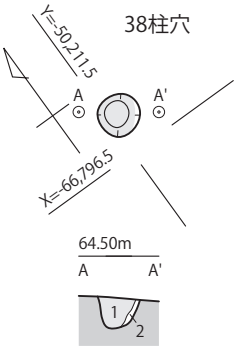
２区西寄りの 7a-8C-9a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。西側がわずかに 36 柱穴に切られる。上部が圃場整備に伴う削平を受けている。形状はほぼ円形であり、底部は平坦状である。規模は、長軸 0.34m、短軸最大 0.29m、検出面からの深さは最大 0.22m である。埋土は３層に分けられ、このうち２層が柱痕で、３層が掘方埋め土である。なお、埋土にはⅡｂ層に類似する土が多く含まれており、Ⅱｂ層中から掘り込みが行われている可能性が高い。遺物としては柱痕埋土・掘方埋め土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

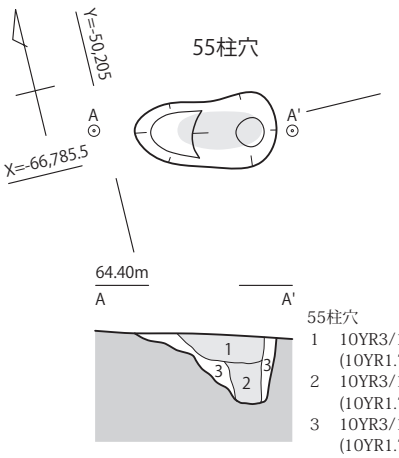
38 柱穴（第 149・198 図、第 54 表）

２区西寄りの 7a-8C-10b グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平を受けている。形状はほぼ円形で、底部はほぼ平坦状である。規模は、長軸 0.22m、短軸 0.21m、検出面からの深さは最大 0.16m である。１層が柱の抜き取り痕で、２層が掘方埋め土である。なお、埋土にはⅡｂ層に類似する土が多く含まれており、Ⅱｂ層中から掘り込みが行われている可能性が高い。遺物は出土していない。

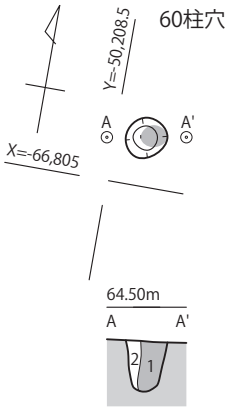
本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。



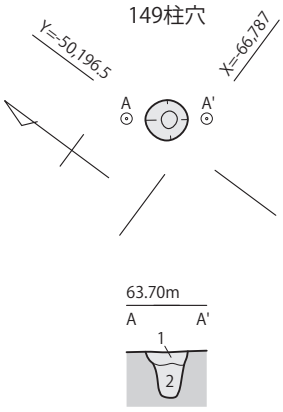
38柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト大粒混)
2　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト大粒多混)



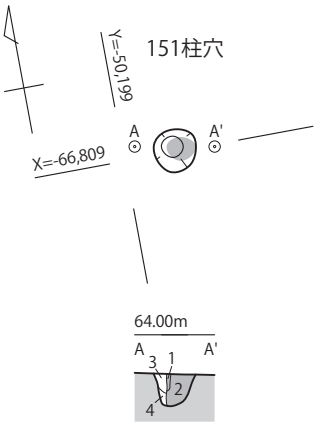
55柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト大粒少混)
2　10YR3/1 黒褐色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小ブロック混)
3　10YR3/1 黒褐色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト大粒極多混)



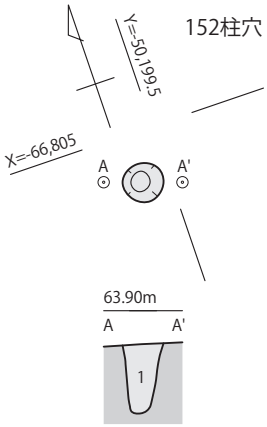
60柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR7/6 明黄褐色 砂ブロック極少混)
2　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小ブロック少混
10YR7/6 明黄褐色 細砂小ブロック極少混)



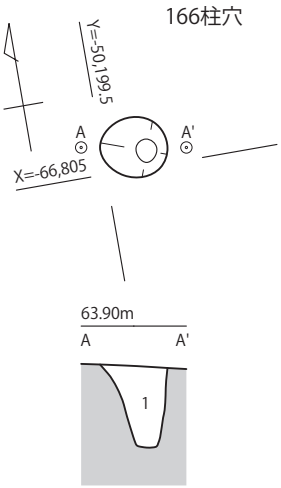
149柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR1.7/1 黒色 シルト大粒少混
10YR6/3 にぶい黄橙色 細砂小粒極少混)
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR1.7/1 黒色 シルト大粒多混
10YR6/3 にぶい黄橙色 細砂粒～小ブロック多混)



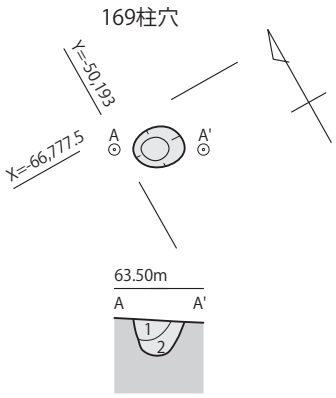
151柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小粒混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒混)
2　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト大粒多混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒～大粒少混)
3　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小粒～小ブロック混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒～粒多混)
4　10YR2/1 黒色 シルト (10YR1.7/1 黒色 シルト粒多混)



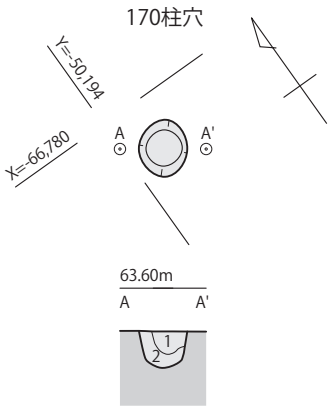
152柱穴
1　10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小粒多混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒～
小ブロック混)



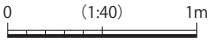
166柱穴
1　10YR2/1 黒色 細砂混じりシルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小粒少混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小ブロック～粒混)
しまりやや弱　(空洞部あり)



169柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト粒～大粒混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒～大粒混)
2　10YR4/2 灰黄褐色 細砂
(10YR2/1 黒色 シルト粒～小ブロック混
10YR6/4 にぶい黄橙色 小粒～大粒多混)



170柱穴
1　10YR2/1 黒色 わずかに細砂混じりシルト
(10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂小粒混
小ブロック極少混)
2　10YR2/1 黒色 わずかに細砂混じりシルト
(10YR4/2 灰黄褐色 細砂小ブロック～大粒混
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂大粒～小粒多混)



第 198 図　38・55・60・149・151・152・166・169・170 柱穴

55 柱穴（第 149・198 図、第 54 表）

２区西寄りの 7a-8C-9a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平を受けている。形状は不整な涙滴状で、柱を落とし込むためと考えられるが西側が 35 度程度の傾斜となり底部に至る。底部はほぼ平坦状である。規模は、長軸 0.75m、短軸 0.35m、検出面からの深さは最大 0.35m である。１・２層が柱の抜き取り痕で、３層が掘方埋め土と判断した。なお、埋土にはⅡｂ層に類似する土が多く含まれており、Ⅱｂ層中から掘り込みが行われている可能性が高い。遺物としては埋土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

60 柱穴（第 149・198・455 図、第 25・54 表、図版 324）

２区西寄りの 7a-9C-1a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。上部を 46 溝に切られていた。形状はほぼ円形であり、底部はゆるく湾曲する。規模は、長軸 0.22m、短軸 0.20m、検出面からの深さは最大 0.26m である。穴の東際に柱痕跡が存在する。１層が柱痕で、２層が掘方埋め土である。遺物としては掘方埋め土から図化はしてないが土器片が、埋土内からは椀形鍛冶滓 F27 が出土した。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

149 柱穴（第 149・198 図、第 54 表）

２区南西寄りの 7a-8B-9j グリッドにおいて、Ⅴ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平のために消失しており、本来の遺構面は不明であるが、第２遺構面で検出したピット等は規模が小さいのに対し、第１遺構面で検出した柱穴・ピット等は規模が比較的大きいものであることから、第１遺構面に属する遺構と判断した。形状は円形状であり、底部は平坦状である。規模は、長軸 0.22m、短軸 0.21m、検出面からの深さは最大 0.24m である。埋土は２層に分層できるが、共にⅢ層と考えられる黒色シルトを主とする層であり、柱の抜き取り痕と考えられる。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

151 柱穴（第 149・198 図、第 54 表）

２区南寄りの 7a-9B-1j グリッドにおいて、Ⅴ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平のために消失しており、本来の遺構面は不明であるが、第２遺構面で検出したピット等は規模が小さいのに対し、第１遺構面で検出した柱穴・ピット等は規模が比較的大きいものがあり、柱痕跡を持つものも複数存在することから、第１遺構面に属する遺構と判断した。形状は円形であり、底部は湾曲する。規模は、長軸 0.23m、短軸 0.22m、検出面からの深さは最大 0.17m である。穴の東際に柱痕跡が存在する。１・２層が柱痕で、３・４層が掘方埋め土である。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

152 柱穴（第 149・198 図、第 54 表）

２区南寄りの 7a-9B-1j グリッドにおいて、Ⅴ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平のために消失しており、本来の遺構面は不明であるが、第２遺構面で検出したピット等は規模が小さいのに対し、第１遺構面で検出した柱穴・ピット等は規模が比較的大きいものであることから、第１遺構

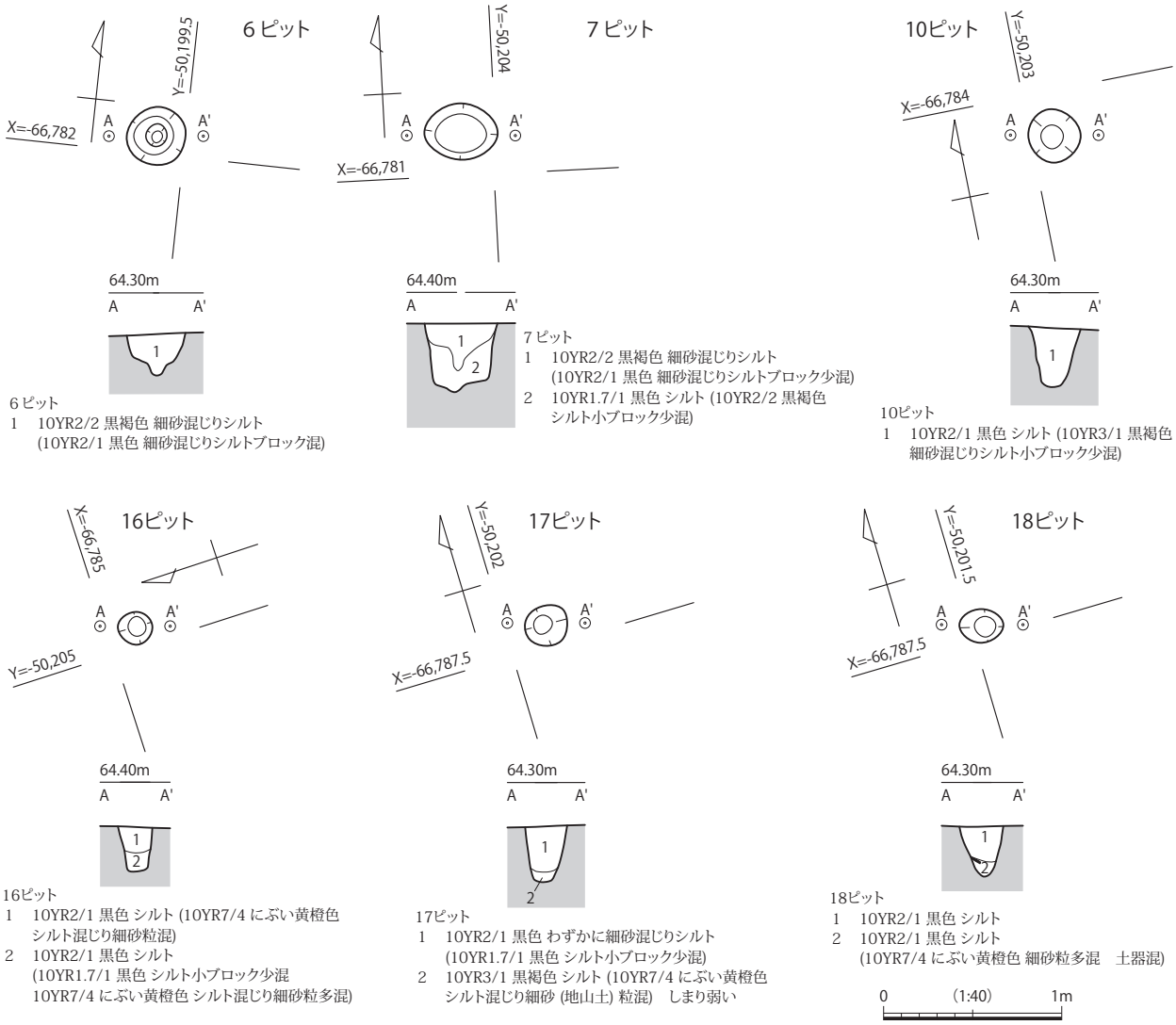
面に属する遺構と判断した。形状は円形であり、底部はやや湾曲する。規模は、長軸0.21m、短軸0.20m、検出面からの深さは最大0.36mである。埋土は黒色の細砂混じりシルトを主とする単層で柱の抜き取り痕である。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

166 柱穴（第 149・198 図、第 54 表）

２区南寄りの7a-9B-1jグリッドにおいて、Ⅴ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平のために消失しており、本来の遺構面は不明であるが、第２遺構面で検出した柱穴・ピット等は規模が小さいのに対し、第１遺構面で検出した柱穴・ピット等は規模が比較的大きいものであることから、第１遺構面に属する遺構と判断した。形状は楕円形状であり、底部はほぼ平坦である。規模は、長軸0.35m、短軸0.32m、検出面からの深さは最大0.42mである。埋土は黒色の細砂混じりシルトを主とする単層である。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。



6ピット
1　10YR2/2 黒褐色 細砂混じりシルト
(10YR2/1 黒色 細砂混じりシルトブロック混)

7ピット
1　10YR2/2 黒褐色 細砂混じりシルト
(10YR2/1 黒色 細砂混じりシルトブロック少混)
2　10YR1.7/1 黒色 シルト (10YR2/2 黒褐色
シルト小ブロック少混)

10ピット
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR3/1 黒褐色
細砂混じりシルト小ブロック少混)

16ピット
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR7/4 にぶい黄橙色
シルト混じり細砂粒混)
2　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小ブロック少混
10YR7/4 にぶい黄橙色 シルト混じり細砂粒多混)

17ピット
1　10YR2/1 黒色 わずかに細砂混じりシルト
(10YR1.7/1 黒色 シルト小ブロック少混)
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR7/4 にぶい黄橙色
シルト混じり細砂 (地山土) 粒混)　しまり弱い

18ピット
1　10YR2/1 黒色 シルト
2　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR7/4 にぶい黄橙色 細砂粒多混　土器混)

第 199 図　６・７・10・16 ～ 18 ピット

169 柱穴（第 149・198 図、第 54 表）

２区北側中央の 7a-8B-8j グリッドにおいて、Ⅴ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平のために消失しており、本来の遺構面は不明であるが、第２遺構面で検出した柱穴・ピット等は規模が小さいのに対し、第１遺構面で検出した柱穴・ピット等は規模が比較的大きいものであることから、第１遺構面に属する遺構と判断した。形状は楕円形状であり、底部は緩く湾曲する。規模は、長軸 0.27m、短軸 0.21m、検出面からの深さは最大 0.18m である。埋土は２層に分層できるが、１層がⅢ層と考えられる黒色シルトであり、下層の２層には灰黄褐色細砂に基盤層であるⅤ層のにぶい黄橙色細砂粒が多く含まれていることから、柱の抜き取り痕と判断した。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

170 柱穴（第 149・198 図、第 54 表）

２区南西寄りの 7a-8B-9j グリッドにおいて、Ⅴ層上面で検出した。上部が圃場整備に伴う削平のために消失しており、本来の遺構面は不明であるが、第２遺構面で検出した柱穴・ピット等は規模が小さいのに対し、第１遺構面で検出した柱穴・ピット等は規模が比較的大きいものであることから、第１遺構面に属する遺構と判断した。形状は楕円形状であり、底部は緩く湾曲する。規模は、長軸 0.30m、短軸 0.25m、検出面からの深さは最大 0.19m である。埋土は２層に分層できる。共に黒色シルトを主とする埋土であるが、下層の２層には基盤層であるⅤ層のにぶい黄橙色細砂粒が多く含まれていることから、柱の抜き取り痕と判断した。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

６ピット（第 149・199 図、第 54 表）

２区北西寄りの 7a-8B-9j グリッドにおいて、51 道路埋土上面で検出しており、51 道路を切っている。形状はほぼ円形であり、底部は中央部が窪んで逆凸状を呈す

第 200 図　70 田

る。規模は、長軸 0.33m、短軸 0.31m、検出面からの深さは最大 0.23m である。埋土はⅡｂ層と考えられる黒褐色の細砂混じりシルトを主とする単層である。遺物としては埋土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

７ピット（第 149・199 図、第 54 表）

２区北西寄りの 7a-8C-9a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。形状は楕円形状であり、底部は平坦状ではあるが一部が窪む。規模は、長軸 0.41m、短軸 0.31m、検出面からの深さは最大 0.38m である。埋土は２層に分かれるが、そのうち１層はⅡｂ層と考えられる黒褐色の細砂混じりシルトを主とする層である。遺物としては埋土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

10 ピット（第 149・199 図、第 54 表）

２区北西寄りの 7a-8C-9a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。形状はほぼ円形であり、底部は平坦状である。規模は、長軸 0.29m、短軸 0.28m、検出面からの深さは最大 0.33m である。埋土は黒色のシルトを主とする単層である。遺物としては埋土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

16 ピット（第 149・199 図、第 54 表）

２区北西寄りの 7a-8C-9a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。形状はほぼ円形で、底部はほぼ平坦である。規模は、長軸 0.18m、短軸 0.18m、検出面からの深さは最大 0.25m である。埋土は２層に分かれるが、両層とも黒色のシルトを主とする層である。遺物としては埋土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

17 ピット（第 149・199 図、第 54 表）

２区北西寄りの 7a-8C-9a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。形状はほぼ円形で、底部はほぼ平坦である。規模は、長軸 0.25m、短軸 0.22m、検出面からの深さは最大 0.31m である。埋土は２層に分かれるが、堆積の大半を占める１層は、黒色の細砂混じりシルトを主とする層である。遺物としては埋土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

18 ピット（第 149・199 図、第 54 表）

２区北西寄りの 7a-8C-9a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。形状は楕円形状で、底部は尖り気味となる。規模は、長軸 0.24m、短軸 0.19m、検出面からの深さは最大 0.28m である。埋土は２層に分かれるが、両層とも黒色のシルトを主とする層である。遺物としては２層から土器片が出土

しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

（7）田

70 田（第 148・200 図、第 51 表）

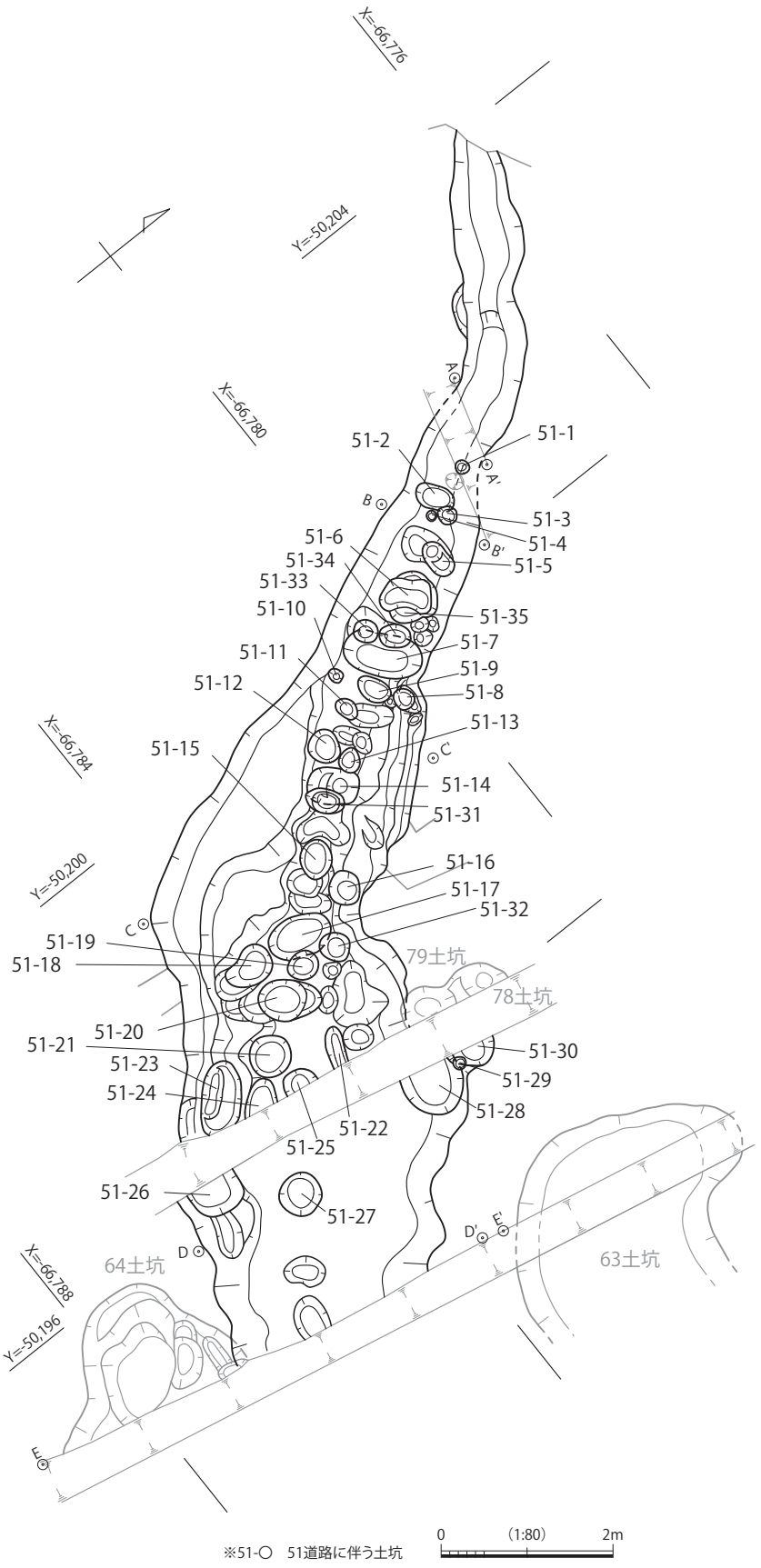
２区北東隅の 7a-8B-8h・8i・9h・9i グリッドにおいて、Ⅰb-1 層を除去した２流路上面の標高 62.9m で検出した。遺存状態が悪いため本来の形状等は不明であるが、調査時点での規模は、東西幅約 7.0m、南北幅約 3.4m である。西側に水口の可能性がある箇所が存在したが、明確ではない。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、２流路より新しいことと埋土の特徴から中世以降と考えられる。

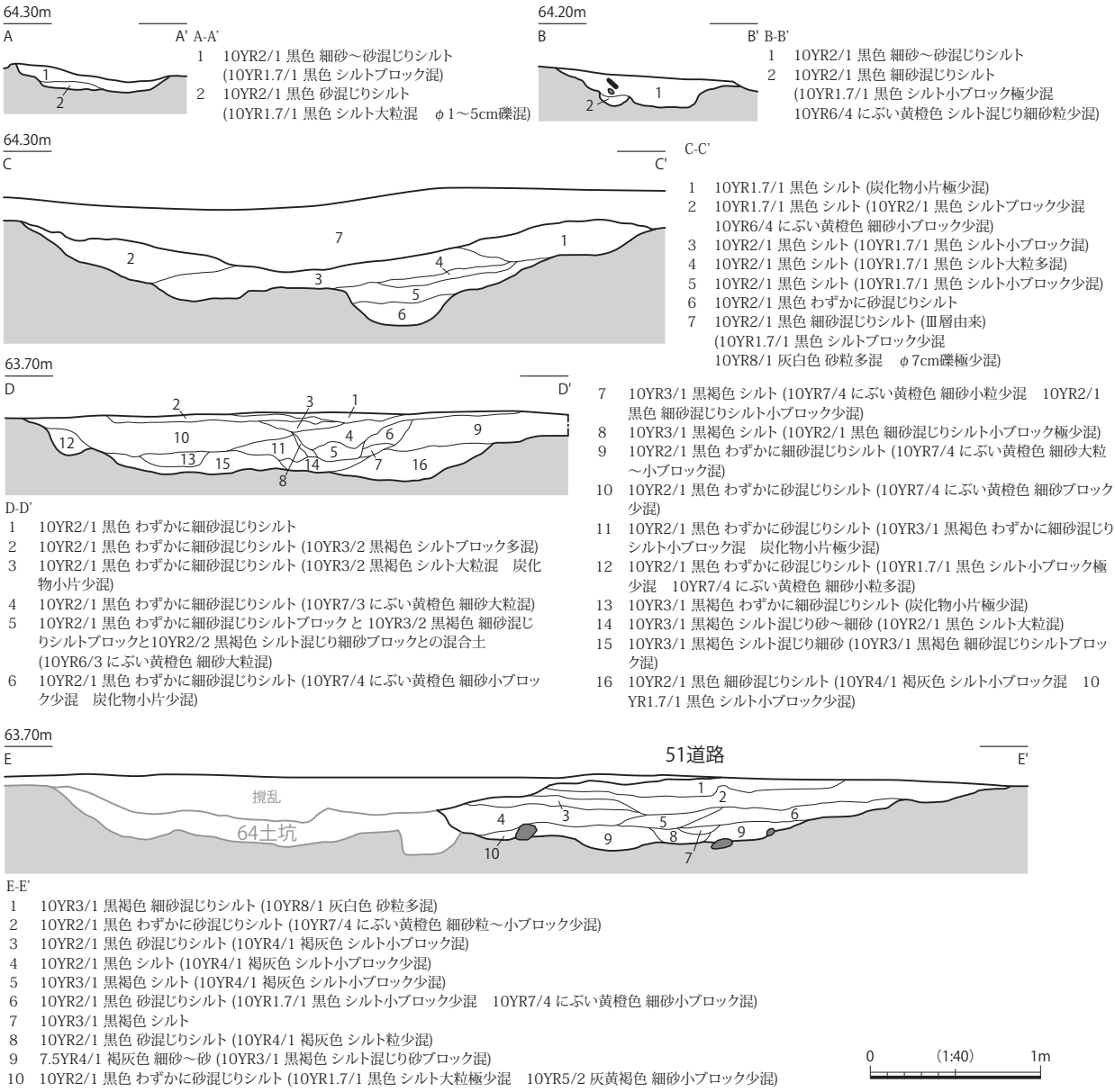
（8）道路

51道路（第149・201~218・455図、第25・53・73・94・95・97表、図版73~75・147・148・324）

２区北西の 7a-8B-8j・9j、8C-8a・9a グリッドにおいて、主にⅢ層上面で検出した。ただし、主たる埋土がⅢ層と差異がほとんどなかったため、検出は困難であり、断ち割りを入れて断面を確認しながら



第 201 図　51 道路



第 202 図　51 道路土層断面図

遺構の範囲を判断していった。なお、上部が圃場整備に伴う削平を受けているが、特に南東端は削平がひどくⅤ層上面での検出となった。本来の遺構面は不明である。主軸方向は概ね N-43° -W であるが、北西端部が南側に湾曲し、南東側が北側にやや湾曲している。形状はほぼ直線状で、北西から南東方向へ下っており、完掘時点での北西端の底部標高は 64.09m、南東端の底部標高が 63.14m で、高低差は 0.95m である。規模は残存最大長 14.6m、最大幅 3.3m、検出面からの深さは最大 0.77m である。

埋土は黒色のシルトもしくはわずかに細砂を含むシルトを主とする堆積土で、基本層序のⅢ層と同一といってもよい土であり、人為的な埋め戻しの痕跡は認められず、Ⅲ層土の流れ込みによる自然堆積と判断される。ただし、D-D' 断面では９・16 層を切って６・７・14 層などが堆積しているため、掘り直しが行われていると考えられる。これは、底面に存在する波板状凹凸に切り合いが存在することと矛盾しない。底面の形状は、両端側と中央部で異なっている。中央部には波板状凹凸と呼ばれる連続する小穴が存在する。一方、両端側には連続する小穴は存在しない。北西側は調査区外に続いて

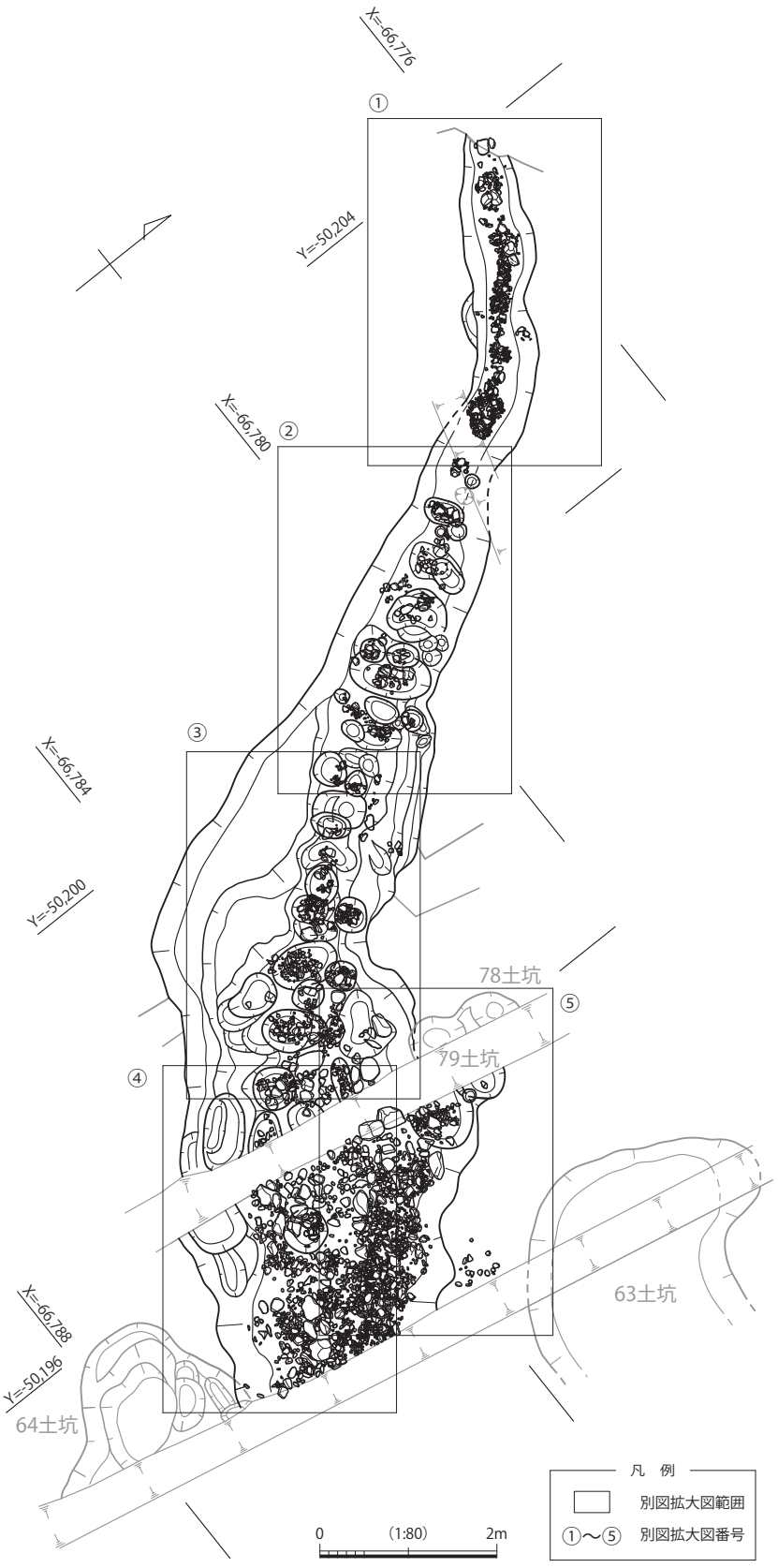
おり、南東側は１溝の掘削などの削平を受けているため不明な点は多いが、波板状凹凸は道路遺構全体に設置されてはおらず、何らかの判断基準に基づいて設置する箇所と設置しない箇所が区別されていたことが分かる。検出された波板状凹凸面を構成する土坑は、道路の主軸に対し直交するような横長の楕円形状のものと、ほぼ円形状のものが存在する。切り合いの存在から、少なくとも２段階の土坑掘削が認められる。傾向としては、比較的小型で不整な円形状の土坑が設置され、その後、楕円形状の比較的規模の大きな土坑が設置されている。

遺物として、布目を持つ瓦や須恵器などと共に、羽口や鍛冶滓などの鍛冶関連遺物が出土している。

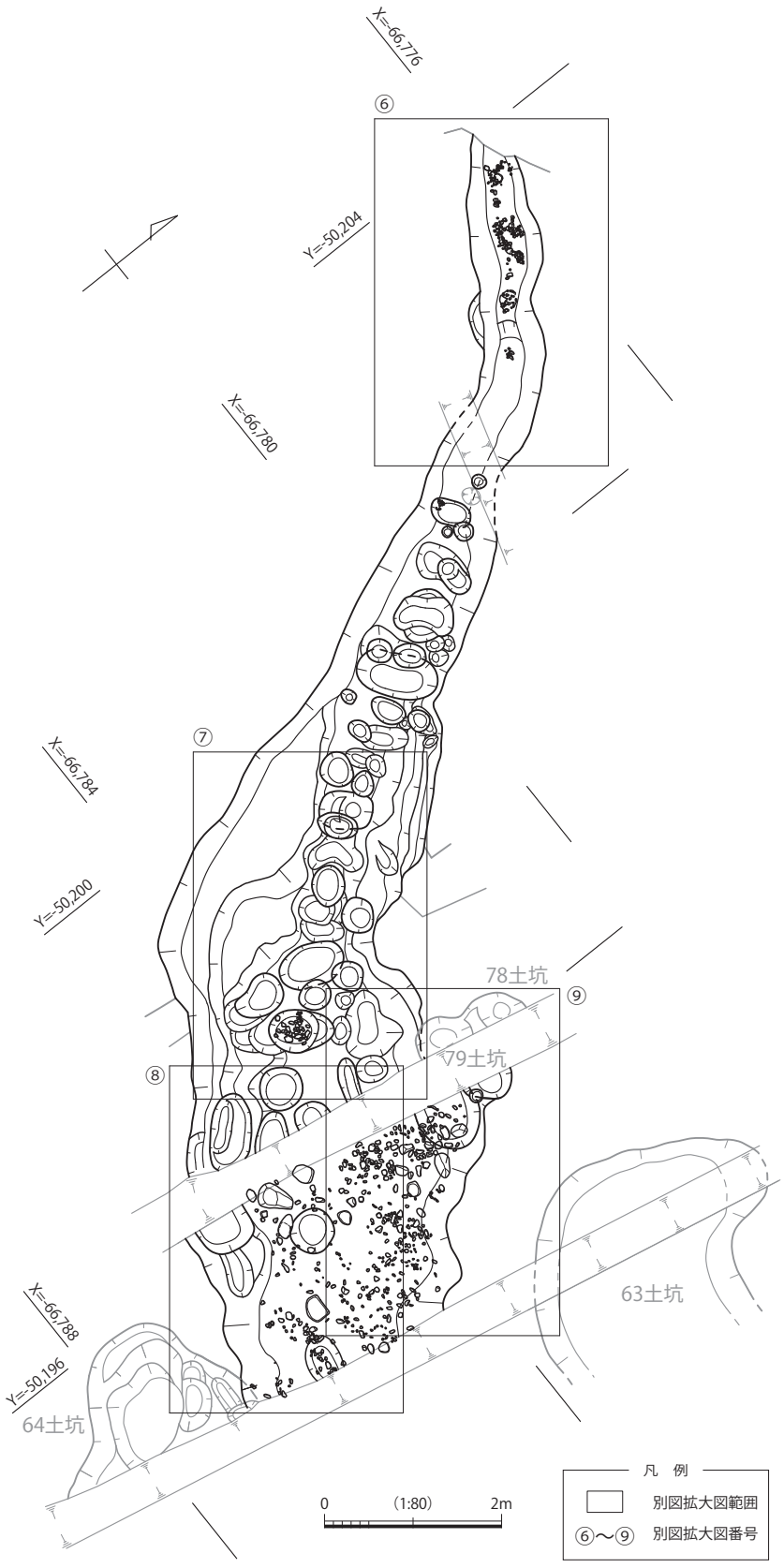
底面からは35基の小穴（土坑）を検出した。

51-1土坑は、ほぼ円形の形状で、底部はゆるく湾曲する。規模は、径0.16m、検出面からの深さは最大0.05mである。埋土は黒色の細砂～砂混じりシルトを主とする単層である。遺物は出土していない。

51-2土坑は、楕円形の形状で、底部は平坦状である。主軸方向はN-50°-Eである。規模は、長軸0.47m、短軸0.27m、検出面からの深さは最大0.06mである。51-3土坑を切る。埋土は２層に分層でき、１層は黒



第203図　51道路上位遺物出土状況図



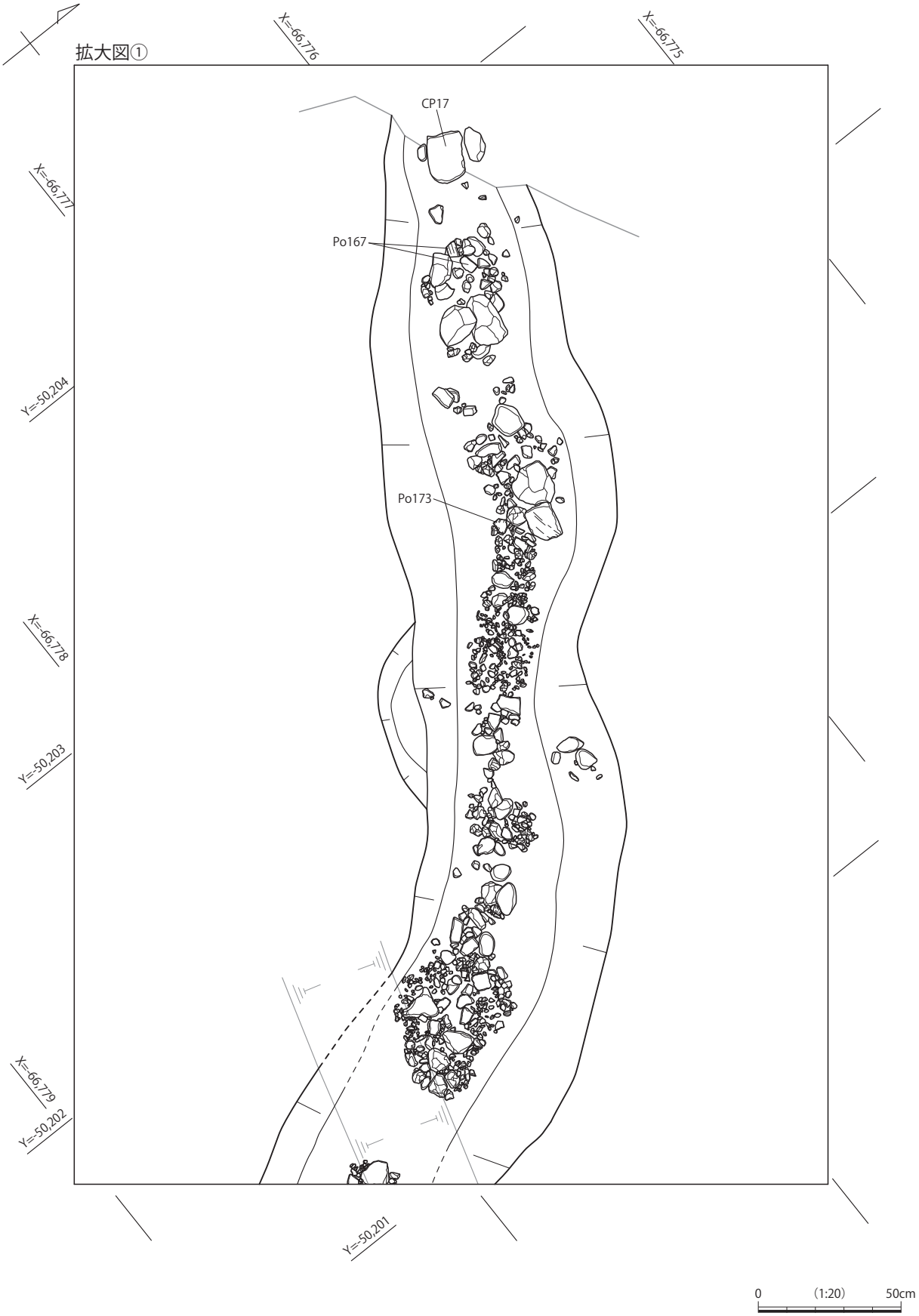
第 204 図　51 道路下位遺物出土状況図

褐色、２層は黒色で、共にわずかにシルトを含む砂を主とする層である。底部に小礫などが密に存在しており、遺物としては、土器、布目を持つ瓦、鉄滓が出土している。このうち、平瓦 CP21 を図化した。

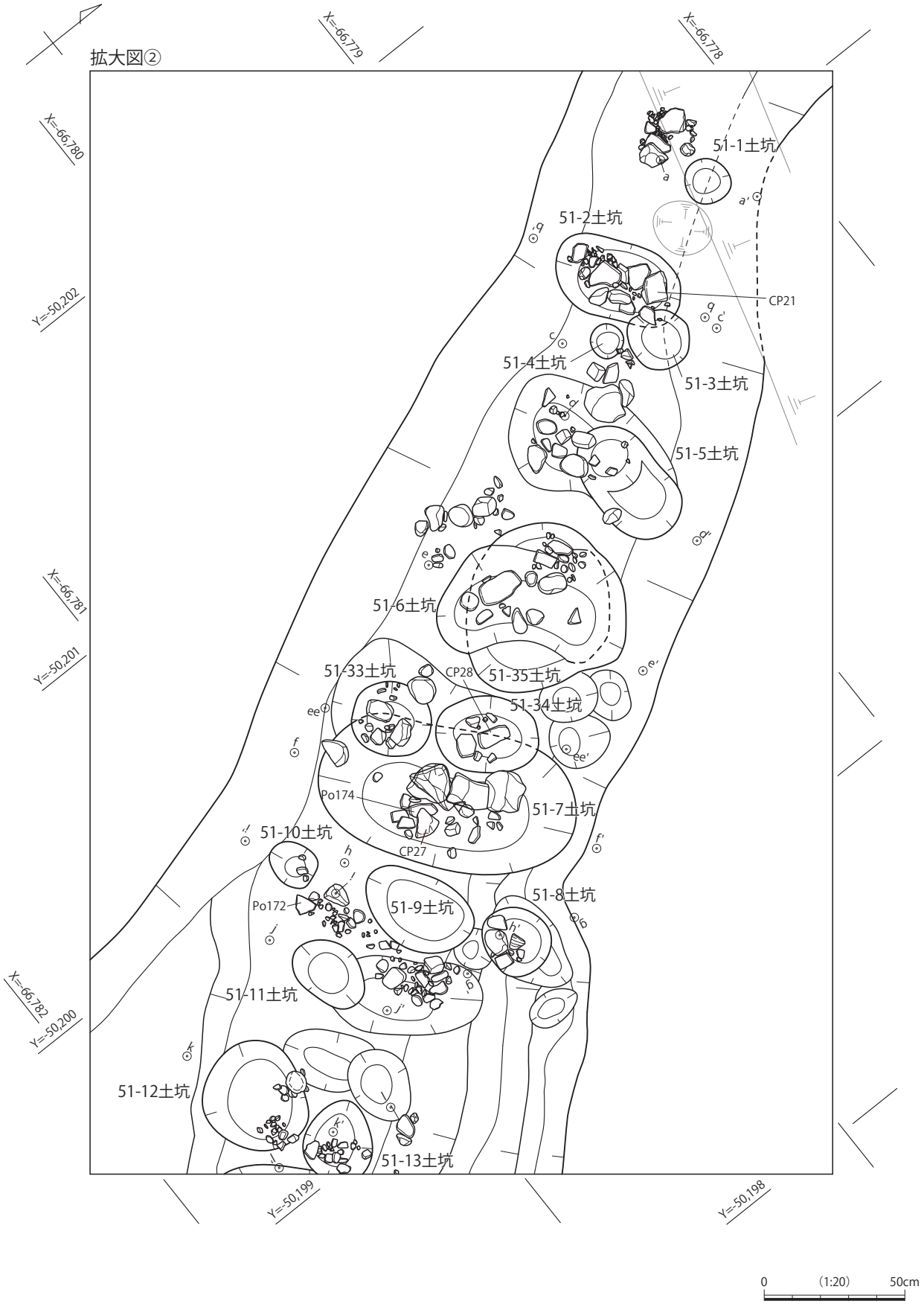
51-3 土坑は、ほぼ円形の形状で、底部はやや湾曲する。規模は、径 0.21m、検出面からの深さは最大 0.11m である。51-2 土坑に切られる。埋土は２層に分層でき、両層とも黒色の細砂混じりシルトを主とする層である。遺物は出土していない。

51-4 土坑は、ほぼ円形の形状で、底部はゆるく湾曲する。規模は、長軸 0.12m、短軸 0.11m、検出面からの深さは最大 0.04m である。埋土は黒色でわずかにシルトを含む砂の単層である。遺物は出土していない。

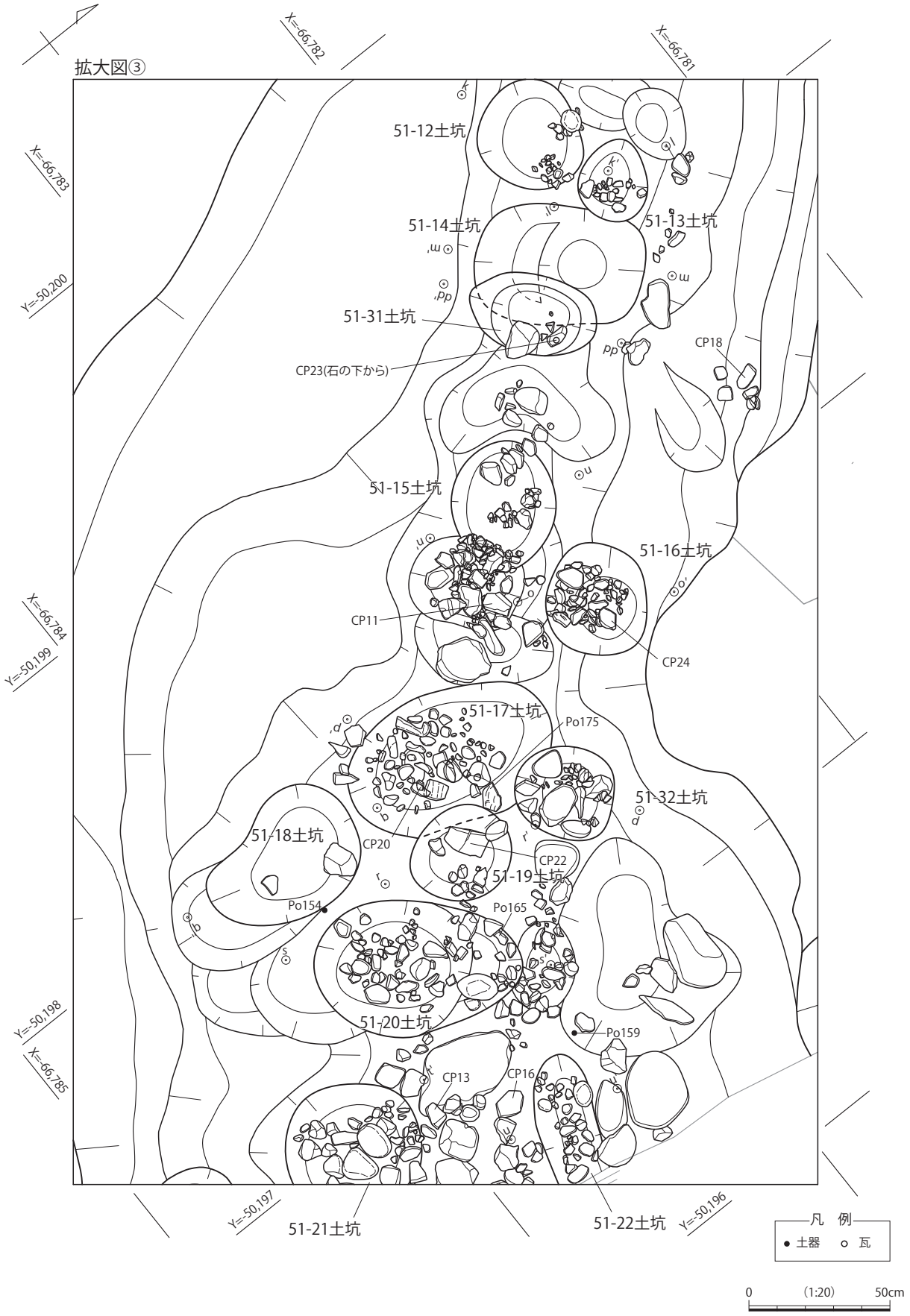
51-5 土坑は、楕円形の形状で、底部は平坦状ではあるが、西側に向けて深くなる。主軸方向は N-86° -E である。規模は、長軸 0.45m、短軸 0.25m、検出面からの深さは最大 0.06m である。西側が礫を持つ土坑を切るが、記録することができなかった。埋土は３層に分層でき、このうち、２・３層は埋め戻しされた痕跡が明瞭に残る。底部に小礫などが密に存在しており、遺物としては埋土中から鉄滓が出土しているが、図化対



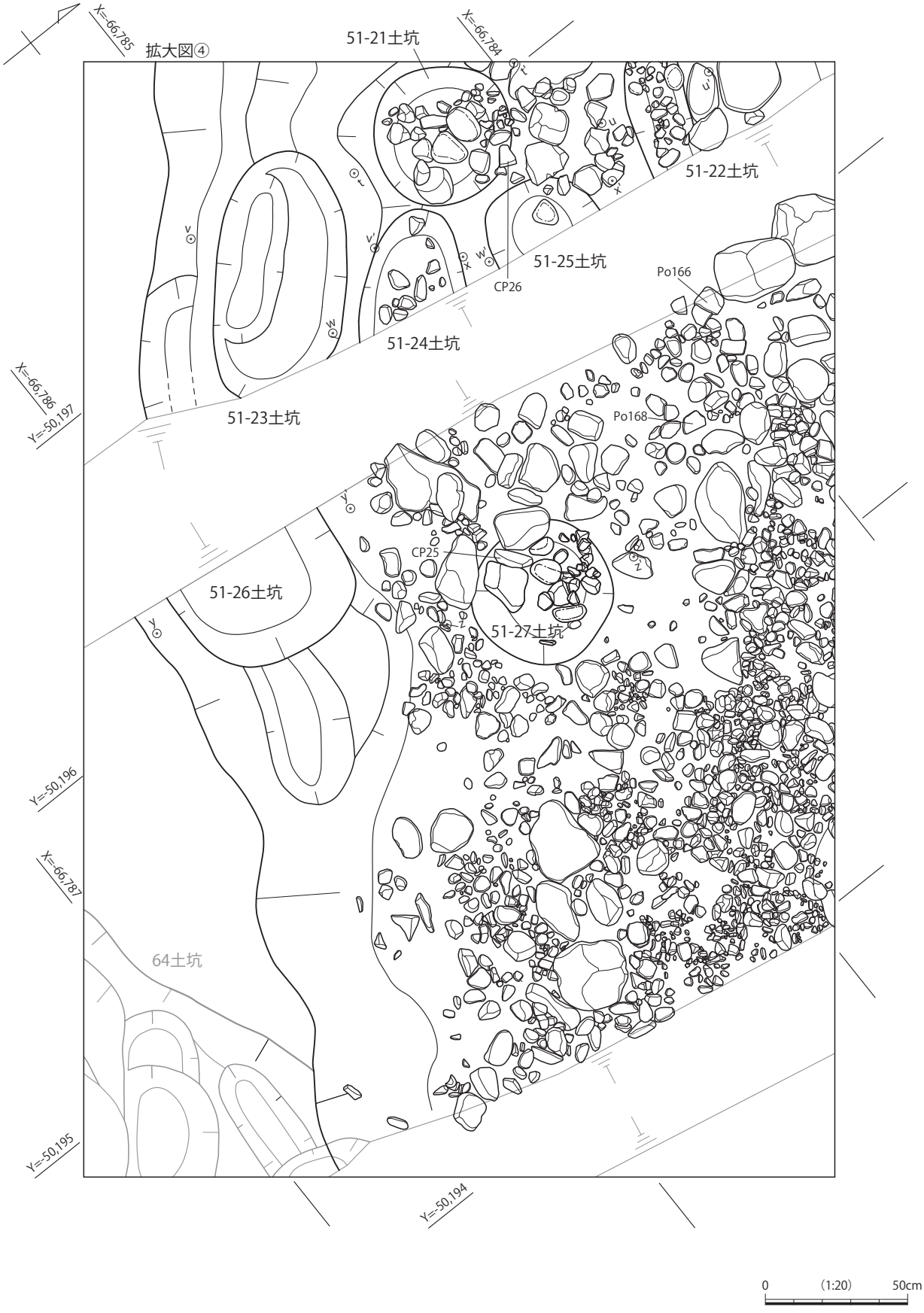
第 205 図　51 道路拡大図（１）



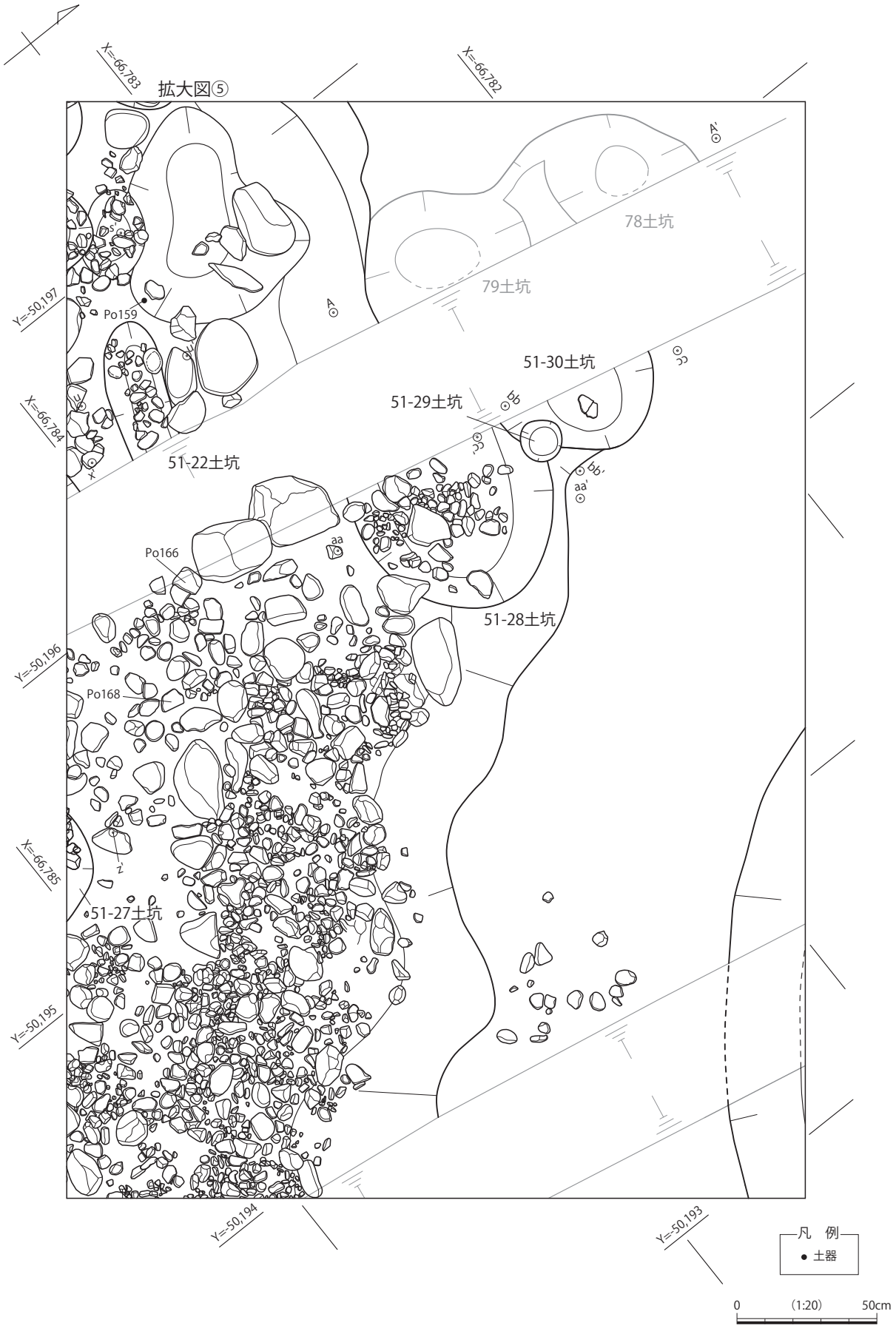
第 206 図　51 道路拡大図（２）



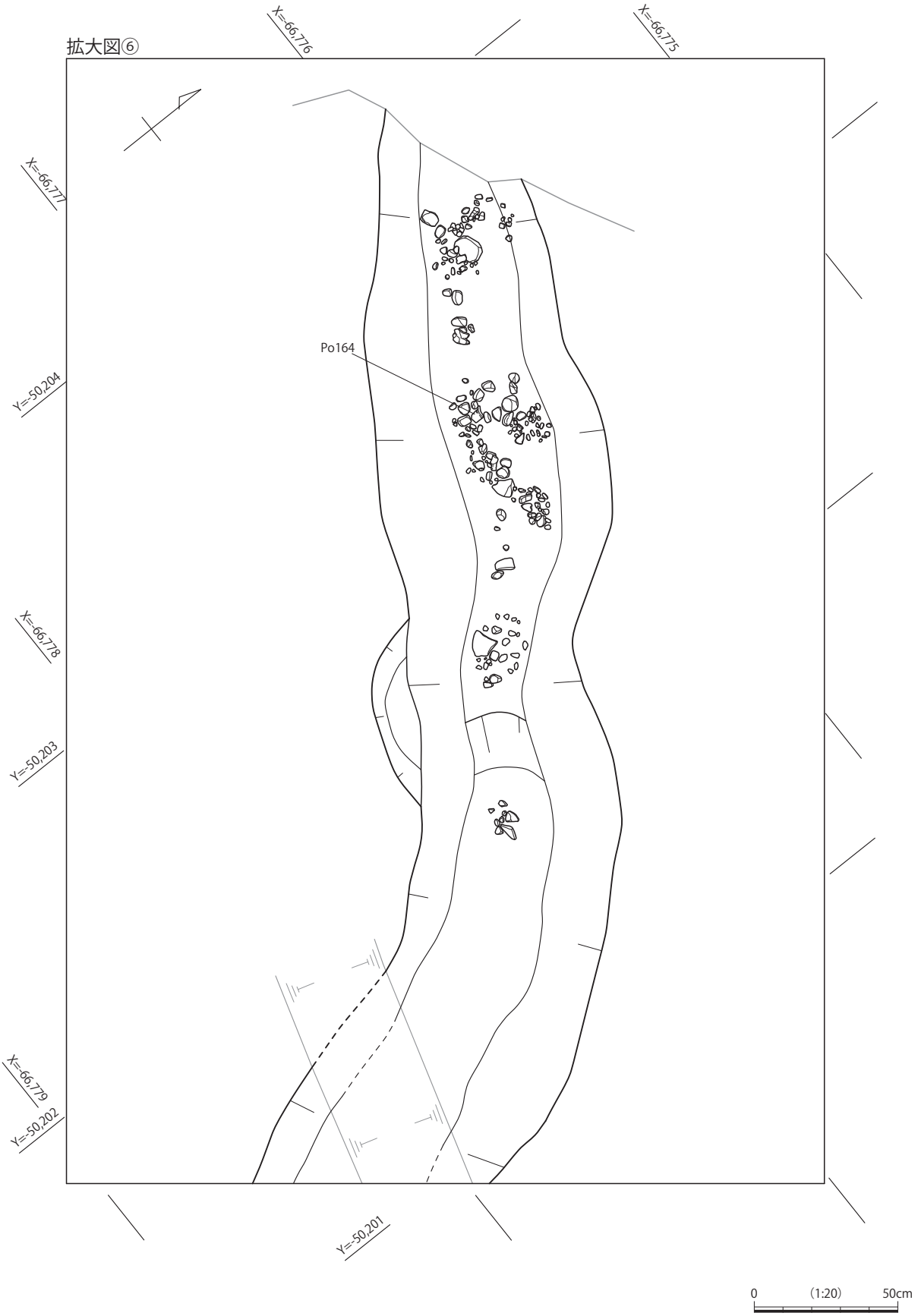
第 207 図　51 道路拡大図（３）



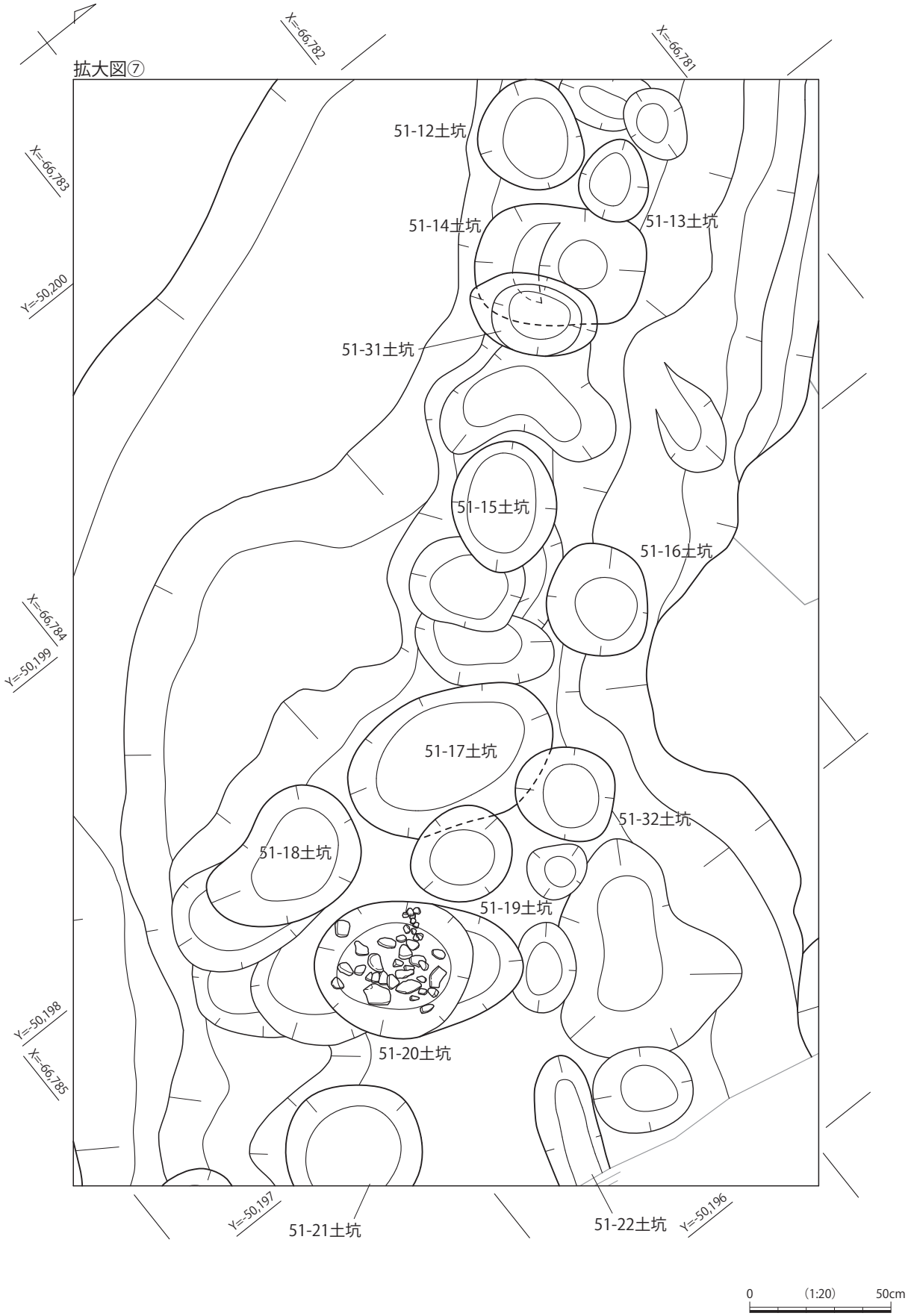
第 208 図　51 道路拡大図（４）



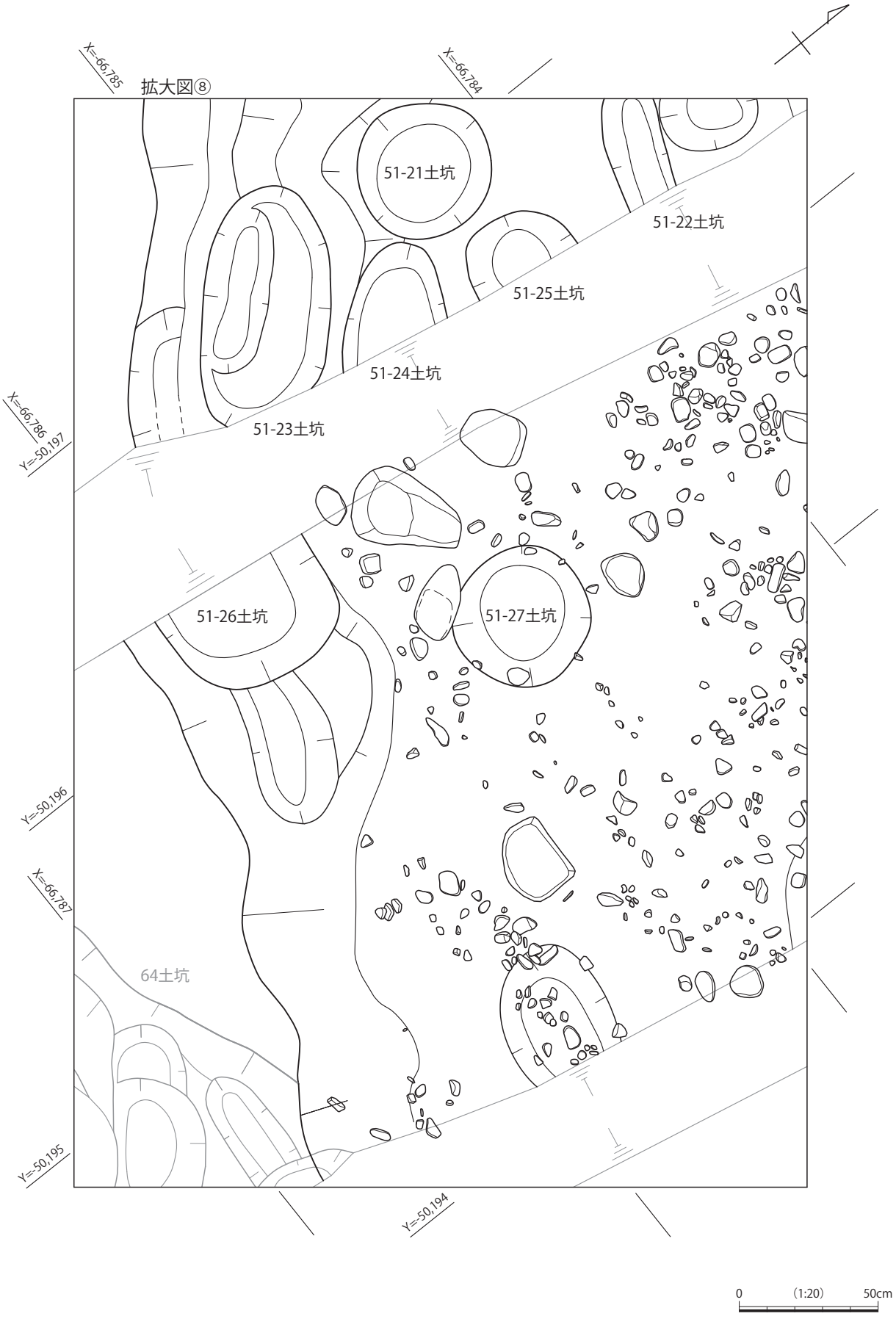
第 209 図　51 道路拡大図（５）



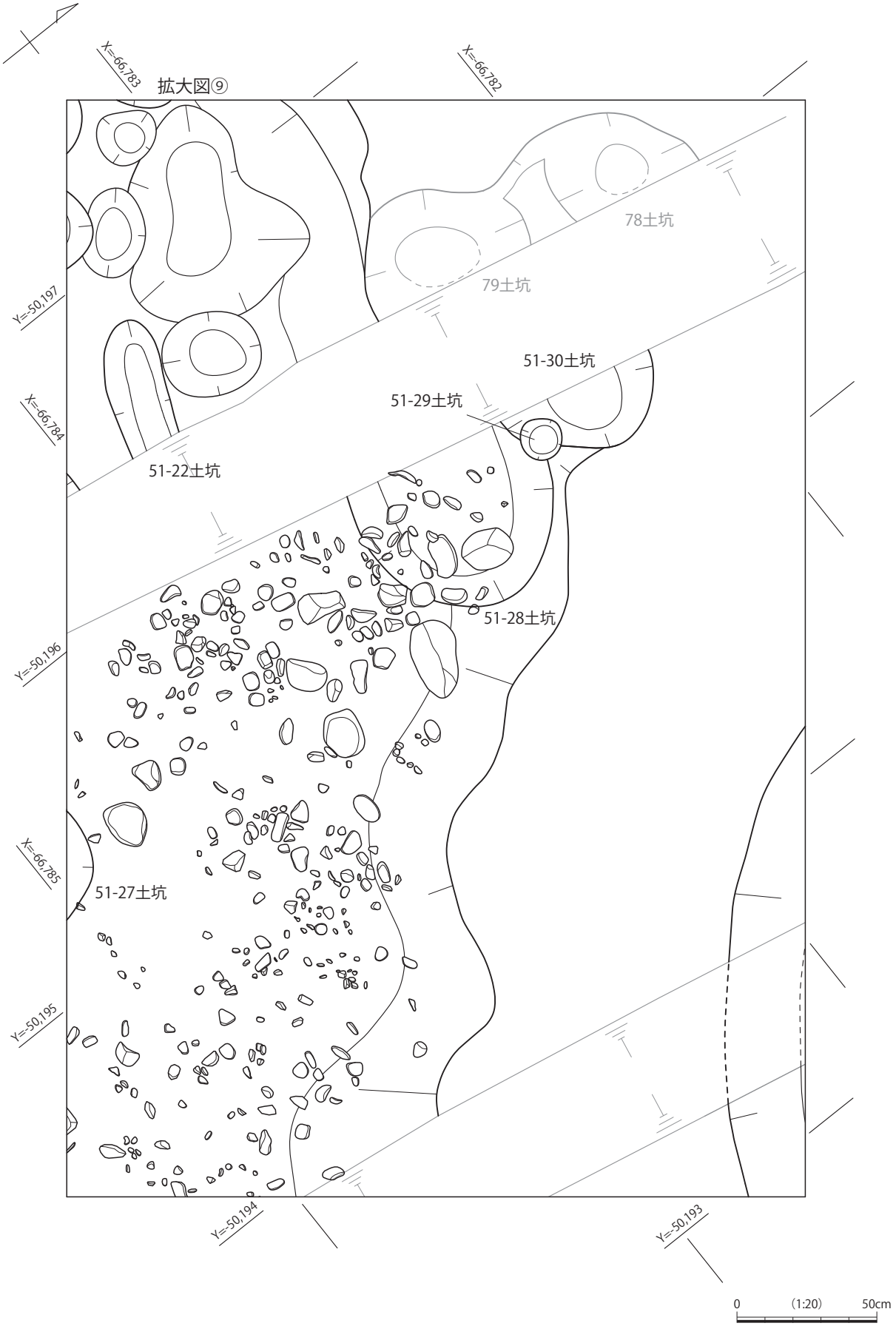
第 210 図　51 道路拡大図（6）



第 211 図　51 道路拡大図（7）



第 212 図　51 道路拡大図（８）



第 213 図　51 道路拡大図（９）

象となるものは無かった。

51-6 土坑は、不整形の形状で、底部はほぼ平坦状である。主軸方向は N-47° -E である。想定される規模は、長軸 0.62m、短軸 0.44m、検出面からの深さは 0.19m である。上部を 51-35 土坑に切られる。埋土は４層に分層でき、このうち、１・２層は掘り込まれていると判断した。西側底部直上に小礫が密に存在していた。遺物としては埋土中から土器・土製品、布目を持つ瓦、鉄滓が出土している。このうち、須恵器 Po174 を図化した。なお Po174 は 51-7 土坑出土遺物と接合した。

51-7 土坑は、楕円形の形状で、底部は平坦状である。主軸方向は N-48° -E である。規模は、長軸 0.92m、短軸 0.49m、検出面からの深さは最大 0.19m である。51-33・34 土坑を切る。埋土は４層に分層でき、このうち、底部直上に堆積する４層には礫等が多く存在した。なお、この土坑の検出面近くで割れ面を持つ比較的大型の礫を４点検出土したが、それらの礫が 51-7 土坑に伴うものかどうかを明確にすることはできなかった。遺物としては埋土中から土器、布目を持つ瓦、鉄滓が出土している。このうち、51-６土坑出土遺物と接合した須恵器 Po174、平瓦 CP27 を図化した。

51-8 土坑は、円形の形状で、底部はやや湾曲する。規模は、長軸 0.25m、短軸 0.23m、検出面からの深さは最大 0.05m である。道路東側側面がやや段状になった箇所に存在しており、他の多くの土坑とは時期を異にしている可能性が高い。埋土は黒色の砂～細砂混じりシルトを主とする単層であるが、底部直上に礫等が存在した。遺物としては埋土中から土器、布目を持つ瓦が出土している。このうち、須恵器 Po160 を図化した。

51-9 土坑は、楕円形の形状で、底部はやや湾曲する。主軸方向は N-62° -E である。規模は、長軸 0.41m、短軸 0.26m、検出面からの深さは最大 0.03m である。埋土は２層に分層できる。遺物は出土していない。

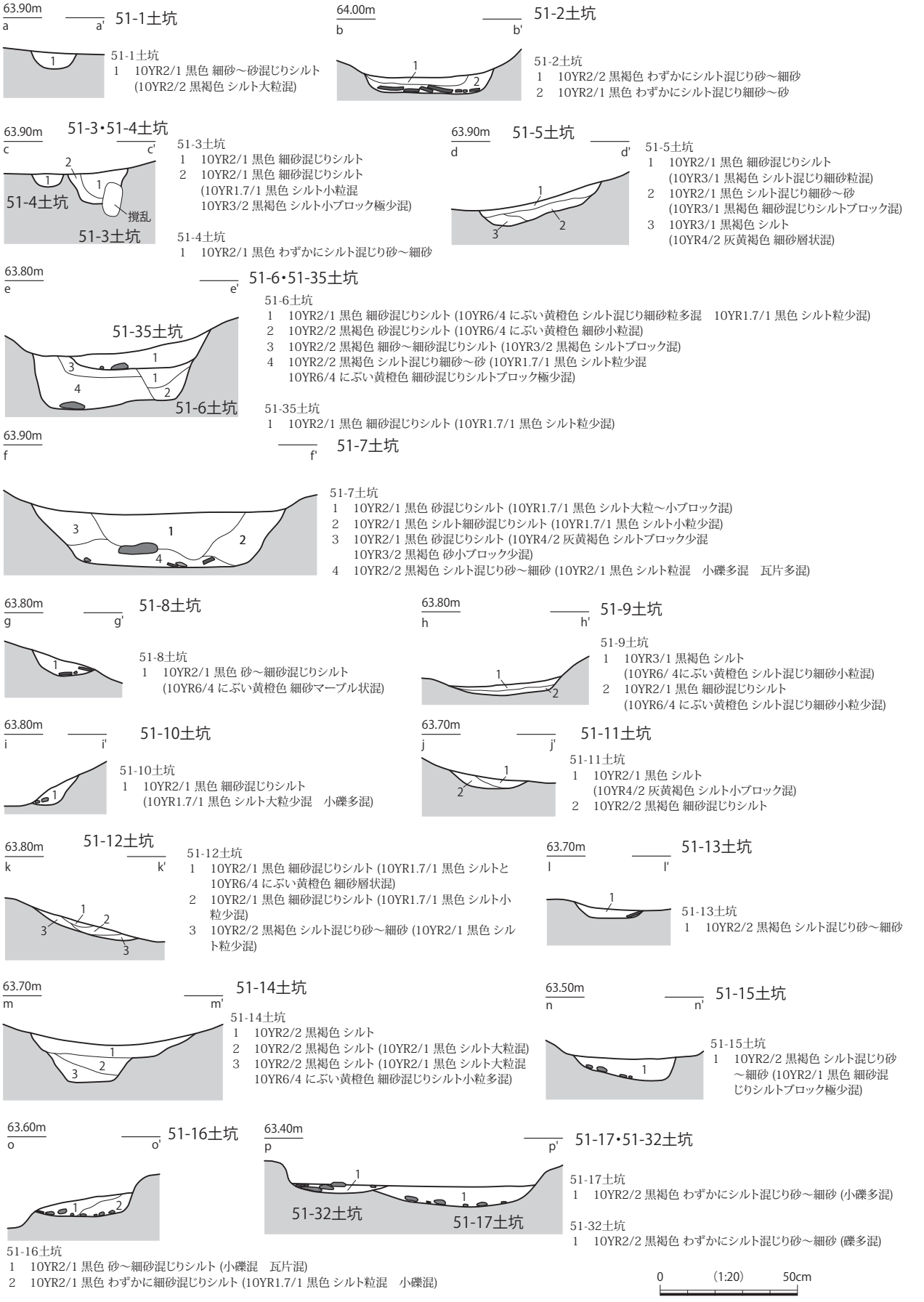
51-10 土坑は、楕円形の形状で、底部はほぼ平坦である。規模は、長軸 0.17m、短軸 0.15m、検出面からの深さは最大 0.05m である。埋土は黒色の細砂混じりシルトを主とする単層であるが、底部直上に小礫等が多数存在した。遺物としては埋土中から土器、鉄滓が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

51-11 土坑は、楕円形の形状で、底部はほぼ平坦である。主軸方向は N-84° -E である。規模は、長軸 0.28m、短軸 0.20m、検出面からの深さは最大 0.04m である。埋土は２層に分層できる。遺物は出土していない。

51-12 土坑は、円形の形状で、底部は平坦状であるが、東側に向けて深くなる。規模は、長軸 0.39m、短軸 0.36m、検出面からの深さは最大 0.03m である。埋土は３層に分層できる。遺物は出土していない。

51-13 土坑は、涙滴状の形状で、底部はほぼ平坦である。主軸方向は N-31° -W である。規模は、長軸 0.28m、短軸 0.24m、検出面からの深さは最大 0.03m である。51-14 土坑とわずかに切り合うが、その先後関係は不明である。埋土は黒褐色のシルト混じり砂の単層である。遺物としては埋土中から土器、布目を持つ瓦、鉄滓が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

51-14 土坑は、楕円形の形状で、底部は平坦状であるが、北側に向けて深くなる。主軸方向は N-45° -E である。規模は、長軸 0.61m、短軸 0.43m、検出面からの深さは最大 0.14m である。51-31 土坑に切られる。また、51-13 土坑とわずかに切り合うが、その先後関係は不明である。埋土は３層に分層できるが、いずれも黒褐色のシルトを主とする層である。遺物は出土していない。



第 214 図　51 道路土坑断面図（1）

51-15 土坑は、楕円形の形状で、底部はほぼ平坦であるが、南側に向けて深くなる。主軸方向は N-48° -W である。規模は、長軸 0.46m、短軸 0.37m、検出面からの深さは最大 0.08m である。埋土は黒褐色のシルト混じり砂を主とする単層であるが、底部直上に小礫等が存在した。遺物としては埋土中から土器、布目を持つ瓦が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

51-16 土坑は、円形の形状で、底部はほぼ平坦である。主軸方向は N-40° -W である。規模は、長軸 0.39m、短軸 0.36m、検出面からの深さは最大 0.07m である。埋土は２層に分層できる。共に黒色のシルト混じり砂を主とする層であるが、底部直上に小礫等が密に存在した。遺物としては埋土中から土器、布目を持つ瓦、石器、鉄滓が出土している。このうち、平瓦 CP24 を図化した。

51-17 土坑は、楕円形の形状で、底部はゆるく湾曲する。主軸方向は N-12° -E である。規模は、長軸 0.76m、短軸 0.47m、検出面からの深さは最大 0.07m である。51-32 土坑に切られる。埋土は黒褐色のシルト混じり砂を主とする単層であるが、底部直上に小礫等が密に存在した。遺物としては埋土中から土器、布目を持つ瓦、石器、鉄器が出土している。このうち、須恵器 Po175、平瓦 CP20 を図化した。Po175 は 51-32 土坑出土遺物と接合した。

51-18 土坑は、不整な楕円形の形状で、底部はゆるく湾曲する。主軸方向は N-9° -E である。規模は、長軸 0.58m、短軸 0.39m、検出面からの深さは最大 0.10m である。埋土は２層に分層できる。１層は黒色のシルトを主とする層、２層は黒褐色の細砂混じりシルトを主とする層である。遺物としては埋土中から布目を持つ瓦、石器が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

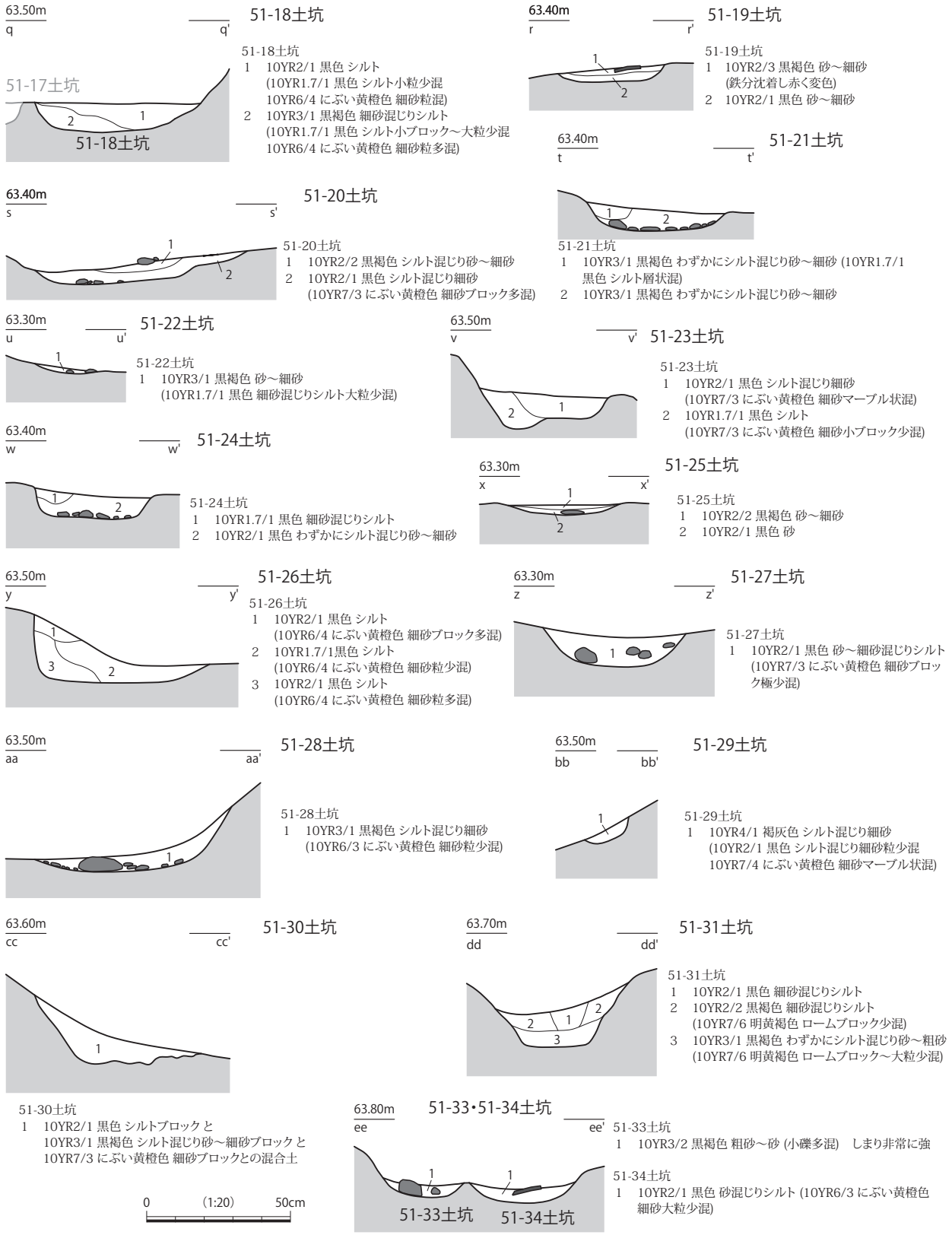
51-19 土坑は、楕円形の形状で、底部はほぼ平坦である。主軸方向は N-17° -E である。規模は、長軸 0.37m、短軸 0.32m、検出面からの深さは最大 0.04m である。埋土は２層に分層できる。１層は黒褐色の砂層、２層は黒色の砂層である。底部直上に小礫等が存在した。遺物としては１層から布目を持つ瓦、埋土中から鉄滓が出土している。このうち、平瓦 CP22 を図化した。

51-20 土坑は、楕円形の形状で、北東側が段状を呈す。底部はほぼ平坦である。主軸方向は N-40° -E である。規模は、長軸 0.74m、短軸 0.48m、検出面からの深さは最大 0.06m である。埋土は２層に分層できる。１層は黒褐色のシルト混じり砂層、２層は黒色のシルト混じり細砂を主とする層である。埋土中に礫等が多く存在した。遺物としては埋土中から土器、布目を持つ瓦、鉄滓が出土している。このうち、須恵器 Po165 を図化した。

51-21 土坑は、円形の形状で、底部はゆるく湾曲する。規模は、長軸 0.51m、短軸 0.49m、検出面からの深さは最大 0.07m である。埋土は２層に分層できる。両層とも黒褐色のシルト混じり砂を主とする層である。底部直上に小礫等が密に存在した。遺物としては埋土中から土器、布目を持つ瓦が出土している。このうち、平瓦 CP26 を図化した。

51-22 土坑は、暗渠溝によって東側を削平されている。残存部の形状は長楕円形で、底部はゆるく湾曲する。主軸方向は N-66° -W である。規模は、長軸最大 0.45m、短軸 0.21m、検出面からの深さは最大 0.01m である。埋土は黒褐色の砂を主とする単層である。底面直上に小礫が密に存在した。遺物としては埋土中から土器が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

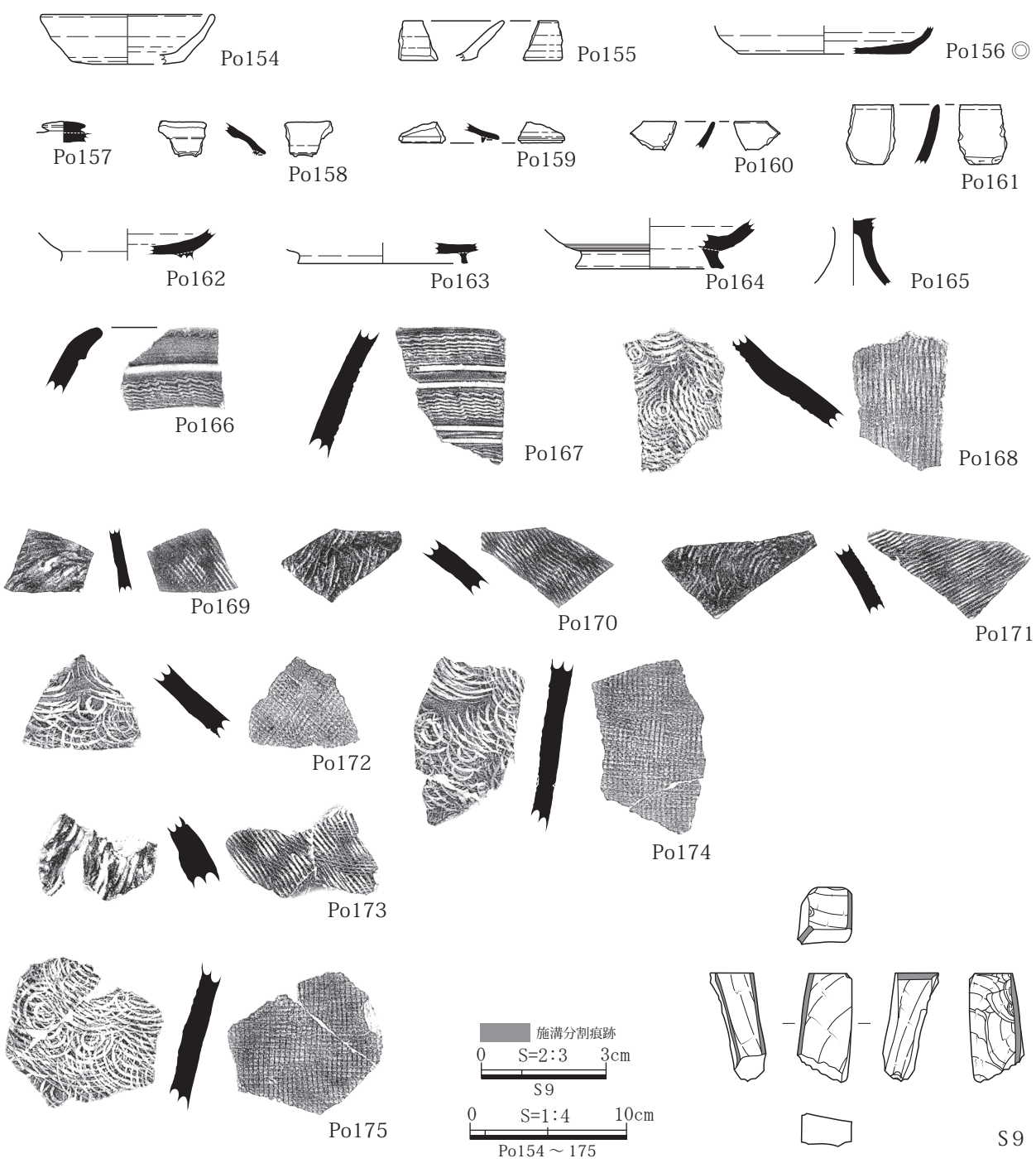
51-23 土坑は、暗渠溝によって南東端をわずかに削平されている。残存部の形状は楕円形で、底部は歪である。主軸方向は N-49° -W である。規模は、長軸最大 0.80m、短軸 0.46m、検出面からの深さは最大 0.12m である。埋土は２層に分層できる。１層は黒色のシルト混じり細砂に基盤層であるⅤ層土がマーブル状に混じる層で、人為的な撹拌が認められる。２層は黒色のシルトを主とする層



第 215 図　51 道路土坑断面図（２）

である。遺物は出土していない。

51-24 土坑は、暗渠溝によって南東側を削平されている。残存部の形状は楕円形で、底部はほぼ平坦である。主軸方向は N-47° -W である。規模は、長軸最大 0.42m、短軸最大 0.36m、検出面からの深さは最大 0.08m である。埋土は２層に分層できる。１層は黒色の細砂混じりシルト層、２層は

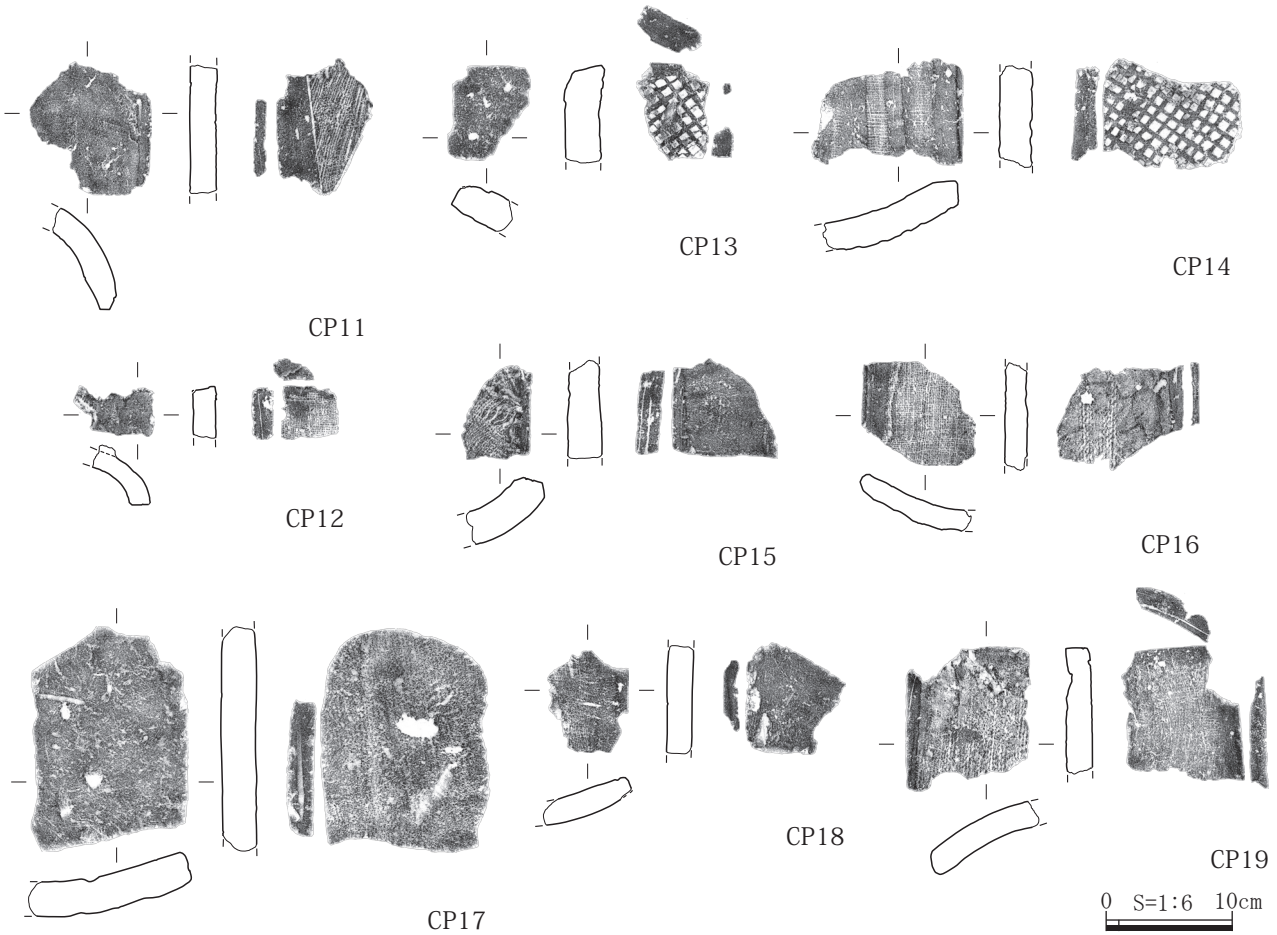


第 216 図　51 道路出土遺物

黒色のシルト混じり砂層である。底面直上に小礫が存在した。遺物は出土していない。

51-25 土坑は、暗渠溝によって東側を削平されている。残存部の形状は楕円形で、底部はゆるく湾曲する。主軸方向は N-78° -W である。規模は、長軸 0.41m、短軸最大 0.22m、検出面からの深さは最大 0.03m である。埋土は２層に分層できる。１層は黒褐色の砂層、２層は黒色の砂層である。遺物は出土していない。

51-26 土坑は、暗渠溝によって西側を削平されている。残存部の形状は隅丸方形で、底部はほぼ平坦である。主軸方向は N-84° -W である。規模は、長軸 0.63m、短軸最大 0.40m、検出面からの深さは最大 0.16m である。埋土は３層に分層できる。いずれも黒色のシルトを主とする層である。遺物は出土していない。



第 217 図　51 道路出土瓦（１）

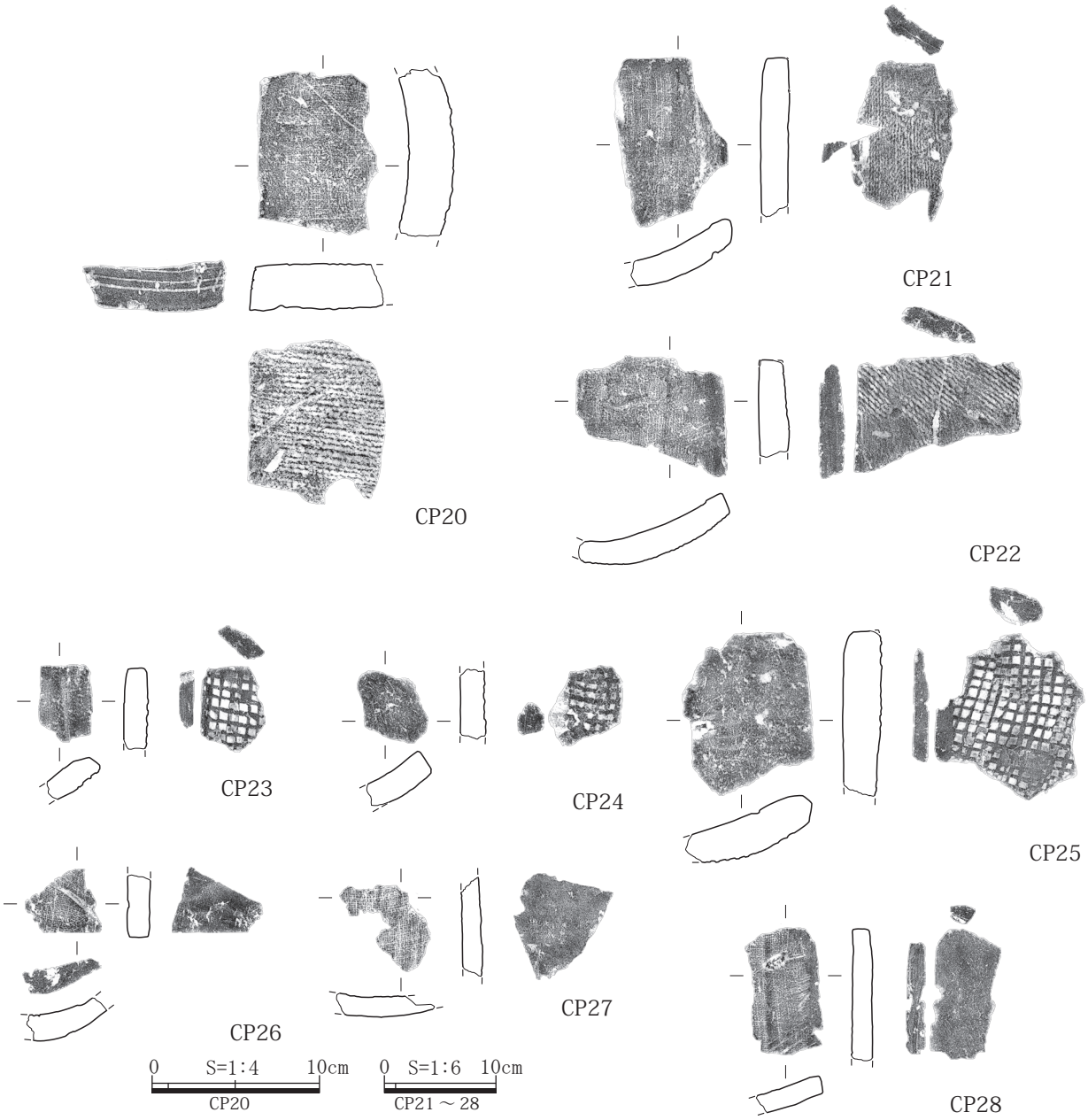
51-27 土坑は、他の土坑とはやや離れている。円形の形状で、底部はゆるく湾曲する。規模は、長軸 0.49m、短軸 0.47m、検出面からの深さは最大 0.10m である。埋土は黒色の砂～細砂混じりシルトを主とする単層である。埋土中に小礫が多く存在した。遺物としては埋土中から土器、布目を持つ瓦が出土している。このうち、平瓦 CP25 を図化した。

51-28 土坑は、暗渠溝によって西側を削平されている。残存部の形状は円形で、底部はほぼ平坦である。主軸方向は N-72° -W である。規模は、長軸 0.69m、短軸最大 0.58m、検出面からの深さは最大 0.06m である。北側を 51-29 土坑・51-30 土坑に切られる。埋土は黒褐色のシルト混じり細砂を主とする単層であるが、底部直上に小礫や礫が密に存在した。遺物は出土していない。

51-29 土坑は、円形の形状で、底部はほぼ平坦であるが、西側に向けて深くなる。規模は、長軸 0.15m、短軸 0.14m、検出面からの深さは最大 0.04m である。51-28 土坑・51-30 土坑を切る。埋土は褐灰色のシルト混じり細砂を主とする単層である。遺物は出土していない。

51-30 土坑は、暗渠溝によって西側を削平されている。残存部の形状は円形で、底部は細かな凹凸があり歪である。規模は、長軸最大 0.62m、短軸 0.25m、検出面からの深さは最大 0.11m である。51-28 土坑を切り、51-29 土坑に切られる。埋土は黒色のシルトと黒褐色のシルト混じり砂とにぶい黄橙色細砂の混合土である。遺物としては埋土中から土器が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

51-31 土坑は、楕円形の形状で、底部はほぼ平坦である。主軸方向は N-50° -E である。規模は、長軸 0.46m、短軸最大 0.28m、検出面からの深さは最大 0.12m である。51-14 土坑を切る。埋土は



第 218 図　51 道路出土瓦（２）

３層に分層できる。このうち、１層および２層は、黒色および黒褐色の細砂混じりシルトを主とする層であるが、下層に位置する３層は黒褐色のわずかにシルトが混じる砂を主とする層である。遺物としては埋土中から土器、布目を持つ瓦、鉄滓が出土している。このうち、平瓦 CP23 を図化した。

51-32 土坑は、円形の形状で、底部はゆるく湾曲する。主軸方向は N-53° -E である。規模は、長軸 0.35m、短軸 0.32m、検出面からの深さは最大 0.03m である。51-17 土坑を切る。埋土は黒褐色のシルト混じり砂を主とする単層であるが、底部直上に小礫や礫が密に存在した。遺物としては埋土中から土器、布目を持つ瓦が出土している。このうち、須恵器 Po175 を図化した。この Po175 は 51-17 土坑出土遺物と接合した。

51-33 土坑は、ほぼ円形の形状で、底部はゆるく湾曲する。規模は、長軸 0.28m、短軸 0.26m、検出面からの深さは最大 0.04m である。51-7 土坑に切られる。埋土は黒褐色の砂を主とする単層で、締まりが非常に強い。埋土中に小礫が密に存在した。遺物としては埋土中から土器、布目を持つ瓦が

出土しているが、図化対象となるものは無かった。

51-34 土坑は、楕円形の形状で、底部はゆるく湾曲する。主軸方向は N-40° -E である。規模は、長軸 0.36m、短軸 0.27m、検出面からの深さは最大 0.04m である。51-7 土坑に切られる。埋土は黒色の砂混じりシルトを主とする単層であるが、埋土中に小礫や礫が存在した。遺物としては埋土中から布目を持つ瓦が出土しており、平瓦 CP28 を図化した。

51-35 土坑は、楕円形の形状で、底部はほぼ平坦状である。主軸方向は N-30° -W である。想定される規模は、長軸 0.62m、短軸 0.56m、検出面からの深さは 0.12m である。下部に位置する 51-6 土坑を切る。調査時には 51-6 土坑と 51-35 土坑は１つの遺構と考えていたが、検討の結果、51-35 土坑が 51-6 土坑を切っていると判断を変更した。埋土は黒色の細砂混じりシルトの単層である。埋土中に礫が存在していた。遺物は出土していない。

51 道路から出土した遺物の概要を以下に述べる。

Po154 ・ 155 は土師器で、Po154 は坏、Po155 は皿と考えられる。共に底部から口縁部に向けて直線的に外傾する。Po156 ～ 175 は須恵器である。Po157 は潰れてボタン状になった擬宝珠状のつまみが付く坏蓋。Po158 ・ 159 はかえりの付く坏蓋。Po156 は底部を回転ヘラ切りする平底の皿で焼成は悪い。Po162・163 は高台の付く底部で坏と考えられる。Po164 も高台の付く底部であるが、カキメが施されており、壺の可能性が考えられる。Po161 はわずかに内湾して立ち上がる皿状の形状を呈し、高坏の坏部と考えられるもの。Po166・167 は複線波状文が施された甕と考えられる口縁部である。接合はしないが一致する特徴が多く、同一個体の可能性もある。Po168 ～ 173 の６点は甕の体部片である。いずれも、外面には平行叩き痕、内面には円形状の当て具痕が残る。

CP11 ～ 19 の９点は瓦である。CP11 と CP12 は丸瓦で、共に凹面には布目痕が残り、凸面はナデ調整が施される。CP12 の右側面は切断後に２次調整として凸面側をヘラケズリによって調整している。CP13 ～ 18 の６点は平瓦である。凸面の調整には格子叩きを施すもの（CP13 ・ 14)、縄目叩きを施すもの（CP16・17)、ナデ調整を施すもの（CP15・18）が存在する。凹面にはいずれも布目痕。２次調整としては、CP13 は狭端面の凹凸両面と左側面凹面にヘラケズリ、CP15 は右側面凹凸両面にヘラケズリ、CP16 は左側面凹凸両面にヘラケズリ、CP14 は右側面凹面にヘラケズリ、CP18 は右側面凹面にヘラケズリが施されている。CP19 は熨斗瓦である。凸面は縄目叩きが施され、凹面には布目痕が残る。２次調整として、狭端面の凹面と左側面凹凸両面にヘラケズリが施されている。なお、風化のため不明瞭ではあるが CP17 右側面に２次調整は認めにくい。

S９は碧玉の直方体材である。施溝痕が認められる。

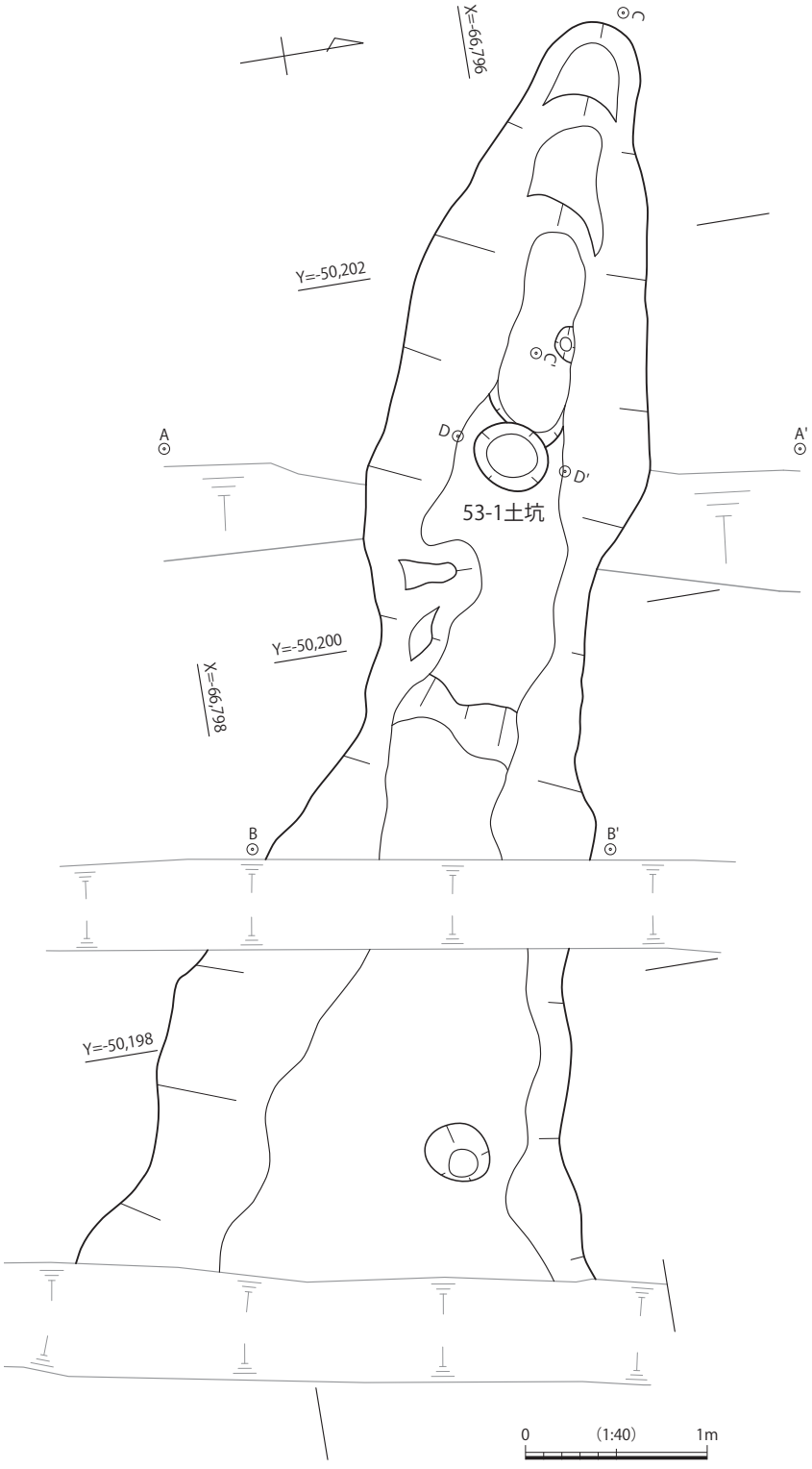
鍛冶関連遺物として、埋土内から羽口先端部の CP78・79、椀形鍛冶滓 F28 ～ 37 が出土した。

51 道路底面の波板状土坑内から出土した遺物が存在する。Po160・165・174・175 の４点は須恵器である。Po160 はわずかに内湾して立ち上がる皿状の形状で、坏と考えられるもの。Po165 は小型の高坏脚部である。Po174・175 は甕の体部片で、共に外面には平行叩き痕、内面には円形状の当て具痕が残る。

CP20 ～ 28 の９点は瓦である。CP20 は瓦当に三重の弧文を施す軒平瓦である。弧文間の幅は上段が約６mm、下段が約４mm、弧文の深さは約１mm で断面Ｖ字状を呈する。弧文は平行していることから、型挽きによって描かれたと考えられる。凹面には布目痕が残り、凸面は縄目叩きを施す。顎は直線顎である。石塚廃寺東遺跡Ｐ３区 CP76 と同一文様と考えられる。CP21 ～ 28 は平瓦である。

凸面の調整には縄目叩きを施すもの（CP21・22）、格子叩きを施すもの（CP23 ～ 25）、ナデ調整を施すもの（CP26 ～ 28）が存在する。凹面はCP24とCP25が摩滅のため調整が不明確であるが、他の６点はいずれも布目痕が残る。２次調整としては、CP21 ～ 23は狭端面の凹面と右側面凹面にヘラケズリ、CP28は右側面凹面にヘラケズリ、CP25は狭端面の凹面と右側面凸面にヘラケズリ、CP26は広端面の凸面にわずかにヘラケズリが施されている。なお、風化のため不明瞭ではあるがCP24右側面に２次調整は認めにくい。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

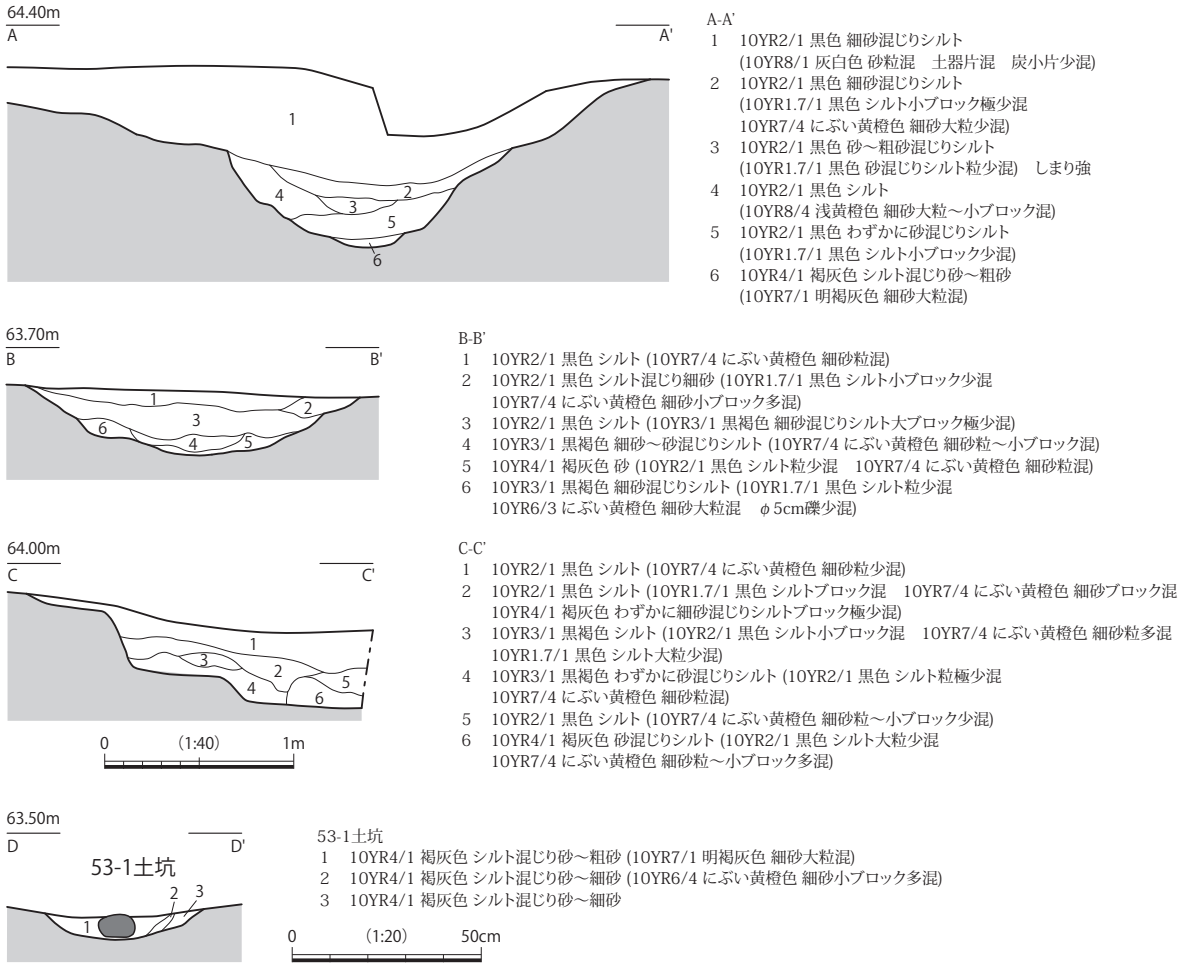


第 219 図　53 道路

53 道路（第 149･219 ～ 221 図、第 53・73・92・95 表、図版 76・149）

２区西側の7a-8B-10j、8C-10aグリッドにおいて、主にⅢ層上面で検出した。なお、上部が圃場整備に伴う削平を受けているが、特に東側は削平が激しくⅤ層上面での検出となった。本来の遺構面は不明である。主軸方向はN-71°-Wである。形状はほぼ直線状で、西から東方向へ下っている。規模は残存最大長7.1m、最大幅2.6m、検出面からの深さは最大0.40mである。

埋土は黒色のシルトもしくはわずかに細砂を含むシルトを主とする堆積土であり、基本層序のⅢ層と同一と判断できる土で人為的な埋め戻しの痕跡は認められず、Ⅲ層土の流れ込みによる自然堆積と判断される。一方、底面近くには黒褐色ないし褐灰色のシルトを含む砂を主とする堆積土が存在する。他の堆積土と明確に異なる土であり、



第 220 図　53 道路土層断面図

人為的に持ち込まれている可能性が高い。この堆積土の中から径５～10cm 程度を主とする多数の円礫が出土した。意図的に混入されたことが想定できる。必ずしも締まりが良いわけではないが、遺構の基盤層であるＶ層のソフトロームは水分を含むと非常に滑りやすいため、滑り防止用に投入された砂質土の混和材的な用途があったと考えられる。

底面から付属する小土坑を１基検出した。53-1 土坑は、楕円形状の形状で、底部はゆるく湾曲する。主軸方向は N-28° -E である。規模は、長軸 0.42m、短軸最大 0.35m、検出面からの深さは最大 0.05m である。埋土は３層に分層できる。いずれも褐灰色のシルト混じり砂を主とする層である。遺物としては埋土中から土器・土製品・瓦・鉄滓が出土している。このうち、須恵器 Po176、土製品 CP29、瓦 CP30・31 を図化した。

Po176 は須恵器で、断面方形状の低い高台が付く底部である。皿の可能性が考えられる。CP29 は土師質の土馬の脚である。

CP30・31 は平瓦である。共に凸面の調整はナデ調整であり、凹面には布目痕が残る。２次調整として、CP30 は狭端面の凹面と右側面凹面にヘラケズリ、CP31 は右側面凹面にヘラケズリを施している。

また、写真掲載のみではあるが、上げ底状を呈する弥生土器甕底部の Po844 が出土している。

本遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

第 221 図　53 道路遺物出土状況図、出土遺物

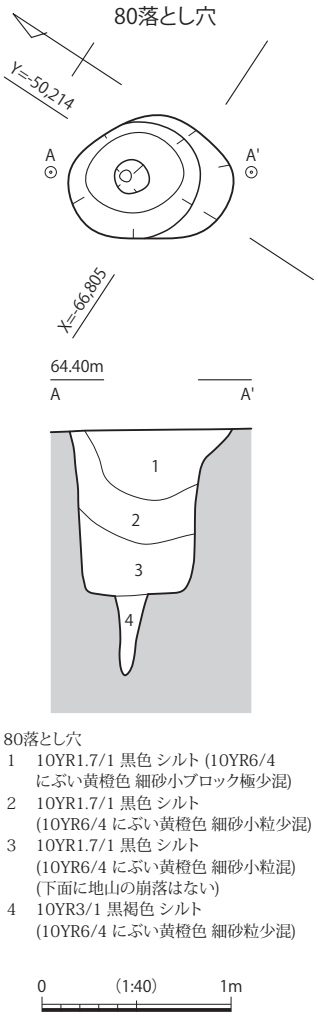
第３項　第２遺構面の調査（古墳時代以前の遺構と遺物）

（1）落とし穴

80 落とし穴（第 222・223 図、第 52 表、図版 72）

２区南西隅の 7a-9C-1b グリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した。形状は検出面では不整形であるが、土坑の中位を見るとほぼ楕円形であり、本来は楕円形の土坑の上端部南東側が崩落等のために広がって不整形になったことが分かる。底部は平坦状である。底面中央に底面ピットが１基存在する。土坑の規模は、長軸 0.87m、短軸 0.65m、検出面からの深さは最大 0.88m、底面ピットは円形で、

第 222 図　第２遺構面全体図



第 223 図　80 落とし穴

径 0.18m、深さ 0.42mである。ただし、本来の土坑規模は、長軸 0.70m、短軸 0.60m 程度である。埋土は４層に分層でき、このうち１～３層が土坑本体の埋土で、黒色のシルトを主とする堆積である。周囲からの流れ込みによって堆積したものである。４層が底面ピットの埋土であり、黒褐色のシルトを主とする層である。底面ピットを持つ特徴的な形態から落とし穴と考えられる。遺物の出土が無いうえ、切り合い等によって時期を絞り込むこともできないが、鳥取県内で出土する同様の形態を持つ「落とし穴」と考えられる土坑は、縄文時代の遺構である可能性が想定されていることから、この土坑も縄文時代の遺構の可能性が高いと考えられる。

（２）土坑

100 土坑（第 222・224 図、第 48・73 表、図版 72・158）

２区南西寄りの 7a-8C-10a・ 9C-1a グリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した。形状はほぼ円形で、底部は平坦状である。規模は、長軸 0.95m、短軸 0.90m、検出面からの深さは最大 0.30mである。埋土は上下の２層に分層でき、上層は黒色のシルトを主とする層、下層は灰黄褐色の細砂混じりシルトを主とする層である。用途は不明である。遺物には底面から浮いた状態ではあるが弥生土器片が出土している。出土土器から弥生時代の土坑と考えられる。

Po177 は弥生土器である。胴部上半の破片で口頸部を欠損しているが甕と考えられる。内外面ともナデ調整が基本であるが、外面は下端にわずかにミガキ痕が認められる。

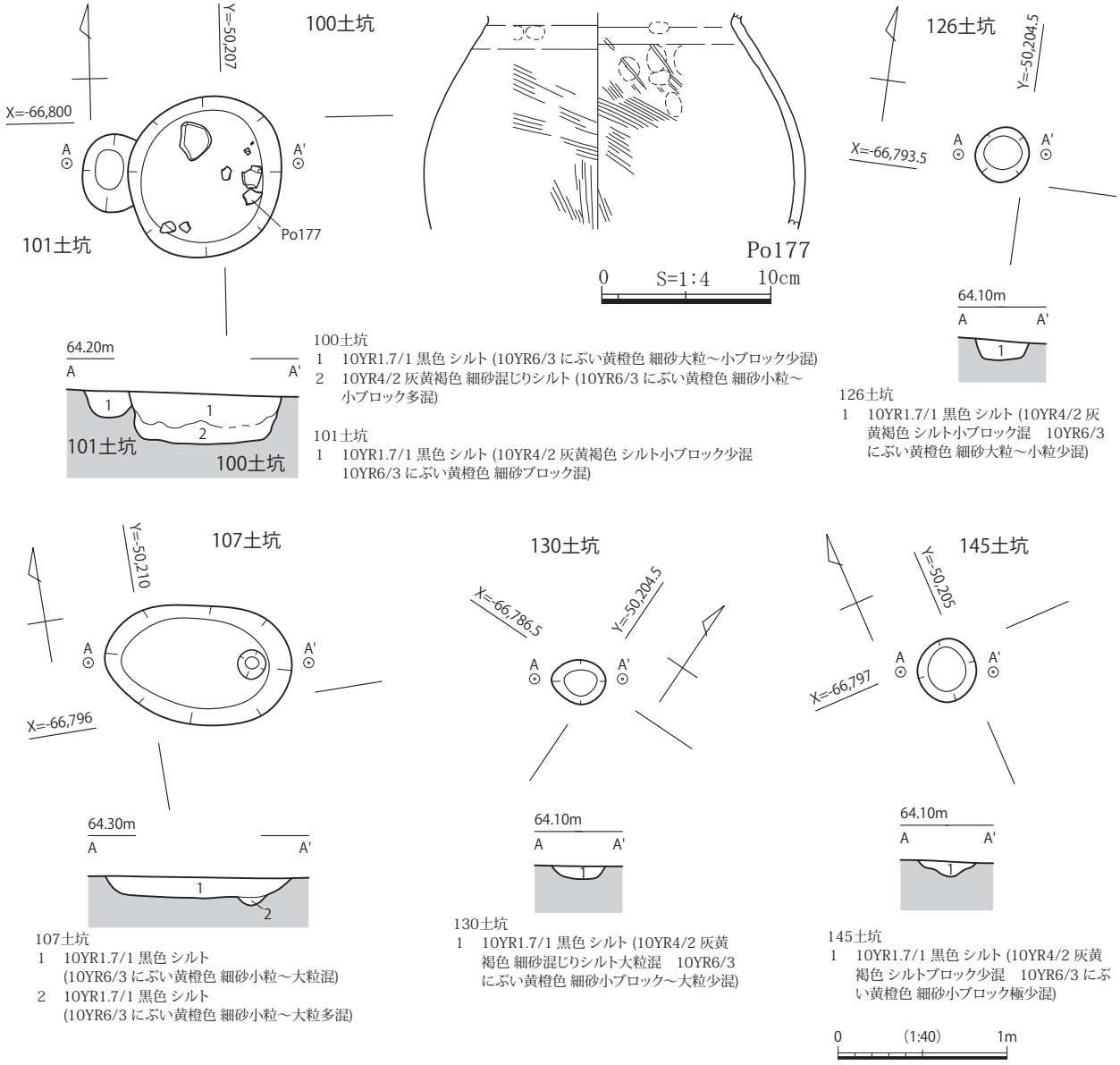
101 土坑（第 222・224 図、第 48 表、図版 72）

２区南西寄りの 7a-9C-1a グリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した。形状は楕円形状であるが、東側を 100 土坑に切られる。底部はやや湾曲する。規模は、長軸 0.46m、短軸最大 0.26m、検出面からの深さは最大 0.15mである。埋土は黒色のシルトを主とする単層である。遺物としては埋土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。弥生時代の土坑と考えられる 100 土坑に切られることから弥生時代以前の遺構と考えられる。

107 土坑（第 222・224 図、第 48 表）

２区西側の 7a-8C-10a・ 10b グリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した。形状は楕円形状である。底部は平坦であるが、東端に径 0.16m、深さ 0.05mの小穴が存在する。規模は、長軸 1.10m、短軸 0.70m、検出面からの深さは最大 0.12mである。埋土を２層に分層したが、共に黒色のシルトを主とする層であり、ほぼ類似する。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、検出層位から古墳時代以前と考えられる。



第 224 図　100・101・107・126・130・145 土坑、100 土坑出土土器

126 土坑（第 222・224 図、第 48 表）

２区西側の 7a-8C-10a グリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した。形状はほぼ円形で、底部はほぼ平坦である。規模は、長軸 0.32m、短軸 0.30m、検出面からの深さは最大 0.11m である。埋土は黒色のシルトを主とする単層である。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、検出層位から古墳時代以前と考えられる。

130 土坑（第 222・224 図、第 48 表）

２区北西寄りの 7a-8C-9a グリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した。形状はやや歪な楕円形状で、底部はほぼ平坦である。規模は、長軸 0.32m、短軸 0.26m、検出面からの深さは最大 0.07m である。埋土は黒色のシルトを主とする単層である。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、検出層位から古墳時代以前と考えられる。

145 土坑（第 222・224 図、第 48 表）

２区西側の 7a-8C-10a グリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した。形状はほぼ円形で、底部は凹凸を持つ不整形である。規模は、長軸 0.37m、短軸 0.34m、検出面からの深さは最大 0.08m である。埋土は黒色のシルトを主とする単層である。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、検出層位から古墳時代以前と考えられる。

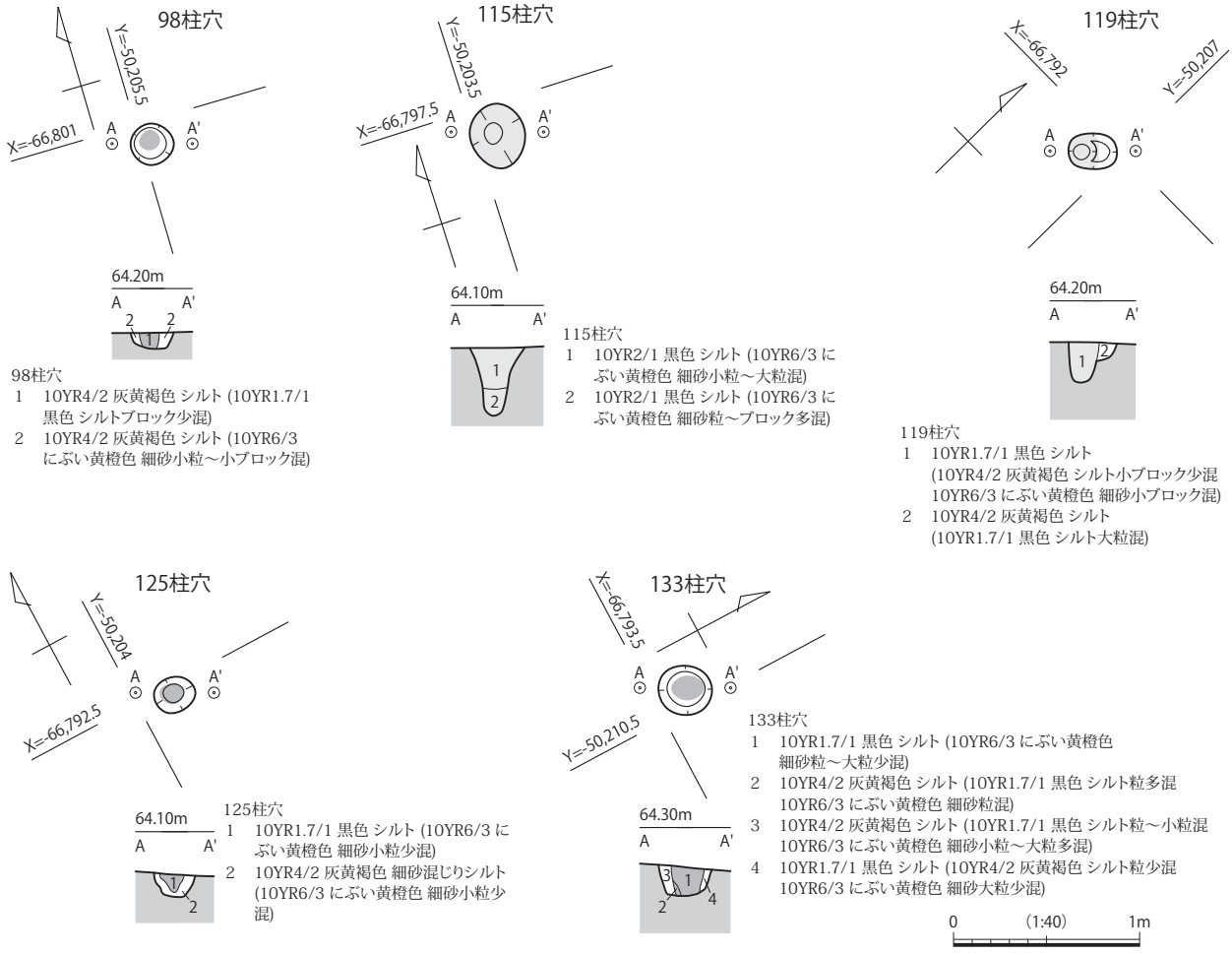
（3）柱穴・ピット

単独の柱穴５基、ピット 70 基、計 75 基を検出した。穴と判断した遺構のうち、ある程度の規模を持つものを土坑、それ以外の小穴のうちで断面に柱痕跡が認められるものなどを柱穴、用途不明なものをピットとした。

98 柱穴（第 222・225 図、第 54 表）

２区南西寄りの 7a-9C-1a グリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した。形状はほぼ円形で、底部はほぼ平坦状である。規模は、径 0.22m、検出面からの深さは最大 0.08m である。ほぼ中央に柱痕跡が存在する。埋土は２層に分けられ、１層が柱痕、２層が掘方埋め土である。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、検出層位から古墳時代以前と考えられる。



第 225 図　98・115・119・125・133 柱穴

115 柱穴（第 222・225 図、第 54 表）

２区西側の 7a-8C-10a グリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した。形状は楕円形で、底部は湾曲する。規模は、長軸 0.34m、短軸 0.29m、検出面からの深さは最大 0.36m である。柱痕跡は確認できない。柱は抜き取られたと考えられる。埋土は２層に分層でき、２層とも柱抜き取り痕に堆積した土と考えられる。埋土から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、検出層位から古墳時代以前と考えられる。

119 柱穴（第 222・225 図、第 54 表）

２区西側の 7a-8C-10a グリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した。形状は楕円形で、底部はほぼ平坦である。規模は、長軸 0.26m、短軸 0.19m、検出面からの深さは最大 0.21m である。埋土は２層に分層でき、１層は柱抜き取り痕跡、２層は掘方埋め土の痕跡と判断した。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、検出層位から古墳時代以前と考えられる。

125 柱穴（第 222・225 図、第 54 表）

２区西側の 7a-8C-10a グリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した。形状は楕円形で、底部はほぼ平坦状である。規模は、長軸 0.22m、短軸 0.19m、検出面からの深さは最大 0.12m である。ほぼ中央に柱痕跡が存在する。１層が柱痕で、２層が掘方埋め土である。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、検出層位から古墳時代以前と考えられる。

133 柱穴（第 222・225 図、第 54 表）

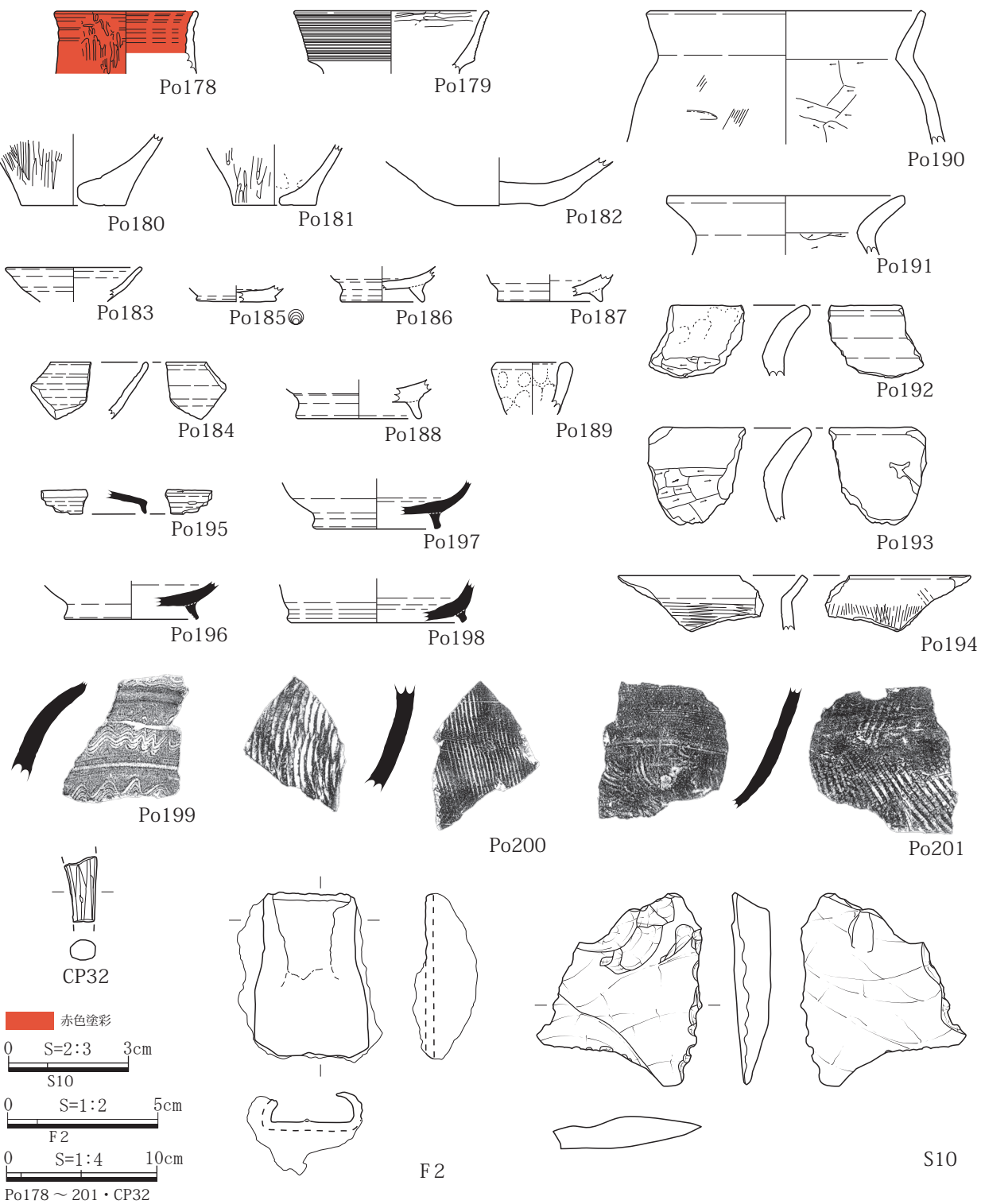
２区西側の 7a-8C-10b グリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した。形状はほぼ円形で、底部はやや湾曲する。規模は、長軸 0.28m、短軸 0.26m、検出面からの深さは最大 0.15m である。ほぼ中央に柱痕跡が存在する。１・２層が柱痕で、３・４層が掘方埋め土である。遺物としては柱痕跡土内から土器片が出土しているが、図化対象となるものは無かった。

本遺構の帰属時期は、検出層位から古墳時代以前と考えられる。

第４項　調査区内出土遺物

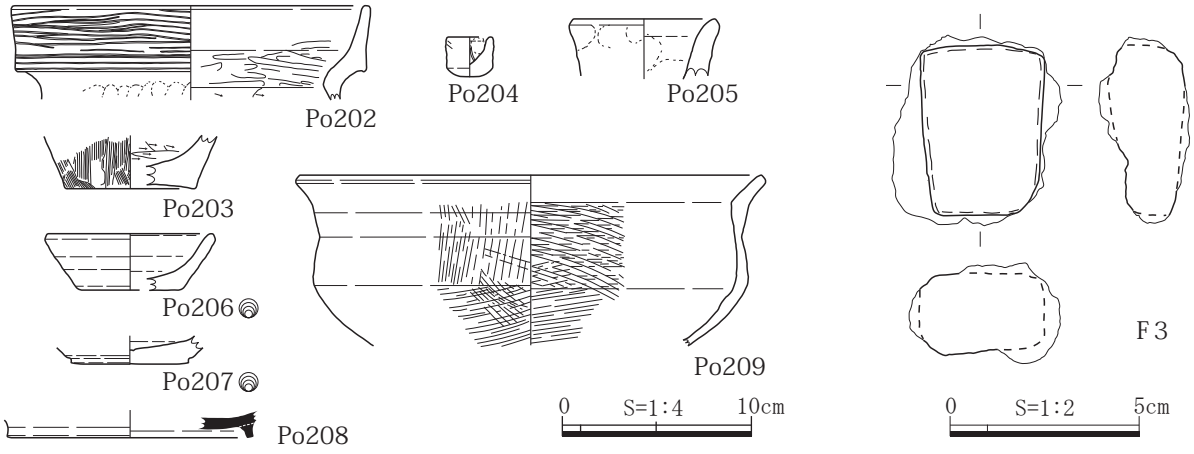
調査区内出土遺物（第 226 ～ 229・455 図、第 25・73・74・92・95・97・98・101 表、図版 158・159・324）

Po178 ～ 182 の５点は弥生土器である。Po178 はほぼ直立する口縁部で、２条の凹線とその下方に縦方向のミガキが施される。内外面とも赤色塗彩。Po179 は口縁部がやや外傾し、外面に 17 条の擬凹線文が施される。Po180 ～ 182 は平底の底部で、Po180 ・ 181 には底部中央に焼成後の穿孔が認められる。Po183 ～ 194 は土師器である。このうち、Po190 ～ 193 は甕で口頸部が「く」の字状に屈曲する。Po191 は口縁端部外面に面を持ち、外面に炭化物が多く付着する。Po184 は坏で、口縁部は直線的に外傾し、内面には成形痕である凹凸が明瞭に残る。また、内面端部近くに煤が付着しており、灯明皿として使用されたことが分かる。Po183 は器壁が薄く、口縁部がゆるく内湾する坏の可能性が考えられる。Po185 は回転糸切りされた底部、Po186 ～ 188 の３点は坏と考えられる高

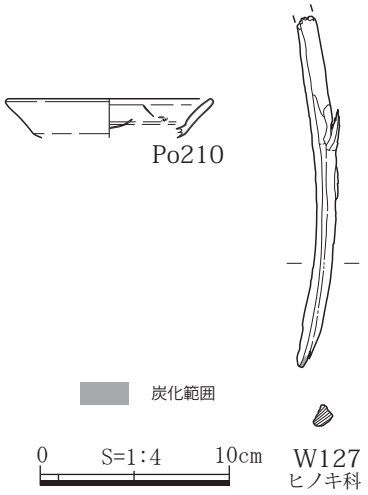


第 226 図　Ⅱｂ・Ⅱｃ層出土遺物

台を持つ底部である。Po189 は手づくね成形のミニチュア土器である。Po194 は鍋で、「く」の字状の口縁部で端部に面をもつ。体部はほぼ直立状となる。内面には横ハケ、外面体部には縦ハケが施される。Po195 ～ 201 は須恵器である。Po195 は坏蓋で、口縁部内側にかえりが付かず、口縁端部が下方にほぼ垂直に屈曲する。Po196 ～ 198 の３点は高台を持つ底部であり、いずれも坏または皿と考えられる。CP32 は須恵質で焼成は良好。表面にシャープな面取りが施されている。用途は不明であるが、埦等の把手の可能性が考えられる。Po200・201 は甕の体部片と考えられるもので、ともに



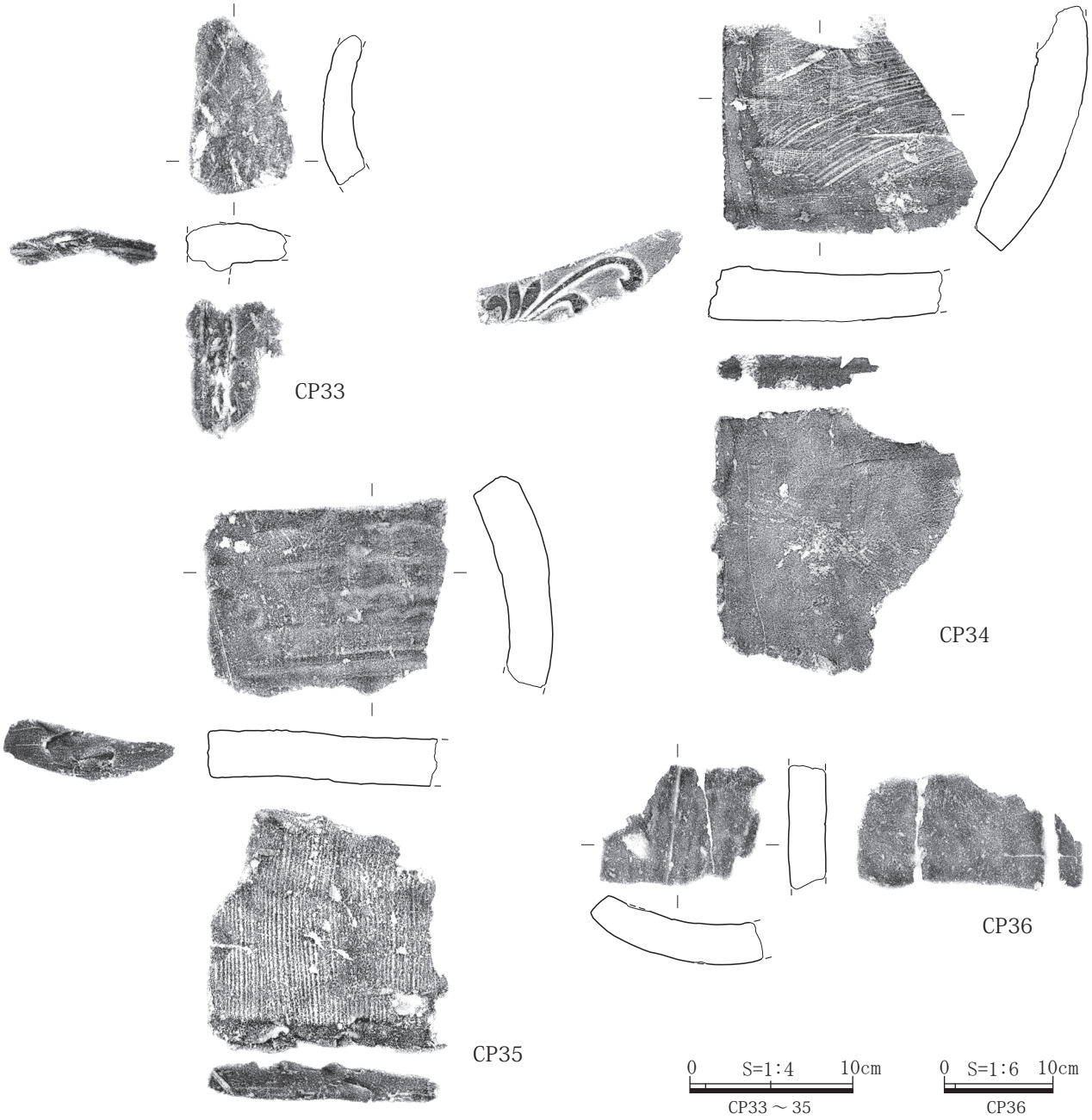
第 227 図　Ⅲ層上面出土遺物



第 228 図　調査区内出土遺物

外面には平行叩きが施され、内面には円形状の当て具痕が残るが、Po201 は内面上半に当て具痕は認められない。Po202 ・ 203 は弥生土器である。Po202 は甕で、口縁部はほぼ直立、外面には擬凹線が施される。Po203 は平底の底部である。Po204・205 は手づくね成形のミニチュア土器である。Po205 は復元口径が７cm を超える大きめのミニチュア土器で、調整も丁寧である。Po206・207 は土師器である。Po206 は坏で、口縁部はわずかに内湾しながら直線的に外傾し、底部の切り離しは回転糸切りである。Po207 は坏または皿と考えられる回転糸切りされた底部である。Po208 は須恵器の底部で、低い高台が付く。Po209 は土師器の鍋である。「く」の字形の口縁部をもち、体部下半が内側に屈曲する。器壁は薄手で、硬質である。外面の体部上半が縦ハケ、外面体部下半および内面には横・斜めハケが施される。Po210 は同安窯系青磁の皿である。口縁下部で屈曲し、内面が段状となる。内面には箆による文様がわずかに認められる。また、写真掲載のみではあるが、「く」字状に口縁部が外反する土師器甕の Po845・848、白磁碗の体部から底部片で、内外ともに施釉され、外面に飛びカンナ状のケズリが施されている Po846、青磁碗の体部で、内面見込みに圏線がめぐる Po847、須恵器壺の口縁部から頸部で、頸部に連続する工具痕が残る Po849、須恵器甕の口縁部で、頸部内面にカキメ調整が施されている Po850 も出土している。

CP33 は無文の外区と接着されたⅠ類の軒丸瓦と想定される。CP34 は軒平瓦Ⅰ類の右側で、中心飾りは無い。直線顎。凸面は工具による横ナデ、凹面は布目痕をケズリ取ろうとしている。切断後の２次調整として瓦当面および右側面は凹面側を各２回以上、瓦当面凸面も部分的にヘラケズリを行っている。凹面側のヘラケズリは、右側面後に瓦当面の順である。CP35 は軒平瓦、CP36 は平瓦である。CP35 は凸面に横方向のハケメが、凹面には模骨痕および布目痕が残る。左側面は切断後に２次調整として凸面側をヘラケズリ調整している。広端面は凹面に２次調整らしき痕跡がある。CP36 は凹凸両面とも模糊として調整が不明確であるが、凹面は砂粒の動きが残ることからケズリ調整が行われて



第 229 図　調査区内出土瓦

いる可能性が高い。凸面はナデ調整であろうか。

Ｆ２は袋状鉄斧である。平面形は袋に比べて刃部がやや幅広な形状を呈する。身上半の側縁が内側に折り曲げられて袋状になっているが、折り曲げの幅は狭い。袋部の横断面形は扁平な長方形状を呈する。Ｆ３は「切鉄」と呼ばれる鉄素材と考えられる。

鍛冶関連遺物として、鉄塊系遺物である F38・39・41、椀形鍛冶滓 F40 が出土している。

S10 は調整剥離が施された剥片石器である。

W127 は付け木であり、先端部が炭化している。

第４節　３区の調査

第１項　概要と基本層序

基本層序は、調査区東・西・南壁において写真記録並びに断面図作成を行った（第230～232図）。東壁は近現代の１溝にかかるため基本層序の確認はできなかった。３区は天神野台地の崖下から約100m東に位置し、北と北東に向けて緩やかに下がる地形となっている。圃場整備により本調査区の西側（上段水田部）と東側（下段水田部）は耕地段差を形成し、表土掘削前の比高差は約１ｍを測る。上段水田部は東側に向かうほど厚く造成土が堆積し、遺物包含層の遺存状況も比較的良好なのに対して、下段水田部は遺物包含層が大きく削平されており、遺存状況は不良である。

基本層序は表土・造成土を除きⅠ～Ⅵ層まで付し、Ⅰ層は12～13世紀代、Ⅱａ・Ⅱｂ層は７世紀後半～８世紀代、Ⅱｃ層は弥生時代中期を主体とした遺物を包含する。以下、Ⅲ～Ⅵ層が無遺物層で、Ⅴ・Ⅵ層は火山灰層である。

調査では倉吉市教育委員会試掘トレンチに基づき、遺構検出面を２面確認した。表土・造成土を重機により除去し、Ⅰ・Ⅱａ・Ⅱｂ層は人力による掘削を行った。Ⅱｃ・Ⅲ層上面の第１遺構面では古代から中世の掘立柱建物７棟、竪穴建物２棟、柵列２基、道路、柱穴・ピット多数、Ⅳ層上面の第２遺構面では弥生時代のピットなどを検出している。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、国産陶器、貿易陶磁器、土製品、石器、木器、鍛冶関連遺物などが出土している。

造成土以下の基本層序は以下の通りである。

Ⅰ　層　調査区のほぼ全域に堆積し、黄橙色から浅黄橙色シルトブロック（＝Ⅴ・Ⅵ層）混じりの褐灰色シルトを母体とする。土器小片や炭化物、焼土ブロックを混入するしまりの強い堆積土である。11世紀後半から12世紀に帰属する遺構や遺物が一定量出土する。

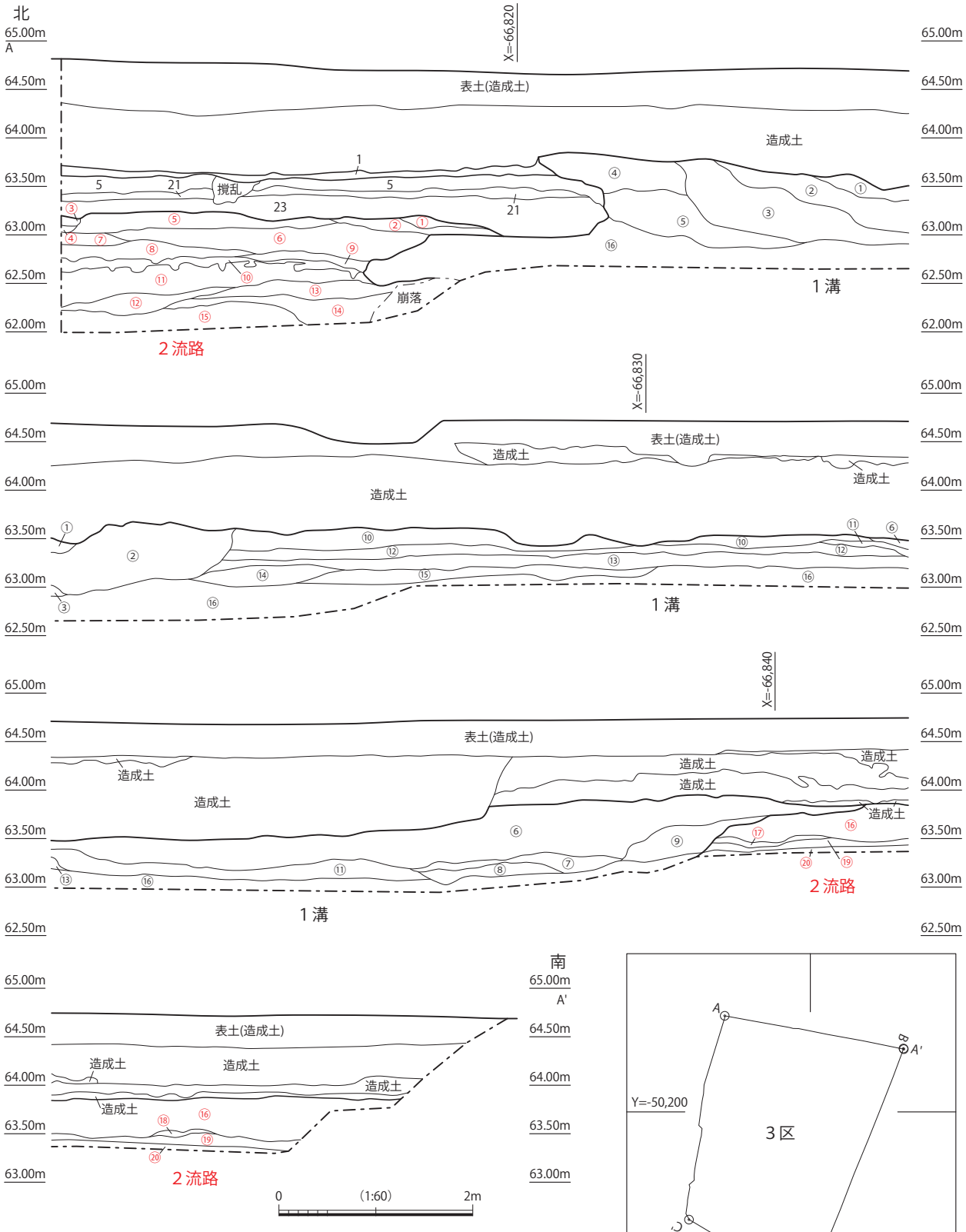
Ⅱａ層　調査区西側北寄りの一部の範囲に堆積する。黄橙色シルトブロック混じりの黒褐色砂混じりシルト層である。土器小片や炭化物ブロックを混入する締まりが強い堆積であり、人為的な堆積の可能性も想定される。

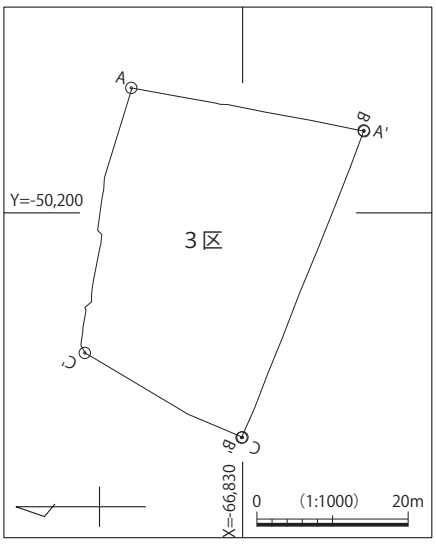
Ⅱｂ層　調査区のほぼ全域に堆積し、黄橙色から浅黄橙色シルトブロック混じりの黒褐色シルトを母体とする。土器小片を多く含み、炭化物や焼土ブロックを混入するしまりの強い堆積土である。７世紀後半から８世紀に帰属する遺構や遺物が出土する。

Ⅱｃ層　調査区の南半を中心に堆積し、浅黄橙色シルトブロック、褐灰色ブロック混じりの黒色シルトを母体とする。弥生時代の遺物を包含するが、調査区南西寄りがより多く、その他は希薄である。調査区西側の南半については、本層上面を第１遺構面とする。

Ⅲ　層　調査区西側の北半に堆積する黒色シルト層で、遺物は含まない。所謂黒ボク層。色調はⅡｃ層に比べやや明るく、粘性が強い。本層上面で弥生時代中期に帰属する遺構を検出しており、本層はそれ以前に形成されたものと考えられる。主に調査区西側の北半については、本層上面を第１遺構面としている。

Ⅳ　層　調査区のほぼ全域に堆積する浅黄橙色シルト層で、遺物は含まない。所謂漸移層。本層上面を第２遺構面とする。

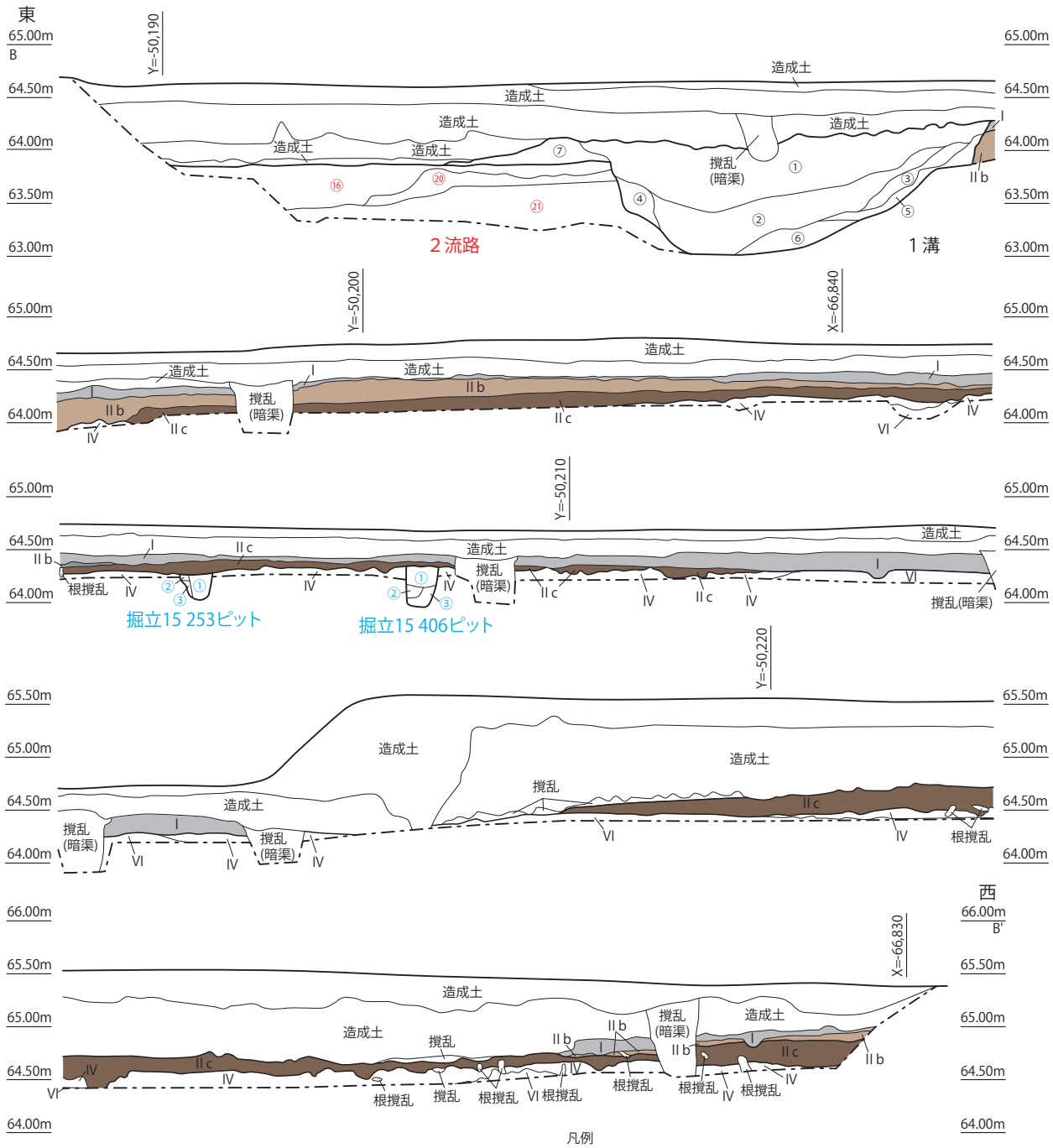




土層断面位置図

基本層序（２区と共通）
1　10YR5/2 灰黄褐色 わずかにシルト混じり細砂
(10YR7/3 にぶい黄橙色 細砂小ブロック極少混　10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂小ブロック混)
5　10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂～砂 (10YR5/3 にぶい黄褐色 砂小ブロック極少混)
21　7.5YR4/1 褐灰色 わずかに細砂混じりシルト (踏み込みによる10YR5/4 にぶい黄褐色 砂～粗砂ブロック混)
23　10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒色 細砂混じりシルトマーブル状少混)

第 230 図　調査区東壁土層断面図、土層断面位置図、土色注記（１）

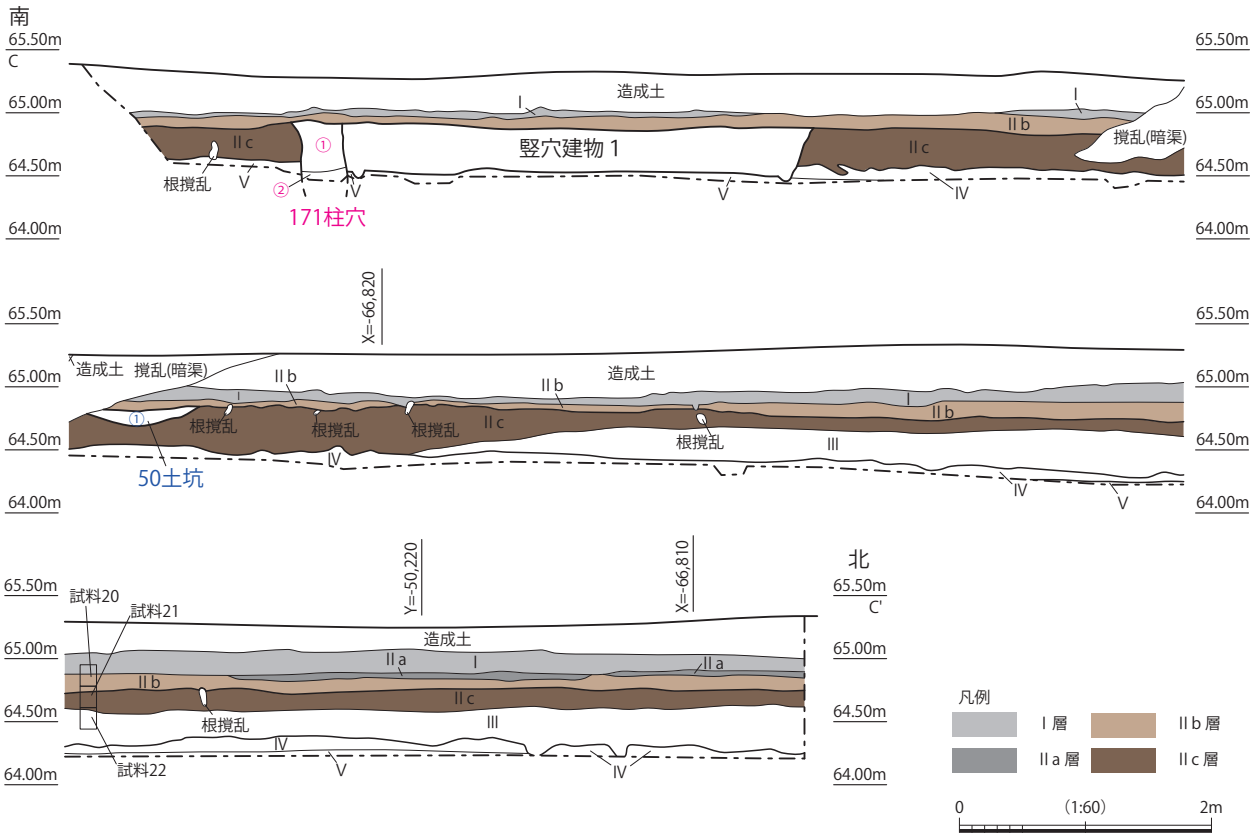


1溝(東壁)
① 10YR5/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト (細礫混)　粘性強　しまり強
② 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
③ 10YR6/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト (φ10～20cm礫多混　コンクリートブロック混)　粘性強　しまり強
④ 10YR5/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト (生木混)　粘性強　しまり強
⑤ 10YR6/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト (10YR4/1 褐灰色 シルトφ3cmブロック混)　粘性強　しまり強
⑥ 10YR3/1 黒褐色 中粒砂混じりシルト (草木混)　粘性強　しまり強
⑦ 10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細粒砂～中粒砂 (10YR5/1 褐灰色 シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑧ 10YR4/1 褐灰色 細粒砂～粗粒砂混じりシルト (細粒砂～粗粒砂ラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑨ 10YR5/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混　巨礫混)　粘性弱　しまり弱
⑩ 10YR4/1 褐灰色 中粒砂混じりシルト (φ1cm炭化物混　生木砂混)　粘性強　しまり中
⑪ 10YR4/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状砂混)　粘性強　しまり中
⑫ 10YR4/1 褐灰色 中粒砂～粗粒砂混じりシルト (中粒砂～粗粒砂ラミナ状混　φ1cm炭化物混)　粘性強　しまり中
⑬ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト (粗粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑭ 10YR4/1 褐灰色 中粒砂混じりシルト (φ1～20cm炭化物混　生木砂混)　粘性強　しまり中
⑮ 2.5Y6/2 灰黄色 シルト混じり粗粒砂 (10YR4/1 褐灰色 シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑯ 2.5Y6/2 灰黄色 粗粒砂～巨礫　粘性無　しまり弱

掘立15　253ピット
① 10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
② 2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり中
③ 10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり強

掘立15　406ピット
① 10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
② 10YR2/1 黒色 シルト　粘性中　しまり中
③ 10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック多混)　粘性中　しまり中

第 231 図　調査区南壁土層断面図、土色注記（２）



基本層序

Ⅰ　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混　10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混　焼土φ1cmブロック混　土器混)　粘性中　しまり強 (古代～中世包含層)

Ⅱa　10YR3/2 黒褐色 砂混じりシルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混　中粒砂少混　φ1cm炭化物混　土器混) (古代包含層　2区と3区の境付近のみ堆積)

Ⅱb　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混　10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混　焼土φ1cmブロック少混　土器多混)　粘性中　しまり強 (古代包含層)

Ⅱc　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト(ホーキ層)φ2～3cmブロック混　10YR4/1 褐灰色 シルトφ2～5cmブロック少混)　粘性中　しまり中 (弥生包含層)

Ⅲ　10YR2/1 黒色 シルト　粘性中　しまり中 (無遺物層)

Ⅳ　10YR8/3 浅黄橙色 シルト　粘性中　しまり中 (漸移層　無遺物層)

Ⅴ　10YR8/6 黄橙色 シルト　粘性強　しまり中 (ソフトローム層　無遺物層)

Ⅵ　10YR8/3 浅黄橙色 シルト　粘性中　しまり中 (漸移層　無遺物層)

１溝(南壁)

① 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト (粗粒砂ラミナ状混　生木混)　粘性強　しまり中
② 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂～中粒砂混じりシルト (粗粒砂～中粒砂ラミナ状混　生木混)　粘性強　しまり中
③ 10YR2/1 黒色 細粒砂混じりシルト (生木混)　粘性強　しまり中
④ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト (φ1cm炭化物混　生木混)　粘性強　しまり中
⑤ 10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細粒砂　粘性弱　しまり弱
⑥ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト (極細粒砂ラミナ状混　φ2cm炭化物混　生木混)　粘性弱　しまり中
⑦ 10YR5/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト (生木混)　粘性強　しまり中

50土坑

① 10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混　10YR2/1 黒色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中

171柱穴

① 10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ3～5cmブロック多混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中 (柱抜き取り痕)
② 10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり弱 (柱抜き取り痕)

２流路

① 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ5～10cmブロック混)　粘性中　しまり中
② 10YR3/1 黒褐色 粗粒砂混じりシルト　粘性強　しまり中
③ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂～中粒砂混じりシルト (粗粒砂～中粒砂ラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
④ 2.5Y6/1 黄灰色 シルト混じり粗粒砂 (10YR4/1 褐灰色 シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑤ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト (細礫混)　粘性中　しまり中
⑥ 10YR4/1 褐灰色 細粒砂～粗粒砂混じりシルト (細粒砂～粗粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑦ 10YR4/1 褐灰色 極細粒砂～中粒砂混じりシルト (極細粒砂～中礫ラミナ状混)　粘性弱　しまり中
⑧ 2.5Y5/2 暗灰黄色 粗粒砂～細礫　粘性なし　しまり弱
⑨ 10YR4/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト (細粒砂ラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑩ 10YR2/1 黒色 粗粒砂～中粒砂混じりシルト (粗粒砂～中粒砂ブロック状混)　粘性中　しまり中
⑪ 10YR4/1 褐灰色 細粒砂～粗粒砂混じりシルト (粗粒砂～中粒砂ラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑫ 10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細粒砂 (10YR5/1 褐灰色 シルトラミナ状混)　粘性中　しまり中
⑬ 10YR4/1 褐灰色 細粒砂～中粒砂混じりシルト (細粒砂～中粒砂ラミナ状混)　粘性なし　しまり弱
⑭ 10YR5/1 褐灰色 シルト混じり細粒砂 (10YR4/1 褐灰色 シルトラミナ状混)　粘性なし　しまり弱
⑮ 10YR4/1 褐灰色 砂礫 (中粒砂～巨礫混)　粘性なし　しまり弱
⑯ 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性強　しまり強
⑰ 10YR5/1 褐灰色 細粒砂混じりシルト (10YR8/4 浅黄褐色 シルトφ5～10cmブロック混)　粘性強　しまり強
⑱ 10YR4/1 褐灰色 シルト混じり砂 (10YR4/1 褐灰色 シルトラミナ状混)　粘性弱　しまり弱
⑲ 10YR4/1 褐灰色 細粒砂～中粒砂混じりシルト　粘性中　しまり強
⑳ 10YR7/2 にぶい黄橙色 シルト　粘性中　しまり中
㉑ 10YR8/4 浅黄褐色 砂混じり巨礫 (φ10～30cm礫多混) (基盤層)

第 232 図　調査区西壁土層断面図、土色注記（３）

Ⅴ　層　　調査区の北半を中心に堆積する黄橙色シルト層で、遺物は含まない。粘性が強い所謂ソフトローム層。

Ⅵ　層　　調査区の南半を中心に堆積する浅黄橙色シルト層。粘性が弱くボソボソとして、ブロック状に堆積する所謂ホーキ層。

第２項　第１遺構面の調査（古代以降の遺構と遺物）

１　概要（第 233 ～ 235 図）

３区北半を中心に黒ボク層であるⅢ層が堆積する。その下層が所謂漸移層であるⅣ層、以下ソフトローム層と続く。上層は古代の遺物包含層であるⅡｂ層が面的に拡がり、調査区の南半部を中心とする範囲で弥生時代の遺物包含層であるⅡｃ層（黒ボクを母体）の堆積範囲を確認した。Ⅱｃ層及びⅢ層上面で検出した遺構、さらに圃場整備などによって削平を受け本層以下で検出した遺構についても、Ⅱｃ層上面で検出した遺構の埋土（黒褐色土系）と類似するものについては第１遺構面として扱うこととした。竪穴建物１・２、掘立柱建物８～ 14 のほか、柵列３・４、52 道路などを検出している。第１遺構面検出遺構の帰属時期は飛鳥時代から鎌倉時代であり、鎌倉時代に帰属する掘立柱建物 13・14、50 土坑を除き、古代の竪穴建物や掘立柱建物、道路遺構などから構成される集落の一端が明らかとなった。

なお、建物を構成しない単体の柱穴やピットでも、遺物出土状況や埋土に特色があるもの、または掲載遺物が出土したものは取り上げて記述している。

２　検出した遺構と遺物

（１）竪穴建物

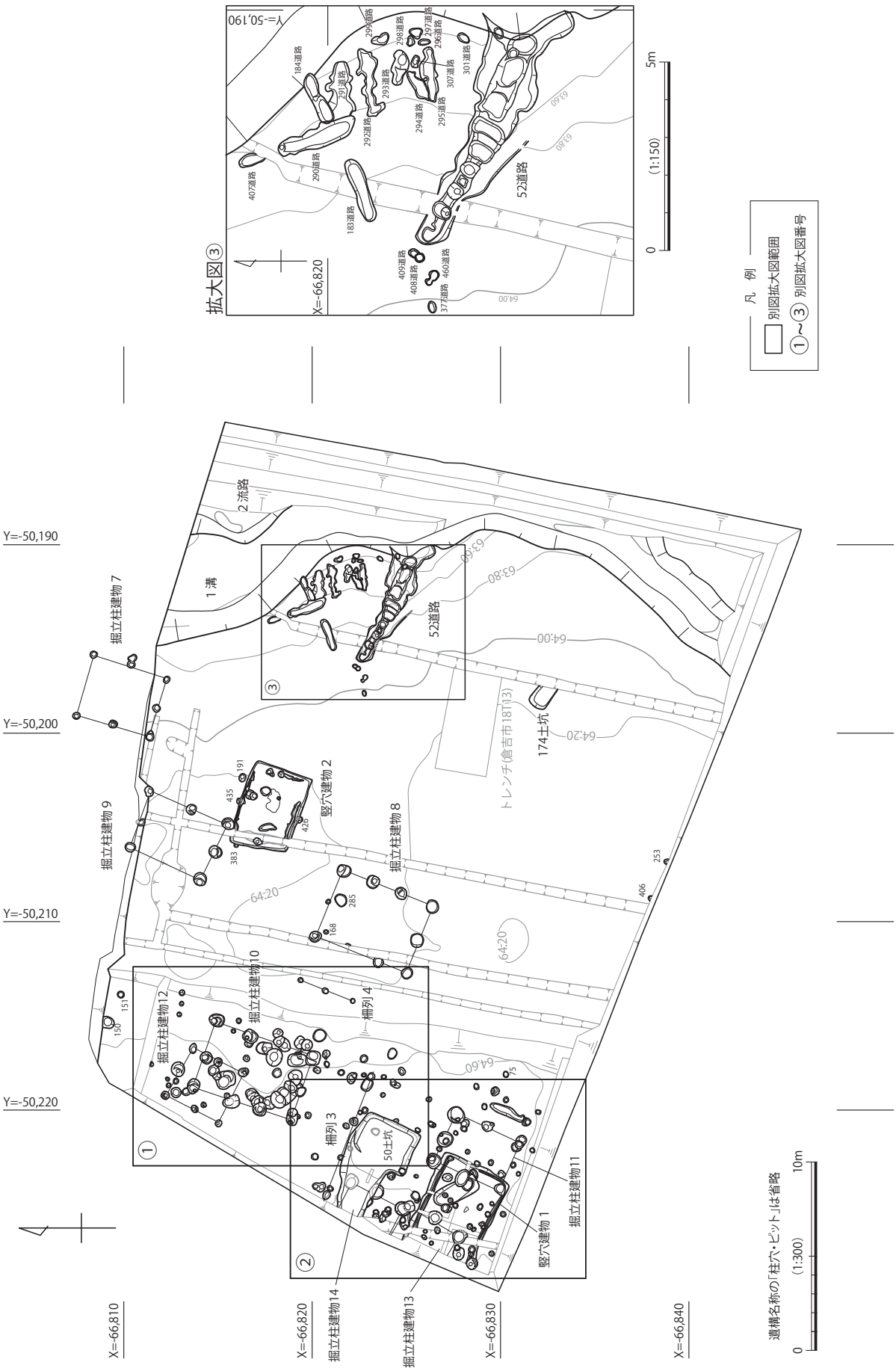
竪穴建物１（第 233・235 ～ 240・456 図、第 25 ～ 27・74・95・98 表、図版 86・89 ～ 91・135・168・325）

３区南西 7a-9C-3c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した竪穴建物である。建物西側は調査区外に延びるため全容は不明である。検出規模は、長軸 5.04m、短軸 3.81mを測る。長方形のプランであり、N-25° -W を主軸とする。検出面からの深さは最大で 0.4m、検出された床面積は 19.0㎡である。竪穴の埋土は２層に分層され、Ⅵ層由来のブロックを含む黒褐色シルトの１層と黒色シルトの２層が堆積する（A・B 断面１・２層）。

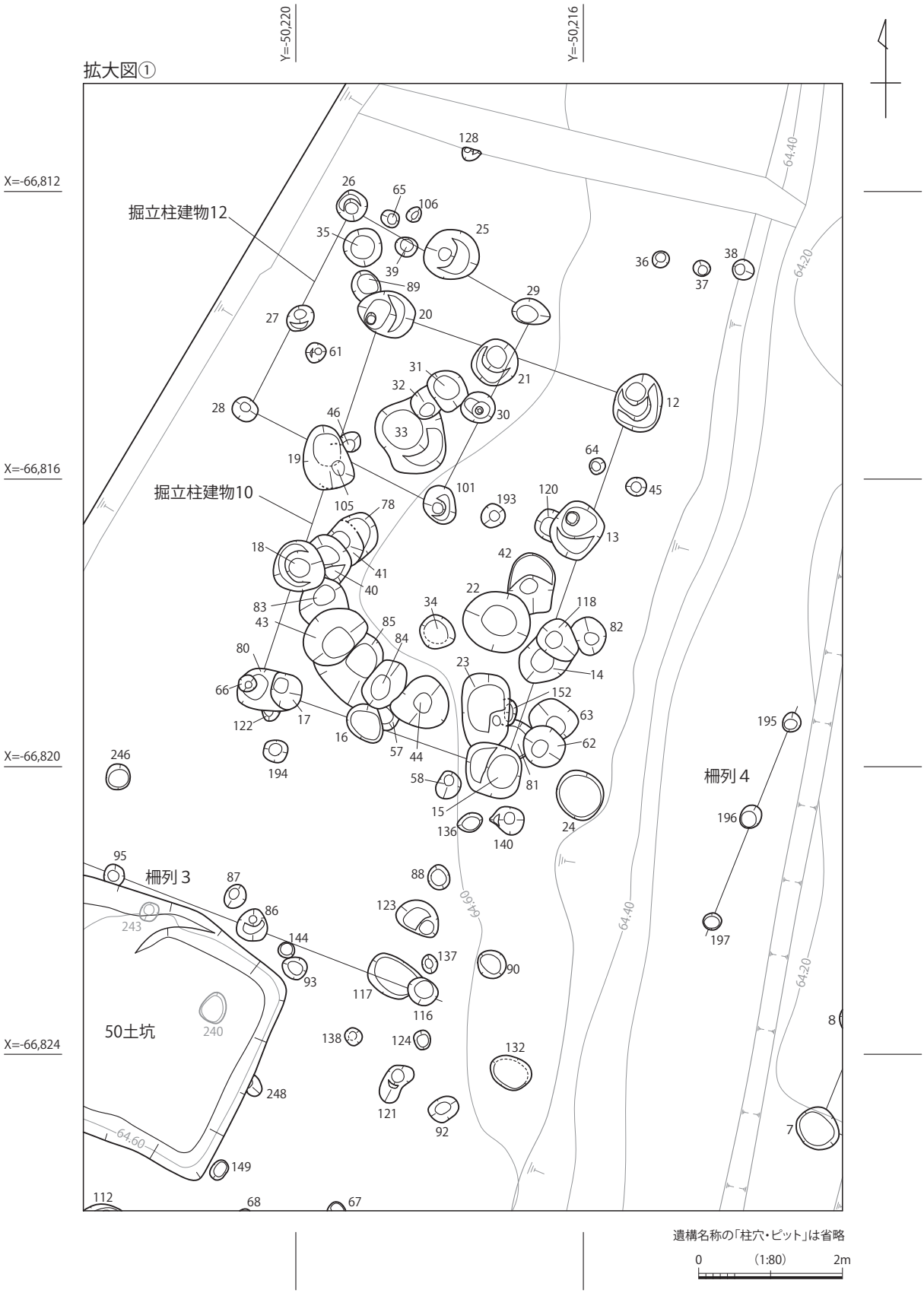
床面西側の一部を除き、ほぼ全面に貼床（A・B 断面３層）が施されており、床面上面は硬化している。南北辺と南西辺の床面には、竪穴建物壁面に沿って幅５～ 10cm、床面からの深さ５cm、断面Ｕ字形の壁溝が設けられている。

床面中央には長軸 0.32m、短軸 0.17mの被熱によって赤褐色に変色している 232 被熱面がみられ、炉跡と考えられる。また 232 被熱面の周囲には長軸 3.35m、短軸 1.4mの炭化物集中範囲が確認された。

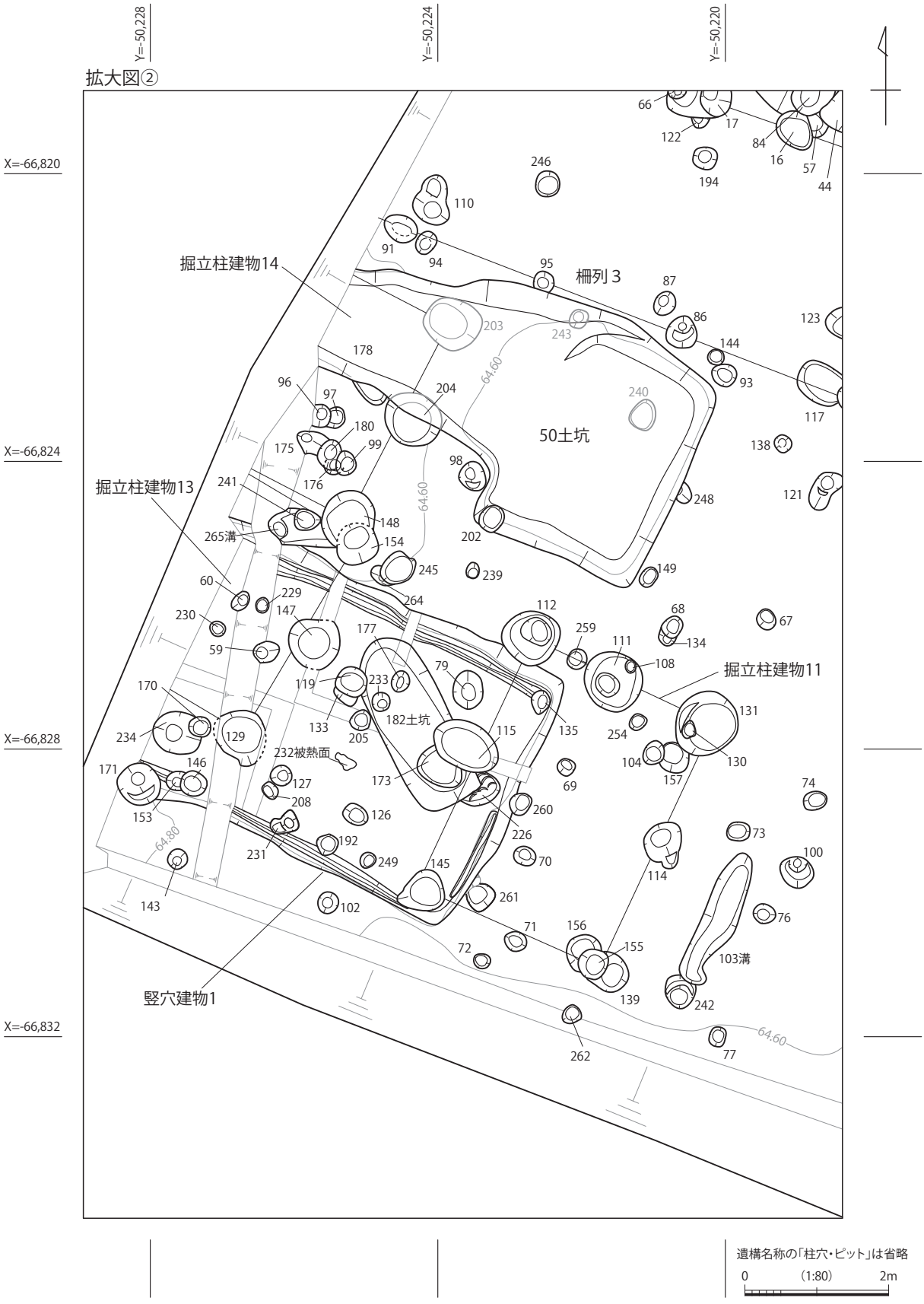
なお、本建物に重複する掘立柱建物 11（112・115・145 柱穴）、掘立柱建物 13（129・147 柱穴）及び 182 土坑、119・171 柱穴、192・205 ピットは竪穴建物埋土（１層）上面で検出しており、135・146・153 ピットは壁溝を切っていることから、本建物より後出する遺構であることを確認し



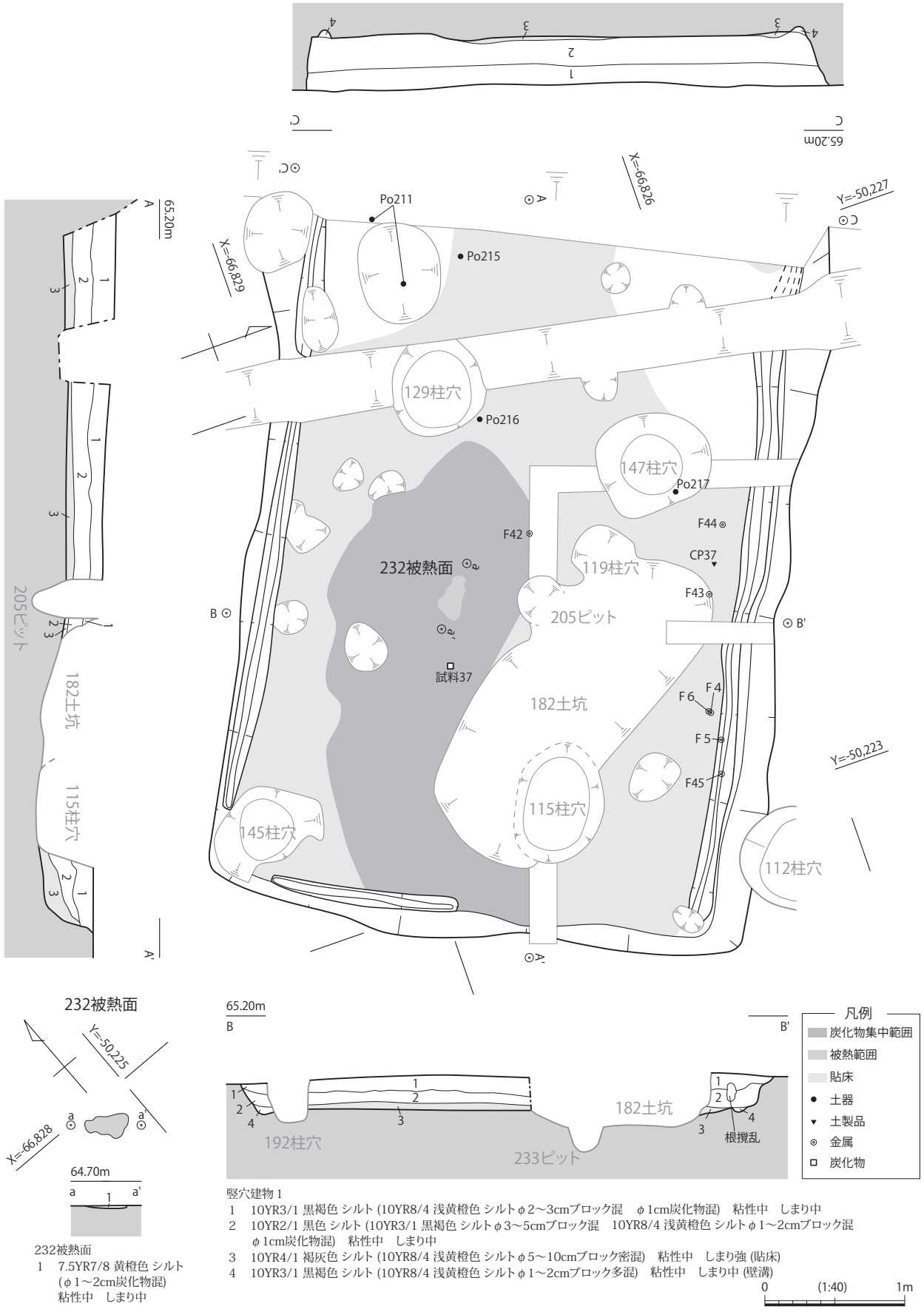
第 233 図　第 1 遺構面全体図



第 234 図　第 1 遺構面拡大図（1）



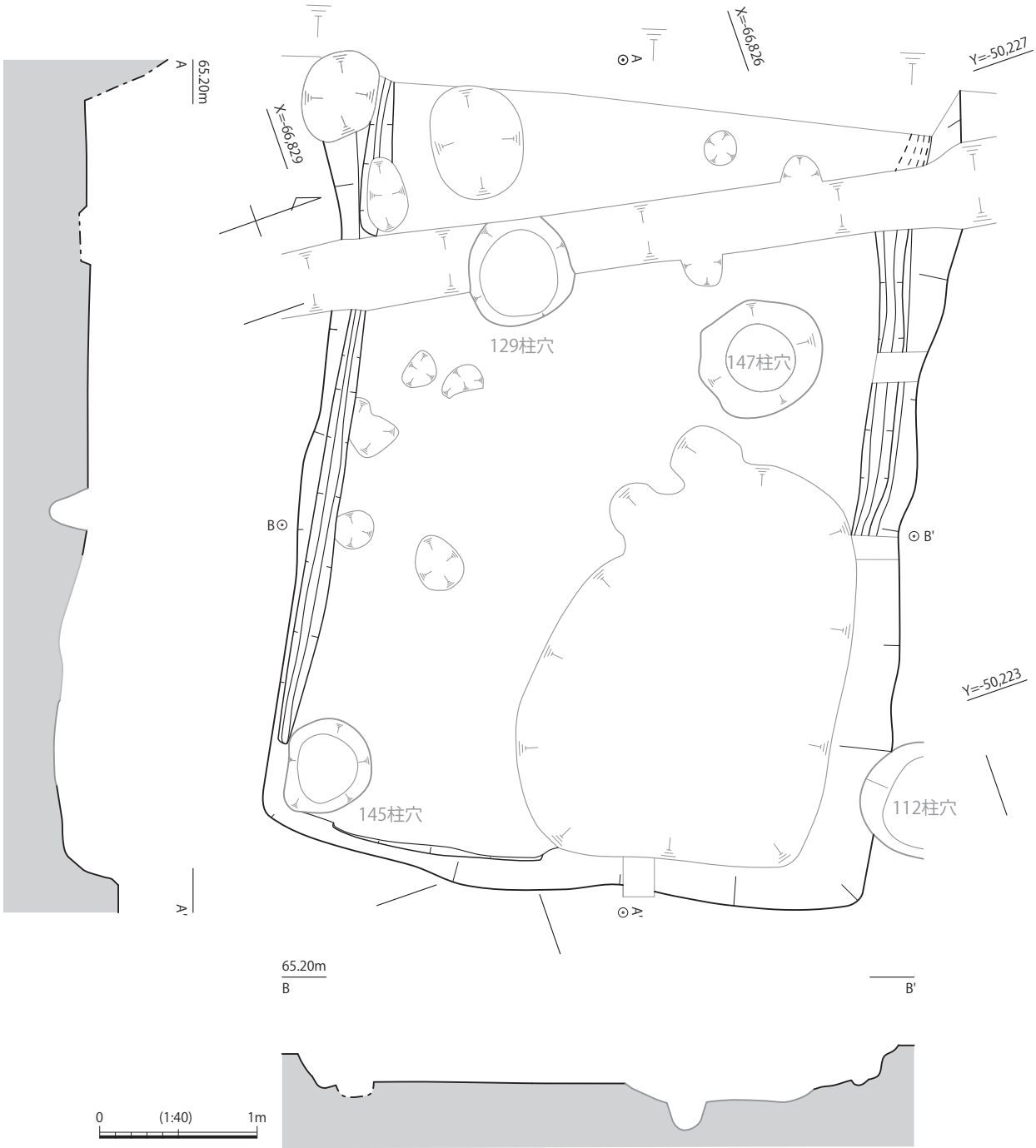
第 235 図　第 1 遺構面拡大図（2）



竪穴建物１
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2～3cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ3～5cmブロック混　10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ5～10cmブロック密混)　粘性中　しまり強 (貼床)
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック多混)　粘性中　しまり中 (壁溝)

232被熱面
1　7.5YR7/8 黄橙色 シルト (φ1～2cm炭化物混)　粘性中　しまり中

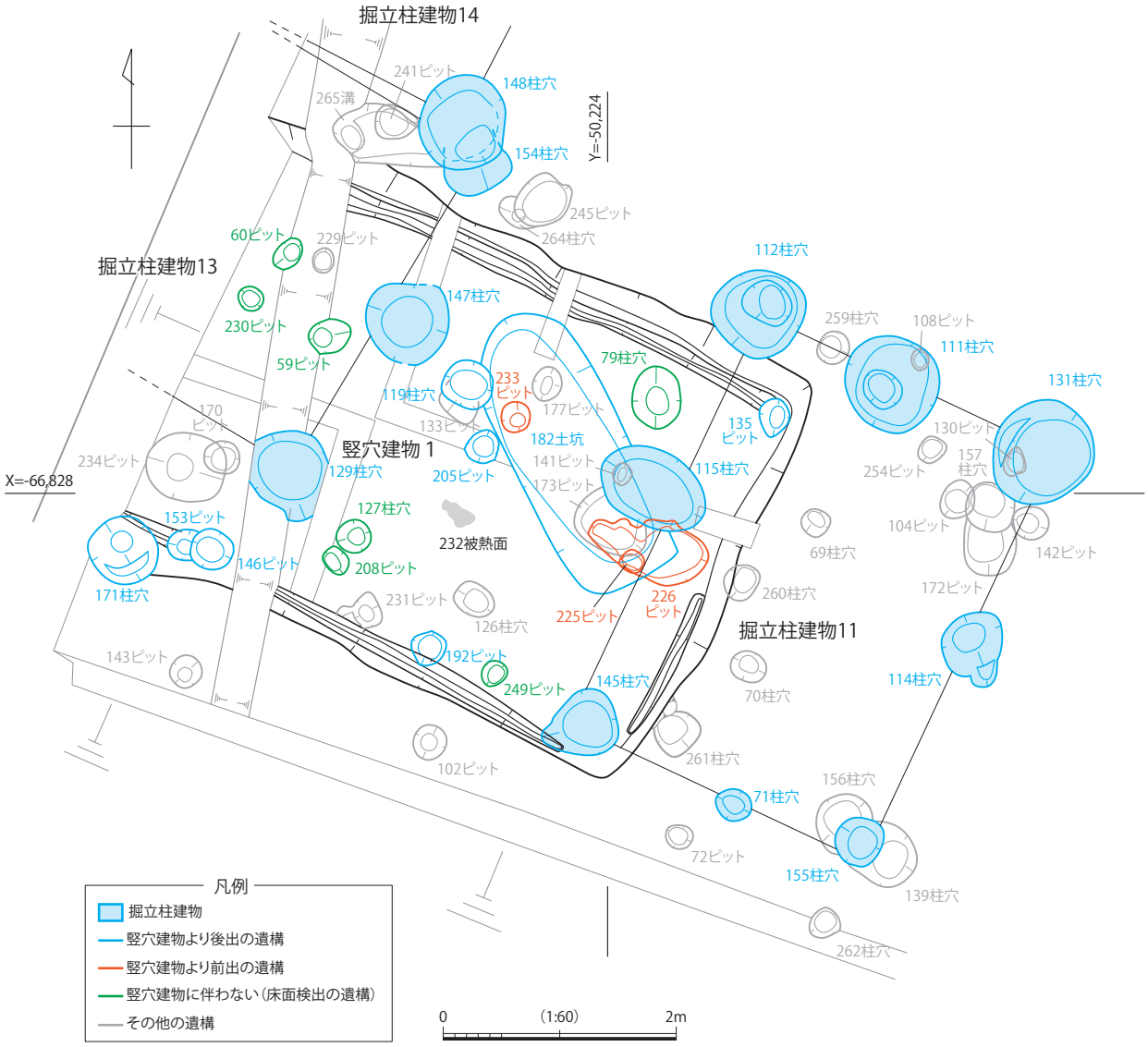
第 236 図　竪穴建物１（１）



第 237 図　竪穴建物１（２）

ている。また貼床下で検出した 225・226・233 ピットは本建物に先行する遺構である。床面より検出した 79・127 柱穴、59・60・208・230・249 ピットは本建物と前後関係は確認できていないが、床面からの深さが浅いこと、本建物に対する平面的な位置関係から判断し、これらの柱穴・ピットは本建物の上屋を支えるものではないと判断している。

Po211 は床面直上から出土した土師器高坏の坏部である。外面はヘラミガキ、内面は暗文が施されている。Po216・217 は「く」字状に外反する土師器甕の口縁部から体部上半の破片である。前者は外面ナデ、後者はハケ調整が施されている。Po212 ～ 215 は須恵器をまとめている。Po212 は蓋口縁部でかえりが垂下する。Po213 は高台付坏の底部である。Po214 は器壁の薄い高坏の脚部で、

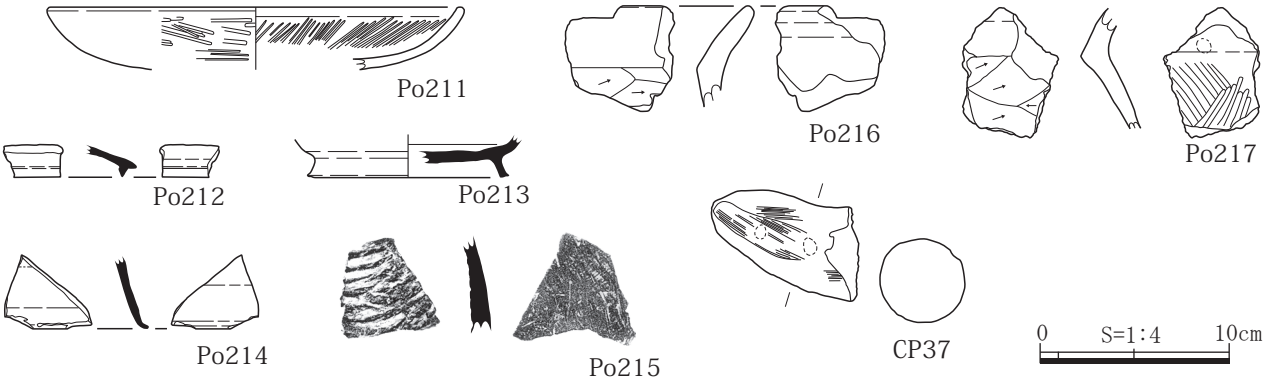


第 238 図　竪穴建物１周辺の遺構配置図

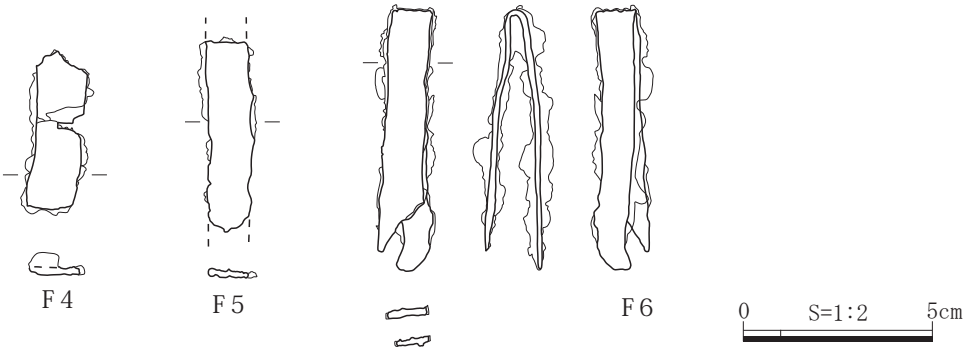
脚裾が僅かに張り出す。Po215 は床面直上から出土した甕の体部片であり、外面はタタキ後にナデ、内面は同心円状当て具痕が観察される。CP37 は移動式竈の把手もしくは土製支脚の把手であろう。外面はハケ調整が施され、指頭圧痕が部分的に観察される。Ｆ４～６は北壁溝際でまとまって出土した鉄製品である。幅 1.2cm の薄板状でＦ６は鋳接部が剝れてしまっている。これらは同一個体と想定され、器種は不明である。また、鍛冶関連遺物として、埋土上層から鍛冶滓 F45、下層から椀形鍛冶滓 F42、貼床直上から鍛冶滓 F43 と椀形鍛冶滓 F44 が出土した。

なお、底面直上の３層から出土した炭化材（試料 37）について放射性炭素年代測定を実施したところ、calAD655-689（暦年較正２σの確率１位）の値が得られており、出土した遺物の年代観と概ね調和している（第５章第３節）。

遺構の帰属時期は床面直上の出土遺物と炭化物の年代測定結果より、７世紀後半と考えられる。



第 239 図　竪穴建物１出土土器・土製品



第 240 図　竪穴建物１出土鉄器

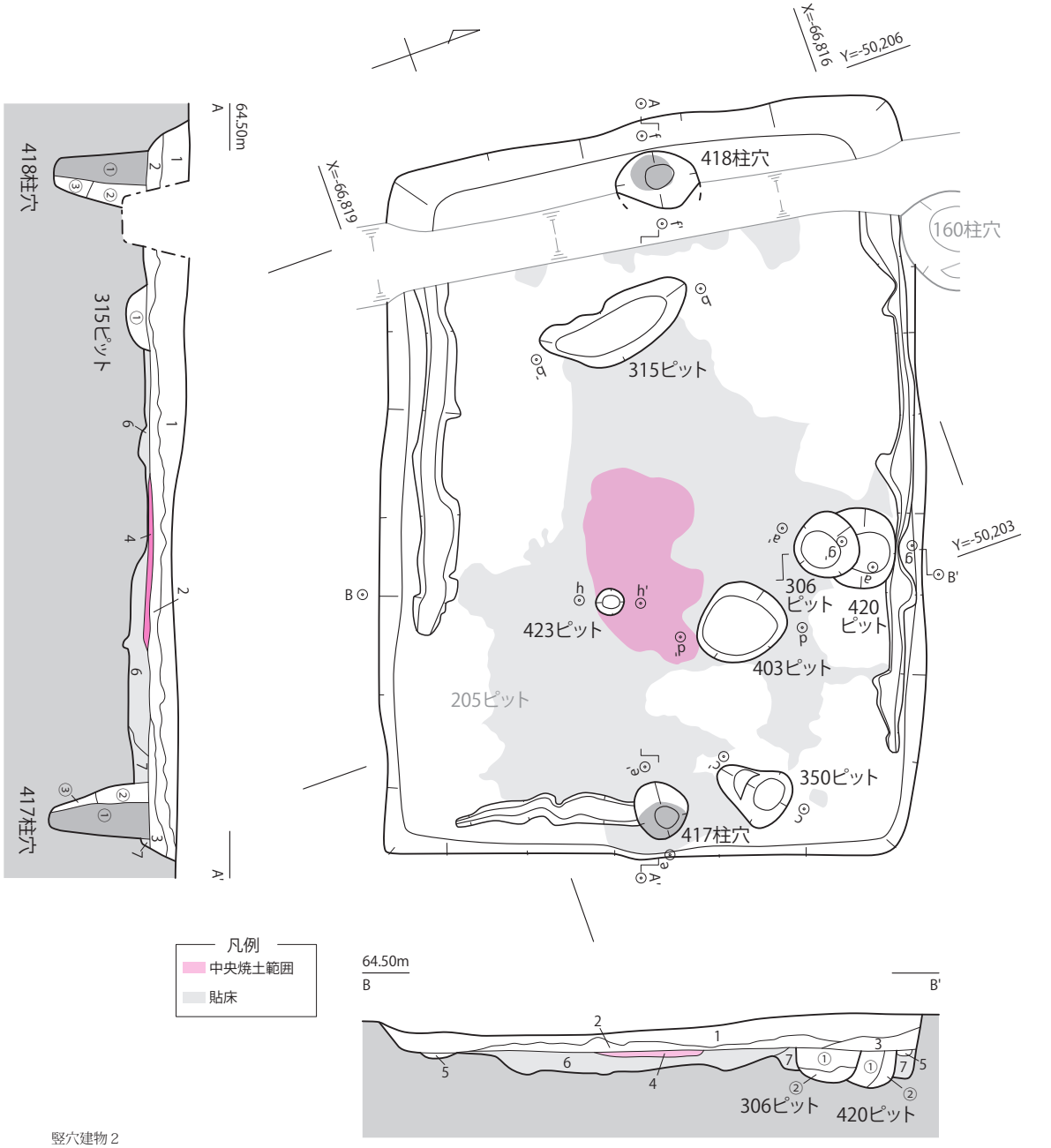
竪穴建物２（第 233・241 ～ 247・456 図、第 25 ～ 27・74・75・97・98 表、図版 86・92 ～ 99・168・169・325）

３区中央北寄り 7a-9C-2a グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した竪穴建物である。建物西側は一部、幅 30cmの暗渠によって削平を受けている。検出面で焼土粒や炭化物が一定の範囲で確認された。長軸 4.45m、短軸 3.26mを測る。長方形のプランであり、N-18° -W を主軸とする。検出面からの深さは最大で 0.29m、床面積は 14.0㎡である。竪穴建物の埋土は３層に分層でき、Ｖ層由来のブロックと炭化物を多く含む黒褐・淡黄・黒色シルトが堆積する（Ａ・Ｂ断面１・２・３層）。

床面中央には貼床（Ａ・Ｂ断面６・７層）が施されており、床面上面は硬化している。南北辺と東辺の床面には、竪穴建物壁面に沿って幅 10 ～ 20cm、床面からの深さ５cm、断面Ｕ字形の壁溝が設けられている。

東西辺の壁際のほぼ中心部に 417･418 柱穴が位置する。417 柱穴の規模は長軸 0.34m、短軸 0.30m、床面からの深さ 0.49mを測る。底面標高は 63.41m。埋土は柱痕跡である黒褐色シルトの１層とＶ層由来のブロックを多く含む掘方埋め土２・３層が堆積する。418 柱穴の規模は長軸 0.53m、短軸 0.35m、床面からの深さ 0.65mを測る。底面標高は 63.45m。埋土は柱痕跡である黒褐色シルトの１層とＶ層由来のブロックを多く含む掘方埋め土２・３層が堆積する。以上の２基は建物の上屋を支える主柱穴と考えられる。

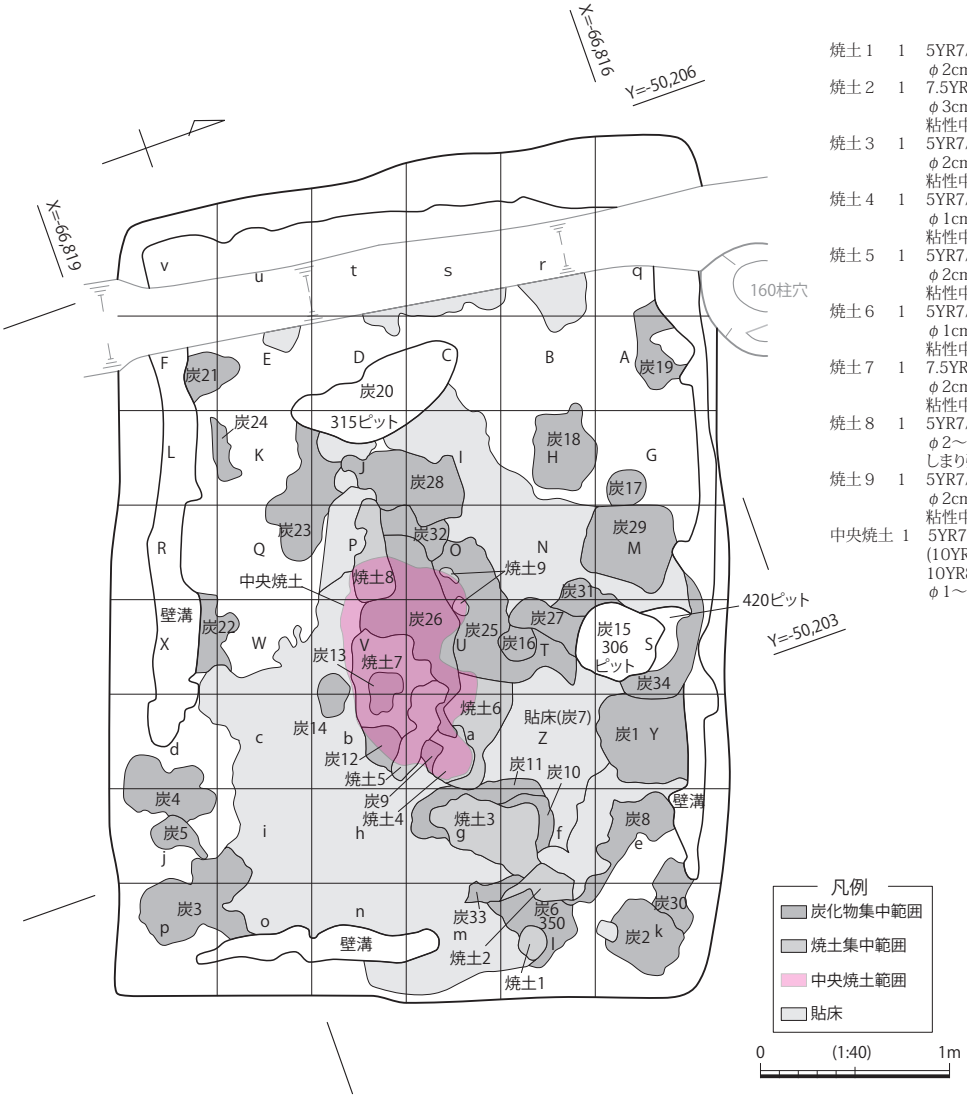
床面中心部の西寄りでは、不整楕円形の 315 ピットを検出している。長軸 0.94m、短軸 0.37m、床面からの深さ 0.10mを測る。埋土はＶ層由来のブロックと炭化物を多く含む黒色シルトで、土器小片や鉄滓小片が散漫に出土しており、埋土中から出土した椀形鍛冶滓 F47 を図化した。



竪穴建物２
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混　φ1～2cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y8/4 淡黄色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ0.5～3cmブロック密混　φ1cm炭化物混　焼土φ0.5～1cmブロック混)　粘性中　しまり中
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック少混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり強
4　5YR6/6 橙色 シルト (φ1～2cm炭化物混)　粘性中　しまり強 (焼土)
5　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2～3cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中 (壁溝)
6　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR2/1 黒色 シルトφ2cmブロック混　10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2～3cmブロック多混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり強 (貼床)
7　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR2/1 黒色 シルトφ2cmブロック混　10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2cmブロック混　φ1cm炭化物多混)　粘性中　しまり中 (貼床)
306ピット
①　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
②　10YR8/6 黄橙色 シルト (10YR2/1 黒色 シルトφ2cmブロック混)　粘性中　しまり中
315ピット
①　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5～2cmブロック多混　φ1cm炭化物多混　鉄滓多混)　粘性中　しまり中
417柱穴
①　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり弱
②　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ2～3cmブロック多混)　粘性強　しまり中
③　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性強　しまり中
418柱穴
①　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性強　しまり中
②　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ2～3cmブロック多混)　粘性強　しまり中
③　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混)　粘性強　しまり中
420ピット
①　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ2～3cmブロック多混)　粘性中　しまり中
②　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中

0　(1:40)　1m

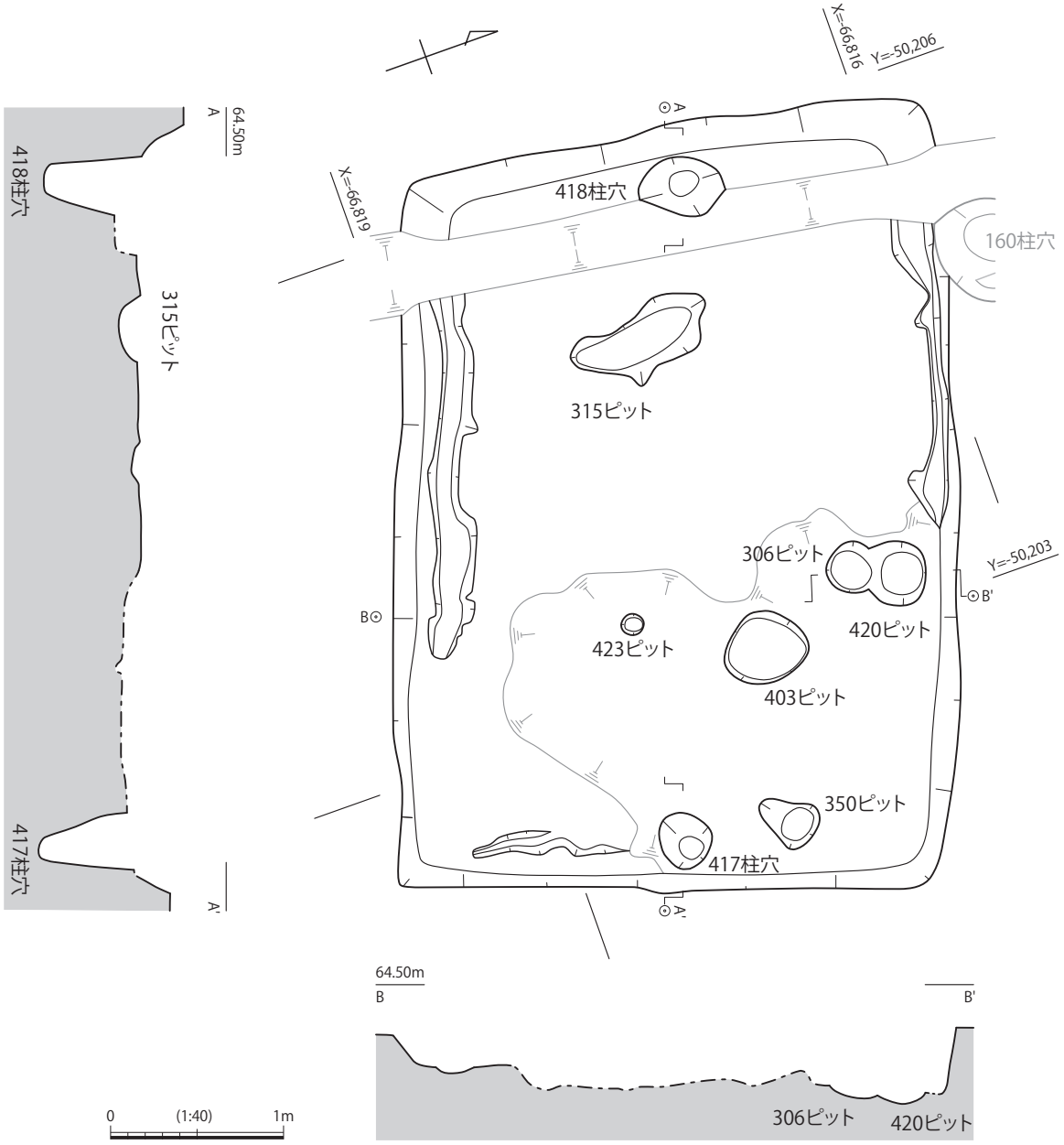
第 241 図　竪穴建物２



焼土１　１　5YR7/6 橙色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト φ2cmブロック混)　粘性中　しまり中
焼土２　１　7.5YR8/6 浅黄橙色 シルト (10YR2/1 黒色 シルト φ3cmブロック混　φ1cm炭化物混) 粘性中　しまり中
焼土３　１　5YR7/6 橙色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト φ2cmブロック混　φ1～2cm炭化物混) 粘性中　しまり中
焼土４　１　5YR7/6 橙色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト φ1cmブロック少混　φ1cm炭化物混) 粘性中　しまり中
焼土５　１　5YR7/6 橙色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト φ2cmブロック混　φ1cm炭化物混) 粘性中　しまり中
焼土６　１　5YR7/6 橙色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト φ1cmブロック混　φ1～2cm炭化物混) 粘性中　しまり中
焼土７　１　7.5YR8/6 浅黄橙色 シルト (10YR2/1 黒色 シルト φ2cmブロック混　φ1cm炭化物混) 粘性中　しまり中
焼土８　１　5YR7/6 橙色 シルト (10YR2/1 黒色 シルト φ2～3cmブロック混　φ1cm炭化物混) しまり強　粘性弱
焼土９　１　5YR7/6 橙色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト φ2cmブロック混　φ1cm炭化物混) 粘性中　しまり中
中央焼土 1　5YR7/6 橙色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ2～3cmブロック混 10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ3cmブロック少混 φ1～2cm炭化物混)　粘性中　しまり強

炭１　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック少混　φ1～2cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭２　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭３　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2～3cmブロック混　φ1～2cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭４　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭５　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭６　350ピット
　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
　２　10YR2/1 黒色 シルト　粘性中　しまり中
炭７　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混　10YR3/1 黒褐色 シルトφ3～5cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性弱　しまり強 (貼床)
炭８　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5～1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭９　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物多混)　粘性中　しまり中
炭10　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混　焼土φ0.5cmブロック混　φ1cm炭化物多混)　粘性中　しまり中
炭11　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混　焼土φ0.5cmブロック混　φ1cm炭化物多混)　粘性中　しまり中
炭12　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2cmブロック混　φ1cm炭化物多混)　粘性中　しまり中
炭13　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭14　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック多混　φ1cm炭化物多混)　粘性中　しまり中
炭15　306ピット
　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
　２　10YR8/6 黄橙色 シルト (10YR2/1 黒色 シルトφ2cmブロック混)　粘性中　しまり中
炭16　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭17　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭18　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ2cmブロック混　φ1～2cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭19　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック少混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭20　315ピット
　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～3cmブロック混　φ1cm炭化物多混　小鉄滓多混)　粘性中　しまり中
炭21　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭22　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭23　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混　焼土φ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭24　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭25　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混　焼土φ1cmブロック混　φ1cm炭化物多混)　粘性中　しまり中
炭26　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混　焼土φ0.5cmブロック混　φ1cm炭化物多混)　粘性中　しまり中
炭27　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭28　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ2cmブロック混　φ1cm炭化物少混)　粘性中　しまり中
炭29　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭30　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混　φ1cm炭化物混　焼土ブロック混)　粘性中　しまり中
炭31　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ2～3cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭32　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ2～3cmブロック混　焼土φ0.5cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
炭33　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2cmブロック混　φ1cm炭化物多混)　粘性中　しまり中
炭34　１　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ2cmブロック混　φ1～2cm炭化物混)　粘性中　しまり中

第 242 図　竪穴建物２床面検出状況



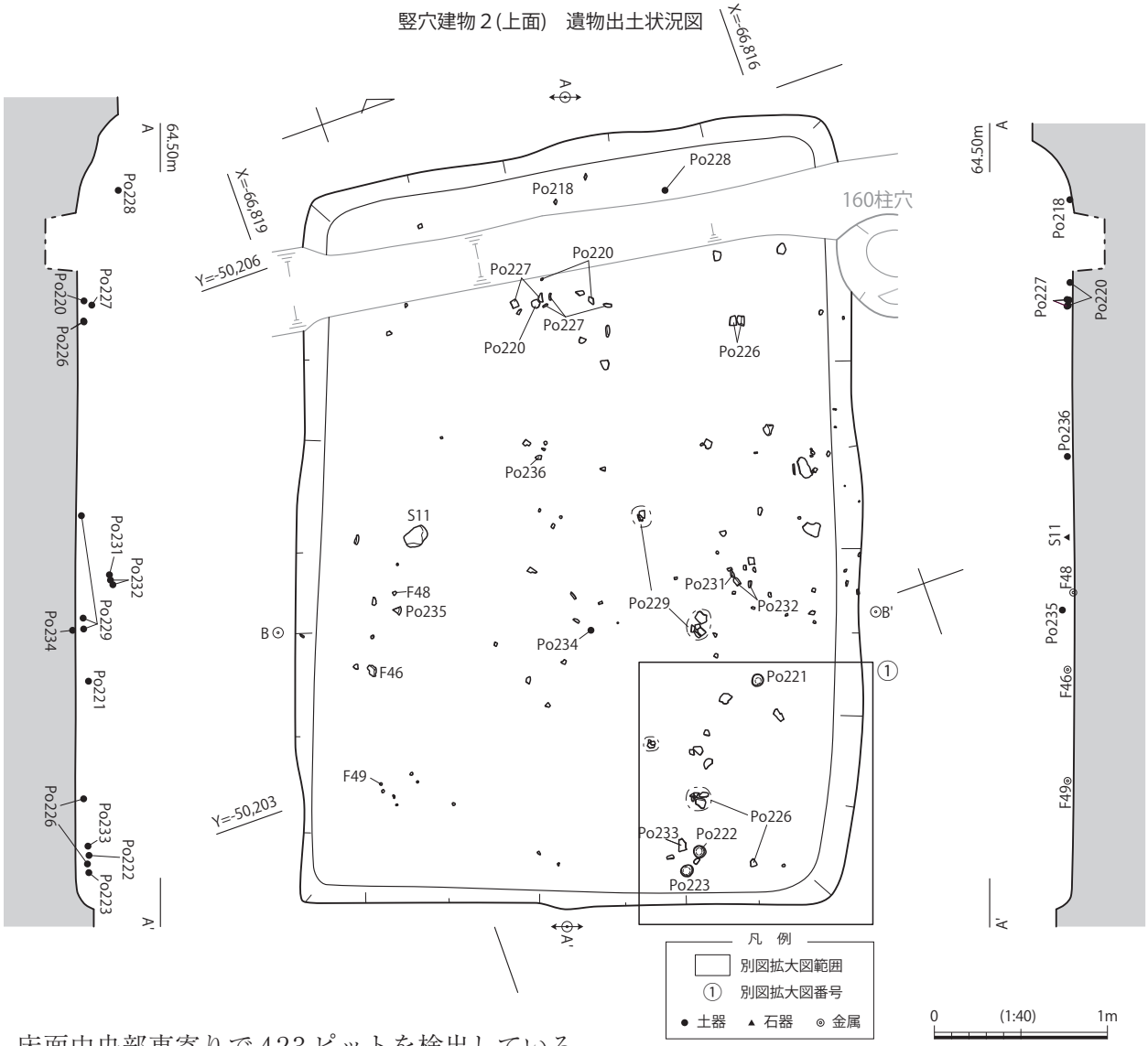
第 243 図　竪穴建物２掘方完掘状況

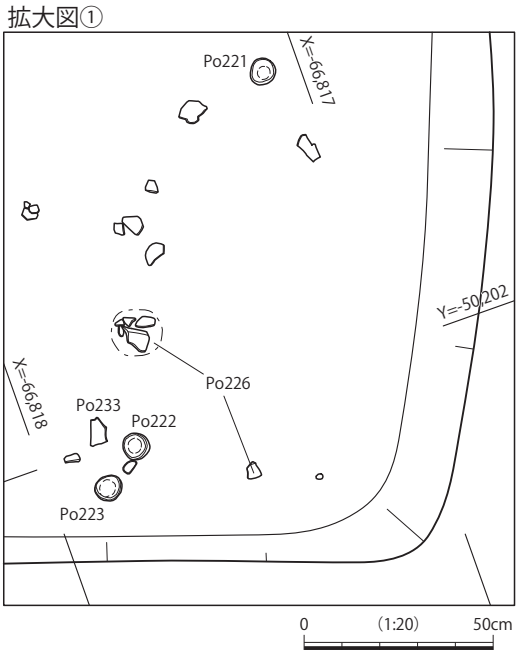
北東側の床面では 306・350・403・420 ピットが位置する。306 ピットは 420 ピットと重複し切っている。平面は不整円形を呈し、規模は長軸 0.38m、短軸 0.37m、床面からの深さ 0.20m を測る。埋土はⅤ層由来のブロックと炭化物を含む黒色シルト１層と同じくⅢ層由来のブロックを含む黄橙色シルトの２層が堆積する。

420 ピットは 306 ピットに切られ全容は不明だが、残存規模は長軸 0.48m、短軸 0.22m、床面からの深さ 0.21m を測る。Ⅴ層由来のブロックを含む黒褐色・黒色シルト１・２層が堆積する。

403 ピットは平面が不整円形を呈し、規模は長軸 0.51m、短軸 0.45m、床面からの深さ 0.12m を測る。埋土はⅤ層由来のブロックと炭化物を多く含む黒色シルト１・２層が堆積する。

350 ピットは平面形が瓢形を呈し、長軸 0.46m、短軸 0.37m、床面からの深さ 0.20m を測る。埋土はⅤ層由来のブロックが混じる黒色シルト１層と黒色シルト２層が堆積する。埋土から小型の鉄滓が少数出土している。

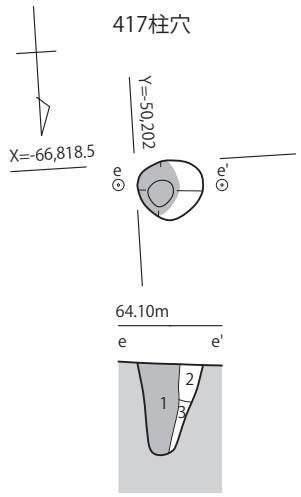




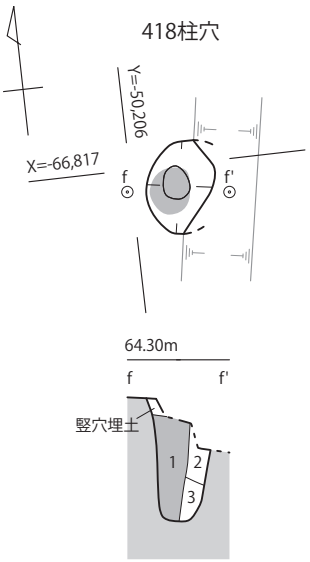
第 244 図　竪穴建物２遺物出土状況

床面中央部東寄りで 423 ピットを検出している。中央焼土内に位置し、規模は長軸 0.17m、短軸 0.16m、床面からの深さ 0.06m を測る。埋土はⅤ層由来のブロックと炭化物を含む黒褐色シルトの単層である。これらのピットは、竪穴建物埋土掘削後に床面において検出したため、本建物との前後関係を確認できていない。しかしながら、埋土には炭化物が多く混じり鉄滓が出土している状況から、性格は不明ながら建物に付随するものと想定している。

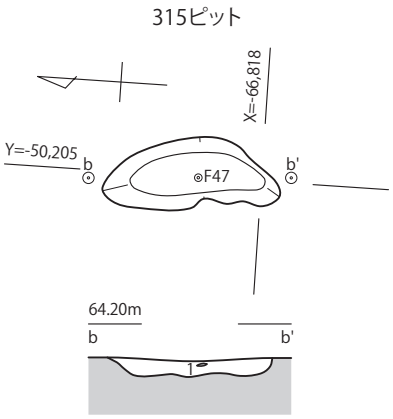
床面中央には長軸 1.15m、短軸 0.65m の焼土の堆積範囲（A・B 断面４層）が確認され炉跡と考えられる。また炉跡の周囲には長軸 3.35m、短軸 1.40m の炭化物集中範囲が確認された。貼床直上には炭化物集中範囲と焼土集中範囲が薄くモザイク状に拡がっており、鉄滓小片が点在している状況が確認さ



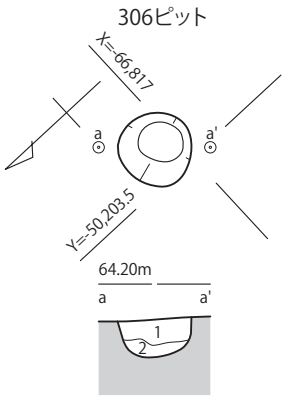
417柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1～2cmブロック混　φ1cm炭化物混)
　粘性中　しまり弱
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ2～3cmブロック多混)　粘性強　しまり中
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1～2cmブロック混)　粘性強　しまり中



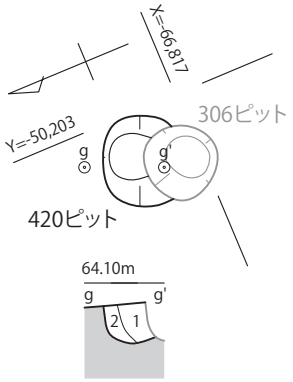
418柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1～2cmブロック混)　粘性強　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ2～3cmブロック多混)　粘性強　しまり中
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1cmブロック混)　粘性強　しまり中



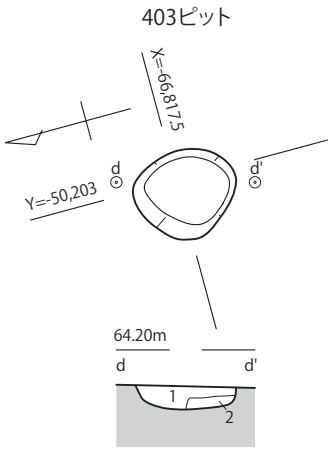
315ピット
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ0.5～2cmブロック多混　φ1cm炭化物多混 小鉄滓多混)　粘性中　しまり中



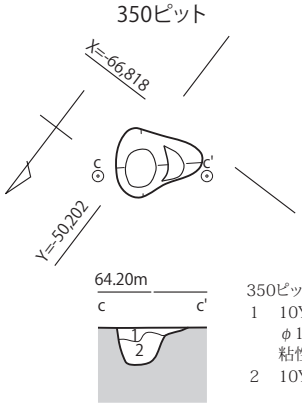
306ピット
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)
　粘性中　しまり中
2　10YR8/6 黄橙色 シルト (10YR2/1 黒色 シルト φ2cmブロック混)　粘性中　しまり中



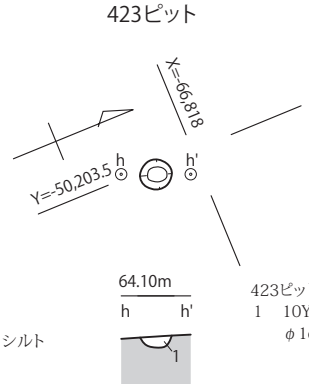
420ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ2～3cmブロック多混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中



403ピット
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ2cmブロック多混　φ1cm炭化物多混)
　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ5cmブロック混　φ1cm炭化物多混)
　粘性中　しまり中



350ピット
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)
　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト　粘性中　しまり中

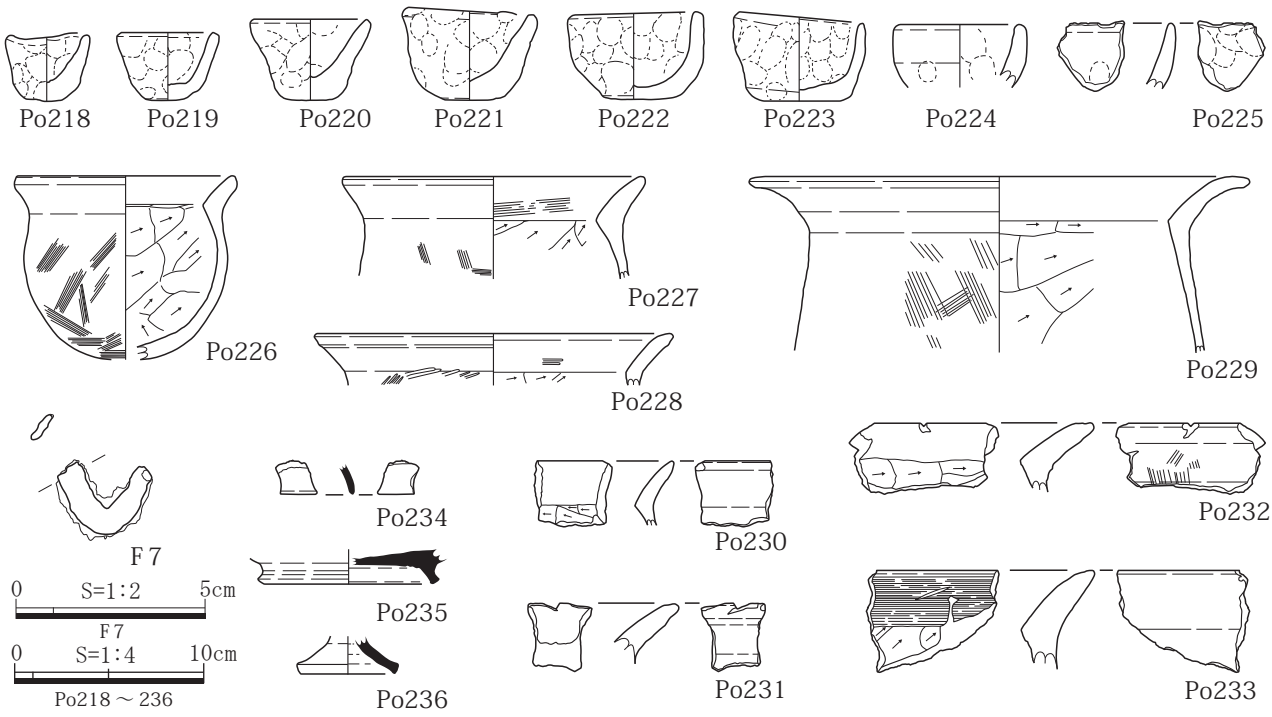


423ピット
1　10YR3/1黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中 しまり弱

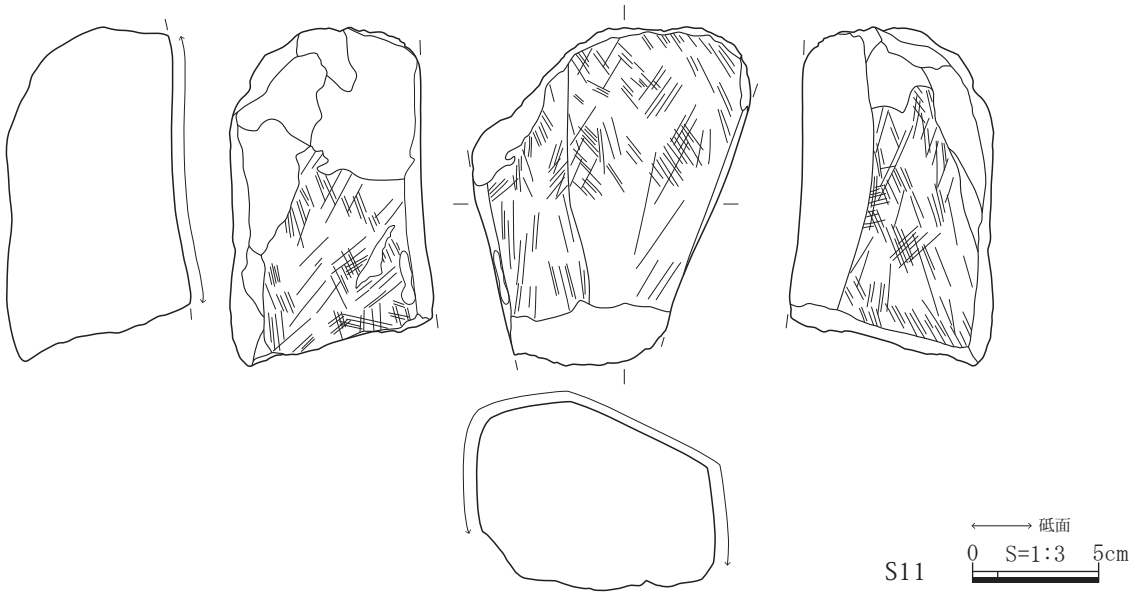
凡　例
◎　金属

0　(1:40)　1m

第 245 図　竪穴建物２　417・418 柱穴、306・315・350・403・420・423 ピット



第 246 図　竪穴建物２出土土器・鉄器



第 247 図　竪穴建物２出土石器

れた。焼土や炭化物の広がり、鉄滓小片の出土などから鍛冶作業が行われた可能性が浮上し、作業空間と操業内容の復元のため床面に 50cm メッシュを組み、メッシュ単位で床面直上の土壌２～３cm を回収した。土壌サンプルは土嚢袋とビニール袋合わせ 287 袋、総重量 956kgを測る。これらを財団調査室に持ち帰り、水洗、選別作業を実施したが、残念ながら鍛造剥片や粒状滓などの微細遺物は確認されなかった。よって、鉄器などの軽易な修繕を行っていた可能性は否定できないものの、鍛冶工房ではないと判断した。

遺物は埋土中からミニチュア土器や土器小片、鉄滓、砥石などが数多く出土している。とくに北東隅付近では、ほぼ完形のミニチュア土器３個体が口縁部を上向きにした状態で直列するように出土し

た。その他のミニチュア土器小片も合わせると８個体となる。このような特異な状況から、建物廃絶後に何らかの祭祀行為が行われた可能性も指摘しておきたい。

Po218 ～ 225 はミニチュア土器をまとめている。Po218 は床直、その他は埋土下層が主体を占め、Po224 は上層出土である。器高は 3.6 ～ 4.9cm を測る。いずれも手づくね成形で、口縁部が外開きの Po218 ～ 221、ほぼ直立する Po222 ・ 223、体部が緩やかに膨らみ口縁部がやや内傾する Po224 ・ 225 がみられる。Po226 ～ 233 は口縁部が「く」字状に外反する土師器甕である。Po226 は球胴状の器形、Po229 は長胴の器形を呈する。Po233 を除き口縁部の内外面はナデ、体部外面はハケ調整を施している。Po233 の口縁部内面は横方向のハケ調整である。Po234 ～ 236 は須恵器をまとめている。Po234 は坏蓋の口縁端部、Po235 は高台付坏、Po236 は高坏の脚部である。S11 は撥形で厚みのある砥石であり、砥面が４面残る。Ｆ７は埋土中から出土した用途不明の鉄器である。また、埋土下層からは椀形鍛冶滓 F46 と鍛冶滓 F48・49 が出土した。

本遺構の帰属時期は床面直上の出土遺物から判断し、７世紀後半と考えられる。

（２）掘立柱建物

掘立柱建物８（第 233・248 ～ 251 図、第 29・75 表、図版 86・99・169）

３区中央の 7a-9C-2b・3a・3b グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。本遺構は、２～ 11 柱穴によって構成される。桁行３間（5.1m）、梁行２間（3.8m）の南北棟の側柱建物である。主軸は N-23° -E をとり、平面積は 19.6㎡を測る。柱間寸法は桁筋が 1.6 ～ 1.7m、梁筋が 1.9m で柱筋の通りは良い。

柱穴の平面形は不整な円形を呈し、断面形は逆台形状である。北辺中心部の 11 柱穴は他に比較して小規模であり、西辺の９柱穴は暗渠により３分の２ほど削平され全容は不明である。柱穴の規模は９・11 柱穴を除き長軸 0.52 ～ 0.72m、短軸 0.55 ～ 0.68m、底面の標高は 63.67 ～ 64.08m を測る。２～４・６・７・９・10 柱穴の掘方埋め土は、Ⅵ層に由来するブロックを含む黒褐色シルトと黒色シルトを丁寧に互層に搗き固めている。５・８柱穴では直径約 20cm の柱痕跡が確認された。

第 251 図は掘立柱建物８の柱穴より出土した遺物をまとめている。Po237 は外側に向けて立ち上がる土師器坏の口縁部と推測される。Po238 は外面に平行タタキ、内面に同心円状当て具痕が観察される須恵器甕の体部である。

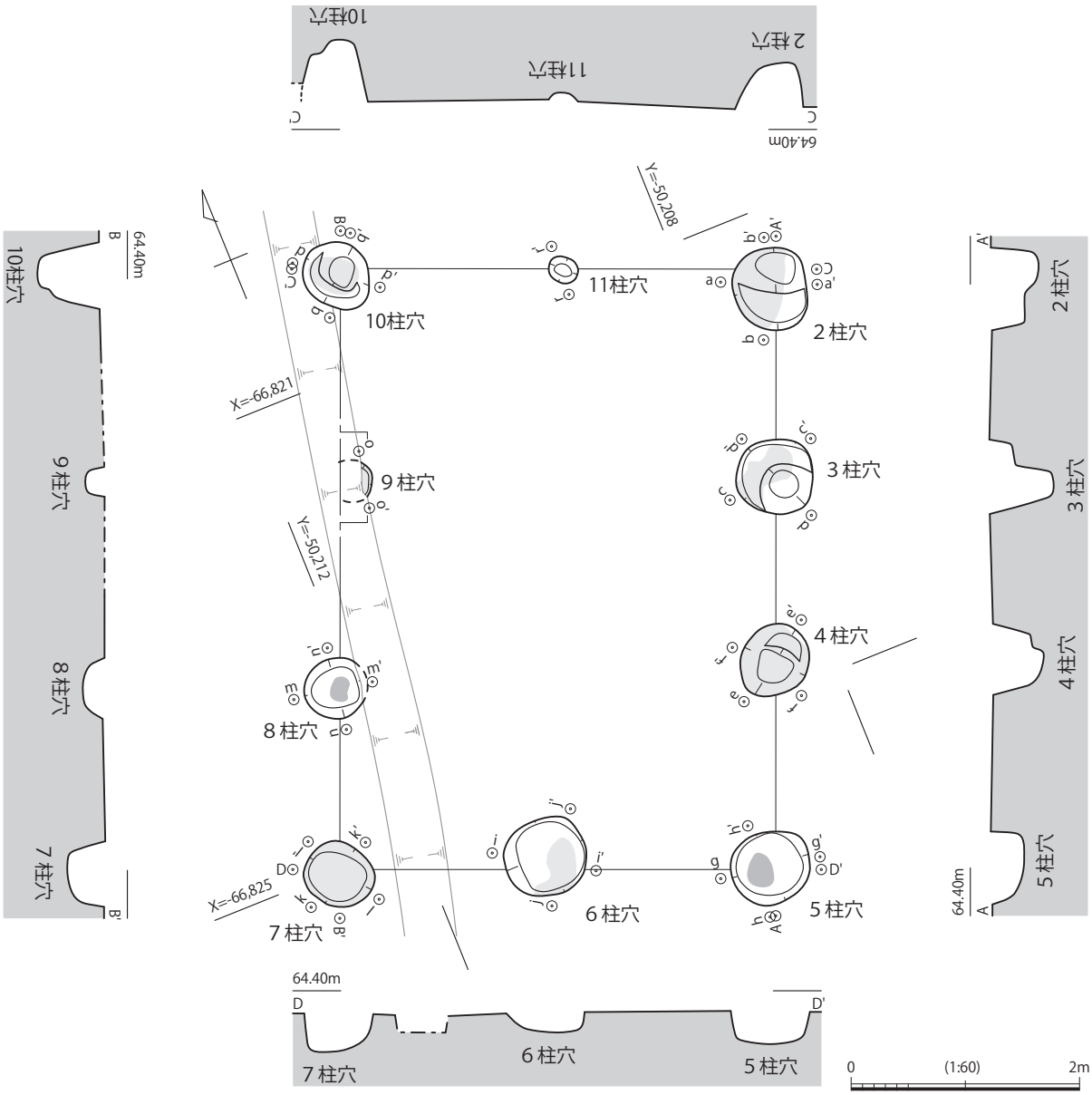
本建物の帰属時期は、出土遺物から判断し８世紀と考えられる。

２柱穴（第 248・249・251 図、第 31・38・75 表、図版 100・169）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.73m、短軸 0.63m、検出面からの深さ 0.36m を測る。底面標高は 63.80m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３・４層が堆積する。底面は北側が若干深く、南側には半月形のテラス面があり、段掘りとなっている。柱は北側に据えられたものと推定する。遺物は、埋土から土師器の坏 Po237 が出土している。

３柱穴（第 248・249 図、第 31・38 表、図版 100）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.71m、短軸 0.68m、検出面からの深さ 0.53m を測る。底



第 248 図　掘立柱建物８

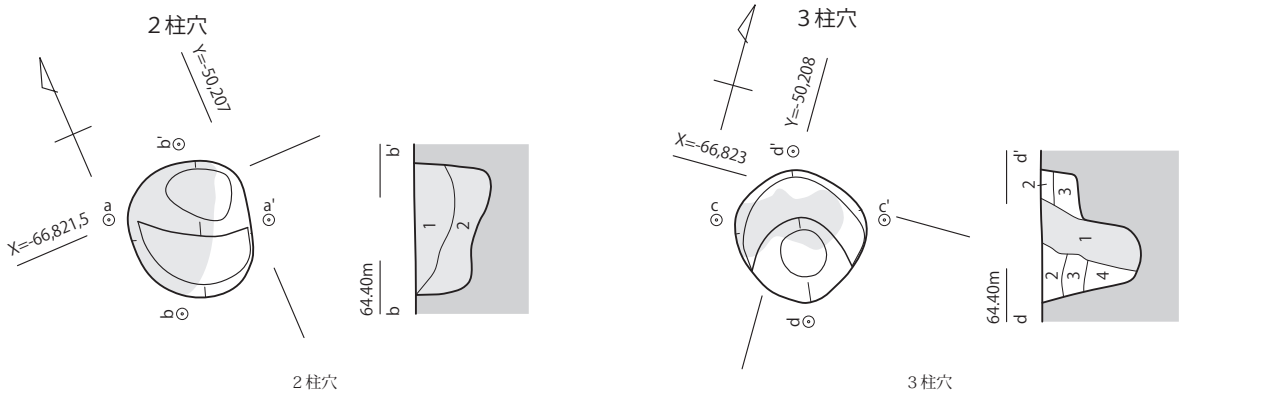
面標高は 63.67m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２～４層が堆積する。底面北側には半月形のテラス面があり、段掘りとなっている。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

４柱穴（第 248・249 図、第 31・38 表、図版 100・101）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.67m、短軸 0.59m、検出面からの深さ 0.46m を測る。底面標高は 63.73m。埋土はⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３・４層が堆積する。底面東側には半月形のテラス面があり、段掘りとなっている。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

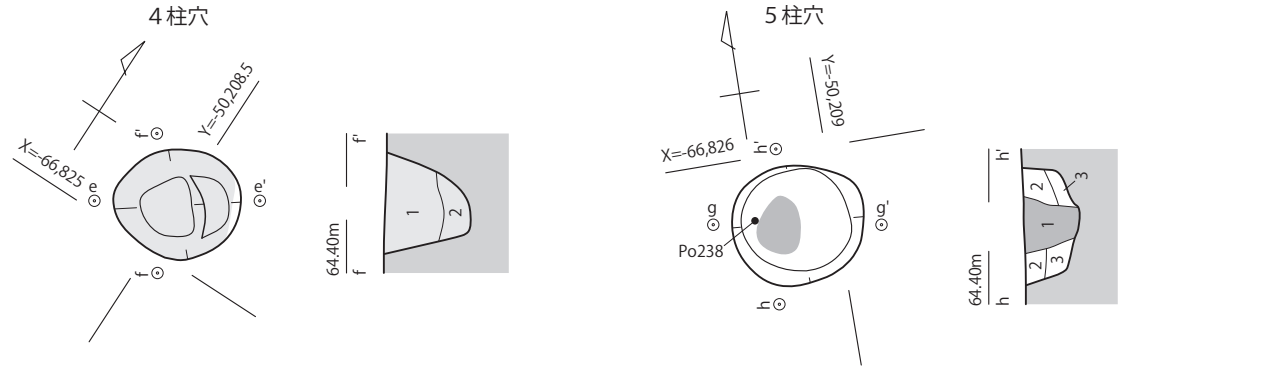
５柱穴（第 248・249・251 図、第 31・38・75 表、図版 101・169）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.70m、短軸 0.63m、検出面からの深さ 0.29m を測る。底



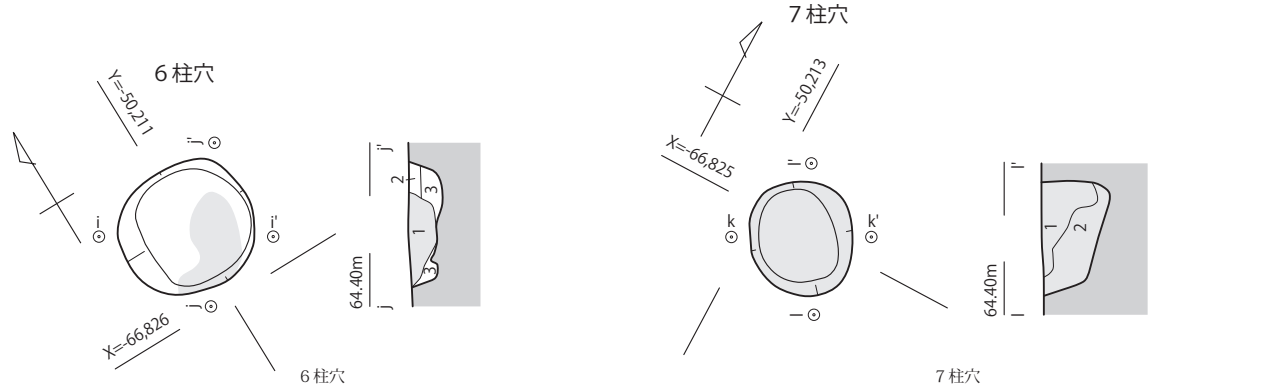
２柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR8/4 浅黄橙色 シルト (10YR6/2 灰黄褐色 シルトφ2～3cmブロック混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり弱
4　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2～3cmブロック混)　粘性中　しまり弱

３柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック密混)　粘性中　しまり中
3　10YR5/2 灰黄褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2cmブロック密混)　粘性中　しまり強
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中



４柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり弱
2　2.5Y8/4 浅黄橙色 シルト (10YR2/1 黒色 シルトφ1cmブロック少混)　粘性強　しまり強
3　10YR5/1 灰黄褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック少混)　粘性中　しまり中
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2～5cmブロック多混)　粘性中　しまり中

５柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)
粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2～5cmブロック密混)
粘性中　しまり中
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ3～5cmブロック混)
粘性中　しまり中



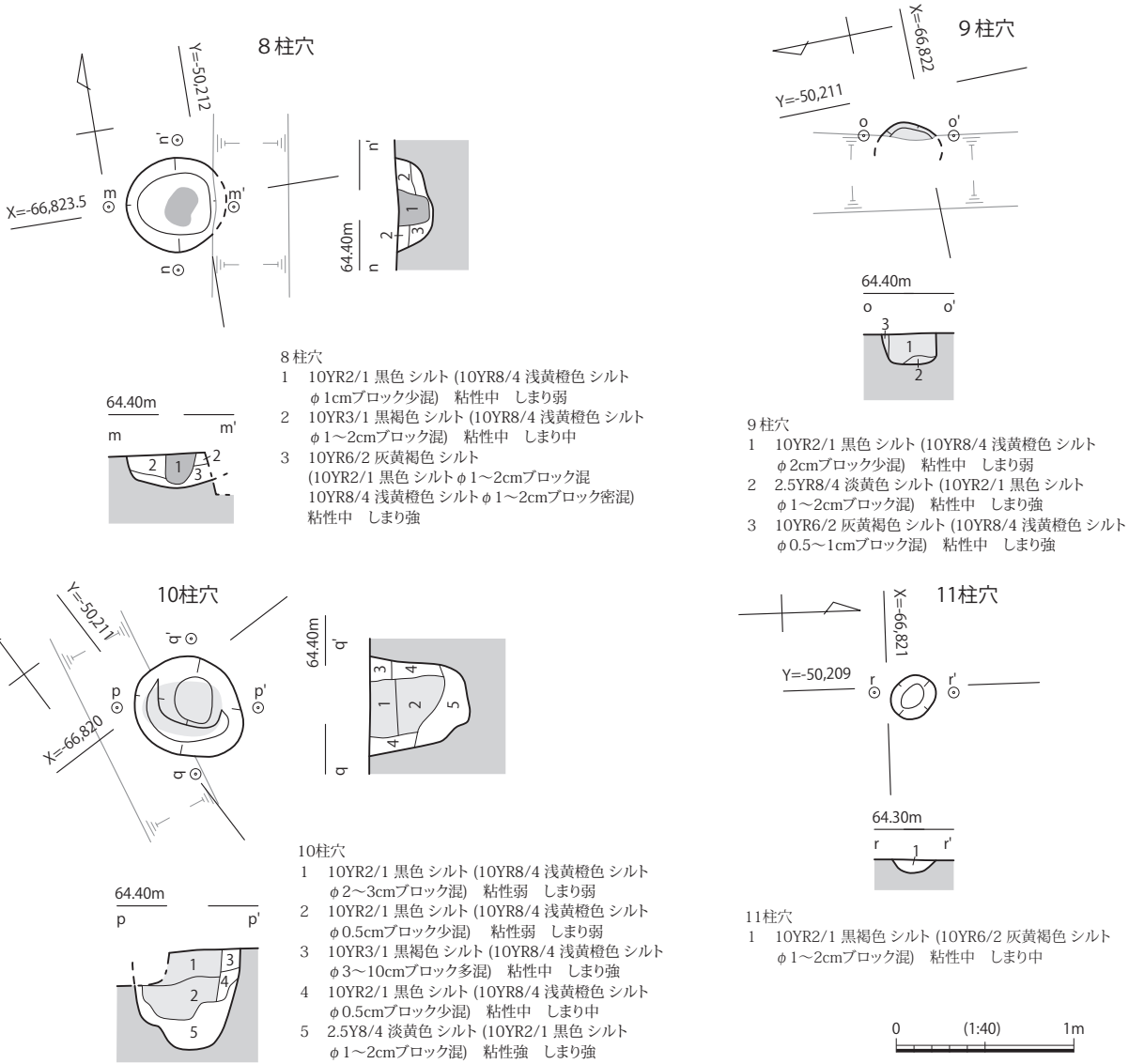
６柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～3cmブロック少混)
粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ3～5cmブロック多混)
粘性中　しまり中
3　10YR5/2 灰黄褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2～5cmブロック多混)
粘性強　しまり強

７柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ3～5cmブロック混)
粘性中　しまり弱
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ3～5cmブロック密混)
粘性中　しまり中

凡　例
● 土器

0　(1:40)　1m

第 249 図　掘立柱建物８　２～７柱穴



第 250 図　掘立柱建物８　８～ 11 柱穴

第 251 図　掘立柱建物８出土土器

面標高は63.92m。埋土は柱痕跡の１層と、Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２・３層が堆積する。底面は概ね平坦である。３層から須恵器甕の体部片 Po238 が出土している。

６柱穴（第 248・249 図、第 31・38 表、図版 101・102）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.73m、短軸 0.67m、検出面からの深さ 0.15m を測る。底面標高は 64.02m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２・３層が堆積する。５柱穴と同じく底面はほぼ平坦である。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

７柱穴（第 248・249 図、第 31・38 表、図版 102）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.62m、短軸 0.55m、検出面からの深さ 0.30mを測る。底面標高は 63.84m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層が堆積する。底面は北側が若干深くなっている。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

８柱穴（第 248・250 図、第 31・38 表、図版 102）

東側の一部が暗渠によって削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.52m、短軸 0.50m、検出面からの深さ 0.20mを測る。底面標高は 63.99m。埋土は柱痕跡である１層と、Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２・３層が堆積する。柱の高さ調整のために、底面に３層を充填する。底面は南側が若干深いが、段掘りという程度ではない。遺物は出土していない。

９柱穴（第 248・250 図、第 31・38 表、図版 102・103）

暗渠によってほぼ削平され、東側がわずかに残存するが平面形は不明である。残存規模は長軸 0.31m、短軸 0.10m、検出面からの深さ 0.17mを測る。底面標高は 64.00m。埋土はⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～３層が堆積する。遺物は出土していない。

10 柱穴（第 248・250 図、第 31・38 表、図版 103）

西側の一部が暗渠によって削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.60m、短軸 0.57m、検出面からの深さ 0.56mを測る。底面標高は 63.59m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層と、同じくⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３～５層が堆積する。柱の高さ調整のため、底面に５層を充填している。底面の南西側にはテラス面があり、段掘りとなっている。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

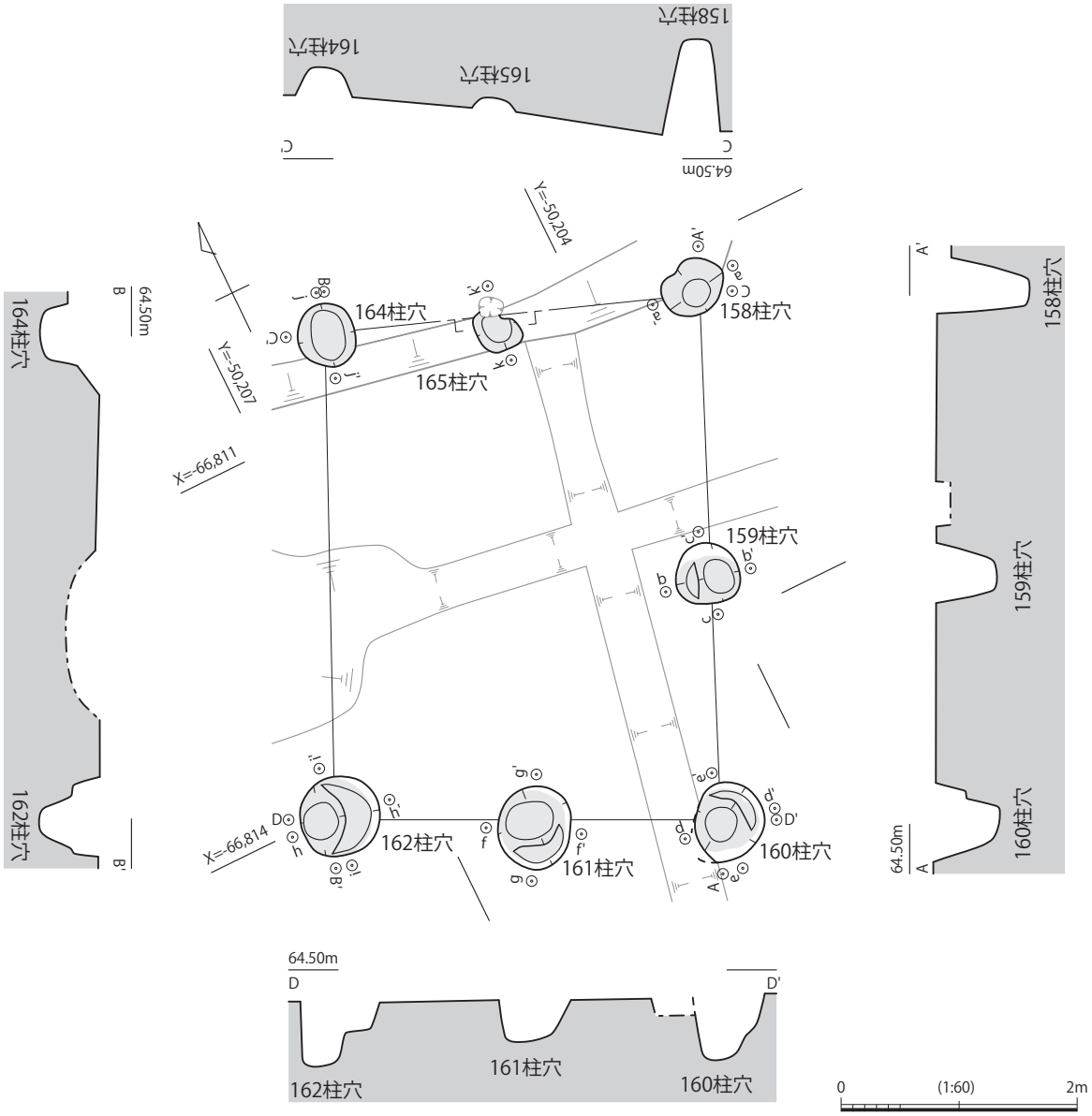
11 柱穴（第 248・250 図、第 31・38 表、図版 103）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.26m、短軸 0.22m、検出面からの深さ 0.08mを測る。底面標高は 64.08m。埋土は灰黄褐色シルトブロックを含む掘方埋め土の１層のみ堆積する。他の柱穴と規模や形態が異なり、柱穴としても簡易な造りである。遺物は出土していない。

掘立柱建物９（第 233・252 ～ 254 図、第 29 表、図版 86・104）

３区中央北端 7a-9C-2a グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。本遺構は、158 ～ 162・164 ・ 165 柱穴によって構成される。桁行２間（4.5m）、梁行２間（3.3m）の南北棟の側柱建物である。主軸は N-23° -Eをとり、平面積は 14.0㎡を測る。柱間寸法は桁筋が 2.1 ～ 2.4m、梁筋が 1.7mで柱筋の通りは概ね良い。

柱穴の平面形は不整円形、断面形は逆台形状である。本来存在した西辺中央の柱穴と 165 柱穴は暗渠により大半が削平されている。柱穴の規模は長軸 0.44 ～ 0.71m、短軸 0.45 ～ 0.68m、底面の標高は 165 柱穴を除き 63.48 ～ 63.98mを測る。柱は全て抜き取られており、160 ・ 161 柱穴の柱抜き取り痕跡からは風化しているが、赤彩土師器小片が点在して出土している。掘方埋め土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む黒褐色あるいは灰黄色シルトを主体とし、丁寧に互層に搗き固めている。



第 252 図　掘立柱建物９

本建物の帰属時期は、図化していないが、出土遺物から判断し８世紀と考えられる。

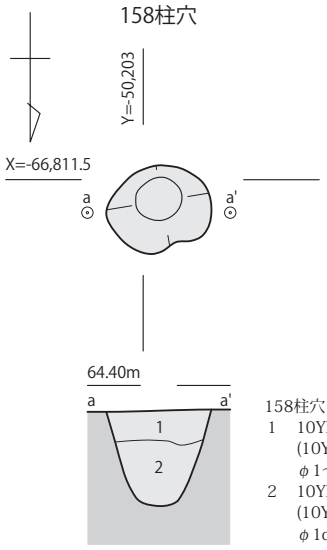
以下、各柱穴について記述する。

158 柱穴（第 252・253 図、第 31・38 表、図版 104）

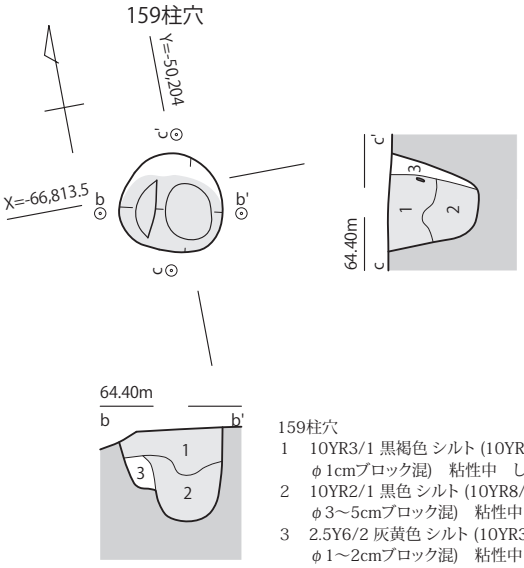
平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.56m、短軸 0.45m、検出面からの深さ 0.50mを測る。底面標高は 63.48m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

159 柱穴（第 252・253 図、第 31・38 表、図版 104・105）

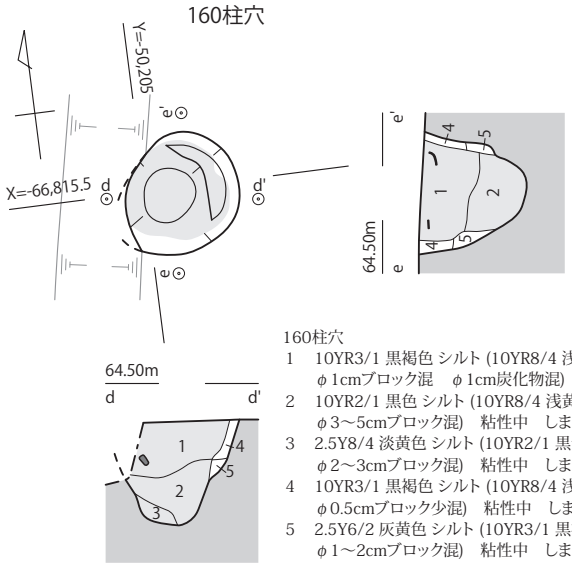
平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.55m、短軸 0.55m、検出面からの深さ 0.49mを測る。底面標高は 63.76m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層と、同じくⅢ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３層が堆積する。底面の西側には半月形のテラス面があり、段掘りとなっている。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。



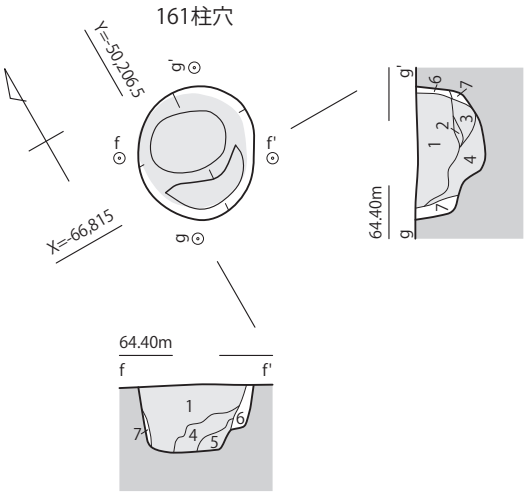
158柱穴
1　10YR6/2 灰黄褐色 シルト
(10YR8/4 浅黄橙色 シルト
φ1～3cmブロック多混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト
(10YR8/4 浅黄橙色 シルト
φ1cmブロック混)　粘性中 しまり中



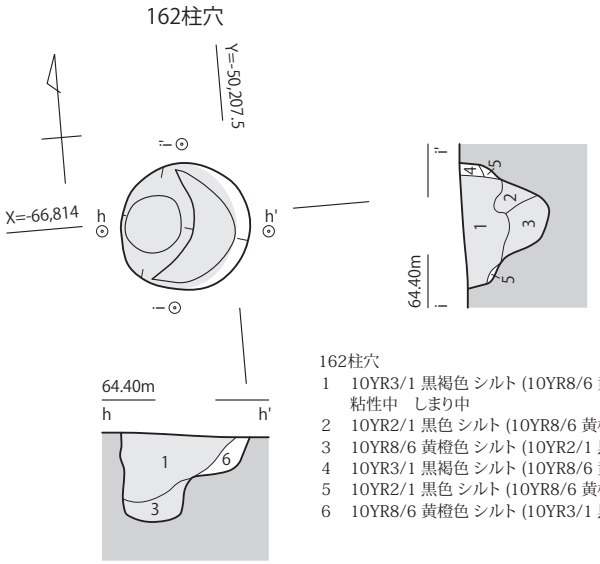
159柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
φ1cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 黄橙色 シルト
φ3～5cmブロック混)　粘性中　しまり弱
3　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト
φ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中



160柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
φ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
φ3～5cmブロック混)　粘性中　しまり弱
3　2.5Y8/4 淡黄色 シルト (10YR2/1 黒色 シルト
φ2～3cmブロック混)　粘性中　しまり弱
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
φ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり強
5　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト
φ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中



161柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混)
粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック多混)
粘性中　しまり中
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)
粘性中　しまり中
4　10YR8/6 黄橙色 シルト (10YR2/1 黒色 シルトφ1～2cmブロック混)
粘性中　しまり中
5　10YR2/1 黒色 シルト(10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)
粘性中　しまり中
6　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック少混)
粘性中　しまり強
7　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ0.5cmブロック混)
粘性中　しまり強



162柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混　φ1cm炭化物混)
粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック多混)　粘性中　しまり弱
3　10YR8/6 黄橙色 シルト (10YR2/1 黒色 シルトφ2～3cmブロック多混)　粘性中　しまり弱
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり中
5　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック多混)　粘性中　しまり中
6　10YR8/6 黄橙色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ2～3cmブロック多混)　粘性中　しまり強

0　(1:40)　1m

第 253 図　掘立柱建物９　158 ～ 162 柱穴

160 柱穴（第 252・253 図、第 31・38 表、図版 105）

西側の一部が暗渠によって削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.68m、短軸 0.58m、検出面からの深さ 0.55m を測る。底面標高は 63.73m。埋土はⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～３層と、同じくⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の４・５層が堆積する。底面の東側に幅狭いテラス面があり、段掘りとなっている。柱抜き取り痕跡から、図化していないが、土師器小片が出土している。

161 柱穴（第 252・253 図、第 31・38 表、図版 105）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.71m、短軸 0.61m、検出面からの深さ 0.36m を測る。底面標高は 63.89m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～５層と、同じくⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の６・７層が堆積する。底面の南東側に三日月状のテラス面があり、段掘りとなっている。柱抜き取り痕跡から、図化していないが、赤彩土師器小片が出土している。

162 柱穴（第 252・253 図、第 31・38 表、図版 105）

平面形は円形を呈し、規模は長軸 0.70m、短軸 0.68m、検出面からの深さ 0.47m を測る。底面標高は 63.68m。埋土はⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～３層と、同じくⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の４～６層が堆積する。底面の東側に三日月状のテラス面があり、段掘りとなっている。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

164 柱穴（第 252・254 図、第 31・38 表、図版 106）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.56m、短軸 0.49m、検出面からの深さ 0.24m を測る。底面標高は 63.72m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～３層が堆積する。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

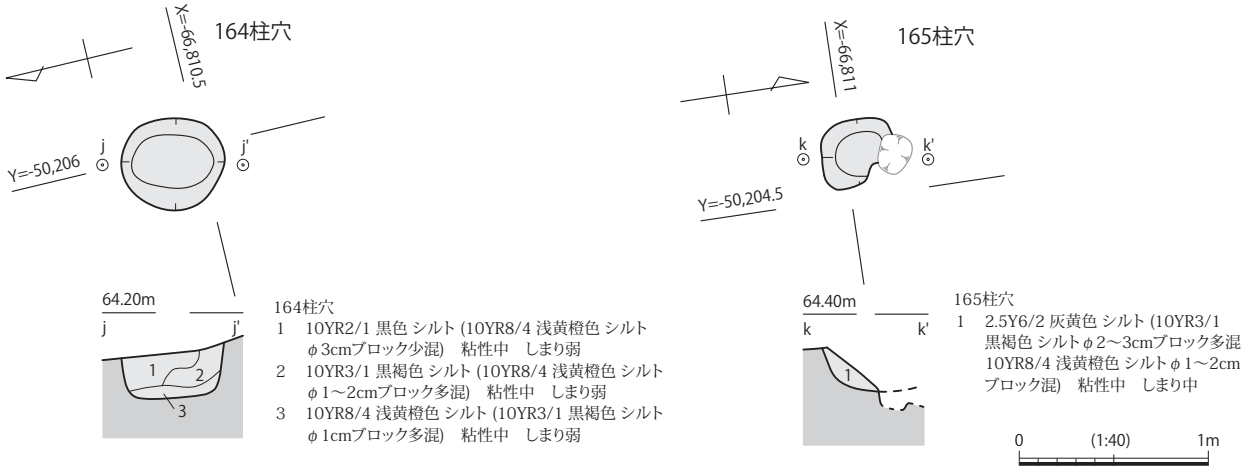
165 柱穴（第 252・254 図、第 31・38 表、図版 106）

北東側は撹乱により削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.44m、短軸 0.30m、検出面からの深さ 0.12m を測る。底面標高は 63.98m。埋土はⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層のみ堆積する。遺物は出土していない。

掘立柱建物 10（第 233・234・255 ～ 258・456 図、第 25・29・38・75 表、図版 86・106・114・169・325）

３区北西 7a-9C-2b・2c・3b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。本遺構は、12 ～ 16・18 ～ 21・80 柱穴によって構成される。19 柱穴が掘立柱建物 12 の 105 柱穴を切っていることから、掘立柱建物 12 より後出する。桁行３間（5.6m）、梁行２間（3.6m）の南北棟の側柱建物である。主軸は N-19° -E をとり、平面積は 20.0㎡を測る。柱間寸法は桁筋が 1.6 ～ 2.2m、梁筋が 1.6 ～ 2.0m で柱筋の通りは良い。

柱穴の平面形は不整（楕）円形または隅丸方形、断面形は逆台形状を呈する。柱穴の規模は長軸 0.52



第 254 図　掘立柱建物９　164・165 柱穴

～ 0.90m、短軸 0.44 ～ 0.73m、底面の標高は 63.83 ～ 64.21mを測る。柱はいずれも抜き取られている。掘方埋め土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む黒色・黒褐色あるいは灰黄色シルトを主体とし、互層に搗き固めている。13 ・ 20 柱穴では柱のあたりが確認されており、直径 0.18mを測る。13 柱穴と 120 柱穴、14 柱穴と 118 ピット、80 柱穴と 17 柱穴、19 柱穴と掘立柱建物 12 の 105 柱穴は重複しており、部分的な補修が行われた可能性を想定している。

なお、本建物周辺には不規則な並びのピットが点在しており、44・82 柱穴、83・84 ピットなども重複しているものであるが、本遺構を構成する柱穴である可能性は低いと考える。

第 258 図は掘立柱建物 10 の柱穴より出土した遺物をまとめている。Po239 は赤彩された土師器の坏である。内外面ナデている。Po240 は赤彩された土師器の坏もしくは皿の口縁から体部破片である。内面にハケ後ヨコナデ調整がみられる。Po241 は手づくね成形のミニチュア土器の口縁部から体部破片である。Po242 は須恵器坏蓋の口縁部で天井部が比較的高く立ち上がる。Po243 は外面に平行タタキ、内面に同心円状当て具痕を施す須恵器甕の体部片である。また、椀形鍛冶滓 F50 が出土した。

本建物の帰属時期は、出土遺物から判断し８世紀と考えられる。

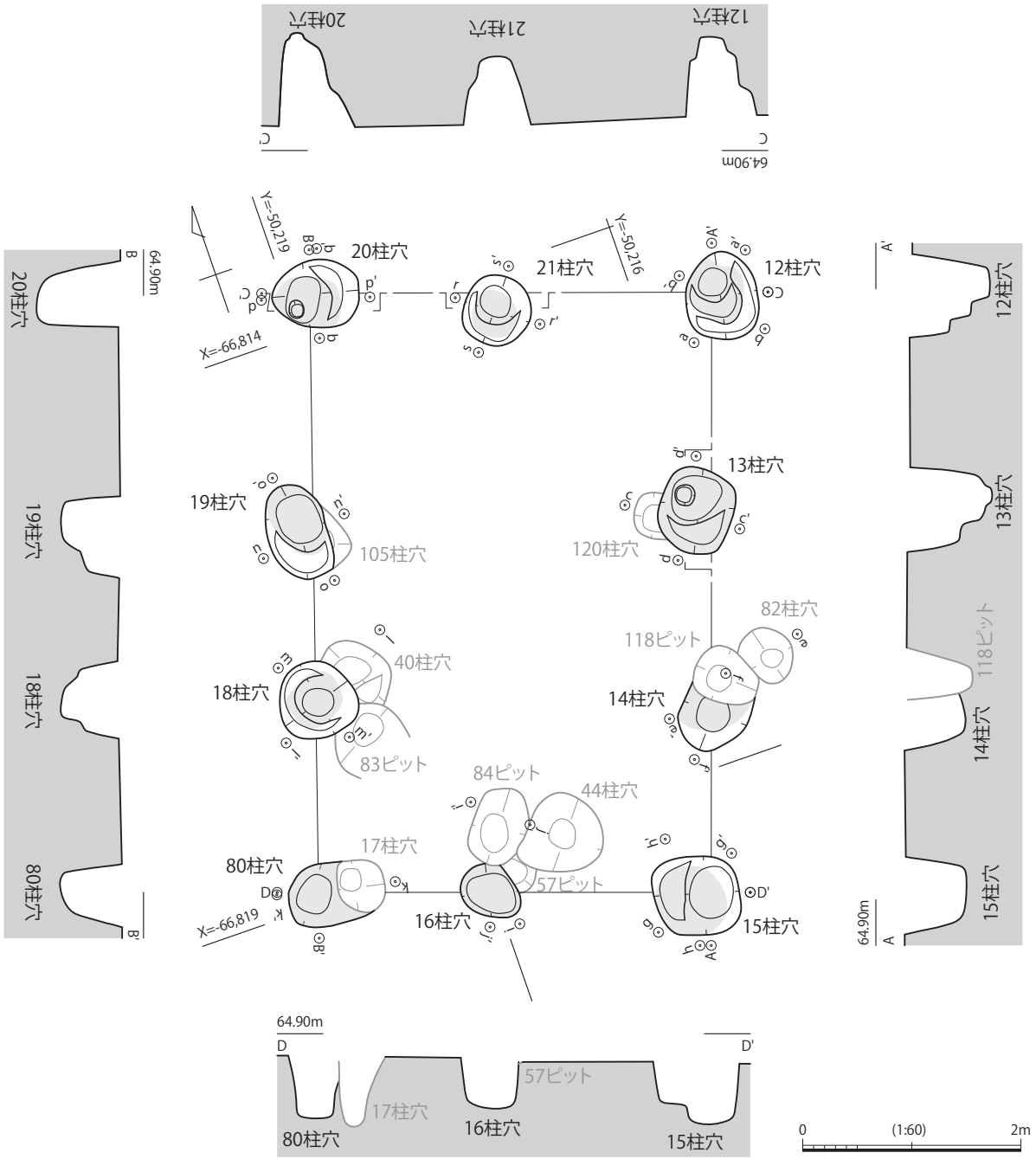
以下、各柱穴について記述する。

12 柱穴（第 255・256 図、第 32・38 表、図版 107）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.81m、短軸 0.66m、検出面からの深さ 0.70mを測る。底面標高は 63.85m。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡１層と、Ⅴ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２～４層が堆積する。柱抜き取り痕跡の上層で拳大の礫が２点出土している。底面の南側に三日月状のテラス面があり､段掘りとなっている。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

13 柱穴（第 255・256・258 図、第 32・38・75 表、図版 107・169）

西側で 120 柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.80m、短軸 0.68m、検出面からの深さ 0.76mを測る。底面標高は 63.83m。埋土はⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～３層が堆積する。北西側に直径 0.18mの柱あたりが確認された。底面の南西側に

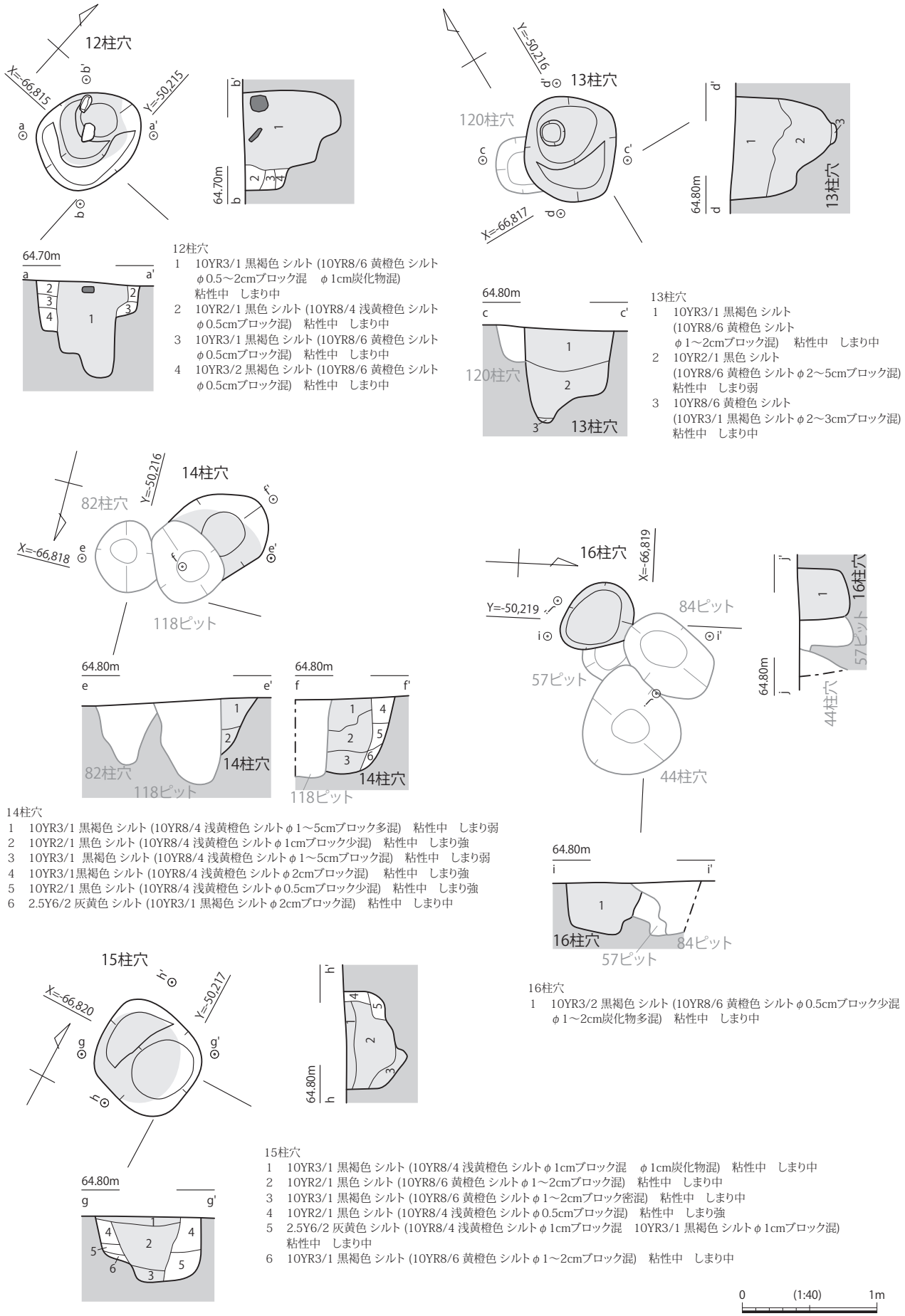


第 255 図　掘立柱建物 10

三日月状のテラス面があり、段掘りとなっている。柱抜き取り痕跡から内外面赤彩の土師器坏 Po239 が出土している。

14 柱穴（第 255・256 図、第 32・38 表、図版 107・108）

北東側を 118 ピットに切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.62m、短軸 0.47 m、検出面からの深さ 0.55m を測る。底面標高は 64.07m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～３層と、同じくⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の４～６層が堆積する。柱抜き取り痕跡から図化していないが土師器小片が出土している。



第 256 図　掘立柱建物 10　12 ～ 16 柱穴

15 柱穴（第 255・256 図、第 32・38 表、図版 108）

平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸 0.78m、短軸 0.73m、検出面からの深さ 0.49mを測る。底面標高は 64.07m。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～３層と、同じくⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土４～６層が堆積する。底面の北西側に半月状のテラス面があり、段掘りとなっている。遺物は土器片や鉄滓が出土したが、小片のため図化していない。

16 柱穴（第 255・256 図、第 32・38 表、図版 108）

北東側で 84 ピットに切られ、南東側で 57 ピットを切っている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.54m、短軸 0.47m、検出面からの深さ 0.39mを測る。底面標高は 64.21m。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

80 柱穴（第 255・257 図、第 32・38 表、図版 109）

東側を 17 柱穴に切られる。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸 0.72m以上、短軸 0.56m、検出面からの深さ 0.57mを測る。底面標高は 64.12m。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層が堆積する。柱抜き取り痕跡から図化していないが土師器小片が出土している。

18 柱穴（第 255・257 図、第 32・38 表、図版 109）

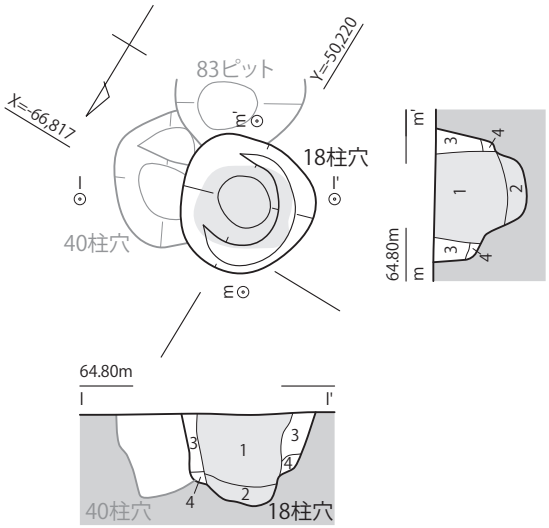
南東側で 83 ピット、北東側で 40 柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.70m、短軸 0.69m、検出面からの深さ 0.48mを測る。底面標高は 64.14m。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３・４層が堆積する。底面の西側に三日月状のテラス面があり、段掘りとなっている。柱抜き取り痕跡から図化していないが土師器小片が出土している。

19 柱穴（第 255・257・258・456 図、第 25・32・38・75 表、図版 109・110・169・325）

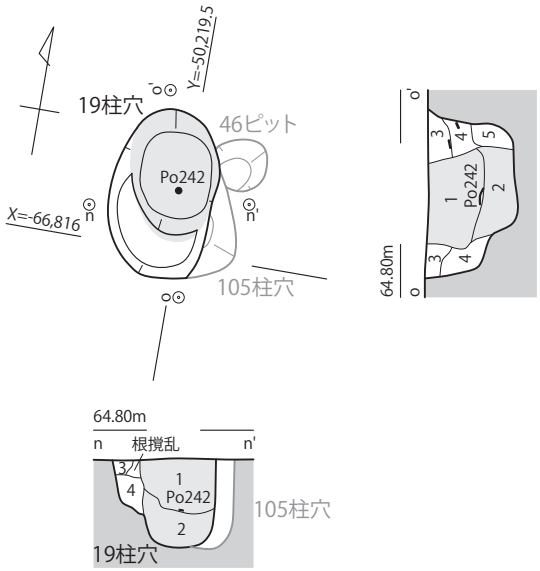
東側で 46 ピットと 105 柱穴を切っている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸 0.90m、短軸 0.55m、検出面からの深さ 0.48mを測る。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡１・２層と、Ⅴ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土３～５層が堆積する。底面の南側に三日月状のテラス面があり、段掘りとなっている。遺物は、柱抜き取り痕跡の１層から須恵器蓋 Po242、埋土中から椀形鍛冶滓 F50 が出土している。

20 柱穴（第 255・257・258 図、第 32・38・75 表、図版 110・169）

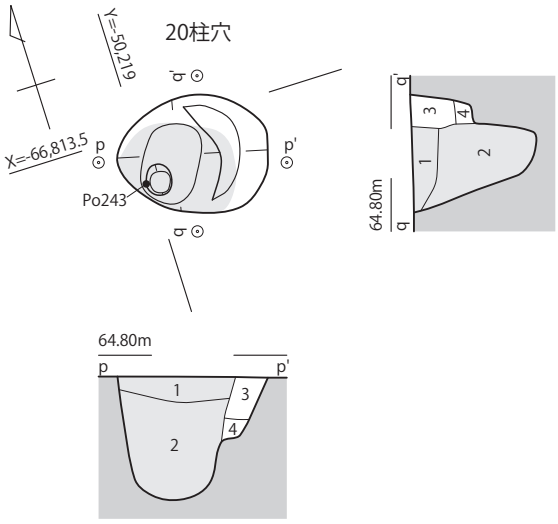
平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.80m、短軸 0.63m、検出面からの深さ 0.66mを測る。底面標高は 63.82m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡１・２層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土３・４層が堆積する。底面の東側には三日月状のテラス面があり、段掘りとなっている。柱抜き取り痕跡から須恵器甕体部 Po243、埋土からミニチュア土器 Po241 が出土している。



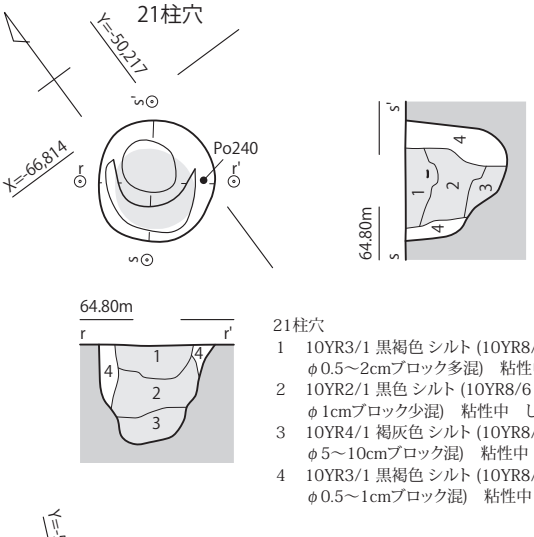
18柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5～1cmブロック少混)
　粘性中　しまり中
2　10YR3/2 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ2cmブロック多混)
　粘性中　しまり中
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混)
　粘性中　しまり中
4　10YR3/2 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック多混)
　粘性中　しまり中



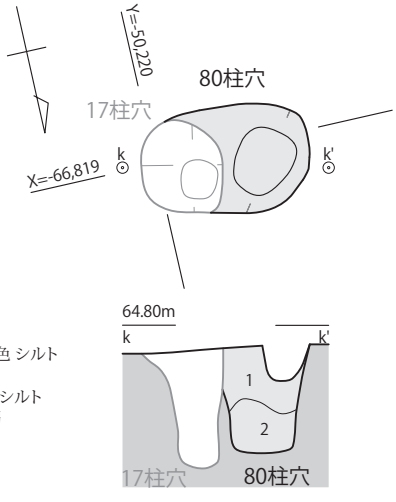
19柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ2～3cmブロック混)
　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混)
　粘性中　しまり中
3　10YR3//1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック少混)
　粘性中　しまり中
4　10YR4/1 褐灰色 シルト 粘性中　しまり中
5　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混)
　粘性中　しまり中



20柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
　φ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
　φ2～3cmブロック混)　粘性中　しまり中
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
　φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり強
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
　φ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり強



21柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト
　φ0.5～2cmブロック多混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト
　φ1cmブロック少混)　粘性中　しまり中
3　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト
　φ5～10cmブロック混)　粘性中　しまり中
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト
　φ0.5～1cmブロック混)　粘性中　しまり中

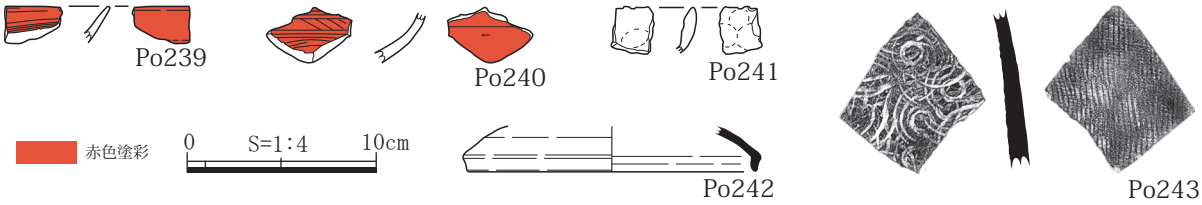


80柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
　φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり強
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト
　φ1～3cmブロック多混)　粘性中　しまり弱

凡　例
● 土器

0　(1:40)　1m

第 257 図　掘立柱建物 10　18 ～ 21・80 柱穴



第 258 図　掘立柱建物 10 出土土器

21 柱穴（第 255・257・258 図、第 32・38・75 表、図版 111・169）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.64m、短軸 0.61m、検出面からの深さ 0.52mを測る。底面標高は 64.04m。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡１～３層と、同じくⅤ層に由来するブロックを含む掘方埋め土４層が堆積する。底面の南西側には三日月状のテラス面があり、段掘りとなっている。柱抜き取り痕跡から坏と考えられる内外面赤彩の土師器 Po240、掘方埋め土から図化していないが土師器小片が出土している。

掘立柱建物 10 周辺遺構（第 234・259 ～ 261 図）

掘立柱建物 10 の 13・14・16・18・80 柱穴と重複関係を持つ 17・40・41・120 柱穴、83・84・89 ・ 118 ピットを報告する。また、直接切り合い関係は見られないが、柱穴周辺に位置する 23・44・62・78・82 柱穴、43・46・57・63・66・81・85・152 ピットを取り上げる。

44 柱穴（第 234・259 図、第 33 表、図版 108）

３区 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。西側で 84 ・ 57 ピットを切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.72m、短軸 0.70m、検出面からの深さ 0.50mを測る。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の黒褐色シルト１層と、同じくⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む黒色・黒褐色シルト２～４層が堆積する。掘方埋め土は、互層に搗き固めている。

なお、１層から出土した炭化材（試料 36）について放射性炭素年代測定を実施したところ、calAD414-482（暦年較正２σの確率１位）の値が得られており、出土した遺物の年代観と乖離している。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

43 ピット（第 234・259 図、第 33 表）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。北西側で 83 ピット、南東側で 85 ピットを切っている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸 0.92m、短軸 0.69m、検出面からの深さ 0.44mを測る。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む上層の１層と下層の２層が堆積する。図化していないが１層から土師器小片が出土している。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

57 ピット（第 234・259 図、第 33 表、図版 108）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。北側を 44 柱穴・84 ピット、西側を 16 柱穴に切られる。平面形は不明で、残存規模は長軸 0.31m、短軸 0.19m、検出面からの深さ 0.37

ｍを測る。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む上層の１層と下層の２層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

83 ピット（第 234・259・261 図、第 33・75 表、図版 133・172）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。北西側を 18 柱穴、南東側を 43 ピットに切られる。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.68m、短軸 0.36m、検出面からの深さ 0.39ｍを測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む黒褐色シルトが堆積する。Po247は17柱穴と83ピット埋土から出土した須恵器が接合したもので、壺の口縁部か。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

84 ピット（第 234・259 図、第 33 表、図版 108）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。東側を 44 柱穴に切られ、西側で 85 ピット、南側で 16 柱穴・57 ピットを切っている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸 0.71ｍ、短軸 0.49m、検出面からの深さ 0.40mを測る。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む黒褐色・黒色シルトの１～３層が堆積する。遺物は土器片や鉄滓が出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

85 ピット（第 234・259 図、第 33 表）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。北西側を 43 ピットに、東側で 84 ピットに切られている。平面形は不明で、残存規模は長軸 0.93m、短軸 0.44m、検出面からの深さ 0.38ｍを測る。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む黒褐色シルトの１層、黒色シルトの２層が堆積する。埋土から図化していないが、土師器小片が出土している。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

17 柱穴（第 234・259・261 図、第 32・75 表、図版 172）

３区北西 7a-9C-2b・2c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。西側で 80 柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.52m、短軸 0.44m、検出面からの深さ 0.62mを測る。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の黒褐・黒色シルトの１～３層が堆積する。Po247 は 17 柱穴と 83 ピット埋土から出土した須恵器が接合したもので、壺の口縁部か。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

66 ピット（第 234・259 図、第 33 表）

３区北西 7a-9C-2c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。80 柱穴と入れ子状になり、切っている。平面形は円形を呈し、規模は長軸 0.24m、短軸 0.24m、検出面からの深さ 0.19mを測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む褐灰色シルトの単層である。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

120 柱穴（第 234・259 図、第 33 表）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。南東側で 13 柱穴に切られている。平面形は円形を呈し、残存規模は長軸 0.43m、短軸 0.22m、検出面からの深さ 0.26mを測る。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む黒褐色・黒色シルトの柱抜き取り痕跡の１・２層と、Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３層が堆積する。遺物は土器片は出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

40 柱穴（第 234・259 図、第 33 表、図版 109）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。西側で 18 柱穴に切られ、東側で 41 柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.68m、短軸 0.36m、検出面からの深さ 0.44mを測る。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の黒褐色・黒色シルトの１・２層が堆積する。遺物は鉄滓が出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

41 柱穴（第 234・259 図、第 33 表、図版 109）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。西側で 40 柱穴に切られ、東側で 78 柱穴を切っている。平面形は不明で、残存規模は長軸 0.55m、短軸 0.28m、検出面からの深さ 0.47mを測る。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層と、同じくⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３～５層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

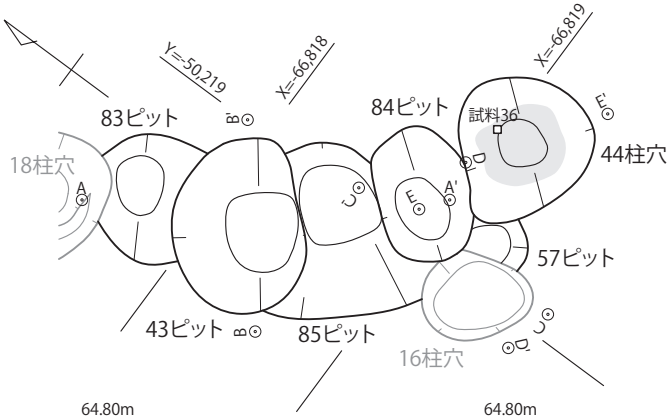
78 柱穴（第 234・259 図、第 33 表、図版 109）

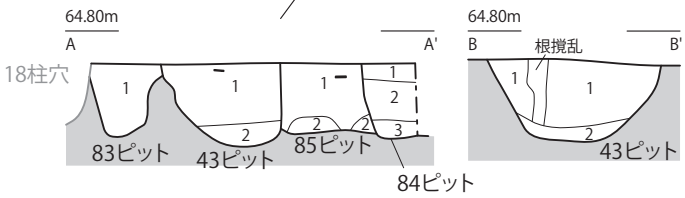
３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。西側で 41 柱穴に切られる。平面形は不明で、残存規模は長軸 0.58m、短軸 0.28m、検出面からの深さ 0.34mを測る。埋土はⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層である。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

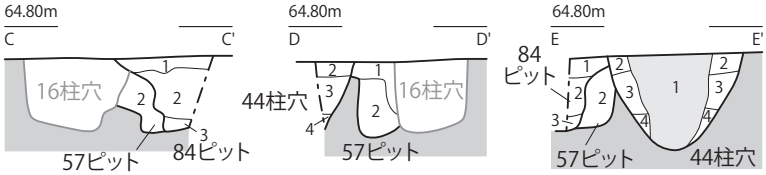
本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

23 柱穴（第 234・260・261 図、第 32・75 表・図版 132・172）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。南側を 15 柱穴に切られ、南東側で 81 ・ 152 ピットを切っている。平面形は隅丸方形を呈し、残存規模は長軸 0.97m、短軸 0.66m、検出面からの深さ 0.47mを測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～３層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の４～６層が堆積する。柱抜き取り痕跡から土師器 Po244・245 が出土している。Po244・245 は 23 柱穴から出土した内外面赤彩土師器の皿もしくは坏である。前者は口縁端部が僅かに外側へ張り出す。後者はやや厚みのある器壁を有し、体部が湾曲しながら口縁部へ向かい立ち上がる。







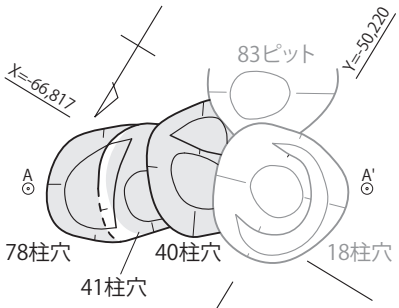
43ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～5cmブロック混)　粘性中　しまり弱

44柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり強
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり強
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中

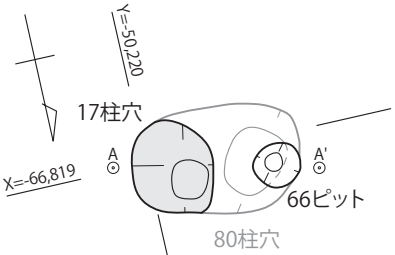
57ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり中

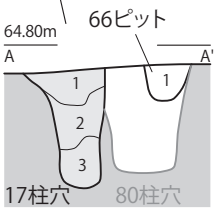
83ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり中

84ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり強
3　10YR3/1 黒褐色 シルト(10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中



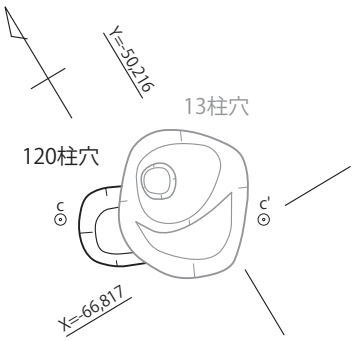
85ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック少混)　粘性中　しまり弱

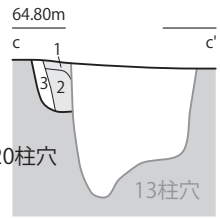




17柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5～2cmブロック混)　粘性中　しまり強
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ2cmブロック少混)　粘性中　しまり強
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック多混)　粘性中　しまり弱

66ピット
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり中





120柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり強
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり強

40柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混　炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり強

41柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ2～3cmブロック多混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
4　10YR3/1 黒褐色 シルト　粘性中　しまり中
5　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ2cmブロック混)　粘性中　しまり中

78柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ2～3cmブロック混)　粘性中　しまり中

凡　例
炭化物

0　(1:40)　1m

第 259 図　17・40・41・44・78・120 柱穴、43・57・66・83 ～ 85 ピット

なお、１層から出土した炭化材２点（試料 35・38）について放射性炭素年代測定を実施したところ、calAD726-773（試料 35）、calAD651-703（試料 38）（いずれも暦年較正２σの確率１位）の値が得られており、前者は出土した遺物の年代観と概ね調和している。

本遺構の帰属時期は、８世紀と考えられる。

152 ピット（第 234・260 図、第 33 表）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。南側で 81 ピットを切り、西側を 23 柱穴に大きく切られている。平面形は楕円形を呈し、残存規模は長軸 0.37m、短軸 0.10m、検出面からの深さ 0.35mを測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む黒褐色シルトが上層、灰黄色シルトが下層に堆積する。１層および埋土から図化していないが土器片が出土した。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

62 柱穴（第 234・260 図、第 33 表、図版 108）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。西側で 81 ピット、東側で 63 ピットを切っている。平面形は円形を呈し、規模は長軸 0.60m、短軸 0.55m、検出面からの深さ 0.53m を測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～４層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の５層が堆積する。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

63 ピット（第 234・260 図、第 33 表、図版 132）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。南側を 62 柱穴に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸 0.63m、短軸 0.38m、検出面からの深さ 0.45mを測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む黒色シルトが上層、黒褐色シルトが下層に堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

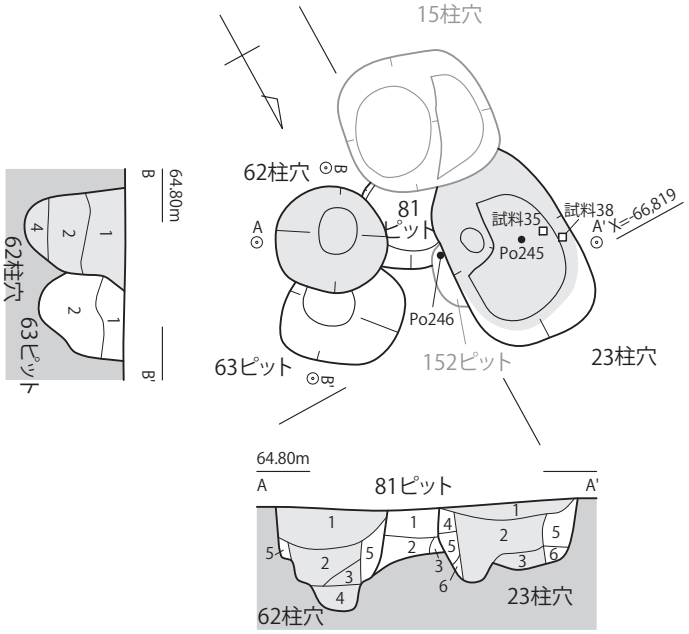
81 ピット（第 234・260・261 図、第 33・75 表、図版 132・133・173）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。南東を 62 柱穴、北西を 23 柱穴に切られている。平面形は不明で、残存規模は長軸 0.51m、短軸 0.28m、検出面からの深さ 0.25m を測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む黒褐色・黒色シルトの１～２層と同じくⅣ層由来のブロックを含む灰黄色シルトの３層が堆積する。遺物は１層中から Po246 が出土している。Po246 は「く」字状に外反する土師器甕の口縁部である。内外面横方向のナデを施す。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

46 ピット（第 234・260 図、第 33 表、図版 109）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。西側で掘立柱建物 10 の 19 柱穴と掘立柱建物 12 の 105 柱穴に切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.28m、短軸 0.26m、検出面からの深さ 0.45mを測る。埋土は上部を掘り抜いてしまい不明であるが、下部

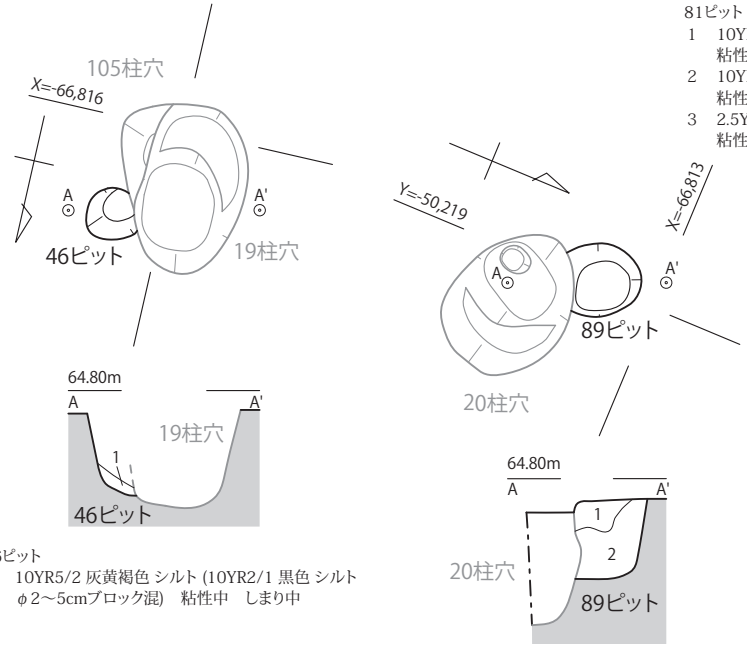


23柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混 φ1cm炭化物多混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり中
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ2cmブロック混)　粘性中　しまり弱
5　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり弱
6　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり強

62柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5～1cmブロック混 φ1cm炭化物多混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり中
3　10YR8/6 黄橙色 シルト (10YR2/1 黒色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
4　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり弱
5　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり強

63ピット
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり中

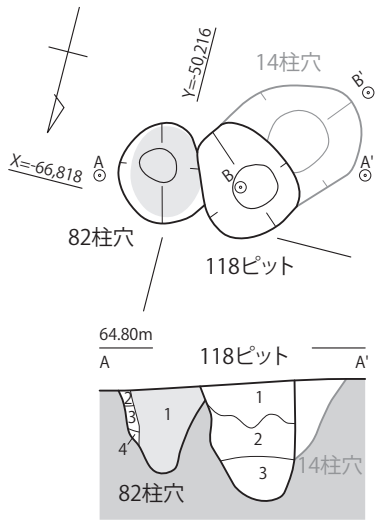
81ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
3　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ2cmブロック混)　粘性中　しまり中

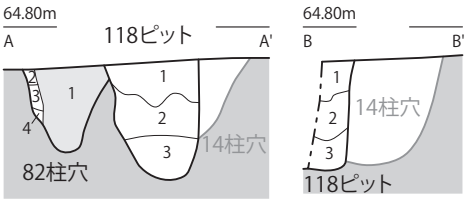


46ピット
1　10YR5/2 灰黄褐色 シルト (10YR2/1 黒色 シルトφ2～5cmブロック混)　粘性中　しまり中

89ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり強

152ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ2～3cmブロック混)　粘性中　しまり中





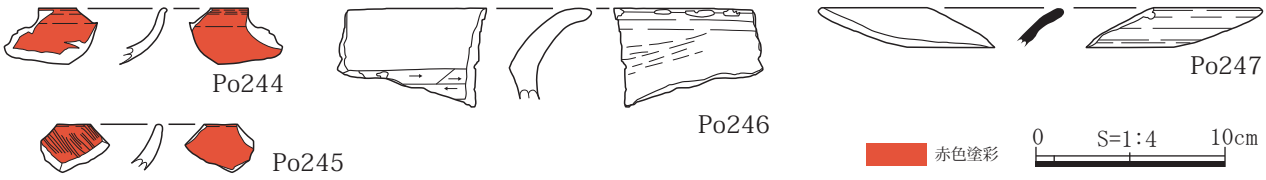
82柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5～1cmブロック混)　粘性中　しまり中(柱抜き取り痕)
2　10YR3/1 黒褐色 シルト　粘性中　しまり強 (掘方埋め土)
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり強 (掘方埋め土)
4　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ2cmブロック混)　粘性中　しまり中 (掘方埋め土)

118ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～5cmブロック混)　粘性中　しまり弱
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック少混)　粘性中　しまり強
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～5cmブロック混)　粘性中　しまり弱

凡例
● 土器
□ 炭化物

0　(1:40)　1m

第 260 図　23・62・82 柱穴、46・63・81・89・118・152 ピット



第 261 図　17・23 柱穴、81・83 ピット出土土器

にⅢ層に由来するブロックを含む灰黄褐色シルトが堆積する。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

89 ピット（第 234・260 図、第 33 表、図版 110）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。南東側を 20 柱穴に切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.39m、短軸 0.35m、検出面からの深さ 0.42m を測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む黒褐色シルトが上層、黒色シルトが下層に堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

82 柱穴（第 234・260 図、第 33 表、図版 133）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。西側を 118 ピットに切られる。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.53m、短軸 0.42m、検出面からの深さ 0.44m を測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層と、Ⅲ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２～４層が堆積する。遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

118 ピット（第 234・260 図、第 33 表、図版 107・108）

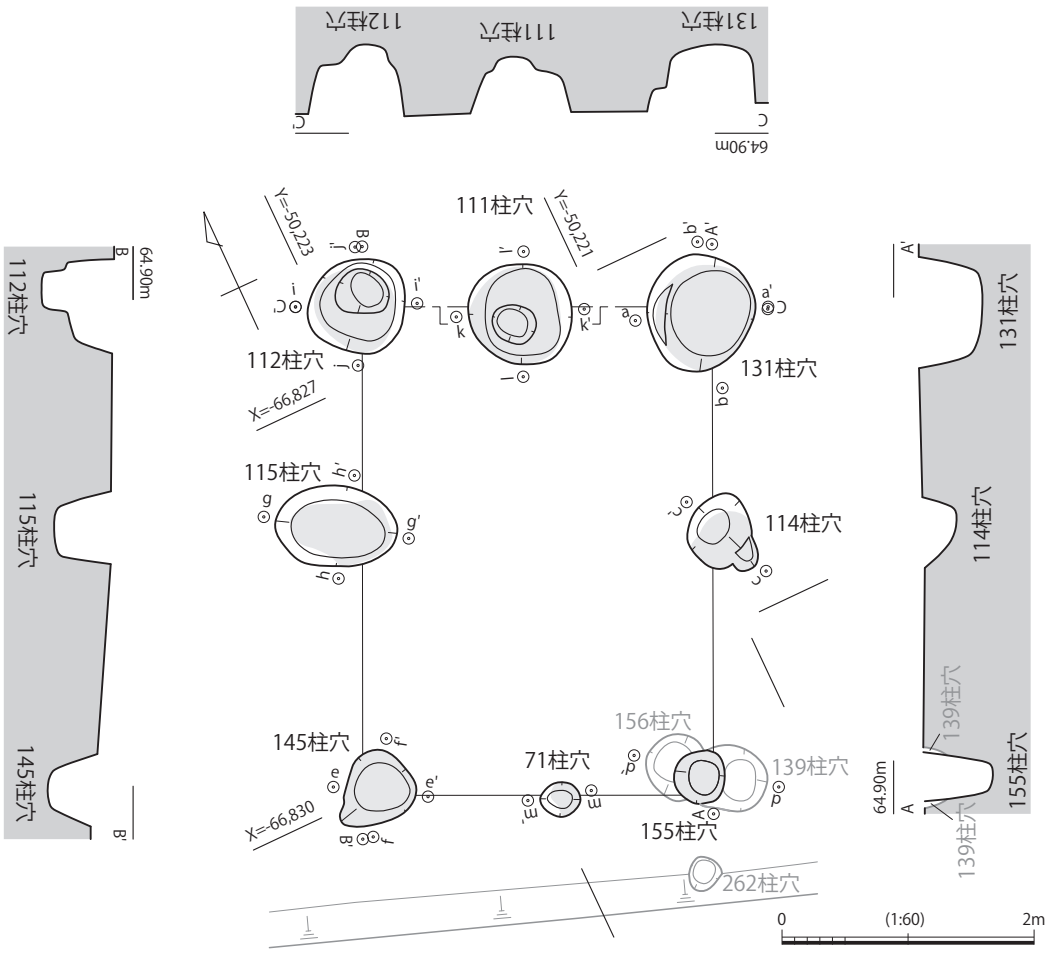
３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。東側で 82 柱穴を、西側で 14 柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.61m、短軸 0.49m、検出面からの深さ 0.62 m を測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む黒褐色シルトと黒色シルトが互層に堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

掘立柱建物 11（第 233・235・262 ～ 264・456 図、第 25・29・75 表、図版 86・111・169・325）

３区南西 7a-9C-3b・3c・4c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。本遺構は、71・111・112・114・115・131・145・155 柱穴によって構成される。桁行２間以上（3.7m）、梁行２間（2.8 m）の南北棟の側柱建物である。主軸は N-23° -E をとり、検出された平面積は 13.4㎡を測る。柱間寸法は桁筋が 1.7 ～ 2.0m、梁筋が 1.4 ～ 1.5m で柱筋の通りは概ね良い。

柱穴の平面形は不整円形または不整楕円形、断面形は逆台形状を呈する。柱穴の規模は長軸 0.32 ～ 0.97m、短軸 0.27 ～ 0.83m、底面の標高は 64.11 ～ 64.37m を測る。柱はいずれも抜き取られており、111・112 柱穴で径 0.24 ～ 0.28m の柱のあたりが検出された。掘方埋め土はⅥ層に由来するブロックを含む黒色・黒褐色シルトを主体とし、互層に搗き固めている。155 柱穴は 139・156 柱穴



第 262 図　掘立柱建物 11

と重複しており、部分的な補修が行われた可能性も推定される。

第 263 図に掘立柱建物 11 の柱穴より出土した遺物をまとめている。Po248 は 111 柱穴から出土した須恵器蓋の天井部である。Po249 は 114 柱穴の埋土から出土した須恵器坏の口縁部破片と推定される。Po250 は 112 柱穴の埋土から出土した土師器甕の口縁部である。F51 は 115 柱穴から出土した椀形鍛冶滓である。

本建物の帰属時期は、出土遺物から判断し７世紀末～８世紀と考えられる。

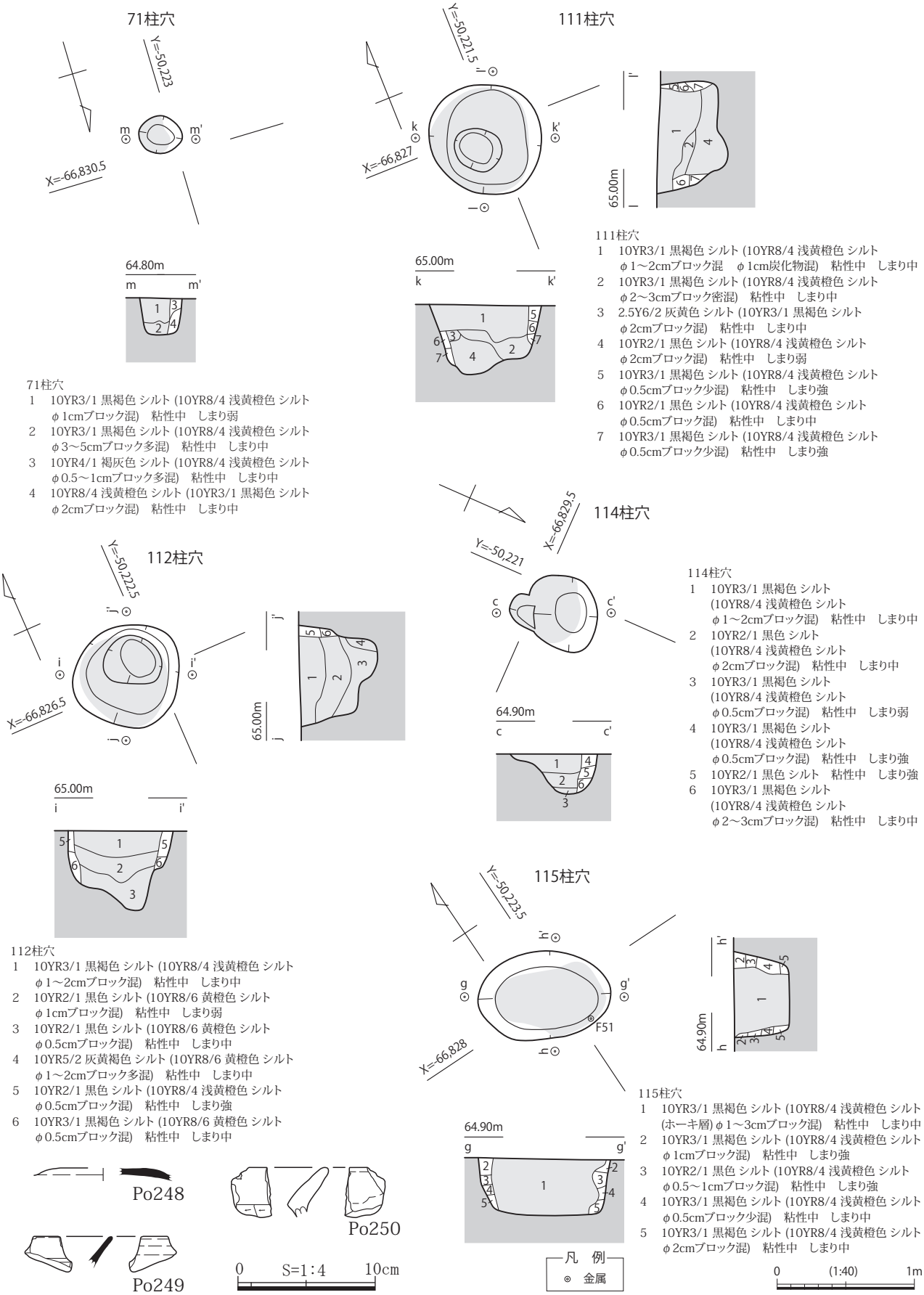
以下、各柱穴について記述する。

131 柱穴（第 262・264 図、第 33・38 表、図版 112）

157 柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.93m、短軸 0.83m、検出面からの深さ 0.45m を測る。底面標高は 64.20m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～４層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の５～７層が堆積する。底面の西側に三日月状のテラス面があり、段掘りとなっている。土器片が出土したが、小片のため図化していない。

114 柱穴（第 262・263 図、第 33・38・75 表、図版 112・169）

平面形は不整円形を呈し、柱抜き取り穴で一部南側が張り出している。規模は長軸 0.64m、短軸 0.51m、検出面からの深さ 0.29m を測る。底面標高は 64.37m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む



71柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1cmブロック混)　粘性中　しまり弱
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ3～5cmブロック多混)　粘性中　しまり中
3　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5～1cmブロック多混)　粘性中　しまり中
4　10YR8/4 浅黄橙色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト φ2cmブロック混)　粘性中　しまり中

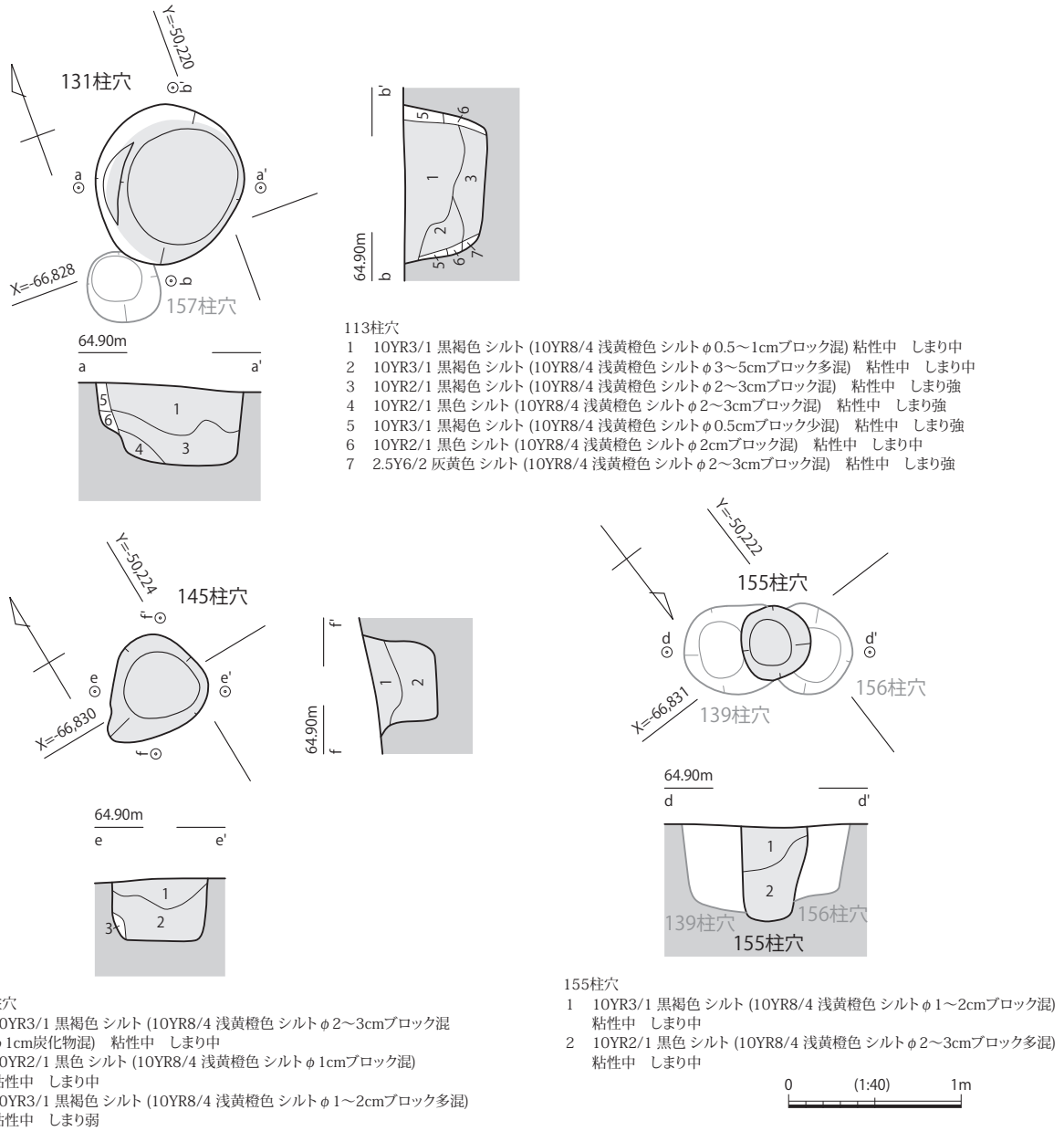
111柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1～2cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ2～3cmブロック密混)　粘性中　しまり中
3　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト φ2cmブロック混)　粘性中　しまり中
4　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ2cmブロック混)　粘性中　しまり弱
5　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり強
6　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
7　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり強

112柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1cmブロック混)　粘性中　しまり弱
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
4　10YR5/2 灰黄褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1～2cmブロック多混)　粘性中　しまり中
5　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり強
6　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中

114柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ2cmブロック混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり弱
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり強
5　10YR2/1 黒色 シルト　粘性中　しまり強
6　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ2～3cmブロック混)　粘性中　しまり中

115柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト (ホーキ層) φ1～3cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1cmブロック混)　粘性中　しまり強
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5～1cmブロック混)　粘性中　しまり強
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり中
5　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ2cmブロック混)　粘性中　しまり中

第 263 図　掘立柱建物 11　71・111・112・114・115 柱穴、111・112・114 柱穴出土土器



第 264 図　掘立柱建物 11　131・145・155 柱穴

柱抜き取り痕跡の１～３層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の４～６層が堆積する。遺物は須恵器の坏 Po249 が埋土から出土している。

155 柱穴（第 262・264 図、第 33・38 表、図版 112）

南東側で 139 柱穴、北西側で 156 柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.43m、短軸 0.40m、検出面からの深さ 0.55m を測る。底面標高は 64.11m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層が堆積する。遺物は出土していない。

71 柱穴（第 262・263 図、第 33・38 表、図版 112）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.32m、短軸 0.27m、検出面からの深さ 0.27m を測る。底面標高は 64.36m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層と、Ⅲ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３・４層が堆積する。遺物は出土していない。

145 柱穴（第 262・264 図、第 33・38 表、図版 113）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.67m、短軸 0.55m、検出面からの深さ 0.36mを測る。底面標高は 64.22m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

115 柱穴（第 262・263・456 図、第 25・33・38 表、図版 113・325）

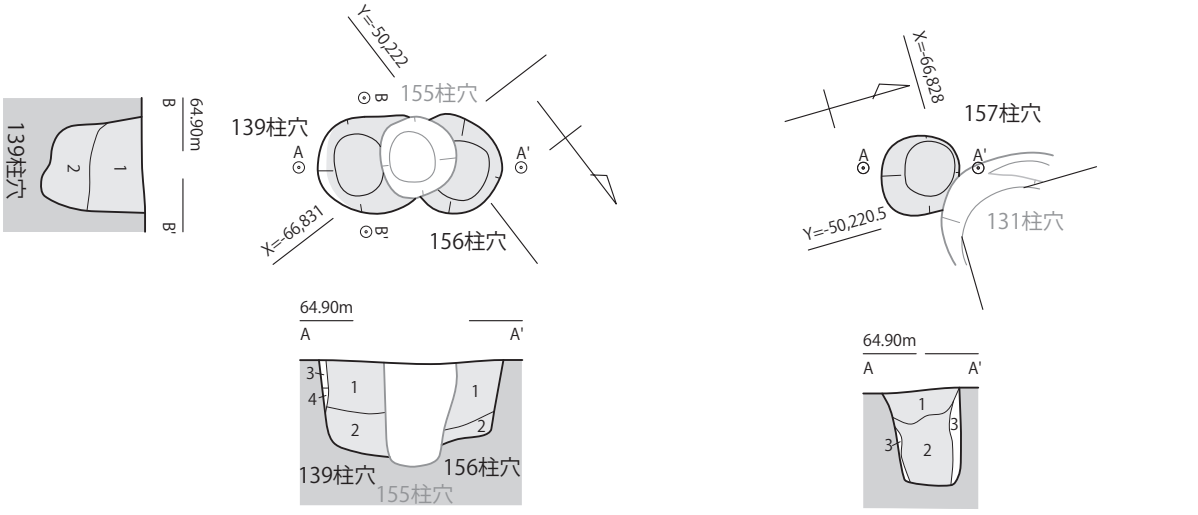
平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸 0.97m、短軸 0.64m、検出面からの深さ 0.41mを測る。底面標高は 64.27m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２～５層が堆積する。遺物は柱抜き取り痕跡から椀形鍛冶滓 F51 が出土している。

112 柱穴（第 262・263 図、第 33・38・75 表、図版 113・114・169）

平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 0.78m、短軸 0.74m、検出面からの深さ 0.58mを測る。底面標高は 64.17m。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～４層と、同じくⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の５・６層が堆積する。底面北寄りに径 0.28mの柱のあたりが確認できる。遺物は埋土から土師器の甕 Po250 が出土している。

111 柱穴（第 262・263 図、第 33・38・75 表、図版 114・169）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.84m、短軸 0.80m、検出面からの深さ 0.50mを測る。底面標高は 64.24m。埋土はⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～４層と、同じく



139柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ5～10cmブロック多混)　粘性中　しまり弱
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり強
4　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり強

156柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック多混)　粘性中　しまり中

157柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5～1cmブロック混)　粘性中　しまり中
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり強

0　(1:40)　1m

第 265 図　139・156・157 柱穴

Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の５～７層が堆積する。底面南西に径0.24mの柱のあたりが確認できる。遺物は柱抜き取り痕跡から須恵器蓋 Po248 が出土している。

掘立柱建物 11 周辺遺構（第 235・265 図）

掘立柱建物 11 の 155 柱穴と重複関係を持つ 139 ・ 156 柱穴と 157 柱穴を報告する。これらの周辺に位置する柱穴は掘立柱建物 11 の部分的な補修に伴う可能性を想定している。

139 柱穴（第 235・265 図、第 33 表）

３区南西 7a-9C-4c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。西側を掘立柱建物 11 の 155 柱穴に切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.52m、短軸 0.34m、検出面からの深さ 0.54mを測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層と、Ⅲ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３・４層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

156 柱穴（第 235・265 図、第 33 表）

３区南西 7a-9C-4c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。東側を掘立柱建物 11 の 155 柱穴に切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.52m、短軸 0.24m、検出面からの深さ 0.39mを測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

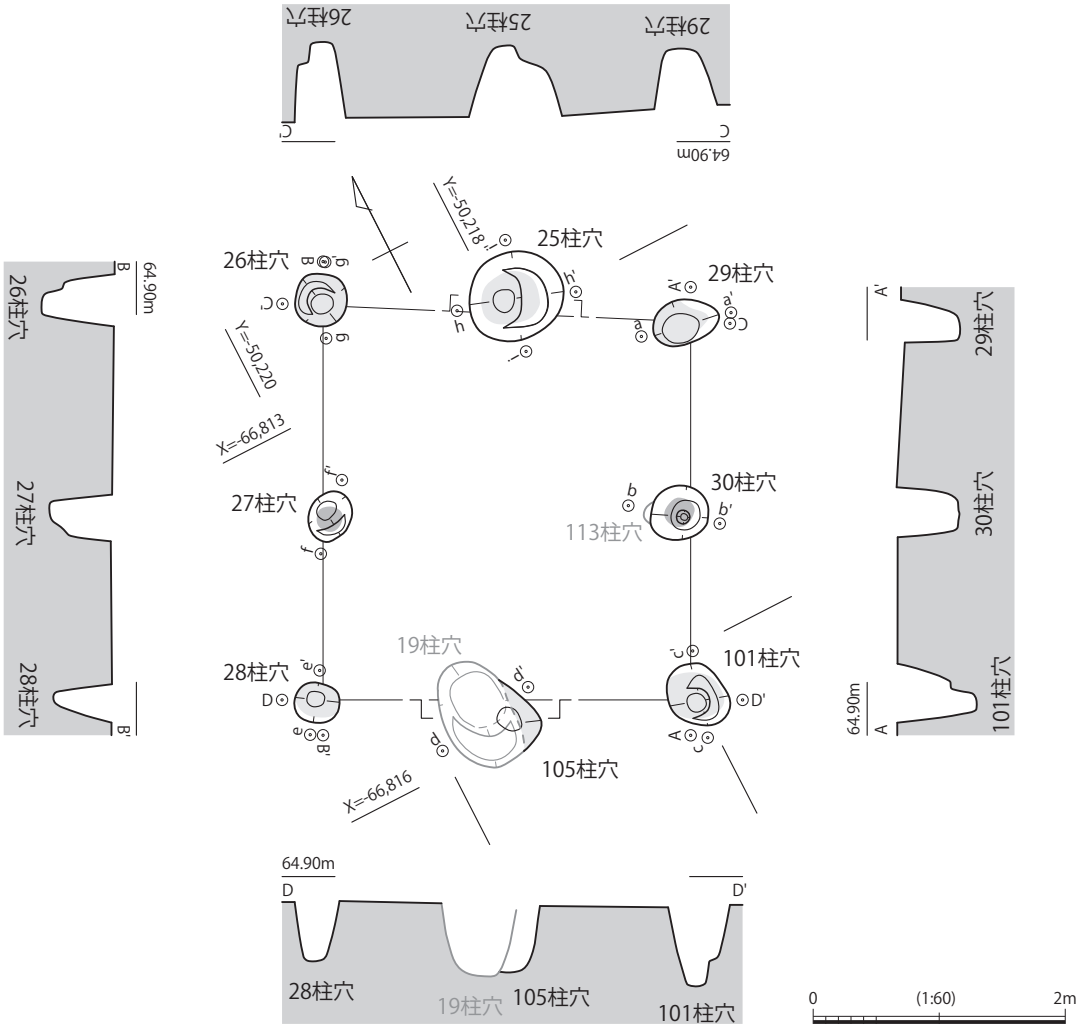
157 柱穴（第 235・265 図、第 33 表）

３区南西 7a-9C-3c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。北東側を掘立柱建物 11 の 131 柱穴に切られる。平面形は円形を呈し、残存規模は長軸 0.46m、短軸 0.38m、検出面からの深さ 0.52mを測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

掘立柱建物 12（第 233・234・266 ～ 269 図、第 29・33・38・75 表、図版 114・169）

３区北西 7a-9C-2b・2c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。本遺構は、25 ～ 30 ・ 101 ・ 105 柱穴によって構成される。105 柱穴が掘立柱建物 10 の 19 柱穴に切られていることから、掘立柱建物 10 より先出する。桁行２間（3.0m）、梁行２間（3.0m）の南北棟の側柱建物である。主軸は N-28° -E をとり、平面積は 9.0㎡を測る。柱間寸法は桁筋が 1.5 ～ 1.6m、梁筋が 1.5mで柱筋の通りは良い。柱穴の平面形は不整円形または不整楕円形、断面形は逆台形状を呈する。柱穴の規模は長軸 0.35 ～ 0.77m、短軸 0.32 ～ 0.70m、底面の標高は 64.03 ～ 64.21mを測る。27 ・ 30 柱穴には柱痕跡が、30・101 柱穴では直径 0.10 ～ 0.14mの柱のあたりが検出されている。



第 266 図　掘立柱建物 12

柱穴の掘方埋め土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む黒色・黒褐色シルトを主体とし、互層に搗き固めている。30 柱穴は 113 柱穴と重複しており、部分的な補修もしくは柱の付け替えが行われた可能性を想定している。

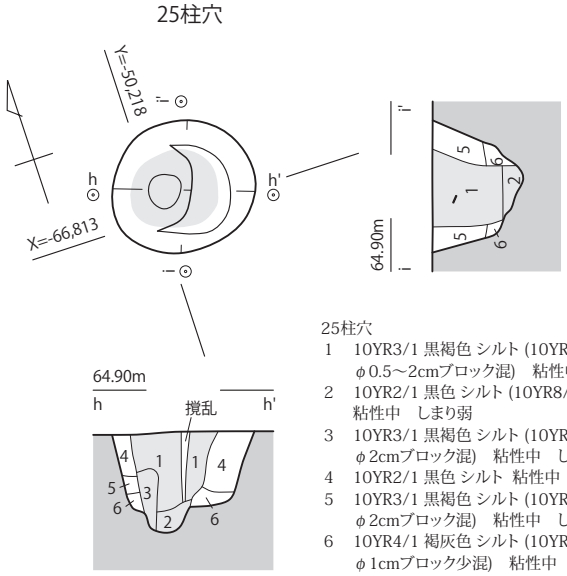
第 269 図に掘立柱建物 12 の柱穴から出土した遺物をまとめている。Po251 ・ 253 は 26 柱穴から出土した手づくね成形のミニチュア土器である。Po251 は口縁部が直立するコップ形を呈している。Po252 は 28 柱穴から出土したミニチュア土器の底部で器壁が厚い。Po254 ・ 255 は 27 柱穴から出土した須恵器甕の体部片である。外面に平行タタキ、内面に同心円状当て具痕が観察される。

本建物の帰属時期は、出土遺物から判断し７世紀末～８世紀と考えられる。

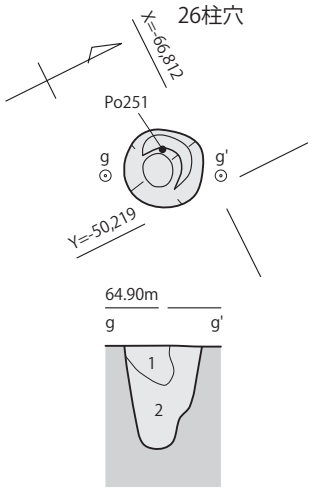
以下、各柱穴について記述する。

29 柱穴（第 266・267 図、第 33・38 表、図版 115）

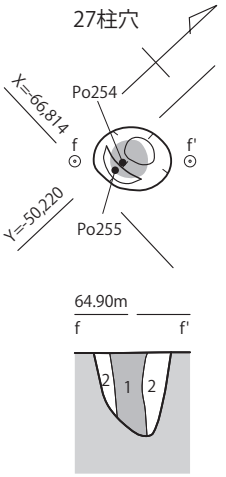
平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸 0.54m、短軸 0.36m、検出面からの深さ 0.49m を測る。底面標高は 64.15m。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層と、同じくⅤ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２・３層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。



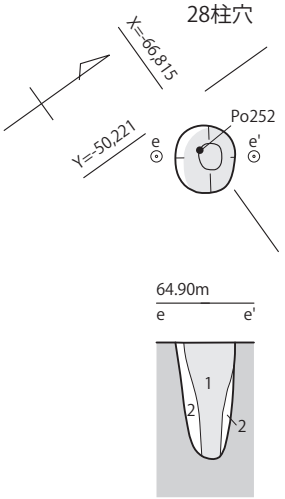
25柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトブロック混) 粘性中　しまり弱
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ2cmブロック混)　粘性中　しまり弱
4　10YR2/1 黒色 シルト 粘性中　しまり中
5　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR4/1 褐灰色 シルト φ2cmブロック混)　粘性中　しまり中
6　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1cmブロック少混)　粘性中　しまり中



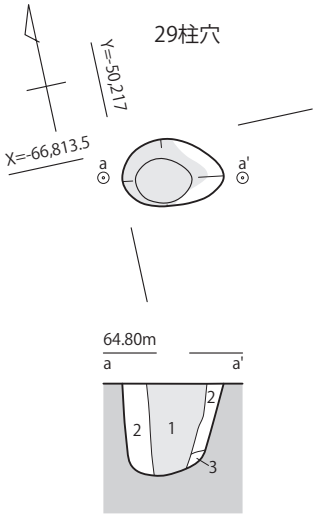
26柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ0.5～1cmブロック多混)　粘性弱　しまり弱
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中



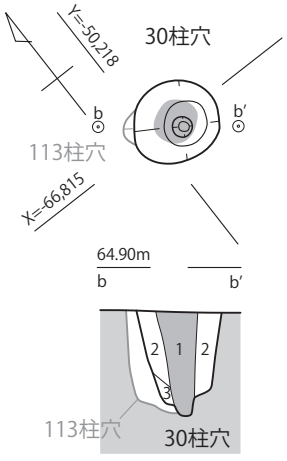
27柱穴
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1～2cmブロック少混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり中



28柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5～1cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ～0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中



29柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ0.5～3cmブロック少混)　粘性弱　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり中
3　10YR5/2 灰黄褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1cmブロック多混)　粘性強　しまり強



30柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5～1cmブロック混 φ0.5cm炭化物混)　粘性弱　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1～2cmブロック混) 粘性中　しまり強
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (2.5Y8/6 黄色 シルト φ0.5cmブロック多混) 粘性中　しまり中

凡　例
● 土器

0　(1:40)　1m

第 267 図　掘立柱建物 12　25 ～ 30 柱穴

30 柱穴（第 266・267 図、第 33・38 表、図版 115）

南西側で 113 柱穴を切っている。平面形は円形を呈し、規模は長軸 0.46m、短軸 0.43m、検出面からの深さ 0.55mを測る。底面標高は 64.11m。埋土は柱痕跡の１層と、Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２・３層が堆積する。本柱穴は 113 柱穴とほぼ入れ子状に重なることや底面レベルが近似していることから、修繕もしくは付け替えの可能性を想定している。底面中心に径 0.10mの柱のあたりが確認できる。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

101 柱穴（第 266・268 図、第 33・38 表、図版 115）

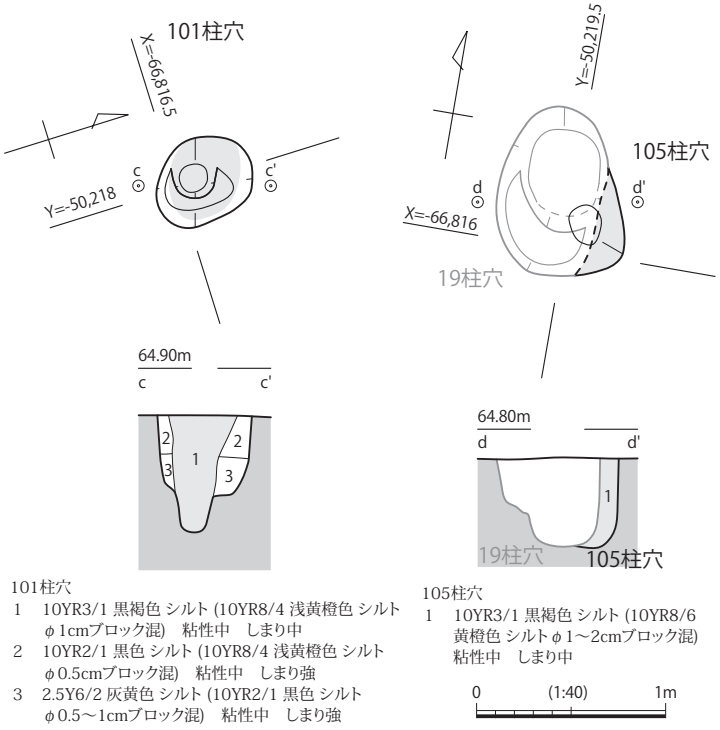
平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.55m、短軸 0.44m、検出面からの深さ 0.62mを測る。底面標高は 64.03m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層と、同じくⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２・３層が堆積する。底面の南東側に三日月状のテラス面があり、段掘りとなっている。底面南西側に径 0.14mの柱あたりが確認できる。遺物は、図化していないが、１層より土師器小片が出土している。

105 柱穴（第 266・268 図、第 33・38 表）

北西側を掘立柱建物 10 の 19 柱穴に大きく切られている。したがって平面形は不明で、残存規模は長軸 0.59m、短軸 0.18m、検出面からの深さ 0.47mを測る。底面標高は 64.14m。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層のみ堆積する。遺物は出土していない。

28 柱穴（第 266・267・269 図、第 33・38・75 表、図版 115・169）

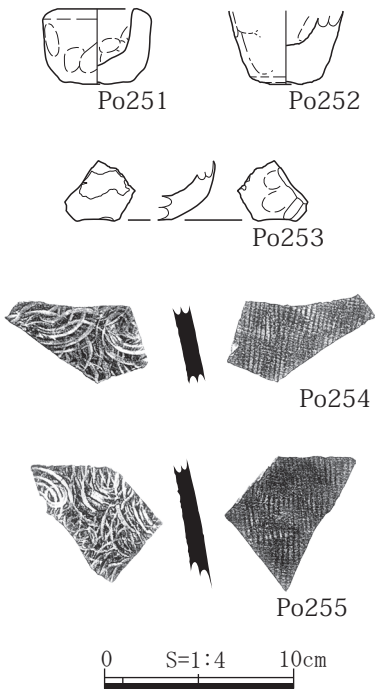
平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.35m、短軸 0.32m、検出面からの深さ 0.61mを測る。底面標高は 64.08m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層と、同じくⅥ層に由



101柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり強
3　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR2/1 黒色 シルト φ0.5～1cmブロック混)　粘性中　しまり強

105柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中

第 268 図　掘立柱建物 12　101・105 柱穴



第 269 図　掘立柱建物 12 出土土器

来するブロックを含む掘方埋め土の２層が堆積する。遺物は１層からミニチュア土器 Po252 が出土している。

27 柱穴（第 266・267・269 図、第 33・38・75 表、図版 115・116・169）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.41m、短軸 0.33m、検出面からの深さ 0.44m を測る。底面標高は 64.21m。埋土は柱痕跡の１層と、Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２層が堆積する。遺物は１層より須恵器甕体部の Po254・255 が出土している。

26 柱穴（第 266・267・269 図、第 33・38・75 表、図版 116・169）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.44m、短軸 0.43m、検出面からの深さ 0.55m を測る。底面標高は 64.11m。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層のみ堆積する。遺物は１・２層からミニチュア土器 Po251・253 が出土している。

25 柱穴（第 266・267 図、第 33・38 表、図版 116）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.77m、短軸 0.70m、検出面からの深さ 0.53m を測る。底面標高は 64.14m。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～３層と、Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の４～６層が堆積する。底面の南東側に三日月状のテラス面があり、段掘りとなっている。遺物は掘方埋め土から、図化していないが土師器小片が出土している。

掘立柱建物 12 周辺遺構（第 234・270・271 図）

掘立柱建物 12 の 30 ・ 105 柱穴と重複関係を持つ 113 柱穴を報告する。また、直接切り合い関係は見られないが、柱穴周辺に位置する 31・32 柱穴、33 ピットを取り上げる。

31 柱穴（第 234・270 図、第 33 表、図版 115・132）

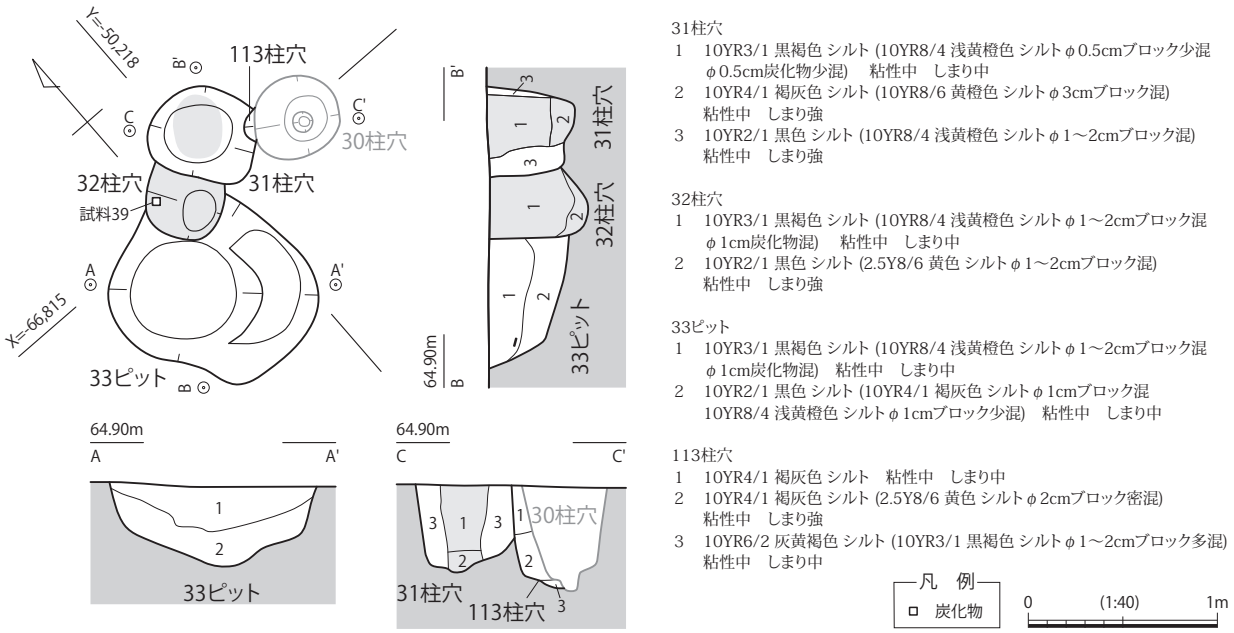
３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。東側を 113 柱穴に切られ、南側で 32 柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.58m、短軸 0.47m、検出面からの深さ 0.46m を測る。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層と、Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

32 柱穴（第 234・270・271 図、第 33・76 表、図版 132・172）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。北東側を 31 柱穴に切られ、南西側で 33 ピットを切っている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.42m、短軸 0.34m、検出面からの深さ 0.53m を測る。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層が堆積する。第 271 図の Po256 は掘立柱建物 12 周辺の 32 柱穴から出土した須恵器蓋のボタン状のつまみである。

なお、１層から出土した炭化材（試料 39）について放射性炭素年代測定を実施したところ、



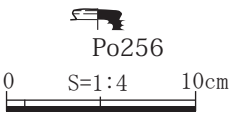
31柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック少混 φ0.5cm炭化物少混)　粘性中　しまり中
2　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ3cmブロック混) 粘性中　しまり強
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混) 粘性中　しまり強

32柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混 φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (2.5Y8/6 黄色 シルトφ1～2cmブロック混) 粘性中　しまり強

33ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混 φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR4/1 褐灰色 シルトφ1cmブロック混 10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック少混)　粘性中　しまり中

113柱穴
1　10YR4/1 褐灰色 シルト　粘性中　しまり中
2　10YR4/1 褐灰色 シルト (2.5Y8/6 黄色 シルトφ2cmブロック密混) 粘性中　しまり強
3　10YR6/2 灰黄褐色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ1～2cmブロック多混) 粘性中　しまり中

第 270 図　31・32・113 柱穴、33 ピット



第 271 図　32 柱穴出土土器

calAD672-778（暦年較正２σの確率１位）の値が得られている。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から８世紀と考えられる。

33 ピット（第 234・270 図、第 33 表、図版 132）

３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。北東側を 32 柱穴に切られる。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 1.02m、短軸 0.92m、検出面からの深さ 0.41mを測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む１・２層が上下に堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

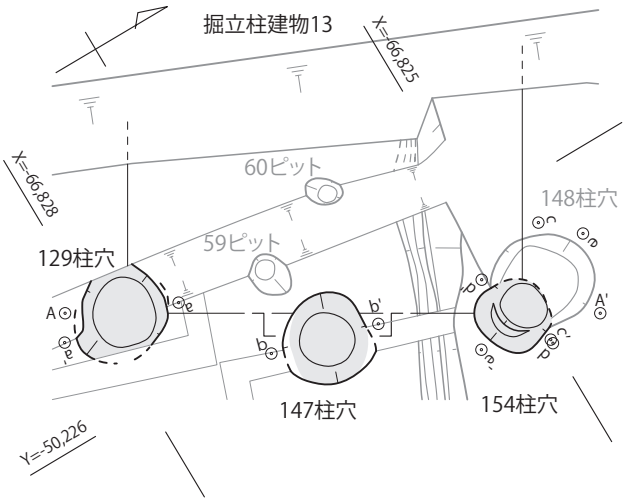
113 柱穴（第 270 図、第 33 表、図版 115）

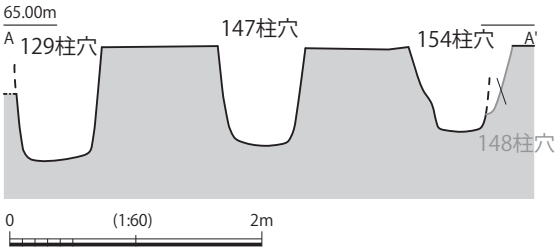
３区北西 7a-9C-2b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。南東側を 30 柱穴に大きく切られる。平面形は不明。残存規模は長軸 0.16m、短軸 0.05m、検出面からの深さ 0.54mを測る。埋土は、掘方埋め土である褐灰色シルトの１層、Ⅴ層に由来するブロックを含む褐灰色シルトの２層、底面に堆積する灰黄褐色シルトの３層が堆積する。遺物は出土していない。

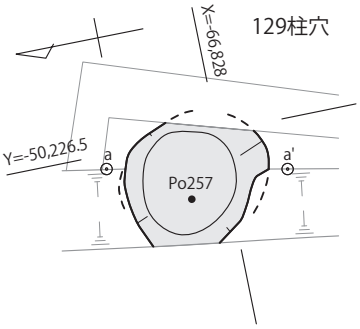
本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

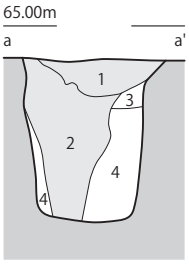
掘立柱建物 13（第 233・235・272・273 図、第 29・76 表、図版 86・117・170）

３区南西 7a-9C-3c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。本遺構は、129・147・154 柱穴よって構成されるが、遺構の大半が調査区外に延びるため全容は不明である。また、129 柱穴は暗渠によって削平されており、遺存状況は不良である。本建物は桁行不明、梁行２間（3.1m）の東西棟の建物と推定される。主軸は N-30° -E をとり、検出された平面積は 30.8㎡を測る。柱間寸法は桁筋が不明、梁筋が 1.6mで柱筋はやや不良である。柱穴の平面形は不整円形、断面形は逆台形状を呈する。

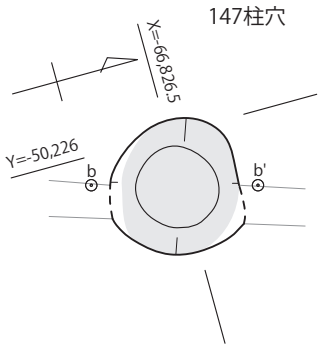


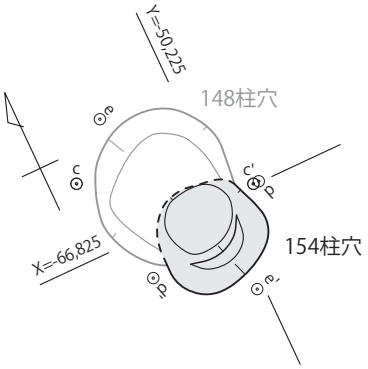


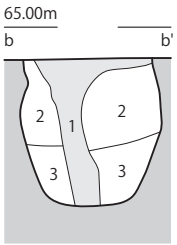


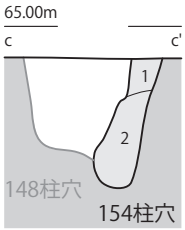


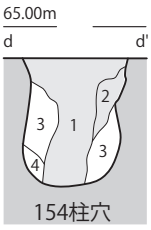
129柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ2～5cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1～10cmブロック密混)　粘性中　しまり弱
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1cmブロック少混)　粘性中　しまり強
4　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ3～5cmブロック混)　粘性中　しまり弱

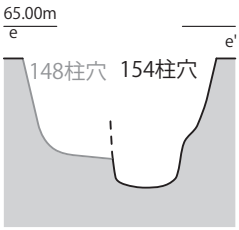










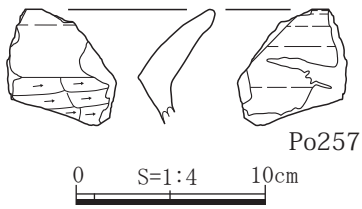


147柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ3～5cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり弱
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ3～5cmブロック密混)　粘性中　しまり中
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ2cmブロック混)　粘性中　しまり強

154柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ2～3cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり強
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ2～5cmブロック混)　粘性中　しまり強
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ3～5cmブロック多混)　粘性中　しまり強

0　(1:40)　1m

第 272 図　掘立柱建物 13　129・147・154 柱穴



第 273 図　掘立柱建物 13 出土土器

柱穴の規模は長軸 0.60 以上～ 0.77m、短軸 0.58 ～ 0.73m、底面の標高は 63.92 ～ 64.14m を測る。柱はいずれも抜き取られている。154 柱穴は掘立柱建物 14 の 148 柱穴を切ることから、これに後出する建物と判断される。遺物は 129 柱穴から土師器甕 Po257 が出土している。「く」字状に口縁部が外反し、内外面横方向のナデが施される。

本建物の帰属時期は、掘立柱建物 14 との重複関係から 13 世紀以降と考えられる。

以下、各柱穴について記述する。

129 柱穴（第 235・272・273 図、第 34・38・76 表、図版 117・170）

西側の一部を暗渠によって削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.77m、短軸 0.63m以上、検出面からの深さ 0.86m を測る。底面標高は 63.92m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３・４層が堆積する。遺物は、１層で土師器甕 Po257 が出土している。周囲からの混入と考えられる。

147 柱穴（第 235・272 図、第 34・38 表、図版 117）

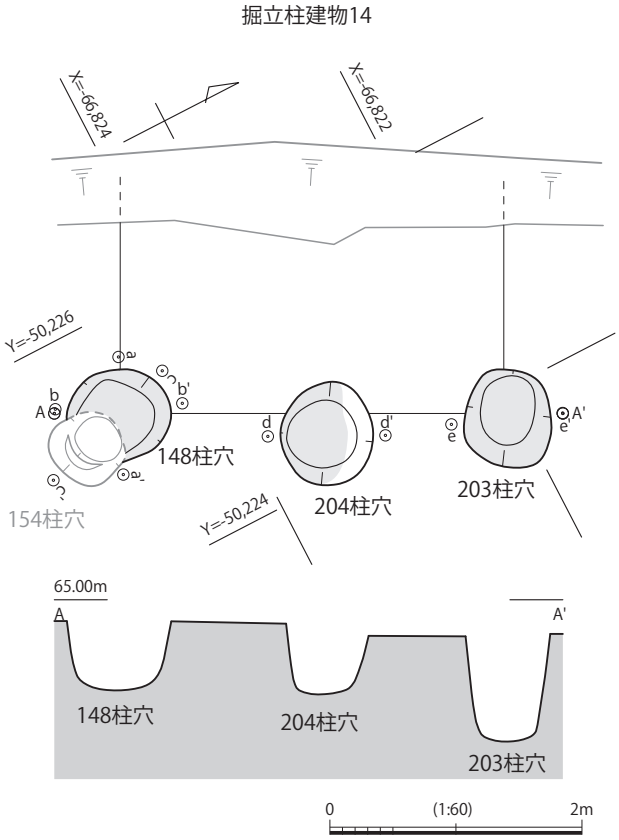
平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.74m以上、短軸 0.73m、検出面からの深さ 0.78m を測る。底面標高は 64.04m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２・３層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

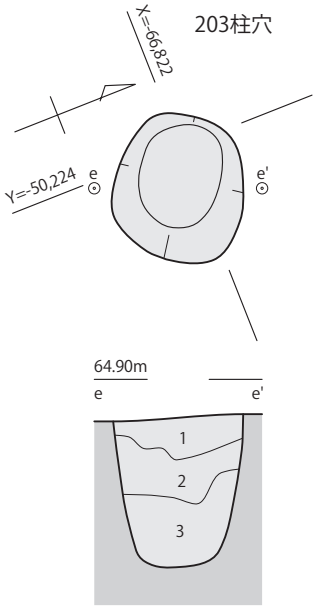
154 柱穴（第 235・272 図、第 34・38 表、図版 118）

掘立柱建物 14 の 148 柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.58m、短軸 0.55m以上、検出面からの深さ 0.69m を測る。底面標高は 64.14m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３・４層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

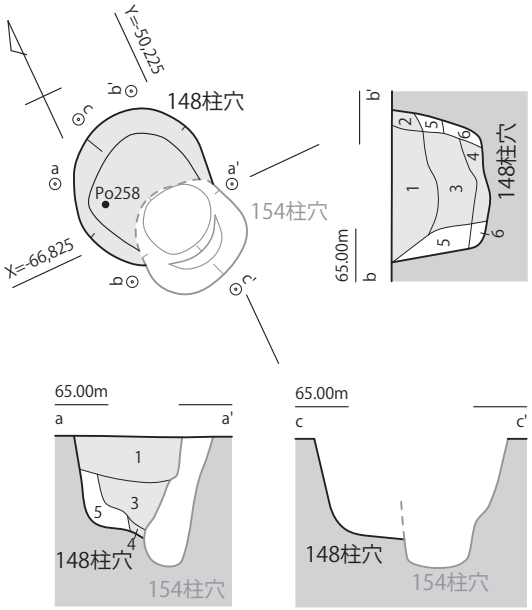
掘立柱建物 14（第 233・235・274・275 図、第 29・34・38・95 表、図版 117・170）

３区南西 7a-9C-3c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。本遺構は、148・203・204 柱穴よって構成されるが、遺構の大半が調査区外に延びるため全容は不明である。本建物は桁行不明、梁行２間（3.0m）の東西棟の側柱建物と推定される。主軸は N-28° -E をとり、検出された平面積は 25.8㎡を測る。柱間寸法は桁筋が不明、梁筋が 1.4 ～ 1.6m でやや不良である。柱穴の平面形は円形または不整円形、断面形は逆台形状を呈する。柱穴の規模は長軸 0.77 ～ 0.83m、短軸 0.68 ～ 0.75m、底面の標高は 63.74 ～ 64.28m を測る。柱はいずれも抜き取られている。148 柱穴は掘立柱建物 13 の 154 柱穴に切られることから、これに先出する建物と判断される。掘方埋め土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む黒色・黒褐色シルトを主体とし、互層に搗き固めている。遺物は、148 柱穴では建物廃絶後に柱を抜き取り、人為的に埋め戻し後に地鎮として土師器皿 Po258 を埋納している状況が確認された。Po258 は回転糸切り成形の土師器皿で、体部から口縁部に向かって外反しながら立

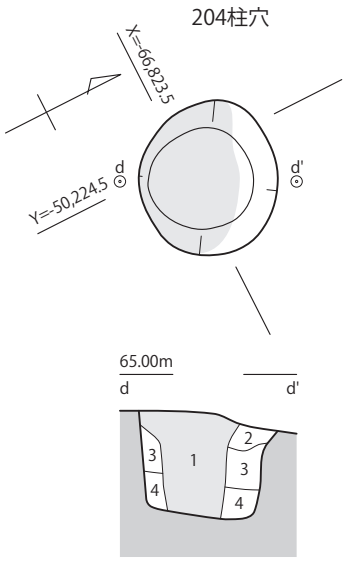




203柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2～3cmブロック混)
　粘性中　しまり強
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ5～10cmブロック多混)
　粘性中　しまり強
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ3～5cmブロック混)
　粘性中　しまり弱



148柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2～3cmブロック多混)
　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)
　粘性中　しまり中
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)
　粘性中　しまり弱
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2cmブロック多混)
　粘性中　しまり弱
5　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)
　粘性中　しまり強
6　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2～3cmブロック多混)
　粘性中　しまり強

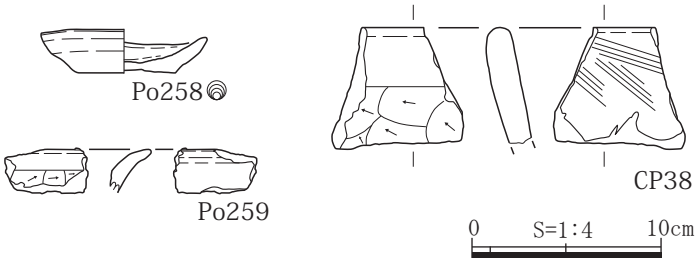


204柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～3cmブロック混
　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック多混)
　粘性中　しまり強
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2～3cmブロック混)
　粘性中　しまり強
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)
　粘性中　しまり強

凡　例
● 土器

0　(1:40)　1m

第 274 図　掘立柱建物 14　148・203・204 柱穴



第 275 図　掘立柱建物 14 出土遺物

ち上がる。同じく 148 柱穴から出土した土師器甕 Po259 の口縁部は緩やかに外反する。土製品 CP38 も出土した。

本建物の帰属時期は、148 柱穴で出土した遺物から 13 世紀と考えられる。

以下、各柱穴について記述する。

148 柱穴（第 235・274・275 図、第 34・38・76・95 表、図版 118・170）

掘立柱建物 13 の 154 柱穴に切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.83m、短軸 0.73m、検出面からの深さ 0.55mを測る。底面標高は 64.28m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～４層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の５・６層が堆積する。最上層の１層に完形の土師器皿 Po258 が埋納されていた。また埋土から土師器甕 Po259、移動式竈の掛口と考えられる CP38 が出土している。

204 柱穴（第 235・274 図、第 34・38 表、図版 118）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.83m、短軸 0.75m、検出面からの深さ 0.55mを測る。底面標高は 64.23m。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層と、同じくⅥ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２～４層が堆積する。遺物は、１層から図化していないが土師器片が出土している。

203 柱穴（第 235・274 図、第 34・38 表、図版 119）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.77m、短軸 0.68m、検出面からの深さ 0.79mを測る。底面標高は 63.74m。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～３層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

（３）柵列

柵列３（第 233 ～ 235・276 図、第 40・95 表、図版 86・170 表）

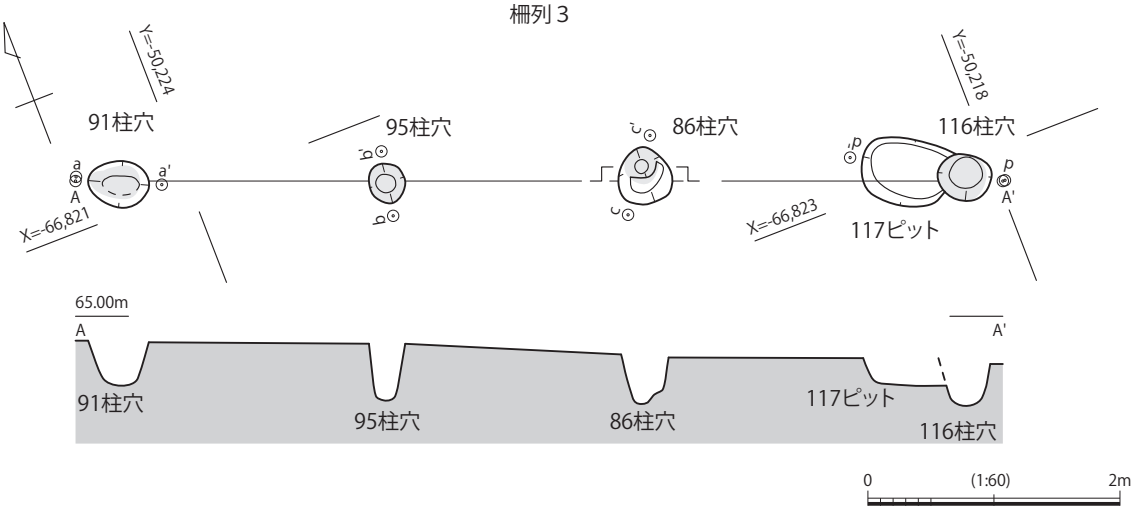
３区西側中央 7a-9C-3b・3c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。本遺構は、86・91・95・116 柱穴よって構成される。主軸は N-20° -W をとり、総延長 6.7mを測る。柱間寸法は 2.0 ～ 2.6mである。柱穴の平面形は円形または不整円形を呈する。柱穴の規模は長軸 0.32 ～ 0.48m、短軸 0.29 ～ 0.43m、底面の標高は 64.29 ～ 64.44mを測る。柱はいずれも抜き取られている。遺物は 86 柱穴から分銅形土製品 CP39 が出土しているが、混入と考えられる。

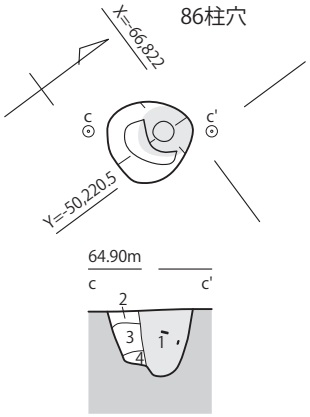
本遺構の帰属時期は、黒褐色系の堆積土から判断し、古代と考えられる。

以下、各柱穴について記述する。

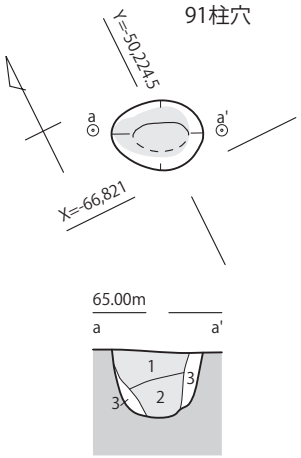
91 柱穴（第 235・276 図、第 41・42 表、図版 119）

平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸 0.48m、短軸 0.37m、検出面からの深さ 0.35mを測る。底面標高は 64.44m。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層と、同じくⅤ

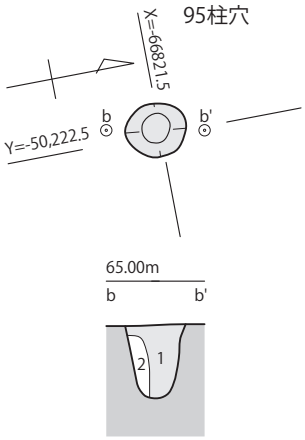




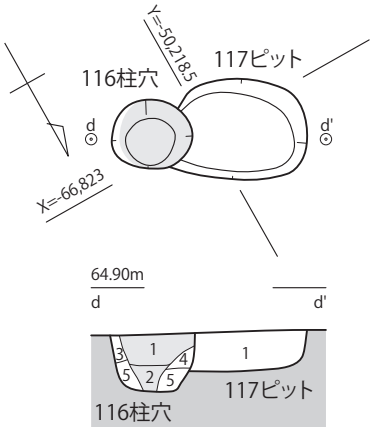
86柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ2～3cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり強
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1cmブロック少混)　粘性中　しまり強
4　10YR6/2 灰黄褐色 シルト (10YR2/1 黒色 シルト φ1cmブロック混)　粘性中　しまり中



91柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ2cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1cmブロック少混)　粘性中　しまり弱
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中



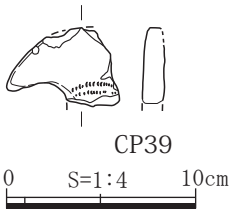
95柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 黄橙色 シルト φ0.5cmブロック混 10YR2/1 黒色 シルト φ1cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり強



116柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり弱
3　10YR2/1 黒色 シルト　粘性中　しまり強
4　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
5　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト φ1cmブロック混)　粘性中　しまり中

117ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり中

0　(1:40)　1m



第 276 図　柵列３　86・91・95・116 柱穴、117 ピット、86 柱穴出土土製品

層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

95 柱穴（第 234・235・276 図、第 41・42 表、図版 119）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.32m、短軸 0.29m、検出面からの深さ 0.39mを測る。底面標高は 64.33m。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層と、Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

86 柱穴（第 234・235・276 図、第 41・42・95 表、図版 119・170）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.45m、短軸 0.43m、検出面からの深さ 0.36mを測る。底面標高は 64.30mである。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層と､同じくⅢ・Ⅴ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２～４層が堆積する。底面の南東側に三日月状のテラス面があり、段掘りとなっている。CP39 は柱抜き取り痕跡の１層から出土した分銅形土製品である。括れ部に２列の刺突文が施されている。

116 柱穴（第 234・235・276 図、第 41・42 表、図版 120）

北西側で 117 ピットを切る。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.43m、短軸 0.36m、検出面からの深さ 0.31mを測る。底面標高は 64.29m。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１・２層と、同じくⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の３～５層が堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

柵列３周辺遺構（第 234・235・276 図）

117 ピット（第 234・235・276 図、第 41 表、図版 120）

３区中央 7a-9C-3b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。南東側を 116 柱穴に切られる。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸 0.61m、短軸 0.53m、検出面からの深さ 0.21mを測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む黒褐色シルトが堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

柵列４（第 233・234・277 図、第 40 表）

３区西 7a-9C-2b･3b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。本遺構は、195 ～ 197 柱穴によって構成される。主軸は N-22° -E をとり、総延長 2.9mを測る。柱間寸法は 1.4 ～ 1.5mである。柱穴の平面形は不整円形を呈する。柱穴の規模は長軸 0.26 ～ 0.34m、短軸 0.24 ～ 0.29m、底面の標高は 63.96 ～ 64.08mを測る。197 柱穴に柱痕跡が残り、その他の柱はいずれも抜き取られている。

本遺構の帰属時期は、黒褐色系の堆積土から古代と考えられる。

以下、各柱穴について記述する。

197 柱穴（第 234・277 図、第 41・42 表、図版 120）

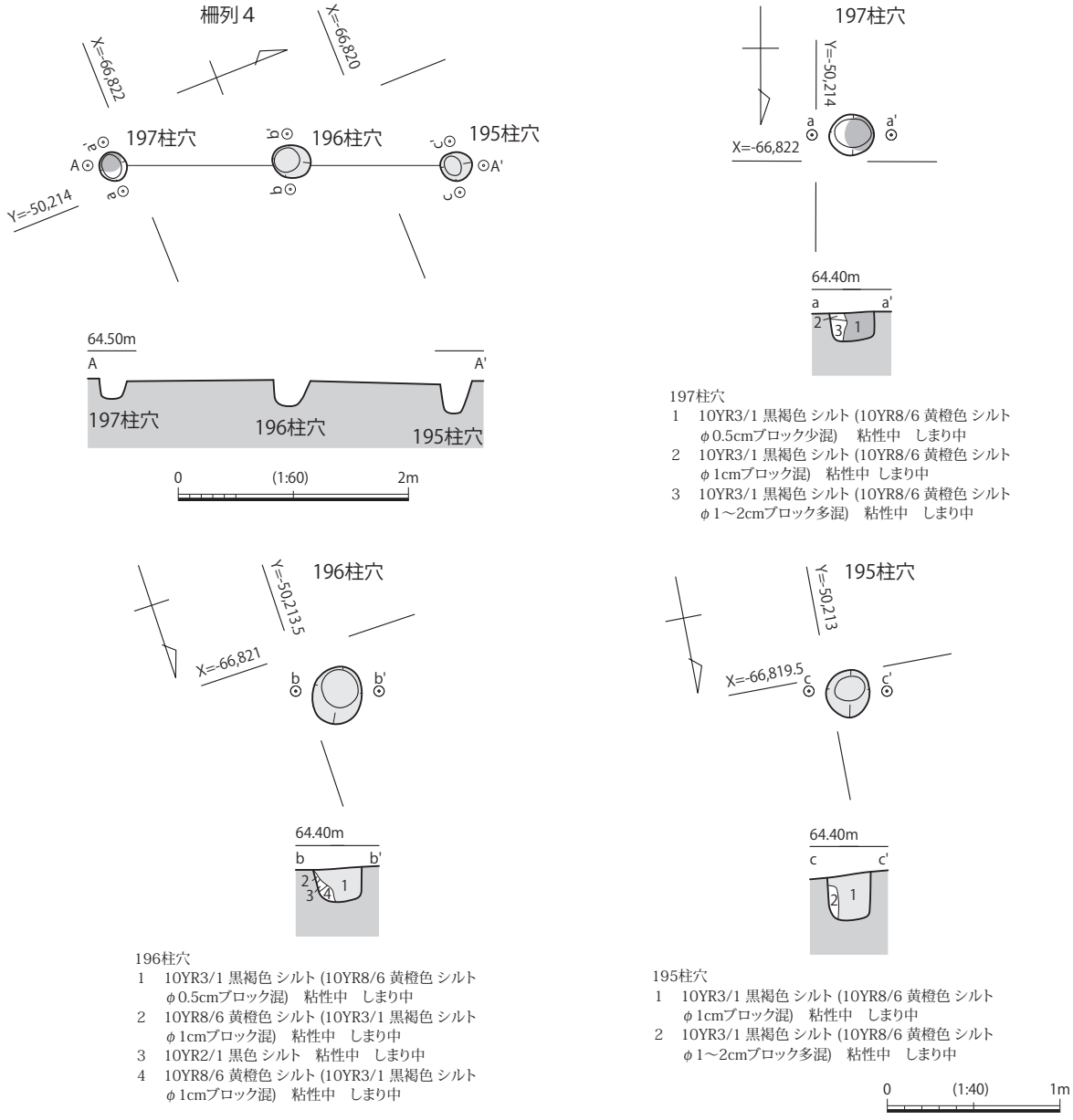
平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.26m、短軸 0.24m、検出面からの深さ 0.16mを測る。底面標高は 64.08m。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱痕跡の１層と、同じくⅤ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２・３層が堆積する。遺物は出土していない。

196 柱穴（第 234・277 図、第 41・42 表、図版 120）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.34m、短軸 0.29m、検出面からの深さ 0.19mを測る。底面標高は 64.02m。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層と、同じくⅢ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２～４層が堆積する。遺物は出土していない。

195 柱穴（第 234・277 図、第 41・42 表、図版 120）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.28m、短軸 0.25m、検出面からの深さ 0.26mを測る。底



第 277 図　柵列４　195 ～ 197 柱穴

面標高は63.96m。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層と、同じくⅤ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２層が堆積する。遺物は出土していない。

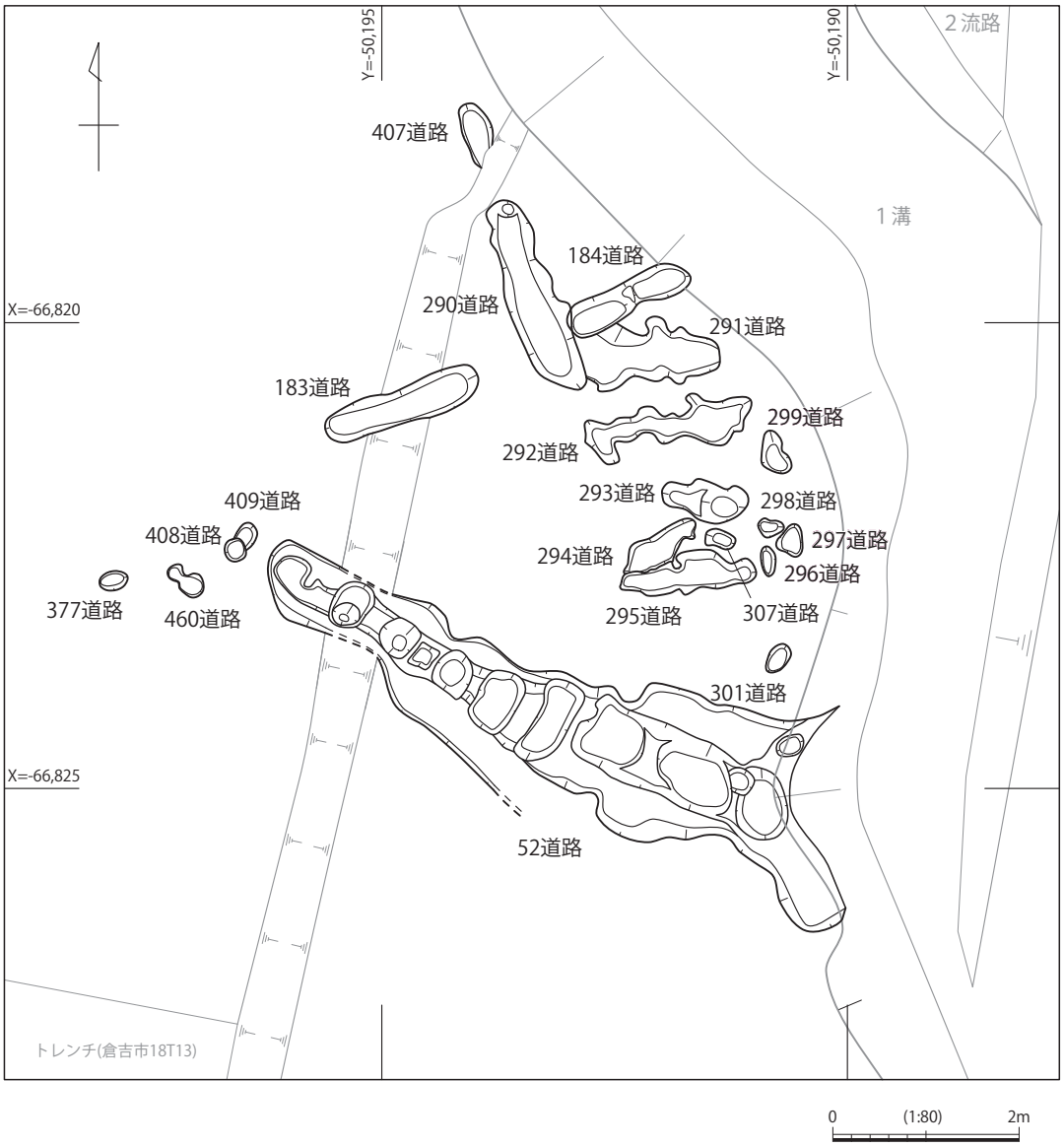
（4）道路

３区北東部、標高63.4～64.0mの流路に面する傾斜地で検出した。路面と波板状底面を持つ52道路、路床の土坑のみ検出した183・184・290～299・301・307・377・407～409・460道路について、道路に関連する遺構として扱う。後者については、一定の間隔で連続する土坑群や単体の土坑、溝状の形態を有するものがあり、いずれも埋土のしまりが強く、粗粒砂や小礫を敷き詰めたものを道路と認識している。

これらの遺構の帰属時期は、出土遺物と埋土の特徴から古代と考えられる。

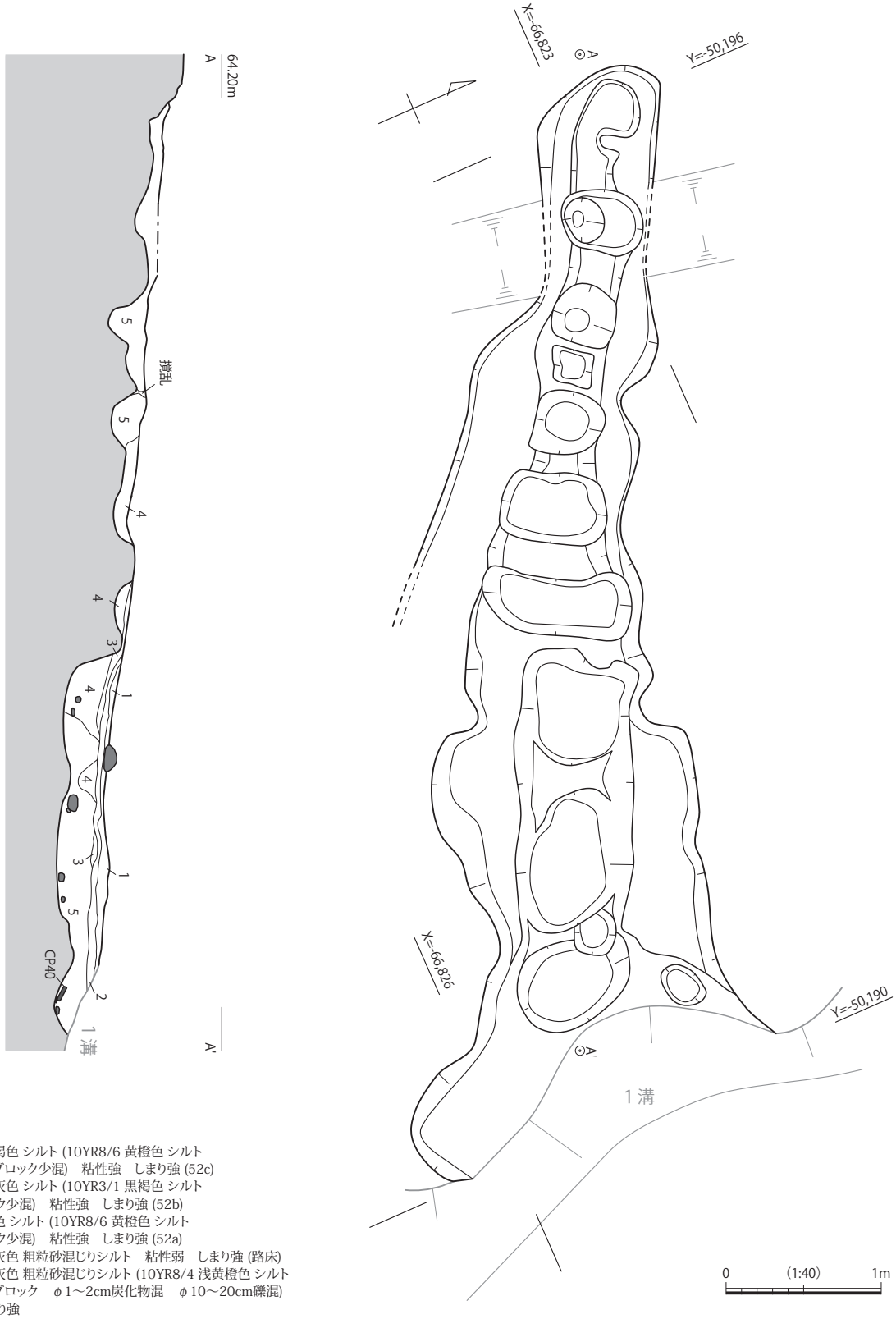
52道路（第233・278～281・456図、第25・58・76・95表、図版124～127・170・325）

３区北西7a-9B-3jグリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。流路に面する傾斜地で検出されたが、



第278図　道路遺構配置図

傾斜の高い西側は削平を受け遺存状況は不良で、路床の土坑底面近くが残存している。傾斜の低い東側は路面と路床が良好に遺存していた。路面は東半部で大きく上・中・下の３面確認し、少なくとも２回の改修が行われていることが明らかとなった。それぞれ52a・52b・52c段階に区別する。路床の明確な改修は確認できず、路面のみの改修であった可能性が高い。主軸はN-24° -Wをとる。



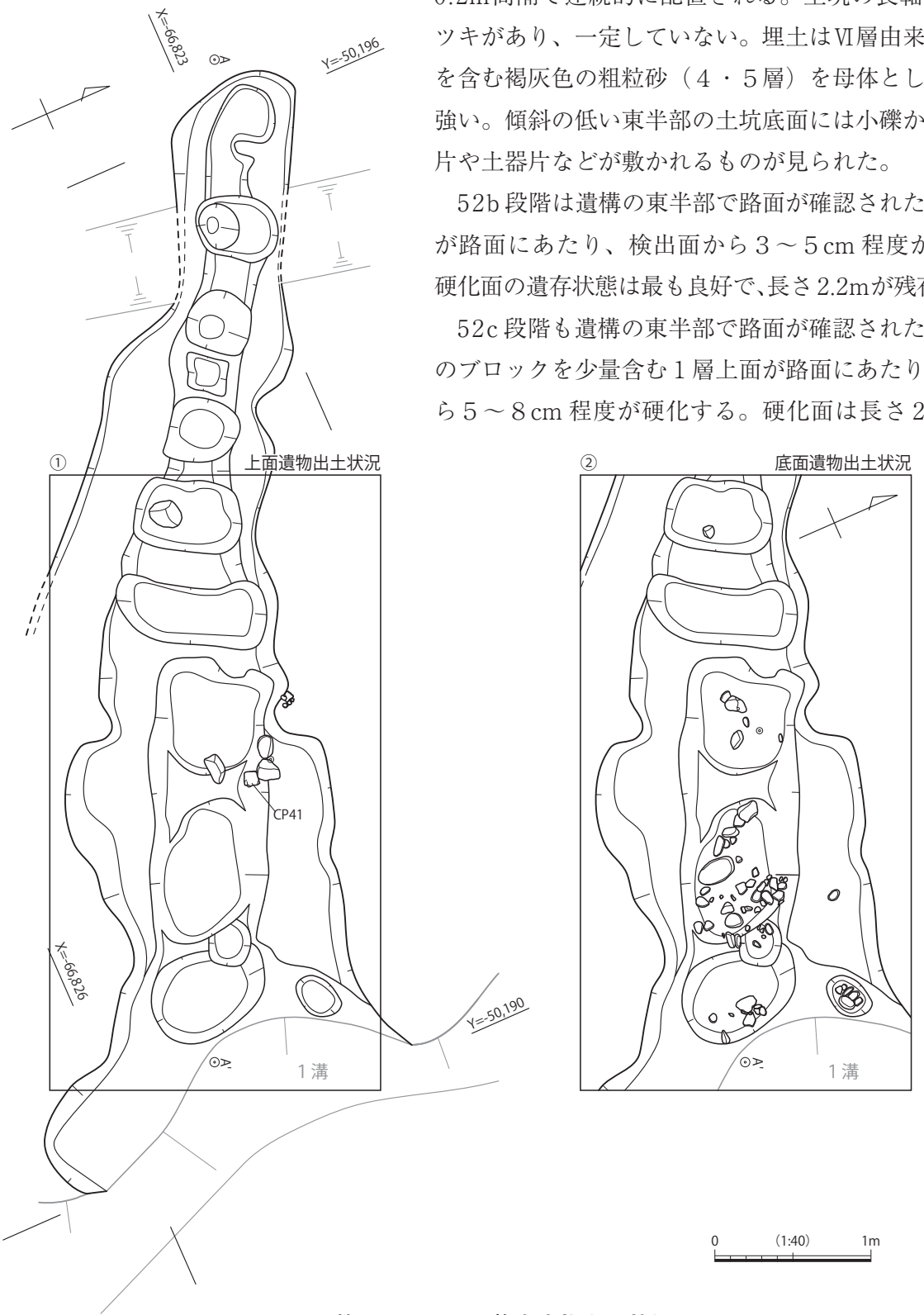
52道路
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ0.5～1cmブロック少混)　粘性強　しまり強 (52c)
2　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト φ1cmブロック少混)　粘性強　しまり強 (52b)
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1cmブロック少混)　粘性強　しまり強 (52a)
4　10YR4/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト　粘性弱　しまり強 (路床)
5　10YR5/1 褐灰色 粗粒砂混じりシルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5～5cmブロック　φ1～2cm炭化物混　φ10～20cm礫混)　粘性弱　しまり強

第279図　52道路

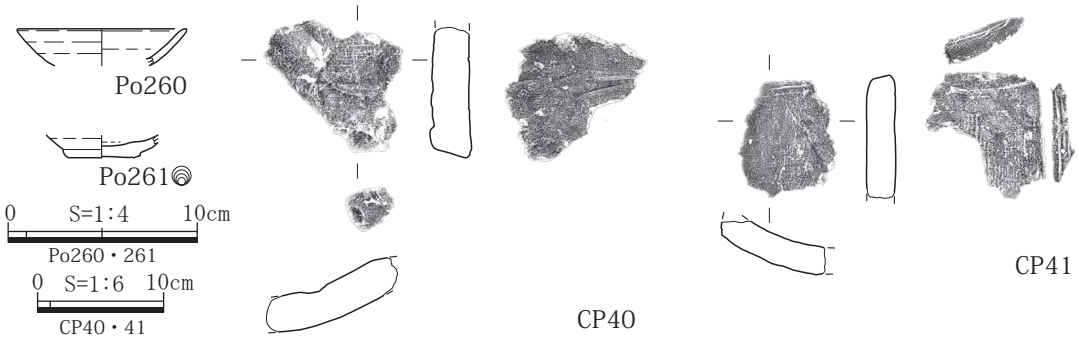
52a 段階は、規模は長さ 6.31m、最大幅 1.69m、検出面からの深さは最大 0.30m を測る。３層上面が路面にあたり、検出面から３～５cm 程度が硬化する。硬化面の遺存状態は不良で、長さ 0.2～１mが断続的に確認された。路床にあたる波板状土坑の埋土を路面の３層が直接覆っている。土坑群は平面形が円形、楕円形、隅丸方形となり、断面形は皿形や逆台形状を呈する。規模は最小のもので長さ 0.4m、幅 0.4m、深さ 0.25m、最大のもので長さ１m、幅 0.8m、深さ 0.24m を測り、0.15～0.2m 間隔で連続的に配置される。土坑の長軸方向はバラツキがあり、一定していない。埋土はⅥ層由来のブロックを含む褐灰色の粗粒砂（４・５層）を母体とし、しまりが強い。傾斜の低い東半部の土坑底面には小礫から大礫、瓦片や土器片などが敷かれるものが見られた。

52b 段階は遺構の東半部で路面が確認された。２層上面が路面にあたり、検出面から３～５cm 程度が硬化する。硬化面の遺存状態は最も良好で、長さ 2.2m が残存している。

52c 段階も遺構の東半部で路面が確認された。Ⅴ層由来のブロックを少量含む１層上面が路面にあたり、検出面から５～８cm 程度が硬化する。硬化面は長さ 2.0m が残存



第 280 図　52 道路遺物出土状況図



第 281 図　52 道路出土遺物

している。

Po260 ・ 261 は土師器坏で、体部の内外面に横ナデが施されている。このうち、Po261 は回転糸切り成形である。CP40・41 は平瓦である。CP40 は、凸面は工具によるナデ、凹面は端面が面取りされ布目がみられる。CP41 は凸面は縄目タタキ、凹面は風化のため調整不明である。F52 は路床から出土した椀形鍛冶滓である。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から判断して８～10 世紀と考えられる。

道路関連遺構

460 道路（第 233・278・282 図、第 58 表、図版 127）

３区北西 7a-9B-3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。路面及び路床上半は削平され、路床の土坑下半部のみ残る。主軸は N-33° -W をとる。平面形は瓢形で、残存規模は長さ 0.44m、最大幅 0.26m、検出面からの深さは最大 0.11ｍを測る。埋土はⅥ層由来のブロックを含む黒褐色の砂混じりシルトの単層で、しまりが強い。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

183 道路（第 233・278・282 図、第 58 表、図版 127）

３区北西 7a-9B-3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。路面及び路床上半は削平され、路床の土坑下半部のみ残る。主軸は N-68° -E をとる。平面形は長楕円形で、残存規模は長さ 1.73m、最大幅 0.43m、検出面からの深さは最大 0.16ｍを測る。埋土はⅥ層由来のブロックを含む黒褐色シルトの１層が上層に、同じくⅥ層由来のブロックを含む灰黄・黒褐色シルトの２～４層が下層に堆積する。遺物は出土していない。

184 道路（第 233・278・282 図、第 58 表、図版 128）

３区北西 7a-9B-2j・ 3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で流路に面する傾斜地で検出した。290 道路に切られる。路面及び路床上半は削平され、路床の下半部のみ残る。主軸は N-65° -E をとる。平面形は長い瓢形で、土坑が２基連結する。残存規模は長さ 1.42m、最大幅 0.37m、検出面からの深さは最大 0.09ｍを測る。埋土はⅥ層由来のブロックと粗粒砂を多く含む黒褐色砂混じりシルトの１・２層が堆積し、しまりが強い。遺物は出土していない。

290・407 道路（第 233・278・282 図、第 58 表、図版 128・129・132）

３区北西 7a-9B-2j・ 3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。184 ・ 291 道路を切る。南北

方向に走行する暗渠によって分割されているが、本来は同一遺構の可能性がある。290 道路は路面が削平され、路床のみが残る。407 道路は路面と路床が残存している。両者とも主軸は N-17° -E をとる。

［290 道路］

平面形は長楕円形を呈し、残存規模は長さ 2.2m、最大幅 0.62m、検出面からの深さは最大 0.08 mを測る。北端部に径 0.18mの小穴が確認された。埋土は、Ⅴ層由来のブロックと粗粒砂を含む黒色砂混じりシルトが堆積し、しまりは強い。遺物は出土していない。

［407 道路］

平面形は楕円形を呈し、残存規模は長さ 0.57m、最大幅 0.33m、検出面からの深さは最大 0.06m を測る。埋土はⅤ層由来のブロックを含む黒色シルトが厚さ３cm 程度で堆積し、路面にあたる。下層にⅢ層由来のブロックを含む黄橙色シルトが堆積し、路床と考えられる。遺物は出土していない。

291 道路（第 233・278・282 図、第 58 表、図版 129）

３区北西 7a-9B-2j・ 3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で流路に面する傾斜地で検出した。184 ・290 道路に切られる。路面及び路床上半は削平され、路床の土坑下半部のみ残る。西側を 290 道路に切られる。主軸は N-89° -E をとる。平面形は歪な楕円形で、残存規模は長さ 1.48m、最大幅 0.69 m、検出面からの深さは最大 0.14mを測る。埋土はⅥ層由来のブロックと粗粒砂を含む黒褐色・黒色砂混じりシルトの１・２層が堆積し、しまりが強い。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

292 道路（第 233・278・283 図、第 58 表、図版 129）

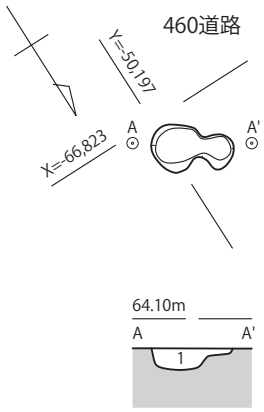
３区北西 7a-9B-3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で流路に面する傾斜地で検出した。路面及び路床上半は削平され、路床の土坑下半部のみ残る。主軸は N-80° -E をとる。平面形は歪な楕円形で、残存規模は長さ 1.83m、最大幅 0.47m、検出面からの深さは最大 0.07mを測る。埋土はⅥ層由来のブロックと粗粒砂、炭化物を含む黒褐色砂混じりシルトの単層で、しまりが強い。遺物は出土していない。

293 道路（第 233・278・283 図、第 58 表、図版 129・130）

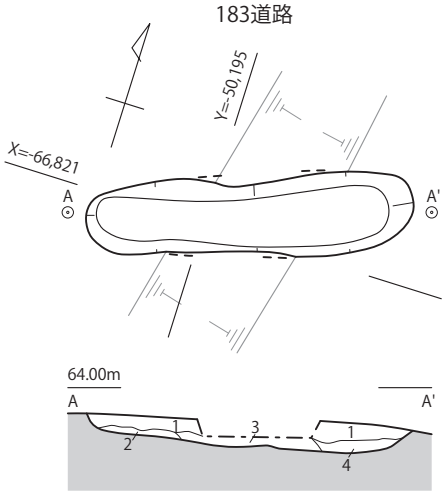
３区北西 7a-9B-3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で流路に面する傾斜地で検出した。路面及び路床上半は削平され、路床の土坑下半部のみ残る。主軸は N-98° -E をとる。平面形は歪な楕円形で、残存規模は長さ 0.93m、最大幅 0.42m、検出面からの深さは最大 0.13mを測る。埋土はⅥ層由来のブロックと粗粒砂、炭化物を含む黒褐色砂混じりシルトの上層と、同じくⅥ層由来のブロックと粗粒砂、炭化物を含む黒褐色砂混じりシルトの下層が堆積し、いずれもしまりが強い。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

294・295 道路（第 233・278・283 図、第 58 表、図版 130）

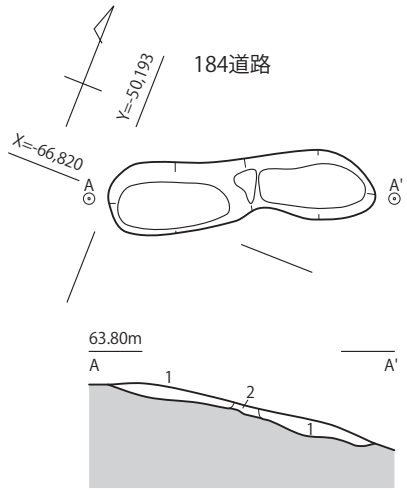
３区北西 7a-9B-3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で流路に面する傾斜地で検出した。294 道路は 295 道路に切られる。両者とも路面が削平され、路床のみ残る。



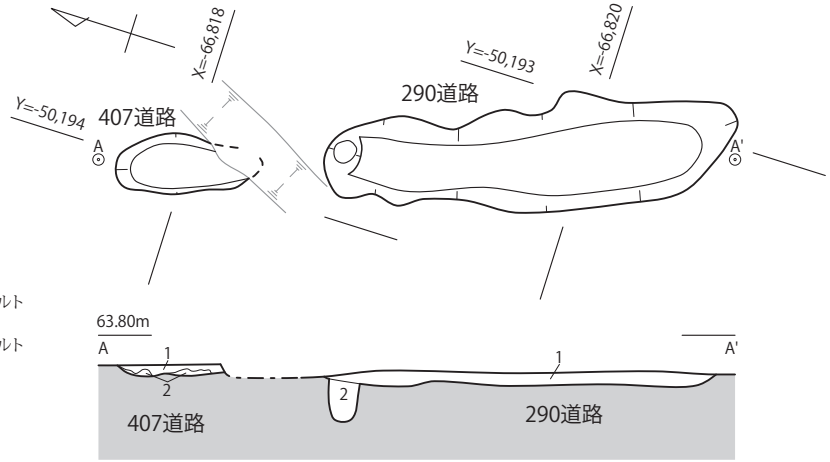
460道路
1　10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト (粗粒砂混　10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり強



183道路
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ2cmブロック混
10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (2.5Y6/2 灰黄色 シルトφ2～3cmブロック混)　粘性中　しまり中
4　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ1cmブロック混
10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中

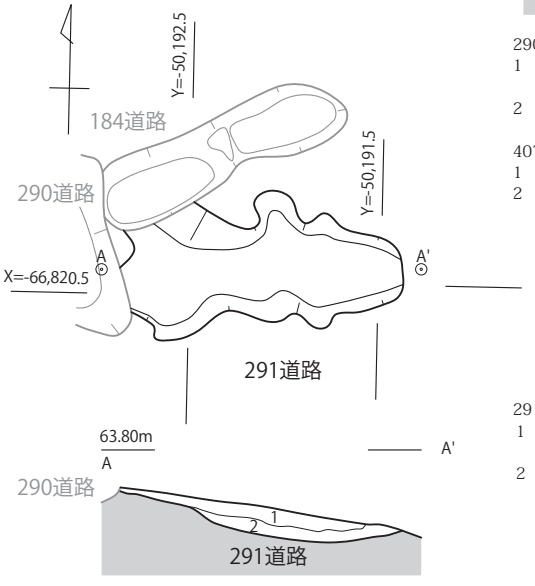


184道路
1　10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
φ2～3cmブロック混　粗粒砂多混)　粘性中　しまり強
2　10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
φ1～2cmブロック混　粗粒砂多混)　粘性中　しまり強



290道路
1　10YR2/1 黒色 砂混じりシルト (粗粒砂混　10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)
粘性中　しまり強
2　10YR2/1 黒色 砂混じりシルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり強

407道路
1　10YR1.7/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック少混)　粘性中　しまり中
2　10YR8/6 黄橙色 シルト (10YR2/1 黒色 シルトφ1cmブロック混)　粘性中　しまり中



291道路
1　10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト (粗粒砂混　10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ3～5cmブロック混
φ1～2cm炭化物混)　粘性中　しまり強
2　10YR2/1 黒色 砂混じりシルト (粗粒砂混　10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ3～5cmブロック混
φ1～2cm炭化物混)　粘性中　しまり強

0　(1:40)　1m

第 282 図　183・184・290・291・407・460 道路

［294 道路］

主軸は N-50° -E をとる。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長さ 0.93m、最大幅 0.36m、検出面からの深さは最大 0.05m を測る。埋土はⅤ層由来のブロックと粗粒砂、炭化物を含む黒色砂混じりシルトが堆積し、しまりは強い。遺物は出土していない。

［295 道路］

主軸は N-83° -E をとる。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長さ 1.47m、最大幅 0.4m、検出面からの深さは最大 0.08m を測る。埋土はⅤ層由来のブロックと粗粒砂、炭化物を含む黒色砂混じりシルトが堆積し、しまりは強い。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

296 道路（第 233・278・283 図、第 58 表、図版 130・131）

３区北西 7a-9B-3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。路面及び路床上半は削平され、路床の土坑下半部のみ残る。平面形は楕円形で、残存規模は長さ 0.32m、最大幅 0.16m、検出面からの深さは最大 0.06m を測る。埋土はⅥ層由来のブロックと粗粒砂、炭化物を含む黒褐色砂混じりシルトの単層で、しまりが強い。遺物は出土していない。

297 道路（第 233・278・283 図、第 58 表、図版 131）

３区北西 7a-9B-3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で流路に面する傾斜地で検出した。路面及び路床上半は削平され、路床の土坑下半部のみ残る。平面形は不整三角形で、残存規模は長さ 0.32m、最大幅 0.29m、検出面からの深さは最大 0.04m を測る。埋土はⅥ層由来のブロックと粗粒砂、炭化物を含む黒色砂混じりシルトの単層で、しまりが強い。遺物は出土していない。

298 道路（第 233・278・283 図、第 58 表、図版 131）

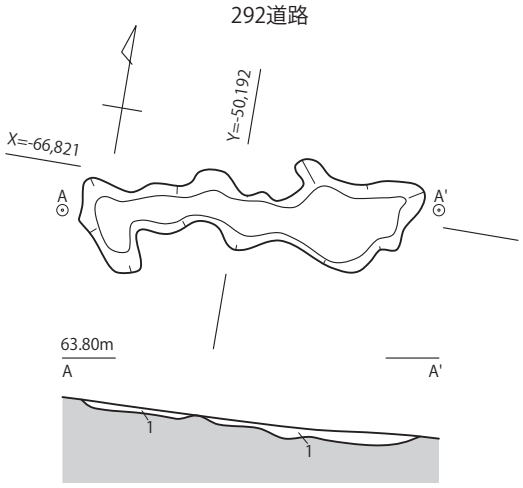
３区北西 7a-9B-3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。路面及び路床上半は削平され、路床の土坑下半部のみ残る。平面形は不整円形で、残存規模は長さ 0.27m、最大幅 0.21m、検出面からの深さは最大 0.03m を測る。埋土はⅥ層由来のブロックと粗粒砂、炭化物を含む黒色砂混じりシルトの単層で、しまりが強い。遺物は出土していない。

299 道路（第 233・278・283 図、第 58 表、図版 130）

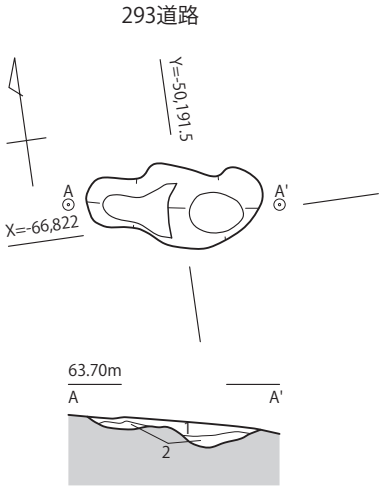
３区北西 7a-9B-3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。路面及び路床上半は削平され、路床の土坑下半部のみ残る。平面形は不整三角形で、残存規模は長さ 0.49m、最大幅 0.26m、検出面からの深さは最大 0.06m を測る。埋土はⅥ層由来のブロックと粗粒砂を含む黒色砂混じりシルトの単層で、しまりが強い。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

301 道路（第 233・278・284 図、第 58 表、図版 131）

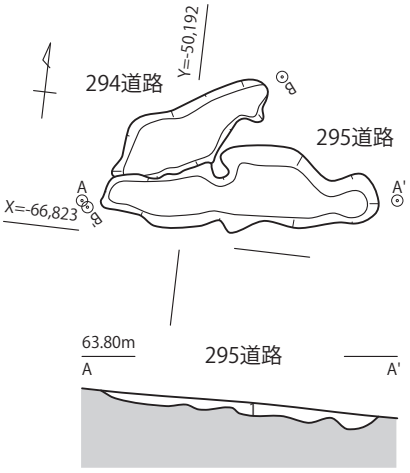
３区北西 7a-9B-3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。路面及び路床上半は削平され、路床の土坑下半部のみ残る。平面形は不整楕円形で、残存規模は長さ 0.35m、最大幅 0.21m、検出面からの深さは最大 0.04m を測る。埋土はⅥ層由来のブロックと粗粒砂、炭化物を含む黒褐色砂混じりシルトの単層で、しまりが強い。遺物は出土していない。

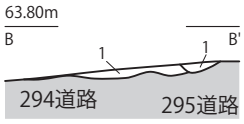


292道路
1　10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト (粗粒砂混
10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2～3cmブロック混　φ1cm炭化物混)
粘性中　しまり強



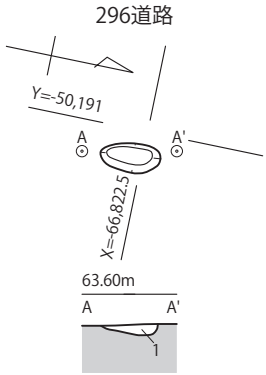
293道路
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (粗粒砂混
10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ3～5cmブロック混　φ1cm炭化物混)
粘性中　しまり強
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (粗粒砂混
10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ3～5cmブロック混　φ1～2cm炭化物混)
粘性中　しまり強



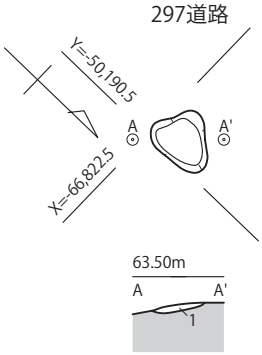


294道路
1　10YR2/1 黒色 砂混じりシルト (粗粒砂混
10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混
φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり強

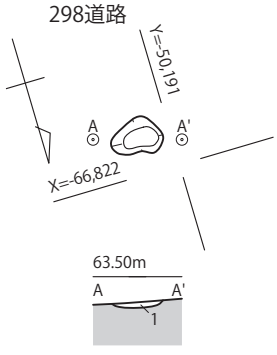
295道路
1　10YR2/1 黒色 砂混じりシルト (粗粒砂混
10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混
φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり強



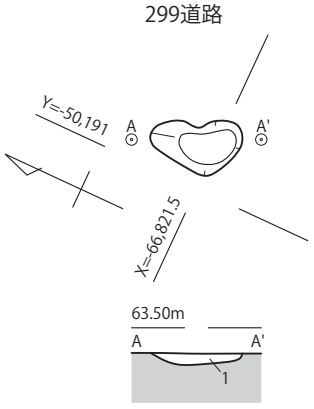
296道路
1　10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト (粗粒砂混
10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混
φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり強



297道路
1　10YR2/1 黒色 砂混じりシルト (粗粒砂混
10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混
φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり強



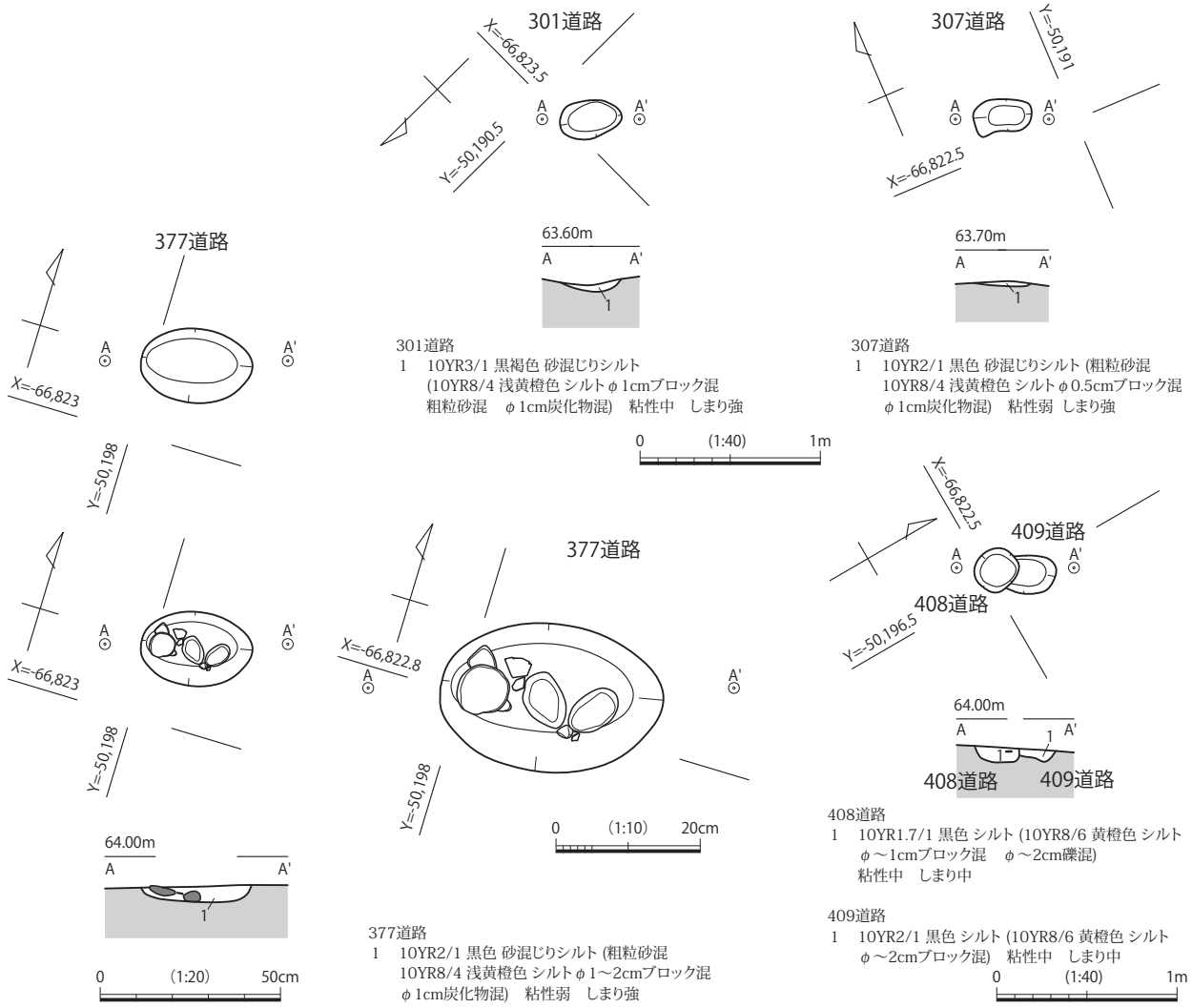
298道路
1　10YR2/1 黒色 砂混じりシルト
(10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混　粗粒砂混
φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり強



299道路
1　10YR2/1 黒色 砂混じりシルト (粗粒砂混
10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)
粘性中　しまり強

0　(1:40)　1m

第 283 図　292 ～ 299 道路



第 284 図　301・307・377・408・409 道路

307 道路（第 233・278・284 図、第 58 表）

３区北西 7a-9B-3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。路面及び路床上半は削平され、路床の土坑下半部のみ残る。平面形は隅丸方形で、残存規模は長さ 0.33m、最大幅 0.18m、検出面からの深さは最大 0.03m を測る。埋土はⅥ層由来のブロックと粗粒砂、炭化物を含む黒色砂混じりシルトの単層で、しまりが強い。遺物は出土していない。

377 道路（第 233・278・284 図、第 58 表、図版 131）

３区北西 7a-9B-3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。路面及び路床上半は削平され、路床の土坑下半部のみ残る。平面形は楕円形で、残存規模は長さ 0.31m、最大幅 0.21m、検出面からの深さは最大 0.05m を測る。埋土はⅥ層由来のブロックと粗粒砂、炭化物を含む黒色砂混じりシルトの単層で、しまりが強い。底面には５～７cm の小礫や土器片が敷かれている。遺物は土器片や鉄滓が出土したが、小片のため図化していない。

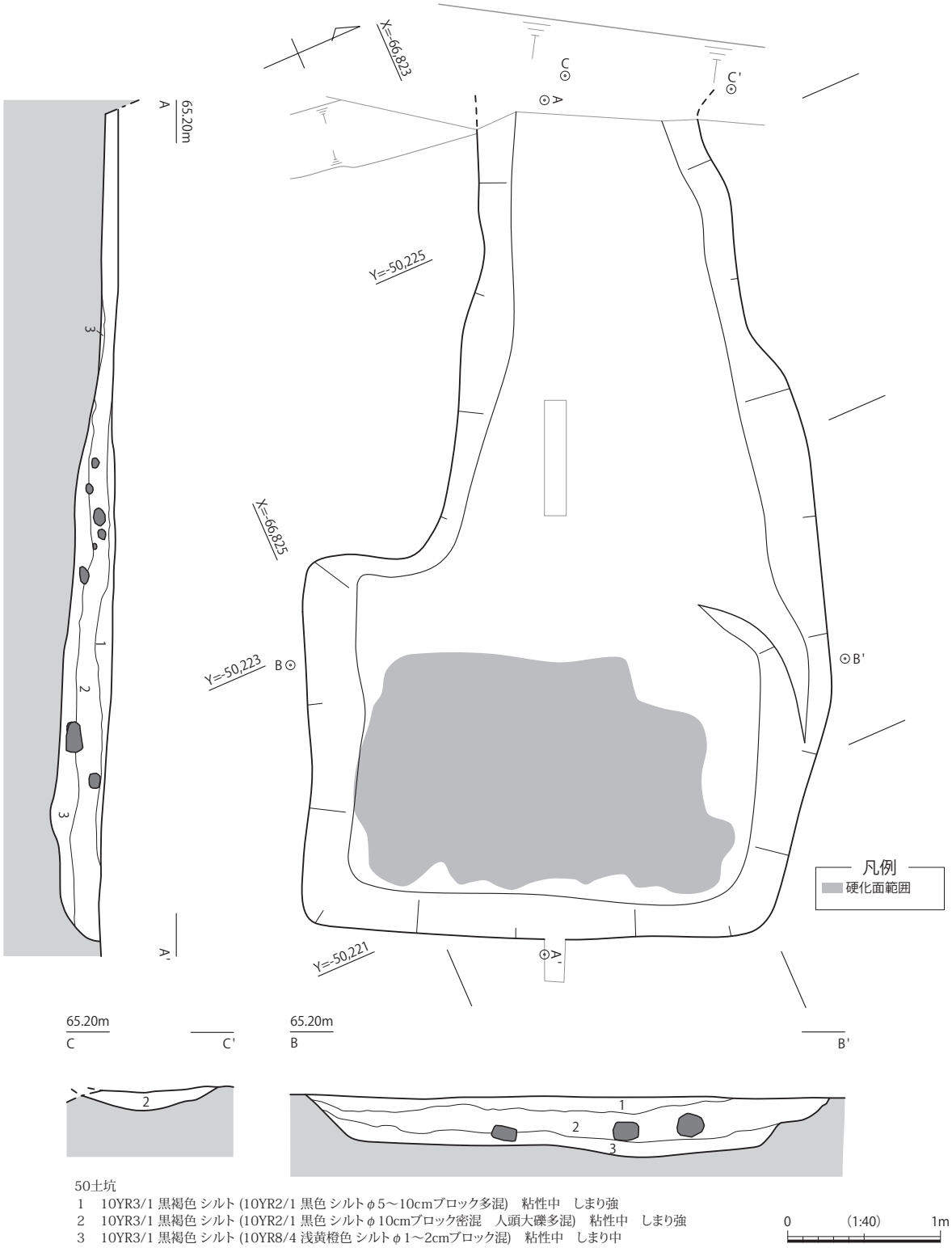
408・409 道路（第 233・278・284 図、第 58 表、図版 132）

３区北西 7a-9B-3j グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。409 道路は 408 道路に切られる。

両者とも路面が削平され、路床の土坑下半部が残る。

［408 道路］

平面形は円形を呈し、残存規模は長さ 0.25m、最大幅 0.25m、検出面からの深さは最大 0.09m を測る。埋土はⅤ層由来のブロックと小礫を含む黒色シルトが堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。



第 285 図　50 土坑

［409 道路］

平面形は楕円形を呈し、残存規模は長さ 0.21m、最大幅 0.21m、検出面からの深さは最大 0.07m を測る。埋土はⅤ層由来のブロックを含む黒色シルトが堆積する。遺物は出土していない。

（5）土坑

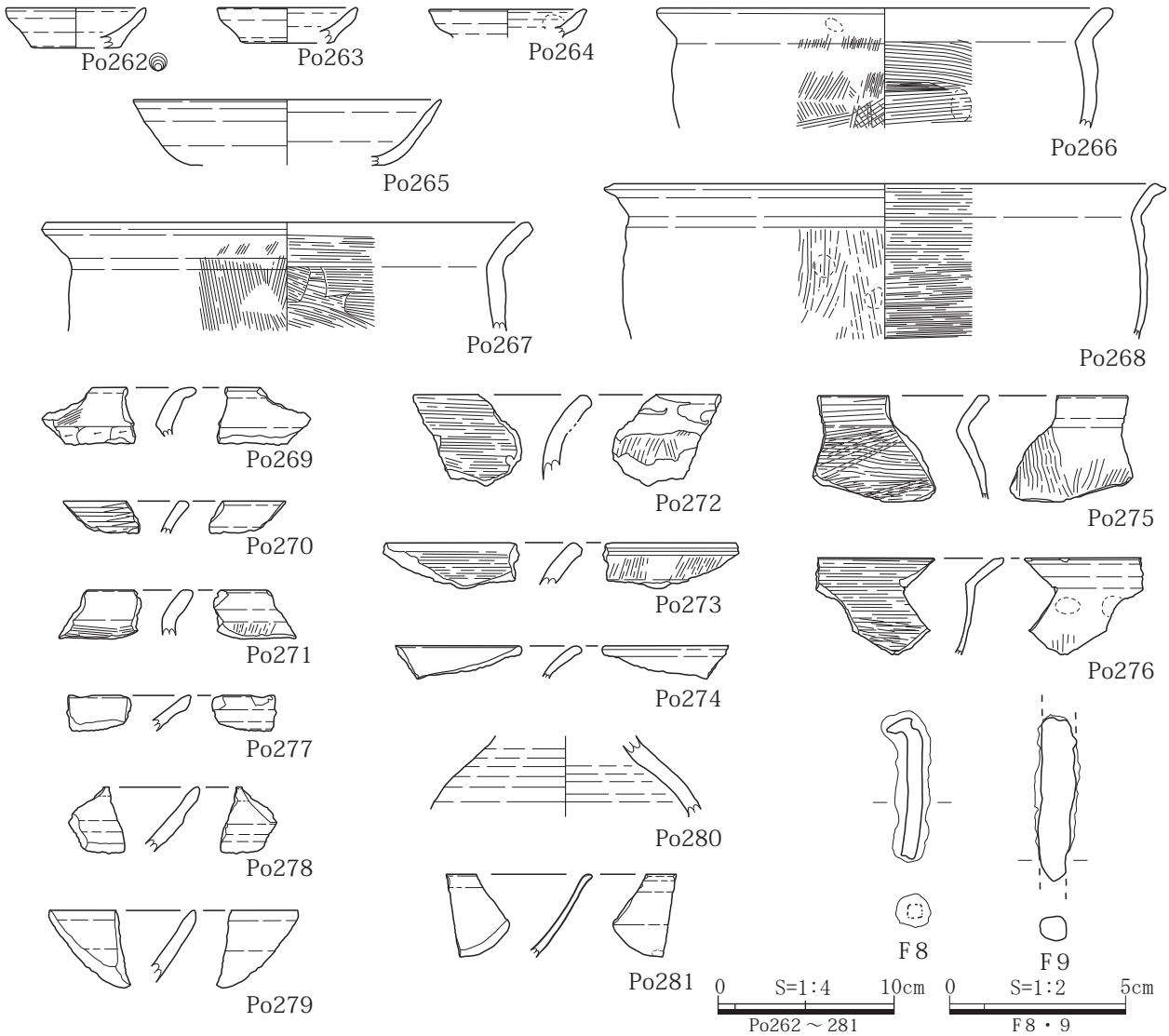
50 土坑（第 233・235・285 ～ 288 図、第 55・76・97・98 表、図版 86・121 ～ 123・135・171・172）

３区南西 7a-9C-3c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。検出段階で方形のプランが確認されたため、当初は竪穴建物を想定して、長軸と短軸に土層観察ベルトを設定し掘削を進めた。ところが、西へ延びる張り出し部が確認され、方形部の底面では硬化面は確認されたものの、柱穴や壁溝も検出されなかった。さらに埋土中から中世前期の遺物が複数出土したことから土坑と認定した。

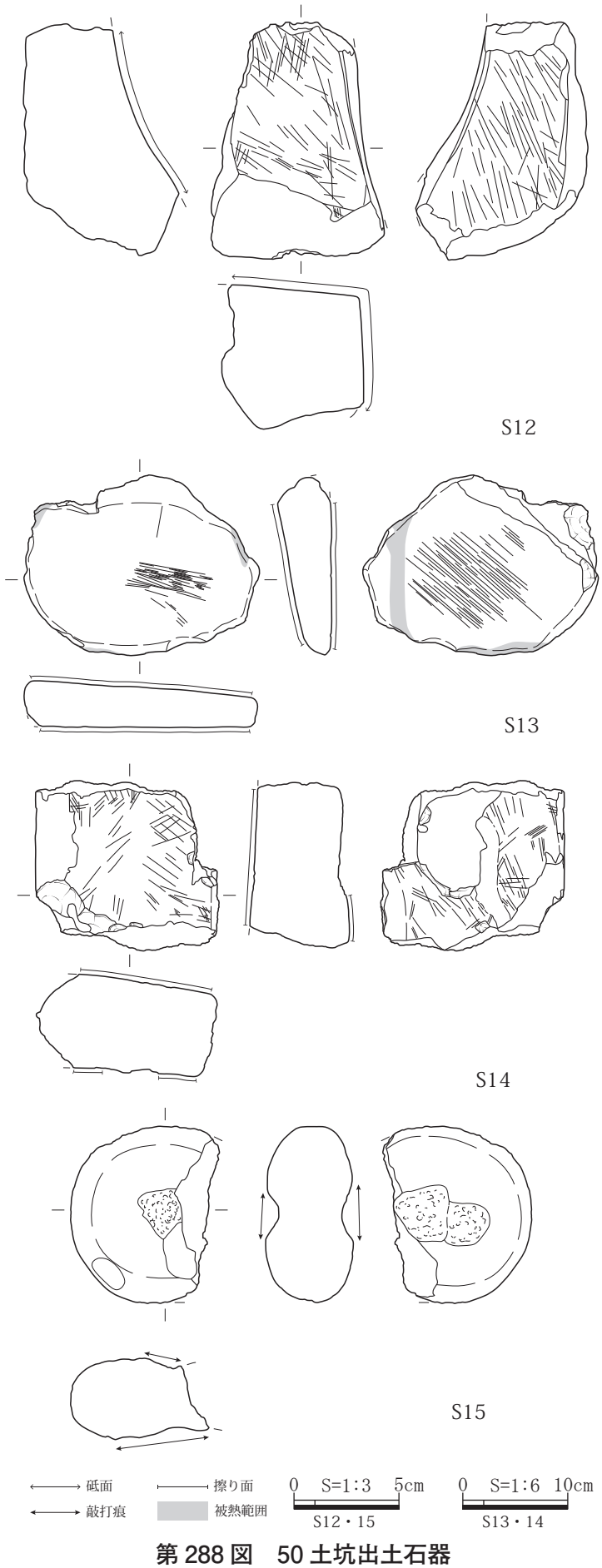
第 286 図　50 土坑遺物出土状況図

平面形は柄鏡形を呈し、主軸はN-23°-Wをとる。張り出し部と方形部に分かれ、張り出し部の底面が緩やかに高くなり、西の調査区外へ延びる。規模は方形部が長軸3.45m、短軸2.4m、検出面からの深さは最大0.35m、張り出し部は長さ3.0m、最大幅2.5m、検出面からの深さは最大0.12mを測る。床面積は両者合わせ13.8㎡である。先述したように、柱穴や壁溝、炉などは確認されていないが、方形部の床面は長軸2.3m、短軸1.5mの範囲で硬化していることから、簡易な覆屋的な構造があり、内部である期間何かしらの活動が行われていたことが想定される。埋土は３層に分層でき、Ⅲ・Ⅳ層由来のブロックを含む黒褐色シルトが堆積する。とくに方形部の２層中には複数の大小礫や土器片などが含まれており、埋没過程の一時期廃棄穴として利用されていたことが確認された。

Po262～264は土師器皿である。器壁が厚く、底部から口縁部に向かって外向きに立ち上がる。Po262は回転糸切り成形である。Po265は土師器坏の口縁部から体部片である。回転ナデ調整で、内面に煤が付着する。Po266～276は土師器鍋である。いずれも器形は幅広な体部を有するが、口縁部は「く」字状に外反し、瓦質土器のような受け口を持たない。口縁端部は直線的に外向きに立ち上がるPo266・267・271～273と外側に摘まみ出されるPo268・269・274～276がみられる。また器壁が厚いPo266・267・269・271～273と器壁が薄いPo268・270・274～276がみられる。



第287図　50土坑出土遺物



第 288 図　50 土坑出土石器

口縁部の内外面に横ナデを施すものと、Po267・270・272・273・275・276のように内外面いずれかにハケ調整を施すものがみられる。Po277 ～ 279 は土師器鉢の口縁部である。Po280 は陶器の壺体部である。Po281 は白磁碗で、器壁が薄く口縁端部が外側に張り出すことから、Ⅴ - ２類に比定されよう。

S12 ～ 14 は砥石である。S12 は撥形で厚みのある砥石である。砥面が２面残る。S13 は板状の素材に表裏面に研磨痕が残る。S14 は方柱状の素材を用いた砥石であり、砥面が２面残る。S15 は扁平の円礫を素材とした敲石で、表裏面のほぼ中心に敲打痕が残る。

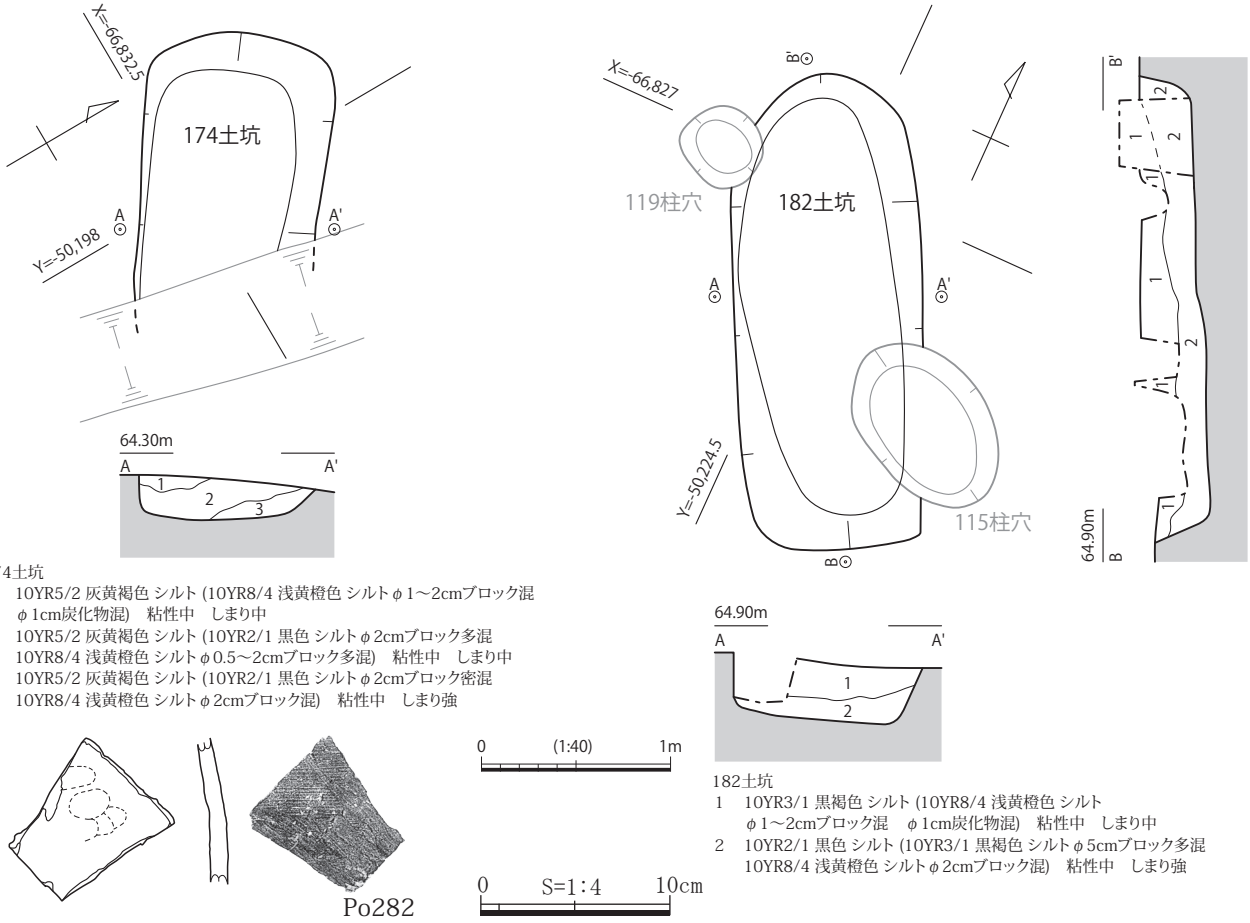
Ｆ８は頭部がつぶれた釘である。Ｆ９は断面方形を呈し、上下が欠損しているが釘の可能性がある。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から 11 世紀後半から 12 世紀中葉と考えられる。

174 土坑（第 233･289 図、第 55･76 表、図版 122・172）

３区南西 7a-9B-4j グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。南東側は暗渠で削平され､南西側で256土坑を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、残存規模は長軸 1.28m、短軸 0.94m、検出面からの深さ 0.23m を測る。埋土はⅥ層由来のブロックを含む灰黄褐色シルトが３層にわたり堆積する。性格は不明である。Po282 は陶器甕の体部片である。外面の上半は工具による粗いナデ、下半は斜め方向の丁寧なナデ、内面はナデ調整後指オサエを施している。

本遺構の帰属時期は出土遺物から中世以降と考えられる。

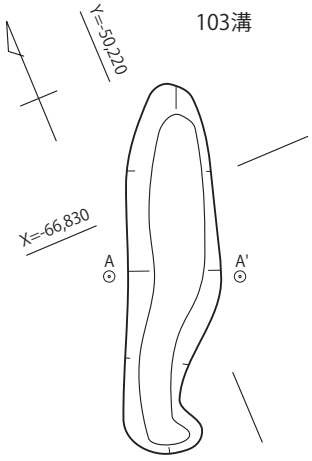


第 289 図　174・182 土坑、174 土坑出土土器

182 土坑（第 235・289 図、第 55 表）

３区南西 7a-9C-3c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。竪穴建物１を切っており、119 柱穴と掘立柱建物 11 の 115 柱穴に切られている。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸は N-64° -W をとる。規模は長さ 2.5m、最大幅 1.0m、検出面からの深さは最大 0.3m を測る。埋土は２層に分層でき、Ⅵ層由来のブロックを含む黒褐色・黒色シルトが堆積する。遺物は小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、竪穴建物１との重複関係と埋土の特徴から古代と考えられる。

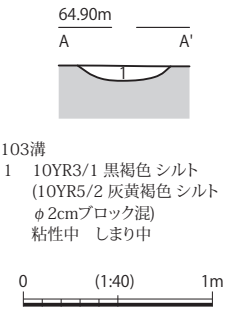


（6）溝

103 溝（第 233・235・290 図、第 56 表、図版 124）

３区南西 7a-9C-3b・ 3c・ 4b・ 4c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。主軸は N-27° -E をとる。規模は長さ 1.96m、最大幅 0.49m、検出面からの深さは最大 0.08m を測る。埋土はⅤ層由来のブロックを含む黒褐色シルトが堆積する。ここでは耕作溝の可能性を指摘しておきたい。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代以降と考えられる。



第 290 図　103 溝

（7）柱穴・ピット

第１遺構面では、単独の柱穴52基、ピット87基を検出した。このうち、主に出土遺物を掲載したものについて報告する。

42柱穴（第234・291・456図、第25・59表、図版325）

３区北西7a-9C-2bグリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。南西側で22ピットに切られる。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.85m、短軸0.63m、検出面からの深さ0.43mを測る。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１～４層と、同じくⅢ・Ⅴ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の５・６層が堆積する。遺物は鍛冶滓F53が出土している。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

22ピット（第234・291図、第59表）

３区北西7a-9C-2bグリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。北東側で42柱穴を切る。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.94m、短軸0.84m、検出面からの深さ0.30mを測る。埋土はⅢ・Ⅴ層に由来するブロックを含む１・２層が上下に堆積する。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化していない。

110柱穴（第235・291・293図、第59・77表、図版133・172）

３区南西7a-9C-3cグリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。平面形は瓢状を呈し、規模は長軸0.67m、短軸0.55m、検出面からの深さ0.48mを測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡１層と、Ⅴ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２・３層が堆積する。遺物は、１層より須恵器Po293が出土している。Po293は須恵器甕体部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円状当て具痕が観察される。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

60ピット（第235・291・293図、第59・76表、図版133・173）

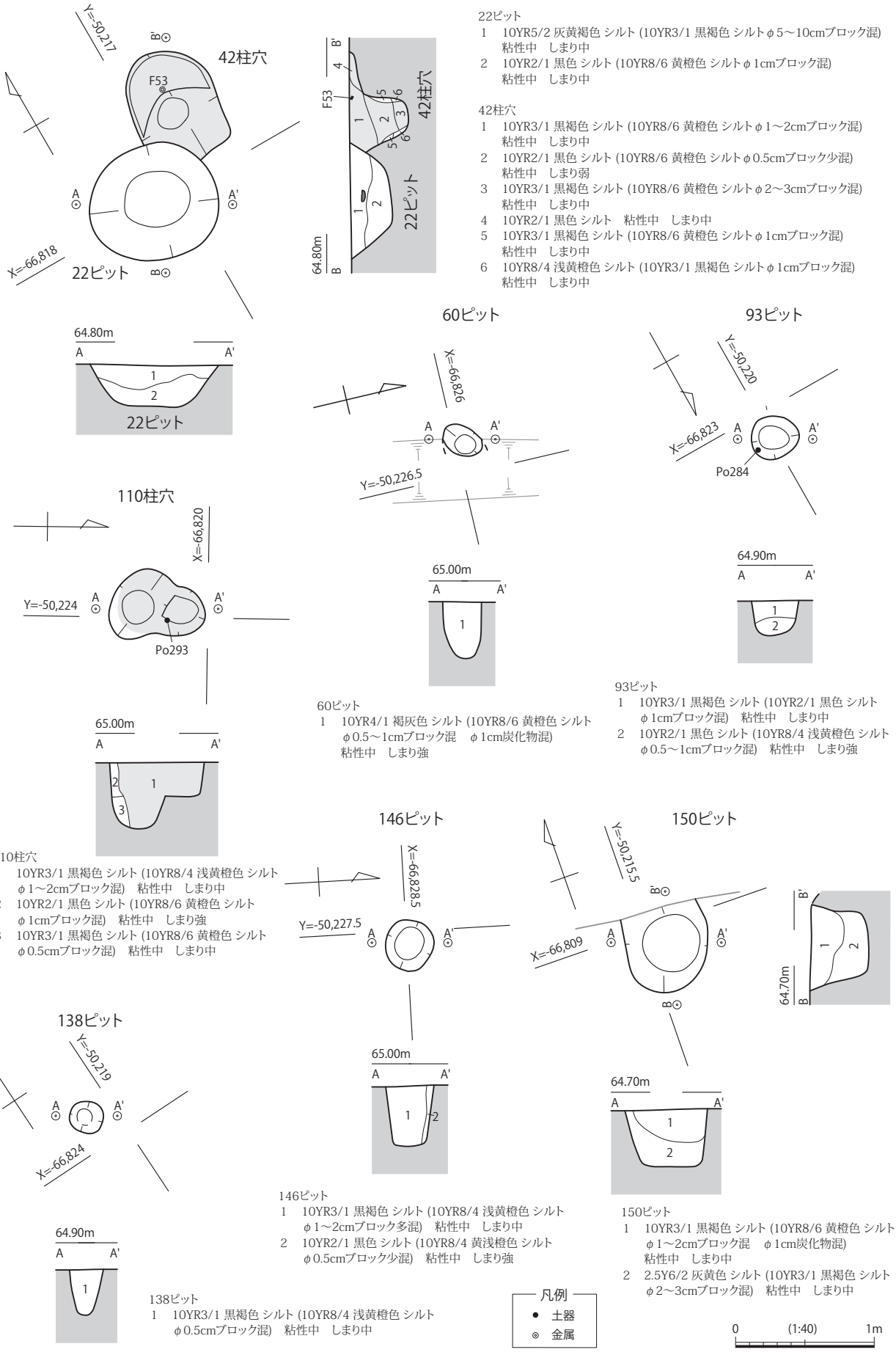
３区南西7a-9C-3cグリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。東側を暗渠によって削平されている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.30m、短軸0.20m、検出面からの深さ0.41mを測る。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む褐灰色シルトが堆積する。遺物は埋土からPo288が出土している。Po288は口縁部が「く」字状に外反する土師器甕である。内外面横ナデを施している。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

93ピット（第234・235・291・293図、第59・76表、図版173）

３区西7a-9C-3b・3cグリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.35m、短軸0.32m、検出面からの深さ0.25mを測る。埋土はⅢ・Ⅴ層に由来するブロックを含む１・２層が上下に堆積する。遺物は１層より土師器Po284が出土している。Po284は口縁部が大きく外側に開く土師器の甕である。内外面赤色塗彩が施されている。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。



22ピット
1　10YR5/2 灰黄褐色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ5～10cmブロック混)
　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混)
　粘性中　しまり中

42柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1～2cmブロック混)
　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ0.5cmブロック少混)
　粘性中　しまり弱
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ2～3cmブロック混)
　粘性中　しまり中
4　10YR2/1 黒色 シルト　粘性中　しまり中
5　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルトφ1cmブロック混)
　粘性中　しまり中
6　10YR8/4 浅黄橙色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルトφ1cmブロック混)
　粘性中　しまり中

60ピット
1　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト
　φ0.5～1cmブロック混　φ1cm炭化物混)
　粘性中　しまり強

93ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR2/1 黒色 シルト
　φ1cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
　φ0.5～1cmブロック混)　粘性中　しまり強

110柱穴
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
　φ1～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト
　φ1cmブロック混)　粘性中　しまり強
3　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト
　φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中

146ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
　φ1～2cmブロック多混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 黄浅橙色 シルト
　φ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり強

150ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト
　φ1～2cmブロック混　φ1cm炭化物混)
　粘性中　しまり中
2　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト
　φ2～3cmブロック混)　粘性中　しまり中

138ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト
　φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中

第 291 図　42・110 柱穴、22・60・93・138・146・150 ピット

138 ピット（第 234・235・291・293 図、第 59・76 表、図版 134・173）

３区西 7a-9C-3b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。平面形は円形を呈し、規模は長軸 0.24m、短軸 0.23m、検出面からの深さ 0.33mを測る。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む黒褐色シルトが堆積する。遺物は埋土から Po290 が出土している。Po290 は須恵器甕の体部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円状当て具痕が観察される。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

146 ピット（第 235・291・293 図、第 59・76 表、図版 134・173）

３区南西 7a-9C-3c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。平面形は円形を呈し、規模は長軸 0.37m、短軸 0.34m、検出面からの深さ 0.43mを測る。埋土はⅤ・Ⅵ層に由来するブロックを含む１・２層が堆積する。遺物は埋土から Po286 が出土している。Po286 は底部に粗いナデを施す土師器皿である。器壁が厚く、底部から口縁部へ直線的に外向きに立ち上がる。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から 11 世紀後半～ 12 世紀と考えられる。

150 ピット（第 233・291・293 図、第 59・76 表、図版 134・173）

３区北西 7a-9C-1b グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。北側は２・３区の調査区境で削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.61m、短軸 0.60m、検出面からの深さ 0.41mを測る。埋土はⅢ・Ⅴ層に由来するブロックを含む１・２層が上下に堆積する。遺物は埋土から Po285・292 が出土している。Po285 は手づくね成形のミニチュア土器である。Po292 は須恵器甕の体部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円状当て具痕が観察される。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

178 ピット（第 235・292・293 図、第 59・76 表、図版 134・173）

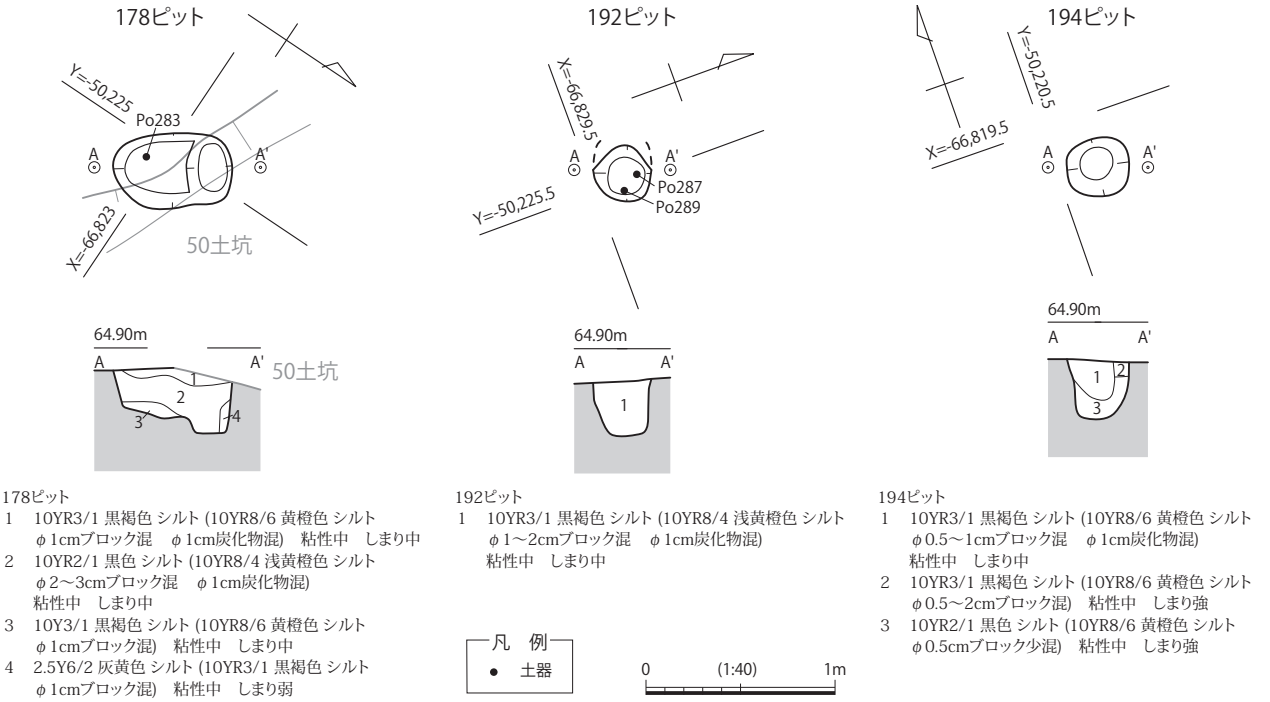
３区南西 7a-9C-3c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。50 土坑に切られる。平面形は不整楕円形を呈し、底面は南東側にテラス面を設ける。規模は長軸 0.64m、短軸 0.40m、検出面からの深さ 0.33mを測る。埋土はⅢ・Ⅴ・Ⅵ層に由来するブロックを含む１～４層が堆積する。遺物は、１層より混入と考えられる弥生土器の甕底部 Po283 が出土している。外面は縦方向のヘラミガキ調整、内面はヘラケズリ調整を施す。

本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から古代と考えられる。

192 ピット（第 235・292・293 図、第 59・76 表、図版 135・173）

３区南西 7a-9C-3c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。西側の一部が削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 0.31m、短軸 0.30m、検出面からの深さ 0.29mを測る。埋土はⅥ層に由来するブロックや炭化物を含む黒褐色シルトが堆積する。遺物は、１層より Po287・289 が出土している。Po287 は回転糸切り成形の土師器皿である。器壁が厚く、底部から口縁部へ直線的に外向きに立ち上がる。Po289 は土師器鉢の口縁部である。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から 11 世紀後半～ 12 世紀と考えられる。

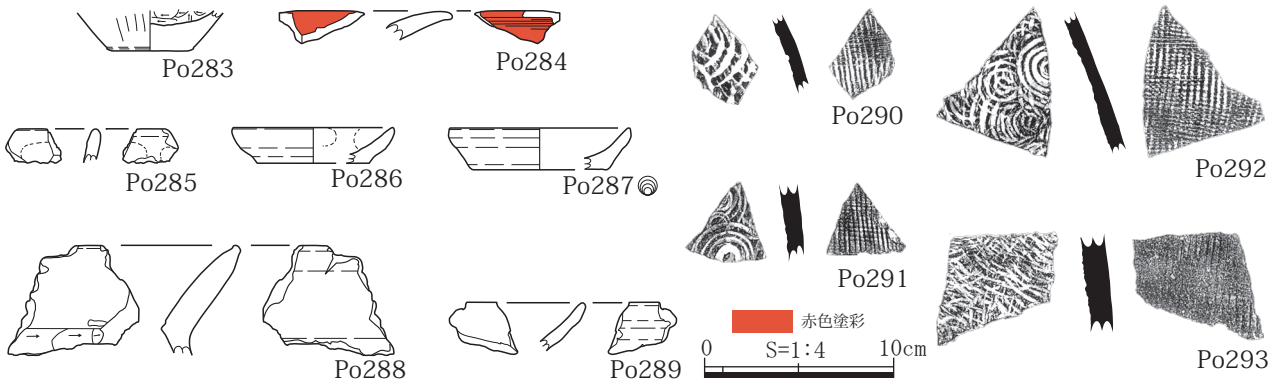


178ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ2～3cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
3　10Y3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ1cmブロック混)　粘性中　しまり中
4　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR3/1 黒褐色 シルト φ1cmブロック混)　粘性中　しまり弱

192ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1～2cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中

194ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ0.5～1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ0.5～2cmブロック混)　粘性中　しまり強
3　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/6 黄橙色 シルト φ0.5cmブロック少混)　粘性中　しまり強

第 292 図　178・192・194 ピット



第 293 図　第 1 遺構面柱穴・ピット出土土器

194 ピット（第 234・235・292・293 図、第 59・76 表、図版 135・173）

３区西 7a-9C-2c グリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.33m、短軸 0.31m、検出面からの深さ 0.31m を測る。埋土はⅤ層に由来するブロックや炭化物を含む１～３層が堆積する。遺物は埋土から須恵器 Po291 が出土している。Po291 は須恵器甕の体部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円状当て具痕が観察される。

本遺跡の帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

第３項　第２遺構面の調査（古墳時代以前の遺構と遺物）

１　概要（第 294 図）

３区全域に堆積するⅣ層（漸移層）上面で検出した遺構について第２遺構面として扱うこととした。検出遺構は土坑６基、柱穴 93 基、ピット 279 基であり、その多くが古墳時代以前に帰属するものと想定される。本項では、土坑以外の遺構について建物を構成しない柱穴、ピットでも遺物出土状況や埋土に特色があるものは掲載している。

２　検出した遺構と遺物

（1）土坑

256 土坑（第 294・295 図、第 55 表、図版 136）

３区南西 7a-9B-4j グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。南東側は暗渠で削平され、北東側で 174 土坑に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸 1.27m、短軸 0.40m、検出面からの深さ 0.20mを測る。埋土はⅥ層由来のブロックを含む黒色シルトと褐灰色シルトが堆積する。性格は不明である。遺物は出土していない。

本遺跡の帰属時期は、埋土の特徴から古墳時代以前と考えられる。

257 土坑（第 294・295 図、第 55・97 表、図版 136・172）

３区南西 7a-9B-4j グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。北西側は暗渠で削平されている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸 1.36m、短軸 1.13m、検出面からの深さ 0.14mを測る。埋土はⅥ層由来のブロックを含む黒色シルトが堆積する。埋土中から 10 ～ 15cm 程度の礫が散漫に出土している。性格は不明である。遺物は１層より S16 が出土している。S16 は扁平な円礫を素材とした凹石であり、表裏面の中心に敲打痕が残る。

本遺跡の帰属時期は、埋土の特徴から古墳時代以前と考えられる。

258 土坑（第 294・296 図、第 55 表、図版 136）

３区南西 7a-9B-4j グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。西側は暗渠で削平されている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸 0.94m、短軸 0.75m、検出面からの深さ 0.16mを測る。埋土はⅥ層由来のブロックを含む黒色シルトと褐灰色シルトが上下に堆積する。上層から 10 ～ 15cm 程度の礫が散漫に出土している。性格は不明である。遺物は出土していない。

本遺跡の帰属時期は、埋土の特徴から古墳時代以前と考えられる。

269 土坑（第 294・296 図、第 55 表、図版 137）

３区南西 7a-9C-4a、7a-9B-4j グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。北東側で 270 土坑を切り、東側で 268 ピットに切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸 1.16m、短軸 1.09m、検出面からの深さ 0.21mを測る。埋土はⅢ・Ⅵ層由来のブロックを含む黒色・浅黄橙色・褐灰色シルトの１～３層が堆積する。性格は不明である。遺物は出土していない。

本遺跡の帰属時期は、埋土の特徴から古墳時代以前と考えられる。

第 294 図　第２遺構面全体図

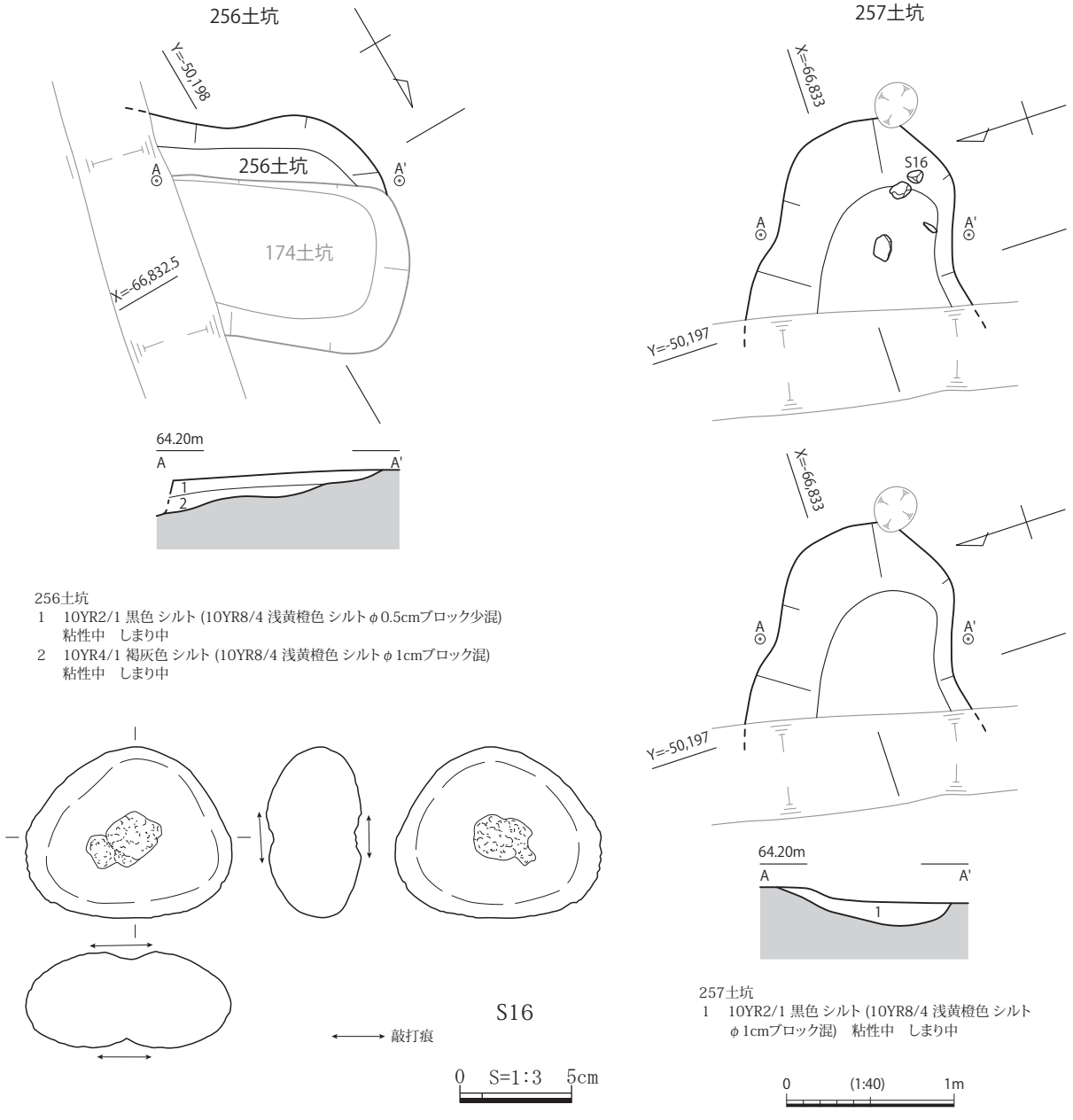
270 土坑（第 294・296 図、第 55 表、図版 137）

３区南西 7a-9B-4j グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。南西側で 269 土坑と東側で 268 ピットに切られている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸 0.84m、短軸 0.55m、検出面からの深さ 0.19mを測る。埋土はⅢ・Ⅵ層由来のブロックを含む黒色・浅黄橙色シルトの１・２層が上下に堆積する。性格は不明である。遺物は出土していない。

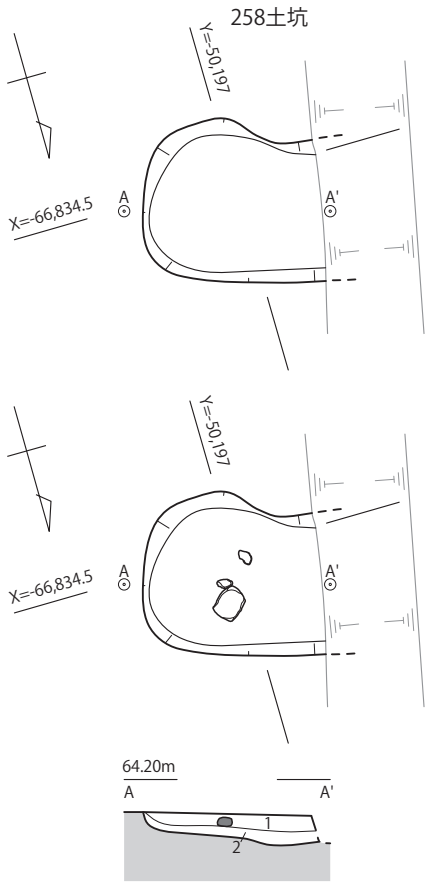
本遺跡の帰属時期は、埋土の特徴から古墳時代以前と考えられる。

305 土坑（第 294・296 図、第 55・97 表、図版 137・172）

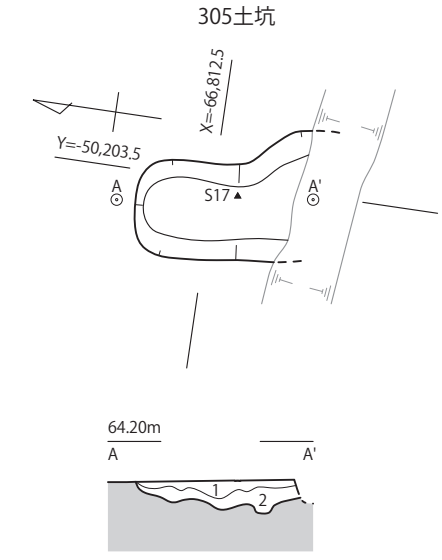
３区北寄り中央 7a-9C-2a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。南側を暗渠によって削平されている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸 0.84m、短軸 0.51m、検出面からの深さ 0.18



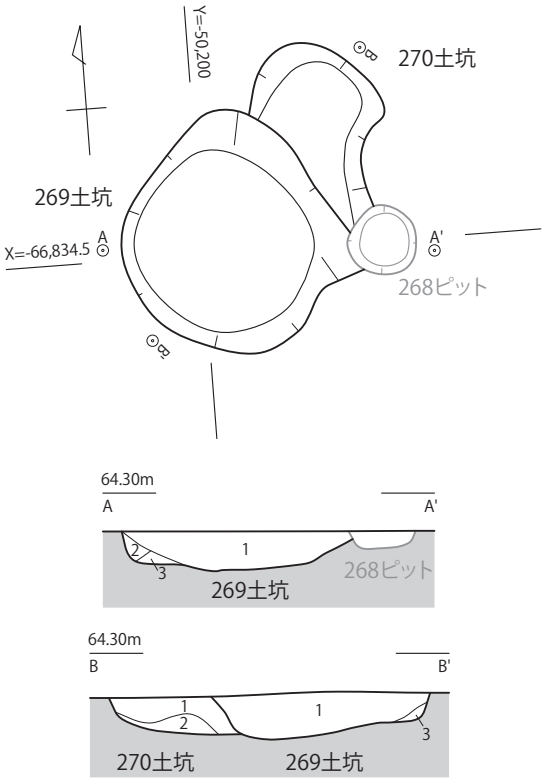
第 295 図　256・257 土坑、257 土坑出土石器



258土坑
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)
　粘性中　しまり中
2　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混)
　粘性中　しまり中

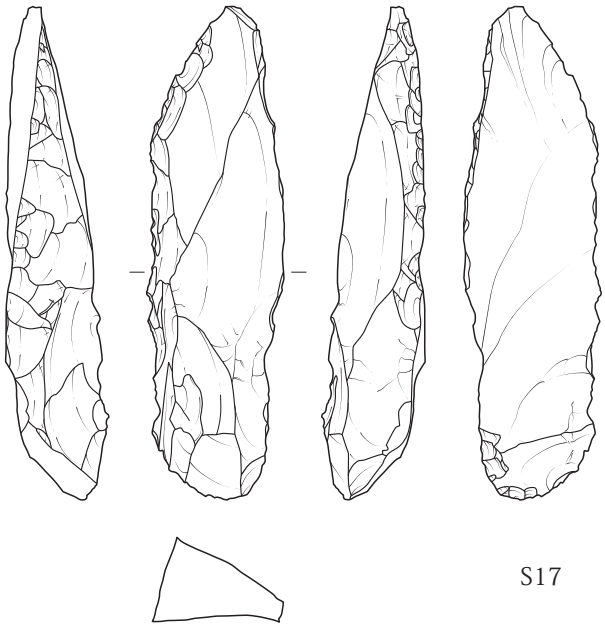


305土坑
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ3cmブロック少混)
　粘性中　しまり中
2　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2cmブロック混)
　粘性中　しまり中



269土坑
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1～2cmブロック少混)
　粘性中　しまり中
2　10YR8/4 浅黄橙色 シルト (10YR2/1 黒色 シルトφ0.5cmブロック混)
　粘性中　しまり中
3　10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2～3cmブロック混)
　粘性中　しまり中

270土坑
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ2～3cmブロック混)
　粘性中　しまり中
2　10YR8/4 浅黄橙色 シルト (10YR2/1 黒色 シルトφ2cmブロック少混)
　粘性強　しまり強

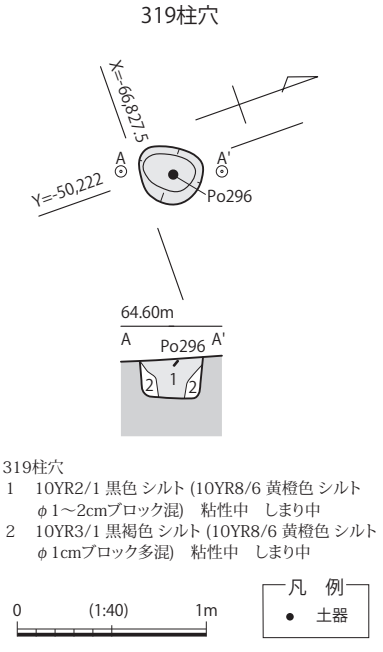


凡　例
▲　石器

0　(1:40)　1m

0　S=1:2　5cm

第 296 図　258・269・270・305 土坑、305 土坑出土石器



第 297 図　319 柱穴

mを測る。埋土はⅥ層由来のブロックを含む黒色・褐灰色シルトの１・２層が上下に堆積する。性格は不明である。遺物は１層から混入と考えられるS17が出土している。S17は安山岩製の角錘状石器である。腹面は大きく素材面を残し、背面左右両側に調整加工を施している。

本遺跡の帰属時期は、埋土の特徴から古墳時代以前と考えられる。

（2）柱穴・ピット

第２遺構面では、単独の柱穴34基、ピット167基を検出した。このうち、出土遺物を掲載したものについて報告する。

319 柱 穴（第 294・297・300 図、第 59・77 表、図 版 138・172）

３区南西7a-9C-3cグリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.34m、短軸0.30m、検出面からの深さ0.21mを測る。埋土はⅤ層に由来するブロックを含む柱抜き取り痕跡の１層と、同じくⅤ層に由来するブロックを含む掘方埋め土の２層が堆積する。

遺物は１層よりPo296が出土している。Po296は外反する口縁の端部が僅かに内傾する器形を有する弥生土器の甕。口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面はタタキ、内面はナデが施されている。

本遺構の帰属時期は、出土遺物より弥生時代終末期と考えられる。

142 ピット（第 294・298・300 図、第 59・77 表、図版 138・174）

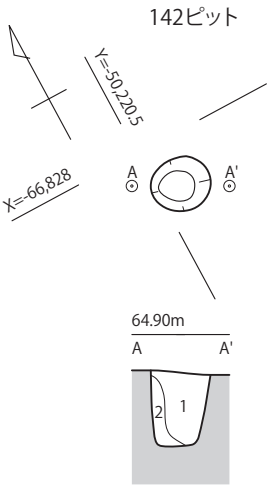
３区南西7a-9C-3cグリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.32m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.40mを測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む１・２層が堆積する。１層出土土器が172ピット出土Po297と接合する。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代中期と考えられる。

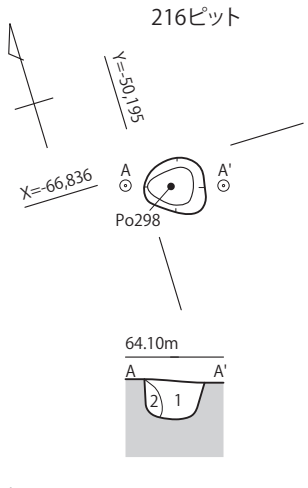
172 ピット（第 294・298・300 図、第 59・77 表、図版 139・174）

３区南西7a-9C-3cグリッドにおいて、Ⅱｃ層上面で検出した。北側を157柱穴に切られる。平面形は楕円形を呈し、残存規模は長軸0.45m、短軸0.38m、検出面からの深さ0.33mを測る。埋土はⅢ・Ⅵ層に由来するブロックを含む１～３層がほぼ水平に堆積する。遺物は、２層上面で弥生土器の甕体部Po297が押し潰された状況で出土した。なお、Po297は142ピット出土土器と接合する。Po297は弥生土器甕で口縁部は欠損している。外面は肩部がハケ、体部はミガキ調整を施している。内面は体部上半がハケ後ミガキ、体部下半はケズリ調整が施されている。

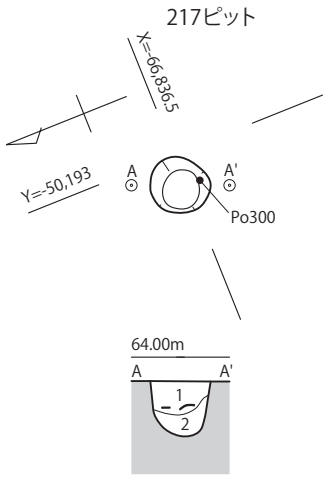
本遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代中期と考えられる。



142ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ1cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり強



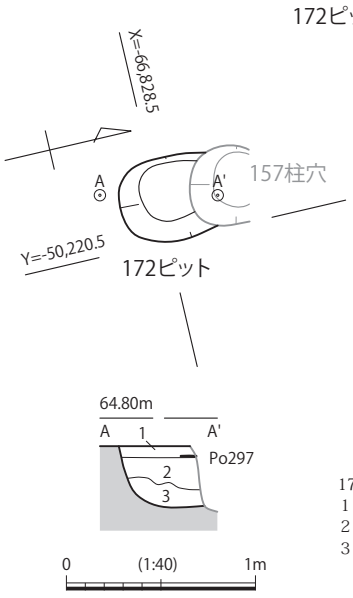
216ピット
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ0.5～2cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ3～5cmブロック混)　粘性中　しまり強

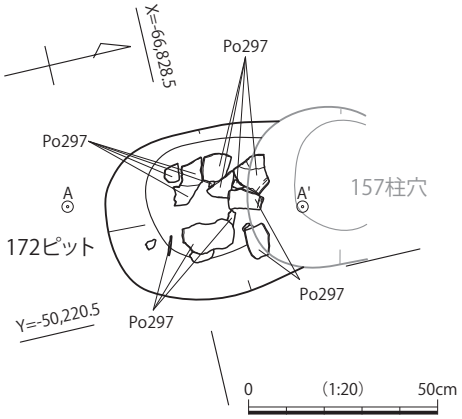


217ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ2～3cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルト φ3～5cmブロック多混)　粘性中　しまり弱

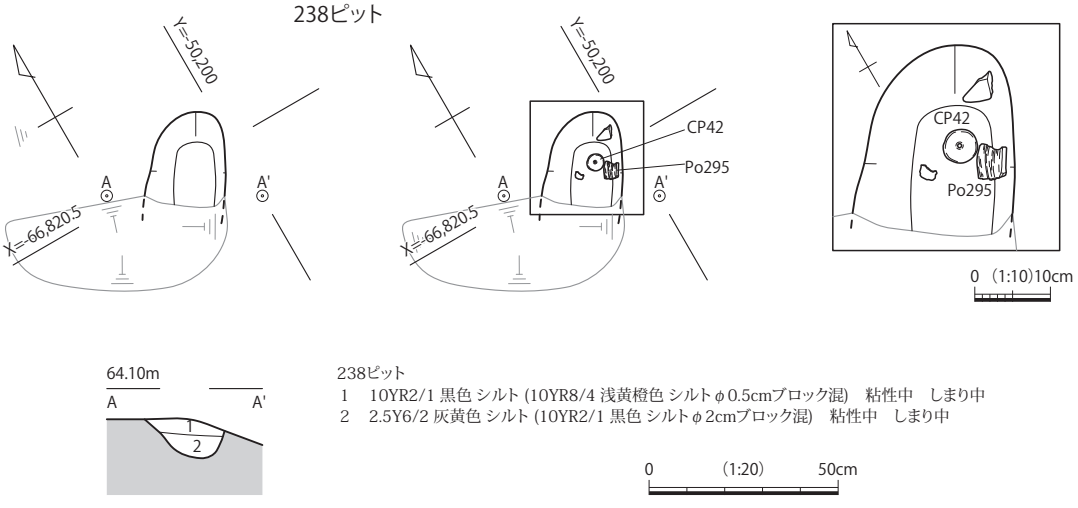
凡　例
● 土器

0　(1:40)　1m





172ピット
1　10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ1cmブロック混　φ1cm炭化物混)　粘性中　しまり中
2　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
3　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR2/1 黒色 シルトφ2～3cmブロック混)　粘性中　しまり中



238ピット
1　10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/4 浅黄橙色 シルトφ0.5cmブロック混)　粘性中　しまり中
2　2.5Y6/2 灰黄色 シルト (10YR2/1 黒色 シルトφ2cmブロック混)　粘性中　しまり中

第 298 図　142・172・216・217・238 ピット

216 ピット（第 294・298・300 図、第 59・77 表、図版 138・173）

３区南東 7a-9B-4j グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 0.32m、短軸 0.29m、検出面からの深さ 0.20mを測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む１・２層が堆積する。遺物は埋土より土師器 Po298 ・ 299 が出土している。Po298 ・ 299 は土師器甕の口縁部である。口縁部内外面は横ナデ調整が施される。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

217 ピット（第 294・298・300 図、第 59・77 表、図版 138・139・173）

３区南東 7a-9B-4j グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。平面形は円形を呈し、規模は長軸 0.32m、短軸 0.30m、検出面からの深さ 0.30mを測る。埋土はⅥ層に由来するブロックを含む１・２層が上下に堆積する。遺物は１層より Po300 が出土している。Po300 は土師器脚部である。外面はナデ、内面は横ナデ後指オサエ痕跡が残る。

本遺構の帰属時期は、出土遺物より古墳時代と考えられる。

238 ピット（第 294・298・300 図、第 59・77・95 表、図版 140・174）

３区中央北寄り 7a-9C-3a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。南西側は撹乱によって削平されている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸 0.25m、短軸 0.21m、検出面からの深さ 0.09mを測る。埋土はⅢ・Ⅵ層由来のブロックを含む黒色シルトと灰黄色シルトが上下に堆積する。上層から弥生土器甕 Po295 と紡錘車 CP42 が出土している。Po295 は弥生土器甕の口縁部から頸部である。口縁部外面には擬凹線が巡り、内面は横方向のミガキ調整が施される。CP42 は土器片を転用した紡錘車である。最大幅 5.0cm、最大厚 0.8cmを測る。表面に擦痕が残る。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

255 ピット（第 294・299・300 図、第 59・77 表、図版 140・174）

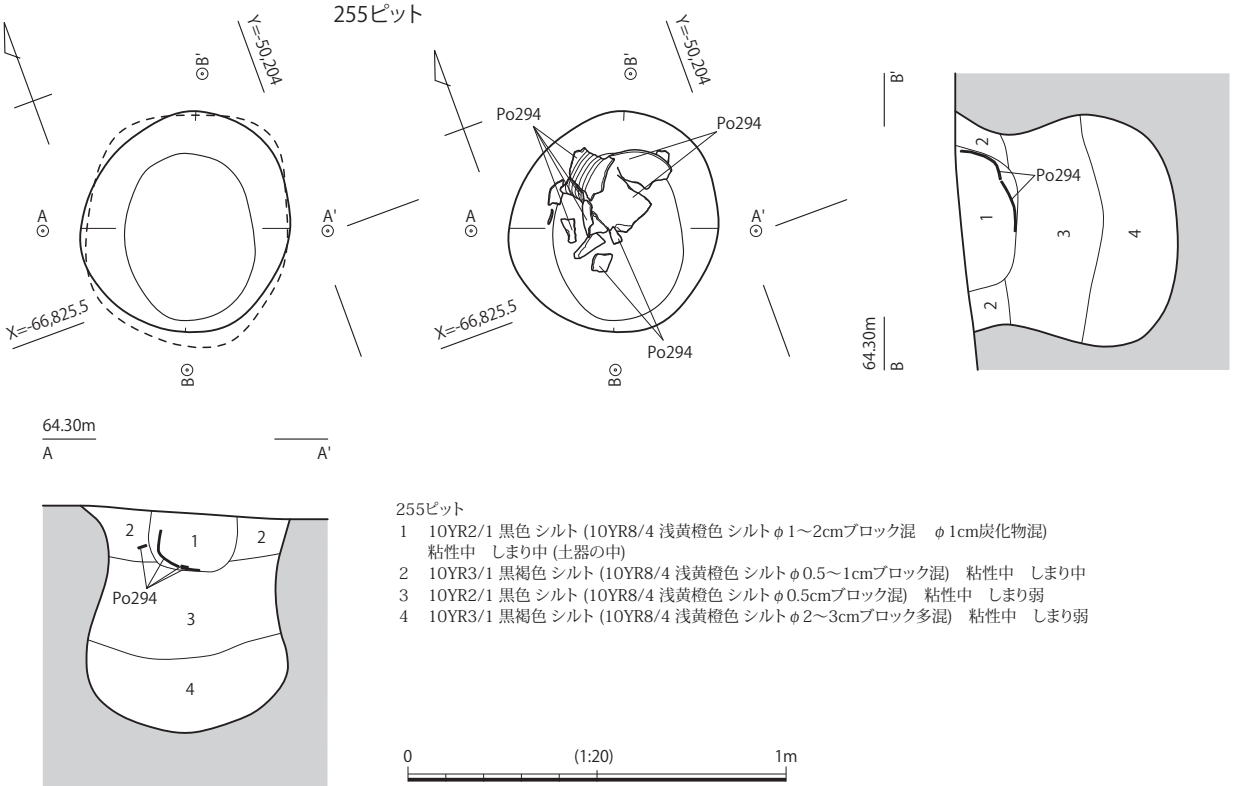
３区中央 7a-9C-3a グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。平面形は不整円形、断面形は袋状を呈する。規模は長軸 0.59m、短軸 0.53m、検出面からの深さ 0.59mを測る。埋土はⅥ層由来のブロックを含む黒色・黒褐色シルトの２～４層がほぼ水平に堆積する。最上層の２層中心部に長軸 0.35m、短軸 0.23m、深さ 0.15mの坑を穿ち、口縁部と胴部下半が欠損した弥生土器の壺が埋納されていた。このことから、元々あった 255 ピットが埋没した後、土器を埋納するために小ピットを掘り込んだ可能性がある。土器内には地山（ホーキ層）由来のブロックと炭化物を含む黒色シルトが充填していた。遺物は１層から弥生土器壺 Po294 が出土した。Po294 は口縁部と体部下半が欠損している。頸部には５条の凹線が巡り、体部はハケ後ミガキ調整が施される。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代中期と考えられる。

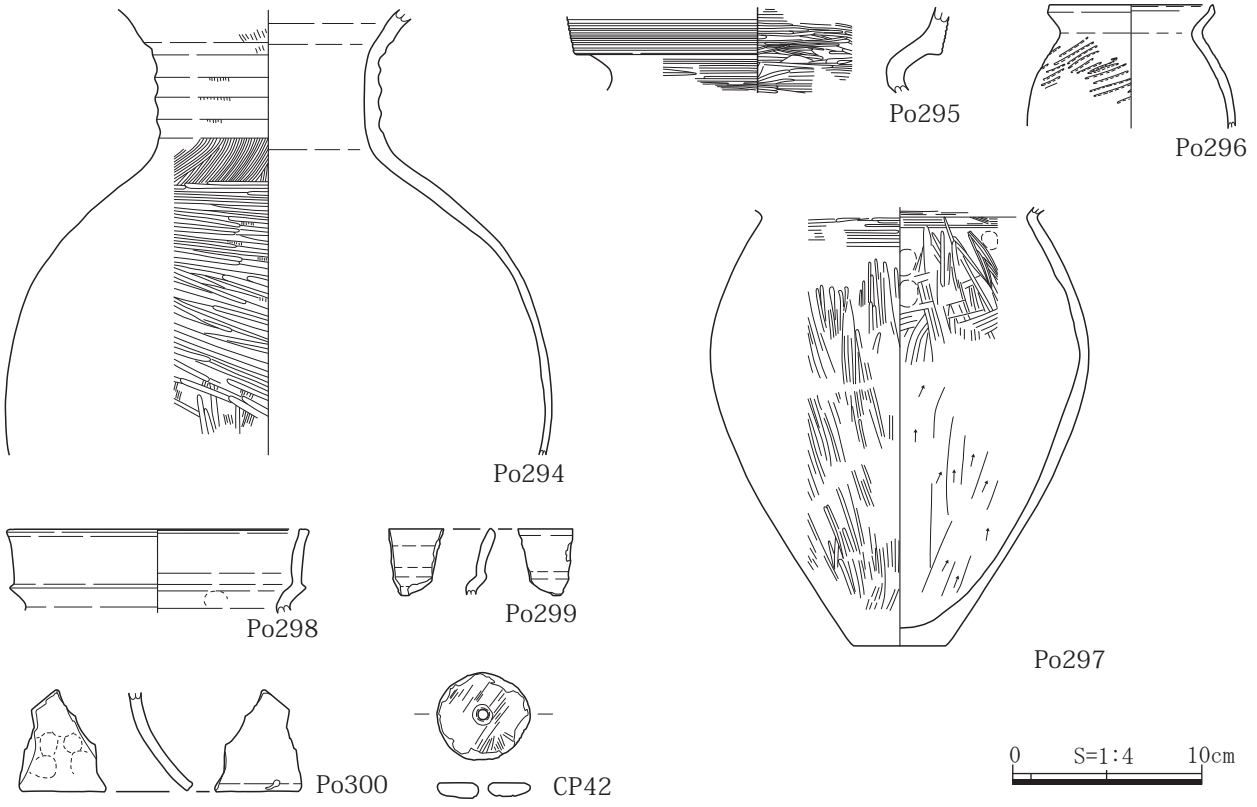
（３）土器集中部

244 土器集中部（第 294・301・302 図、第 57・77 表、図版 141・174）

３区西寄り中央 7a-9C-3b グリッドにおいて、Ⅱｃ層中で弥生土器が 1.0 ～ 1.3mの範囲にわたって廃棄されている箇所があり、遺構掘方の明確なプランは確認できなかったものの、土器集中部とし



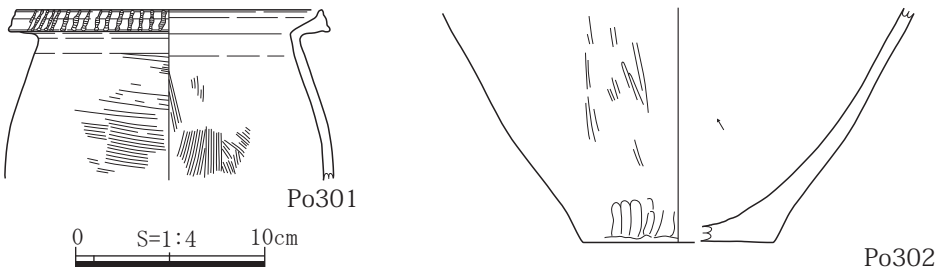
第 299 図　255 ピット



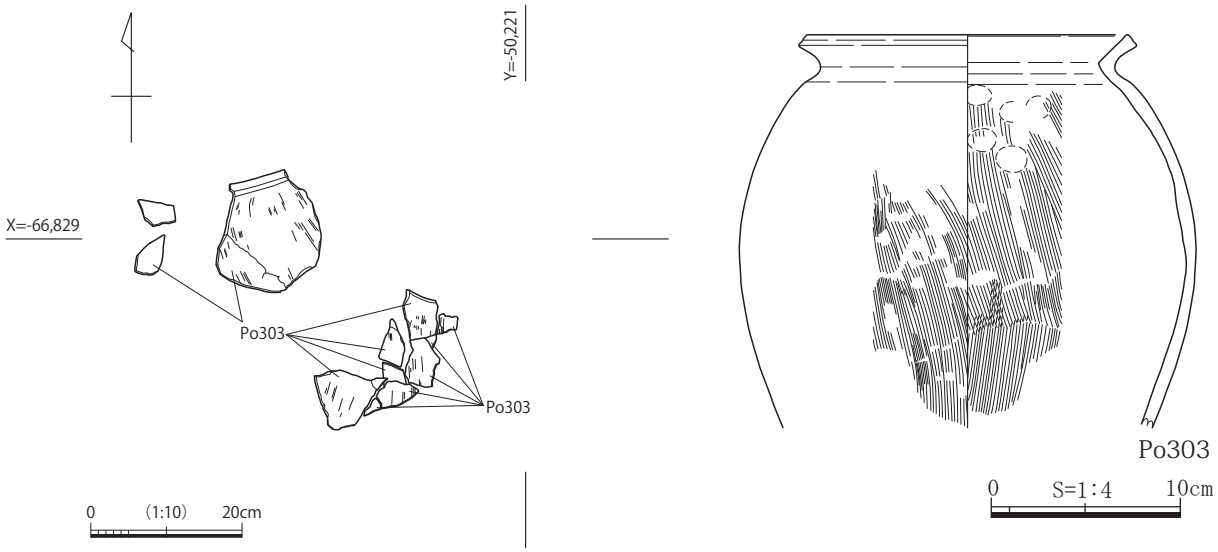
第 300 図　第２遺構面柱穴・ピット出土遺物

て取り上げを行った。Po301 ・ 302 は弥生土器甕である。Po301 は口縁部に刻みを施し、体部外面は横方向のハケ、内面は口縁から頸部はナデ、体部はハケ調整が施されている。Po302 は甕の体部下半から底部であり、外面はミガキ、内面はケズリ調整が施される。

第 301 図　244 土器集中部



第 302 図　244 土器集中部出土土器



第 303 図　458 土器集中部、458 土器集中部出土土器

458 土器集中部（第 294・303 図、第 57・77 表、図版 141・174）

３区西寄り中央 7a-9C-3b グリッドにおいて、Ⅱｃ層中で弥生土器甕が一括廃棄されている箇所があり、遺構掘方の明確なプランは確認できなかったものの、土器集中部として取り上げを行った。Po303 は弥生土器甕である。口縁部が「く」字状に外反し、体部上半が大きく張る。口縁から頸部の外面は横ナデ、内面は横ナデ、体部の外面はハケ調整、内面はハケ調整で上半部に指オサエ痕跡を残す。

第４項　調査区内出土遺物

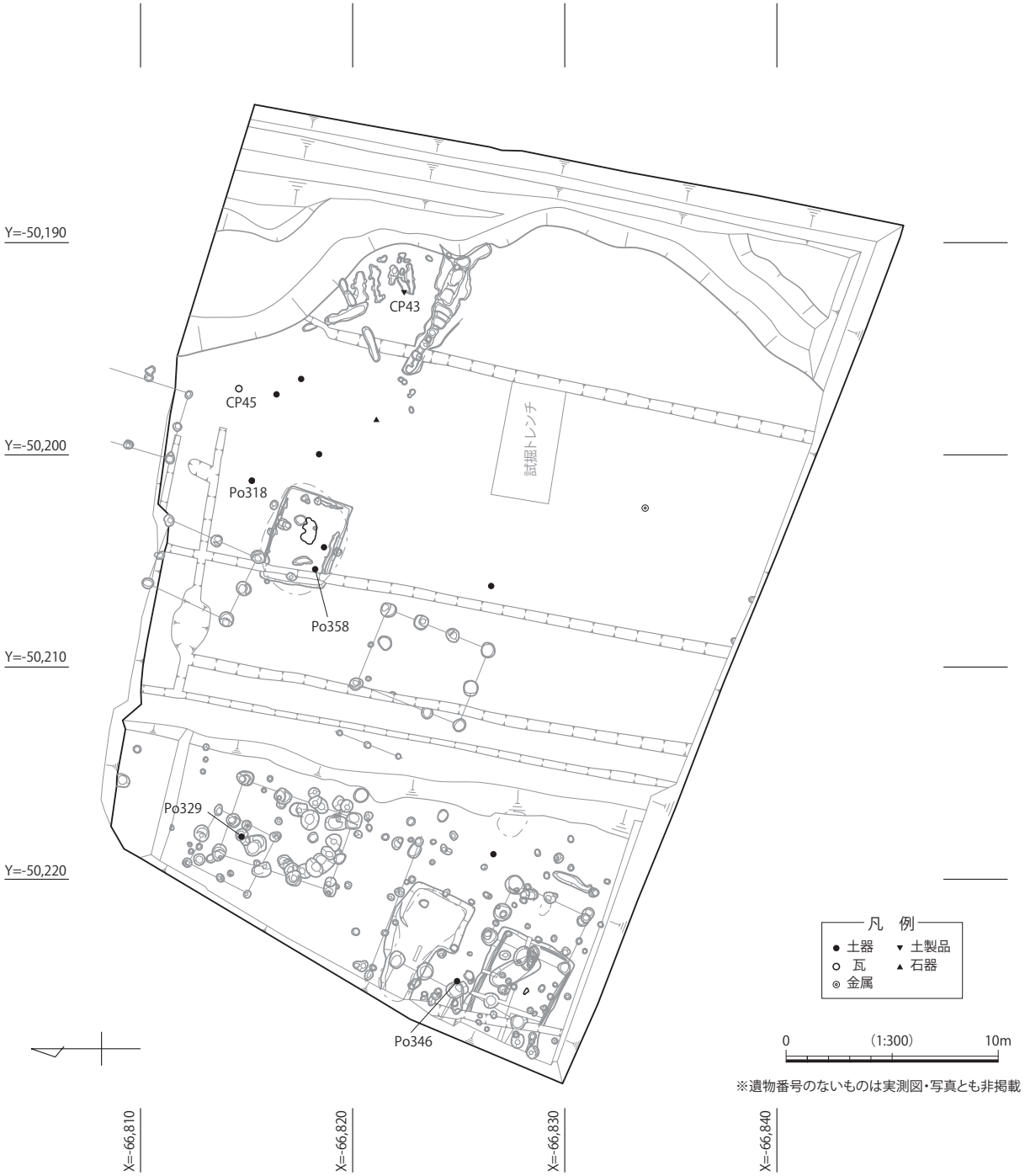
Ⅰ層出土遺物（第 306 図、第 77・92 表、図版 174）

Po304 は縄文時代晩期の刻目突帯文土器の口縁部である。Po305 は弥生時代後期の壺。口縁部に５条の擬凹線が巡っている。内面は頸部から口縁にかけてヘラミガキが施される。Po306 は土師器高坏の坏部である。口縁端部が外側に張り出し、内外面赤色塗彩が施される。写真のみではあるが、Po851 は弥生土器甕の底部である。底部中央に焼成前の穿孔がみられる。Po852 は須恵器坏蓋であり、天井部に輪状つまみが認められる。

Ⅱｂ層出土遺物（第 307・308・456 図、第 25・77・78・92・95 ～ 98 表、図版 175 ～ 179・325）

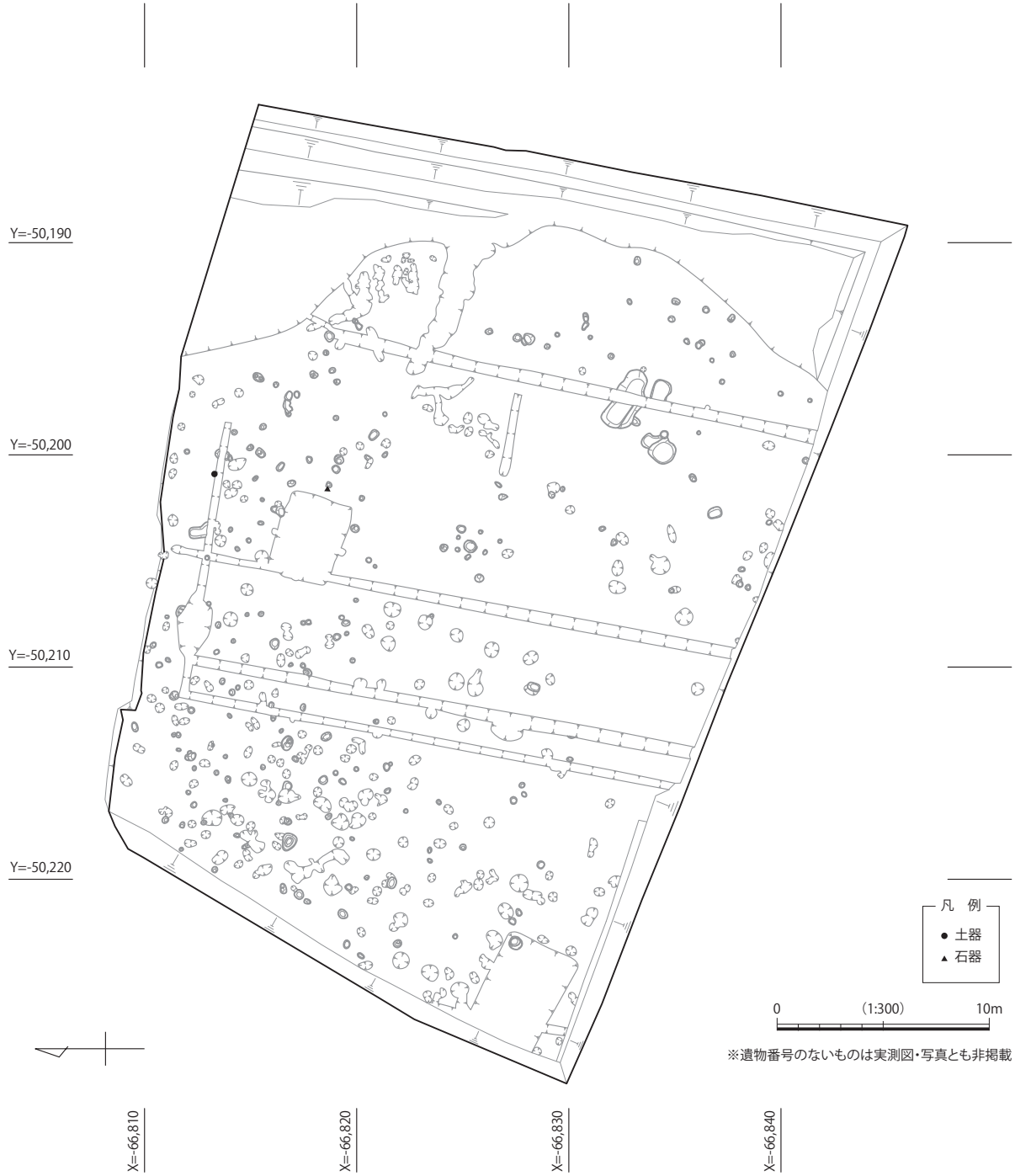
Po310 ～ 314 は赤彩された土師器をまとめている。Po310 ～ 312 は皿であり、内外面に丁寧なナデ調整を施し、内面に暗文がみられる。Po313 は坏の口縁部であり、内面に墨書が観察される。文字は不明。Po314 も坏であり、底部はヘラ切り後、ナデ調整を施している。

Po307 ～ 309 は弥生土器である。Po307 の甕は口縁部に擬凹線が４条巡り、円形浮文が貼り付けられる。体部の内外面はハケ調整が施されている。Po308 の壺は拡張された口縁部に 11 条の擬凹線が巡っている。Po309 は拡張した口縁部に擬凹線を巡らす壺であり、肩部に貝殻腹縁による斜め方向の刺突文が施されている。



第 304 図　第 1 遺構面包含層遺物出土分布図

Po317 は糸切り成形の土師器皿である。底部から口縁部にかけて外側に向かって直線的に立ち上がる。Po318 ～ 343 は土師器坏をまとめている。Po318 ～ 323 は底部から口縁部にかけて外側に向かって直線的に立ち上がる。Po324・325 は体部下半がやや丸みを持って、外側に向かって立ち上がっている。Po327 は口縁端部が外側に少し張り出している。Po328 ～ 343 は底部をまとめている。Po328 ～ 331 は高台付坏で Po328・329 は高台が低く、Po330・331 は高い。Po332 は円盤状の高台で回転糸切り成形。Po344 ・ 345 は土師器甕であり、Po344 は口縁部が「く」字状に大きく外



第 305 図　第２遺構面包含層遺物出土分布図

反し、Po345 は緩やかに外反し、器壁が厚い。

Po346 ～ 363 は須恵器をまとめている。Po346 は坏身であり、内傾するかえりが短い。Po347 ～ 351 は蓋であり、Po347 はボタン状摘みが付く。Po348 は天井部から口縁端部が緩やかに下がる。Po349 ～ 351 は口縁端部が天井部から折れ曲がり垂下する。Po351 は端部にナデが施され、わずかに窪む。Po352 ・ 353 は体部から口縁部に向かい湾曲しながら立ち上がる埦である。器壁は薄く、Po352 は口縁部に重ね焼きの痕跡が残る。Po354 ～ 358 は高台付坏の底部である。Po354 は高台の

径が他に比べ小さく、Po356 ～ 358 は大きい。Po357 の高台部はほぼ直立状に貼り付けられ、Po358 は高く「ハ」字状に張り出し、静止糸切り成形である。坏部の見込みには箆書きによる線刻がみられる。Po359 は壺の口縁部で緩やかに外反する。Po360 は無頸壺で内外面横ナデが施されている。Po361 ～ 363 は甕の口縁部で、いずれも緩やかに外反する。端部の形態であるが、Po361 は先端が尖り、Po362 は丸味を帯びて肥厚する。Po364 は緑釉陶器の坏である。内外面とも施釉されている。

CP43 は移動式竈の把手か。表面はへら状工具で面取りがなされ、指頭圧痕が残る。CP44 は移動式竈の焚口庇である。表面はナデ調整が施されている。CP45 ～ 47 は瓦である。CP45 は軒丸瓦Ⅰ類で瓦当面に蓮弁文がみられ、瓦当裏面には爪痕が多く残る。CP46 は軒丸瓦Ⅳ類か。瓦当面は唐草文の可能性があり、瓦当部には布目がみられる。CP47 は丸瓦で、凸面は縦・横方向のハケ調整、凹面は布目がみられる。S18 は板状の素材を用いた砥石である。砥面が３面残る。また、写真掲載のみであるが、Po853 は弥生土器壺体部片である。外面は縦方向のミガキ、内面は縦方向のケズリが施される。Po854 は外反する口縁端部に連続した刻みが施された弥生土器甕である。Po855 は同じく外反する口縁部を有する弥生土器甕であり、端部には刻みは施されない。Po856 は弥生土器高坏の口縁部である。口縁部には３条の凹線文がめぐり、端部外側に連続した刻みが施されている。Po857 は弥生土器高坏口縁部で、内外面ともミガキが施される。Po858 は口縁部が僅かに外反する土師器甕である。F54・55 は椀形鍛冶滓である。

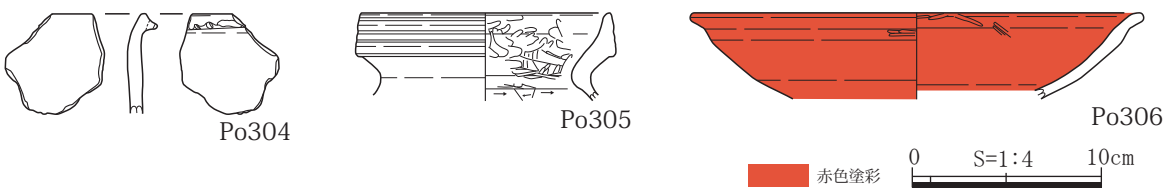
Ⅱｃ層出土遺物（第 309 図、第 78・97 表、図版 179）

Po365 は土師器壺の頸部から体部である。外面は頸部が横ナデ、体部に波状にハケ調整を施している。内面は頸部がナデ、体部はケズリ調整が施される。S19 は頁岩製の剥片である。裏面は主要剥離面で、表面の左側面に調整剥離がみられる。

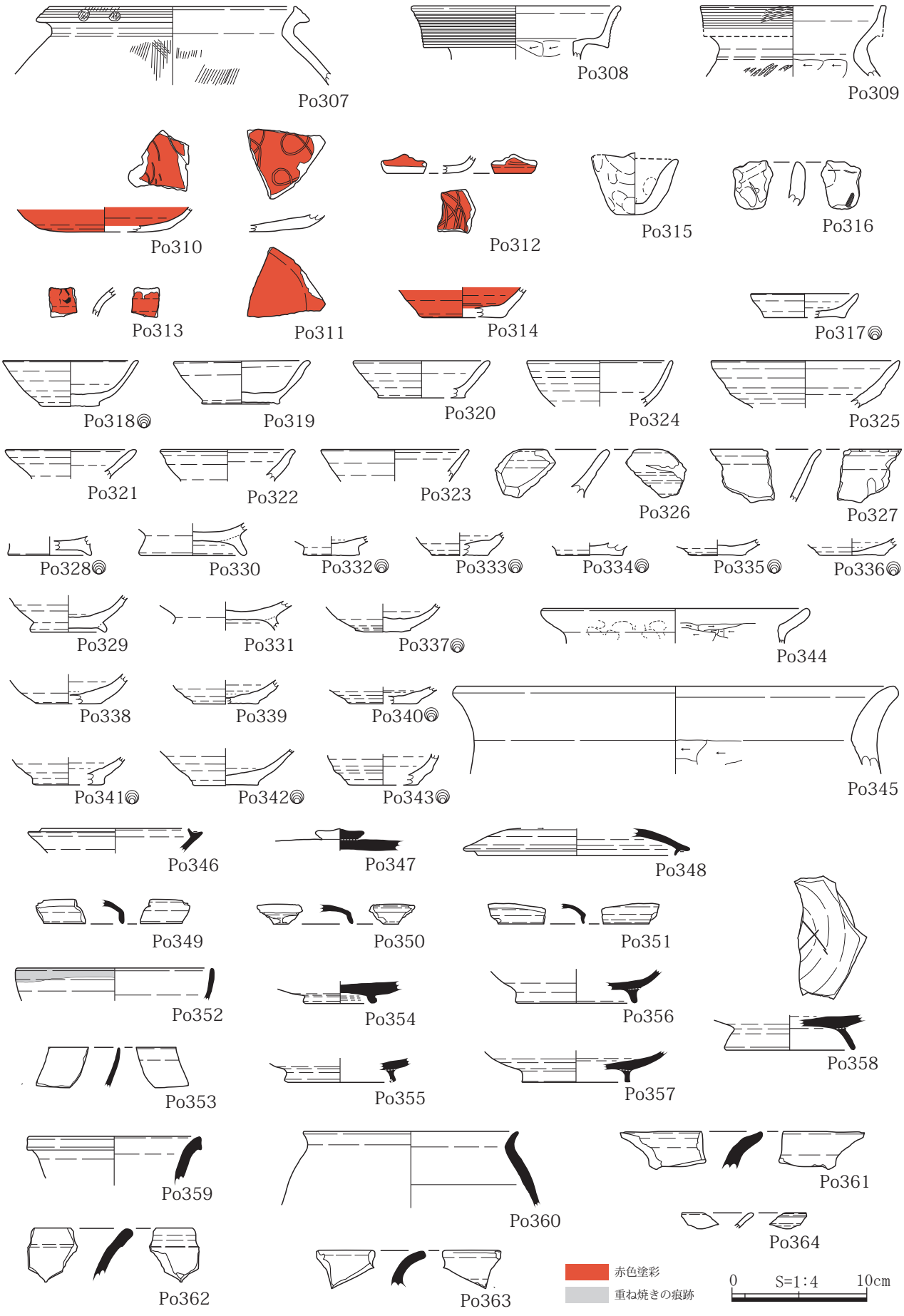
調査区内出土遺物（第 310 図、第 79・96 表、図版 179）

Po366 は手づくね成形のミニチュア土器の体部から底部片である。Po367 は回転糸切り成型の土師器皿である。Po859 ～ 861 は写真掲載のみ。Po859 は弥生土器甕の口縁部である。口縁端部には４条の凹線が巡っている。Po860 は外反する口縁部をもつ弥生土器甕である。口縁端部に浅い２条の凹線が巡っている。青磁碗 Po861 は外面に縦方向の線描きが観察される。

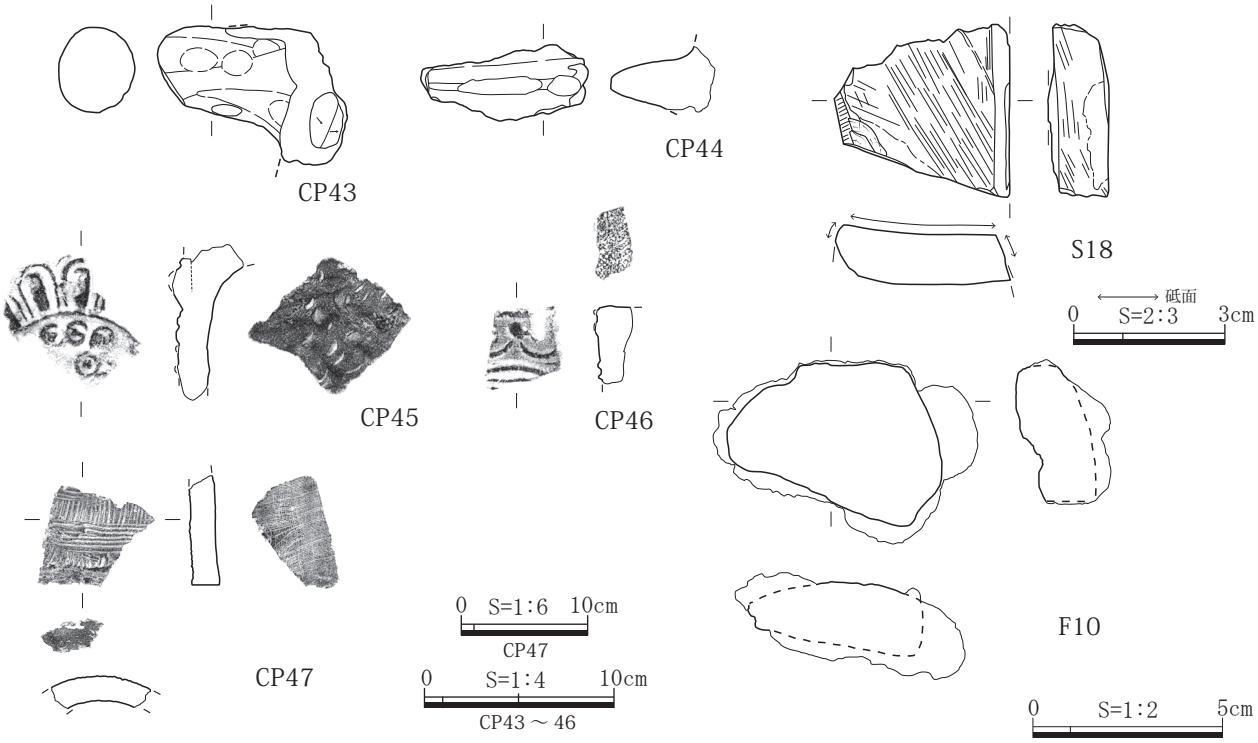
CP48 は分銅形土製品である。表面の多くが剥離し、遺存状態が悪い。縁辺に連続的にＣ字状刺突文が施される。CP49 は移動式竈の焚口庇か。CP50 は軒丸瓦Ⅱ類である。瓦当面には蓮弁文が施されている。F56 は椀形鍛冶滓である。



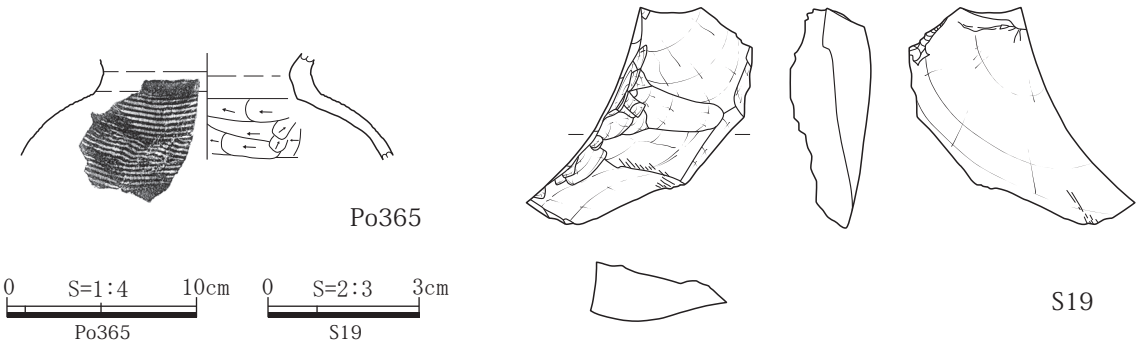
第 306 図　Ⅰ層出土土器



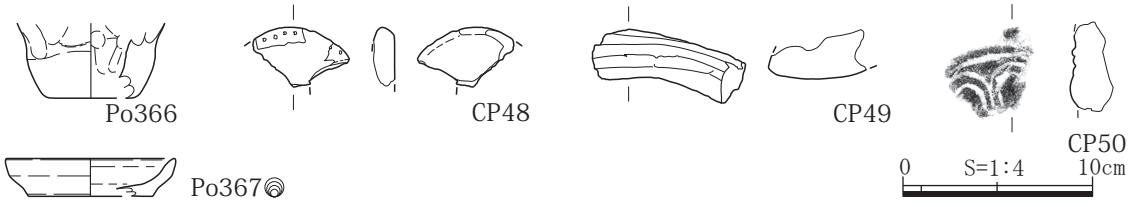
第 307 図　Ⅱｂ層出土遺物（１）



第 308 図　Ⅱｂ層出土遺物（２）



第 309 図　Ⅱｃ層出土遺物



第 310 図　調査区内出土遺物

鳥取県教育文化財団調査報告書123
一般国道313号（倉吉関金道路）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県倉吉市

石塚廃寺東遺跡（いしづかはいじひがしいせき）
大鴨遺跡（おおがもいせき）

第１分冊【本文編１】

発　行　　2023年3月15日
編　集　　公益財団法人鳥取県教育文化財団　調査室
〒682-0704　鳥取県東伯郡湯梨浜町南谷528-1
電話（0858）35-5335
発行者　　公益財団法人鳥取県教育文化財団
印　刷　　有限会社　米子プリント社